

# 会 報



海 外 編 1965 ~ 2015

信州大学山岳会編 1979 ~ 2004



信州大学山岳会  
信州大学学士山岳会

# 会報

海外編 1965～2015  
信州大学山岳会編 1979～2004



信州大学山岳会  
信州大学学士山岳会

# 会報



海外編 1965 ~ 2015

信州大学山岳会編 1979 ~ 2004





1971年 ネパールヒマラヤ アンナプルナII峰(7937m)



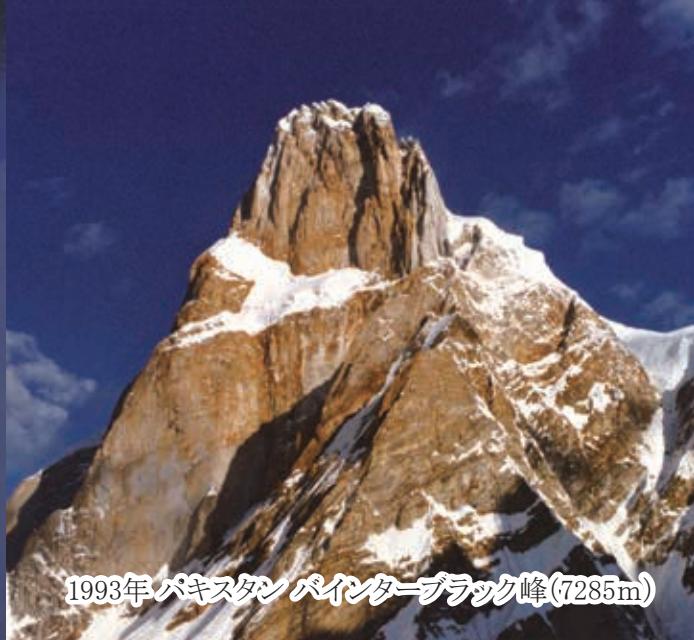
1978年 ネパール ジュティ・バフラニ峰(6850m)



1978年 ネパール ニルギリ南峰(6839m)



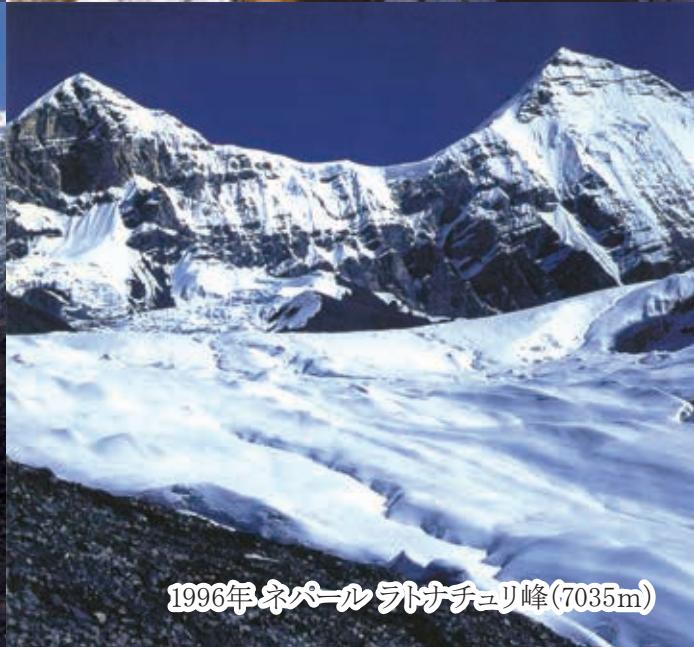
1980,82,2000年 ネパール ガネッシュⅡ峰(7111m)



1993年 パキスタン ペインターブラック峰(7285m)



1994年 ネパール ギヤジカン峰(7038m)



1996年 ネパール ラトナチュリ峰(7035m)



2008年 ネパール カンテガ峰(6779m)



2009年 ネパール ネムジュン峰(7139m)



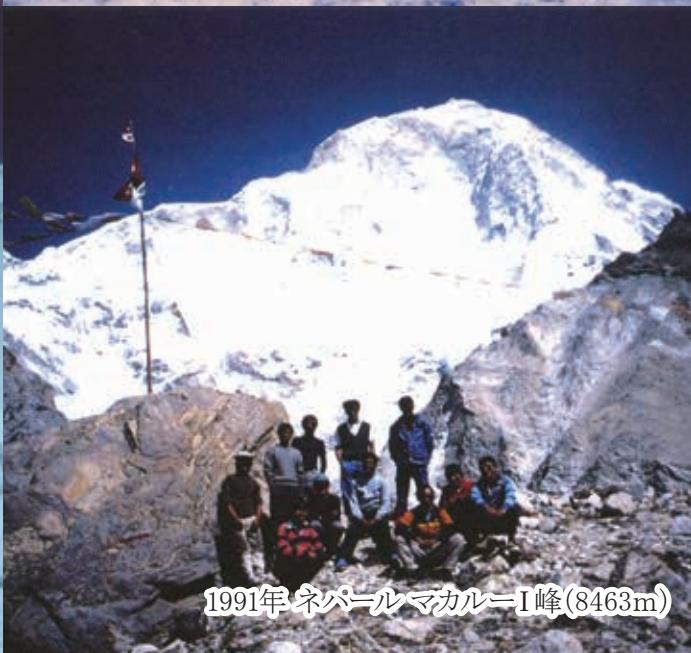
1973年 ネパール アンナプルナI峰(8091m)



1988年 インド リモI峰(7385m)



1990年 パキスタン ガッシャーブルムII峰(8035m)



1991年 ネパール マカルーI峰(8463m)



1991年 インド カンченジュンガ北東稜(8586m)



1991～2000年 ネパール サガルマータ(8848m)



1993年 パキスタン ブロード・ピーク(8051m)



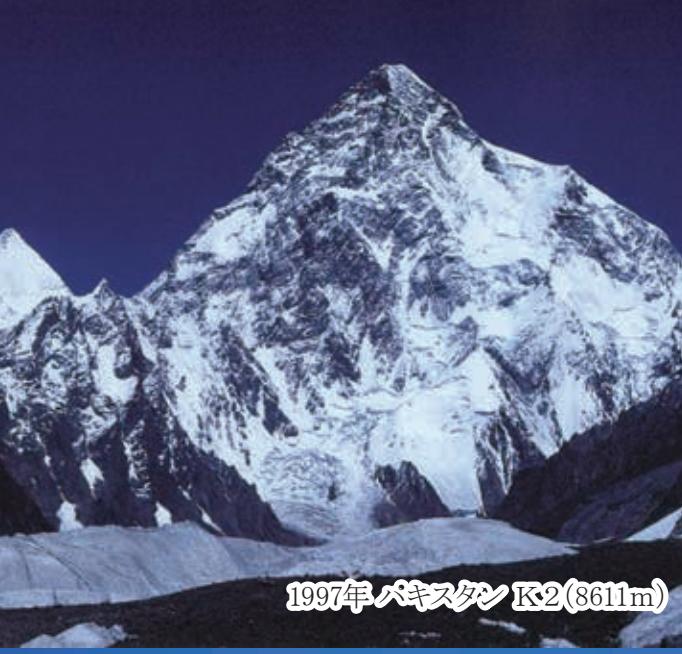
1993年 中国 チョー・オユー(8201m)



1993年 中国 クラウン峰(7295m)



1995年 中国 マカルー東稜(8463m)



1997年 パキスタン K2(8611m)



2002年 パキスタン ガッシャーブルムⅠ峰(8068m)



2005年 パキスタン ナンガ・パルバット(8126m)



2006年 ネパール ローツェ南壁(8516m)



2006年 中国 シャンパンマ主峰(8027m)



2006年 アンデス イリマニ南壁(6439m)



1985年 カナダ バカブー



2004年 インド メルー峰(6450m)



2005年 ハンティントン南西壁(3731m)



2005年 アンデス ボリビア イリヤンプ北峰(6342m)



2010年 ア拉斯カ ローガン南東壁(東峰5400m)



2012年 ネパール キャシャール南壁(6767m)

## 会報発行にあたり

元会長 堀 勝彦

日本列島の中央部に位置する長野県は、北・南・中央の三大アルプスと八ヶ岳連峰・志賀高原・妙高・戸隠などの高峰や名峰に囲まれ、信大前進の松本高等学校時代から、日本中の山好きが入学して山岳部に在籍し、思う存分山行を楽しんで卒業していました。

当初の山岳部は各学部毎にありましたが、1960年に統合されて信州大学山岳会として発足しました。戦後の日本は徐々に経済的に発展成長して、学士山岳会や山岳会員の中から、ヒマラヤ、アンデスやヨーロッパアルプス等海外の山へ遠征したいという願望が生まれ、この会報にある通り、1965年のカナデアン・ロッキーズ「アルバータ峰」の遠征に始まって、1971年信大創立15周年記念として、ネパールヒマラヤの「アンナプルナⅡ峰遠征」が実行されました。その後、ネパールを中心にジュティ・バフラニ、ニルギリ南峰、ガネッシュⅡ峰、ギャジカン峰、ラトナチュリ峰、カンテガ北壁、ペリヒマール遠征やカラコルムや天山などへの遠征、その間にトレッキングやアラスカ、2015年のアンデスを含め112（実際はもっと多いと思われるが）の海外登山の報告がありました。

信州の山から始まり、ネパールヒマラヤ・インドヒマラヤ・カラコルムの高峰群・中国ヒマラヤ・天山山脈・ヨーロッパアルプス・ロッキー山脈・アラスカの高峰・アンデス山脈・パタゴニア・アフリカ大陸の高峰まで、山岳部員や学士山岳会の行動実績は全地球規模に達しています。より高く、そしてより困難へと探究することは素晴らしいことですが、登山という行為は常に命への危険が内在していることを意識し、自覚することが全ての山岳部員の原点だと思います。

一步一步高度を増していく過程の中で、ただ単に山に足跡を刻み登るだけではなく、山の誕生や成り立ち、とりまく自然と環境などを含め、宇宙的なとらえも必要だと考えます。ただ単に登山するという行為に終始してしまうのには寂しさがあります。

1960年以降、現在に至るまで何人もの部員・会員が国内外の山で亡くなりました。これらの方々のご冥福を祈りつつ、今後も益々各自の体力や精神を鍛え上げて、世界各地に信大山岳会の名を刻み続け、更に発展していくことを祈ります。

## 会報編集にあたって

編集委員長 藤 松 太 一

伊那松本・長野・上田の各O B会が統合して、信州大学学士山岳会に一本化された。長野山岳部も伊那松本山岳部もそれぞれ部報を制作し、現役の活動が1978年までまとめられていた。その続きと共に今まで海外にトレッキング、遠征など数多くの学士会員や現役山岳部員がヒマラヤを中心に遠征していた。もちろん学士山岳会の遠征はあったが、個人でのトレッキングや他の山岳団体・山岳会への参加も数多くあった。それらを含めた会報を作成することを提案した。しかし、毎度総会で現在進行中としか報告できずなかなか進まなかつた。ようやくここに1979年から2005年までの山岳会の活動である国内編と、1965年から2015年までの登山活動である海外編をまとめ、報告書とすることができた。計画を発表して5年を越える時間がかかり、なおかつ不十分の内容であるとの指摘は甘んじて受けざるを得ないが、兎にも角にもようやく一つの形となり完成した。全てを網羅し、より具体的な内容にはなりえなかつたが信州大学山岳会・学士山岳会の大まかな登山の流れを記録として残すことができたと思う。

私は海外編を担当した。1967年のネパールワンダリングが会として初めての海外となり、それがその後のヒマラヤ遠征の大きなステップとなりスタートとなつた。1971年のアンナプルナⅡ峰が信大最初の海外遠征だった。この遠征で私を含め多くの山岳会会員が海外への刺激を受け、今は亡き山田哲雄先生の指導の元ヒマラヤ研究会を大学や穂高の小川さんや扇能さんの別荘で幾度となく開かれ、その後のヒマラヤトレッキングや遠征へと発展していった。

そして、節目節目に信州大学の遠征隊が編成された。山田和彦さん、西郡光昭さんを中心とした強力な指導のもとに1978年ジュティ・バフラニ、ニルギリ南峰、1980, 82, 2000年ガネッシュⅡ峰、1993年バインターブラック峰、1994年ギャジカン峰、1996年ラトナチュリ、2009年ヒムルンヒマールに挑戦し、初登頂を含め多くの成果を上げてきた。その中から、吉田秀樹さん、二俣勇司さんが他の山岳団体や山岳会に加わり、何度もヒマラヤ遠征に参加し実績を上げてきた。そして、田辺治さんも同じように他の山岳会、特に群馬岳連や日本山岳会東海支部に参加し、エヴェレストをはじめとした8,000メートルに冬季を含めバリエーションルートから登頂し、当時としては日本人登山家で最も多くの8,000メートルの登頂者でもあつ

たことは我々信大山岳会としても誇りだった。この間多くの会員や学生もトレッキングやトレッキングパーミッションで登れるヒマラヤ遠征を実行した。もちろん、ヒマラヤ地域だけでなくヨーロッパ、パミール、アラスカ、アンデスと様々な山域に出かけている。

特に2009年大学創立60周年では松尾武久さんが実行委員長となり、メインのヒマラヤネムジュン峰初ルートからの登頂、60歳以上の6000m峰登頂、アンナプルナ一周トレッキングと参加者は60名を超えた大規模な記念事業を実践した。

そして、2005年頃から若手OBの花谷泰広さん、横山勝丘さん、馬目弘仁さん、佐藤祐樹さんなどがヨーロッパ、アラスカなどを中心に氷壁・岩壁の登攀を徹底したアルパインスタイルで挑戦し始めた。この中でも特に横山勝丘さんはアラスカを中心に数々の難易度の高いルートに挑戦、更にアンデス・パタゴニヤに困難な氷や岩のルートを継続登攀している。そして、身に着けた技術を持って再びヒマラヤに挑戦し、日本の山岳界のみならず世界的に注目される存在になっている。

登山の世界も様変わりし、一昔前の海外登山とは大きく異なり短期の準備で少量の装備や人数、遠征準備もエージェンドが準備万端にし、遠征期間も従来より短く、コンパクトでスムーズになっている。また、登山の環境も変わり、高所順応もより効率的に実施される。天気予報は衛星通信によりその山域の数日の天気の正確な情報を手に入れることができる。海外での登山は冒険や探検の時代はとうに終了し、一昔とは全く違っているが、近年の信大学士山岳会の海外での活躍には素晴らしいものがある。

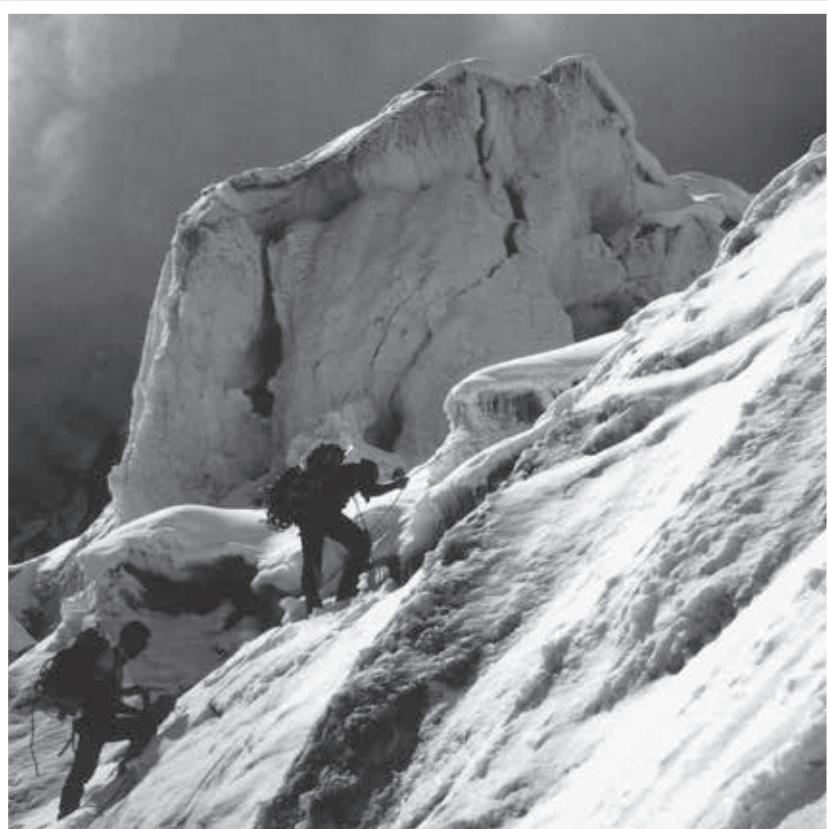
我々は学生時代の山岳会での活動が基本にある。北アルプスという地の利を得た松本市に本拠地があり、厳しい冬の北アルプスで登山。穂高・槍ヶ岳は勿論、悪天候の鹿島・白馬岳周辺、豪雪の剣岳や黒部横断などでの登山活動を実践してきたことが大きい。厳しい条件の中で重い荷物を背負いながら長期の登山が我々の登山力として身についたと考える。そして、何よりも山を含めた自然を身边に置いて活動してきたことである。

尚1992年クラウン峰にて二俣勇司さん遭難、2010年ダウラギリⅠ峰にて田辺治さん遭難、2007年小川勝さん、15年山田和彦さん、松尾武久さん、16年新井陽一郎さんが永眠しました。ご冥福をお祈りします。

## 目 次

海外の山々 .....	2
会報発行にあたり ..... 元 会 長 堀 勝彦	9
会報編集にあたって ..... 編集委員長 藤松 太一	10
目 次 .....	12
海 外 編 .....	13
海外編 遠征記録 .....	15
1965年～2015年 .....	20
信州大学山岳会編 .....	197
登山活動 .....	198
1979年～2004年 .....	199
追 悼 .....	309
編集後記 .....	336

# 海 外 編



信州大学山岳会として、1967年のネパールワンダリングが会として初めての海外となり、それをステップとして、最初の遠征が1971年のアンナプルナⅡ峰でした。その後、1978年ジュティ・バフラニ、ニルギリ南峰、1980年ガネッシュⅡ峰、1994年ギャジカン峰、1996年ラトナチュリ峰、2009年ヒムルン・ヒマールと節目々に遠征を送り出してきました。これらの遠征については、詳細な報告書が出ています。しかし、これ以外にも我々の会員が中心となったトレッキングや遠征、他山岳会や他の山岳会が主催する登山に加わり、数多くの海外遠征に参加しています。ポーラメソッドからアルパインスタイル、ノーマルルートからの登頂からバリエーションルート、大規模遠征から小規模とその時代に反映しながら、登山の形態が変わってきています。これらの海外の登山の活動をここに記録したいと考えました。個人参加としては1965年のカナデアン・ロックーズ、1967年の「ネパールワンダリング」をスタートとし、2015年のアンデス「アコンカグア」まで。参加された登山活動を可能な限り、取り上げました。

本文は主に信州大学山岳会か学士山岳会が主催もしくは中心のものですが、本文記載の遠征等にある（ ）は主催団体で（下記参照）、その場合は、信州大学山岳会、学士山岳会の参加者は**太字**で表記してあります。

S A C : 信州大学山岳会

H A J : 日本ヒマラヤ協会

信稟会 : 信州大学長野山岳部

J A C 東海支部 : 日本山岳会東海支部

S A A C : 信州大学学士山岳会

J A C : 公益社団法人 日本山岳会

長山協 : 長野県山岳協会

群馬岳連 : 群馬県山岳連盟

## ～海外編 遠征記録～

No.		P
1	1965年 カナディアン・ロッキーズ Mt.アルバータ峰3619m遠征 長野高校OB山岳会（田島守）	20
2	1967年 ネパール ワンダリング	22
3	1967年 ペルーアンデス遠征隊 長野県山岳協会（西郡光昭）	24
4	1969年 ネパール エヴェレストスキーボーイ偵察 三浦雄一郎スキーチーム（山田和彦）	
5	1969年 ネパール アンナプルナ峰偵察（百瀬斐敏、吉澤健）	
6	1970年 ネパール エヴェレストスキーチーム 三浦雄一郎スキーチーム（西郡光昭）	
7	1971年 信州大学 ネパール アンナプルナⅡ峰7937m遠征隊	26
8	1972年 ネパール ダウラギリ峰偵察（井関芳郎）	
9	1972年 アフリカ・キリマンジャロ山域 マウェンジ岩峰の登攀計画の 断念顛末記（板谷真人、武藤一郎）	28
10	1973年 ネパール ジョモソン トレッキング（福田涉、森茂）	30
11	1973年 ネパール アンナプルナⅠ峰8091m遠征 JAC信濃支部（新谷剛）	32
12	1973年 ア拉斯カ Mt.ブラックバーン4997m遠征（百瀬斐敏、藤松太一）	34
13	1973年 ネパール トレッキング（高橋雄治、渡部光則）	
14	1974年 ネパール トレッキング（川口隆、三井和夫）	
15	1974年 ネパール トレッキング（小根田一郎、三坂健次（岳應））	36
16	1974年 インドヒマラヤ ビハリジョット北峰6290m遠征隊 長野県労働者山岳連盟（森田稻吉郎）	38
17	1974年 ガルワール偵察（山田正弘）	
18	1974年 アンデス 日本奥アマゾン探検隊 長野県山岳協会（堀勝彦）	40
19	1975年 ネパール エヴェレストBC・トレッキング（小根田一郎）	42
20	1975年 信州大学上田山岳部遠征隊 ガルワール・ヒマラヤ インド ナンダ・グンティ6309m	44
21	1975年 日本・インド合同カシミール遠征隊 日本ヒマラヤ協会 インド・ヌン7135m（西郡光昭、山田正弘）	46
22	1978年 パキスタン バトゥーラIV7564m 日本ヒマラヤ協会（西郡光昭）	48
23	1978年 信州大学 ネパール ジュティ・バフラニ6850m遠征	50

24	1978年	信州大学 ガネッシュ・ヒマール偵察 (三井和夫、吉田秀樹、師田信人) .....	52
25	1978年	信州大学 ネパール ニルギリ南峰6839m遠征隊 .....	54
26	1978年	ネパール アンナプルナー一周トレッキング (三井和夫)	
27	1978年	ネパール ランタン谷トレッキング (田中誠司、加藤喜章、吉田秀樹) .....	56
28	1980年	信州大学 ネパールヒマラヤ ガネッシュⅢ峰7132m遠征隊 .....	58
29	1980年	ネパール ダウラギリ山群の高山蝶と高山植物の調査 (堀勝彦、二俣勇司) .....	60
30	1981年	ネパール ダウラギリ山群の高山蝶と高山植物の調査 (堀勝彦)	61
31	1982年	ネパール アンナプルナⅡ峰7937m南稜遠征 .....	62
32	1982年	信州大学 ネパールヒマラヤ ガネッシュⅢ峰遠征隊 .....	64
33	1983年	ネパール ドルポ入り口付近高山蝶と高山植物の調査 (堀勝彦)	66
34	1984年	ネパール フルーティッド・ピーク6501m遠征 .....	68
35	1984年	アンデス ペルー・ワスカラン (新井陽一郎、岩村孝之、竹之内秀実) .....	70
36	1984年	アマゾン河漂流記 (竹之内秀実) .....	72
37	1984年	メキシコ ポポカテペトル5452m (新井陽一郎、藤松太一)	
38	1985年	カナダ バガブー山群登攀 (中嶋岳志、水谷寿宏) .....	74
39	1987年	ネパール チュルー・イースト6400m遠征 .....	76
40	1987年	中国 日中友好ラブチェ・カン7367m合同登山 HAJ (田辺治) .....	78
41	1987年	中国 チベットへ調査・遠征 (堀勝彦) .....	80
42	1988年	インド 日印合同カラコルム登山隊 リモⅠ峰7385m HAJ (吉田秀樹、二俣勇司) .....	82
43	1989年	ネパール エヴェレスト南東稜8848m カトマンズ・クラブ (二俣勇司) .....	84
44	1989年	中国 チヨモランマ北壁 HAJ珠穆朗瑪峰8848m登山隊 (田辺治)	86
45	1989年	ネパール コンデ・リ6011m .....	88
46	1990年	中国 クラウン7295m遠征隊 HAJ (二俣勇司)	
47	1990年	パキスタン ガッシャーブルムⅡ峰8035m遠征隊 (田辺治)	

48	1990年	旧ソ連天山 ハン・テングリ 7010m遠征隊
49	1991年	ネパール マカルーⅠ峰登山隊 8463m ベルニナ山岳会(二俣勇司) 90
50	1991年	インド カンチェンジュンガ北東稜 8586m 日印合同隊 HAJ (吉田秀樹、田辺治) ..... 92
51	1991年	天山 ハン・テングリ 7010m・ポベーダ 7439m 日本勤労者山岳連盟(牛山寿宏) ..... 94
52	1991年	中国・四川省 羊拱山 5273m 日本山岳会宮城支部(西郡光昭) ..... 96
53	1991年	ネパール パルチャモ 6187m遠征隊
54	1991年	中国 シシャパンマ 8012m 長山協(中村貴士)
55	1991年	パミール国際キャンプ 三山連続登山 東海山岳会 (田辺治、河西貴史、橋口徹) ..... 98
56	1991~2年	ネパール サガルマータ 8848m 群馬県山岳連盟 (吉田秀樹、田辺治) ..... 100
57	1992年	中国 クラウン峰 7295m遠征 HAJ(二俣勇司) ..... 102
58	1992年	アンナプルナⅡ峰北面・ピー・コーラ偵察(田辺治、河西貴史) 104
59	1993年	ネパール アンナプルナⅡ峰 7937m北稜偵察隊 (吉田秀樹、澤田克彦、豊田浩太郎) ..... 105
60	1993年	パキスタン ブロード・ピーク登山隊 8051m 東海山岳会 (田辺治、三野和哉、中村貴士、内田健一) ..... 106
61	1993年	中国 チョー・オユー 8201m 群馬県山岳連盟(田辺治) ..... 108
62	1993年	中国 クラウン峰 7295m遠征 JAC東海支部(長谷川哲也) ..... 110
63	1993年	信州大学学士山岳会カラコルム登山隊 バインターブラック峰 7285m遠征 ..... 112
64	1993年	ネパール アンナプルナⅡ峰北稜 7937m第二次偵察
65	1993年	ネパール ロブジエ東峰 6119m
66	1993~4年	ネパール 冬期 サガルマータ南西壁 8848m 群馬県山岳連盟 (田辺治) ..... 114
67	1994年	信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊 ギャジカン峰 7038m 116
68	1995年	中国 日本山岳会マカルー東稜 8463m登山隊 JAC(田辺治) ..... 118
69	1996年	信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊 ラトナチュリ峰 7035m ..... 120

70	1997年	(社)日本山岳会東海支部K2学術登山隊8611m (田辺治) .....	122
71	1997年	パキスタン ブロード・ピーク8051m 群馬県カラコルム登山隊 (吉田秀樹) .....	124
72	1998年	ネパール カンチエンジュンガ北壁8586m登山隊 JAC青年部 (田辺治) .....	126
73	1998年	パミール レーニン峰7134m 長野県勤労者山岳連盟隊 (牛山寿宏、中村文洋、柳沢勝輔) .....	128
74	1999年	アラスカ マッキンリー6194m ウエストバットレス	
75	1999年	アンデス アルパマヨ5947m ピスコ5800m チョピカルキ6354m ラスカラン6768m	
76	2000年	信州大学 ネパールヒマラヤ ガネッシュⅡ峰7111m遠征隊 .....	130
77	2001年	中国 チョー・オユー8201m遠征隊 JAC東海支部 (田辺治、花谷泰広) .....	132
78	2001年	支部設立40周年記念 冬期ローツェ南壁8516m登山隊 JAC東海支部 (田辺治、花谷泰広) .....	134
79	2001年	ヨーロッパ マッターホルン北壁4478m	
80	2002年	パキスタン ガッシャーブルム I峰8068m遠征隊 JAC東海支部 (田辺治)	
81	2003年	中国 シシャパンマ中央峰8008m遠征隊 JAC東海支部 (田辺治)	136
82	2003年	(社)日本山岳会創立100周年記念 冬期ローツェ南壁登山隊 JAC東海支部 (田辺治) .....	138
83	2004年	インド ヒマラヤ メルー峰「シャークスフィン」6450m (馬目弘仁、花谷泰広) .....	91 (p 152) に記載
84	2004年	アンデス ペルー ワスカラン6768m (山内哲文)	
85	2005年	パキスタン 群馬県ナンガ・パルバット8126m登山隊 群馬岳連 (吉田秀樹、田辺治) .....	140
86	2005年	中国 ミニヤコンガ周辺高山蝶と高山植物の調査 (堀勝彦) .....	142
87	2005年	アラスカ デナリ国立公園 ハンティントン南西壁・デナリ南西壁 (横山勝丘) .....	144
88	2005年	南米ボリビア レアル山群・イリヤンプ北壁 (横山勝丘、佐藤祐樹)	146
89	2006年	中国 シシャパンマ主峰8027m遠征隊 JAC東海支部 (田辺治) ....	148
90	2006年	ネパール 冬期ローツェ南壁登山隊 JAC東海支部 (田辺治) .....	150

91	2006年	インド ヒマラヤ メルー峰「シャークスフィン」6450m (馬目弘仁、花谷泰広) .....	152
92	2006年	アラスカ デナリ国立公園 ブローケントウース北壁 ハンターノースバットレス(横山勝丘、佐藤祐樹) .....	154
93	2006年	アンデス ボリビア ライカ・コーリュ南壁・イリマニ南壁 (横山勝丘、佐藤祐樹) .....	156
94	2006年	信州大学 ネパールヒマラヤ カンテガ峰6779m 北壁ダイレクト登山隊(横山勝丘、佐藤祐樹) .....	158
95	2007年	ネパール ゴーキョ・ピークトレッキング(松尾武久) .....	160
96	2008年	アラスカ デナリ国立公園 ベアートウース北東壁 ハンタームーンフラワーバットレス・デナリ継続登攀(横山勝丘)	162
97	2008年	信州大学 ネパールヒマラヤ カンテガ峰6779m 北壁ダイレクト登山隊(横山勝丘、佐藤祐樹) .....	164
98	2009年	信州大学 ネパールヒマラヤ ヒムルン・ヒマール登山隊 .....	166
99	2009年	信州大学 ネパールヒマラヤ マナン・ヒマール登山隊 .....	168
100	2009年	ネパール アンナプルナ山群一周トレッキング隊 .....	170
101	2009年	アラスカ デナリ国立公園 ハンター北壁クライミング(横山勝丘)	172
102	2010年	カナダ クルアニ国立公園 ローガン南東壁初登攀(横山勝丘) ..	174
103	2010年	パキスタン カラコルム山脈・ラトック北壁遠征隊(横山勝丘) ..	176
104	2010年	ネパール ダウラギリ I 峰8167m遠征隊 田辺治雪崩にて遭難 日本ガイド協会(田辺治) .....	178
105	2011年	アラスカ カルヒトナ氷河周辺の登攀、デナリ、カルヒトナ・ピーク 縦走(花谷泰広、大木信介、土田孝浩、小平貴則) .....	180
106	2012年	パタゴニア フィッツロイ山群 フィッツロイ北西リッジ、 フィッツロイ北ピラー登攀(花谷泰広、横山勝丘) .....	182
107	2012年	ネパール キャシャール峰南ピラー6767m初登頂 (花谷泰広、馬目弘仁) .....	184
108	2012年	アメリカ ビショップボルダリング(中嶋渉) .....	186
109	2013年	パタゴニア フィッツロイ山群(横山勝丘) .....	188
110	2013年	フランス フォンテーヌブルボルダリングツアー(中嶋渉) ..	190
111	2013年	ネパール アンナプルナ周回トレッキング(米倉幸夫) .....	192
112	2015年	アンデス アコンカグア6950m アレナレス (土田孝浩、河野卓朗) .....	194

# 1 1965・6~8 カナディアン・ロッキーズ Mt.アルバータ峰3619m遠征

## ○参加メンバー 隊長：田島守

隊員：中村忠、原謙一、渡辺一、下平和範（長野高校OB山岳会）

## ○登山概要

### ・出国から登山準備 6/13~7/1

6月13日 先発隊の田島、渡辺が「向陽丸」にて下関港出航。

25日 飛行機隊の中村忠、原謙一、下平和範羽田発。

26日 両隊共にバンクーバーに到着する。

28日から各自登山準備を開始する。

29日 午前中隊荷の梱包。夕方バンクーバー駅から列車でバンフへ向けて出発した。

30日 午後1時着。

7月1日 バンフ郊外のキャンプ場着。キャンプ場から国立公園管理事務所へ挨拶し、キャンプを撤収し、レンタル車でジョナスクリークのキャンプ場に到着し、ウインクラー氏と会う。

### ・登山活動 7/3~8/3

7月3日 入山、氷のように冷たいサンワップタ川を渡渉し対岸のウーレー沢の末端にBCを設営。延べ21往復で800kgの隊荷を運び、13:30終了。田島、中村偵察に出る。ウーレー沢左岸から右岸に渡渉しモレーンの末端まで行き引き返す。

4日 蚊に悩まされながら朝食。全員でC1への荷上げ。無名峰1峰の東稜末端に設営した。

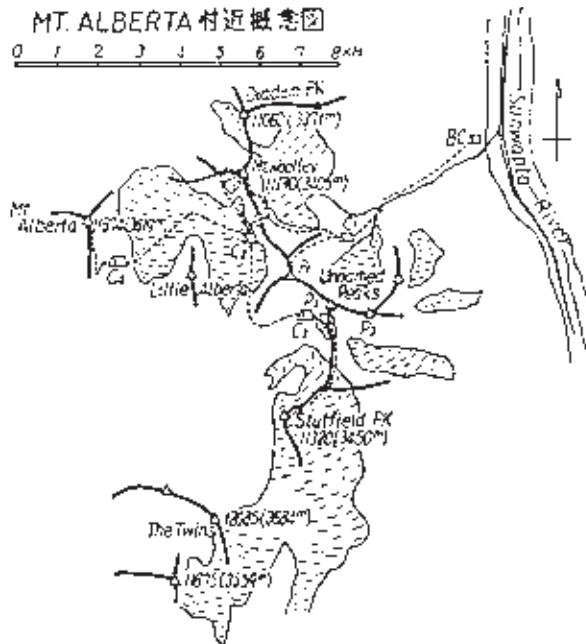
5日 C1への荷上げ。

7日 C1へ全員が入る。

8日 雨のため停滞。ミーティングを行う。

9日 無名峰を目指して出発する。天気が悪いためすぐ引き返す。午後天気が回復

## ○概念図（ルート図）



〈Mt.アルバータ〉



し偵察。

10日 再び無名峰を目指す。浮石の多い稜線を登り、雪面を直登し主稜に出る。積み木を重ねたような稜線を登攀し頂上直下に出た。しかし、雷鳴を伴った吹雪に遭遇し、敗退。午後7時ようやくC1にたどり着いた。

11日 霧、雨で停滞。

12日 田島、渡辺、下平はウーレー峰を目指して出発。頂に続くルンゼを登り、後80mに迫るが吹雪と時間切れで引き返す。ウーレー乗越にC2を設営することにした。

13日 各自30~40kgの荷上げは大変つらく、岩場の登攀は極度に緊張した。乗越の少し下にC2設営をする。

14日 原、渡辺無名峰への偵察。田島と下平はC1を撤収し、C2へ入る。

15日 原、渡辺は氷河をトラバースし主稜線を登り8時25分ウーレーに登頂する。

16日 田島、中村、下平は主峰西面直下にC3設営。

17日 3名は雲一つない空の下出発し、鞍部より無名峰主稜尾根を辿り8時25分に登頂。再び鞍部に引き返しスタートフィールドに向かう。午後1時5分雪原のピークに登頂する。

18日 C3を撤収しC2に入り、休養とアルバータ登攀のためBCまで下った。

19~22日まで休養。

23日 最大の目標であるアルバータを目指してC2へ入る。

24日 小アルバータの北を廻り、氷河を下り、アルバータの東面直下モレーンの上にC4を設営。

25日 田島、渡辺でルート偵察に出発。雪渓を登り切り下段の岩壁に出る。アンザイレンし、下段の壁から中段のルートを探す。C4からトランシーバーの指示を受けながら進む。雪の付いたルンゼを2か所トラバース、落石が多く岩場は極めて悪い。上段直下に続くと思われる岩稜を登る。クラックを登り切ると上段の岩壁が頭上を覆っている。サポート隊の原、下平と合流し昼食とする。ルートを検討し、北側へ引き返し再び登りだす。下段の下に立つ。偵察を重ね、ルンゼを登り、

稜を登り中段の上に出られる見通しが立つ。ツェルトをデボし引き返す。

26、27日は悪天のため停滯を兼ね休養。

28日 朝は小雨模様。次第に晴れはじめ回復の兆しが見え、田島、渡辺、下平が出発する。雪稜を登り下段の下に着き、南ヘトラバースし、中段に続く雪稜を詰め、岩壁に取りつく稜にて、ここを登り中断の上、上段との境をなす雪の付いたやや緩やかな斜面の下にて、北ヘトラバースし上部に続くルンゼの下に到着し、ここでビバークとする。

29日 6時出発。急な雪渓を詰め、雪の付いたルンゼの北の稜に取りついた。ここは極めて悪い。南側岩稜に逃げクラックを登り、再びルンゼに入りトラバースし、ナイフリッジの主稜に出た。痩せていて不安定な岩が積み重なり、目のくらむような高度感。頂上近くのギャップはザイルを固定した。午後3時40分私達は頂に立った。5登目8年ぶりの登頂だった。午後9時30分アップザイレンの連続で下がったが、暗くなり、再びビバークとなつた。

30日 好天に恵まれ、慎重に下降し、12時40分2人の待つC4に着いた。午後は休養とする。

31日 C4を撤収し、アルバータに別れを告げ、BCに到着する。

8月3日 BCを撤収し、再びジョナスクリークのキャンプ地に落ち着いた。

6日 国立公園事務局訪問。

7日 バンクーバー着。

10日 バンクーバー発。ロサンゼルス経由ホノルルへ。

13日 21時30分羽田着。

14日 長野着。

## 2 1967・9~12 ネパール ワンダリング

○参加メンバー 隊長:清水悟郎 隊員:小川勝、佐藤邦彦、望月映州、米倉幸夫

### ○登山概要

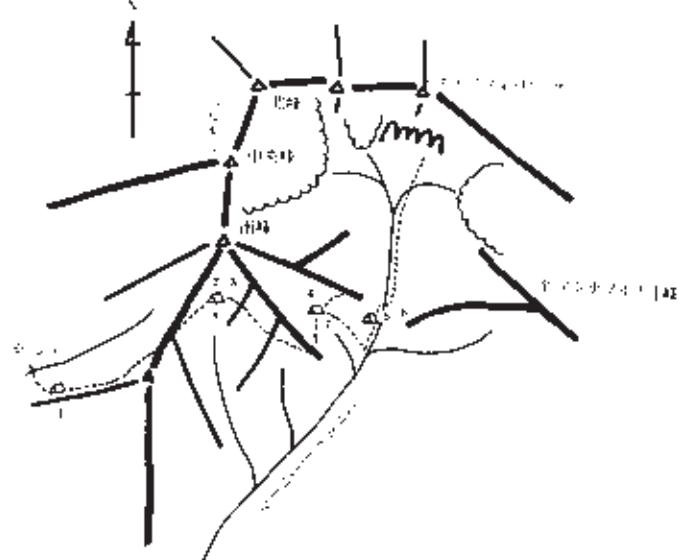
小川・佐藤・米倉・望月の4名は8月5日 横浜港を出発。25日 コロンボで下船。インドから陸路でネパールに入る。9月5日 ビルガンジよりバスで目的地カトマンズに苦しい旅の後到着した。空路からカトマンズ入りした清水隊長と合流。トレッキングビザの延長が認められ4ヶ月の許可取得。カトマンズでの十余日間は、慌ただしい日々を送った。パーティを2つにするため、シェルパはラクパ・テンジン、ニマ・チョタレー、キッチンボーイとしてソナ、ニム・フタールの4名と契約した。18日には、佐藤・望月パーティがポカラに飛び、19日には、小川・米倉パーティはトリスリ・バザールへ出発した。清水隊長は25日 空路帰国された。

### ・ミリスティ・コーラ

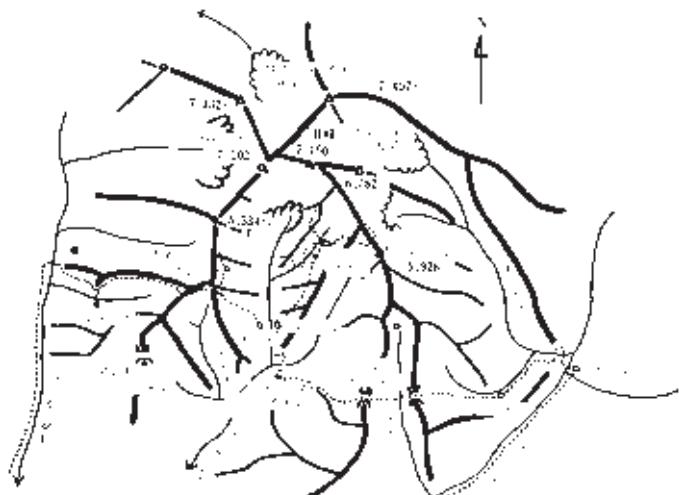
9月18日 カトマンズ→ポカラ  
19日 ポカラ滞在  
20日 ヤーレ  
21日 ラムダレ  
22日 ゴラパンニ  
23日 タトパンニ 24日 ガンサ  
25日 トゥクチエ 26日 滞在  
27日 ジョモソン往復  
26日~10月4日 タパ・コレ  
ヒドンバレー往復

### ○概念図(ルート図)

#### ・ミリスティ・コーラ



#### ・ガネッシュ・ヒマール



10月5~7日 トゥクチエ滞在

8日 トゥクチエ→レテ

9日 サーブの佐藤と望月にシェルパのテンジン、ソナにトゥクチエで雇った3名のポーターで7名。カリ・ガンダキを渡り、ツォヨ

村に入る。ミリスティ・コーラの事を聞いても道が悪くて大変だ。広い河原を横切つてタヤ村に入る。ここから見るダウラギリとトゥクチエ・ピークの姿は素晴らしい。ニルギリからの尾根の裾をぐるりと回り、コーラへ降りて急斜面を上り森林限界手前のコルに到着。カルカがあり、道も明確だった。

10月10日 雨と寒さでポータートラブルで出発が遅れる。主稜線をたどりミリスティ側を終日進み小さな沢でテント。

11日 ニルギリ南峰よりミリスティの谷をトラバースしテントサイトを決める。

12日 霧の中昨日のテントサイトまで。

13日 ミリスティの奥の急斜面を下る。

川底に着き、岩小屋で泊まる。殆ど人が来ない場所であるが焚火跡があった。

14日 寒いのに腰までの渡渉、ティリツォの大岩壁が張だし、左右から氷河が合流している地点で終了とする。

15、16、17日 同じルートでレテに帰る。

18~19日 レテ滞在

20日 レテ→ダナ→タトパニ

21日 ベニ 22日 アルマデ

23日 ターパルジュン 24日 スイケット

25日 ポカラ 27日 小川・米倉合流

29日 小川・佐藤・米倉カトマンズへ。

#### ・アンカー・コーラ

9月19日 カトマンズ→ベトラワ

20日 ラムチエ 21日 ドンチエ

22日 シャブルベンシ 23日 サンバテ

24日 3,600m峠手前

25日 マイルン・コーラ

26日 バンシン・バンジヤン

27日 ティプリン

28日 ヒンドゥン アンカー・コーラの左岸ぐんぐん登る。ヒンドゥン最終の部落に来た。タマン族の村で、かなり貧しい。

9月29日~10月1日 アンカー・コーラ側の山腹を登り、シェトー・ポクリ(白い池)にテント。カルー・ポクリ(黒い池)まるで奥叉の池。西にパビール峰、真上に峰々が。10月2日 シェトー・ポクリの背後にある岩山は、ガネッシュⅡ峰とパルドールを結ぶ稜線に突き上げている。

3日 ニマと3人で尾根を越えて、マンジェット・コーラの源頭のカールへ。4,800mでビバークする。

4日 サンジュン氷河側の尾根の斜面を登る。まるでシャモニの銳峰のようだ。尾根上のピークは無名峰6,950mか。

5日 停滞。

6日 ニマと3人でアンカー・コーラの右俣を下り左俣を渡るルートを探すが時間切れで引き返す。

7日 パーティを2つに分け、昨日の先とパビール峰とⅡ峰に迫った。しかし、懸垂氷河が落ち込み、Ⅱ峰は絶壁となっていた。

8日 停滞。

9~14日 シェトー・ポクリ→ヒンドゥン→ネビル→ガネッシュクンドはパビール峰から南へ続く続く、アンカー・コーラ側のカールの中。

15日 観察。

16日 直接ブリ・ガンダキに出る。

17日 ルンジェット・コーラの右の尾根を下る。ヒマルチェリ、マナスルスリング、ヒマール、ガネッシュ、Ⅱ峰と素晴らしい展望だ。

18~26日 ルンジェット→ブリ・ガンダキ→ラブベンシ→アルケット→グルカ→ルイテル→クンチャ→シサガット→デオラリ→バツアワイヤ

27日 ポカラ 28日 カトマンズ

12月26日 帰国 小川、望月、米倉、佐藤は別行動で1月28日帰着。

### 3 1967・5~8 ペルーアンデス遠征隊（長野県山岳協会）

○参加メンバー 隊長：村井栄一 副隊長：横地康生 隊員：林竹彦、浜巖、小林一智、浜田勝信、宮下昭、小松佑次、山田明、西郡光昭の10名

#### ○登山概要

5月3日 本隊が横浜港より、三井OS  
ブラジル丸にて出発する。

30日 パナマ港よりリマ到着。

6月1日 先発隊4人がワラスへ出発する。

5日 後発隊もワラスに出発し、入山準備を行う。

##### ・第一次登山ワンツアン山(6,395m)

6月9日 25頭のブーロへ50個の隊荷をつけて、ワラスからキャラバンを開始する。ワネインパンハを越えてラフコルタ谷に入り、渓谷をつめる。全員高山病で頭痛がひどい。

10日 標高4,200mにベース設営。ラフコルタ谷に不法侵入で訴えられるトラブルが発生したが登山終了後出頭することで収まった。

12日 C1を設営する。13、14日と荷上げで西郡・宮下・小林・山田がC1に入る。

16日 4名が5,200mにC2を設営し、宮下・山田が入る。17日 南西稜西壁に取りつくが、クレバスに阻まれ退却。

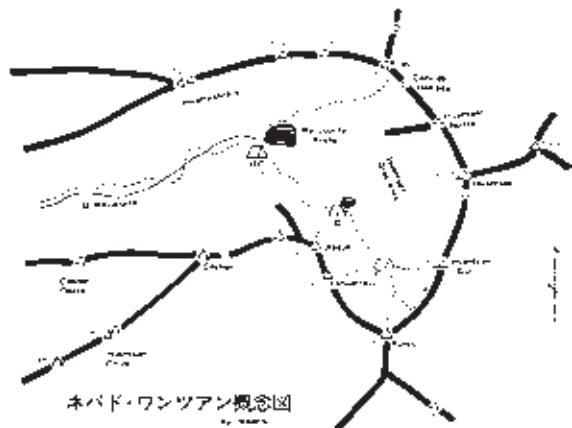
18日 南西稜に取りつくがナイフリッジに阻まれ撤退、途中山田がクレバスに転落する。救助後、全員BCへ下りる。休養と今後の登山計画を検討する。

21日 横地・小松が南方稜線上のピークに初登頂、ネバド・アベハと命名。

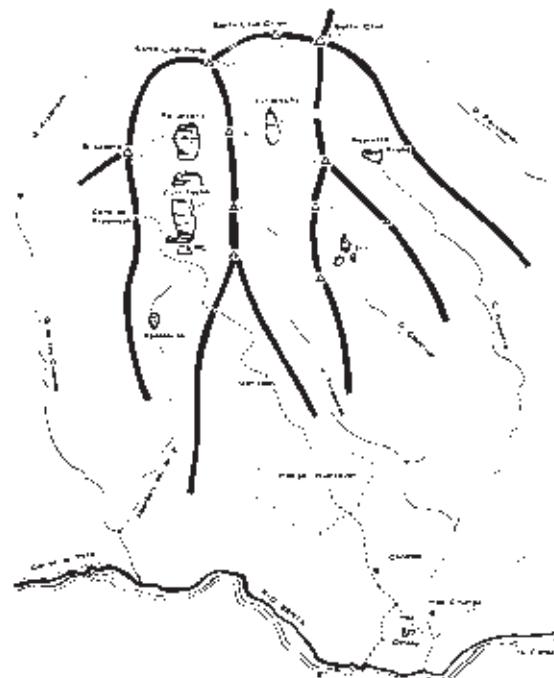
22日 C2に入った西郡・林は再度西壁に挑戦し、南西稜に立つ。

23日 宮下・小林がアタックに向かい午後1時ワンツアン南峰に登頂し、サポート隊

#### ○ネバド・ワンツアン概念図



#### ○サンタクルス・ノルテ概念図



の西郡・小松登頂。

25日 第2次アタックを試みたが強風で退却した。フィックスロープ、C2、C1を撤収しワンツアン登山を終了した。

### ・第二次登山サンタクルス・ノルテ(5,829m)

7月1～4日 ワラスで休養、観光。

5日 キャラバン開始。トラックにて登山口となるコルカスに到着。

7日 25頭のブーロと共にスタートする。

8日 パンパを登りラス・ラグーナス渓谷からクリコチャ湖畔にBCを設営する。

9日 午前休養し、午後偵察を行う。

10日 8名でC1へルート工作。ラフコチャ湖畔にC1を設営する。

11日 隊長を除く全員でC1への荷上げ。

12日は体調不調者が多いため休養日とする。

13日 隊員の半分が不調になり、横地・浜・宮下・西郡・小林でC1へ荷上げする。西郡・宮下・小林はC1入り。

14日 雪降り、西郡と宮下は偵察に出る。

15日 雪降りの中、西郡・宮下・浜・横地が氷河に入りC2へのルートの偵察をし、見通しをつけた。

16日 快晴となりC1から横地・西郡・浜・宮下がルート工作と荷上げし、サンタクルス・ノルテ西壁直下まで伸び、台地にC2を設営。17日 昨日ルート工作した4名は休養。他の4名で荷上げを行う。

18日 C2から西壁を仰ぎルートを検討する。

19日 西稜へ横地・小林、西壁に西郡・宮下パーティが取りつく。他のメンバーは荷上げ。20日 西壁の試登に全力をあげる小林・小松パーティが先行し、宮下・西郡パーティがフィックス工作をする。西稜上部に達し、登頂の見通しがつく。21日 アタック体制に入る。

22日 雪降りのため待機し、横地・山田はBCへ。C1の浜・浜田は食料をC2へ荷上げした。

23日 快晴。C2から林を登攀隊長に西郡・宮下・小林の4名が頂上に向かう。11時05分西稜に出る。林・小林は西稜に

雪洞を掘り、宮下・西郡は頭上の大茸雪にルート工作をする。午後4時ビバークに入る。BC、C1終日それぞれアタック隊の行動を見守っていた。

24日 快晴、7時30分アタック隊は雪洞を出発。西稜のナイフリッジを登攀し、午後0時45分、サンタクルス・ノルテの頂に立つ。感激の一瞬であった。2時30分 下山に移り、夜のとばりの中西壁を下降してC2着午後9時であった。

25日 BCから横地・オノラートがC1で浜・浜田と合流してC2入り。山田・小松はC1往復。C2のアタック隊は休養。

26日 午前中C2は休養。午後2時10分 C2を撤収してC1へ下る。27日 午後1時C1を撤収。午後4時30分疲れ切ってBC到着。村井隊長とは15日ぶりに再会し、夜遅くまで登頂祝賀会を催す。28日 宮下は下山キャラバン交渉のためアシエンダ・コルカスへ下山する。食料事情は一層悪化して主食はトウモロコシやジャガイモとなる。

29日 全員BCにて休養。

30日 キャラバン出発準備。

31日 午前9時5分下山のキャラバンが始まる。午後4時アシエンダ・コルカスに到着。8月1日 ワラスへ向かうトラックに荷物を積み込む。ビールで乾杯。

3日 ワラス最後の夜を過ごす。

### ・ワラス出発からリマ出発まで

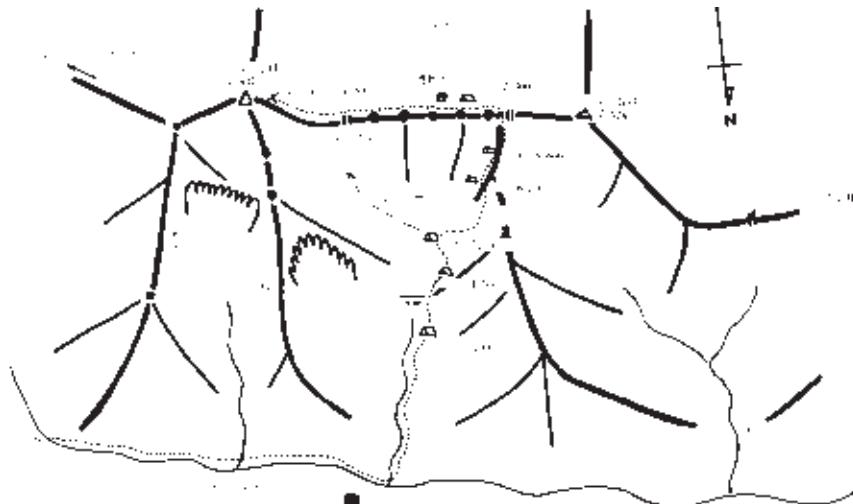
8月4日からリマ直行組と途中での観光組とに分かれしていく。インカの遺跡、クスコの市内見学。それぞれの地で日本人の方々にお世話になりながら楽しい旅をし、メキシコに着き、20日 2隊に分かれて帰国の途に着いた。

26日 両隊が無事に羽田に帰国した。

## 7 1971・2~5 信州大学 ネパール アンナプルナⅡ峰7937m遠征隊

○参加メンバー 隊長：西郡光昭 副隊長：片岡格 隊員：堀勝彦、森田稻吉郎、松尾武久、宮崎敏孝、岡村知彦、扇能清、山下泰弘、佐藤正敏、市野和雄

### ○概念図（ルート図）



### ○登山概要[本隊の記録]

#### ・160人の大移動

3月16日 本隊キャラバンの第1日目である。最後のポーターが出発したのは10時半であった。18日 朝もやの中を出発する。上流に行くにしたがい谷も狭まり4回の渡渉で尾根に取りつく。眼前にマナスル三山が飛び込む。19日 マルシャンディを挟んだ対岸にマナスル三山が視野一杯に広がる素晴らしいキャラバン。20日 クディ村を出て、右岸を辿るとブルブレである。竹製の橋は壊れかかっていてザイルで修理。バウンダラ村の手前でキャンプ。

24日 高度が増してきたせいか、朝夕とも気温が下がり風も冷たくなってきた。マナスルが大きく美しい。25日 キャラバン10日目。偵察隊からは北東稜は断念。残るのは西の派生尾根か、西の氷河をつめて主稜線を行くかの選択。ピサン村の上にある丘に登る。アンナプルナⅡ峰北面は圧

巻だ。今日の夜のミーティングで“サラタン谷”をつめて雪線の際標高3500mにベースキャンプ建設することを決定した。

#### ・ベースキャンプへ、建設

3月26日 いよいよ今日はベースキャンプ入りである。右岸通りの平らな道を行く。アンナプルナⅡ峰が思い切り高く、まるで人を寄せつけないように聳えたっている。森林帯を抜けると草原、行くとデブリがあり、丁度雪線となっていてここをベースキャンプとする。夜は登山の成功を祈り、ロキシーやチャンが酌み交わされ、シェルパダンスに夜は更けた。27日 シェルパ達は所構わずピッケルを振るって整地している。周囲を石で1m程積み上げフライシートをかけたキッチンテント。隊員の集合テントも同様だ。松本の事務局で梱包された隊荷の点検、慌ただしく働いていると1日は短く感じられ、ピサン・ピークがオレンジ色に染まる頃仕事は終った。

### ・C1のルート工作、荷上げ、建設

28日 氷河への信大の第一歩である。一番最初が氷のリッジでBCとC1では一番の難所。松尾とサーダーがトップで登る。ルートの確定のためどんどん登る。4000mを越えてヒマラヤ1年生の松尾にはとても苦しい。尾根からアイスフォールに落ちているリッジの下部に格好の場所がありC1とする。

29日 あまりすっきりしない天気だが全員でC1へ荷上げに出発。日本の山行ならバカにされるような荷の重さだが、歩いていくときのしんどさは日本のそれと変わらない。これが高度の影響か。

30日 C1への道も3回目となるとペース配分がうまくできる。着いたのが10時半6人用ミード型テントを2張り張った。C1の住人となる。

### ・C2のルート工作・建設

31日 今日も快晴だ。IV峰寄りの尾根を巻き傾斜の緩くなつた斜面を急登、大きなプラトーに出る。広すぎて場所の選定に迷う。左端5300mに決定。

4月3日 片岡、扇能、市野、松尾と佐藤の5人と6人のシェルパとC2を建設。

### ・仮C3へのルート工作

4日 松尾、佐藤とシェルパ4人が3パーティに分かれてアイスフォール帯越える。松尾が激しい頭痛で、下降する。夕方降雪。

7日 C2から片岡副隊長、扇能、市野上部をルート工作し5890mまで。

9日 今日はC3に入るために出発。シェルパはずっと先を進んでいる。ブロックの先端が崩れテントを潰していた。2時間かけて設営し直し、初めて6000mでの一夜を明かす。

10日 ブロックの一部が崩壊しアイスフォール帶に表層雪崩をまき起こしていた。危険だ、IV峰寄りの雪稜から主稜線に出てII峰に回るルートだけだ。

13日 松尾、佐藤、山下とシェルパ5人、計8人で雪壁のルート工作。荷上げでC2に着いた岡村隊員の指示を受けながら進む。予想していた雪田は急なためあきらめ下降する。

14日 同じメンバー C3予定地に着いた。天気が急変する。

15日 荷上げ、16日 休養。そして、天候の悪化。21日 全員BCへ引上げ。

22日 今後の方針についてミーティング。

24日 薪をC1へ荷上げ。25日 C2の再建設、デポ品発見、C2よりC3往復。

28日 C3建設。

29日 C4へのルート工作。片岡、市野、山下、扇能、シェルパ2名の6人で、40度の細い雪稜を登り、17時ころC3着。

5月1日 ついにC4に入る。

2日 午前10時30分。高度計は7050mを示す。

3日 やっと主稜線に飛び出した。標高7300m。テラスを切りC5を設営してC4に下る。アタック隊員を高度順化の状況から、佐藤とギルミ・ドルジェ。次に、松尾とペンバ・ヌルブと決定した。

### ・アタック、遭難

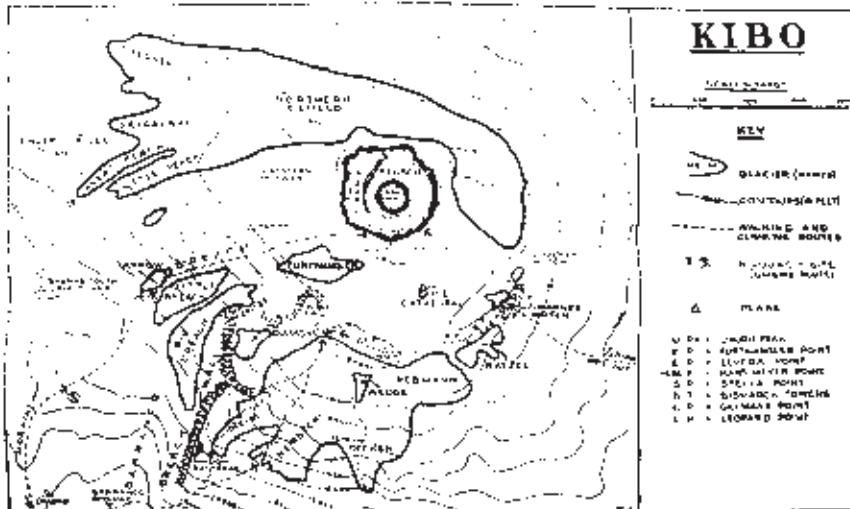
5月4日 絶好のアタック日和である。6時の交信で元気な佐藤の声が入ってきた。11時の交信でゆっくりと登る姿、予想より時間がかかっている。15時30分 佐藤より登頂を断念するとの連絡が入る。無事に帰ることをひたすら祈る。松尾とペンバは紅茶を持ち迎えに出るが、テントで待機との指示で戻る。20時 隊長より迎えの指示が出るがペンバの賛同を得られず。21時半 ギルミがくたくたになりテントに帰着。松尾とペンバで救援に向かう。慎重にスタートで進む。やつの思いでテラスの中に飛び込んだ。彼の姿はもうなかった。

5日 テントを撤収しBCへ戻る。今後の方針、反省会等12日BCを後にした。

## 9 1972・2 アフリカ・キリマンジャロ山域 マウェンジ岩峰の登攀計画の断念顛末記

○参加メンバー 板谷真一、武藤一郎

○キリマンジャロ山



## ○初めに

1972年2月、東アフリカのタンザニア北部のムハンザに青年海外協力隊員(JOCV)として住んでいた小生は、初めて年次休暇を取ってホンダの90ccの単車にアタックザックを結び付けて、キリマンジャロ登山を目指したのである。キリマンジャロ登山よりも、後で板谷真人先輩と同山域東側の岩峰Mawenziを登るための偵察が主目的であった。板谷さんは同じJOCVメンバーで、タンザニアのインド洋岸の港町タンガにいました。結局、お互いにキリマンジャロ山には登ったものの、仕事の都合で休暇がとれずマウェンジでザイルを組むことはできませんでしたが、小生はこの偵察の後、単車の旅を続けタンガの板谷さんを訪ねました。夕焼け空を背景に沈みゆく夕陽を見ながら、ご馳走になつた燻製ナマズのココナッツ・カレーの味は忘れられない美味しさでした。

キリマンジャロの東山麓のマラングから登る、通称ツーリスト・ルートは、高度順応さえ出来れば技術的に何ら問題はない。首都ダルエスサラームで入手したケニア山とキリマンジャロ山のガイドブックは、1963年にThe Mountain Club of Kenyaにより発行されたよくまとまった案内書である。英國の植民地だった国は、おしなべて地質や地形の調査が行われて、記録も良く整備されている。このガイドブックによれば、主峰周辺にはいくつかの登攀記録があり、州都モシから見える南壁氷河にも3本のルートがある。季節にもよるが、登攀記録では8月から9月の乾季で3級から5級のようである。ただし、残念ながらこの万年雪はかなり溶けだしており、かつての面影はなく近年、広範囲に地肌が出ている。

マウェンジの登攀も実現せず半端な記録であるが、以下、タンザニアの雰囲気を少しだけでもお伝えしたい。

## ○行動概要

2月と言えば小雨季と大雨季の境目で、激しく降られることはないが暑い。中央高地の真っすぐな砂道が見渡す限り人家の無い灌木地帯の地平線に続いている。まさか、ライオンが寝そべっているのではないかと、近づいてみると大型バスかトラックにぶつけられた仔象の亡がらであった。可哀そうにだいぶ肉が食われている。早々に退散する。この頃のタンザニア中央高地は誠に僻地だった。通る茶店に立ち寄り甘い紅茶飲んでいると、給仕が不愛想に「何処から来たのか?」と聞いてきた。小生もよくぞ聞いてくれた。「吾輩は東洋の日本からはるばる来てムハンザに住んでいるのだ」と答えると、どうだろう相手は「お前は絶対にチナ(中国人)だ、日本人であるはずがない」と、頑として譲らない。「お前こそホンダ、トヨタ、ソニー等々、日本を知らないのか!」と言うと、相手は「日本製だと知っているが、チナが作っているのではない」と、何と憎たらしいことを言うか。要するにこのニイちゃんはそれらのメイド・イン・ジャパンは西欧のどこかで作られているとの理解である。「少しは世界の地理でも勉強しろ」と悪態について店をあとにした。こんな調子でオーバーヒート気味の単車をだましだまし乗って、一千キロの道中を3泊4日かけてやっとキリマンジャロ山の登山口の村マラングにたどり着いた。最後の長い坂道の登りなど、単車を降りて押していくらいであった。旅の最初の3泊は田舎のゲストハウスに泊まって、この日、マラングでは豪勢に観光客向け Marangu Hotelに泊まった。タンザニア滞在2年近くになるが、まだ学生気分が抜けないので小綺麗なホテルでは落ち着かない。思いなしかホテルの白人女将の態

度もよそよそしい。人間同士の態度は、こちらの態度によって相手の反応が50%以上決まることに気付くのは後年になってであった。

さて、女将が登山の手配をしてくれるというので、お任せパックで行くことにする。するとどうだ、翌朝男5人が現れた。まず50歳位のガイド兼まとめ役、そのアシスタント、後はポーター兼、料理人兼、雑用係3名の大名旅行である。この地域の住民はチャガ族。タンザニアの政官学の各界で活躍する多くが、優秀なことで知られる。顔つきと態度からして、ガイドとアシスタントがどうもチャガらしい。

主峰へは登り3日、ゆっくり高度順応しながら第1から第3ハットを泊り、4日目早朝に小屋を出発、登頂後にそのまま第2ハットまで降りて、5日目に下山となる。小生は4日目の登頂後に下山路から外れて、主峰の東側に広がる鞍部の砂礫地帯を横切ってマウェンジ岩峰直下まで行って偵察した。ガイドブックにはマウェンジは落石が多いことが難点と記されている。登攀ルートはいくつかあるが、ノーマルルートは東側中央ガリー沿いで上下2箇所のアイスフォールが核心となる。平原ばかり2年近く見慣れた目には、眼前に屹立する岩場にはやはり迫力を感じた。

その後もタンザニアに住み続けた。乾燥した気候や緑の乏しい自然に長く接していると、ふと山で雪に閉ざされた早朝にしんと静まり返る雪の匂いや、音の吸い込まれた世界にいるような錯覚におそわれて、信州の山が無性に懐かしく思い起こされる。まさに小生にとって日本の山は、「山は我らの姿なる」である。

## 10 1973・1 ネパール ジョモソン トレッキング

○参加メンバー 福田涉、森茂

○行動概要

### ・トレッキングまで

福田、森は1972年4月18日 横浜港を出港。旧ソヴィエト連邦経由でヨーロッパに入った。主にスウェーデン(ストックホルム)、イギリス(ロンドン)に滞在後、9月30日にオランダ(アムステルダム)と、10月16日ドイツ(ミュンヘン)で、それぞれ中古オートバイ(1955年製BMW 250ccと1960年代初期製JAWA 175cc)を購入。アジアハイウェイをそろりそろりと走破し、12月28日 インドデリーでオートバイを処分した。アムステルダムからデリーまでの走行距離は約18,000kmだった。

### ・トレッキング

1973年1月3日

Varanasi発。汽車、バスを乗り継いで、Kathmanduに5日に着いた。

Kathmanduでは何も持っていないので、トレッキングに必要と思われるものの買い出しをしながら、のんびりと過ごす。

13日 KathmanduからPokharaへ移動。  
バスで丸一日かかった。ここでもぐずぐずと日を重ね、トレッキングに出発したのは16日でした。以降のトレッキングには福田、森のほか山岳同志会の横山幸雄氏が合流する。

16日 曇一時霧

10時15分 Pokhara発、  
16時10分 Naudanda着(泊)。

17日 霧一時雨 Naudanda滞在。

18日 霧のち曇

10時15分 Naudanda発。

〈2人の愛車〉



〈記念写真〉



16時30分 Ullei手前の民家(泊)。  
ここに泊まる。ここは小さな竹で作った小屋だった。当時は、民家で食事をお金を払って食べると宿泊は無料だったと記憶している。多分、客があった時しか炊かない白米が残るのを子供たちが待っている(ような気がした。夜には日本の歌(天地真理の・・・)を教えて、ネパールの歌を子供たちに教えてもらったりして楽しい時間を過ごす。

19日 曇

Ulleri手前発。Sikaで昼食。  
16時30分 Ghore Pani着(泊)。  
Pune Hillに登る。

20日 曇のち晴一時雪

- 
- 8時30分 Ghore Pani 発。(左の尾根の道)  
16時30分 Tato Pani 着(泊)。  
日本人の平尾さんとネパール人スルジエさんが営む民宿みたいなものに宿泊。温泉に入る。
- 21日 曇時々雨  
Tato Pani 滞在。同宿のカナダ人が山の中で変死体で発見されるという事件に遭遇。
- 22日 快晴  
8時45分 Tato Pani 発。  
17時45分 Lete 着(泊)。
- 23日 快晴  
9時 Lete 発。  
途中渡渉2回。ヤクの背で行くチベッタンが羨ましい。川原にはアンモナイトの化石がごろごろしていた。Tukucheで昼食。  
18時 Jomson 着(泊)。
- 24日 快晴  
8時35分 Jomson 発。  
12時 Tukuche で昼食。  
17時30分 Lete 着(泊)。
- 25日 快晴のち曇一時雨  
8時45分 Lete 発。  
17時 Tato Pani 着(泊)。
- 26日 快晴  
Tato Pani 滞在。カナダ人の変死体の件で平尾さんは警察に拘束されていた。
- 27日 曇  
8時30分 Tato Pani 発。(森下痢)  
16時30分 Ghore Pani 着(泊)。
- 28日 雪のち曇  
9時 Ghore Pani 発。  
朝積雪10cmくらいあった。  
14時30分 Biretante 着(泊)。
- 29日 晴のち曇一時雨  
Biretante 発。  
Naudanda 着(泊)。
- 30日 快晴のち晴  
Naudanda 発。往路とは違う尾根を行き、最後は直接湖に下りた。  
Pokhara 着。
- 31日 Pokhara から Kathmandu へ移動。
- ・トレッキング以降
- 福田は、2月15日 再びインドに入り、ブッダガヤ滞在後、2月27日 カルカッタ発。バンコック～台北～那覇に帰国～3月8日神戸。
- 森は、カトマンズで扁桃腺炎で発熱。エヴェレスト街道トレッキングを断念し、2月18日カトマンズ発。バンコック～香港～台北～3月4日那覇に帰国。

## 11 1973・2~6 ネパール アンナプルナⅠ峰8091m遠征(JAC信濃支部)

○参加メンバー 隊長:塙本茂樹 登攀隊長:浅輪幸久 副登攀隊長:松永敏郎  
隊員:堀内章雄、高橋貞利、浜正則、降旗孟、牛越正、新谷剛、塙原賢勝、片桐一三

### ○登山概要

2月9日 先発隊牛越、片桐出発。  
11日 無事カトマンズに到着。  
12日～シェルパ、コックの人選と健康診断、パッキングリストの作り直し、トランシーバー使用許可申請、装備の受け取り、外務省訪問、隊荷の受け取り、ドルからルピーの交換、現地での買い物等の準備を毎日行った。

3月2日 塙本隊長以下9名出発。  
4日 午後4時カトマンズに到着。日本大使館への挨拶、隊荷をトラックに積みポカラへ。

9日 2名を除き他の隊員が下痢となる。  
2日後には回復した。

#### ・ポカラからキャラバン開始

14日 174名のポーターと共にキャラバン開始。1日15ルピーとタバコ2本、30kg。

15日 今日も素晴らしい天気だ。尾根を登り切るとノーダラ集落。カーレがテント場。

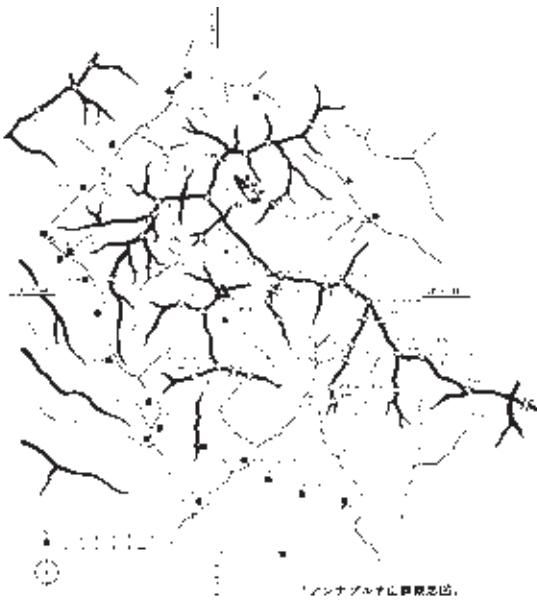
17日 ジョモソン街道一の難所ゴラパニ峠越え、峠は大変寒くセーターを着込んだ。

18日 タトパニまで一気に下る。ここには温泉があり数人が入りに行く。

21日 ポータートラブルが発生、60人帰る。  
23日 トロブキン峠(4200m)を目指して登る。先発がルート工作し、その後ポーターが進む。15人のポーターが帰る。  
24日 ポーターは雪の中を進むのを拒否したため全員解雇する。隊員、シェルパと再度雇った20名のポーターで荷上げをする。

### ○概念図(ルート図)

#### ・アンナプルナ周辺図



#### ・ルート及びキャンプ位置図



28日 6日間滞在した森林キャンプの隊荷を全て荷上げした。

29日 ミリスティ・コーラの河原を目指して進む。前面にはファングとアンナプルナの主峰の西壁が迫る。

30日 ポーターは隊荷をピストン、隊とシェルパは休養とする。

31日 晴午後あられ、ミリスティ・コーラの橋が流されていた。ポーター6名が新たに加わった。

#### ・BCキャンプと北東バットレスルート工作

4月1日 隊員、シェルパを含め28名がミリスティキャンプを出発し、16時にアンナプルナ氷河の4300m地点にBC建設。

3日 松永、高橋、降旗、牛越、新谷はC1(5300m)建設に出発。

4日 荷上げ。

5日 全員BCに揃い乾杯。

6日 荷上げ。

7日 牛越、降旗とシェルパでC2へのルート工作、他は荷上げ。

9日 C1への荷上げとC2(6000m)建設。

10日 C2への荷上げの後BCへ。

11日 BCからC1、C1からC2への荷上げ。高橋がC1に入り6名となる。

12日 BC～C1、C1～C2への荷上げ。

13日 荷上げ。14日 荷上げと北東バットレスの取りつきまで偵察する。

15日 松永、降旗、牛越、シェルパ2名でルート工作をする。後、ルートの検討をする。

16日 北東バットレスの取りつきで雪崩に会い、C2へ引き返す。

17日 バットレスと不安定な氷壁6400mまで到達してC2へ引き返した。

18日 北東バットレス6500m付近まで達する。

19日 バットレスを偵察する。クーロアールは一日2～3回の雪崩があり、非常に厳しい状態だ。

20日 最後の望みをもって出発、昨日あつた氷塔が崩壊し、クレバスが大きく開いていた。このルートを放棄するしかないと判断する。

#### ・北氷河ルートへの転進

21日 北氷河ルート(フランス隊ルート)

22日 C2から途中まで北東ルートと同じ。

23日 北氷河のルート工作を行う。

24日 降旗、牛越、新谷、片桐とシェルパ3人でC3へのルート工作。

25日 6800mにC3建設ができた。

26日 C1～C2、C2～C3への荷上げ。

27日 C2～C3への荷上げ。

28日 高橋、浜、牛越は高度になれ、頭痛が取れたのでC4への偵察。

29日 C1～C2へシェルパは荷上げ。

30日 C4へのルート工作を行ったが雪になりC3へ戻る。

5月3日 朝から降雪、行動は中止する。

4日 雪崩の危険を考え行動しない。

5日 浜、新谷、塚原、片桐はルート工作へ。

6日 7100mにC4を建設した。その後、荷上げと高度順応をしながら13日に牛越、塚原とシェルパ2名で7500mにC5を建設した。

#### ・頂上アタック

14日 第1次頂上アタック隊牛越、パサンは高度8000mを越え、頂上直下50mまで迫るが、あと一步のところで登頂ならず引き返す。

15日 第2次登頂アタック隊降旗、チョンは主峰と中央峰のコルに達したが、悪天候のため引き返した。

#### ・遭難の発生

18日 C3及びC4から下山中、雪崩のため高橋、浜、牛越、片桐、チョン・リンジの5名は遭難、行方不明となる。直ちに捜索を行うが発見できず。

19日 終日、全員で捜索するが発見できず。

20日 捜索予定であったが、新たな雪崩が重なり、発見の可能性がなく、下山を決定。

25日 BC撤収。

6月2日 ポカラに到着。

3日 カトマンズに到着。

16日 全員帰国。

## 12 1973・7~8 ア拉斯カ Mt.ブラックバーン4997m遠征

○参加メンバー 隊長：百瀬斐敏 隊員：平出一寛、田口憲、小笠原茂、藤松太一、信州大学山岳会（SAC）、学士山岳会（SAAC）、クライム・メイト・クラブ（CMC）、松本登高会、山梨大学山岳会から参加した混成メンバーによる遠征隊。

〈Mt.ブラックバーン〉



### ○登山概要

7月21日 羽田発→アンカレッジ

#### ・登山準備でグレナレンへ

夕やみ迫る羽田空港からノースウェスト航空で一路アンカレッジへ。同日の朝到着した。レンタカーを借り、大型スーパーへ買い出しに行く。バンに一杯の荷物を載せて単調な道をグレナレンに向かう。安いモーテルに宿を取り、最終の準備。主にセスナ機のチャーター交渉。現地にいる日本人から夕食の招待を受ける。どでかいサーモンステーキに感動する。

#### ・登山活動

24日 心もとない小さなセスナにてナベスナ氷河にランディング。荷物を降ろし再び飛び立つその間テントを設営しここ標高3000mをベースキャンプとする。25~26日 ルート工作、C1・C2設営ヒドン

クレバスが縦横無尽に走っている広い尾根上に取りつくまでクレバスを避けながらルートを作る。植村直己さんが腰にクレバス対策の竹を固定したのが理解できる。3500mに第一キャンプ（C1）、4000m第二キャンプ（C2）を設営。ルート的にはほとんど難しい場所はなくC2への傾斜がやや急なのとガスにより視界が悪い程度であった。それでも山のスケールが大きい。

27日 頂上アタック 田口、小笠原と藤松の三人でアタックに出る。田口さんは体調が悪そうで朝食べたものを戻していた。サポート隊として百瀬、平出さんと4500mで別れた。特別難しいコースはなく、体力勝負でひたすら尾根状の幅を持った斜面を登っていく。そろそろ頂上ではないかと思うが、まだ先である。何回か休んだ後、ようやく頂上の斜面を登

ると、グランド程の平らな場所に出た。体を雪面に伏せ、高いでっぽりを見つけ、ピッケルで掘ると、以前に登った隊の旗がでてきた。三人でがっちりと握手し、下山を始めた。C2に戻り全員で登頂のお祝いに遅くまで起きていたが、平出さんが体調が悪いとひとり寝ていた。

#### ・平出さんの遭難事故発生

28日 早朝平出さんが調子が悪いといい風邪薬を飲んで寝た。その後、うわ言

が激しくなり、瞳孔反応が鈍くなり、急きょ下山することにした。ザイルで2ピッチ下った所で絶命した。原因は高山病と考えられる。

BCへ戻るが天候が悪く、迎えの飛行機が大幅に一週間近く遅れた。百瀬と藤松は事後処理のため帰国を伸ばし8月19日に日本に帰国した。



カラフトアツモリソウ

## 15 1974・10～1975・4 ネパール トレッキング

○参加メンバー 小根田一郎、三坂健次(岳應)

### ○行動概要

10月2日 東京→バンコック(泊)

3日→カトマンズ 空港で先発の三井・川口出迎え。山岳会定宿のトウクチェピークリストハウスに着く。

5日 小根田体調を崩す。

6日 ガネッシュ方面は不可、ジュガール・ランタンはOK。

10日 ビザ延長30日しかできず。

### ① ジュガール・ヒマール (10/13～28)

登山活動を伴うのでパサン・ノルブシェルパ、料理担当: ペンバ・ツイリとポーター2人を雇用。予算節約の為我々もかなり重い個装を背負う。10、11日買い出し。

13日 KTMバス⇒バルビレ(現バレフィ)→TS。中国国境コダリへ向かう道路をバスで東へ。ドラガートでスンコシを渡り、川沿いに遡ってバルビレで下車。支流バレフィ(現地名ジャルビレ)・コーラを遡る。亜熱帯の草木鳥蝶。暑さと荷の重さに参る。

14日→ジャルビレ(石畳の道・涅槃像)→(民家)。女性Pが入山中と聞くが、外国人はめったに入らないらしく、行く先々で人が集まり「観察」される。ジャルビレはちょっとした町。標高が上がり日本と似た虫草。雨が降り出し、一軒家に宿をとる。

15日→バラミサンゴ→バンガルプ(民家)

今日も日差しの暑さにバテ気味。チベット文化圏に入ったか村の出入口に石塔・幟。

16日→ブルデ→ゴンパタン(TS)

村を出て尾根に入ると右の谷奥に鋭角的な白い峰が見える。ブルデ村の先の支流は初めて冷たく感じられた。ラリグラス初見。ゴンパタンはちょっと大きな村で、諏訪地方で昔よく見られた鉄平石で屋根を

### ○JUGAL HIMAL 概念図・三坂作図



〈プルビチャチュ西面 6722m〉



[1974/10/22 by小根田]

葺いた家が多い。民家前庭にテント。

17日→テンパタン(TS) =最後の集落。

朝露の中を歩いていると蛭に吸血される。

左岸最大の支流ネセム・コーラに大きく入り込んで巻く。谷間には着生蘭、春蝉のような声茶羽の小型蝉。下山してきた東京女子医大Pに会う。桜満開。

18日→チンダン・カルカ(仮小屋) 標高3000m

弱。標高が上がり朝は寒い。所々伏流水が流れ出る本流沿いの林は梓川右岸横尾一叉白間の趣、針葉樹の代わりに樺、石楠花の大木、モスフォレスト。本流はやや白濁。谷分岐の高台平坦地チンダン・カルカ泊。ダリア・コスモスが咲く。北上する谷はランタン谷との稜線上のティルマンのコルへ。東の谷が目指す本流プルムタン・コーラ。林相は梅の巨木が優勢な混交樹林に。日没後谷の東奥にブルビチャチュ残照。ほとんどデンブン食に偏ってきた。

19日→カルカA(仮小屋)

右岸を高巻いたり川原を歩いたりしながら高度を上げる。樺が混じり始めると石楠花以外の広葉樹は消え、樺が優勢になると梅が消え、樺属とビャクシンの古木の林に。地表も樹皮も苔で覆われ、林床に青紫の桜草。平坦な草地のカルカAで泊。直線で40kmも離れたチョウタラから来て無雪期の間竹細工を作っている男達が岩小屋住まい。

20日→4300mジュガールBC

出発からいきなり北側の急な崖を巻き気味にどんどん登っていくと高木が消えツツジ・メギ・ハイビャクシン等の灌木が混じる草地に・傾斜が落ち広々とした高山帶的草地からモレーンのような堤を越えると古いカール状の所。小水流・池。BC設営。  
21日 三坂風邪の為、小根田・パサン2人でBCからトラバース気味に東へ進み、本流に面した急斜面を少し降り氷河の様子を偵察。国境稜線上のコルまで達するのはそう簡単ではない事が判明。ポーター2人は食料買い出しにテンパタンへ下ろす。

22日 BCの100m上まで雪。沈殿(三坂回復せず)

23日 BC撤収→カルカA。食料不足と三坂体調不良(激しい頭痛と咳・血痰=肺水腫・高山病の可能性)の為、計画を断念

し下山決定。BC撤収、川沿いのカルカAへ。テンパタンへ買い出しに行っていた2人が帰着。

24日→チンダン・カルカ。珍しく夕べから小雨降り続く。BC辺りは雪だろう。例年ダサインの頃は雨になるのが「吉」との事。

25日→テンパタン(民家)。久しぶりに人が生活する集落。つい先日の事だったのに、懐かしい。

26日→ゴンパタン。久しぶりに肉(ダサインの羊)を買った。町が近づくとポーターたちの表情も浮き浮き。

27日→バラミサンゴ。急に町らしくなる。

28日→ジャルビレ。学校の芝地にテント。

29日→バルビレ=(バス)⇒KTM。

しばし休養。続いていた小根田の下痢は原虫Giardiaによるものと判明、薬を処方される。トレッキングは可能。一番近いランタン・コーラに入ることにする。

## ② ランタン・ヒマール (11/17~28)

17日KTMバス⇒トリスリ→ペトラワティ(ロッジ泊) 18日→ターレ(ツェルト泊) 19日→ドゥンチェ(茶屋泊) 20日→シャブルベンシ(ロッジ泊) 21日→シャルパガオン(ロッジ泊) 22日→ゴラタベラ(ロッジ泊) 23日→ランタン→ギャンジン・ゴンパ(ロッジ泊) 24日(三坂のみ) リルン氷河から東氷河に続く斜上バンドの4700m迄登る。25日→ゴラタベラ→森の中の草地に。(ツェルト泊) 26日→シャブルベンシ(ロッジ泊) 27日→ラムチエ(茶屋泊) 28日→トリスリ、バス⇒KTM

## ③ ランタン・ヒマール 1975/4/16~24

三坂単独。16日KTM→トリスリ→ペトラワティ。17日→ラムチエ。18日→ドゥンチェ。19日→ランタン谷。20日→ゴラタベラ。21日近辺調査。22日→ドゥンチェ。23日ペトラワティ。24日⇒KTM。

## 16 1974・5~7 インドヒマラヤ ビハリジョット北峰6290m遠征隊

○参加メンバー 隊長：森田稻吉郎 副隊長：坂本昌士

隊員：田中三代子、内藤治人、桃沢孝夫（長野県勤労者山岳連盟）

### ○登山概要

5月13日 羽田→バンコック

14日→デリー着。

15日 ゼネストで騒然としたデリー。

16日 IMFを訪問する。

17日 市内見物をする。

18日 インドの貧しさにふれる。

19日 昼間よりビールを飲む。

20日 全員デリーに集結する。

21日 内務省を訪問する。

22日 トランシーバーが通関する。

23日 坂本・内藤・桃沢の先発が200kgの荷物と共にデリーを車にて出発し、チャンディガールに着いた。

24日 午後6時半に標高1800mのマナリに着く。

25日 全員マナリに集まる。

26日 ナワンを含め3名のシェルパを雇用

27日 装備と食料の買い出しをする。

28日 一袋32kg詰、装備と食料の梱包。

### ・キャラバン開始

5月29日 桃沢、内藤、ナワン、ワンギャルとリエゾンはポニーで出発、他はバス。標高3500mのマリーに着く。

30日 今日は4000mのロータン峠を越える。絶壁に囲まれたケロンの町に着いた。

31~6月1日 チャンパ地区への通行許可書取得のため滞在。

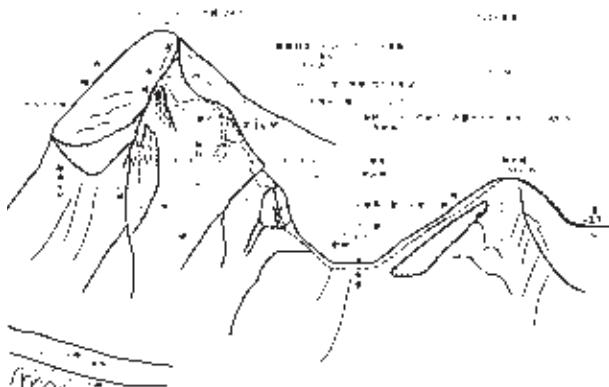
2日 午後4時のバスで崩れかかった道を手に汗握りながらウダイプアに到着。

3日 キャラバンの打ち合わせ

4日 ポーターが集まらず休養日とする。

5日 ここから先は人手による隊荷輸送となる。サルガランに着く。

### ○CII・頂上間の登攀ルート図



〈第1キャンプからのビハリジョット北峰〉



6日 雨の上がるのを待って出発し、ティンディまで。

7日 今日から新しいポーター、蠅の多いバングイ谷。

8日 ショール村へ。

9日 ショールのポーターで進む。

10日 シープ小屋があるが、荒れた谷でダニが沢山いた。

### ・登山活動

6月11日 4125mにベースキャンプを設営。

12日 内藤と桃沢はC1予定地まで偵察に行く。

13日 昨日の2人にシェルパ3人の5人でC1

---

設営と荷上げに向かう。

14日 内藤とダマルスイングの2人で偵察と無名峰5850mに登頂する。

15日 C2までのルート工作と上部偵察に桃沢とダマルスイングで向かう。夢か幻か雪男の足跡を発見する。

16日 坂本・内藤・桃沢でC2予定地へ荷上げ。昨日の雪男の足跡を再確認、加えて体毛や糞も発見する。後桃沢はBCまで戻る。

17日 内藤・ナワンがC2入りした。

18日 内藤とナワンは頂上へのルート工作に出た。脆い岩やハングった雪を越え6000mに達し、C2に戻る。

19日 昨夜相当の雪が降った。ラッセルがきつい坂本・桃沢がC2入り。2人のシェルパはC1へ。20日 風雪に閉じ込められる。

21日 BCへ下山する。

22日 坂本・桃沢・田中とシェルパでC1に入る。

23日 再び激しい風雪で停滞。

24日 偵察、2人のシェルパがBCへ下山。内藤が入る。

25日 C2への荷上げ我々の左手前から雪崩が発生し、もう一度あった。

26日 雲一つないインド晴れ。坂本・桃沢・田中と2人のシェルパはBCへ下山する。

27日 暖かいBCでの休日。

28日 再びC1へ坂本・内藤・桃沢・田中とシェルパの3人計7人。一部C2の手前までデポする。

29日 雪崩た場所も安定しC2に着く。桃沢・内藤・坂本・森田・ダルマが入る。C1には田中と2人のシェルパ。

31日 午前4時アタック中止と決定。

#### ・アタック、6100mに達する。

7月1日 午前4時坂本・桃沢・内藤・ダマルスイングの4人でアタックに出発する。内藤トップで岩に取りつく、既にフィックス・ザ

イル雪の中。雪庇を乗り越し、雪壁を登り、トラバースしナイフリッジ、氷等乗り越えて出たところがクレバス地帯標高6100mあと少しで頂上であるがこの先には進めない。交信の結果退却することに決定した。C2に辿り着いたのは午後の4時40分であった。

2日 今日はC2の撤収だ。坂本・内藤・桃沢・ワンギャルの4人は無名峰に登頂すべくC1泊まりで他はBCへ下って行った。

3日 朝4時半朝食を食べ出発する。新雪があり懸垂氷期から引っ越し無しに雪崩が発生している。坂本登攀隊長中止を決定する。全員C1へ引き返し、BCへ下山する。

4日 森田・坂本・桃沢は本峰の左側を、内藤・クマールは中心部を、田中は右側をそれぞれ氷河探査を行った。

5日 帰りの準備。

#### ・帰りのキャラバン

6日 ベースキャンプ撤収。ショール村まで2時間半で着いた。

7日 ショール村。

8日→ロンリーに13時着。

9日→ティンディ。今日のコースは短い。

10日→サルガラン。夜はポーターダンスで楽しむ。

11日→ウダイプア。キャラバン最終日。ポーターに賃金を払い、不要になった食器なども譲る。

#### ・再び文明の世界へ

12日 おんぼろバスに乗り込み→ケロンへ

13日 →マナリに着きゲストハウスの夕食は素晴らしかった。

14日 マナリ滞在。

15~17日 シムラからデリーへ。

#### ・最後の1週間

18~24日 IMF(インド登山財団)へ登山終了報告、タージマハール見物等。

25日 ニューデリーを出発、香港に向かう。

18 1974・4~12 アンデス 日本奥地アマゾン探検隊(長野県山岳協会)

○参加メンバー 隊長：向一陽 隊員：依田雄弘、今村文彦、友枝啓泰、大川恭短、竹下孝哉、門田衛士、森下謹司、山本紀夫、山田 明、岡部広夫、三村祐吾、荻原公、本多哲郎、川上伸生、海老沼晴夫、落合正次、今関真人、**堀勝彦**

## ○探検概要

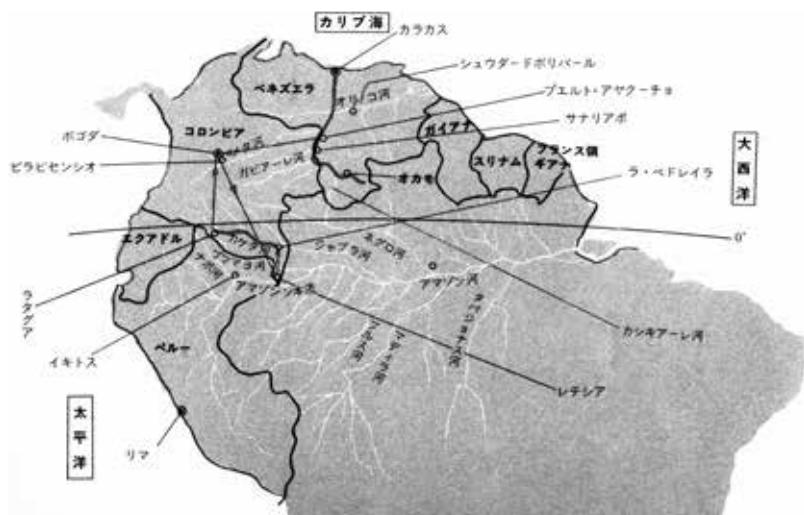
ベネズエラ～ボリビア。オリノコ河～アマゾン河の流域を南米大陸横断する隊員の一員として、向一陽隊長他18名の隊員で、ベネズエラのカラカスからアマゾン河の本流までの、前期隊に参加して殆どの日数を、アマゾンのジャングルで過ごしました。

## · 行動概要

7月5～19日 まずベネズエラに飛んで、本隊と一緒にプエルト・アヤクーチョまで進む。

20日 5名で、アルト・オリノコに入る。折からの雨季で毎日雨が降り続けるので、大変であると共に、川辺のジャングルに入り込んで、ハンモックを吊って、キャンプするのは想像以上にきついものがあります。特に、ブユ・蚊・ダニ・蟻の攻撃は強烈でした。オリノコも上流に進むにつれて、時々小さな村が現れ、その村の背後には、巨大なテーブル・マウンテンが姿を見せ始めます。サンフェルナンド・アダパポー、サンタ・バルバラ、マルレコなどの村落を訪問して、インデオの種族や言語や、栽培植物の調査をする。そして、カリーチを通過して、エスマラルダに着いた。ここは川下

## ○アマゾン奥地の探検コース



## 〈オカモのヤノアマ族の女性たち〉



から開拓者がやってきて、村を作り畑を耕したが、土地そのものがひどくやせている為に、部落は崩壊してしまい、今や無人になってしまいました。エスマラダスを出発すると、ガイドたちが緊張し始めた。この上流のオカモという部落は、ヤノアマと呼ばれるインデオの部落で文明に触れていないので、不測の事態がしばしば起ることで、彼らを刺激しないようにしたい

ということです。ヤノアマ族は野生そのものの人々で、常に狩りをしながら、シャーマンを中心にして、生活しています。夜のジャングルには精靈が棲んでいて、いたずらをするといつては、怖がります。そこを私が夜のジャングル調査の為、懐中電灯をつけて歩き回るので、村人から恐れられたりしました。シャーマンは村人の中心にいて、エペナと呼ぶ幻覚剤を鼻から吸い込んで、幻覚によって狩りの成果を占ったり、病人を治したりするのですがそれを詳しく記録した。そのほかヤノアマの言語を学んだり、風習など調査したりしてとても貴重な経験をした。ヤノアマの調査を終わり、オリノコ河を下ってペルト・アヤクーチョに戻り、8月5日 ペルト・カレニヨまで下り、ここからコロンビアへ入国をした。

8日 飛行機でビラビセンシオにて、本隊や支隊との連絡の為17日まで滞在し、  
18日 首都ボゴタに出た。

19日 飛行機でアマゾン河本流のレテシアに到着。

21日 飛行機でアマゾン河支流のカケタ河のラ・ペドレイラに到着。ブラジルとの国境の村で軍隊も駐留している。ここでは山本紀夫隊員と2人だけでコロンビアからアパポリス河を下ってくる本隊が、無事にこの地を通過できるようにとインデオの種族が多く生活しているペドレイラ周辺の調査とインデオとの親睦をしておくのが私たちの仕事でした。

31日 カケタ河の支流、カウナリ河へ調査に出かける。ラ・ボカナデミリティ、サンタ・ファテマ、マナカロ、イスラデ・サラド、ペルト・サンカルロス、マリオマンテカと小さい村を泊まり歩いて、種族の言語や家の造りや栽培している作物等の調査をする。勿論、昆虫の採集が一番の仕

事で、夜昆虫の整理で寝不足気味でありました。

9月16日 山本紀夫隊員がブラジル領に唐辛子の調査に出かけたので、10月6日まで、単独で毎日ジャングルの中に道を造り、調査のために使うカヌーで1~5日程度の旅をする。夜は、ジャングルでハンモックで眠り、食料のほとんどは魚を釣ったり、ネズミを弓矢で仕留めたりして過ごした。単独の旅でしたが、アマゾンの自然に上手く順応できていたようです。昆虫の採集は、膨大な量になりました。

10月12日から本隊とカケタ河を遡る旅が始まった。

29日まで、コルドバの滝、ペルト・サンカルロス、エルメンシア・ミラーナ、アララクアラ、アンゴストーラ、ペルト・ペネヤを経由した。カケタ河の旅は滝があつたり、強烈な峡谷があつたり、アマゾンの全工程の中で蚊・ブユ・ダニの猛攻あつたりして、地獄の旅がありました。ペルト・レギサモでツツマヨ河にて、カケタ河の全工程を完了した。

11月2日 ボゴタにて、前期のアマゾン探検は終わった。

ボゴタでは首都を中心にして、コロンビア各地に1週間旅をして、ラン類の採集をした。時には、アンデス山脈を越えて、アマゾン河の源流域に入り込んで、昆虫の採集をしたり、前大統領夫人の管理するラン園を訪問したりして、膨大な資料を収集した。

12月17日 ペルーのリマに飛んで、インカ文明に触れるために、インカに関する博物館を全て訪ねた。そして、クリスマスイブの日にタヒチ経由で日本に帰国した。

## 19 1975・3~4 ネパール エヴェレストBC・トレッキング

○参加メンバー 大野幸雄(宇都宮大学山岳部OB)、小根田一郎

### ○行動概要

・ヨーロッパで折り返してカトマンズに戻ってきた小根田と、インドを周遊してカトマンズに戻ってきた大野とで、エヴェレストBC又はカラパタルの丘まで、というプランで話がまとまった。大野は渡部光則君の高校の同級生で、小根田とは前年にカトマンズで知り合っていた。カトマンズを出たのは、1975年の3月下旬頃。期間中、天気は安定していた。

第1日 ツインオッター機に乗り、ルクラまで。ルクラの滑走路はガタガタで飛び跳ねながら着陸。夕方まで歩き、無人小屋にて泊。

第2日 しばらく行くとナムチエへの急登が始まり、早々とナムチエ・バザール着。宿でゆっくりしていると、カトマンズをロールワリンに向けて先発した島根大学山岳部の現役2人パーティの一人が現れてびっくり。相棒のS君がテシラップチャ峠で高度障害にて昏睡状態になっており、エヴェレストビューホテルのドクターに助けを求めるに降りてきたとのこと。峠のテントには、八幡製鉄所山岳部の2人パーティのYさんが付き添い、他の一人と共にナムチエまできたとのこと。ドクターが言うには、既に死んでいるだろうということで、遺体を下ろすための人員を雇い、今夜戻るとのことだった。小根田は翌朝から八

幡製鉄所の一人と同行することになった。

第3日 ターメを通過してテンポーを過ぎたところで、上からシェルパ数人が酸素を吸わされたS君を抱えながら小走りで降りてきた。これに対し、S君に付き添って弱っていたYさんは、かなり遅れて一人だけよろよろと降りてこられた。その夜はテンポーの無人小屋にて泊まり、S君は夜中に到着したドクターと共に翌朝ヘリにてカトマンズに運ばれた。

第4日 八幡製鉄所の2人と共にゆっくりとナムチエに下る。

第5日、第6日 八幡製鉄所のお二人と共に、静養する。この間、カトマンズから急遽上がって来た島根大山岳部のOBの方にご馳走になる。カトマンズで小根田のデポ品から地図を拝借してここに来たとのこと。

第7日 これらの過程で知り合った百合姉さんと行動を共にすることとなり、3人でタンボチエまで。

第8日 タンボチエからペリチエまで。

第9日 休養。ここで、エヴェレスト女子登山隊のあるメンバーへの届け物を託される。

第10日 ペリチエからロブジエまで。ここで、初めてテント泊。

第11日 ロブジエからゴラクシェプまで。テント泊。

- 第12日 カラパタールの丘を越えてプモリのBC側まで行き、戻る。数日前に事故者が出ていたプモリBCだが、手頃な対象のように見える。
- 第13日 エヴェレストBC往復。届け物を届けたことで歓待を受け、帰りが遅くなってしまった。この日は、田部井淳子さんのアタック前日、そして翌日登頂。前年に、カトマンズでお茶をごちそうになった女子隊隊長の方は、既に下山したこと。
- 第14日 ゴラクシェプを撤収してペリチエまで。
- 第15日～第17日 ペリチエにて休養。丘の上の越冬観測小屋を訪問。高校山岳部の先輩は既におられなかった。小根田発熱して1日寝込む。この数日、夜中にアマ・ダブラムの上方が時々フラッシュのように光って照らし出されているのを目撃。地元の人聞くと、良く見る、とのこと。稻光かも？だが、音は聞こえない。
- 第18日 ペリチエに滞在して一人で自然保護関係の調査をしている欧米人を手伝うとのことで大野は残り、小根田は百合姉さんと下山。テンポーにて件のドクターから栄養失調だから早く日本に帰れとは言われたものの、急激な動きは無理だが、身体も軽くゆったりペースならば休みなしでも継続して歩き続けることができる。この日は、夕方にエヴェレストビュー

ホテルに寄って島根大の件で対処してくれたドクターを訪ね、夜になってからナムチエ・バザールに下った。

- 第19日 ナムチエからルクラまで。下りは早い。ルクラでは、多くのトレッカーが飛行機待ちで宿に足止め状態のこと。
- 第20日 あきらめていた頃、セスナが一人なら乗れると言つてきたので、小根田のみカトマンズまで帰ることに。荷物を満載しており、ガタガタの下り滑走路のぎりぎりでようやく離陸。カトマンズ着後、常宿のトゥクチエピークレストハウスに行くと、前年の12月以来別行動だった三坂がいて懐かしかった。



## 20 1975・8~10 信州大学上田山岳部遠征隊 ガルワール・ヒマラヤ インド ナンダ・グンティ6309m

○参加メンバー 隊長：杉本恭二 隊員：市川豊、古塚直行

### ○登山概要

8月5日 杉本、午後3時半、デリーに到着する。YMCAに宿をとる。

6日 単身にて、IMFを訪問し、ムシュラム氏と、手続き上の会談をする。

7日 IMF訪問、通関手続きの進行を聞き、その足で、通信省に行く。

8日 休養、インペリアルホテルにて、泳ぎを楽しむ。

9日 日本から帰国したインド人と会い、信州の坂城のリンゴ園の話ををする。

10日 休養。

11日 日大使館訪問し、保証人の依頼。

12日 市川、古塚デリー着。日本大使館へ行き、書類受理。

13日 レッドフォードへ。

14日 税務署に行き、無税通関の書類の作成依頼。

15日 インド独立記念日、ガンジー首相の演説。

16日 税務署、IMF訪問。

17日 マンタン氏宅訪問。

18日 マンタン氏来訪。19日 税務署。

20日 無税通関の許可状を受理。

～23日 ボーンを作成し、関税で荷物を受け取る。

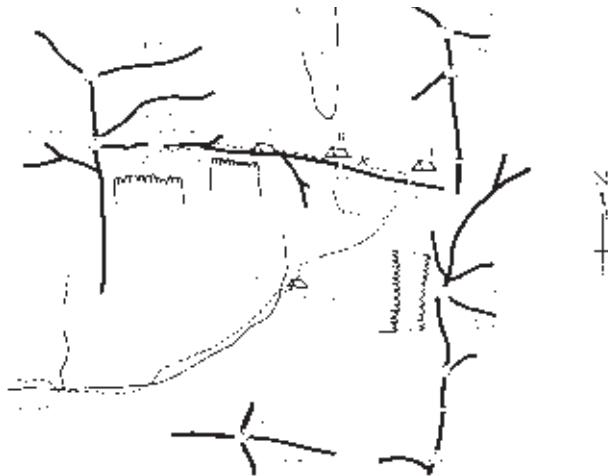
24日 最後の買い物をする。

～28日 連絡将校が決まらず、日々が経過。

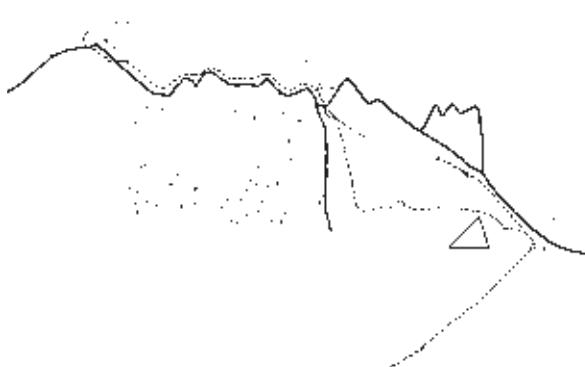
29日 ついに、連絡将校が決まり、会う。

9月1日 出発を前にして、最後の買い物。

### ○ナンダ・グンティ概念図



### ○ナンダ・グンティ東峰登攀ルート図



2日 ついに、デリーを発ちリシケントまで、トラックで走る。

3日 リシケント。

4日 夕暮れ、スリナガルに着く。

5日 ナンダ・プレヤークにてシェルパにあう予定だが、ポーター2名のみ。

6～8日 リエゾンと杉本はシェルパを捜しに行くが、見つからず。

9日 休養。

10日 ポニーに荷物を担がせる。恐ろしいヒルの攻撃にたじたじ。

- 
- 12日 ポーター32名で、キャラバン開始。
- 13日 ストゥールからジャングルに入る。
- 14日 早朝からストライキ、値上げし開始。
- 15日 朝の日課は、ポーターの傷の手当。
- 16日 3300mで高巻できず、川を渡渉。
- 17日 ジャングルを抜け、4250mにBC。
- 18日 杉本、市川、ナイニワールで4900mまで荷物を上げる。大変苦しい。
- 19日 全員でコルにキャンプを設営する。
- 20日 古塚、アッシで荷上げ。
- 21日 5050m(C1)に隊員3名とアッシ、ナイニワールが泊まる。他はBCへ帰る。
- 22日 5名にて、C1よりルート工作するが、困難なためBCへ帰る。
- 23日 大クロアールを発見し、200mのザイルを固定する。
- 24日 5400mに天幕を上げ、全員BCへ。
- 25日 休養。アメリカ人が来訪。
- 26日 ポーター1名が頭痛のため寝込む。
- 27日 キッチンを連れ、3人でC1へ。
- 28日 全員で5400m(C2)へ荷上げ。
- 29日 杉本、古塚、ナイニワールでC2より上部をフィックス。市川C1へ荷物回収。
- 30日 今日も5400mを3人で行動。
- 10月1日 リエゾンとアッシがC2へ。
- 2日 3人とリエゾン、アッシ、ナイニワールの6人で5700m(C3)へ向かうが、リエゾンがスリップしたため、日本隊員3名が泊まり、他はC2へ下る。
- 3日 第1回目のアタック。雪が不安定のため、敗退する。全員C2へ下る。C2にはナイニワールとマンバドールの2人だけで、残りはベースに下りた。夕方にはナイニワールも帰って行った。
- 4日 休養。
- 5日 杉本、市川、古塚はマンバドールに見送られC3に向かう。杉本、市川が上部フィックスをするがクレバスに阻まれる。

〈ナンダ・グンティ(6309m)〉



- 6日 市川、古塚の2名をアタック隊として選び、スノーループの突破から頂上を攻撃させ、杉本は5700mのC3にて待つ。6100mの東峰に登頂し、本峰は断念し、4時間後、C3帰天。そして、3名は一気にC2下る。
- 7日 杉本、市川はC2よりC3へ向かい天幕を撤収し、その足で、C2も撤収しベースへ降りる。タバコが実にうまかった。
- 8日 ナイニワール、マンループが下山。
- 9日 リエゾンとマンバドールが下山。
- 11日 休養。
- 12日 帰りのキャラバンを開始する。
- 13日 紅葉が美しく、ジャングルも枯葉となり歩き易かった。
- 14日 ストゥールに到着し、ポーターの家に泊まる。
- 15日 ガートに到着し、村人から歓迎。
- 16日 数ヶ月ぶりの風呂に入る。
- 17日 ドッドプレヤーグ泊。
- 18日 デリー到着。
- 19日 休養。
- 20日 日本大使館、IMFへ。
- 21日 チャクラパティ氏訪問。
- 22~28日 リエゾン、隊員、市内見学等。
- 29~31日 デリーからバンコック、日本へ。

## 21 1975・7~8 日本・インド合同カシミール遠征隊（日本ヒマラヤ協会） インド・ヌン7135m

○参加メンバー 隊長：西郡光昭  
山田正弘、清水正雄、鈴木康志

登攀隊長：山森欣一 隊員：田中重義、保坂昭憲、  
インド隊員：Aslan Laigroo

### ○登山概要

7月22日 スリナガールで梱包作業。  
西郡隊長と別れの宴を張った。

23日 山田、清水の2名はシェルパ4名と共に先発。残りはインド側観光局のジープで出発。本隊はソナマルグ着、山岳兵学校の宿舎に泊まる。輸送隊はゾジ・ラを越えて真夜中にカルギリに到着。

24日 18世紀のイッポリト・デシデリ、19世紀のヤングハズバンドやブルース、20世紀のヘディン等探検家が万感の思いを込めて越えたであろうゾジ・ラ。高度計を見ると3370mであった。4時間強でカルギルに到着。

25日 田中、保坂、山田、清水の4名とシェルパは隊荷トラックでパニカルへ移動。

26日 残ったメンバーが出発。田中はミンマと保坂はカルマを連れてインド隊のB・Cを偵察に行く。

27~29日 約束のポーター70人とは程遠い18人、出発したのは午後の4時。タンゴールに入ったのは田中チームのみで他は途中でビバーク。翌日ポニーの予定が集まらず。トラック2往復でタンゴールの丘に隊荷が集積した。

30日 42人のポーターが出発したのは9時が過ぎていた。センティング4100mで氷河の末端、インド隊がヌンを攻めた時のB・Cである。

### ・登山活動

7月31日 保坂とミンマでC1予定に偵察。

＜スノー・プラトーから見たヌン西面＞



### ○ヌン・カン山群概念図



8月1日 インド隊のABCであった4840m地点をC1とし、設営する。

2日 A班(山森、山田、アスマム)C1への荷上げ、10時着。その後C2ヘルート工作に出る。雪壁の中央部を登り、B・Cに4時帰天。B班は食料の整理。

3日 昨夜は強い雨、B・Cも水浸しとなる。今日はB班(田中、山田、清水)がルート工作、A班は荷上げ。最大傾斜部分を越え、6時にB・Cに戻る。

4日 A班とシェルパのミンマ、カルマがC1へ。ポーターによりC1の荷上げ終了。

5日 4ピッチ登り、後はコンテニアスで雪原を進み5280mにC2を設営する。この日山森、カルマはC2に荷上げ、田中、山田がC1入り、清水はC1入り出来ず。

6日 鈴木下山。アスマム休養。C1の全員でC2への荷上げ。

7日 山森、保坂でC3のルート偵察に向かう。C3予定地まではザイルを固定せずに行けそうだ。帰路は濃霧の中下山。

8日 田中、山田でC3予定地決定のために出るが果たせずC1へ帰天。山森、保坂、ミンマC2入り。

9日 山森はミンマを連れてC3の建設に向かう。1時間で岩尾根の上に出る。北稜寄りに進む。クレバス帯に着くが設営箇所がなく、西壁中央部にトラバース、傾斜をました岩尾根上部に入りそのままつめるセラックの基部に着いた。絶好のキャンプサイトがあり、5780mをC3とする。

10日 保坂、アスマムはミンマを連れてC4のルート工作。C2からの急な雪壁に200mのフィックス岩尾根の上に出ると遙か彼方にナンガパルバットを望む。

11日 山森、田中はミンマを連れてC4へのルート工作ピッチが上がらずC3止まり。荷上げした保坂もC3入り。田中、チョンヅエはC2に帰天。アスマムは休養、山田はC2入り。隊員の疲労の色が見える。

12日 山森、保坂でC4へのルート工作へ出る。前回の到達点から160m伸ばす。

13日 昨夜からの降雪のため下山できず。12時頃ルート工作を終えた西壁から雪崩が発生。全員無事だったが停滞とする。

14日 田中、山田、チョンヅエがC3入り。

15日 田中、山田はルートの修復をするが最高到達点1ピッチ手前で疲労が激しく

### ○ヌン：ルート図 (7135m)



帰天。山森、保坂がC2入り。

16日 山田、アスマムは上部のルート工作に出る北陵まで達せず帰天。保坂、清水はC3。田中体調不良でC3で停滞。

17日 保坂、アスマムがルート工作帶。田中、山田、カルマが荷上げ隊。11時北陵に達し、14時6300mのC4に到着する。

18日 C3から田中、保坂、アスマムがC4に進む、保坂、アスマムで上部をルート工作しC4泊。

19日 5時出発、昨日のフィックスまではスムーズと思ったが予想外にラッセルに苦しむ。田中が体調が悪く下山。下部岩壁帶に着く、悪戦苦闘し上部岩壁を越えたが6700mで退却の判断をし、下山した。

#### ・さよならヌン・クン

20日 保坂、アスマム、田中がC2。翌日B・Cに全員下山。

24日 隊荷終結。午後4時カルギル到着。

## 22 1978・4~7 パキスタン バトゥーラIV 7564m (日本ヒマラヤ協会)

○参加メンバー 隊長:西郡光昭 登攀隊長:坂本真佐留、上杉純夫

隊員:新谷暁生、石川裕司、伊東満、大久保真、佐々木光男、白木和志、馬場洋一  
連絡官:M.AKRAM Frinidi大佐

<バトゥーラIV南壁の全容>



○位置 パキスタン バトゥーラ山群

○行動概要

4/14 本隊 日本発イスラマバード(北京経由)

/26 ギルギット～バール

/30 バール発キャラバン開始

5/3 カネタマレにてポーター解雇

/9 BC建設(バルタール氷河4200m)

/22 C1建設(5400m) ここから南稜に  
ルートを求めるも6250mで断念、南西  
壁に転じる。

6/14 C2建設(6100m)

/30 C3建設(6800m)

7/5 C4建設(7300m)

/6 石川、伊東、大久保初登頂

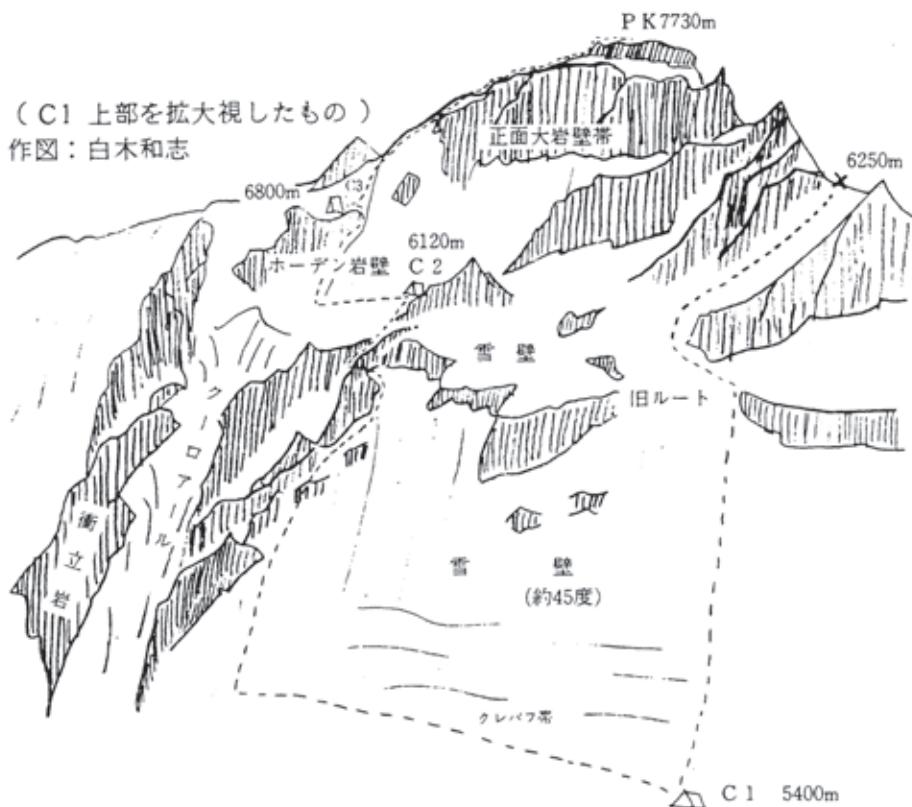
/11 全員BC帰着

/30 帰国

○特記事項

- ①ギルギットまでの輸送に手間取る。  
　　ハッチンダール・チッショ(山嶺登高会)  
　　の亀井隊員に感謝
- ②バールから雇用のポーターのストに遭  
　　い途中で全員解雇。BCまで隊員たちで  
　　歩荷。

## ○バトゥーラIV南西面



- ③アタック当日は視界悪く主稜線を進み、下り一方になる地点をPk.と定めた。(高度計にて7500m)
- ④本ピークは登頂時、バトゥーラIIと呼ばれていたものである。
- ⑤前年夏、偵察として2名を派遣した。

## ○報告書

- 特になし。「HIMALAYA 1980」日本ヒマラヤ協会(昭和56年1月刊)に西郡の登山概要の記載あり。
- 本稿は西郡が上記2遍を借用、要約したもので文責もある。

## 23 1978・2~6 信州大学 ネパール ジュティ・バフラニ6850m遠征

○参加メンバー 隊長：山田和彦 隊員：井関芳郎、三井和夫、吉田秀樹、師田信人

### ○ 登山概要

・カトマンズの準備から  
キャラバン

2月22日 三井、師田カトマンズ着。

26日 山田カトマンズ着。

27日 シエルパ5名と契約。

3月1日 井関、吉田カトマンズ着。

6日 リエゾン決定、登山許可証受領。

9日 山田、三井、吉田、リエゾン、シエルパ3名

でチャーター便でシリガル・ドウティへ。

14日 井関、師田、シエルパも来る。

18日 ポーターが集まらず、師田とシエルパ2名をタララ方面にポーター集めに行く。

19日 サエリで40名、シリガル・ドウティ近郊で10名のポーターが集まる。

21日 サエリへ。

22日 吉田とシエルパでポーターアレンジでタララへ。本隊はタララ手前で泊まる。

23日 タララでポーターをかえる。

24日 山田はリエゾンとチャインプールへ先発し、ポーターアレンジと食料購入。井

関、師田、シエルパ3名はチャインプールに着くが、他は手前の小屋に泊まる。

25日 全員チャインプールに到着。

26日 タルコット手前で泊まる。ポーター支給用食料(米600キロ) 購入。

27日 タルコット先の草原に泊。

28日 アグラ泊。 29日 ダラウン泊。

30日 ラッシー泊。峠の下りは雪道であった。

31日 ドウリ着。

4月1日 ドウリ滞在。

2日 ドウリ発、ニウノ・コーラ出会い手前の樹林帯。

3日 山田隊長本日も体調が悪く、テントに

### ○キャラバンルート概念図



### ○ジュティ・バフラニ周辺概念図



クリシュナと共に残る。本隊はニウノ・コーラ出会いにテント。

4日 朝、雪はやんだ。吉田、師田が先行する。祠(ほこら) 手前で斜面を整地しテントを張る。

5日 今日もまたポーターとの闘争の一日が始まる。ルートは山腹の高巻ナヨダール。全員そろった。

6日 吉田、師田が先発する。サリモア・コーラをつめる。意外に早く着いた。本隊は、出発前に食料を支給しろとのストライキ。山田隊長の一括で動き出す。ウライ峠分岐先の河原にテント。

7日 本日もなかなかポーターが出発しない。仕方なく米を支給する。雪に覆われた段丘上をBC(3800m) とする。19日目、予定より2週間遅れた。

### ・頂を目指して BCからC1(4510m)

4月8日 BCでの朝はボバイの朝焼けで始まる。サーダーが登山の安全を祈ってお経をあげてくれる。いよいよ我々だけの登山が始まる。吉田、師田が東稜の偵察に行く。4900mから先は起伏の多いナイフリッジで難しそうだ。

9日 山田、三井がサリモア・コーラ沿いに内院4320mまで入り、北方稜線へ出て北

---

からアタックすることに決定。

10日 今日から荷上げ、若い3人は25キロを背負う。最後の急登を越え4510mのモレーン上にC1とする。

11日 今日も荷上げ、終日晴れで5月の北アの様だ。

12日 全員C1入りの日。荷上げするものは少ないので3時間で着き、「ジュティ・バフラニ合宿」に全員うなづく。

・C1からC2(5500m)

13日 C1を出発し、緩やかなモレーン帯進み氷河の末端部に着く。サイドモレーンを急登し、ジュティ・バフラニからボバイへ続く稜線から北東へ派生している尾根を辿る予定だ。日が高くなると今迄締まっていた雪が緩み膝までもぐる。三井、吉田、師田の3人がラッセルを交代しながら進む。聞こえるものは、雪を蹴る音、喘ぐ息、耳をよぎる風の音のみだ。5200mのやや平らな台地に出る。稜線手前の急斜面を登る。ナイフリッジとなった稜線いで、やや広くなった尾根上の台地をC2(5500m)と決める。荷物をデポし、標高差1000mの雪の大斜面を豪快なシリセードで下る。5時間30分かかった登りも、1時間30分でC1に戻った。ルートは安定した雪で、氷もなく、フィックスも必要なく、安全なルートであった。

・C2からC3(6150m)

14日 快晴のした、全員でC2へ向う。吉田、師田はC2へ泊るので個人装備をあげる。昨日のステップが残っているので楽だ。そろそろ高度の影響が出てきた。

15日 吉田、師田はフィックス工作のためにC2を出発する。天気が完全に崩れてきた。5650mに達したところで行動打ち切り、C2へ戻る。

16日 やはり甘くなかった。6000m付近でフィックスロープを使い果たし、肩に出ることもできなかった。山田、三井さんがC2まで登って協議し、C1に下ることにした。C1では沈殿していた井関さんが豪華夕食

を作ってくれた。

17日 再び、全員がC2入り。ホワイトアウトとブリザートがすさまじく午後は何もできなかった。

18日 明け方師田達のテントのポールが折れ、散々な目にあい、何とか応急修理をする。沈殿。思い出し笑いをしたら死にそうに苦しくなった。

19日 天気は良くなかったが、三井、吉田、師田の3人でフィックス工作に出る。

手強そうな小壁に6100mまでルートを延ばし、肩への目途をつけた。

20日 三井が風邪と熱でダウン。山田、吉田、師田6150m地点にC3建設。個人装備を持っていない山田隊長を間にはさみ寝る。

21日 3人で頂上アタックに出発する。6250m地点まで雪庇の発達した稜線を辿るが、そこから先、いったんコルに下った後の頂上への稜線は尖鋭であり、フィックスを張らないと下降時に事故を起こすと判断し、いったん全員でBCに戻ることとした。

22日、BCで休養。

・ジュティ・バフラニの頂へ

23日 BCから三井、吉田、師田でC1入り、山田途中までサポートする。

24日 雪で沈殿。

25日 猛吹雪の中C2に入る。

26日 夜明けとともに天気がおかしくなり、C3に着いた時は完全なブリザード。

27日 寒く、息苦しく零時半起きてラーメンを作る。3時半起床、約7キロの荷物を背負い、快晴無風の絶好のアタック日和。ヘッドランプをつけラッセルを交代しながら進む。6150mの肩に出ると、東の空が紅く染まっている。4ピッチフィックスし、アイゼンが良くきく。C1が点のように見える。雪壁に150mスノーバーで固定。傾斜が緩くなり、3人並列して進むと14時20分小さなふくらみに立つ、登頂だ。40分下降開始し、一気にC3まで下る。

5月6日 BCを後にする。22日カトマンズ。

## 24 1978・6 信州大学 ガネッシュ・ヒマール偵察

○参加メンバー 隊長：三井和夫 隊員：吉田秀樹、師田信人

### ○登山概要

ガネッシュ・ヒマールは1978年2月、新規に登山許可となった山域である。信州大学山岳会との関係は深い。未踏の4峰パビールの登攀を念頭に、1967年の小川・米倉隊による南面からの試登・偵察、1973年渡部・高橋隊による東面からの偵察を行い大きな成果を得て来た。

今回、これまで空白となっている西面をヤラ・コーラを源頭に辿り行うべく偵察山行を予定した。

三井・吉田・師田の3名はナンパ南峰登攀後のカトマンズでの約3週間の休養後、モンスーンの始まったばかりのガネッシュ偵察に向かった。経路はカトマンズよりトリスリに行き、トリスリよりトリスリ川沿いに北上、チリメ・コーラに入る。チリメ・コーラ最初の谷より西進し、渡部・高橋隊のトレースを辿りYang Tso湖経由パルドール北方のコルに達した。続いて小川・米倉隊のトレースに準じてそのまま西進しアンクー・コーラを渡りガネッシュクンドに達し、南面からのパビール、2峰ラプサンカルボの偵察を行った。その後西に向かう支尾根を下降しブリ・ガンダキに達し、ブリ・ガンダキ沿いに北上し、ヤラ・コーラ出会いよりヤラ・コーラ源頭目指し遡行・東進しヤラ・コーラ内院に到達した。源頭より西面氷河の状態を偵察し、稜線まで到達可能との結論を出し下山。ブリ・ガンダキ沿いに南下し、カエレニよりカトマンズに戻った。全山行を通して、モンスーン中の行動となり、四六時中ヒルの襲撃に悩まされての偵察山行であった。

### ○行動概要

6月2日 カトマンズ発、バスでトリスリへ  
3日 キャラバン開始  
12日 ガネッシュクンド着。ガネッシュ・ヒマール南面偵察。  
17日 ブリ・ガンダキ目指しガネッシュクンドを離れる。  
22日 ヤラ・コーラ内院に到達。  
23日 パビール西面偵察。  
24日 ヤラ・コーラ内院より撤収。  
7月1日 カイレニよりカトマンズへ帰着

思い返せば、今回のヤラ・コーラ内院からのルートが信大ルートとしてその後3回にわたるガネッシュ遠征隊のアプローチとして用いられたことは、苦労して偵察した甲斐があったということになる。一方で、偵察したヤラ・コーラ源頭の氷河は安全な登高路として機能したものの、稜線上のナイフリッジに阻まれついに登頂がならなかつたことは、残念極まりない。しかし、「信大の山」として、ガネッシュはその南面・西面における地図上の空白を埋めたことに一番の意義が残ると思う。



<キャラバン・ポーター>

## 25 1978・8~11 信州大学 ネパール ニルギリ南峰6839m遠征隊

○参加メンバー 隊長：三井和夫 副隊長：藤松太一  
隊員：吉田秀樹、師田信人、田中誠司、加藤喜章

### ○登山概要

#### ・カトマンズ

8月25日 藤松、田中、加藤カトマンズ着。三井、吉田と合流する。29日 隊荷通関、シェルパとの契約終了。30日 買い出し。  
9月1日 藤松、サーダー、ポーターアレンジでポカラ先発。3日 全員ポカラへ。リエゾンがドクターが来ていないことを心配している。キャラバン出発を5日とする。

#### ・キャラバン

メイン街道だけあり、春の西ネパールと比べれば雲泥の差だ。歌に、踊りに、酒にとネパールの風物を満喫した。

5日 ポカラ→ヤンザ。59名のポーター。ちょっと茶屋でも休もうかと思っていたらそこがヤンザの村だった。6日→カーレ。田園が広がり素晴らしい所、ノーダラの登りから、噂のヒルが出現してきた。ヒルアレルギーになってしまふ。7日→ティルケドンガ。完全防備でヒルに対処した1日。8日→ゴラパニ。ギラギラとした太陽の下。夜は飲んで、歌って楽しいひと時を過ごす。9日→タトパニ。ゴラパニ峠からはひたすら下り、タトパニでは汚くドブみたいな温泉に執念で入る。10日→ガサ。ダナを過ぎ、折からの雨の中ひたすら歩く。11日→チョーヤ。レテへ渡る大きな吊り橋の先にある。12日→トロブキン西尾根3300m。藤松、田中、加藤とシェルパ2名が先発。橋を造り、急登すること4時間。13日→トロブキンのコル4300m。田中、加藤が先発。曇りのち雨、コルにカルカがあった。

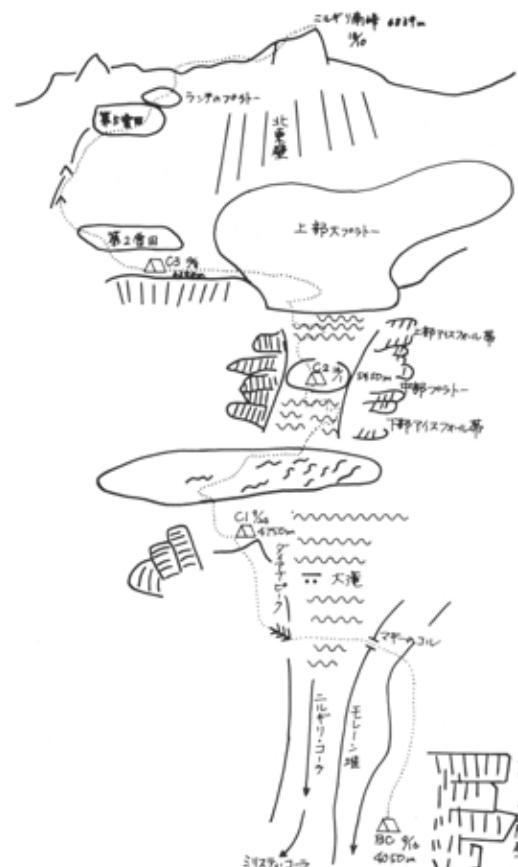
14日→ミリスティ・コーラ。夜中風雨が激しい。吉田、加藤、キッチンが先発。ひたすら急斜面を下る。1/3のポーターが途中の岩小屋で一夜を明かすことになった。

15日 藤松、吉田、コックが先発するが、ポータートラブルで会計の藤松が急きょ戻り賃金を支払う。16日 三井BC決定のた

### ○ニルギリ・ヒマール周辺概念図



### ○ニルギリ南峰登頂ルート概略図



め先発し、ティリツオ大障壁下4050mに決定。残った屈強なポーター10名で荷上げ。17日 休養日。アンナプルナI峰アメリカ女性隊の訪問を受ける。

#### ・ニルギリ南峰の頂を目指して

##### 〈BCからC1 (4750m) へ〉

18日 三井、藤松でルート偵察、氷河舌端部にフィックスロープを張る。他は荷物の整理。19日 夜半からの雪で隊員用テントが潰れる。BCの整備を徹底する。

20日 4400mまで荷上げする。夜遅くに笛の音、師田参上。これで全員が揃った。

21日 師田を除き全員荷上げ、昨日より重いが皆元気に登る。22日 吉田足爪の治療でBCへ、他は荷上げ。23日 全員静養を兼ね沈殿。

24日 師田、田中、加藤で荷上げ、他は個人装備でC1に入り、順応と偵察を兼ねる。

##### 〈C1からC2 (5450m) 〉

25日 三井、藤松、吉田でアイスフォール帶のルート工作を開始する。クレバス、セラックに阻まれなかなかルートが延びていかない。5000mまで荷上げをする。

26日 三井、師田、加藤で前日のルートを更に左斜上するがクレバスに阻まれる。

27日 三井、師田と藤松、吉田の2パーティに分かれルート偵察。28日 天気も良くななく休養を兼ね沈殿。29日 藤松、吉田、師田でフィックスロープを5350mまで張る。

10月1日 三井5000mで引き返す。他はC2予定地まで荷上げし、C2に泊る。田中、加藤はC1へ下る。

##### 〈C2からC3 (6250m) 〉

2日 藤松、吉田、師田で上部アイスフォール帶へのルート工作。右岸側を登ると深いクレバスに遮られ、その先は巨大なセラックと氷壁。5750mまでフィックスを張る。またまた甘い期待は裏切られた。他の3人はC2まで荷上げ。3日 吉田、師田でルート工作。深いクレバスは偶然にも崩壊したセラックのブロックにより通過、いつ崩れてもおかしくないセラックをヒヤヒヤもので登る。師田大活躍、遅れた分を挽回す

る。藤松休養、他の3人はC2入り。

4日 全員休養。

5日 三井、師田、吉田でルート工作。一部ルートを変更し、5900mまでフィックスを整備する。最後の急な氷雪壁を登るとアイスフォール帶がようやく終了。他の3人はデポ回収。6日 三井、師田で上部プラトーまでの偵察とルート整備。藤松、田中、加藤は最後の雪氷壁下まで荷上げ。吉田はC2へ戻り休養。7日 全員で荷上げ。東稜に続く緩い傾斜地にデポする。8日 全員でC3入り。前日のデポがブロック雪崩で荷物が四散し、必死で掘りだす。一部フィックスやバイル、食料は見つからなかった。9日 三井、藤松、吉田、師田はルート工作。吉田がトップで三井がロープを固定する。雪壁と顕著なレンゼを苦労して登り、トラバースし、不安定な雪壁を登り6450mの地点でロープを使い果たし、下降途中藤松、師田がレンゼルートを変更し、C3へ戻る。田中、加藤はデポを回収し、C3でルート工作隊を眺めていた。

##### 〈10月10日 快晴 無風 登頂〉

星がきらめく2時15分起床、隣のテントの師田、田中、加藤が朝食の準備を始める。好評のきつねうどんは汁までれいに食べる。4時20分、ヘッドライトの灯をたよりに昨日のフィックスロープを辿る。6人で交互にラッセル。アンナプルナI峰の左から太陽が、印象的な瞬間だ。トラバース、雪壁を確実に乗り越え、昼食をとり、もう直ぐと確信しながら登りが続く。東南峰が下に見える。しかし、太陽は西に傾き、いまだに頂上には辿りつかない。頂上雪壁と思われるカンテラインを三井が登る。藤松がラスト。他の5人が待っていて一列となり、午後2時15分全員初登頂。正面にダウラI、今度は背後にアンナIの8000mの巨砲が位置している。15時下山開始。真っ暗となり19時C3に着いた。

18日 BCから帰りのキャラバン開始。

26日 キャラバン最終日。カトマンズ着。

## 27 1978・11 ネパール ランタン谷トレッキング

○参加メンバー 田中誠司、加藤喜章、吉田秀樹

### ○登山概要

10月にニルギリサウス登山を終えた田中、加藤はトゥクチエピークレストハウスで同宿の吉田と3名でガイド兼ポーター2名(カンチャマンラマ、ラルマン)を雇い、ランタン谷のトレッキング・落葉松調査を行った。

#### ・カトマンズからランタン谷へ

11月6日→トリスリ 7日→ラムチエ  
8日→ドンチエ 9日→シャブルベンシ  
10日→ラムホテル 11日→ランタン  
12~14日→ギャンジン・ゴンパー→ランシサ  
周辺、リルン氷河BC 15日→ラムホテル  
16日→シャブルベンシ 17日→ドンチエ  
18日→ペトラワティ 19日→カトマンズ  
6日 カトマンズで食料の買い出しを終え、予約したバスは客を満載し午後1時に出る。カカニの先まで2時間、トリスリまで5時間45分。バス代は9ルピー。夜道を下りトリスリの街に着く。水力発電の恩恵で電灯は明るい。標高が低いせいでカトマンズより暖かい。

7日 トリスリからペトラワティまで2時間ほど。早めの昼食はタルカリとダヒ、チューラ。橋を渡るとチェックポスト、石段を登り切ると畑の中を縫うように進む。ラムチエまで4時間。今宵の宿は戸は開け放しで、ベッドは板のみ。1泊2ルピー。

8日 朝靄はたいしたことなく広い谷はすっかり晴れた。8時15分出発。山腹をほぼ、水平にだらだらと行く。シャクナゲが出てくる。牛の放牧も少なくなる。ランタンが見えた。山容は大きく立派、リルンは右に長い稜線をなびかせている。ガレ場を過ぎるとタレの部落。昼食をとる。ニワトリ1羽を38ルピーで入手。相変わらず山腹を縫うように進む。一休みするとウトウトと寝てしまう。ドンチエの手前で白い毛の混じる猿を見た。放牧のためか木が少なくなった道を進むとチョルテンと門が迎える。チェックポストを過ぎると清潔な家並みの道でチキンの調理ができるロッジを

探す。ゴザインクンドロッジ泊。

9日 9時過ぎに出る。アグリカルチュアファームの上を巻くように進み、急坂となってトリスリ・コーラの吊り橋を渡る。急登で松が多く出てくると峠になる。再び山腹を巻く道が続く。1時間ほどで次の部落に着く。汚い茶屋でまずい昼食をとった後トレッカーの話を参考にシャブルへの道を選ぶ、マツが多い登り気味の巻道を2時間ほど進むと峠でランタン・コーラが見えた。思っていたより狭くて急なU字谷だ。シャブル村の小麦畑が遠くに広がっている。ランタン谷の北側斜面を進むとツガの木が出てきた。牛を時々見かけ、羊の放牧をしているよう。チョルテンに迎えられシャブルに着く、ランタン・ヒマールホテル泊。今までのなか一番きれいな宿。ヤクの肉、フライドライス、パンケーキもある。ロキシーは小瓶で12ルピー。飲みやすくうまい。

10日 チベッタンブレッドを食べ9時過ぎに出発。畑の中を下り谷を渡る。シャクナゲ・マツの林が続き、さらに下るとササの多いシイやカシの林になる。ヤクと途中で出くわす。とても臆病で逃げる奴もいる。日本人2人に会う。ずいぶん日焼けをしていた。後で、大阪市大のパーティだとカンチャマンから聞く。河原に降りて対岸を登る。シャクナゲが出てきた。その後、カルカが一つ現れ草原になる。河が広がっているところの粗末な小屋、ホテルイブニングビューに着く。しばらくするとトレッカーが大勢やってきた。米国の年寄り連中はテント泊まりになる。ロキシーは昨夜と同じだが大瓶で35ルピー。

11日 モレーン最下端まで1時間かかる。対岸にデブリの後がある。ゴラタベラの手前で牧草地化して、河原は広くなりU字谷の様相になる。チェックポストで昼頃。ヤクがのんびり草をはんでいる。サルがその周囲で木の実を食べている。3200m地点でカ

ラマツ調査。雲が上がって来て風も吹いて寒くなる。カラマツ調査をする10m四方にはカラマツとツツジの灌木だけでシャクナゲはない。ランタン村へは1時間。家々の屋根には飾りが施されている。霧ですっかり覆われてしまい景色は見えず、とても寒い。部屋では、夜中にネズミが駆け回る。

12日 フライドヌードルとポテトを食べ9時に出る。タンセプ村の入り口でカラマツ調査。マニ石はランタン村を出てから道中とても多い。しばらく行くとガンチェンポ?のピークが見えた。ヒマラヤ襞が美しくリッジも鋭い。河原からモレーン堆積台地を上ると広く視界が開ける。ギャンジンの手前でランタン氷河から流れる出る河を渡り坂を上ると3800m。ギャンジンへはすぐ。手はかじかみとても寒い。ロッジに入ってお茶を飲む。ドイツのトレッカーが多い。外は雪がちらつき、昨夜の雪は日陰に残っている。チーズがあるというので買ひに行く、1kgで32ルピー。馬もいる。夕食はライスとカリー。ククリラムは瓶で35ルピー。食後、タマンの歌を教えてもらう。

13日 早出のつもりが朝食が遅く8時になる。雲がかかり全く景色は良くない。河原へ下り、飛行場の滑走路を過ぎるとカルカが現れる。予定していたヤラ・ピークでなくランシサへ向かって進む。対岸の北向斜面は雲が多い。ガンジャラの峠はあれだと教えてくれる。ここからの高度差はそれほどない。下の方はカンバの木が多い。少しずつ雲が切れ、ガンチェンポ、ランシサ・リの下部が表れる。ヤクを追いかけたり写真を撮ったりしているうちに晴れてきたので先へ急ぐ。前方にシャルバチュム氷河が運んだモレーン堤が見え、ランシサ・リのピークも見え始める。天気はあまりいいとは言えないがランシサ・カルカまで行こうとする。モレーン堤を回り込むと前方が開けた。カルカへは道が下っているため、ここで終わりにし、ランタン谷の絶景を待つ。長い辛抱の末、やっと雲が切れ、美しいガンチェンポ、ドーンとした重量感のランシ

サ・リが現れる。その奥にはヒマラヤ襞を屏風のように広げる峰々が連なる。ランタン・リレンは帰りに見ることができるのでと期待する。ギャンジンの部落はとても静かで寒々としている。ロッジに着き破れた地下足袋を脱ぐ。明日からはつらくなりそう。今日、ランシサまでは4時間半、帰りは3時間。

14日 朝7時快晴でランタン・リレンも見え感激する。ゴンパまで行って記念撮影。加藤、吉田、ラルマンはリレン氷河のBCまで。田中、カンチャマンは終日カラマツ調査。その後、日本の女性がランタン村に住んでいると聞いて訪問する。彼女は若くてネパール・チベット語が堪能。ランタンの歴史など12月まで調査すること。お茶にチーズ入りのヌードルをよばれる。宿ではドイツの地質学者の紳士と談笑する。外はいつもの様に霧、満月の夜なのに残念。

15日 8時半頃出発。ヤクとゾンの放牧で使う笛が聞こえる。ゴラタベラ周辺でカラマツ調査。単木調査が多く、今日で調査は終わり。曇りで雨が降りそうな帰路をラムホテルへ急ぐ。

16日 ホテル→シャルバガオン→シャブルベンシ トリスリ川とランタン・コーラの合流点、シャブルベンシでチベッタンのホテルに泊まる。今までのうちで部屋は一番良い。温泉があつたので洗濯し、体を洗う。サルを4、5匹見る。1515mのここは暑い。

17日 ホテル→バルクー→ドンチェ  
マルファ出身のタカリーのホテルに泊る。カナはおいしい。

18日 ホテル→ターレ→ラムチェ→マニガオン→ペトラワティ  
チェック・ポストを過ぎ、次の部落でランタン・リレンとチベットの山がよく見える。ラムを過ぎて下りマニガオンまでくると暑くなる。ペトラワティまで1時間半。

19日 ホテル→トリスリ(バス) →カトマンズ  
トリスリ発午後1時のバスで帰る。

## 28 1980・2~5 信州大学 ネパールヒマラヤ ガネッシュⅢ峰7132m遠征隊

○参加メンバー 隊長：新井陽一郎 副隊長：渡部光則  
隊員：中田茂、藤元治朗、福島涉、二俣勇司、山本章、下田章

### ○登山概要

#### ・カトマンズ 2月28日～3月14日

2月28日に5名、3月2日に2名がカトマンズ入りし、先発で入っていた下田と合わせて全員が揃う。トウクチエピーコロッジに泊まる。食料・装備の点検、シェルパとの打ち合わせ、パーティ、役所回り等準備に追われる。突然輸入禁止令で隊荷がバンコックにストップ。また、ガソリンが入手できない等トラブルがあったが、リエゾン・ネパールスタッフが決まり、15日カトマンズを出発することができた。

#### ・キャラバン 3月15～28日

15日 山本が先発隊として、アン・テンバと共にトリスリに出発。本隊は下田を残し出発。シェルパは荷物とトラックで午後3時、下田も19時到着。

16日 ポーター110人を雇い、サンムリバンシャンへ。

17日 サンムリから一度尾根を降り尾根道を歩き、カトンジェ・バザール泊。

18日 下り一方で半日行程、ハンセン・バザール泊。

19日 今日も台地の上を歩いて半日行程。実に暑い1日である。今回のキャラバン中一のバザールがあるアルグハット・バザール泊。

20日 アルケットとラブベンシーの中間地点。

21日 ラブベンシー泊。

22日 沢山バッティがあり美味しいロキシーを飲む。タトパニ泊。

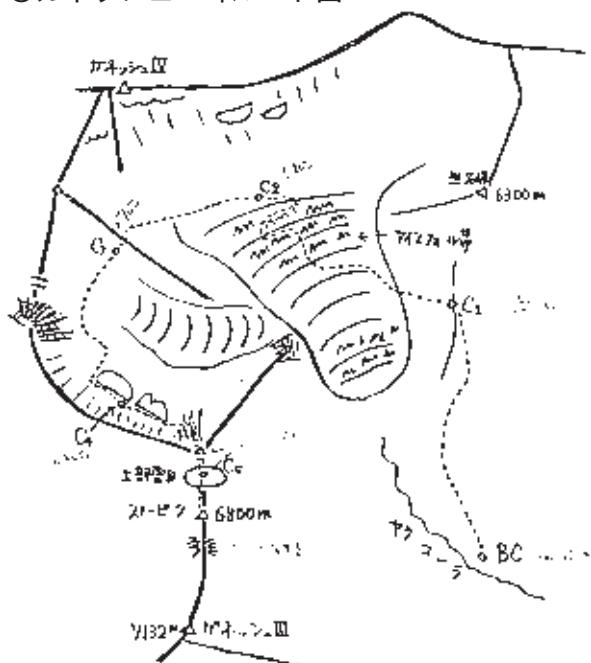
23日 ヤラ・コーラ泊。

24日 尾根に取りつきカルカ泊。

### ○ネパール・ヒマラヤ概念図



### ○ガネッシュⅢ峰ルート図



25日 尾根を1000m登り、ヤラ・コーラ本流に下る。

26日 雪が降り出し、ポーターが帰ると言ひ出す。3800m地点のカルカ泊。チベットのポーターでBCまでダブルボッカ。

27日 雪が降り出したということで賃上げ、最後の日なので要求を呑み24から30ルピーに。

28日 BC4050m建設。

---

・登攀第1期 4月1～15日

「登山開始～C3までのルート工作」

C1 : 4700m C2 : 5200m C3 : 5700m

C4 : 6200m C5 : 6600m

隊員11名をA(新井、下田、ブーリー)

B(渡部、藤元、福島、テンバ) C(中田、二俣、山本、ペマ) の3チームに分け、ルート工作と荷上げ隊のローテーションを組む。BCからC1までは距離があるため、中間にデポ地点を設ける。C1までの荷上げには、元気なチベット人を7名使う。ヤラ・コーラの奥の氷河の状態は、三井の話や名古屋山岳会からの写真で、III峰の壁の下から直登できると予想していたが、雪崩や落石が激しく、IV峰側を大きく巻くルートを取らざるを得なくなる。III峰に取り付くまでに3つのキャンプが必要となり、キャンプが1つ多い変更となる。BCからのルートは、左岸のモレーンを乗り越し、残雪のアブレーションバレーをつめて、C1をIV峰に続く無名峰から派生している尾根上に設けた。

4月4日 C1入り。そこからアイスフォール帶を左上し、IV峰の壁の下に広がる雪原にC2を建設。簡単に思えたアイスフォール帶のルート工作も、出口にクレバスが多く、6日を要した。

11日 C2入り。C3はIV峰側のピナクルから出ている尾根上に予定した。この尾根の岩と氷の壁を登るため約500mのフィックスロープが必要であった。C3のルートがほぼ完成したところで、各チームともBCに下り、1日の休養をとる。手紙を書いたり、格さんのケルンを作ったりした。全員顔は火ぶくれ状態で、ゴーグルの後だけが白い。全員元気。1日以来、毎日午前中は快晴、西にヒマール・チュリ、ピーク29、マナスルが浮かぶ。午後はガスがかかり、3時頃から決まって降雪。時には激しい雷を伴う。時々起こる雪崩の轟音にテントから飛び出す。

・登攀第2期 4月16日～5月11日

「C3から撤収まで」

いよいよ上部氷河を突破するとき。チームをルート工作隊と荷上隊に編成しなおす。

18日 C3入り。C3からIII峰とIV峰のコルの直下をトラバースし、III峰に初めて取り付く。壁を稜線に沿って左にトラバースし、ハンギンググレイシャーの上に出るルート探る。右横の氷のクロアール直上しなければならない。40～60度の壁である。山本、二俣がトラバースルートを作り、福島、藤元、下田、テンバ、ブーリーがルートを開拓する。カチカチの氷に1000mのフィックスロープを張る。アイゼンがよく効き、ユマールが役立つ。傾斜も緩み楽になるが、呼吸が苦しい。28日 C4入り。昼から降雪。メスナーテントが雪崩で潰される。隊員は夕食でもう一つのテントにいて無事。直ちにテントを移動。荷上げ隊もC4からチリ雪崩に胸まで埋まりながら帰る。C4からはルートが思うように延びない。一日かかり30～50mのかせぎである。

30日 ペマが物の怪が付いたと言って、BCに下りてしまう。

5月5日 ついに壁を抜け稜線に達する。乗越した場所は6600mのコル。「野球ができる位の広さ」との報告が入る。

6日 C5上部雪原に設営。福島、山本、二俣、ブーリーの4名が入る。中田、藤元、下田はC4でサポート体制に入る。頂上稜線は岩と氷のナイフリッジ、所要日数は6日かかると判断した。登山日数が予定を越えている、ロープ・ピトンの不足、隊員の疲労を考え頂上アタックを断念する。C5から2時間の距離にあるピークに切り替え(6800m)、翌日撤収と決定した。

9日 全員BCに帰着。早くもIII峰は雲に包まれ、モンスーンの前触れ。

11日 雪の降る中、BCを撤収し5月19日カトマンズに戻った。

## 29 1980・6~9 ネパール ダウラギリ山群の高山蝶と高山植物の調査

○参加メンバー 堀勝彦、二俣勇司、現地ガイド1名、ポーター3名

### ○調査概要

6月8日 日本発。

9~15日 カトマンズ在、準備。

16日 ジョモソンへのフライト。

25~30日 トロン峠。4050mキャンプ。

7月1日 峠越えでジャンゲン・コーラ源頭にキャンプ。

2日 マナン。

4~8日 4050mキャンプで再び調査の後、カリ・ガンダキ渓谷に下る。ドルポ地方への偵察の為、21日 ドルポへ向けて出発。バレブのハイキャンプでこっそり昆虫の採集と植物の調査をした。傾斜がきつい所で、大変につかれた。

27日 サングダ部落に到着し、3日間滞在してドルポへの道について聞き込みをした。

31日 ジョモソン帰着。

8月1~3日 トクチエ在。

4~16日 トクチエ部落から、部落の背後の断崖を登ってヤク・カルカに出て、ここで最後の調査をする。

17~24日 カリ・ガンダキ渓谷～モディ渓谷を経てボカラ帰着。

堀勝彦は日本の高山帯に生息する高山蝶の生態などの研究をしているので、ヒマラヤの高山蝶と日本の高山蝶の比較研究を思い立った。尚ヒマラヤの高山植物にも興味を引かれたので信大山岳会の二俣勇司君がネパール滞在中と聞き、ネパールでの小さな旅に誘ってヒマラヤに出かけた。アンナプルナ山群での、2ヶ月程をマルシャンディ渓谷とカリ・ガンダキ渓谷の間にあるトロン・パスとカリ・ガンダキ渓谷から、ドルポ地方へ。かつてヒマラヤを横断し

てチベットに入国し、チベット仏教の研究および經典を日本にもたらした川口慧海のネパールからチベットへ潜入した経路が、ドルポ経由であるとの確信をしていましたので、それを確かめたくて、外国人の入国は難しいといわれるドルポのツアルカ村へのルートを調査しようと思って、同行を促したのである。1971年の信大のアンナプルナII峰の遠征の時には、マルシャンディ渓谷のマナン部落まで来ていたので、カリ・ガンダキ渓谷に抜けるトロン・パスを越えてみたかったので、この地を選択した。

カトマンズからジョモソンへは、ツインオッターで、ヒマラヤの連山を見ながら快適であった。ジョモソンからトクチエまで下りながらガイドとポーターを探したが、なかなか見つからず参った。最後はインドラマン・セルチャンの紹介が功をそそうして3名のポーターを見つけた。カリ・ガンダキ渓谷はアンナプルナ山群とダウラギリ山群を分ける生物の区分帶なので、注意して蝶の採集のために、カリ・ガンダキ側の4050mのパンガキャンプを置いて、ここから採集を始めた。高山植物は瓦礫の多い所で植物が乏しくカトウカン側のガレ場に出てみると、花も何もないのに、パルナシウス属のエパップスとアクデステスの2種類が多数採集できた。エパップスの方が高度的には上部に生息することが分かった。パンガからトロン・パスを越えてジャンゲン・コーラの源頭のトクトンでテントを張る。川原にはマメ科の草が群生していて、コリアス・ストリックカーナがたくさん飛んでいた。この場所でパルナシウス属のアクデステスの産卵を観察したので植層が判

明したし、特異な産卵行動も記録できた。産卵は拳大の岩の上に産み付ける。太陽熱で岩の方が温度が暖まりやすいためと推測した。この後、カリ・ガンダキを渡つて、ドルポからサングダ村に着いた。この辺りは山賊が出るらしく、旅行者は要注意とのことである。私はサングダ村の情報を集めたりした後、村の上方で住民に見られない場所にテントを張って撮影と採集をした。チベットに分布しているが、ヒマラヤの南側にはないとされていた高山蝶を数種類記録した。この後いったんトウク

#### ○ダウラギリ周辺調査ルート図



### 30 1981・5~8 ネパール ダウラギリ山群の高山蝶と高山植物の調査

○参加メンバー 堀勝彦、松本剛一、現地ガイド1名、ポーター3名

#### ○調査概要

5月8日 日本発。9日 カトマンズへポカラ。  
11~19日 ポカラへトウクチエ。  
24日 ダンガルジュン。26日~6月6日  
バレブー。12~26日 パンガ。  
30日~7月4日 バレブー。8~14日 ヒドンバ  
レー。17~21日 トウクチエへポカラ。  
24日~8月2日カトマンズ。5日日本。

チエに下り、村の背後の岩壁を登つて、ヒドンバレーに続くヤク・カルカに登つて高山蝶の種類数を増やし、高山植物の記録も飛躍的に多くの種を撮影できた。このあとトウクチエの村に滞在して、農作物の栽培について村の人々に指導した。

帰りのカリ・ガンダキ渓谷の旅は、久しぶりの旅で楽しかった。モディ・コーラへ抜けるゴラパニ峠の辺りは、着生ランとても多く楽しむことができた。カトマンズではバトガオン・パシュパテナート・博物館などを巡って、古代のネパールの文明を学んだ。



昨年に続いてトロン峠周辺、ドルポ地方への入り口付近、ダウラギリへの入り口のヒドンバレー周辺で調査を行った。季節が少しづれると、花の咲き方や、蝶の発生がかなり変化があるため、昨年とほぼ同じ場所で調査を行った。蝶も高山植物も、かなり新しいものが見られて楽しかった。

## 31 1982・8~10 ネパール アンナプルナⅡ峰7937m南稜遠征

○参加メンバー 隊長：山田和彦 隊員：三井和夫、吉田秀樹、師田信人、横山篤

### ○登山概要

#### ・出国から登山準備

8月25日 三井、吉田、  
師田、横山成田発。

26日 カトマンズ着。い  
つものトウクチエピー  
クレストハウス泊。

27日 登山準備(隊荷  
通関、登山ビザ、トラン  
シーバー使用許可、食  
料、装備購入、ネペ  
ル人メンバー決定等)

9月1日 チャーターし  
たトラックでカトマン  
ズ出発し、ポカラ着。

#### ・キャラバンからベースキャンプまで

2日 ポーター39名でポカラを出発し、タッ  
ク村の小学校にテントを張る。

3日 日中の暑さは口にできない程。

4日 小雨降る中シリクスに到着。

5日 快晴アンナⅡ峰がぐんと近くに見  
える。ホゴ泊。

6日 約3時間で仮BC(2600m)に着いた。

7日 要所にロープを張りながら登りデボ。

8日 デボ地から先に進む。

9日 ポーランドキャンプ地まで荷上げ。

10日 信大デボキャンプ地に吉田、師田、  
横山は泊る。

11日 雨で沈殿。

12日 雨音と雪崩の音のみ。

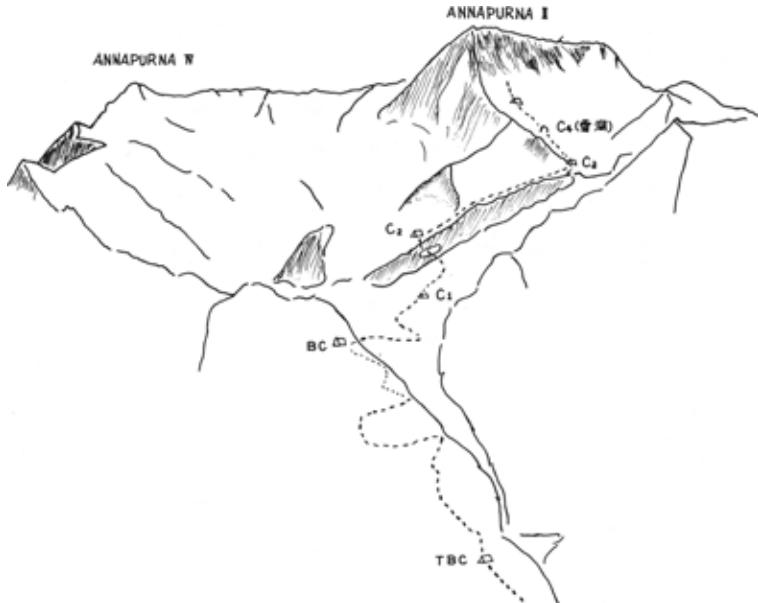
13日 三井信大デボキャンプ地に入る。

14日 BC地点に到着。

15日 荷上げと吉田とメサでC1の偵察。

16日 ポーター達の最後の荷上げとBCの  
整理。

### ○概念図(ルート図)



<アンナプルナⅡ峰南面>



#### ・登山活動

9月17日 25kgの荷物を背負って出発。4時  
間でC1(4800m)に到着。

18日 BCからロックバンド下まで荷上げ  
し、上部ルート工作。

19日 C1まで荷上げし、休養。雨中山田、  
クリシュナ、ドルジエ BC。

20日 三井、吉田、師田、横山はC1に入  
る。

21日 三井、師田で上部岩壁のルート工作。手強い。吉田、横山は下部岩壁の荷上げ。山田はクリシュナと共にC1に入る。

22日 三井、吉田、師田、横山は上部岩壁を4往復し全ての荷をC2へあげてC2へ入る。C2から見えるアンナⅡは雄々しいますらおの様だ。山田不調でBCへ。

9月23日 昨日の疲れと、息苦しさで目覚めが悪い。軽い荷物で4時間半で南稜ジャンクションのC3(5900m)に着き、帰る。

24日 昨夜半から雪が降り、ガスで視界が悪く沈殿。25日 快晴でC3への荷上げ、重荷のためC3手前で引き返す。

26日 C2を撤収しC3へ。アンナⅡ南壁に雪煙が舞っている。デポ回収でC3へ。山田はTBCへ下る。

27日 胃腸の調子の悪い横山を残してC4へ。南稜上部約200mをフィックスし、その後ラッセルで6200m地点に至る。C4手前だが引き返す。

28日 高所順応が遅れている横山と付添の師田はBCへ。三井、吉田は昨日のトレースを探しながらC4予定地の6500mの緩斜面に荷物をデポしC3へ戻る。

29日 好天だが晴沈。

30日 吉田、三井でC4へ荷上げ。風が止むと暑いが、時折吹く風に体力を消耗する。ルートを探しながらC3へ辿りつく。

10月1日 三井、吉田はC4に入る。雪洞の寝心地は、水滴で最悪。横山、師田は一気に1900mを登りC3へ入る。

2日 三井、吉田は交代でラッセルをしながらC5予定地まで荷上げ。師田、横山と合流し。雪洞を広げる。

3日 C5へ荷上げ。吉田、師田はC5に入り、三井、横山はC4に戻る。C5は広い雪田の上、南壁が手に取るように見える。西風が強い。

4日 吉田、師田はフィックスロープを持って南壁にルート開拓に出るが高度順化がうまくいかず、引き返す。三井、横山はC5へ荷上げ。体力を消耗している三井はC3まで下りて休養とする。

5日 荷上げ、ルート工作予定の吉田、師田、横山は高度障害による嘔吐を繰り返している。横山は下ることになる。吉田、師田も今後の行動をやめC3まで戻る。C3で4人が合流し、山田隊長とトランシーバーで連絡をとる。もはや、南壁にフィックスロープを固定して下降路を確保する力は残っていない。ラッシュアタックにしても最低ワンビバークは覚悟せねばならず、この体力を取り戻すのに最低一週間はかかる。時間切れ、実力不足との結論に至り、登山活動を終えることにする。

6日 C3から個装だけを持ってBCに下降する。C3には、青いタフシートに包まれた団装の山が残る。BCで隊長と合流。

7日 BCを片付け、TBCから登ってきたドルジェ、ガンバードルとポーター2名と共にTBCに下る。途中から雷雨となり泥だらけになってTBCに着く。ネパール側メンバ達の心温まるもてなしを受ける。

#### ・帰りのキャラバン

10月8日 TBC撤収、ポーター14名。→シクリス泊まり。

9日 シクリスからチプリ・コーラ出会いより、マディ・コーラ沿いに下る。茶屋でチャイを飲みながらゆっくりと歩く。ジャイブル左岸上部のカハーブレに泊まる。

10日 カハーブレから3時間程でポカラに戻る。騒がしい車の音、人々のざわめき。ホテルの芝生で休憩。

11日 ポカラよりバスでカトマンズへ戻る。トウクチェピークレストハウスに宿泊し、今回の遠征が終了する。

## 32 1982・8~11 信州大学 ネパールヒマラヤ ガネッシュⅢ峰遠征隊

○参加メンバー 隊長:中田茂 副隊長:小根田一郎 隊員:加藤喜章、関圭三、田辺治、保科実、細川和幸、(ネパールメンバー)リエゾン:ラビン・ラナ、サーダー:アン・テンバ、コック:スッパ、キッチンボーイ:アン・カミ、メールランナー:アン・レンズイン

### ○行動概要

・プレモンスーンに入山した前回隊(1980年)が雪で苦労したことから今回はポストモンスーンに入山した。しかし、逆に雪が少なく、Ⅲ峰(現Ⅱ峰)の登路に利用したクーロアールの取付に岩が露出し、特に、IV峰への稜線上の小ピークから本峰までが痩せてアンカー・コーラ側に傾いた不安定なナイフリッジとなっていた。

#### ・カトマンズで準備 8月24~31日

各種手配をコスマトレックに依頼し、手慣れたジョシさんの協力を得て書類整備・隊荷通関・ネパールメンバー決定の他、大使館挨拶、食料調達、挨拶状送付、観光省・情報省回り、隊荷パッキングを行う。ウォーキートーキーやラジカセは全て加藤の持込み扱いで通関(パスポートに記載)。

#### ・キャラバン 9月1~17日

細川とアン・レンズインが先発してカイレニにてポーター(26Rs/日)を手配。

9月1日 カトマンズからトラック2台に分乗してゴルカ(Gorkha)まで。

2日 ~カンチョック(Kanchok) 長い1日。前夜無錢飲食のカイレニ・ポーターと店主とのトラブルも発生。

3日 ~アルグハット(Alghat)

4日 ~ソーティ(Sootie) 本日よりブリ・ガングダキに沿って遡上。途中から雨。大岩壁の近くに泊。

5日 ~ラブベンシー(Labbesi) ソーティ横から巻き道を行かずに徒渉。最後は日電歩道のような巻き道を通る。

6日 ~コーラベシ(Kholabesi)

7日 ~ドバン(Doban) 1時間ほどで生ぬるい温泉があり、頭を洗う。いよいよヒル(Juga)が登場。

8日 ~ヤラ・コーラ(Yaru Khola) 出会 ドバン・コーラ出会いの橋は流出。ドバン・コーラ上流への高巻きルートを上る。

9日 ~トクサ・カルカ(Topsa Curka)



ヤラ・コーラの上流に向けて左岸を大高巻き。夜はひんやりし、シュラフに入る。ポーター達の値上げ要求発生。

10日 ~ドムドムフック(Domdomfuk)

ヤラ・コーラ本流まで急降下。第1の橋手前で泊。曇り後雨。加藤・小根田で第1の橋に手摺りを付けてフィックスを張る。

11日 ~チャンタン・カルカ(Chantan Curka) 急傾斜のゴルジュ帯のヤラ・コーラを第2・第3の橋を渡りながら高巻きを繰り返す。終日、冷雨が続き、増水した支沢毎に隊員は沢内に立ってポーターの徒渉を補助する。

12~14日 チャンタン・カルカ 寒さと、食料不足で80名程のポーターが帰り、12名程のポーターが残った。以後、降り続く雨の中、体調崩した者を除き、残る全員でボッカ。冷雨に濡れて震え止まらず。テント場はヒル地獄。羊飼いが作った橋を発見し、本流を左岸に渡ってサイドモレーン沿いに左岸を上がるルートを確定。

15日 チャンタン・カルカ~BC(4,280m) 前回BCより上部の前回デポ地点に今回のBC設置。ほぼ全隊員に頭痛・むくみ・発熱。

16日 12日以降にデポした隊荷回収。

17日 全隊員・隊荷集結し正式にBC建設。

18日 ポーター帰し、休養。

#### ・登山活動 9月19日~10月26日

9月19~23日 ルート工作と荷上

初日は全員で荷上。モレーン上を進み、アイスフォール降り口のモレーン頂部(4,690m;

前回のC1地点)にデボ地を設置。以後、小根田・加藤・保科又は小根田・加藤・田辺でルート工作(5,010mまで)。他は、デボ地までの荷上又は4,935mまでC1用荷物を荷上。9月23日の帰りに小根田がBC目前の石の上の薄氷でスリップし、左スネを強打して負傷。

24日 休養日 前日負傷部分が陥没しており、小根田は高熱で震えが止まらなくなる。震えが止まった時点で40.1℃。行動不能となる。

25～29日 ルート工作・荷上 C1まで  
加藤を中心に、25日にフィックスを掘り出し、26日にC1(5,060m,アイスフォールを抜けた雪原の端)までのルート工作と荷上。27日加藤休養し、他で荷上。28日加藤・保科・細川はC1に入り、他はC1まで荷上してBCまで。29日加藤・保科・細川はルート工作後BCへ、他は荷上後BCへ。小根田は抗生素を種々試し、毎日1℃ずつ下がるも、37℃台で小康状態となる。

30日 休養日

10月1～5日 ルート工作・荷上

加藤・田辺・保科はC1入りし、C2への取付き尾根までの雪原にフィックス張り。他はC1までの荷上往復。小根田は傷口が破れたのをきっかけに太股の付け根から先端までパンパンに腫れた脚から汚い膿を大量に絞り出す。翌日には立ち上がりれるようになり、サーダー作製の松葉杖で歩行訓練に励む。

6日 休養日

7日 加藤・保科・細川でC1に向け出発するも加藤不調でBCに引き返す。中田・田辺・関でC1荷上。毎日、午後になると積雪。

8日 中田・保科・細川・田辺・関はC1入り。加藤休養。小根田は靴を履いて歩行訓練。

9日 C1メンバーはC2への取付尾根の岩壁基部まで荷上。加藤休養。

10日 C1メンバーは岩壁基部まで荷上。加藤・小根田はC1入り。

11日 加藤・保科・田辺は取付尾根上をルート工作(5,720mまで)。中田・細川・関は岩壁基部まで荷上後、BCまで。小根田は5,250mまで往復。

12日 加藤・保科・田辺はC2予定(5,850m)までルート工作。小根田は岩壁基部から5,750mまで荷上して、一緒にC1へ。中田・細川・関はBCにて休養。C2はIII峰とIV峰との分岐点に位置する。

13日 加藤はC1で休養。小根田・田辺は不調となった保科をBCに下ろす。急性膀胱炎の模様。中田・細川・関はBCからC1入り。

14日 保科はBCで17朝まで休養。小根田・田辺はBCからC1に戻る。中田・加藤・細川・関はC1からC2予定地に荷上。

15日 C1全員でC2予定地に荷上。

16日 小根田・中田・田辺・関はC2予定地に荷上。加藤・細川はC1からC2入り。III峰除外してIV峰のみ、2～3名のアタックを目指す旨の方針を決定。

17日 加藤・細川はC2からIV峰へ続く尾根上の小ピーク(6,200m)までルート工作。小根田・田辺はC1からC2入り。中田・関は4,630mのデボ地まで往復して荷上し、BCから保科がこれに合流。

18日 小根田・加藤・細川・田辺はC2からC1へ。中田・保科・関はC1で休養。全員が揃い、今後の方針・行動予定を確認する。

19日 小根田・加藤・細川・田辺はC1で休養。中田・保科・関はC1からC2入り。

20日 小根田・田辺・細川はC1からC2入り。同行した加藤は途中で体調悪くなり、C1に引き返す。中田・保科はC2からC3予定地(小ピーク直下)まで荷上し、不調にてC2で待機していた関を伴ってC1に。

21日 小根田・田辺・細川はC2からC3予定地まで荷上し小ピークから先のルート偵察。中田・保科はC1からC2入り。加藤・関はC1で休養。小根田発熱し体調悪化。細川も不調。

22日 小根田は保科と同症状。加藤が復帰しなければ、登山中止とし、小ピークに行っていない中田・保科と、希望した田辺で小ピークまで往復。加藤復調せず、関と共にC1からBCへ。本日で登山中止を決定する。

23～26日 C2,C1撤収してBC集結

・帰りキャラバン 11月2～11日

・後片付け・現地解散 11月12～15日

### 33 1983・5~8 ネパール ドルポ入り口付近高山蝶と高山植物の調査

○参加メンバー 堀勝彦、現地ガイド1名、ポーター3名

#### ○調査概要

1980年、1981年の調査に引き続いだ、再三調査を重ねた。調査の内容は、私の採集したネパール産の高山蝶が、3種類の亜種として記録されることになったので、(パルナシウス ケファルナ ホリイ、パルナシウス アクデステス カツヒコイ、パルナシウス アクデステス ホリカツヒコイ)更に慎重に調査に調査をしたくて、3度目のネパール行となりました。

結果的にはその後、3種の亜種の他に、2014年にもう1種新亜種が生まれることになっています。

#### 〈ドルポ入り口 サングダ部落〉



#### 〈トロン・パス〉



#### 〈ダウラギリⅠ峰とトゥクチエ・ピーク〉 (トロン・パス途中)



#### 〈ドルポ入り口 バレブー〉





リョウハクトリカブト

## 34 1984・4~5 ネパール フルーティッド・ピーク6501m遠征

○参加メンバー 隊長:細川和幸 隊員:藤田正弘、森光、角谷道弘、渡辺和文

### ○現役部員でヒマラヤへ!

信州大学山岳会・学士山岳会の今日までのヒマラヤでの活躍には、輝かしいものがある。1971年、春、アンナプルナII峰への初めての海外遠征を皮切りに、1978年、春・秋のジュティ・バフラニ、ニルギリ南峰の連続初登頂。1980年、春未登のガネッシュII峰への遠征。1982年秋、アンナプルナII峰南稜、ガネッシュII峰の同シーズン2隊の遠征etc…。

このような状況の下、現役部員の中で、「自分達だけでヒマラヤへ!」という動きが起り、今回の計画となった。

目標の山をFluted-Peak(Singu-Chuli)としたのは、まず、ライトエクスペディションの山で登山料が安く、キャラバンも短く、金銭面で負担が少ない事。また、標高は6501mだが、ライトエクスペディションの山の中では標高が高く、かつ最近登頂している記録もなく、技術的にも手応えのあるものと思われたためである。

### ○登山活動

4月23日 B.C完成

26日 C1完成

30日 C2完成

5月1日 ロッシュ・ピーク登頂

5日 C3完成

8日 6250m(最高到達点)迄、  
ブルーアイスのリッジ、ルート工作

10日 登頂断念決定 下山

11日 B.Cへ全員帰還

### ○行動概要

4月4日 日本発 バンコック泊

5日 カトマンズ着。コスマトレック事務所  
にお世話になる(宿泊)。

<フルーティッド・ピーク6501m>  
ロッシュ・ピークより望む



6~14日 装備・食料購入、登山準備。

コック兼サーダーをスッパに。

15日・16日 先発隊準備、ポカラ移動。

17日 キャラバン開始。ダンプス泊。

18日 ダンプス→ランドルン

19日 ランドルン→チャムロン

20日 チャムロン→ヒマラヤンホテル

21日 →マチャプチャレBC出合着

22日 雪の為、ポーター半数以上帰る。

B.CをアンナプルナBCに変更し、  
残ったポーター4名と隊員で荷上。

23日 アンナプルナBCにB.C設置。

### 【登山活動開始】

4月24日 細川・森でC1予定地までデポ。

25日 細川・森C1へ荷上げ。角谷・藤田・  
渡辺、高度順応&休養。

26日 細川・森でC1建設。藤田・角谷C1  
へ荷上げ後B.Cへ。

27日 細川・森5320mまで荷上げ。藤田・  
渡辺・角谷はB.C→C1荷上げ。

28日 渡辺・角谷B.C→C1荷上げ後B.Cへ。  
細川・森5320m荷上げ。

29日 渡辺・角谷C1入り。細川・森荷上げ  
とC2フィックス。

30日 5380mにC2建設。渡辺・角谷C2へ荷上げ。  
細川・森C2入り。藤田C1入り。

5月1日 細川・森 ロッシュ・ピーク登頂 藤田・渡辺・角谷C2荷上げ後C1へ。

2日 細川・森 ロッシュ・ピークの肩より山頂迄フィックス。藤田・渡辺・角谷C2入り。

3日 細川・藤田・森ロッシュ・ピーク山頂よりフルーティッドのコル(C3)に荷上げ。

4日 渡辺・森・角谷C3へ荷上げ。

5日 細川・藤田C3建設。角谷荷上げ後C2。

6日 細川・藤田C3上部アイスリッジのフィックス。森・角谷・渡辺C2→C3入り。

7日 細川・藤田6150m迄ブルーアイスのリッジをルート工作。森・渡辺C2荷上。

8日 細川・藤田6250m(最高到達点)迄ブルーアイスのリッジをルート工作。

9日 悪天・強風のため休養。

10日 天候回復せずアタック中止・撤退決定。細川・角谷C2へ。藤田・森B.Cへ。

11日 細川・角谷・藤田・渡辺デポ回収BCへ。

12日 B.Cにて装備等を整理。

### 《 雜感 》

今回、キャラバン最終の大雪のため当初、BC建設を計画していた東側の谷に入れず、BC&登山ルートを急遽南稜からに

### ○ルート図

至 グレイシャードーム



変更せざるを得なかった。南稜はヒマラヤ壁の美しい急峻なリッジの写真が1枚あるだけで、登頂記録やルート情報など何も無い中の登山となった。 実際、ロッシュ・ピークから先は人の痕跡もなく、正に未踏のルートを切り開いている感のある登山だった。また今回、ヒマラヤを初めて経験する現役隊員が主で、高所順応に苦労する者も多かったが、彼らのその後の活躍のステップになった遠征でもあった。(以上)

## 35 1984・6~7 アンデス ペルー・ワスカラン

○参加メンバー パーティ 白い風 隊長：新井陽一郎 隊員：岩村孝之、竹之内秀実

○行程 1984年6月25日～7月5日 <ワスカラン遠景>

### ○山行概要

新井・岩村・竹之内は「宇宙への岬」と名付けたエクアドルアンデス・チンボラソ(6310m)を登頂。ガラパゴスの船旅を満喫し、いよいよペルーアンデス最高峰のワスカランに挑戦の目を向けた。

6月25日 麓のワラスの町を出発。ロバ2頭に荷物を委ねた。ユーカリの木々が並ぶ。つづら折りの急坂を登り、ベースキャンプ(約5000m)に着く。水は谷下の伏流まで汲みに行つた。米が美味しく炊けた。夜は満天の星。南十字星。

26日 5:30起床。7:35 BC出発。憧れのワンドイ峰の雄姿が一望できた。氷河に到達し、さらに進む。スラブ状の岩肌に雪がうっすら着いた斜面で現地ポータのエミリオとBCへのトランシーバ交信。10:00。さらに歩を進める。雪質は固めで心地よい。ワスカランピークを眺めながら、一息。快晴。14°C。

クレバス地帯。トラバース気味に乗り越す。

C1着12:44。ガルガンタ(ワスカラン南峰と北峰の鞍部)の真下あたり。荷をデポして、BCへ下る。14:55。燃える篝火。コカ茶で乾杯！



<ワスカラン遠景>



<ワスカラン北峰>



27日 BC発7:20。15kg強の荷物を背負いC1へ荷上げ。C1着。13:35

28日 エミリオをBCに残し、C1に移動。実働4日、予備2日の計画。霧の中の行動。C1でテントを張る。13:50

29日 C1出発8:25。クレバス帯あり。トラバースが続く。高度600m稼いだ所でC2とした。約5900m。ツェルト、フィックス等をデポ。上部偵察に出る。雪のデブリ。崩壊しそうなセラック。40°位の雪壁を100mほど登る。登攀具をデポして、C1へ下った。途中C2下に金沢大学隊のテントを通過。メンバーの一人の体調が悪いとのことであった。C1着13:45

30日 C1発9:00。快晴。ワスカランが輝く。C2着12:10。

7月1日 アタックの日。4:30出発。C2から高度差100m位上の地点で暗闇の中、ルートを見失う。夜半の数回にわたる雪崩のためにルートが崩壊したのだと思われる。いったんC2に戻る。5:30。明るくなるまでテントで待機。7:10明るくなり上部を見上げると雪崩で大きく崩されていた。ルートを目でたどると崩落のすごさを物語っていた。残りの日程、食料を考慮して無念の撤退を判断。

7:20 岩村、竹之内でデポ回収に出発。40°程度の斜面で岩村が蹴り込んだステップで雪面に亀裂が入り、表層雪崩が発生して、セカンドにいた竹之内が30mほど滑落。運よく雪中に潜ることなく、雪上を滑るように流され傾斜が緩やかなところで止まった。竹之内は安全な地点に移動。最後の残り僅かをデポ地まで岩村が慎重に単独で移動して、回収。アップザイレンで下降。C2着9:20。不幸は幾重にも重なった。

その後事態が急変！思いもよらぬ出来事

が発生した。金沢大隊の遭難の連絡あり。17:10ごろトランシーバ交信。メンバー2人が行動中に別れてしまい、先行したメンバーが戻れなくなったとのこと。

2日 金沢大隊テント発4:52。救援に出発。昨日は雪崩が多発したが、今日は安定。デブリで猛ラッセル。

交信不通。8:10。ガルガンタにテントを張り、搜索拠点とする。8:40。その後歩を進めた。10:20コルに達する。11:40交信可となり、ヤンガヌコ方面に下りていないか、ガルガンタに下りていないか搜索することを伝えた。その後交信が途切れ途切れに。15:10交信可となる。濃霧発生。登山活動を終了してから、最高到達点を更新することになったとは何とも皮肉なこと！頭上より声あり。見上げると誰かが一人雪壁に取りついでいる。日本語で助けを求めている。しかし、みるみる安全なところまで自力で降りてきた。すごい精神力。

3日 彼は手足に重い凍傷を負っていた。救出。テントまで運ぶと緊張が解けたか全く動けなくなった。BCまでに運ぶために救援隊を上げた。BCまで計7人で徹夜の搬出作業となった。彼をシートに乗せ、雪上を滑らす。バランスを崩しながらフラフラになり行動した。BCに着くとエミリオが準備してくれた焚火で暖をとった。

4日 徹夜の焚火のあと一日休息をとった。

5日 BCから荷物を回収に出発。装備回収完了。BC着14:40。ここからはロバに乗せて下山。

ワスカランは終わった。

登山活動終了後、新井、岩村、竹之内の3人は現地解散。それぞれが思い思いの旅につなげた。

## 36 1984・8~9 アマゾン河漂流記

○参加メンバー 隊長:竹之内秀実 隊員:エミリオ、ロダン、セグンド

○遡航ルート ペルー・プカルペイキー  
トス(約800km)

○行程 1984年8月24日～9月13日

8月31日 ウカヤリ河遡航出発

9月1～3日 支流Rio Cashabatay上流へ遡る。

8日～ モータ故障により漂流始まる。

13日 イキートス漂着

8月24日 Lima離陸。空路を行く。雪をたたえたアンデスの峰々がいつしか眼下にアマゾン河の蛇行が広がる。美しい夕焼けに雲は染まり、アマゾンは黄金色に輝く。Pucallpa の空港に着陸

25～29日 航行準備。アマゾン河下りのためのボートの手配。舟頭をあわせて4人で航行計画。食料調達。装備点検。調達。蚊取線香必須。マラリア予防薬をのむ。

31日 快晴 美しい夜明けが訪れた。広がる樹海の上に真っ赤な太陽が昇る。いよいよ出航の時が来た！！

Puerto Italia 出発8:53

Rio Ucayaliを下る。森林に立ちこめる朝靄。鳥たちは朝を歌う。モータの音を響かせて朝の静寂を破る。しっとりした妖艶な水辺。ここはやはりアマゾン。どっちを向いてもあの生命の共生の場。あくまでも現実との闘いの場。ラガルトという1m強のワニが砂浜をはっていた。やはり迫力がある。

アマゾン河全体でみると上流域であるペルーアマゾン。河はゆったりと流れる。のたりのたりゆく河の雲ひとつ

Rio Ucayali は川幅が広いが深さはさほどなく、気をつけて走らないと底をする。岸にあがりテントサイトを決める。

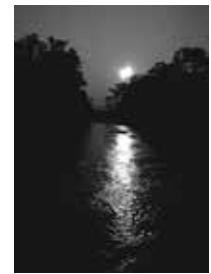
陽が落ちて暗くなるとやぶ蚊の天下。一瞬にして手足が真っ黒になる。たき火。煙の中ではやぶ蚊も逃げる。しかし、暑さにはまいる。毎晩焚き火をするつもりでいたが、夜の恐怖、獣の襲撃を阻止するために考えていた。汗だく。テントにひっこむ。テントでは蚊とり線香が大活躍。外は虫の声、魚のはねる音、鳥の声。さまざま混じって音楽会。昼と夜は全く別世界。

キャンプ地を決定。上陸。野営。焚火で身を守る。

9月1日 快晴 早朝は霧が深い。朝日を蹴つて走る"白い風"号。

今日の予定はRio <アマゾンの夕景> Cashabatayを遡る。陽さしはやわらかく体感する。まったくのんびりした時空間が広がる。水面は高い陽に輝く。

11:22 Rio Cashabatay の取り付きに至る。いよいよ支流の上流へ



これより遡る。河は浅いし、逆流だから速度はどつとおちた。

川幅70m。さらに上流の狭まったところに向かう。アマゾン源頭を探索するセルバのジャングル！！

川の様相はにわかに本流とは異なったものになる。下草は大いに生い茂り、ツタは木をおおわんばかりである。しかし、水の色は相変わらずである。

やわらかくアマゾン色に光る水  
突然暗礁に乗り上げた。深さ20cm位。  
ボートは全く動かない。降りて押す。

テント場決定。蚊帳たてて入るが、暑い！！  
川幅5m深さ10～40cm位。上流に夕陽がしづむ。素晴らしい風景！！木々に遮られた空をこじ開けるように夕陽が木の葉に洩れる。

遠く近く鳥のさえずる声が聞こえてくる。

ああアマゾン夜通し鳴く虫蚊帳越しの月  
半月が夜を照らす。河を照らす。森を照らす。昼の営みは夜をかえ、夜は夜の世界が広がる。虫の声に聞き入る。単純だが緊張の日々が続く。

2日 曇り 浅い河をさらに上る。アマゾンの蛇行がこの豊富な樹林帯を、大木を、なぎ倒していく。

たびたび浅瀬にのりあげる。そのたびにおりて押す。ボートは動かなくなつた。川の中を歩いて散策する。川幅5～10m、深さ20～40cm。かなり水は透き通っている。川底は砂。川は小さいながら蛇行を示し、樹木が生い茂り、迫りくる。

生命の連鎖が繰り広げるドラマ。ダイナミックな世界。これ以上の航行は無理と判断。最上流到達点の証の写真を撮る。ここに何を残すか。大樹に小便を施しておく。キャンプ地を砂地に決定。

## Rio Cashabatay。

赤い天球がかなた樹海に着水していった。

3日 雨～曇り 4:15 突然大雨が襲ってきた。

あわててテントに逃げ込む。テントの中でうずくまる4人。雨は20分程してやんだ。

下りは速い。やはり本流に比べると急流である。また川底に乗り上げた。3人で押す。

11:14 出合につく。Rio Ucayaliは広い!!

河幅はもう600～700m位ありそうだ。

13:03 昼飯。いつもながら貧素な食事。

16:57 キャンプ地上陸。やぶ蚊の大群はどうもだめだ。火の前でグルグルまわる。

アマゾンでは火は欠かせない。

6日 晴れ～曇り 鳥の声に目覚める。5:30

出発。今日もまた下流へ下流へと進む。

8:23 行程の約半分にさしかかる。このままよい日が続けばいいが。9月になると少しづつ雨が多くなっていく。木の葉のように河に漂う。

岸までオールでこいで、昼飯。

13:57 事件が起きた! 平和な舟旅が一瞬にかき曇った。機関銃を持ったコントロールの警官3人が突然背後より現れた。ボートを岸につける。荷物をすべて

チェック。両腕を頭の後ろに組まされる。銃口は私の背中に突きさったまま。汗

がにじむ凍りついた時間。コントロールを無許可で通過してしまったためのようだ。ひとりが川に潜る。舟底まで金槌で

チェックしていた。コカを隠し持っていないか。取り調べが終了。警官のボートは去っていった。気が遠くなるほどの長い時間。

ペルー・アマゾン上流域はコカの栽培地帯に隣接。コカの葉の輸送ルートになっている。マフィアとつながったグ

リラとそれを取り締まる警察隊との双方から狙われる。大使館からはこの流域には絶対に入るなど再三警告を受けていた。緊張した空気がフーッと去った。

7日 曇り～雨 魚をとってきた。淡水最大魚のパイチエ1m位の小さめ。ピラニア。アマゾンは恵みの河。嘗みの宝庫。

ピラニアの鋭い歯。噛まれたらひとたまりもあるまい。怖い…。もちろん私がパーティは調理するときは必ず火を通して

いる。アマゾンの水を生では飲まない。当然の原則である。魚は内臓をとって切り

開き、塩たっぷりつける。

虹がきれい。しばらくすると大雨。雷。

暑さが去ったさわやかにセルバの雨

8日 晴れ 突然魚群発見。岸に沿ってたく

さんいる。棒を川面にたたきつけると魚が飛び跳ねて、ボートに飛び込む。チャンビーナ、サバロ(20～40cm)、パロメータ。15匹位捕らえた。調理にかかる。煮汁でスープ。

夕陽が森に消えた。満月に近い。西の空が赤く染まり、東の空に月が上る。今日は夜通し行軍となる。夕焼けを見ても心なごむ。何故かほっとする。モータがとまった。漂流を余儀なく。いまだにボートは木の葉のまま。もうどのくらい河を流れただろうか。遠くで雷が火を放つ。美しい月灯りにそよ風。虫の声が微かに聞こえる。やぶ蚊はあまりいない。ボートはゆっくりゆっくり回転しながら流れしていく。

9日 雨～曇り 1:30 にわかに雲ゆきがあやしくなり、ボートを岸まで寄せて、大きな流木にボートを固定。ついに大雨の襲来。雷。フライシートをかぶる。

時は止まったように動こうとしない。風と雨に体感温度は急激に下がる。体力の消耗は著しい。じっと耐えるしかない。漂流生活は続く。

16:30 眠りから覚めたら、雨は上がり、雲間からは太陽が顔を出す。夕飯の仕度。魚スープ。

とっても長かった一日にわかれを告げた。

10日 曇り～晴れ 幻想的な夜の森をボートは走る。ロマンチックに響きわたるメロディ。澄み渡った満月の夜。月ひかりがあたりを映す。月に吸い込まれていく。モーツアルトのセレナーデが聞こえてきそうな。

12日 曇り～雨～曇り～晴れ 23:40。突然の大雨の襲来。一路 Iquitos へ漂っていく。闇に包まれた天空に光のドーム。

Iquitosの街の灯り。自然と4人が力いっぱいこぎ出した。それぞれが鍋や蓋を手にこぐ。何時間続いただろうか。雨はいっこうに弱まらない。

アマゾンはまさに戦場だった。われら戦士。夜を徹して行軍。4人の心は完全にひとつ。旅の醍醐味か。こんな素晴らしい旅はないだろう!!

13日 雨 光のドームが徐々に大きくなる。雨足はさらに激しくなってきた。ますます漕ぐ手に力が入る。しかし、雨が容赦なく顔を打つ。

そして…劇的な深夜の豪雨の入港!!

4:30。Puerto Itaya。ついに、Pucallpa—Iquitosがつながった。大きな歓喜の音声とともに!

## 38 1985・7~8 カナダ バガブー山群登攀

○参加メンバー 森山議雄、吉沢広幸、中嶋岳志、水谷寿宏（牛山）

カナダ、パーセル山塊の一角にあるバガブー山群は、クライミング意欲をそそる岩壁が林立するエリアだ。その概観は、ヨーロッパアルプスとヨセミテの中間ともいえる。当時、日本人クライマーが訪れるることはまれで、まだまだ静かなクライミングが楽しめた。サウス・ハウザータワー、バガブー・スパイアーなど、9本のルートを登攀した。

### ○登山概要

7月16日 日本発

(成田～シアトル～バンクーバー)

7月17～18日 レンタカーにて、買出し  
後、バガブー CMHロッジへ。

7月19日 カイン小屋（ベース）

7月21日～8月7日 サウス・ハウザ  
タワー、バガブー・スパイアーなど、  
9本のルートを登攀

8月8日 下山 レンタカーにて移動

8月9日 バンクーバー着

8月10～11日 スコミッシュ登攀

8月12日 バンクーバー発

8月13日 成田着

悪天候とデポ荷物落下トラブルが原  
因で、ノース・ハウザ西壁は失敗に終  
わった。（7月21～23日）

ピジョン・スパイア東壁は、複雑な  
ルートファインディングに苦労しながらも登  
ることができた（7月30日）。

続いて8月3日、バガブー・スパイア  
東壁を目指した。取付のベルグシュルン  
ドでフラットソールブーツに履き替え  
た。東壁は切り立った広大なフェース

で、一見ヨセミテのハーフドーム北西壁  
のような感じだった。しかし、いざ登っ  
てみるととても岩がもろかった。岩を押  
さえながら登るので、グレード以上に難  
しく感じた。水谷（牛山）がリードした  
後、いつものようにまず荷上げをした。

フォールバックが10m程上がった時、  
バックが人の頭大の浮石をこすり、落  
石となって中嶋さんの腕に当たってしまった。  
どうもルートの取り付きを間  
違えていた。危ないバンドをトラバー  
スして正規ルートに戻ることはできた。  
続くピッチはボルトラダーのフェース  
から5.9のワイドクラックだった。更に  
上には切り立った凹角（ルートの核心  
部5.10c）が続いた。取り付きから9時間、  
十数ピッチで東稜に出て終了した。

バガブー山群は静かなクライマーの  
楽園でした。日本からのアプローチは、  
(食料の買い出しを考えなければ) バン  
クーバーからカイン小屋はカナディアン・  
ロッキーズ造りで、とても衛生的（当時  
でも）煙草一本も落ちていなかった。こ  
こをベースに、氷河の中に聳える雄大な  
岩峰のクライミングを楽しむことができた夏だった。

〈ピジョン・スパイアー東壁〉



〈ノース・ハウザー西壁〉



〈バガブー・スパイアー東壁〉



## 39 1987・3~4 ネパール チュルー・イースト6400m遠征

○参加メンバー 隊長：角谷道弘

隊員：森光、加藤清里、清沢義明、三野和哉、安田至宏、下平啓太

○登山を終えて 角谷道弘 ○概念図（ルート図）

計画当初は卒業するまで  
にもう一度気の合ったメン  
バー2~3人で気軽に・・・  
と考えていたが、メンバー  
が増え、ついに7人の大所帯  
になった。目標の山は、過去  
に3隊程しか記録がない  
のが気に入って、アンナプ  
ルナの北西、マナン北チュ  
ルー Eastとした。結果は登  
頂出来ず、我々の実力不足  
を痛感した。しかし、メン  
バー各自、この遠征で低い  
ながらもヒマラヤに触れ山  
のスケールや自然の美しさ  
等に大いに感動し、登山を  
通じて精神的にもたくまし  
く成長したように思う。

### ○登山概要

3月3日 日本出発。

4日 バンコック泊。

5日 カトマンズ着、トウクチエ・ピーク泊。

6~8日 装備、食料等登山準備。コック兼  
ガイドにスッパ、キッチンボーイにク  
マール、ウッドカッターにカジ。

9日 先発隊(三野、下平、カジ、クマール)  
はデュムレ迄。

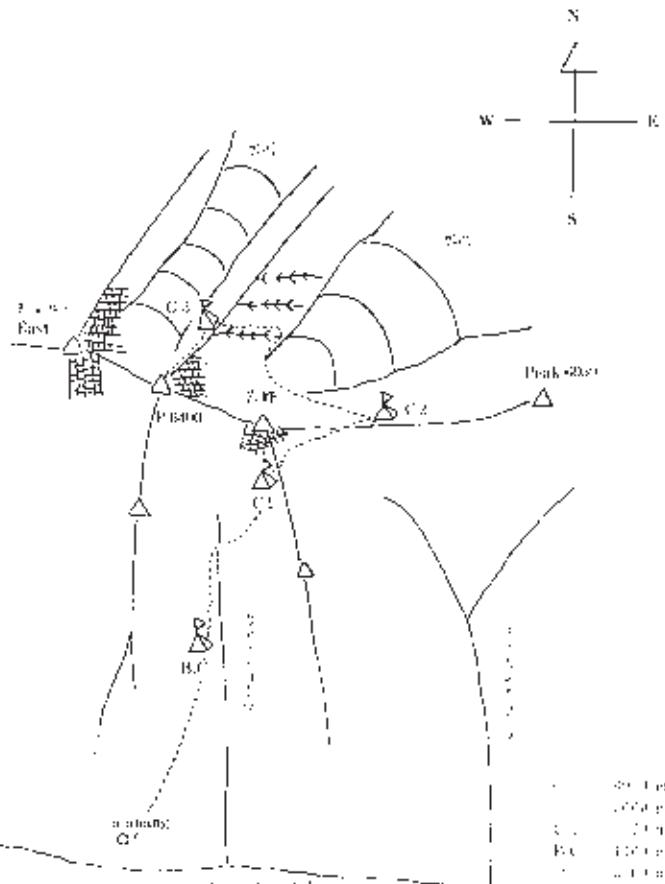
10日 ポーター集め。残りのメンバーはカト  
マンズ発。トラックでボテオラまで。

・キャラバンからベースキャンプ(BC)まで

11日 ボテオラ→ベシサハール泊。

12日 ンガッティ泊。 13日 シャンゲ泊。

14日 タール泊。



<C3から見たチュルー・イースト>



15日 ラタマナン泊。ダナキュウからのゴルジュ帯は、急な登りでマイッタ！ポーターかなり遅れる。

16日 ブラダン泊。

17日 オムドゥ泊。

18日 マナン泊。午後全員で偵察に行く。ポーター達は今日で終わりなので浮かれている。まだ春が来ておらず、あたり一面茶一色だ。馬が放牧されていてのどかな雰囲気だ。

#### ・登山活動

4月19日 4160m地点にB.C設営。その後全員で4660m迄荷上げ。

20日 全員で5160m迄荷上げ、5070mに5mのフィックス。

21日 安田は4660m、清沢は5030m迄。残りのメンバーは5190mまで荷上げ。角谷・下平は5270mのC1まで偵察。

22日 清沢・三野は5120m、残りはC1予定地まで荷上げ。森、上部コルまで偵察。三野はB.Cからマナンへ下る。

23日 角谷・森はC1設営。加藤・安田・下平は5190m迄荷上げ、三野はB.C迄。

24日 角谷・森ルート工作5500m～5600m迄フィックス。加藤・三野・安田・下平C1迄。

25日 角谷・森・下平5700m迄ルート工作。加藤・三野・安田デボ<sup>9</sup>回収し5430m。何とか白い稜線にたどり着く。そこから先はズタズタの氷河でとても難しそうな壁が見え2人ともショックを受ける。

26日 森・三野ルート工作、5750m迄。安田・下平5450m迄荷上げ、角谷・加藤C1滞在。

27日 角谷・森・加藤・三野・下平C2予定地5660mへ荷上げ。安田C1滯在。陽があるうちはよかったです、雲に隠れると寒さが訪れる。フィックスを越えると

そこは雪の台地かと思われた。ヒマラヤはでかい。チュルーはまだ姿を現さない。

28日 角谷・森C2設営。三野・安田フィックス回収、下平C2へ荷上げ、加藤B.Cへ。今日で、C2より下のデボ<sup>9</sup>なくなる。

29日 角谷・森氷河を横断し5720m迄。三野・安田・下平C2へ。加藤B.C滯在。

30日 角谷・森6000m迄ルート工作。三野・下平5670m迄荷上げ、安田C2滯在、加藤C1へ。恐るに足りない尾根だと思っていたが、ふにやふにやの雪のためにラッセルは遅々としてはからず、進まなかつた。

31日 森・三野6200m迄ルート工作。安田・下平6000m迄荷上げ、角谷C2より下のフィックスを回収。加藤C2へ。

4月1日 全員C3へ。

2日 森・三野がA・C設営に向かうが、隣に見える岩峰が頂上らしい事がわかりC3へ戻る。

3日 全員で6400m峰へアタックする。その後、C2へ。

4日 全員でB.Cへ。

5日 B.Cにて休養。昨日からの慌ただしさから一変し、今朝はのんびりとした一日。乾燥野菜のにおいの染みついたシュラフを干し、読書に耽った。

#### ・帰りのキャラバン

6日 B.C→オムドゥ泊。 7日 コド泊。

8日 タル泊。 9日 シャンゲ泊。

10日 ンガティ泊。

11日 ベシサハール泊。冷蔵庫で冷やされたビールが最高だった。

12日 カトマンズ着。トウクチェ泊。

24日 三野・安田・下平カトマンズ発。

26日 角谷・森・加藤・清沢KTM発。

## 40 1987・9~11 中国 日中友好ラプチェ・カン7367m合同登山 (HAJ)

○参加メンバー 日本側隊長：山森欣一 登攀隊長：出口當  
隊員：小川貞夫、森山安次、古川英勝、須藤圭一、橋本康弘、田辺治、高橋俊也、  
(隊長：成天亮 他の中国隊員省略)

### ○登山概要

#### ・太陽の都ラサへ

9月10日 良く晴れた成田を出て、北京空港に着き、中国登山協会の迎えを受けた。

11日 満席の737に乗り、西都に着く。

12日 雨の成都を離れ、ラサに着いた。標高3658mにいきなり降りるのは大変だ。

13日 今日から冬タイム、8時30分の朝食時ようやく薄明るくなる。午後から打ち合わせを行った。

14日 夜半雨が降り、周辺の山は冠雪した。出発の準備で倉庫へ。夜は、登山計画の検討を中国側と行う。

15日 出発の日、晴天の中ジープ、バス各1台とトラック2台でベースに向う。

#### ・ベースキャンプへの道

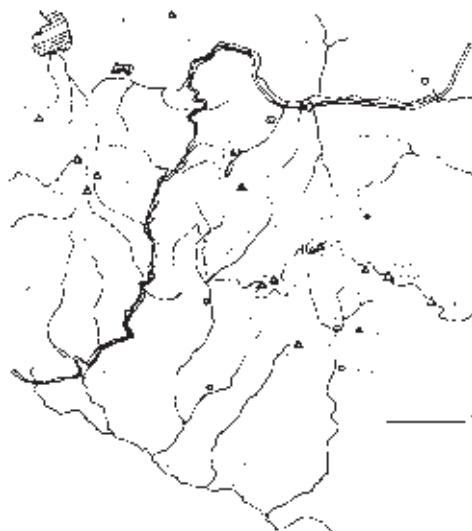
15日 隊長、副隊長はパジェロだが、我々隊員はオノボロバスだ。チベット隊員が歌いだす。ギャンツェでガソリンを入れる。20時シガツェ着。

16日 郊外は木こそないが緑豊かな美しい大地だ。ツォー・ラを越えてしばらく行くとパンク。ジャツオーラ(5212m)の登りでバスはエンコの連続。これなら歩いたほうがました。シガールの町は人民解放軍の検問所があり、通過するのに時間がかかりようやく20時30分BCのランゴロ村に到着した。

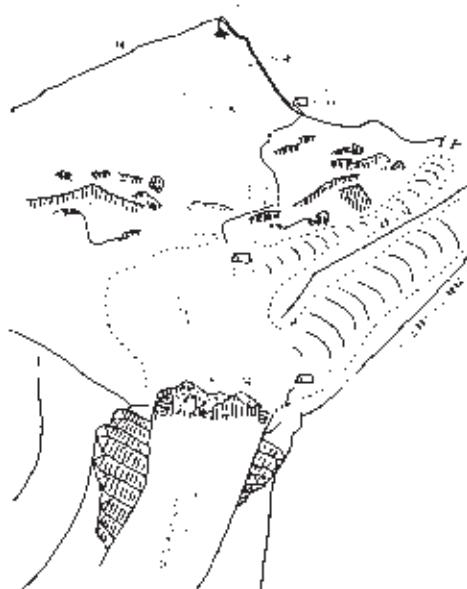
#### ・裏山へハイキング

19日 BCからのラプチェ・カンは我々に容々たる全景を見せている。今日は村の裏山に高度順応に出かける。弁当を持ってハイキングといった感。各自のペースで4800mのピークに立つ。5000mの稜線を歩きながらBC(4500m)へ戻る。

### ○ラプチェ・カン周辺概念図



### ○ラプチェ・カンルート図



#### ・峠越えと星空のビバーク

20日 5300mのABCに向けて出発。隊荷は前々日50頭のヤクで荷上げしてある。チベット隊員はこの高度では全く何ともな

い。山森隊長、出口と小川の3人で後発する。先発隊とかなり離れ、途中でビバークすることになった。翌日ABC(5300m) 着くが、大騒ぎになっていた。

#### ・巨大な氷河湖から氷河へ

ABCからC1(5600m)までの直線距離は7kmで、高度差は300m。まず、湿地帯を行き、モレーンを右手に見ながら氷河湖(奥行5.5km約800m位の弧を描いた長方形)から流れている川に沿って進む。そして、ガレ場に最初のフィックスがあり、緩い登りとなり、氷河の端に着き7ピッチのフィックス終了点が氷河の上にあるC1だ。

#### ・ヒマラヤン・ブルーと白き氷河

9月30日 古川、須藤でアンザイレンしながらC1を出発する。プラトーを越え6000m位になり、膝下まで潜る軟雪、前方にラプチェ・カンの全容が見え、実に女性的な山だ。テープが終了し、竹竿を立てて進み6150mがC2となる。休養後の10月5日 須藤、高橋、古川で高度順応ためC2へ登る。

6日 須藤、高橋、古川、田辺でC2設営。

13日 同じメンバーでC2に入る。

#### ・処女雪を蹴って西稜へ

7日 C2の朝はめちゃくちゃ寒い。気温-22°C。古川、須藤、田辺、高橋(古川のみスキー)でルート工作に出る。膝までのラッセルでプラトーを横切り西稜へ向かう。取り着きは右の雪壁を登り、3ピッチまで4時半となり終了し、C2へ戻る。

8日 古川不調で高橋が付き、須藤、田辺でルート工作に向かう。田辺トップ、最初のクレバスを越えると優しくなりキックステップが快適だ。途中須藤にかわり9ピッチまで延ばす。

9日 小川、橋本、森山の3人でルート工作。昨日の4人はABCへ休養。天候が悪化し吹雪の中1ピッチしか延ばせなかつた。

#### ・登山靴“沈有”事件

12日 14時の交信で、C1にいた田辺から「靴、その他がありません」「大きな津波が

あつた様子で、デポを乗せた大岩全てがありません」代替品として、隊長のゼルブストとユマールを田辺が、靴を古川が。中國隊員の長靴を田辺。夏用登山靴を出口が。だれが、湖面の2m以上もの急増を予想するであろうか。

#### ・大自然に翻弄され 10月12日

夕食を済ませ外で小キジを打っていた時、突然ズシーンという地響きがして僕の体は宙を舞っていた。雪崩だ!5基あったテントのうち3基が潰れた。怪我人が出なかつたのが不幸中の幸いだ。既に、暗く今移動するのは危険だ。第2の雪崩が襲う。強風の中、除雪し長い一夜を明かす。幸いにも雪崩は来なかつた。2日の休養後協議し日本側全員が登頂を希望した。

#### ・感涙の頂

26日 第1次アタック。8時出発、須藤、田辺がルート工作し、古川が続く。チベット4人が続き最後に出口が登る。天気も良く、トップも順調にロープが延びていく。頂稜の一角に出ると須藤はチベットの旺加にトップを譲った。右側がスパート切れ落ち、稜線直下の左側急斜面を進む。稜線直下をトラバースして鞍部を過ぎると頂上の斜面となる。13時50分初登頂。ポーズをとる出口、須藤、古川、田辺。涙が鼻の中で凍っている出口。一足先に下山したチベット隊員を追い下る。C3では第2次アタックも着いていた。そのままC2まで下った。

#### ・悪夢の3時間

27日 今日は昨日と打って変わり、悪天ですごい強風だ。8時の交信で様子を見ることにした。9時半に出発を決める。相変わらずの強風、頂上まで14ピッチを頭に、感覚のない手や足をひたすらフィックスを辿る。歎声を上げているチベット隊員や小川、橋本さんの声が聞こえ、頂上に着いた。雲に覆われていたが橋本も頂に立った。

30日 BCに向けて下山。最後の古川は31日になっていた。

## 41 1987・5~9 中国 チベットへ調査・遠征

○参加メンバー 堀勝彦、武田英之、シェルパ 2名

### ○調査概要

チベット旅行が解禁されたので、チベットから青海省までの間の地域を探検していく出かけた。エヴェレスト地区では、ロンブク僧院周辺崑崙山脈の黄河・揚子江の原流域・リヒトホーヘン山脈あたりのチベット探検時代のブルゼワルスキイやスウェン・ヘディンの探検に憧れてのことである。この2人の探検家は私の青春の憧れであった。ネパール・ヒマラヤに憧れたのも偉大な日本人河口慧海であったし、交通手段もままならない時代に、チベットの広大な草原や山岳の間を、黙々と旅した偉人たちの旅にあやかりたくて、あえてヒマラヤを越えて旅に出たのです。

### ・行動概要

6月5日 コダリからチベットに入った。国境からはトラックをチャーターして定日(テンリー)に着いた。8日 馬を3頭雇ってエヴェレストの麓にあるロンブク僧院を目指して出かけた。タカリーと呼ばれる峠越えて、ロンブク僧院にたどり着いた。大きな谷の奥にはチョモランマがそそり立っていた。イギリスを筆頭にいくつもの国が、この谷から世界の頂点に挑んだことだろう。僧院に3日滞在してエヴェレスト・ベースキャンプ周辺で高山蝶の採集をした。日本人がまだ誰もが採集したことのないバルナシウス ハニグットニーの採集に成功した。エヴェレストの周辺の山々を見てることができて、大満足であった。

19~21日 トラックとバスを乗り継いで、シガツェを経由してラサに到着して、市内見学に3日程使った。

24~28日 ラサの北。ダムシュン(当雄)のチベット最大といわれるナム湖に向かつた。ここで5日間蝶の採集をした後いったんラサに帰った。

7月2日 ラサを出て、6日クンルン山脈で下車、黄河源流の壮大な景色に圧倒される。見渡す限り人間の気配がない神々の地である。テントの脇を流れる小さな流れは、まさに黄河の源流で、夜間には凍ってしまう。

ここを目指してきた最大の目的は、黄河源流の地で、あの偉大な探検家スウェン・ヘディンが探検の時発見したブルジェバルスキイウスバアゲハを採取することだった。殆ど人の気配のない土地で、憧れの蝶を採集できた。ほぼ200年ぶりの発見であった。もう絶滅したといわれる野生のヤクも見たし、世界最大といわれるマルコポーロ羊も見た。野生のロバや数々のカモシカ類や狼や数々の鷲・鷹の仲間、生える草もなく、まして樹なぞは全く見えない。一見して不毛の土地に生息する野生動物にはビックリした。崑崙山脈が西から東の地平に連なる雄大さは、生涯きっと忘れられるものではない。地球の大きさを実感

### 〈ロンブク僧院とエヴェレスト〉



しました。私の心の中に荒涼とした風景に憧れる何かがあるようだ。

17日 食料が全く無くなつて、ケンルン山脈を脱出して、ゴルムドへ出て汽車で西寧(シーニン)に到着した。20日～8月1日まで西寧に滞在して、大阪山口(キーリンシャン)・日月山(リーユエシャン)・ラジシャンコウ・山根(シャンゲン)など往復200～300キロの道を通つて、蝶の採集と撮影を

〈崑崙山脈 黃河源流〉



## ○概念図

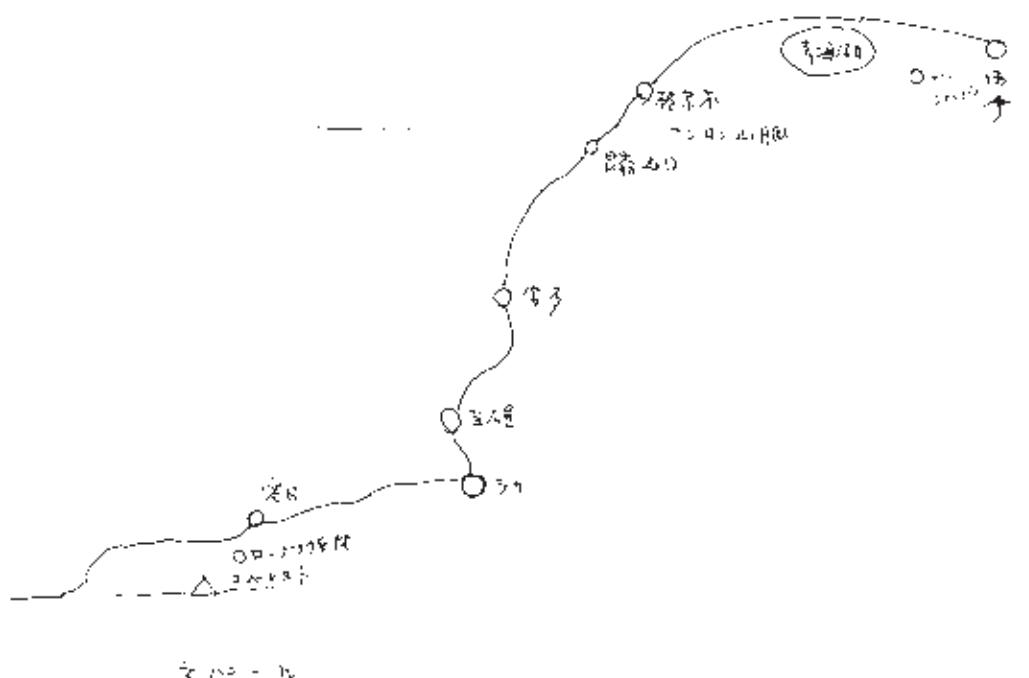
した。私たちの旅が戦後のチベットの採集旅行の鏑矢となった。

非常に意義のある探検であった。外国人が入ってはいけない場所も多々あったが、チベットの人たちは非常に親切で誰も私たちを密告する人はいなかった。幼少のころから憧れの土地でしたから、大満足の旅だった。

## 〈ハニーグットウスハー〉



○ 5 月 1 日



## 42 1988・6~8 インド 日印合同カラコルム登山隊 リモ I 峰7385m(HAJ)

○参加メンバー <日本側> 隊長: 尾形好雄 隊員: 青木正樹、渡辺斎、新郷信廣、高橋純一、吉田秀樹、二俣勇司 <インド側> 隊長: フカム・シン 医師: C.R.・パトナイン、L.O.R.・ラビ 無線技: D・チャンド・タクール 隊員: V.K.・ビット、N.D.・シェルバ、S.I.・カネイヤ・ラル、ラッタン・シン、ツェワン・サマンラ、アヌス・チャタレジ、シェルプ・チョルテン

### ○登山概要

#### ・アプローチ

6月6日 尾形、渡辺、吉田、二俣の先発隊4名は灼熱のデリーに到着。翌日から手分けして隊荷の通関、現地購入品の買い出し、デポ品の整理等に走り回る。12日 後発の青木、新郷、高橋が到着し、日本隊全員が揃う。先発した二俣が原因不明のかぶれで顔が異様に腫れ上がる。

14日 早朝、隊荷を積んだトラックが一足先にレーへ。正午から日印の壮行会、シン氏宅でのパーティーが行われた。二俣の腫れが引けた。

15日 空路スリナガールに向かい3日間滞在した。

18日 バスで夕方カルギルに到着した。

19日 レーに向かう道は、ナミカ・ラ(3805m)、フォト・ラ(4094m)、ヌル・ラ(3021m)の高い峠を越え、赤茶けた山肌、荒涼とした大地を越えインダスの湖畔の緑地、首都のレーに到着した。4日間滞在しポーターや食料等の準備をした。

23日 3台の軍用トラックとジープ1台でカルドン・ラ(5486m)を越えシャイヨーク河を目指して下る。さらに別れてヌブラ谷へ進み、パナミックに泊まる。/24は停滞。

25日 中央アジア交易路の登り口となるサソマで昼食し、ワシマヘ。この先は最もシークレットな地域で緊張する。

26日 テロン谷のキャンプ地。

#### ・キャラバン開始

6月27日 シアチエン氷河に向かう。ア-

〈東部カラコルム概念図〉



〈リモ I 峰ルート図〉



ミーキャンプから3時間マッシュルームキャンプ(3850m)到着。/28~7/3荷上げと偵察。

4日 南・北テロン氷河合流点にBC(4300m)。

7月5日 尾形、吉田、N・Dは北テロン氷河を8km程遡り、85年印英隊のABCより上部5050mにABCを決めた。

8日 BCでブジャを行いABCを設営した。

### ・南壁にルートを求めて

7月9日 前日ABC入りした、尾形、吉田、N・D、サマンラの4人でC1建設に向かう。氷河は歩き易いがヒドンクレバスが多い。アイベックス・コル直下のスノーワーク地をC1と決めた。アーミー・マップで5960m。

11日 日印双方の登攀メンバーがABCへ。尾形、吉田、N・D、サマンラはC1へ。尾形と吉田は南壁の偵察に向かう。

12日 南壁に向けてルート工作開始。アイベックス・コル迄の氷壁とコルからの雪壁に9本のフィックスを施す。

13日 ルート工作隊は、12本のフィックスを施し、6500m迄達した。コルから岩壁帯を4ピッチで抜け、更に雪壁を5ピッチ延ばし核心部の岩壁帯を真近に眺める位置まで達した。C1に上がってきた青木がヒドンクレバスに転落したが運よく事なきを得た。

14～16日 悪天候でABCで休養。

17日 ルート工作隊はC1へ移動。

18日 3日間の降雪の為フィックスが埋まり、5ピッチ延ばしただけで終った。

19日 核心部と目される岩壁帯のルート工作にかかる。前日の最高到達点から、左上してスノーバンドに上がり、このバンドを右に1ピッチトラバースし、10m程の嫌らしいスラブを直上。落石・スノーシャワーを左に避けルートを5ピッチ延ばす。ほぼ核心部は突破できた。この間にキャンプサイトは見い出せず、已む無く終了点に1張りのテントを設営する。N・Dとサマンラはこの日C2(6750m)に泊まり、翌日のルート工作中に備えると云う。残りのメンバーは31ピッチの長い懸垂下降でC1に戻る。

20日 C2に泊まった2人は上部のルートを見いだせずルートを延ばせなかった。

21日 尾形、新郷はC1から一気にC2へ上がり、其の後6ピッチ半ルートを延ばして南壁突破のメドをつけた。

22～25日 悪天の為休養。

### ・アタック

7月27日 1次隊の6名はサポート隊の6名と一緒にC1からフィックスロープを辿った。雪壁部分の大半が雪に埋もれてしまい掘り起こすのに時間がかかった。21日の最高到達点からラッタン・シン、尾形で南壁最上部の雪壁にフィックスロープを延ばす。深いラッセイルの後4ピッチロープを延ばし南西稜に出た。しかし、稜線はナイフリッジで、更にその先は城砦のようなピナクルが立ちはだかっていた。兎も角荷上げ品をデポする。稜線上はどう見ても4人が限界の様だ。尾形、吉田、N・D、サマンラの4人を残し、他はC1に下つてもらう。何とか身を横たえたのが22時を回っていた。

28日 7時半から尾形、吉田でルート工作をする。ファイナルキャンプ(7000m)から左の側壁をトラバースし、裏手のガリーを詰める。已む無く不安定な雪壁をトラバース、3ピッチで広々とした雪田に出る。途中、急峻な雪壁にフィックスをする。頂上雪壁に続く下部のミックス壁にメインザイルをフィックスする。午後2時3分4名は未踏の頂に立った。さらにこの日、C1からC3に上がったラッタン・シンとカネイヤ・ラルも16時登頂。6人はC1へ下つた。

29日 C3入りした新郷、二俣は6時に出発し、7時55分登頂。続いてシェルプ・チョルテンが9時40分登頂。アタヌ・チャタレジ11時20分に登頂。この日C1を出発した渡辺、高橋。渡辺はそのまま登り続け17時20分登頂。

30日 高橋は単独でC3を6時に出発し、6時間のアルバイトの末、12時13分登頂。

31日 C1、ABCを撤収し全員BCへ集結。

8月1日 BCを撤収して下山開始。

6日 パナミックからレーに戻る。

9日 レーからスリナガールに向かう。

12日 レーから空路スリナガールに向かう。

18日 デリーにて現地解散。

## 43 1989・8~10 ネパール エヴェレスト南東稜8848m カトマンズ・クラブ

○参加メンバー 隊長：金沢健 副隊長：大西保 登攀隊長：三谷統一郎

隊員：黒滝淳二、塩田純一、桑原信秀、後藤健二、中村譲二、高尾馨、堤信夫、八橋秀規、安藤昌之、**二俣勇司**、堀弘、高橋堅、中西紀夫、榎井克明、柳原武彦、吉村哲郎、大西宏、山本篤、西平恵子 BCマネージャー：金沢明子、成田涼子

### ○はじめに 金沢 健

我々カトマンズ・クラブは、1984年結成された、登山を中心とした野外活動好きの集まりである。カトマンズで知り合った海外遠征組が中心メンバーで、カトマンズ在住者も多い。活動は登山のみならず、カヌー、パラバウント、ゴルフ、スキー、露天風呂めぐりと多岐に渡る。隔月に発行される「カトマンズ通信」と名付けられた馴文集が、メンバーを結び付けている。クラブの最初のイベントとして、1985年秋のチヨー・オユーの許可申請をしたとき、同時に1989年秋のエヴェレストも申請した。

4名のメンバーで登ったチヨー・オユーは、幸い3名が日本人として初めて頂上に立った。私自身は、クラブ結成以前より、シェルパにほとんど頼らない少人数の遠征隊を好んで組織し、クスマ・カングル(6367m)、ガネッシュⅢ峰(7110m)、ダウラギリI峰(8167m)等に成功してきた。今回のエヴェレストに限っては、許可の取りにくい山に、多くの登山者に機会を作るということで、南東稜25名、南壁15名程度を予定していた。しかし、南壁については実力あるメンバーが集まらず中止せざるを得なかつた。前年より明治大学山岳部OBの3名は、三国合同隊に参加し、弘前大学山岳部OBを中心としたメンバーは、パミール三山、マナスル、ディランなどでトレーニング山行をおこなつた。隊員は10回前後の遠征経験者が多かつたので、寄せ集め隊の不安は無かつた。無酸素で登る3名を含め出来れば15名以上登頂を願つていた。

### ○準備・キャラバン

別送品を送るような大遠征隊はやつたことは無かつたが、今回は贅沢しようという事で、かなりの荷を日本から運んだ。インドによるネパールの経済封鎖を恐れ、隊荷は海路でマニラ、その後は空路カトマンズに送り込んだ。高価ではあったがカトマンズ在住メンバーのおかげで、石油、プロパンガス等も入手出来た。ここ2年ほどモンスーン中であつても、ルクラ・フライトがある。石油、プロパンを除くほとんどの隊荷は、レギュラー便、チャーター便でル克拉に運んだ。ジリから歩いた者、ルクラから歩いた者、各自が自分に合つた高所順応法でベースキャンプに集結したのは8月26日であった。

### ○タクティックス

ベースキャンプ(5350m) C1(6050m) 間のアイスフォール・ルート工作は、2日間の悪天を含め6日間、40本のラダーを使用した。その後のルートの崩壊で10本追加した。C1・C2(6450m) 間は1日、C2・C3(7300m) とC3・C4(サウス・コル7906m) 間は各2日間のルート工作でフィックスロープをベタ張りにした。簡単な氷雪壁でのルート工作では、このようにしてスピードをかせいいだ。

新キャンプ設営の日に、まず50mロープ10本程度の工作を行い、最高地点に次の日数ピッチ用のロープ、スノーアンカーをデポして下る。2日目、トップとセカンドは、ほとんど空荷で、すみやかに最高地点からのルート工作に向い、後続はそのル

ト工作の間に追い付く。その日の最高地点にもたくさんの登攀具をデポして下り、次の日に備える。3日目も同様に空荷で登る2人と後続に分かれて登る。この方法なら、キャンプ入りした日プラス工作日2日で3～40ピッチの工作が可能である。

高所順応は疲労が少ないほど早く進む考えに基づき、隊員は2日間の上部行動後2日間休養を原則とした。行動最終日には少々遅くなても、なるべく下のキャンプまで下らせた。一般にいわれる、自分の登高スピードが落ちてたら下るべきだという理論は、正確にいうと間違いである。登高スピードが落ちた時点というのは、すでに高度のダメージを受けた身体の反応が強く現われだした時であって、ダメージを受けたその時では無いからである。むしろ自覚的に、自分の体力を7～8割程度の力で登高できる内に下る方が順応スピードはあがる。頑張ってはいけない。一度順応に失敗すると1週間のロスとなる。

全員2～3本の寝袋を用意し、1度上げたものは下ろさないようにした。各自寝袋用のシーツを持って、他人の寝袋にも寝てなるべく寝袋の移動が無いようにした。2キロ足らずの寝袋であっても、その全移動重量は何百キロにもなるからである。あまり苦労せず高所順応を行うことを考えれば荷上げ重量はBC～C2は15キロ、C2～C3は12キロ、C3～C4は6キロ程度に抑えたかったからもある。

C1までの荷の集積後、C2への荷上げは隊員はC1より、シェルパはC2よりの逆ボッカによって行った。高度順応の出来ているシェルパにとって、4000m高くとも、雪面上のC1よりもモレーン上のC2の方が生活環境が良いからである。隊員はC2までの順応が出来ると、すぐC3へのルート工作の荷上げを行い、シェルパはC2～C1間

の逆ボッカに集中した。隊員が大部分の荷をC3に集めた時点で、シェルパはC2より空荷で出かけ、荷をC3でピックアップ後C4に上げてC2に下る作戦をとった。この行動では2日荷上げ1日休養とした。後半C1は使用せず全員BCよりダイレクトにC2入り、シェルパ全員と隊員の一部はC2よりダイレクトにC4入りした。メスナーが「4時間で行ける」と彼の本に書いてあるBC～C2間で3時間を切る隊員もいた。

全員の調子が良いため、登攀隊員22名中40歳以上の隊員5名は登頂を遠慮することとした。連日の強風、チリ雪崩、雪板雪崩の状態で登頂者は少なかったが、延べ16名がアタックした。生まれて初めてアイゼンを付けた隊員もサウス・コルまで登った。ゆっくりした日程で、疲労しないように高所順応すれば普通の体力の者でも8000mまでは無酸素で登れる。

## ○行動概要

8月27日	BC開き(5350m)
9月2日	C1到達(6050m)
3日	C1建設
4日	C2到達(6450m)
9日	C2建設
11日	C3到達(7300m)
14日	悪天の為BC停滞
17日	C3建設
19日	サウス・コル到達(7906m)
25日	登頂体制完了
28～30日	悪天の為BC停滞
10月2日	C3～4切れたフィックスの張り直し
5日	一次隊6名8200mで雪崩
7日	二次隊6名8200mで雪崩
12日	三次隊2名8200mルート偵察
13日	三次隊7名内5名登頂
15日	四次隊7名8500mで敗退
19日	BC撤収

## 44 1989・8~10 中国 チヨモランマ北壁 HAJ珠穆朗瑪峰8848m登山隊

### ○参加メンバー 隊長：尾形好雄

隊員：平田清志、橋本康弘、谷口雅朗、今村裕隆、田辺治、石坂工、西川修、新郷信廣

### ○登山概要

#### □激震後の北京へ

8月15日 成田は夏休みの海外旅行客でごった返していた。15分遅れで離陸、一路北京へと向かう。北京空港の税関では1名のみ厳しくチェックされたが、他の8人はノーチェックで北京飯店に落ち着く。

16日 午前中CMAと本登山隊の件で打ち合わせ、酸素の税関、輸送があまりにも高額なのが心配。午後は観光。

17日 酸素の件は後日やってくるアメリカ隊の隊荷と一緒に運んでもらうこととした。成都へフライトする。

18日 散々待たされたのち欠航。

19日 この日も天候が思わしくなく散々待たされ、13時に搭乗し、“戒厳令下のラサ”に到着するが、意外に落ち着いていた。

20日 登山管理処へ挨拶に行く。今年7~10月にかけてチヨモランマには11隊(240名)が入山するという。あまりのラッシュ振りに驚きよりも呆れてしまう。その後、アナカンで先送りした隊荷を確認した。

21日 ラサのデポ品を確認し、梱包する。

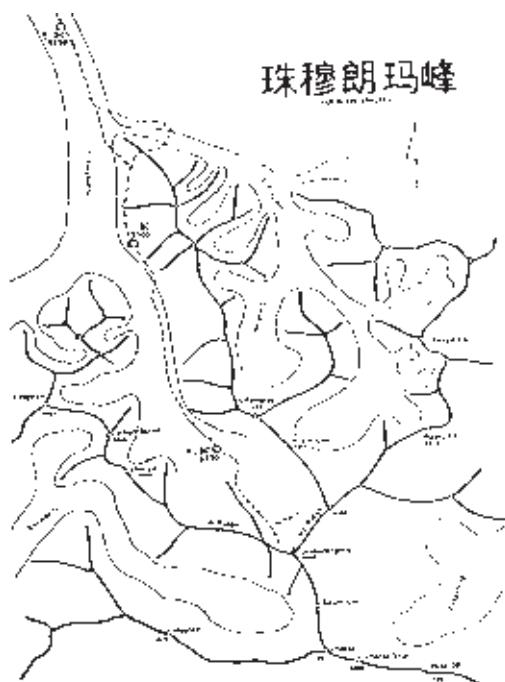
#### □チヨモランマを目指して

22日 チヨモランマに向けて出発する。今日は、チベット第二の都市シガツェへ。

23日 酸素ボンベ12本を受け取りジープに積み込み、ひた走る。4500m, 5200mの峠を越えシガールに着く。

24日 BCを前に高山病相次ぐ。今村が肺水腫のようだと起こされる。大事をとって酸素吸入を開始する。高熱を出した平田、西川も診察所へ連れて行く。

25日 今村と西川はシガツェの病院に送ることにする。平田はそのままシガールに滞在。後のメンバーは大本營(TBC)に向けて出発する。最終部落チエソン村の手前で昼食を取る。ロンブク寺院を後にエンドモレーンの小丘を幾つか越えるとテントが点在する大本營(5150m)に着いた。スペイ



ン隊(2隊)、アメリカ隊(2隊)、チリ、ユーゴ、フランス、安徽電視台の取材班等が入っていた。我が隊のトラックは19時15分に到着し、慌ただしい設営となつた。

#### □BCへのヤク輸送

26日 石坂がダウンするも回復し、一安心。

27日 ヤク荷用に再梱包。1個20~25kg。

28日 平田、西川が上がって来る。今村は肺水腫の様でまだ入院が必要との事。

29日 全くヤクが来ず、ようやく来たと思ったら一向に動かない。動き出したのが17時50分。東ロンブク氷河の渡渉点で野営。

30日 尾形、新郷、西川BCの往復に行く。ベースへの道はしっかりと出来ている。

9月2日 全体荷と今村を除く全隊員が揃いベースキャンプ(5500m)開きを行う。

#### □ABCへの人間ヤク輸送

3日 ABC(6150m)への荷上げを開始する。

4日 シガツェの病院に入院していた今村がTBC入りした。

5日 我々が正規のルートで許可された北

壁ルートがイタリア隊にも許可されていた。これは西藏自治区からの許可。両隊で協議するが結論がです。連絡官が両隊ともに登山することになった。

#### □北壁に向けて

9月11日 新郷、田辺、西川の3名をABCに移動。翌日から下部氷壁帯のルート工作。

12日 3人はABCから30分で北壁の取り付きとなる。スノーシャワーが激しくて進めず4ピッチ、固定ロープを張る。

13日 前日の終了点からラビーネンツークをトラバースして、更に6ピッチ固定ロープを延ばし6550mに達する。夜半から激しい降雪となる。

15日 雪が止むのを待って3人はBCへ。

下降中チャンツェから大雪崩に遭遇無事。

17日 尾形、橋本、石坂はC1へのルート工作に向う。前回フィックスしたロープは雪崩で無残にも引きちぎられていた。新しいラインを引き、7ピッチ延ばす。

18日 前日の3人は前日の終了点から2ピッチ登り、スノーリッジの右側を巻き、5ピッチで計7ピッチ固定ロープを延ばす。

19日 昨日の終了点からロックバンドの基部をトラバースし4ピッチでC1予定地に続く稜線に出る。

20日 昨日に引き続き、新しいデブリの山で深いラッセルを強いられる。3ピッチ登った時、ロレタン・トロワイエルートに大雪崩発生し、ABCへ逃げ帰る。

#### □名残りモンスーンの大雪

20日夜半～22日 大雪、ABCでは70～80cmの積雪となる。

23日 尾形、新郷、田辺、西川はABCを出て、固定ロープが心配したことは無く、18ピッチの終了点から、先2ピッチ延ばし、6900mをC1とした。

25日 イタリア隊がロープ100mを流されたのでうちのルートを使わせてほしいと云うが話し合いと違うので断る。

26日 空模様が一変し、もの凄いスノーシャワー北壁は雪崩のオンパレード幸いにも事なきを得てテントに戻る。

27日 新郷、田辺、西川はC1からC2への

ルート工作で8ピッチ延ばす。しかし、夜半から悪天候となる。

30日 C1の3人はABCへ。この3日間で北壁はすっかり変わってしまった。

10月2日 尾形、橋本、今村は1987年のスペイン・ルートを取り、9ピッチ延ばして7390m地点に達する。

#### □北壁は雪崩の饗宴

3日 前日の3人でC2のルート工作に向う。深いラッセルの後、5ピッチ延ばし上部雪田のロックバンドに達する。1ピッチ半下に絶好のキャンプサイトを見つけ、C2(7500m)とする。42ピッチの懸垂下降で取付点着いた途端尾形、今村は雪崩に襲われる。ザック類が流されたが危うかった。

6日 北壁は雪崩のオンパレード、荷上げを行った田辺、西川、石坂は逃げ帰る。

7日 ルート上はスノーシャワーのオンパレード。尾形、新郷、橋本、今村、田辺C1へ移動する。8日 ABCへ戻る。

11日 全員でABCへ移動。通訳の張さんから登山中止の勧告を受けるが、ミーティングで登山続行と決める。

12日 6名がC1へ移動。

13日 C2(7500m)の建設に向かう。

14日 尾形、今村、田辺で10ピッチルートを延ばし、上部雪田に達する。

15日 更に6ピッチ延ばしC3(8000m)に達する。西稜の風は凄まじい。ABCへ。

17日 全体ミーティングを行う。1mでも高く頂上に肉薄したことになり、今村・田辺に委ねることにする。

18日 今村、田辺C1へ。

20日 サポート隊4人はC3へ荷上げ。

21日 今村、田辺はC3へ。

22日 C3を10時半に出発し、ホーンパイン・クロアール6ピッチ登り8200m地点に達し、C3へ戻る。

23日 今村、田辺は登山活動を中止し、下山することを決定し、今回の遠征が終了。

## 45 1989・3~4 ネパール コンデ・リ6011m

○参加メンバー 隊長:中村貴士 隊員:豊田浩太郎、内田健一、小久保陽介

### ○登山概要

コンデ・リ峰はネパール、ロールワリン山群東部に位置し、ナムチエ・バザールの西側に聳えている。ルクラから北へ進み、ガートからモロ・ラを越え南面に位置するレンディン・カルカにBCを設けた。一般的な南稜ルートから攻めたが、雪稜が氷化しており予想以上の登攀を強いられ5800mで断念した。行き帰りの道中では珍事が多発した。

#### ・出国から登山準備 3/1~3/18

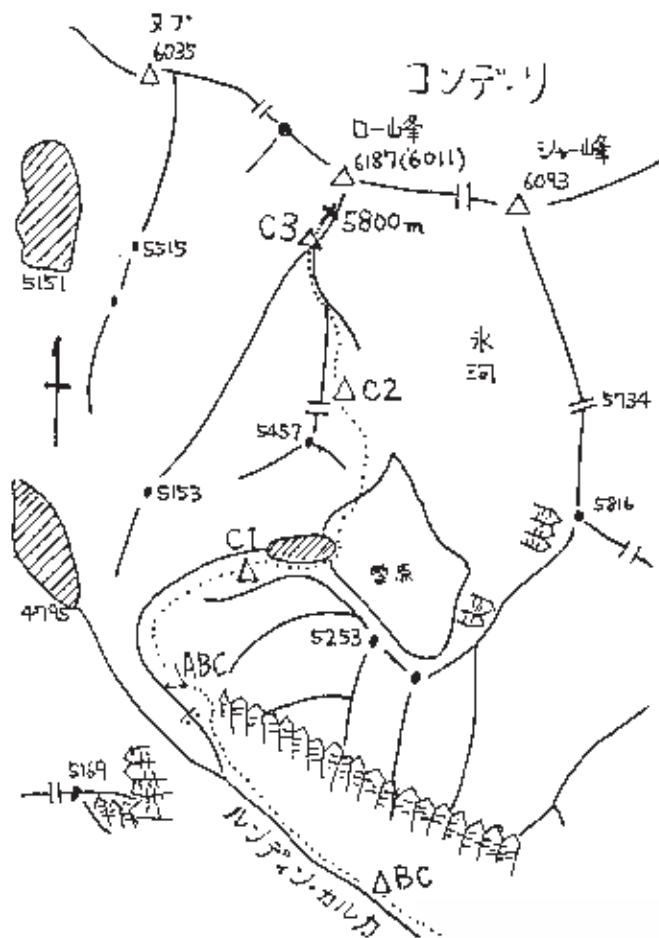
4日 カトマンズ→ルクラ。  
5~6日 バンコックで行方不明になった荷物を受け取るためにルクラで待機する。  
8日 キャラバン準備。  
9日 →ガート。  
10日 ポーターが強盗に遭ったため、高度順化を兼ねて偵察を行う。  
11日 →パクジュン。  
12~16日 連日の降雪の為高度を稼げず、またやむなくポーターを解雇する。  
17日 →モロ・ラ→レンディン・カルカBC。  
18日 デボ回収。

#### ・登山活動 3/19~3/31

19日 BCの位置が低いため、滝の上4800m付近にABCを設け、荷上げを行う。  
20日 ABC設営、夕刻に青山学院大学隊が登頂後、下山してくる。かなり手こずったようである。  
21日 氷河湖の南側5500m付近をC1予定地として荷上げを行う。  
22日 C1設営後三角形岩壁基部まで、荷上げをする。  
23日 C1から雪壁基部付近まで、ルートファインディングに苦労する。フィックス1本。

- 24日 C2予定地に荷上げ、上部にフィックス140m。  
25日 C2発、南稜の稜線までフィックス工作をする。稜線に出たところでコルがあり、C3予定地とする。南稜に沿って有るだけのフィックスを張る。  
27日 C2を撤収し、C1に戻る。ガイドのラクパ氏がC1を訪れ今後の打ち合わせをする。休養。  
28日 南稜のC3へ移動する。  
29日 降雪の為沈殿、積雪30cm程度。  
30日 アタック。6時半出発、緩い雪稜から次第に急峻となっていく、進むほど両側が切れ落ちてナイフリッジとなり、落ちればモレーンまで一直線。雪は氷化し、氷のピナクル等となり、岩稜帯までの200mは気が抜けない核心部であり、5P全て中村のリードで越えた。12時半に5800mの岩稜帯に着き、時間切れでC3へ引き返す。岩稜帯を見る限りでは、ボルダーが積み重なった様、3~4級程度の登攀と考えられる。  
31日 フィックスを回収し、BCまで下山する。
- ・帰国まで 4/1~4/17
- 4月1日 バックキャラバン開始→ガート。  
2日 休養。  
3日 装備売却の為ナムチエへ。  
4日 ナムチエ滞在。  
5日 →パクディン。  
6日 →ルクラ。  
7日 →カトマンズ、12日まで観光。  
14日 オーバーブッキングの為17日までバンコックに滞在。  
17日 成田着。

○コンデ・リ概念図



## 49 1991・8~10 ネパール マカルーⅠ峰登山隊8463m(ベルニナ山岳会)

○参加メンバー 隊長:今村裕隆 副隊長:長尾妙子  
隊員:二俣勇司、岡田勇孝、石坂工、野沢井歩

### ○登山概要

#### ・カトマンズ～ベースキャンプ

8月14日 成田→バンコック。今村、二俣、石坂、野沢井の4人で出発。

15日 →カトマンズ。長尾さん、シェルパの出迎えを受ける。

16日 市内めぐり等。

18日 食料・装備の買い出し。

19日 パッキング。岡田さん到着。

20日 食料のパッキング、プラパールの目止め。

21日 荷物のナンバーリング。

22日 ボダナートへ安全祈願。夕食はリエゾンと会食。

23日 野菜、果物を買い出し、最後のパッキング。チャーターしたバスに荷物を積み込む。ヒレに向かって出発だ。

24日 ケロシンが漏れ異様な臭い、チャーターしたはずなのに見知らぬ人間が何人も乗ってくる。途中道が狭いとのことで、小さいバスに乗り換えさせられた。ヒレに到着した。

25日 マンマヤ。朝起きると沢山のポーターが並んでいた。非常に暑い。樹林の中をアルン川を目指して下る。竹で作られたロッジに泊まる。

26日 ピウラ。今日は一段と暑い。田んぼの畦道を進み、2～3回渡渉する。ピウラの河原でテントを張る。

27日 ツムリンタール。今日も暑い。アルン川沿いの道から、一段高い丘陵へと登った。本日の宿、マカルーロッジに着く。

28日 マニバンジャン。

29日 チチラ。高度も上がり、いくらか涼しくなった。山裾から山頂まで見渡すかぎりの田畠だ。テントに泊まる。

30日 ヌン。学校の校庭にテントを張る。

31日 セドワ。今日は千m下って、千m登り、対岸のセドワにテントを張る。

9月1日 テシュゴン。最後の村。ヒルがやたらにいる。久々の小屋泊まり。2日 休養日。

### ○キャラバンルート 概念図



### ○登攀ルート図



3日 コウマダラ。今日はお花畠の中のテント場だ。

4日 ムンブク・カルカ。初めて4000mを超える。

5日 ネエ・カルカ。バルン川に下り、川沿

いに北上。久々の晴。

6日→メラ・カルカ。いくつかのカルカを越え、標高も4300m。

7日 ヒラリー BC。ゆっくりと登り4900m。

10日 BC。朝から雪。5300mのBCに到着。

12日 登山の安全を祈願してのプジャ。

#### ・登攀記

BC 長いキャラバンを終え9月10日に5300mのBCに着く。既に4隊入山し登山活動を行っている。12日安全祈願。

BC～C1(約6000m)

14日 北西稜のスペイン隊のトレースを辿り氷河盆地まで進む。氷河奥の雪壁を2ピッチ、フィックスし、チャゴ氷河に出た。既に、マカルー・ラに続くクーロアールに入り、マカルー・ラに登る予定だ。

15日 今村、二俣で6500m迄登り、クレバス帯を抜けた。C1とした。

C1～C2(約6700m)

18日 今村、二俣、岡田の3名は、C1を出発しクーロアール下の雪壁まで登る。雪崩の跡が数多くありテントサイトが見つからない。雪壁のクレバスの中をC2とする。

19日 C2までのルート工作を完了し、BCに下る。2日間の休養。

23日 今村、二俣、岡田がC2に入る。

C3～C4(約7400m)

24日 クーロアールの入り口、約7000m迄登ると、岡田が昨年痛めていた腰が悪化しBCへ下ることになった。2人でルート工作を行う。6ピッチでスペイン隊のルートと合流した。C3予定地のマカルー・ラ迄達し、C2に戻る。1日でマカルー・ラ迄登れたのは大変な成果で、アタックの見通しがついた。

25日 C3までの荷上げ、フィックスの追加。

26日 シエルバのサポートを受けC3入り。

C3～C4(約7800m)

26日 C3の夜から、睡眠用の酸素を使う。

27日 アタックキャンプの場所を決めるため出發。7600mのスペイン隊のテントの更に大雪壁をトラバースし、雪の斜面を掘りC4とする。後は一気にBCまで下った。

26日 長尾、石坂、野沢井がC2入り。長

尾、野沢井は風邪の為、BCへ下る。

27日 石坂単独でC3へ荷上げ、翌日シェルパ2名とC3入り、29日にC4に荷上げしBCに下ってくる。長尾、野沢井は、30日、10月1日で7500mまで往復した。

#### ・一次アタック

10月2日 隊長、二俣、岡田、サーダーの4人はBCを出発。4日C4に入る。酸素を使うがほとんど眠れなかった。

5日 快晴、4時出発。雪原を左へトラバースし、尾根状のセラック帯に突き当たり、右上するランペに入る。氷の露出した部分にフィックスする。傾斜は50度位だが、8000mで、ダブルアップスは疲労が激しい。みっともなくアップスにしがみついて休み、やっとの思いで雪面まで迄登る。二俣は一番後ろに回る。岡田がトップになり右寄りに登る。トラバースの終点の大岩を回り込みクーロアールに入る。抜け出すと雪稜に出る。岩を回り込んだ先が頂上。岡田10時55分に登頂、隊長とサーダーは11時50分、二俣は12時8分。12時15分に3人で下降する。16時10分、C4帰着。

#### ・二次アタック

7日 石坂、長尾、野沢井、フルギャルゼンで3時30分C4出発。野沢井が遅れ、8100mのスペイン隊のテントで待つ。野沢井、フルギャルゼンはC4に下る。11時20分長尾、石坂スペイン隊のテント出発。15時40分長尾登頂、55分石坂登頂。約8200m地点で雪洞を掘ってビバーク。

8日 石坂トレースの跡歩けず、ザイルを出す。数十mにかなり時間がかかる。石坂トラバースから滑落。長尾引き返し助ける。固定ロープの終了点に雪洞を掘る。長尾幻聴を聞くようになり、頭がボーとする。

9日 朝、固定ロープの途中で石坂の遺体発見。8時過ぎ、今村と交信、13時頃C4到着。15時過ぎ今村と交信。19時C3着。

10日 18時20分、BC着。

#### ・帰路

12日 キャラバン開始。

19日 カトマンズ着。

## 50 1991・3～5 インド カンченジュンガ北東稜8586m 日印合同隊 (HAJ)

○参加メンバー 隊長：尾形好雄 登攀隊長：名塚秀二 隊員：吉田秀樹、田辺治、江塚進介、後藤文明、小田隆三、星野龍史、新郷信廣、今村裕隆

### ○登山概要

#### ・ヒマラヤの桃源郷 に向けて

3月8日 デリーでの出発準備を終え、シッキムへと向う。4時間遅れてバグドグラ到着。マイクロバスに乗り出発。シリングに立ち寄りランプーに到着。橋を渡るとシッキムとなる。首都ガントックに19時20分に着いた。

9～10日 近くの僧院で普ジャをしてもら

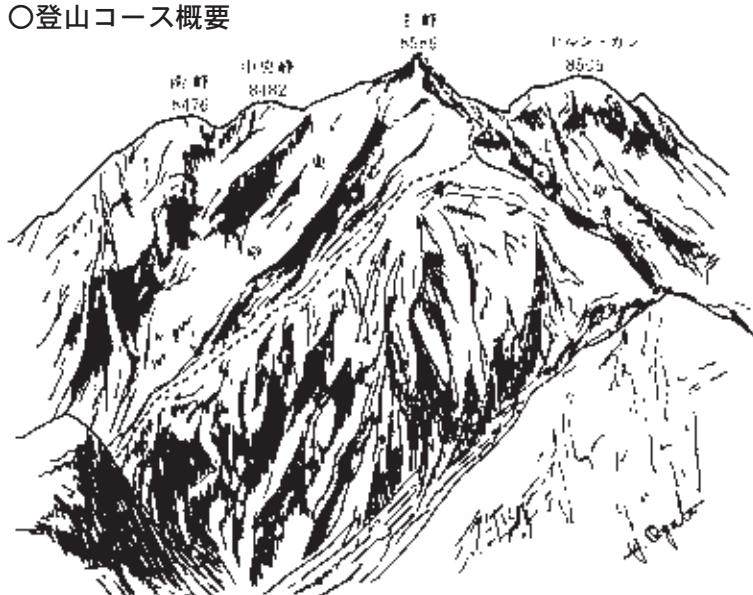
う。シッキムの観光省、軍等関係機関を歩き回るが、隊荷のトラックが遅れたため6日間もの滞在を余儀なくされた。

14日 シッキム州政府庁舎前でフラッグ・セレモニーを行う。モンスーンのような雨の中の出発となった。ノース・シッキム・ハイウェーを走る。ラチエンのゲストハウスに到着した。15日はラチエンの裏山にある僧院で普ジャを行い、キャラバンのスタート地点タングーに出発する。ゼム渓谷にかかる橋をわたり、九十九折りの登りで高度を稼ぐ、ティスター渓谷右岸を進む。一気に4050mの高度に上がり、冬景色と一変する。

#### ・BCへの長いキャラバン

プレシーズンにBCに入るルートは二つある。ゼム渓谷を進む、一方は三つの峠を越える北方ルート、ともに雪がなければ3～4日で着く。後者のみがヤクが使えるため今回は峠のルートとなった。その結果、

### ○登山コース概要



BCまで40日間を強いられてしまった。

16日 ルンナク・ラ(5035m)が雪のため通れない。道づくりを開始。

23日 名塚、小田、後藤は峠を越え、インドメンバー3人と31日にBCに到着した。残りの隊員は隊荷の動きを見ながら移動した。タンギーの次はムクタン(4600m)、次はテウラチャ(4350m)のキャンプ地である。そして、最後の難関タン Chern La (5150m)。しかし、ヤク越えは無理のためポーターに替えた。そして、我々のBC入りはバラバラとなり4月28日と約1ヶ月もの開きができてしまった。

#### ・北東支稜にルートを求めて

31日にBC入りした先発隊は、4月1日ABC予定地まで偵察したが、その後の補給が続かず先へ進むことができなかった。

10日よりABCへの荷上げを開始し、15日にトウインズ氷河が出会うゼム氷河本流上

にABC(5200m)を建設した。名塚パーティがC1へのルート工作に向かう。

16日 アイスフォールに13ピッチのルート工作を行った。17日C1(5700m)予定地に到達した。19日には双方の隊長とメンバー5名がC1に上がった。凄まじい東壁からの雪崩の雪煙をかぶる。ここは避け、北東支稜と決定した。

20日 C1建設。尾形、吉田、田辺、パサン、サルキ、ゴンビの6名が入る。21日からドイツが名づけた“鷲の巣”に向かってルート工作をしていく、20ピッチ固定ロープを延ばして6150mまで到達した。22日は尾形、吉田、田辺、パサンで4ピッチ延ばしてC1に戻る。23日、同じメンバーでモンスターの雪の下を潜りぬけ、氷壁をトラバースルートを延ばした。24日からは名塚パーティが2日間で4ピッチと、悪戦し、25日 C2(6300m)予定地に到着した。27日にC2設営。28~30日間で名塚パーティが9ピッチルートを延ばした。

5月1日 吉田パーティが6500mまで延ばした。2日には10ピッチルートを延ばしC3予定地(6800m)に達した。

4日 尾形パーティがC3を建設した。

5日 尾形パーティは7ピッチのルート工作をした。

6日 同じメンバーで7ピッチ進み7250mまで到達した。

7日 小田、後藤、シャルマ、サマンラがC4の目どをたてた。9日 C4建設。

10日 名塚パーティが13ピッチ延ばし、北稜に続くアレートに達した。

12日 吉田、田辺、ロブサンはC5へのルート工作に向かいアレートを突破した。

13日 吉田とチョルテンはC5の7650mまで達した。15日インドメンバー中心でC5設営。16日8000mまで行って、C5に戻る。

## ・栄光と悲劇

17日 C5のインド隊員4名は、C6予定地にテント等をデボし、頂上へ向かった。どういうわけかウエスタン・コルに向かわず頂上岩壁の方へのルートを選んだ。トップで登っていたパサンが岩場をスリップして行方不明となった。何故、C6を作らずアタックを敢行してしまったのか。シン隊長の命令を無視してまで登り続けたのか、BCへ降りてきてほしいとの事で話し合い、登山続行と決定する。

20日 名塚、今村、小田、後藤でC4からC5へ荷上げ。

21日 名塚、今村、小田、後藤、吉田、田辺、新郷、星野がC5へ移動した。

22日 ガンジー首相の暗殺が報じられ暗く沈んだ。第1次アタック隊名塚、今村、小田は吉田パーティのサポートをうけてC6に向かった。しかし、デボが見つからずC5へ引き返した。

23日 C6予定地に到着し、吉田、田辺、新郷、星野はC5へ帰着。

24日 ついにアタックの朝を迎える。名塚、今村、小田はルンゼを抜け、上部雪田を登る名塚から11時50分登頂の報が入る。15時23分小田と今村が登頂。22時47分C5に到着。

25日 シャルマ、サマンラ、カネヤ・ラルも14時30分に登頂する。モンスーンの足音に脅え今後の頂上攻撃は閉幕とする。

26日 上部キャンプの撤収を慌ただしく行い、30日午前中までにすべてBCに運び降ろされた。

## ・エピローグ

今回の遠征でHAJは世界で唯一カンチを西側と東側登ったことになる。今回の遠征では最終ステージで合同隊のデメリットを日本隊側がかぶってしまったようである。

## 51 1991・7~8 天山 ハン・テングリ7010m・ポベーダ7439m (日本勤労者山岳連盟)

○参加メンバー 隊長：近藤和美 隊員：牛山寿宏、倉橋秀都、桑原巖、溝手康史

### ○登山概要

7月15～16日 新潟空港～ハバロフスク～カザフ共和国～カルカラ

18～19日 4000m峰で順応(中央天山の眺めが素晴らしい。)

20日 ヘリでBC(南イニリチエク氷河とズベルドーチカ氷河の出会い)

21日 BCから南イニリチエク氷河をつめ、ハン・テングリC1(4350m) 設営

白く輝く大理石稜が美しく、ピラミッド型に聳えるハン・テングリに見とれる。行けども行けども迫らぬ山容に、天山の山々のスケールの大きさを実感した。

23日 BCからC1荷上げ 4650mまで順応 C1泊

24日 BCに戻りC1まで荷上げ

25日 C1からセミヨーノフスキ氷河を登り、C2(5200m) 設営 C1泊  
南イニリチエク氷河を挟んで、ポベーダが美しい雄姿を見せ感動する。

26日 C1からC2荷上げ、C3(5900m) 順応  
セミヨーノフスキ氷河には、右ハン・テングリ側と左チャパーエフ側上部に巨大セラック張り出す。チャパーエフ側のセラック崩壊雪崩を目撃して驚いた。

27日 C2撤収、C3設営泊 C3には大きな雪洞が掘られており造った人の苦労が想像される。

28日 C3から6000mまで順応後、C3に荷物をデポし、BCへ下る。

30日 午後BCからC1入り

31日 C1からC3

8月1日 C3からC4(6200m)

2日 C4 4時発～14:20ハン・テングリ登頂～C4自分としては初めての7000m峰を、全員で登頂できたことに感無量でした。

9日 BCからズベルドーチカ氷河をつめ、ポベーダC1(4400m) 設営。

10日 C1からC2(5200m) 大きな雪洞が掘られており感謝しながら使用した。

11日 C2からC3(5750m)

12日 C3からC4(6450m)

13日 C4からC5(6770m)

ポベーダ西峰 カザフ隊によってここにも雪洞が掘られており、感謝しながら利用させて頂いた。

14日 頂上アタックの日

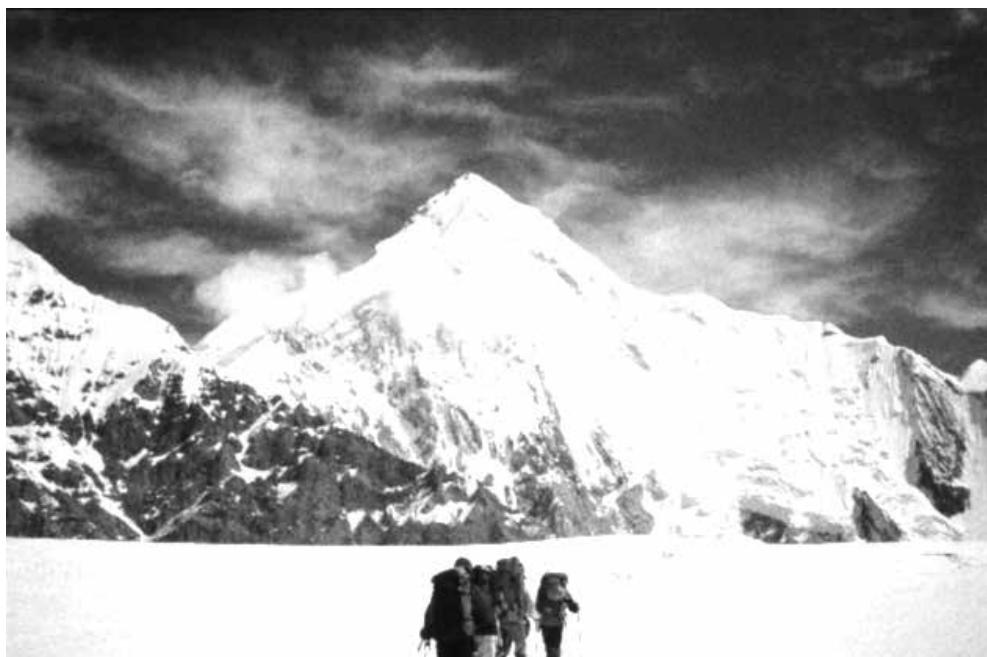
昨夜から吹雪のためしばらく停滞。天候回復の兆しがあり、8時にC5発。ポベーダは、西峰から7kmの稜線を3km歩き、最後500mの登りは雪壁やナイフリッジを慎重に通過すると、なだらかな台地上の山頂となる。13時55分ポベーダ登頂～C5。この山の難しさは、7000mラインが3km続くところにあることを、下降時に実感した。

15～16日 C5からBC帰着。

BCの人々が登頂を祝ってくれる。

---

<ハン・テングリ BC～C1へ>



<左上：ポベーダ 下：南イニリチエク氷河 上：ズベルドーチカ氷河>

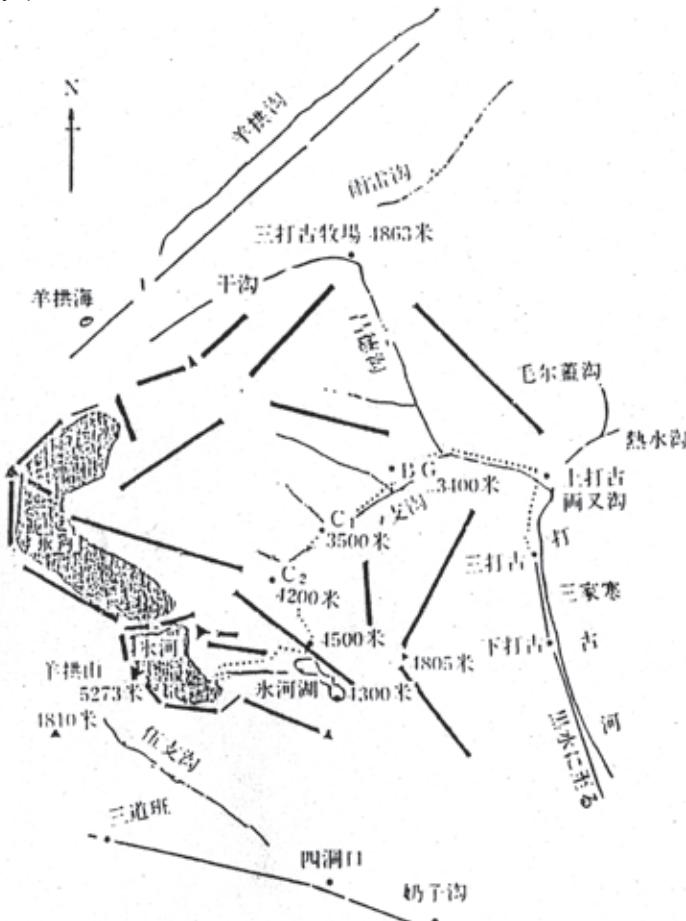


52 1991・7~8 中国・四川省 ヤンゴンシャン 羊拱山 5273m (日本山岳会宮城支部)

○参加メンバー 隊長:佐々木郁夫 登攀隊長:西郡光昭

隊員:佐々木豊喜、吉野禎造、遠藤昭治、千田早苗、星勝男、熊谷藤子、中里武信、庄司駒男、張堯学(中国側隊員)

○羊拱山スケッチ



○位置

中華人民共和国 四川省 クオン・レイ山脈北部 岷江支流 黑水河上流  
三打古河源頭にあり未踏

○結果

8/4 BC ~ /11 5名で頂上(5200mから上部に小氷河あり)

○登山概要

7/29 仙台～上海  
/30 上海～成都  
8/1～/3 成都～茂木～黒水県～三打古(車両)  
/4 三打古牧場経由BC(3400m)  
/6 C1(3500m) 上部に氷河湖  
/9 C2(4200m)  
/11 C2発 隊員5名で登頂、帰途

---

3名は4500mにてビバーク、2名はそのまま下降しC1へ。

/14 全員BC集結

/15 撤収、三打古へ、往路を辿り成都へ。

/19 成都～北京

/20 北京～成田～仙台

### ○謝辞

中国登山協会、日本ヒマラヤ協会雪宝頂隊(山森欣一様)に感謝いたします。

### ○参考資料

羊拱山登山隊始末記(日本山岳会宮城支部・佐々木郁夫) 1992・10・30



ブルーポピー

## 55 1991・7~8 パミール国際キャンプ 三山連続登山（東海山岳会）

○参加メンバー 隊長：田辺治 副隊長：江塚進介  
隊員：川口攻、河西貴史、橋口徹、小川裕正

### ○はじめに 田辺 治

パミール国際キャンプは毎年、何百人という人が入り、ルートには行列ができるような山である。ヘリコプターがベースキャンプまで運んでくれるし、食事まで出る。7000m峰3山に登っても記録的な価値は何もないが、ただ自分達の山登りができたことに満足している。

### ○登山概要

#### ・コルジェネフスカヤ峰 (7105m)

7月14日 田辺・江塚は体調チェックとルートの確認のため、モスクビンBC(4200m)からC1(5100m)まで往復する。9:10、BCを出て、キャンプ裏手からモスクビン氷河に入る。セラック帯をぬい、氷河を横断した。ここからC1まではしっかりした登山道がついている。標高差400mを3時間で登る。帰りモスクビン氷河を一人で下ったが突然の地震が襲う。コミュニズム峰北壁から雪崩が次々に発生してワルテル氷河をデブリで埋めつくした。幸い、地震は一瞬におさまり、脱兎のごとく氷河を抜けだした。早朝以外、氷河に入るときはザイルを付けることを心に決めた。

15日 6時出発。コミュニズムに笠雲がかかり悪天の兆し、C1まで登る。5日分の食料、燃料、装備一式を持っているため、さすがにペースはあがらず4時間かかった。

ソ連パーティが沢山登ってきた。たちまち30張り程のテントの花盛りとなった。

16日 7時半出発。アイスフォール帶左端の雪壁を登り、右へトラバースすると第2プラトー。急雪壁を登り岩壁帶の下がC2(5800m)。明日の晴天を祈りつつ、シュラフに入った。

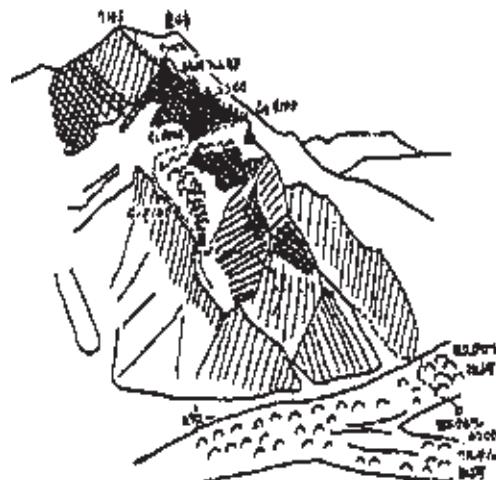
17日 快晴である。4時半アタック開始。

フィックスロープに導かれ45分でC3(6100m)リッジに飛び出す。リッジぞいの岩稜をフィックスを頼りに登る。5時45分、6300mのキャンプサイトに着いた。ここには、ソ連

のトレーナーテントがある。膝程度のラッセルをしながら3つのジャンダルムを越えて行く。本峰の登り口に巨大なクレバスがあり、腰までのラッセルを2時間したが300m程しか進まない。ザイルをつけてスノープリッジを渡り、氷壁を登り切る。雪のルンゼ、雪壁を登り14時稜線に立った。視界ゼロで周辺を確かめようがなく、一応ここを山頂とした。江塚さんの顔はバリバリに凍りつき悲惨な顔をしていた。ルートを探しながら、苦しいラッセルをしながら6300mのテントサイトに着く。C2までの長いトラバース、深いラッセルで消耗しきってしまった。20時C2に帰り着いた。長い戦いだった。

18日 一夜明けると快晴だった。天候判断を完全にミスした。2時間でC1着。

### ○コルジェネフスカヤ峰ルート図



#### ・コミュニズム峰 (7495m)

7月26日 晴、ワルテル氷河の横断を終え登りに入る手前でアイゼンをつけ田辺、河西、橋口、小川、江塚の順で出発する。トレースは残っているため問題はない。デブリの中を通過し、ガレと雪のミックスし

た斜面を登ると5m程の垂直な岩場に残置フックスがあらわれユマーリングで登る。この前6000mでの順応が功を奏したのか、予想以上に早くC1(5100m)に着いた。

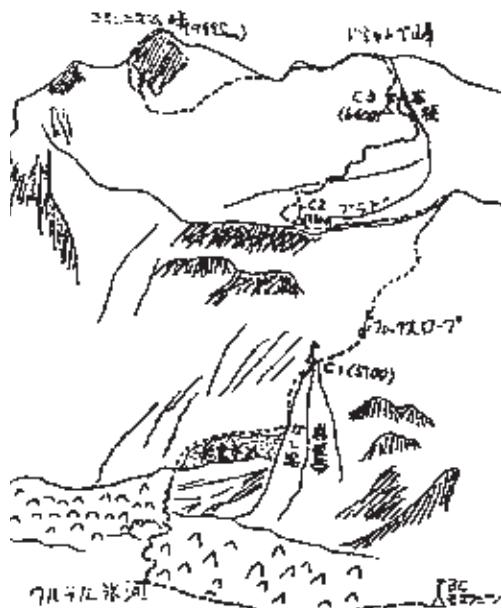
27日 晴、夜半風が強かったが、明け方外をのぞいてみると快晴であった。この前ルート工作した5400mの雪壁はユマーリングで通過する。キロフ峰(6372m)、フォルタンベック氷河を隔てモスクワ峰(6885m)の双耳峰、レニングラード峰(6507m)が見渡せる。真後ろを振りむけばコルジェネフスカヤ峰が飛び込んでくる。10m程の雪壁を巻き上に出る。トラバース気味に進み、クレバスなどを避けながら、プラトーにあるC2(6100m)に着く。

28日 晴、先行したソ連人トレーナー、韓国隊のトレースがあり、それらを使って登っていく。高所の影響や雪が中から腐っていることなど辛いものがある。他のメンバーが来るまで田辺さんとアタックの検討をした。結局全員で行くこととする。6300mに雪面を削りC3を設営した。

29日 晴、ついにアタックの日がやってきた。天候不順で2日遅らせたためアタックは1回のみである。満天の星が今日の晴天を約束しているようだ。テントの外に出るとまだ暗く、風も冷たい。ヘッドランプをつけて出発、快調で1時間で200mの高度を稼いだ。急な登りが穏やかになり、そこがドシャンベの頂上である。気温も下がり、風は一段と強まり頬骨のあたりが刺さるようだが頂上は正面に見える。慎重に歩き頂上直下の西壁の基部に達する。ここから左に左にと西壁を斜上し、頂上の左の肩に出る。150mトラバース、広大な斜面に出る。体力勝負で進む、最後のフックスを越すと頂上に続く稜線に出た。痩せた雪稜を150m程行くとフックス。雪稜は急に緩やかになり頂上だ。どこかの国旗がはためいている。4人揃ったところで写真を撮り頂上を辞した。ドシャンベ峰の手前のコルに着いた時は急にホッとした。ここから長いくだりが続き、いい加減歩くのが

嫌になる。日没寸前C3に転がり込んだ。30日 晴れのち曇り。天気はもったが体はボロボロだ。C1に着くころにはだいぶ回復し、懸垂氷河のトラバースも無事終えワルテル氷河に降り立った。既に17時半、BCに着くころには真っ暗になっていた。

### ○コミュニズム峰ルート図



#### ・ レーニン峰 (7134m)

8月2日 今日はアチクタシBCからC2までの予定で、6時にソ連のトレーナーの車で送ってもらった。遅くなつたためC1泊まり。3日6時に出発しC2に向かつた。途中いくつかのクレバスを越え、C2から少し登った尾根にテントを張る。

4日 今日も6時出発でC3に向かつた。なだらかな丘を越え、急な登りを過ぎ、少し下つた所がC3の場所だ。

5日 今日はいよいよアタック日だ。4時出発、昨日までと違い風が大変強い。休む時はツェルトをかぶつた。13時30分頂上に着いた。ブリザートの中C3に17時到着。

6日 7時50分出発。昨日の疲れが残り全然だめだ。尻セードなどで下り、途中ソ連のトレーナーと一緒にヘリコプターに乗せてもらえることになった。無事下山。

## 56 1991・10～92・2 ネパール サガルマータ8848m(群馬県山岳連盟)

○参加メンバー 総隊長：星野 光 隊長：八木原闇明 副隊長：尾形好雄

登攀隊長：名塚秀二 隊員：吉田秀樹、橋本康弘、木村文江、田辺 治、

江塚進介、佐藤光由、小西浩文、小田隆三、後藤文明、星野龍史、松崎宣行、

秋山 剛、吉村哲明、長久保豊

### ○登山概要

#### ・冬期サガルマータに向けて

‘91年の春カンченジュンガ遠征でゼム氷河から北東支稜から日印双方から3名ずつ登頂を果たし、他のメンバーのほとんどが8000mラインを突破してプレ登山を終了した。一方、カンチに参加しない隊員は小西、吉村はブロード・ピーク8047mに登頂し、橋本はヌン7135mに登頂しての参加であった。また、田辺、江塚は夏の国際パミール・キャンプにも参加し、コミュニズム、レーニン、コルジェネフスカヤの3山に登頂などほとんどの隊員が高所登山を経験しネパールに集合した。

#### ・BCへのキャラバン、高度順応

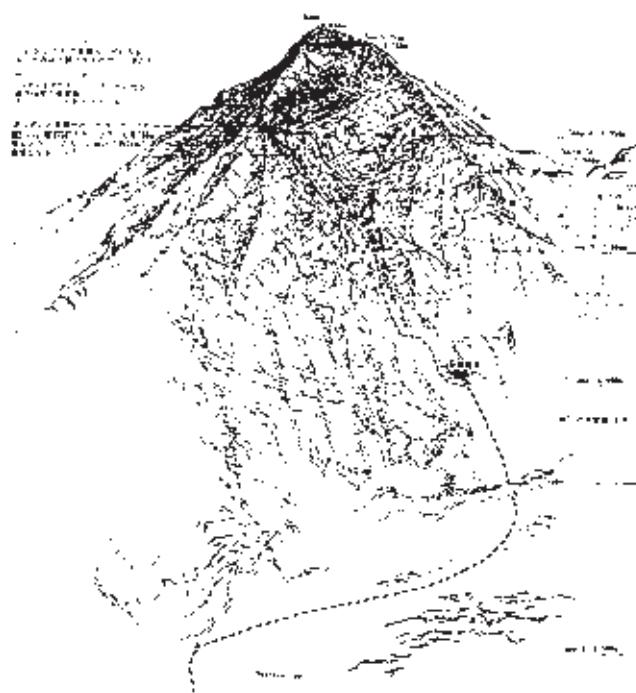
10月21日 4隊に分かれた本隊の殿でカトマンズに到着。既に、先発隊が全ての準備が終了していた。

26日 カトマンズを発ち、ルクラに泊まる。翌日シャンボチエに降り立つ。名塚、木村が出迎えてくれ、ナムチエ・バザールへ下る。153個の隊荷がヤクによって輸送される。

28日 第3陣のヤクと共にキャラバンを開始する。

31日から11月4日 後発隊もペリチエでの第1次高度順応訓練に入った。ペリチエの背後に聳える5099m峰で行われた。ここを終了した者から順次ロブジェに上がり、第2

### ○サガルマータ南西壁



次高度順応訓練に入った。ポカルデ・ピーク5806mで行われた。

#### ・南西壁イギリス・ルートより

11月11日に第一陣がBCに入り、以後16日までにドクター（吉村）と松崎を除く全員がBCに集結した。近年、1シーズンに何隊もの登山隊が入山する。最初アイスフォール帯のルート工作をした隊が通行料を徴収するという。しかし、冬期は韓国と2隊なので共同でルート工作することにした。

17日 チベットでよい日ということでプロジェクトを行う。

11月20日から隊員の6000m台の順化を図

るためC1への荷上げを開始した。30日には-30℃まで下がった。風の方も27日から30日にかけてゴーゴー唸り始めた。

#### ・冬期南西壁登攀開始

12月1日 プジャの後尾形、名塚パーティとシェルパ9名がC1に移動する。アイスフォールがC1のプラトーから押し出されて落下し始めるところが一番悪い。ヤバイ所だらけであり、いつ崩れてもおかしくない。C1 (6020m) は前後にクレバスが口を開けている。C1から上はアイスフォール<sup>あくぜつ</sup>帯のような悪絶さはなくなり、その代り巨大なクレバスを右に左に大きく迂回しながらルートをとる。ロックバンドの下部もイエロー・バンドの下もうまい具合に雪がついており安堵する。C2 (6500m) は、ウエスタンクームから一段上がった西稜寄りの氷河上で、快適なキャンプサイトである。

2日 名塚等南西壁のルート工作に向かった。基部6700mのシュルントを越え2ピッチルートを延ばした。翌3日は35度位の氷雪壁にルートを延ばし、軍艦岩に到着した。

5日 尾形パーティとシェルパでC5(6900m)を設営。尾形と吉田は上部のルート工作に向かう。6日も同様に尾形パーティがルートを延ばす。この日は、9.5ピッチ約7350m地点まで行動を打ち切る。

7日 5ピッチ目で後藤が落石を受け、一気にC2へ下った。

8日 田辺、小田は前日の最高地点から1.5ピッチ延ばしC4 (7600m) 予定地に到着した。

9日 C4予定地に3張りのスペース確保。

11日 名塚パーティはC4設営。

12日 名塚パーティ左クロアールに入った。

13日 同様に6ピッチのルート工作。

14日 8000mを越え登高スピードが落ち酸

素使用。佐藤が前日より2ピッチ延ばした。

15日 尾形パーティがクロアール攻略に向かう。調子のいい尾形が単独で進む。

16日 尾形、後藤はついに核心部のロックバンドを突破する。C5の中途をつけC4へ下る。

17日 橋本パーティがキャンプサイトを探すが見つからずC4へ。

18日 この日もC5設営ならず。

21日 尾形、後藤、パサン・カジでC5 (8350m) 建設をするが強風とパサンの体調が悪くC4へ戻る。

21日 パーティを再編しC5建設に当たるが、強風のためC2へ下る。

23日 ついに冬の嵐が吹き荒れた。全隊員がC2に集結した。

24日 強風おさまらず。BCに下った。

#### ・再度南西壁へ そして、登頂断念

BCに下って5日目。31日から登山活動開始。名塚・吉田パーティはアイスフォールの崩壊のため再びC2に戻る。明けて92年元旦 前日の2パーティがC2へ。

2日 吉田パーティはC3へ。

3日 C4へ。しかし、この深夜から山は再び猛威を振るい始めた。

4日 C2まで下りる。吉田が両手の指8本に凍傷を負う。

8日 名塚パーティはC5建設に向かう。8350mに設営する。16日まで天候が安定せずBCへ。

#### ・ラストチャンスに賭けて

25日から行動を再々開。

29日 強風の隙間をぬってC4入りした橋本パーティ、C5設営に失敗。

30日 尾形、小田が向かうがシェルパの体調、装備不足で断念。2月に入ても天候が回復せず、登頂を断念した。

## 57 1992・7~11 中国 クラウン峰7295m遠征 (HAJ)

○参加メンバー 隊長:山森欣一 副隊長:出口當 隊員:橋本康弘、**二俣勇司**、斎藤繁、木辺正夫、田村正勝、滝田収、秋山和彦、中川裕、橋本珠樹

### ○登山概要

#### ・ベースキャンプ迄

7月14日に成田を出発し、当日北京に着き、翌日ウルムチに到着する。

16日 天山、崑崙を越えてカシュガルに21時46分着いた。

17日～8月15日までムスターク・アタ登山。

16～18日 クラウンに向けて梱包。

19日 ジープ3台、トラック1台で出発。

20日 イエチェン着。

21日 キャラバン開始(オーストラリア隊と写真撮影の安藤隊の3隊合同で)

22日 ラクダ44頭で出発、18時30分イリクに到着。

23日 いよいよ大河スクルワット河を進む。

24日 中流のゴルジュ帯から高巻き、アギール峠の登りと続く放牧地のカルカ4410mに着く。

25日 アギール峠の下は幾つもの沢が合流する。シャスクガム河を渡渉し第一大赤柳灘に着く。

26日 シャスクガム河のキャラバンは、傾斜の少ない河床を進む。一番は渡渉が大変である。

27日 南から流れ込むサルポ・ラッゴ河に入る。インホンタンに入る。

28日 久しぶりに雨となった。今日の行程は短く、インスガイティ川の河原をつめて16時標高4000mのベースキャンプ地に到着した。

#### ・登山活動

8月29～31日 ラクダ10名により4250mのC1荷上げ。

9月2日 ABC隊共にC1入りをし、A隊はC2

### ○クラウン周辺概念図



### ○クラウン東壁・南東稜ルート図



のルート確定する。

3日 小雨降る中6名で出発。A隊はC2入り、BC隊は荷上げしC1へ。D隊がC1入り。

A隊 橋本康、秋山 C2 4400m

B隊 二俣、中川 C3 5100m

C隊 田村、滝田 C4 5800m

D隊 山森、斎藤 C5 6500m

出口、橋本珠

4日 A隊はフィックスをしC3を往復、B隊はC2入り、CD隊はC2への荷上げ。

5日 AB隊でC3へ荷上げ、3時間少しで着く。

6日 全体休養日。

7日 B隊はC3入りする。荷上げのA隊と共にC2発。テント設営後B隊はルート工作、ルンゼ、3級程度の岩場を越し、ロープを固定し下る。

8日 昨日の終了点から二俣トップでスタート。12ピッチ目で尾根を回り込みルンゼに入る。本日14ピッチ、計17ピッチを終了し下降。

9日 朝より雪、全体停滞。

10日 雪が降りやまず停滞。

11日 B隊C3からの逆ボッカ、膝上のラッセルだ。途中荷上げに来たA隊と出会う。C3に戻ったのは17時45分。

12日 B隊はすっかり雪原となった氷河をラッセルし、埋まったロープを堀りだし苦労する。4ピッチ張って終了する。A隊C3入り。

13日 B隊がC4までのルート工作。A隊が同地点までの荷上げ。ひどいラッセルを進み24ピッチアイスピトンで支点をとり、最終ピッチは右方向にロープを張り、下る。

14日 CD隊でC2～C3への荷上げ。だいぶ雪が溶けている。D隊はC2へ、B隊はC4へ荷上げに行き戻り、C隊と共にC3に泊。昨日C4入りしたA隊は降雪についてルート工作。ロープ15本を張った。

15日 BC隊はC4への荷上げ、12ピッチ左後方にチョゴリが大きく聳えている。15時50分着C3戻る。A隊は昨日に引き続き4ピッチ伸ばした。

16日 C4の荷上げはC隊の2人だけ。他の隊はC5予定地を確保しC3まで下る。A隊はC5予定地を確保した。隊長とABC隊の7名の賑やかな一夜となった。

17日 B隊の二俣、中川がC4に入り出口、

斎藤、橋本珠がベースキャンプに。

20日 B隊は今日から3日間C5の荷上げ。

21日 A隊がC4に入りA字状ルンゼ突破へ。

22日 C5設営。

23日 A隊A字状雪田の入口、スノーシャワーがすごい。

25日 1ピッチ工作終了、橋本絶不調。BD隊はC4へ移動。出口副隊長C3へ。

26日 B隊はC5へ、今日も良い天気。チョゴリを始め素晴らしい景色。C5から降りてきたA隊と会い情報交換、なかなか手ごわそう。

27日 今日もピーカン。8ピッチ目から左上気味となり、インゼルを乗越して14ピッチでA字ルンゼの取り付きに着く。イギリス隊のロープが見え、ガリーに入る。落氷、落石がすごい。ロープを固定してC5に20時20分着。

28日 最高点より左にトラバースし残置ロープ沿いに登りルンゼを抜け、リッジに出る。頂はすぐそこに見える。C5へ。C隊はC6への荷上げのためC3発、C4へ。A隊C3休養。

29日 B隊はC3へ下降。A隊はアタックのためC4へ。C隊はC5へ移動。

30日 AC隊強風のため停滞。

10月1日 風雪のためAC隊C3へ下降。

2日 B隊はC3を10時45分に出る。軽雪であったが、20ピッチからは腰以上のラッセルとなる。中川が25ピッチめ、二俣が24ピッチの半ば16時55分頃と推定。雪崩発生し、二俣遭難する。

3～5日 二俣の捜索活動。

9日 悪天のためアタックを断念。

15日 ベースキャンプ撤収し、帰路へ。

## 58 1992・9～10 アンナプルナⅡ峰北面・プー・コーラ偵察

○参加メンバー 隊長：田辺治 隊員：河西貴史

### ○登山概要

1982年のガネッシュ・ヒマール以降信大学士山岳会としての組織だった遠征を行っていなかった。その一方中堅若手OBは他組織の遠征に参加したり、ライトエクスペディション等により経験を積んできた。そこで1992年春にOB有志により会としての遠征を組織しようという気運が高まり、信州大学ネパールヒマラヤ実行委員会設立準備会が発足した。協議した結果、当面の目標をアンナプルナⅡ峰北面と定めた。また会員の渡部光則からプー・コーラ源流の未踏峰についての情報ももたらされた。そこで1992年秋にOBの田辺と河西(会5)をネパールに偵察隊として派遣することになった。

9月12日 成田発バンコックへ。

9月14日 バンコックからカトマンズへ。

15～18日まで観光省、日本大使館等で情報収集。ガイド手配、買い出しなど偵察準備。

19日 カトマンズからデュムレ、バス故障のためカリマティ周辺泊。

20日 途中でポーター1名雇う。ベシサラ泊。

21日 バフンダンダ泊。

22日 チャムジェ泊。

23日 バガルチャップ泊。初めてアンナⅡ峰北東稜を目にする。

24日 バラタン泊。

25日 バラタン村よりカンバ・コーラをさかのぼりラムジュン・ヒマールBCを目指し4040m付近まで登る。天気は良いがアンナⅡ北東稜は常に雲の中。昼過ぎにバラタンへ下山。ピサン村泊。

26日 サラタン・コーラを遡り4200m付近にBC設営。

27日 午前中休養、午後北東稜の末端のコルへ試登。

28日 北東稜試登。扇状雪田から中央ルンゼを5000mまで登る。いったん下降後、右手の緩傾斜帯を試登。

午後になると落石が多発する。

29日 おとといのコルへ再度登りルート観察。ピサンへ下山。

30日 休養日。

10月1日 プー・コーラ源流偵察のためデオラリ峠を越えホンデへ。  
ナガワル泊。

2日 カンラ峠を越えナルガオン泊。

3日 ナル・コーラへ向け下降。プー・コーラを遡る。廃村チャコを経由しプーガオン入口で幕営。

4日 プー・コーラ源流を遡りヒムレン・ヒマール西尾根の末端に取り付き5600m付近まで登る。ラトナチュリの山容を確認し、幕営地へ戻る。

5日 未明より雪。たいして積もることがなかった。昨日のうちにラトナチュリの偵察ができたことに安堵する。ナルガオン泊。

6日 カンラ峠を越えナガワル泊。  
その後ホンデより空路ポカラへ。ポカラからバスでカトマンズへ。

カトマンズで飛行機にて上空よりアンナプルナ偵察。北面まで回り込むことが出来なかつた。

10月20日 カトマンズ発。バンコック経由で  
21日 成田へ帰国。

## 59 1993・8~10 ネパール・アンナプルナⅡ峰7937m北稜偵察隊

○参加メンバー 偵察隊リーダー：吉田秀樹、澤田克彦、豊田浩太郎

### ○登山概要

#### ・キャラバン

8月末日 豊田カトマンズ入り。

9月6日 吉田、澤田カトマンズ入り。(株)日さく訪問。7~8日 トレッキング準備。

9日 カトマンズからバスにてデュムレ。

10日→トゥレトゥレ。トラックが故障し途中より徒歩でボテオラ迄。

11日→ベシサラ→ブレブレ。

12日→シャンゲ→ジャガット。

13日→タル→バガルチャップ。

14日→チャーメ→バラタン。

15日→ピサン。

ベースキャンプの位置を確認するためにサラタン・コーラに入る。ブッシュが多く確認できず雨のためズブ濡れとなる。

16日→アンナプルナⅡ峰北稜ベースキャンプ地(4200m) 着。ポーターを3人雇う、ベシサラまでトラックは可能であるが故障や道路崩壊が多いので考慮しないほうが良い。デュムレから8泊9日かかると思われる。

#### ・ベースキャンプより偵察

17日 C1位置の確認

6時30分出発、4450mの丘、横断バンド右端の岩場下部より吉田トップでフィックス。横断バンド右端よりアイゼン装着。傾斜した雪のバンドをノーザイルトラバースし、バンド中央部。ここよりスタカット吉田、澤田が進む。豊田落石を腕にうけ、中央部で待機。4ピッチ進んだ後C1(5000m)を確認しBC帰天。

18日 C1へ荷上げ。

横断バンド中央部時々落石あり。2のガリー偵察。ここは難しく、落石、チリ雪崩と危険が大きく登るべきルートではない。(澤田)

19日 C1へ。澤田下降し、バックキャラバン開始。C1テント落石により破損。登攀具を袋に入れて落としBCへ。

20日 C1より落とした荷の回収と休養。早朝の様子を見て、ガリーを登ってみる。

21日 再度C1への荷上げ。

前回の中央ルンゼは落石が少ないので再びここをC1とし、デポした。

22日 C1へ。

2のガリーは午前中は落石は発生しないが午後になると小雪と共にスノーシャワーが落ちるようになる。

23日 停滞。午後大きな雪崩発生した。

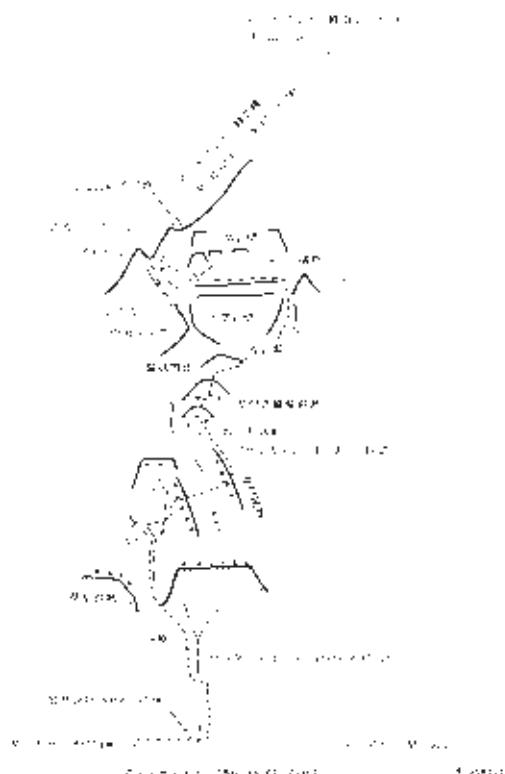
24日 降雪多く悪天のため下山。

昨夜未明から降雪、2のガリー、中央ルンゼ上部より頻繁に大きな雪崩が起こり、ツェルトが潰れる。下山時トラバース中上部で雪崩発生するが、両名共に無事であった。

#### ・バックキャラバン

25~29日 カトマンズ着。10月1日帰国。

### ○アンナプルナⅡ峰北稜下部 ルート図



## 60 1993・6～9 パキスタン ブロード・ピーク登山隊8051m（東海山岳会）

○主催 東海山岳会（7名中4名信大学士山岳会）

○参加メンバー 隊長：田辺治（東海AC） 副隊長：江塙進介（群馬伊勢崎AC）  
河口攻（東海AC）、三野和哉、中村貴士、内田健一、小川裕正（東海AC）

### ○登山概要

6月28日 成田⇒イスラマバード

6月29日～7月6日 梱包・ブリーフィング等

現地エージェントは、ナジール・ザビール・エクスペデション。予定のリエゾンオフィサーが来ず、モハメッド・オマール・ハーン陸軍大尉（23歳）が新オフィサーとして着任。

7日 スカルドフライト、梱包・契約等

10日 ホト・トンゴル間の崩壊箇所

11日 アスコーレ。ポーター雇用

12日 ジョラ

13日 パイユ・翌日レスト

15日 ウルドカス

16日 ゴロ

17日 BCポーター支払い

18日 BC開き

バルトロのキャラバンでは、パイユ（3785m）付近から高度の影響が出ることを考慮し、毎日天場から300m程度上部まで散歩した。またキャラバン中の負荷は10kg程度に抑え、ポーターに担いでもらった。

19日 BC→5500m ルート偵察・高度順応

20日 BC→C1(5800m)→BC 荷上げ

21日 BC→C1荷上げ、関根隊登頂

22日 沈殿 取り付きまでの氷河ルート整備

23日 沈殿 関根隊登頂パーティー

先行の日本ブロードピーク登山隊（関根隊）が撤収する際、既設のフィックスと多数の装備品をいただいた。このため、ハイポーターを使わずして、わずか2週間でアタック体制が整ってしまった。

24日 BC→C1

25日 C1→BC

26日 BC→C2(6250m)→BC

27日 BCレスト

28日 BC→C2

29日 BC→C3(6950m)→BC

30・31日 レスト

8月1～8日 雪のためBC沈殿

滞在期間中、バルトロは天候が悪い日が多く、隣のK2から遭難のNEWSがたびたび届く。悪天のあとは深雪で、ラッセルがきつい。

9日 BC→C2

10日 C2→BC悪天で下山

11・12日 BCレスト

13日 BC→C2

14日 C2→C3 7500mまでトレース付け

15日 C3→7750m→C3 アタック悪天中止

16日 C3沈殿 河口・内田BCへ下山

曇天の中、頂上アタックしたが、深雪のラッセルがきつく、悪天候により中止。C3待機となった。翌日、内田・河口はBCへ下山。信大3名+江塙の4名がC3で登頂のチャンスを待った。

17日 C3沈殿

18日 C3→7800m→BC 悪天・夜の下山

4名が2度目のアタックに出発するも、コル直下でホワイトアウト。下山するもC3発見困難。江塙との連絡が一時不通。体制立て直しが必要との判断からBCへ下山（22時着）。江塙はC2まで。内田は取り付きまでサポート。

19・20日 BCレスト

21日 BC→C2(信大+江塙の5名)

22日 C2→C3

23日 C3→C4(7600m雪洞)

隊長判断により、5名で再挑戦。ラッセルに悩まされたため、C4（雪洞）を新設。雪洞は1.5時間で快適なものが完成した。

24日 C4→アタック成功5名登頂(8051m)→C3

奇跡の4日連続好天。2:30出発、6:40コル。コルから山頂まではボロボロの岩を攀じ、ピークをいくつも越えながら長い尾根をたどる。10:15内田・田辺・三野・中村・江塚が登頂。山頂で三野が酸素不足による視覚障害を発症。サポートしながらC3まで下山。

25日 C3→BC(河口・荷下げサポート)

三野の症状は下山とともに快復。キャンプを撤収しながら下山する。荷物が多く、C1上部で合流した河口に助けられる。

取り付きでリエゾンの祝福を受ける。BCはコックとポーター頭によって飾り付けられており、皆から登頂の祝福を受けた。

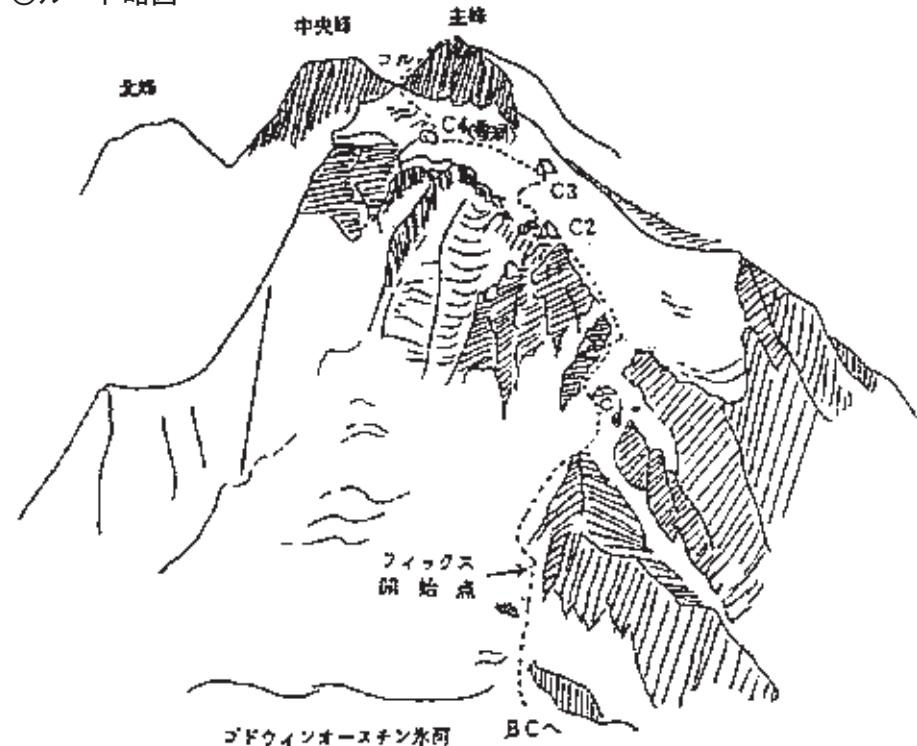
26日 BC登頂祝い・撤収作業

27日～ バックキャラバン

9月1日 スカルド着

バックキャラバンは天候にも恵まれ、ポーターたちとの関係も非常に良好。高峰に囲まれた氷河で一緒に歌い、楽しい旅

#### ○ルート略図



ができた。

2日 深夜チャータバス発

3日 深夜イスラマバード着

4日 デブリーフィング、買い物等

5日 イスマラバード⇒成田(現地解散)

#### <ブロードピーク>



## 61 1993・9~10 中国 チョー・オユー8201m(群馬県山岳連盟)

○参加メンバー 総隊長:星野光 隊長:八木原國明  
副隊長:宮崎勉、尾形好雄 登攀隊長:名塚秀二  
隊員:吉田文江、田辺治、江塚進介、佐藤光由、後藤文明、星野龍史、  
寺田勉、秋山剛、住吉仙也

### ○登山概要

8月29日 先発隊成田発  
30日 カトマンズ着、準備作業  
9月13日 カトマンズ発、陸路よりコダリ  
(国境)を越えニエラム(3750m)着。  
14日 佐藤、後藤、シェルパ10名がTBC  
(仮ベースキャンプ4750m)へ移動。  
15~22日 TBC集結。  
16日 TBCにて約5500mの高度順応開始。  
20日 キャラバン開始(佐藤、星野)T1  
(5300m)へ。  
21~28日 BC(ベースキャンプ5650m)集  
結。  
・チョー・オユー登山開始  
25日 先発(名塚、佐藤、後藤、星野、秋山)  
C1(6400m)往復。  
26日 後発隊TBC撤収、T1へ。先発隊C1へ。  
27日 先発隊C2(7000m)往復。  
29日 プジャ(登山の安全祈願祭)  
30日 後発隊(八木原、宮崎、尾形、吉田、  
寺田) C1往復。  
10月1日 名塚パーティに尾形が加わり、C1へ  
移動。他は往復。田辺、江塚BCへ。  
2日 C2へ荷上げ。強風のため尾形のみC2  
到達。  
3日 シェルパ5名とC2へ移動。八木原パー  
ティに田辺、江塚が加わりC1へ移動。  
4日 名塚パーティ、シェルパ5名にて11ピッ  
チフィックス、C3予定地(7600m)到  
達。その後C2へ。八木原、田辺パー  
ティC2往復。  
5日 休養。

6日 尾形、名塚、佐藤、後藤、星野、秋  
山C2移動。  
7日 さらにC3に移動。  
8日 1次アタック。7時出発、9時56分～尾  
形、秋山、佐藤、後藤、星野、名塚  
の順に登頂。BCまで下降。  
11日 2次アタック。田辺、江塚、シェルパ  
1名9時50分登頂。C2より別のシェル  
パ1名も登頂。BCまで下降。  
13日 3次アタック。八木原、宮崎、吉田、  
寺田、シェルパ2名、10時30分登頂。  
また、別のシェルパがC2より2名が登  
頂。隊員はBCまで下降。  
14日 BC撤収。  
16日 TBC撤収、陸路よりカトマンズ。

### <チョー・オユー>





チシマギキョウ

## 62 1993・5~8 中国 クラウン峰7295m遠征(JAC東海支部)

○参加メンバー 総隊長:湯原道男 隊長:徳島和男 登攀隊長:酒井秀紀  
登攀リーダー:安部哲也、亀田正人 隊員:中島正徳、鈴木幹夫、山崎彰人、  
夏目正憲、宮坂仁、有富保之、中川邦仁、笛森進也、松岡清司、長谷川哲也

### ○登山概要

5月17日 名古屋空港から北京へ。

18日 旧ソ連製の飛行機でウルムチ。夏目と長谷川を残してカシュガルへ。

19日 食料・装備・燃料の買い出し。トラックに積み込む。夏目、長谷川も合流。

20日 250km離れたイエチエンまで車で移動。

21日 ランドクルーザー等に分乗し新蔵公路をチベットに向かって進む、途中故障がありマザー迄。

22日 新蔵公路から別れマザラーダへ向かう。今晚からテント泊。

23日 大幅に遅れ12時の出発。ラクダ55頭によるキャラバン開始。ヤルカンド河に沿って進む。

24日 問題発生、連れてきた羊がすべて脱走。河の右岸カリヤのサイト地泊。

25日 渡渉を繰り返し、高巻きからアギール峠への登りになる。標高5000m近くのカルカに泊まる。

26日 14時アギール峠(4780m)着。下りきった左岸にテントを張る。

27日 11時頃出発。16時着。

28日 サルポ・ラッゴ河と合流、渡渉をし中国側のベースキャンプに到着する。

29日 朝から雪が降っていたが、中島・長谷川・鈴木がベース予定地に先行する。全員が隊荷と共にベース(4100m)入りした。

30日 夏目・鈴木がルート整備、中島・長

### ○ルート図



ルート図  
（ピック・マウ）

### <ABCからクラウンを望む>



谷川でABCまでのルート偵察。

31日 初めての荷上げ。デポキャンプ(DC)設置。

6月1日 協力隊員と荷上げでトラブル。

2~9日 ベースキャンプ(BC)～デポキャンプ(DC)～アドバンス・ベースキャンプ(ABC) 隊員は食料の荷分けや各キャンプの移動をし、協力員が1日2度の荷上げを含め心意気を見せてくれ9日に終了した。

### ・登山活動 「ABCからC2まで」

6月10日 中島、中川、長谷川でC1のルート

工作に向かう。タテノ氷河を溯る。左岸の岩を登り、C1地点のルートが少し違った。ABCに戻った。

11日 C1建設。

12日 C1への荷上げ、ABC開きを盛会に行う。

13日 徳島、鈴木、夏目でC1への荷上げ。上部にC1移動。

14日 徳島は酒井を迎えにBCへ降りる。

15日 A、B、C隊に分かれC1への荷上げ開始。

16日 A隊がC1に入りC2のルート工作。B、C隊はC1へ荷上げ。

17日 A隊がC2のルート工作。HAJ隊の直上ルートを選びC2手前で引き返す。B隊はC1入り、C隊は荷上げ。

18日 天候が悪く全隊ABC下降。

19日 徳島、酒井はC1へ荷上げ。他は休養。隊の組み替え。

20日 A隊C1入り、他はC1荷上げ。

21日 A隊C2のルート工作。B、C、D隊はC1へ荷上げ。

22日 A隊はC2設営。B隊C1入り、C隊C1荷上げ、D隊休養。

23日 A、B隊はC2入り。

24日 C、D隊C1へ荷上げ。

25日 停滞。26日 B隊ABCからC1へ。

27日 大テントをC1に移し、C1開き。

### 「C2からアタックまで」

28日 B隊はC2の荷上げを済ませ、C3のルート工作へ。初めてトップでルート工作に出た長谷川とセカンドの有富。双子岩肩まで工作しC2へ泊る。他は荷上げ。

29日 昨日に引き続きB隊が16ピッチのルート工作。A、C、D隊はC2への荷上げ。

30日 B隊引き続き4ピッチルート工作、V稜末端に着く。A隊C2へ荷上げ、C隊、D隊は休養。

7月1日 B隊はC1へ、D隊C2入り、A、C隊C1で休養。

2日 D隊がルート工作VI稜を直登し、C2へ下降。C隊はC2へ荷上げ、A、B隊笹森休養。

3日 D隊ルート工作するもC3適地なし。

4日 A隊がC3適地を目指すが時間切れ。協議の結果東壁ルートで登攀を継続する。

5日 A、B隊(C2入り) C、D隊の組み替え。

6日 A、B隊6人でルート工作。

7日 C3設営とジョウゴの口突破の目途。

8~12日 悪天のためC1、C2停滞。

13日 6日ぶりに快晴。A、B隊組み換えC1に入る。C、D隊は休養。

14日 C3設営。

15日 C3荷上げ、C隊がC2入り。

16日 C、D隊C3荷上げ。A隊C1へ、B隊C1休養。

17日 雪のため停滞。

18日 C隊ジョウゴの口突破し21時C3。

B隊C3荷上げ、D隊C2、A隊休養。

19日 C隊ルート工作しデポ後C1、B隊C3入り、A、D隊C2入り。

20日 B隊ルート工作、ジョウゴの口にワイヤー梯子設置。A、D隊組み替え、A隊C3入り、D隊C3荷上げ後C1で休養。

21日 A隊ルート工作、C4無しで登頂できそう。

7月22日 D隊(徳島、山崎、有富) C3を2時出発、6時半山崎がフィックス終了点に到着。4ピッチ目雪庇の下部に到着昼の12時いつの間にか吹雪、14時56分初登頂。

27日 C隊2時半出発、鈴木、酒井、阿部、中川の順。9時5分登頂。

28日 B隊3時40分笹森、中島、亀田、宮坂11時20分登頂。

29日 A隊長谷川、松岡、夏目1時に出発し登頂。これで全員14人が登頂。

8月4日 ABCを撤収、登山活動終了。

## 63 1993・6~8 信州大学学士山岳会カラコルム登山隊 バインターブラック峰7285m遠征

○参加メンバー 隊長：吉田秀樹 隊員：中嶋岳志、豊田浩太郎、河西貴史

### ○登山概要

#### I 出国からBCまで

5月31日 吉田、豊田、河西の3名PIA753便で成田を出発。北京経由でタクラマカン砂漠、雲に覆われたカラコルム山脈の上空を飛び雷電光る夜のイスラマバード国際空港に到着。ナジール・サビル事務所の出迎えを受け、ラッシュマンホテルに宿泊。

6月1日 リエゾン・オフィサーの、アヤズ・アーメド・シグリ氏とその友人の訪問を受ける。その後、買い出しについての打ち合わせをする。同じホテルに宿泊している、ブロード・ピーク隊(関根幸次隊長)、ガッシャーブルム隊(小西浩文隊長)。夜は観光省に提出するパッキングリストの作成。

2日 今日は大部分の商店が休み、外は40℃前後の猛暑のためのんびりと過ごす。

3日 今日はリエゾンが、避暑地のマリーを案内してくれる。1時間半ほどで標高2200mのマリーに到着。広葉樹も多く風も涼しい。パキスタンの軽井沢といった所。

4日 今日も休日。夕食後空港に中嶋さんを迎えて行く。定刻通りに到着したが、手荷物が行方不明になってしまった。

5日 観光省、外国人登録事務所、日本大使館に出向く。午後バザールで買い出し。

6日 外国人登録事務所に書類を提出。リエゾンとコックを引き合わせる。

7日 観光省に行きブリーフィング。  
8日 バスに荷物を積み込み、途中トマト、玉葱を買い込む。カラコルムハイウェーを走る。21時チラースで夕食とする。

9日 荒涼とした山間の渓谷を走り続ける。スカルドに着き、シャー

モーテルに宿泊。

6月10日 食料、雑貨の買い出しをする。アスコーレまで4台のジープを雇う。

11日 最終的なパッキングを行う。河西が体調を崩す。

12日 5時半に出発。ジープはものすごい速さで走りしていく。12時45分アスコーレ着。トラクターに乗って大勢のポーター希望者が到着する。

13日 隊員4人、リエゾン、サーダー、コック、ポーター60名、計67名でキャラバンが始まったビアフォ氷河の末端に宿泊。

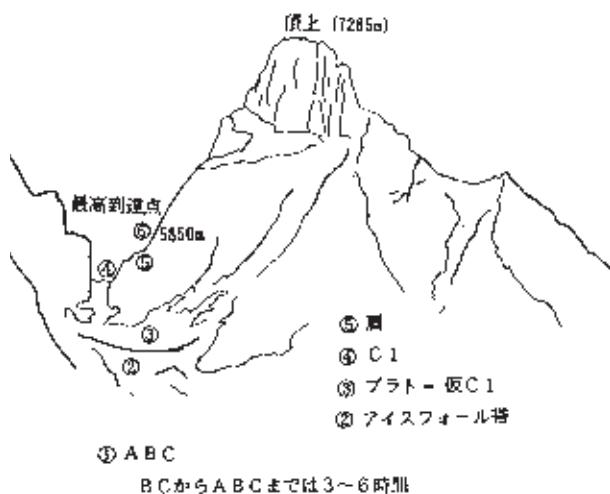
14日 バルトロ街道と分かれ、ドウモルド川沿いの道をチョクトイ氷河めざし歩く。

15日 ポーターが昨年の登山隊を例に賃上げを要求。悪名高いバルティーポーターだったが要求を受け入れ解決。

16日 既に標高は4000mを越えてきた、無理をしないことにしてチョクトイ氷河の入り口のムレリビンガにテントを張る。

17日 ポーター達がこれから先はザイルがないと行けないと言い出したが何とかBCまで荷物が到着し、賃金を支払った。

### ○チョクトイ氷河4800mから見たバインターブラック



## II BCよりC1建設直前まで

6月18日 BC(4450m) 休養

19日 休養兼隊荷の整理

20日 Aパーティ(吉田、豊田) アイスフォール下部を経て、取り付きから16ピッチ目付近、ロープ10本をフィックス。Bパーティ(中嶋、河西) 高度順応。

21日 AP休養。BPは昨日張ったロープの欠落部を補充、ABC設営。

22日 APABC(4850m) 着。BP休養。

23日 APABCより7ピッチロープ固定でアイスフォールをぬける。BPはABCへ荷上げ。この間ハイポーターは荷上げを担当。

24日 雪のためBCで停滞。

25日 雪のためBCで停滞。

26日 各自35kg前後の荷物を背負いABCへあがる。この周辺では膝までのラッセル。

27日 雪のためABCで停滞。

28日 ABCから16ピッチ目にデボし下山。

29日 ABCから3ピッチの後プラトー仮C1(5350m) 予定地、ABCへ。

30日 APはC1のコルのルート工作3ピッチロープを固定し、仮C1設営。BPは仮C1へ荷上げし、ABCへ戻る。

7月1日 APアイスフォール帯の固定ロープ張り直し作業をし、仮C1へ。BPも共に固定ロープ張り直しを行いABCへ。

2日 APはC1のコルに向けてルート工作(10ピッチ半)をし、仮C1に戻る。BPは仮C1に登りABCに戻る。

3日 AP仮C1からアイスフォール帯のデボを回収し、仮C1からABCにて休養。BPはABCにて終日休養。

4日 APはABCから仮C1へ荷上げし、ABCへ。BPはC1への荷上げに備え仮C1に入る。

5日 APはABCから仮C1へ荷上げしABCへ。BPはルンゼ下部に着くも落石、落氷、スノーシャワーで仮C1へ戻る。

6日 APはABCから仮C1に入る。BPは5時に仮C1を出て、6時50分にC1のコルに到着し、仮C1へ戻る。

## ○C1のコルへのルート図



## III C1 (5700m) 設営から登攀断念、下降

7月7日 APはC1への荷上げを午後も含め2回。BPはC1に入り4ピッチ登る。

8日 APはC1への荷上げ、午前中のみ。BPは朝食後風雪が強まり休養とする。

9~12日 悪天候のため両パーティ停滞。

13日 APはルンゼまで深いラッセルをし、C1に登り、仮C1へ。BPは雪が安定するのを待つことにし、3ピッチロープ固定。

14日 APはC1へ荷上げ。BPは終了点より4ピッチルート工作する。

15日 APC1に、BPは天候が崩れ下る。

16~17日 悪天のため停滞。

18日 雪が安定するのを待ち、待機。

19日 4人で登りだが、天候が崩れBPが長期C1にいるため、全員ABCへ戻る。

20日 疲れのため休養

21日 ABCより仮C1を経てC1へ。

22~26日 悪天候のため停滞。

27日 河西不調でテントに留まり、3人で登るが寒さと強風のため下降する。

28日 天候の回復が見込めないため下山する事に決定する。陽が陰ってから下降開始し、雪の中のABCを探し出した。

## IV ABCより下降～帰国

30日 ABCからBCへ下降。

8月2日 帰りのキャラバン開始。

5日 スカルド着。

15日 イスマラバードにて解散。

## 66 1993・9～94・2 ネパール 冬期サガルマータ南西壁8848m（群馬県山岳連盟）

○参加メンバー 総隊長：星野光 隊長：八木原匂明

副隊長：尾形好雄 登攀隊長：名塚秀二

隊員：田辺治、江塚進介、佐藤光由、後藤文明、星野龍史、住吉仙也

### ○再びサガルマータへ

ネパール政府は1993年秋から新登山規則を発表した。登山料の値上げと隊員制限である。今回一番頑張ってくれた若い隊員が同行できなかつたことは一番つらい。11月5日にルクラへの最後のフライトですべてが終了した。

9日 佐藤と後藤が一足先にシャンボチエに飛んだ。翌10日に他の隊員全員がカトマズを出発した。

### ○登山概要

#### ・山麓の旅

我々はナムチエで1日休養した後、12日 第2陣のヤクと共にキャラバンを開始した。今回気が付いたことはゴミ籠が設置されたことである。タンボチエの僧院でプジャを行つた。

14日 ペリチエからロブジエに移つた。この地に6日間いて高所順応を行つた。

21日 BCに向けて出発する。

#### ・BCからアイスフォール帯

クーンブ氷河を登りつめ、アイスフォールが見えるとBCはすぐである。「サガルマータBCロッジ」連日大盛況のようである。既に、BCは完成していた。今冬期は我が隊一隊のみで、すべてのルート工作を自分たちでしなければならない。ラダー60台、固定ロープ約3000mを用意した。

24日 プジャ。前回の反省からアイスフォールの通過は一度だけとした。また、ファイナルキャンプは特製のテントを考案した。

25日までにほぼC1への荷上げは終了した。今回登攀メンバーは7名だけである。その

### <サガルマータ南西壁>



メンバーで15日間で決着をつけようというのであるから荷上げは全てシェルパに頼らざるを得ない。サーダー2名、高所ポーター28名、キッチン・スタッフ8名、メールランナー3名で総勢41名である。各キャンプ間の荷上げ料金は決まっており、高所ポーターの力量に合わせパーティを組む。27日、朝全体ミーティングを行い、各パーティのメンバー構成、荷上げ、各担当からの報告など本番に向けた最終確認を行つた。

#### ・冬期南西壁へ登攀開始

12月1日 待望の冬期シーズンの幕開けである。隊長などBCスタッフの見送りを受けて出発する。最初の難関は危険極まりないアイスフォール帯の通過である。至る所に

悪魔が口を開けている。2時間50分ほどでC1着。江塚を残し他の6名はC2に向かう。巨大なクレバスが迷路のように横たわる。左右にルートを取りながらC2に到着。C1もC2もシェルパによってテントが設営されている。BCから一気に1150mも登った。

2日 C2は-19度で思ったほど寒くない。尾形、星野(龍)、ダワ・タシのパーティでTC(仮キャンプ)へのルート工作。南西壁基部に大きなベルグシュルンドが口を開けていたが難なく通過できた。頭上の軍艦岩を目指して登る。11本の固定ロープを張り、6900mまで進む。

3日 名塚、後藤のパーティが氷壁を登り、さらに2ピッチルートを延ばした。田辺、佐藤とシェルパ5名はTCの設営に向かう。名塚、後藤はTC泊。

4日 風の弱い穏やかな日。名塚パーティは12ピッチ固定ロープを延ばしTCに戻る。

5日 昨日の最高到達点に10時40分に着き、ルート工作を開始した。7500mの高度を越えるとさすがにペースは落ち、4ピッチルートを延ばし下降する。一方、C3建設を始めた田辺、江塚、佐藤パーティは固定ロープを張り替え、TCにP・Pロープを上げた。

6日 C3を建設すべくTC、C2から同時に行動を開始した。しかし、シェルパが勝手にテントをTCに置いてきたためC3建設は断念。

7日 雪のためTCからC2に下る。上部からの落石が恐ろしい。

8日 終日強風が吹き荒れる。名塚パーティは12名のシェルパと共にC3建設に向かうがブリザードがひどくTC手前で断念。

9日 無風快晴。名塚パーティとシェルパ12名でC3建設に出発。今回のC3は前回のC4(7600m) 地点である。「灰色のツルム」と

いう岩壁の下。ロックバンドの左端に食い入る左クロアールのルートを進む。

10日 C3の名塚、後藤、ギャルバーの3人はC4のルート工作に入る。樋状のガリーから雪壁、左クロアール入口へ、さすがに酸素の威力は素晴らしく14時前 ロープ12本を張り終える。

11日はC2でも-22度。好天の3日続き。名塚パーティは9時40分に昨日の最高到達点に着く。雪壁にルートを延ばし、クロアールを目指す。びっしり雪が詰まつて冬は難なく越えた。ロックバンドの核心部25m程の氷壁が立ちはだかる。前回の我々と韓国隊のロープが残っていた。

14時15分 ロックバンド突破。

16時20分 C4(8350m) 予定地に到着した。

12日 夜半には凄い突風が吹く。尾形パーティ C3に移動。名塚、田辺パーティはC3に更に2張りのテントを設営。

13日 尾形、田辺パーティとシェルパ4名でC4への荷上げ。尾形と星野(龍)がC4に泊まる。

14日 尾形、星野(龍)は最初の3ピッチ韓国隊のロープを使い、雪壁や4m程の垂壁を登り、ありつけのロープ9本も使いルートを延ばした。

15日 南峰ルンゼ入口2.5ピッチ登った地点で持参したロープが終わり、C2まで一気に下る。20時15分になっていた。

16日 名塚パーティはC4に入る。

17日 名塚、後藤パーティがルート工作。

18日 13時5分 南峰のコルに到着。そのまま登行を続け、15時20分 厳冬期の世界最高峰に登頂した。

20日 田辺、江塚パーティ11時20分登頂。

22日 尾形、星野(龍)パーティ10時40分登頂。

24日 24日ぶりにBCに戻った。

## 67 1994・8~11 信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊 ギャジカン峰7038m

○参加メンバー 総隊長：山田哲雄 総隊長代理：山下泰弘 日本側隊長：藤松太一  
日本側登攀隊長：田辺治 隊員：三野和哉、中村貴士、中村幸典、小久保陽介、  
長谷川聰貞、橋口徹、伊藤勇太郎、ネパール側隊長：Gupta Bahadur Rana  
ネパール側登攀隊長：Sher Barhadur Karki、Geeta Bahadur Joshi Ramkaji  
Siwakoti Padam Bahadur Katri、Dinesh Chandra Pokhrel (医師とリエゾン)

### ○登山概要

#### ・カトマンズ

8月20日 田辺、三野、橋口、伊藤の先発隊カトマンズに入り、装備等の準備。

27日 藤松、中村タ、中村ユ、小久保、長谷川の本隊カトマンズ入り。

28日 挨拶回り、登山許可の取得、食料・装備等のパッキング。警察学校の体育館で。

9月3日 山田、山下後発隊カトマンズ着。

7日 早朝、警察学校にて壮行会を開く。山田総隊長、ボハラ長官との間で旗の交換など盛大なセレモニーの後カトマンズ出発。

#### ・キャラバン

9月7日 カトマンズ→ボテオラ（バス）

途中、バスが立ち往生して、暗くなつてから到着した。8日→ベシサラ。隊荷を200人のポーターに振り分けるのにひと騒動、炎天下の強行軍。9日→タランチューンガッティ。ほぼ曇りで蒸し暑い。バッティに泊まる。10日→バウンダラ→サンゲ。サンゲの手前で名物のジュガ（ヒル）登場。

11日→チャムジェ→タル。タルからチベット文化圏。長谷川、伊藤、パサンはナル・コーラ偵察のため先行。12日→ダラパニ→バガルチャップ。山下、藤松より小学校の生徒にノートを送る。13日→コト。針葉樹が出て、高度があがってきた。14日→チャチャ。ポーターの半数70人が帰ってしまう。田辺、三野、長谷川、橋口と体調を崩したので後発隊として、回復してから追いつかせる。

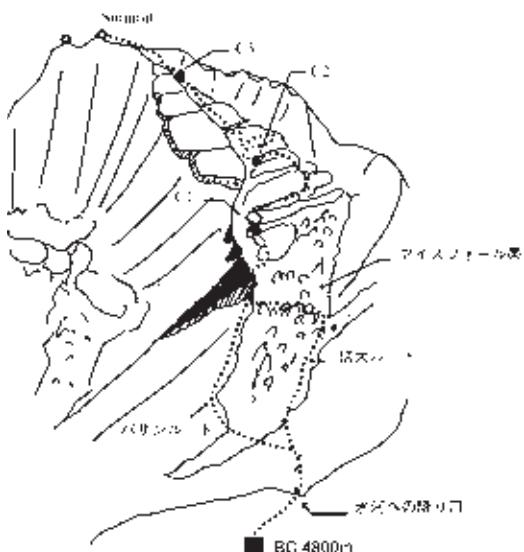
15日→メタ。途中崩落個所あり、囊となる。

16日→チャコ→キヤン。久々の好天。アンナII峰やピサン・ピークが美しい。17日→ペガオン。村はずれの河原にテントを張る。

### ○アンナプルナ周辺概念図



### ○登山ルート図



18日→中村タ、小久保、ジョシ、シバコティでBC設営地を偵察。40人のポーターが帰ってしまう。他の隊員は高所順化。

19日→BC。なだらかな草地4800m到着。

### ・登山活動

9月20日 BC設営作業。藤松、小久保、カルキ、モティ、パサンで氷河からルートの偵察。午後に後発隊の田辺、長谷川到着。  
21日 ベース開きとしてブレーキを行う。  
22日 田辺、小久保、長谷川、モティ、パサンで5140mまで9ピッチフィックスし、ルート工作。モンスーンは明けたようだ。他は登山の準備。23日 昨日のメンバーで6ピッチフィックスし、5350mにC1を設営。他は登山の準備、三野到着。24日 ルート工作隊セラック帯を越えて下部プラトー5650mまで、4ピッチフィックスする。他はC1への荷上げ。25日ルート工作隊はC2(6100m)を設営するが、長谷川隊員が体調を崩しBCまでサポートして下山する。  
26日 休養。今後の隊員編成。  
A隊 田辺、小久保、長谷川、パサン、シバコティ、ダンバル。  
B隊 中村タ、中村ユ、伊藤、ジョシ、ヌル、カトリ。  
C隊 藤松、三野、橋口、カルキ、モティ。  
27日 A隊C1へ移動、B、C隊C1へ荷上げ。モティのアップザイレンはユニークだ。  
29日 A隊C2への荷上げと設営、B隊C2荷上げ、伊藤のみ頭痛のためBCへ、C隊C1への荷上げ、藤松レスト。30日 A隊C2荷上げ後6300mまでルート工作、B、C隊レスト。既に、一ヶ月もの間歯も磨かず、手も洗わずの生活。郷に従った。

10月1日 A隊6300mにC3設営。B隊レスト。C隊C1入り。2日 A隊レスト、B隊C1入り、C隊C2荷上げ。3日 A隊レスト、B隊C2入り、C隊C2荷上げ後BC。  
4日 A隊C1入り、B隊C3荷上げ後BCへ、カトリが絶好調。C隊レスト。  
5日 A隊C1からC2入り。B、C隊はレスト。  
6日 A隊C1を8時45分に出てC3に12時50分に到着、B隊レスト、C隊C1入り。  
7日 A隊はC3を6時に出発し頂上直下の5mで横に並び、午前7時40分全員同時に登

頂した。BCから山下の持ってきた超望遠レンズにははためくラマフラッグをとらえていた。東峰まで行き、C3からBCまで戻る。B隊はC1入り、C隊はC2に入る。

8日 A隊レスト、B隊C2入り、C隊C2からC3、BCまで戻る。

9日 A隊レスト、B隊C3入り、C隊レスト。

10日 A隊レスト、B隊7時にC3を出て、8時半に登頂、東峰をへてBCまで下山。C隊レスト。

11日 A、B隊レスト、C隊C1に入る。A隊のパサンが加わり戦力強化。

12日 A、B隊レスト、C隊C2に入る。珍しく藤松3番目にテントに到着。

13日 A、B隊レスト、C隊C3ずっと好天であったがダウラやアンナに雲がかかり明日の天気が心配である。BCの日本隊員のほとんどがプーガオンに遊びに行っていることを聞き、疎外感と苛立ちが広がる。

14日 曇りのち雪の天気。8時10分に出発し、パサンのサーブどうぞで、9時40分に強風のなか登頂。登山期間を通じ唯一の悪天であった。一挙にBCまで下りる。

15日 C隊レスト、他の隊員はC2、C1の撤収作業を行う。

16~18日 隊荷の整理。日本側、隊長を含め全員とネパール警察側隊員を含め全員が登頂した。

### ・バックキャラバン

19日→プーガオン。出発前にポータートラブルが発生し大幅に遅れる。

20日→キャン。21日→ナルガオン。

22日→カンラ(5300m)を越えホンデ。

23日→チャーメ。24日→タル。25日→サンゲ。

26日→ウスタ。27日→デュムレ。

30日→カトマンズ手前の峠でネパール警察に出迎えられる。カトマンズ市内をパレードし警察学校で歓迎レセプション。

11月2日 ネパール警察学校体育館にて日本側主催による登頂祝賀会を盛大に催した。

8日 隊は解散し、各自帰国。

## 68 1995・2~6 中国 日本山岳会マカルー東稜8463m登山隊 (JAC)

○参加メンバー 総隊長：藤平正夫 隊長：重廣恒夫 登攀隊長：山本宗彦  
隊員：渡辺雄二、馬場博行、山本篤、小野岳、田辺治、松原尚之、谷川太郎、  
岡本憲、竹内岳洋、荒井俊彦

### ○登山概要

#### ・ベースキャンプまで

3月1日 ネパールルートから先発組(山本篤、田辺、谷川、荒井)が関西空港からカトマンズへ。日本から船便で送りだした隊荷(約12t)をカルカッタからインド国内を経て、ネパールと中国国境のコダリまで無税通関で陸送する事。8日 本隊6名は、カトマンズで合流し、サーダー以下14名のシェルパと共に10日コダリに入った。多量の雪のため、16日まで待ち、シガールにて2日間の高所トレーニングを行い、21日、キャラバンの出発地点であるチュダンに入った。しかし、偵察隊は深い雪のためショウ・ラを越えることすらできない。雪のためヤクを使えず民工(ポーター)に委ねなければならなかつた。細く長いキャラバンを根気強く行い。隊荷約12tを総べてをベースキャンプに集結することが出来たのは4月11日の事であった。翌12日、隊員、シェルパ全員がベースキャンプに集い、盛大にベースキャンプ開きを実施した。

#### ・C3～C5

C3からC4を経てC5までは今回東稜ルートの核心部であった。実際はC3建設後にC4までが14日間、C5を建設したのが15日目だった。「未知」と「危険」が大きく影響していた。

5560mにC3が建設されたのは14日。最初尾根を巻きながら稜の最低コルに出るルートをとったが、上部に巨大なアイスプロック、壁と壁の間の雪崩の危険性でこのルートを破棄。C3に近い地点から稜上に出る

### ○マカルー周辺概念図

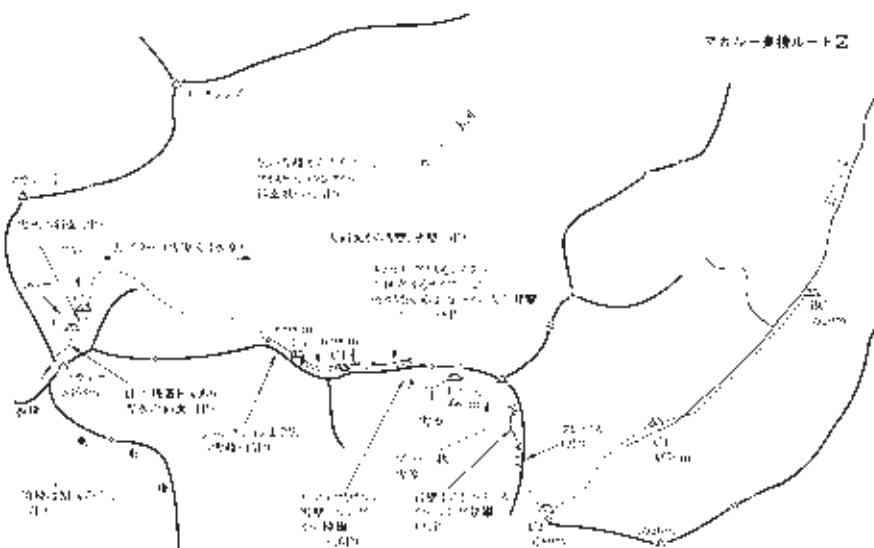


<東稜C3～C4のナイフリッジ>



ルートを開く。しかし、非常に不安定なナイフリッジのため極めて危険と判断し19日にこのルートも放棄。最初のルートに戻つた。稜状に出て1日1ピッチしか進まない日が4日、完全な岩のフェースの登攀、雪壁、

## ○マカルー東稜ルート図



ヒマラヤ壁のトラバースに24ピッチフィックスを張り6300mにC4を28日に設営した。直ぐ上のアイスフォール状を越え、尾根に出て、アイスマンスター、アイスブロックをびくびくしながら越え、5月13日6800mにC5を建設した。しかし、休養後に登るとルートは崩壊したため、新ルートに変更した。

### ・最終ルート変更の決断

13日より第二期を開始、C5の建設とC6までのルートを計画した。4隊に分かれルート工作、荷上げを行う。体調不良の隊員も出るがその都度対応しながら23日には困難を極めながらルート工作し、荷物も各キャンプにあげることが出来、24日は全キャンプ休養とした。18日に山本パーティは7200mのジャンクション・ピークへ到達し、岩稜を忠実に辿るのは技術的・時間的に厳しいとの報告を受け、これまでのルートの進捗状況を勘案し、不本意ながら迂回ルートの採用を決断する。

### ・アタック

アタック隊員は17日に6300mのC4を出発

し、途中セラックの崩壊により、時間的な理由で余儀なくルートを変更させられたが、19日 C6 7350mを建設。そして、21日、一次隊4名が8463mの頂上に到達、22日は二次隊4名も登頂に成功した。

### ・登頂 登攀隊長 山本宗彦

1995年5月22日、午前11時15分、私は8463mの世界第5位の高峰、マカルーの頂上に未踏の東稜から立つことが出来た。風はほとんどなく、遙か彼方に世界第3位のカンチエンジュンガ、後ろを振り返るとチョモランマを真近に臨むことが出来た。日本を出て97日目、登山を開始してからは52日目の登頂であった。

大雪のチベットでの偵察活動。いつ崩壊するとも知れぬ氷雪稜を恐怖心と闘いながら登った。東稜ルートは一言でいえば危険なルートだった。手の切れるようなナイフリッジとそこに張り出したキノコ雪の雪庇。アイスマンスターや岩壁。垂直の氷雪壁のトラバース。雪崩、尾根の崩壊、ルートの破壊。完登こそ逃したが、ここを辿ることが出来た幸せを感じ下山した。

**69** 1996・8~11 信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊 ラトナチュリ峰7035m

○参加メンバー 総隊長:野村昌男 日本側隊長:渡部光則 日本側登攀隊長:田辺治  
隊員:金子鉄男、澤田克彦、内田健一、花谷泰広、小林茂幹、長谷川聰貞、橋口徹、伊藤勇太郎  
ネパール側隊長:Gupta Bahadur Rana ネパール側登攀隊長:Geeta Bahadur Joshi,  
Ramkaji Siwakoti Santa Bahadur Ale、Vishwanath Shrestha(医師)

○登山概要

#### ・アプローチ

8月24日 本隊の田辺、金子、内田、花谷、9月1日 後発隊の野村、渡部、澤田、小林が関西空港を出発し、カトマンズに到着。ネパール警察の配慮で通関等もスムーズに運んだ。隊荷の梱包作業はポリスアカデミーの体育館を使用させてもらい、モンスーンの蒸し暑い中ネパール隊員とともに汗を流す。警察関係への挨拶回りには、宮崎委員長も同行してもらつた。

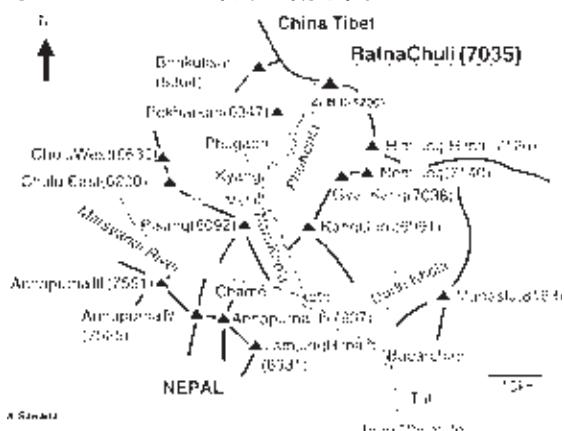
4日 日・ネ両隊員、スタッフ全員でボダナートに参拝し、プジャを受ける。

6日 雨季のさなか好天に恵まれた朝、ポリスアカデミーに於いて、合同隊の結団式と壮行会が盛大に行われた。多数の警官や生徒に見送られバス3台、トラック2台で出発する。デュムレ着。7日→トゥレトゥレ(485m) 本日よりポーター178名によるキャラバン開始。向後OBが見送ってくれた。8日→ボテオラ(625m) きわめて熱く消耗。稻田と周囲が全て緑一色。

9日→ベシサハール(820m) 内田発熱のため残留させる。

10日→ガディ(930m) 花谷発熱で残留。  
11日→サンジエ(1095m) 内田、花谷復活  
電話にて連絡。12日→タル(1650m) ナバ  
コーラ偵察のため田辺、小林、アレ、ダン  
ルを先行させる。13日→ダラパニ(1920m)  
秋の空を感じる。14日→コト(2590m) 崩  
地の道造りや仮橋の設置で通過。  
15日→チャチャ(2825m) 雨のため出發  
後らせた。16日→メタ(3500m)

## ○ラトナチヨリ峰周辺概念図



#### ○ラトナチュリ峰 登頂ルート概略図



17日→キン(3800m) BC選定のため田辺、シェルパ等がプーへ先行させる。

18日→プーガオン(4000m) 快晴、ボーター達は荷を置くと刈り入れの手伝いをしている。

19日→パングリ・カルカ(4500m) 野村、渡部、金子、小林は昼食後プ一へ戻る。

20日→ベースキャンプ(5200m)建設。

21日 ベースキャンプの整備。花谷、

ディついに合流。22日 タシ・ゴンパの僧侶

によるプジヤを行う。23日 田辺、ジョシ、シバコティ、アレ、ヌル、フル、ドゥルガ、ダンバル、ツルでABC(前進ベースキャンプ5500m)へ荷上げ。24日 内田、金子と昨日のネパールメンバーでABCへ荷上げ。パングリ・カルカ組はBC往復、田辺レスト。25日 田辺、内田ネパールスタッフでABCへ荷上げ。パングリ・カルカを引き払う。田辺よりタクティスの説明。A隊 L田辺、内田、アレ、ヌル、ドゥルガ、ツル。B隊 L澤田、金子、小林、ジョシ、フル。C隊 L渡部、野村、花谷、シバコティ、ダンバル。(Lリーダー)

#### ・登山活動

26日 A隊C1へのルート工作、B、C隊はABCへの順応活動。27~28日 降雪。ABCの順応活動と化石探し。

29日 キッキンボーイのペンバチャヨルテ 脳血栓の疑いがあり大事をとってヘリコプターを要請する。(10月1日搬送)

30日 A隊は西峰南稜鞍部の広い雪原のC1 (6000m) を経て南稜にルート工作後、ABCに戻る。B、C隊はABC、C1への荷上げ。

10月1日 A隊はC1建設後、南稜のルート工作。B、C隊は昨日と同じく荷上げ。金子足首捻挫のためBCで休養。

2日 A隊は19ピッチの固定ロープを張り西峰 (6600m) に登頂し、C1へ。B隊はABC入り。

3日 悪天のためアタックを中止、BCに戻る。B隊はC1往復。

4日 好天を待ったB隊は、諦めてBCに戻る。

5日 BCでも大雪。夕食後、日・ネ歌合戦。ネパール側の圧倒的勝利。

6日 やっと天候回復、大事をとって停滞。

7日 A隊はABCを経て、C1、B隊はC1を往復してABCへ、C隊はABCの上部までBCから往復。

8日 A隊6550mにC2を建設、B隊C1入り、C隊C1往復しABC入り。

9日 A隊は快晴で強風のため、待機した後C2発、頂上直下100mで内田が不調を訴

えた。固定ロープが尽き、スタカットによる登攀をネパール隊員が嫌い、引き返す。内田、アレ、ヌルはC2泊、他はBCまで下りる。B隊はC2往復、C隊はC1往復。

10日 C2の内田等BCに下山、C隊はC1入り。

11日 C隊はC2を往復後、B Cへ。鶴のヒマラヤ越えを確認し、皆感動する。

メンバーの一部変更をする。第1次アタック隊はL田辺、アレ、ツルの3人にし、6名をサポート隊にする。その内、澤田、ドゥルガはアタック隊と合流した。

12日 第1次アタック隊とサポート隊C1入り。

13日 同C2入り。

14日 午前7時強風の中、C2発。前回引き返した場所から3ピッチ固定ロープを延ばすと宝石の峰、12時10分に初登頂、地吹雪の中C2に戻る。B隊(第2次アタック隊)はC1に入る。

15日 第1次隊はBCへ、B隊はC2へ入る。

16日 B隊登頂。この日は穏やかな天候の中、360度の絶景を楽しんだ。C隊はC1入り。

17日 B隊BCへ。ヌルはサポートのためC2ステイ。C隊C2入り。

18日 C隊(第3次アタック隊) 登頂する。これで16名全員が登頂した。

19日 C2を撤収しBCに集結。

20日 C1及びABCを撤収し、不要なものをおろし、登山活動を終了した。

#### ・帰路

22日 延々と半日の交渉の末、ヤクが大暴走のトラブル、何とか夕暮れまでにパングリ・カルカに着く。

24日~11月1日 恐れていた降雪とヤク使いとのトラブル、ストライキ、ドクターの骨折と、まさに地獄の脱出行の有様となった。

3日 カトマンズの入り口の峠にてネパール警察の歓迎をうける。

7日 ホテルシャンカール祝賀ディナーパーティを開催し、内務大臣、警察庁長官はじめ150名の参加により盛会に行なわれた。

9日、13日 それぞれ帰国の途についた。

## 70 1997・5～8 (社)日本山岳会東海支部K2学術登山隊8611m

○参加メンバー 総隊長：尾上昇 登山隊長：徳島和男 登山隊長：田辺治

学術隊長：浅井和見 緑化隊長：遠藤京子 登山隊員：滝根正幹、中島明、山田良二、小林正巳、三好学、鈴木幹夫、山崎彰人、中川邦仁 BCマネージャー：金田博秋

### ○登山概要

#### ・砂漠の国へ

ラワルピンディ滞在中、後発の鈴木を除く隊員9人のうち4人が体調を崩した。様々なトラブルがあったが29日全員が標高2300mのスカルドへ移動した。6月1日 ジープ2台に分乗して高所順化トレックに行く。3820mまでゆっくり登った。

#### ・ベースキャンプへの道

3日 ジープ22台に13tの隊荷を積み、砂漠の中を進む光景は壮観である。インダス川を渡り、シガール。ブラルド川の谷を進みハイダラバード、トンガルへ到着し、集まっていたポーターに荷物を渡した。

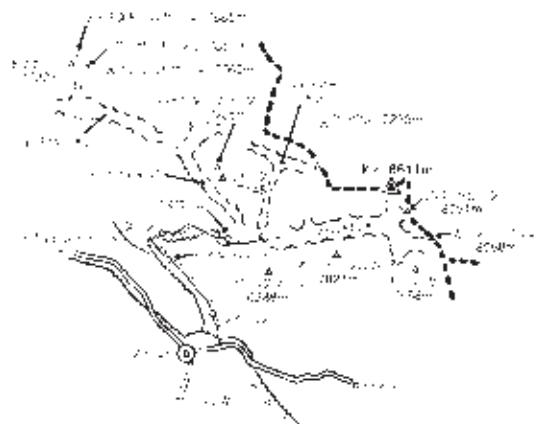
4日 550人のポーターが遙か彼方まで延々と連なり進んでいる情景は、映画のワンシーンでも見ているようだ。初日の今日一番の難所はデュモルド川の渡渉だ。その水は氷のように冷たい。砂っぽいジュラに泊。5日 災熱地獄の中パイユへ向かう。塩の意味、いたる所に塩が露出していた。6日 レスト。

7日 ウルドカスへ向かう。良く踏まれた道をバルトロ氷河に入る。バルトロ寺院群と呼ばれる岩峰群を見惚れながら歩く。

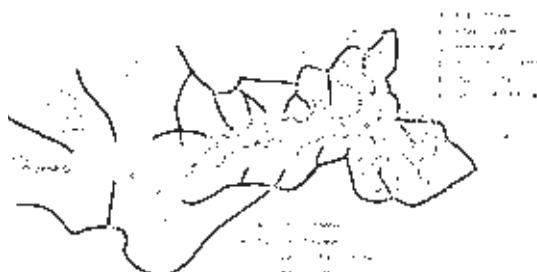
8日 1つ30円のサングラスを配布すると凄まじい争奪合戦が起こった。氷河上のゴレに泊まる。9日 コンコルディアから3時間ほど進み、ブロード・ピークBCにキャンプを張る。先発隊よりこの先サボイヤ氷河BCまでの道が悪く、協議の結果K2ノーマルBCを我々のBCと決定した。

10日 キャラバンをスタートして以来好天に恵まれていたが、ついに吹雪につかまつた。積雪20cm、ポーターが口々に帰ると言い出したが、天気が好転し、出発した。5150mに到着。

### ○K2周辺 概念図



### ○K2キャラバンルート



### ○スキルブルムより望む、K2南西面



### ・K2西稜より未知の壁へ

11~18日 1981年早稲田隊の西稜初登攀  
同様5500mにBCを設営したかったが、かなわなかつたためサボイヤ氷河の5500mにABCを置き、屈強なボーター23名と粘り強い賃金交渉をし、約3分の2の隊荷を安定した天候に支えられ、6日間で荷上げした。12日 4名のシェルパ到着。  
13日 浅井学術隊長、鈴木もBC入り、隊員は高所順応をはかる。14日 田辺隊(小林、ダワ・タシ、ギャルブー、ニマゴンブー)がABC入り。15日 田辺隊は西稜にルート工作を開始し、早稲田のC1を通過し、20ピッチルートを延ばした。16日 三角岩のトラバースが雪崩の危険があつて止め、氷雪壁を登りコルに出た。田辺がルートを探し戻るとき雪崩が発生した。幸いなことに全員が無事であった。10ピッチ進んだ。この日ブロード・ピークで雪崩が発生し、静岡隊の2名が行方不明となった。17日 6ピッチルートを延ばしC2まで達し、BCには21時過ぎに戻った。静岡隊の松永隊長から捜査の依頼を受け、全面協力することとなつた。18日 遺体を収容し、ヘリが着陸できる平坦地まで運んだ。19日 全員BCでレスト。20日 滝根、山田、中島、鈴木、中川、三好とシェルパ7名はABCへ移動。  
21日 滝根パーティは悪天の中C2への荷上げに向かうが21ピッチ目でデボして帰る。一方田辺、小林シェルパ4名がABCに向かう。サーダーのナワンヨンデンがC2位置を36ピッチ目から26ピッチ目に下げるなどを提案し、採用した。22日 全実働部隊でABCからC2への荷上げに向かうが悪天のため引き返す。ABCでシェルパのダワシンがクレバスに転落、大怪我。  
23日 ダワシンをBCへ下ろし、治療する。  
25日 山田、中川はC2までのルート整備。  
26日 上記2名以外でC2までの荷上げ。  
27日 山田隊はC2から2ピッチルートを延ばし、他の隊員はC2への荷上げ。

28日 「とさか尾根」を7ピッチ登る。

29日 山田隊はABCに戻る。

30日 大雪のためオールレスト。

7月1日 雪の安定の為レスト。

2日 田辺パーティ C2入り。3日 田辺パーティは7ピッチルート工作、山田、中島とシェルパ4人は5日間C2への荷上げ。4日 早稲田ルートの一つ下のバンドから7ピッチでC3(7000m)に達した。5日 昨日C2入りした鈴木隊はC3への荷上げとルート整備。

6日 鈴木隊C3に入り、第1雪田の左端を8ピッチ登った。7日 鈴木隊は第2雪田の左端を登りきってC4(7500m)に達した。

8日 鈴木隊は大役を果たし、C2からBCに下り休養。夜20時スキルブルムの氷河より雪崩が発生し、爆風が襲った。9日 田辺隊C2へ移動。10日 田辺隊はC4までの53ピッチのダイレクト荷上げを8時間で達成した。その後16日までの集中荷上げで必要な物資をC4を終結した。13日 全員で今後の編成を協議する。15日 田辺、鈴木、ギャルブー、ミンマチリはC4へ。6ピッチルートを延ばす。睡眠用酸素で快適に眠れた。16日 田辺隊は早稲田隊のルートに感心しながら21ピッチの後C5(8000m)の絶好のテントサイトを発見した。17日 C4で酸素を吸いながらレスト。

ここで、シェルパがアタックの辞退を申し出た。松岡清司君の遭難のニュースが入り鈴木が号泣し、田辺はこの遠征中一番苦しい時を送った。18日 田辺、鈴木、中川の1次アタック隊は、4人のシェルパの支援を受け、C5を設営し、10ピッチルートを延ばした。19日 アタック隊は田辺、鈴木とトップを交代しながら14ピッチ目に北西稜に出た。雪のドームの先に山頂があった。14時30分歓喜の声を上げた。

28日 第2次アタック隊、滝根、中島、山田、小林、シェルパ4名の計8名が登頂した。

8月7日 BCを後にする。

## 71 1997・6~8 パキスタン ブロード・ピーク8051m(群馬県カラコルム登山隊)

○参加メンバー 総隊長:星野光 隊長:名塚秀二(A隊隊長)

副隊長:佐藤光由(B隊隊長) 後藤文明(C隊隊長)

隊員:B隊 吉田秀樹、吉田文江、梁瀬佐市、岩崎洋、中島剛二、福本誠志

### ○はじめに

冬期サガルマータ南西壁を終え「8000m峰。バリエーションルート。冬期」を条件に山を決めるこにしていた。ネパール政府の突然の人数制限で上限7人の隊員しか参加することが出来なくなり、厳冬期の8000m峰に今の力では立ち向かうことが出来なかつた。今回の遠征は冬にこだわることなく、若手ヒマラヤニストの養成を目的に、全員が8000mの頂に立ち、ヒマラヤの楽しさを体験し得る山を登ろうと決めた。A隊=ガッシャーブルムⅠ峰、Ⅱ峰。B隊=ガッシャーブルムⅠ峰、ブロード・ピーク。C隊=ガッシャーブルムⅡ峰、ブロード・ピークとした。

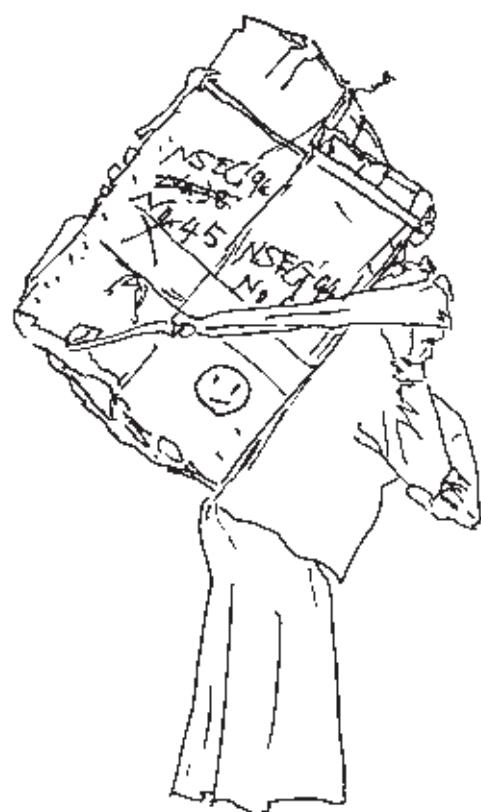
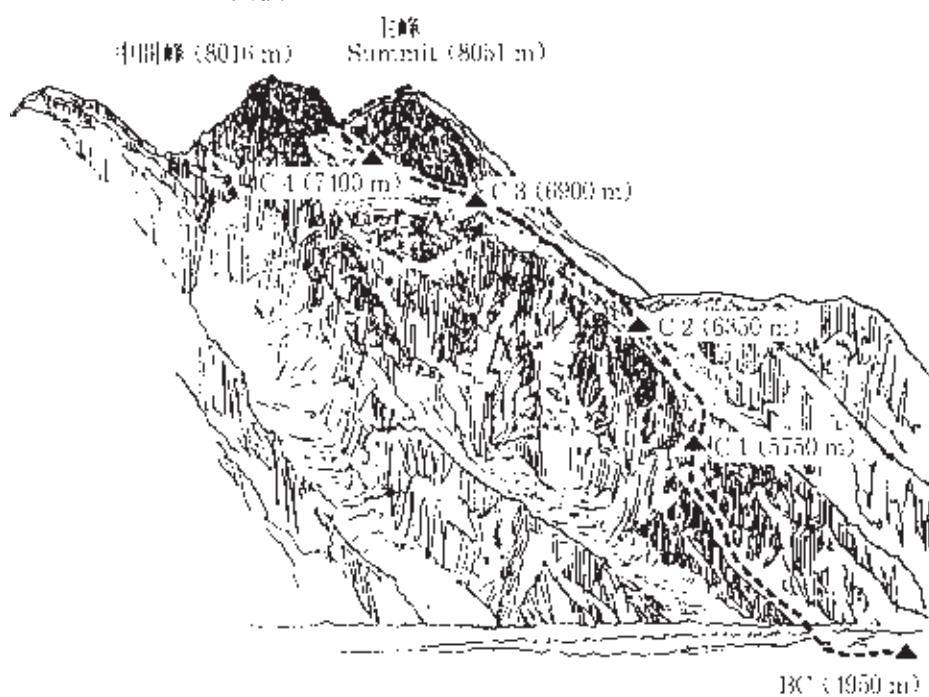
### ○登山概要

B隊は静岡隊のルートを使って、6月21日C1(5450m)を設営。23日にC2(6200m)を建設し、さらに上部のルート工作を行おうとしたが、天候が崩れBCへ下降する。7月4日に上部へ移動しようとしたが、再び悪天につかりBCに下山。10日間もBCに閉じ込められてしまう。15日に、吉田、吉田(文)、福本がC4に入り、佐藤、梁瀬、岩崎もC2から一気にC4入りした。翌16日、順応が遅れている中島を残し、シェルバ2人を加えた8人でアタックを開始。この日は風が強かったが、幸いにも風は徐々に弱まってきていた。11時30分から13時30分に

かけて、アタッカー全員が頂上に立つた。

B隊もようやく20日にガッシャーブルムBCへ移動を終え、22日にGIへの登山を開始しようとしたが、朝からの雪で行動を中止。23日にC1へ移動。24日に一気にアタックを行うための最小限度の装備、食料を持ってC2に上り、25日にジャバーニーズ・クロアールに入つた。しかし、小規模な雪崩に襲われ、核心部を抜けた6900m付近で撤退してC1へ下降した。この頃になると、7月に入っての連続した好天のためか、雪が腐り始め、日中ともなると雪崩がどこから出ても不思議ではないくらい雪が緩み、クレバスも大きく広がる。一方BC～C1間のアイスフォール帯のルート確保もおぼつかなくなつていて。これ以上の登山継続は危険であると判断し、26日全員がBCに下降した。7月に入って悪天になったのは、4、10、22日の3日間だけだったが、B隊はことごとくこの3日間がアタック日、移動日と絡んでしまつた。

○ブロード・ピーク 西稜ルート



## 72 1998・3~5 ネパール カンチェンジュンガ北壁8586m登山隊(JAC青年部)

○参加メンバー 隊長: 谷川太郎 副隊長: 赤坂健三 隊員: 奥田仁一、田辺治、山本茂久、長久保浩司、広瀬健太、椎名厚史、大橋隆平、中村和貞

## ○登山概要

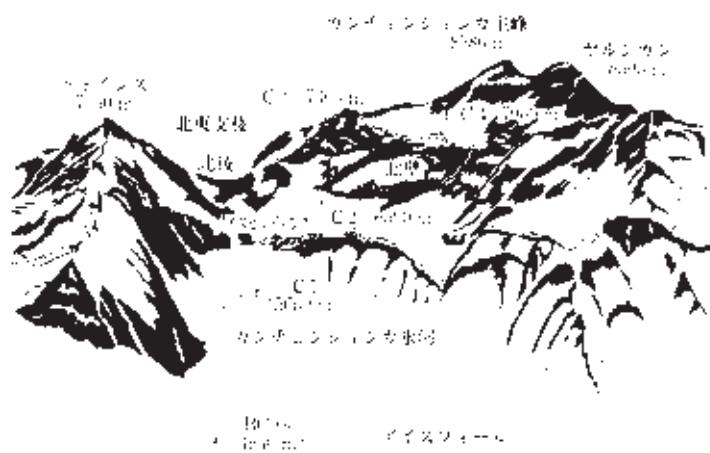
ヘリコプターで入った最奥の村グンサ(3400m)で季節外れの大雪に見舞われて6日間の停滞をした後、3日間のキャラバンと1日の休養日を経た3月29日、40cm近くの残雪が残る厳冬期さながらのベースキャンプ(4960m)に到着。2日間の準備と休養の後、4月1日、カンチェンジュンガ氷河の偵察を皮切りに登山活動を開始した。

ベースキャンプから5600mのC1までは技術的な問題はほとんどなく、ピッケル、アイゼンも必要ないほどであるが、非常に遠い。平坦な氷河歩きがその大部分を占めるため、行き帰りとともに時間がかかり、単調な荷上げ作業は、楽なものではなかつた。何度も往復することによって、5000m台の高度順化を確実に獲得し、標高差約1500mを4日間で走破するという少し急ぎ過ぎたBC入りの無理を補うことが出来た。4月7日、谷川、赤坂、奥田がC1に入り、上部ヘルートを伸ばす。C1上部のアイスフォール帯をトウイング側に回り込んで難なく突破し、その先に広がる大雪原をカシチ北壁の取り付きに向かって真っすぐに突き進んでいたとき、先頭を進んでいた谷川がヒドンクレバスを踏み抜き10m転落。セカンドを歩いていた赤坂が引きずられながら止め、大事には至らなかったが、以後の活動の気を引き締めるのに十分すぎる影響を残した。3人はそのままルート工作を続け、8、9日の2日

間をかけて北壁取り付きにあるアイスビルディングと呼ばれる高さ約100mのセラックを突破、翌10日、約6500m地点にC2を建設した。

4月17日、田辺、広瀬、椎名の3名がC2入り、その日のうちにロープを9ピッチ伸ばし、北稜下に広がる氷壁に達する。18日、傾斜50度程のガラスのような極めて硬い氷壁をじわじわと粘り強く6ピッチ伸ばし、翌19日にはやや傾斜の緩くなつたミックス壁を3ピッチ伸ばしてネパールとインドのシッキム州との国境線をなす北稜に飛び出した。田辺ら3名はその日のうちにクレバスが複雑に交鎖する稜線上を7ピッチ伸ばして7400m地点にC3を建設した。今シーズンの東ネパールは4月に入つてから奇妙なほどに好天が続き、私たちの登山活動も面白いほど順調に進んだ。心配していたヒマラヤ初見参の3人も、安定した天候のもとで無理のない行動をとることによって、好不調の波はあるものの何とか流れに乗りきり、経験のある他の7名それぞれの役割を確実にこなし、頂上への意欲を日ごとに募らせていった。

## ○カンチエンジュンガ北面ルート概要



27日 田辺、広瀬、椎名の3名はC3より8ピッチの登攀でキャッスル(城塞)と呼ばれる岩場を乗り越す。部分的に難易度5級を含む難しいミックスクライミングであったが、ルートは明瞭で1日で突破することが出来た。この先はグレートスクリーテラスと呼ばれる第3雪田を西に進み、頂上ピラミッドの基部(7900m)にアタックキャンプとなるC4を設営する。計画当初から、このC4への行動がアタックへの試金石になるだろうと考えていた。7400mのC3に宿泊し、約8000mの高さまで10<sup>+</sup>弱の荷物を運び上げるのである。これは通常の8000m峰登山のアタック、もしくはそれ以上の厳しさがあると考えられた。それぐらいのことこなさなければカンチは落とせない。何人かの落伍者を覚悟したが、案に相違して皆見事にやり遂げた。隊員を1次と2次に5人ずつ振り分けて、登山開始から45日の5月15日、満を持して第1次アタックを敢行した。

#### ・アタック

谷川、赤坂、奥田、広瀬、椎名の5名が3時40分にC4を出発。前夜睡眠時に酸素を吸ったおかげで、かなり眠ることができ、朝食もしっかりとることができた。ヘッドラップの明かりの中を順調に進み、明るくなる頃クロアールの入り口に着く。下降時のために下部に2ピッチ、上部に3ピッチロープを張る。天気は晴れているが雲も多く、時折雪がちらつき、アタック日和とは言い難い。クロアールを抜け出た雪田は平坦なものではなく、所々氷化していて気をゆるめることはできない。10時15分、不安定な雪壁を越えウエストコルに抜ける。体は鉛のように重いが、時間的な余裕がある。初めて見るヤルン氷河側の急峻なミックス壁の弱点を探しながら左上していく。不安定な雪質とルートファインディングに苦労しながら登る。

13時30分、ダイニーマロープ3ピッチで先頭の谷川が頂上に着き、14時20分に最後尾の広瀬が登頂。頂上は風もなく、穏やかな頂であった。しばし喜びを分かち合い、15時に下山にかかる。C4まではおよそ4時間、ヘッドラップが必要になる前に何とかテントに潜り込みたいと考えていた。下山にかかった直後、全隊員中最強の体力を誇った椎名が極度の衰弱状態に陥り、歩行速度が極端に遅くなる。天候は徐々に悪化し、夕暮れも押し迫り、ルートが判然としなくなったため5人でロープを結び行動する。

22時頃、椎名が意識不明の昏睡状態になり、覚醒を試みるも果たせず、谷川が付き添ってビバークする。赤坂以下3名はそのままC4に向かって下山。

翌16日、3時頃谷川が椎名の死亡を確認。下山中の3名はルートに迷い、バラバラになり、広瀬のみC4に帰着する。5時頃谷川はビバーク地を離れ、赤坂と合流。赤坂はどこかで滑落でもしたのか外傷を負い、激しく消耗していた。奥田は高度障害のため目が見えず、現在地不明のまま一人待機中とトランシーバー交信が入る。

9時30分、谷川、赤坂とC3から救援に駆け付けた田辺が合流した直後、赤坂が力尽き死亡する。引き続き田辺、広瀬、山本、長久保は奥田の救援に向かう。

16時、奥田を無事救出。山本、長久保はC3へ、谷川、田辺、奥田、広瀬はC4泊。5月19日、凍傷を負った谷川、奥田、広瀬はC1でヘリコプターにピックアップされカトマンズへ。その日の晩の関西空港行きのダイレクトフライトで帰国した。

5月23日、留守本部の判断により、BCに残った田辺以下4名とネパール人スタッフもヘリコプターでカトマンズへ下山、登山活動を打ち切った。

## 73 1998・7~8 パミール レーニン峰7134m(長野県勤労者山岳連盟隊)

○参加メンバー 隊長：坂本昌士

隊員：芦原秀子、牛山寿宏、中村文洋、堀内義博、柳沢勝輔

### ○登山概要

7月21日 日本発(成田～ソウル～ウズベキスタンの首都タシケント)

22日 タシケント～オーシ～。古いバスに乗ってホテルより出発。運転手の他は日本人ばかりの3隊13人。アングレンという町で足止め等、様々トラブル有。

23日 7:00バスに乗ったままウズベキスタンからキルギスタンへの国境を越える。

24日 オーシを出発。4WDの赤いバスで川原を突っ走り、川の流れを横切り、草原を山脈に向かって進んでいく。17:30アチクタシBC(3,700m)到着。

25日 晴れ BCからC1(4,200m) 往復  
BCでの食事はユルタ(遊牧民テント)の食堂で作ってくれるが、おいしい物は少ない。11:00に「探検家の峠」を越えてレーニン氷河へ。モレーンは所々大きく割れて氷のクレバスが口を開けている。

26日 曇～雪 BCからC1(4,200m) 往復  
C1にテント2張を設営する。C1はモレーン上で岩屑の下は氷である。テントの近くにもクレバスが幾筋も走っていて、大きな口を開けている。

27日 晴れ～曇り BCからC1へ  
11:10探検家の峠。レーニン峰の眺めが素晴らしい雄大である。

28日 晴れ C1からデポ地点(5,100m)  
往復 氷河をつめて氷壁に取り付く。  
2呼吸1歩で進む。レーニン氷河の下方まで眺められて素晴らしい。14:20デポ地点到着、雪面に穴を掘り、荷物をデボして下降する。

30日 晴れ C1からC2(5,200m)

C2はデポ地点から懸垂氷河が稜線から一気に落ちたクレバス地帯をトラバースした先にある。レーニン峰から下がった稜線とラズジェリナヤ峰を含む稜線の下に位置する。レーニン峰上部の懸垂氷河が崩れれば全滅の位置で、恐い一夜を過ごす。(1990年ここで雪崩が起り多くの人が亡くなっている。)

31日 晴れ～曇り C2からC3(6000m) 往復後C1下降。12時10分C3到着、4人用テントを設営する。全ての動作で息苦しい。18時20分C1到着。

8月3日 C1からC2

4日 C2からC3

5日 晴～曇り(強風と地吹雪) 1次アタック失敗

3時8分発、強風地吹雪のため手足が冷たくなり、休むのに適した岩陰も無く引き返し、その日は沈殿。

6日 吹雪～曇り 2次アタック。

3時 天候悪く出発を見合わせ。一瞬天候が回復した7時20分に、できるだけ高いピークを目指す目的でC3を出発する。曇ってはいるが、風は徐々に収まってきて視界も効くようになってきた。隊長から「行けるところまで行き、3時には引き返せ」という指示が出たので、山頂方面に向かって出発する。心配していた天候も大崩れすることなく、14時50分レーニン峰に登頂できた。

---

<レーニン峰山頂方面を望む C1より>



<レーニン峰山頂にて>



## 76 2000・3~5 信州大学 ネパールヒマラヤ ガネッシュⅡ峰7111m遠征隊

○参加メンバー 隊長：吉田秀樹 登攀隊長：田辺治  
隊員：内田健一、松下修也、原田亮介、花谷泰広

### ○登山概要

#### ・カトマンズでの準備 3月22~30日

3月22日 関西国際空港に集合し、ネパール時間18時にカトマンズ着。信大が古くからお世話になっているモハンダイのゲストハウスに入る。コスモトレックで大津二三子氏と打ち合わせ、エリザベス・ホーリー氏の取材、係別の準備、日本大使館への挨拶、ネパールへデポした装備のチェック。原田は無理がたたり熱を出しダウ。28日 全ての準備が終了し、各自自由に過ごす。

29日 ネパール登山学校のネパール側隊長のラナ氏を訪問する。

30日は全員自由行動。

31日 ボダナートで安全祈願を行う。

#### ・キャラバン 4月1~9日

1日 カトマンズ～アルガート

キャラバンのスタートである。トリシリ川に沿って西へ。バスは快適だが、未舗装になると揺れ、跳ね、砂まみれ。

2日 アルガート～ソティ

灼熱のキャラバン。急に真夏の暑さ。

3日 ソティ～マチャ・コーラ

朝は結構冷え込むが、昼間は灼熱。

4日 マチャ・コーラ～ドバン

途中にタトパニ、名の通り温泉で体を洗う。

5日 ドバン～トクサ・カルカ

ヤラ・コーラに入る。一日で標高差千m。

6日 トクサ・カルカ～ドムドムクック・カルカ

今日がキャラバン中一番の難所。

7日 ドムドムクック・カルカ～クーレイ・カルカ

田辺と花谷の調子が今一つ。今日は余裕。

8日 クーレイ・カルカ～フンブー・カルカ

最後のカルカに着く。本格的に高所順応。

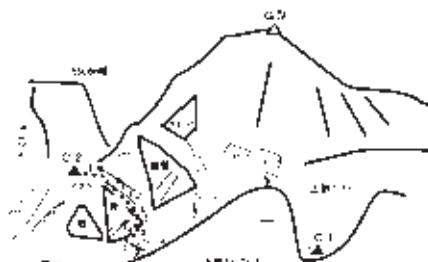
9日 フンブー・カルカ～ベースキャンプ

BC直前でストライキがあったがBC到着。

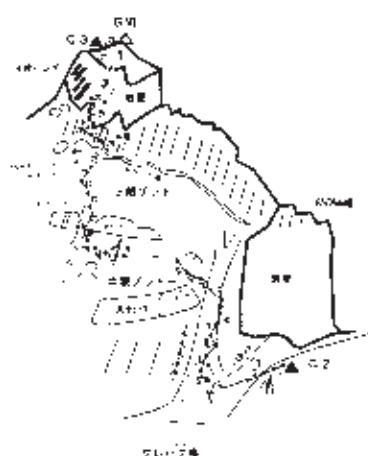
### ○ルート図1 <BC～C1>



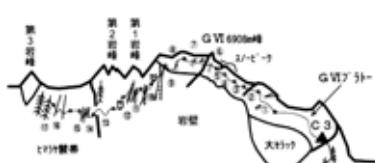
### ○ルート図2 <C1～C2>



### ○ルート図3 <C2～C3>



### ○ルート図4 <C3～アタック>



#### ・登山活動 C1建設まで C1 : 5100m

- 10日 昨晩大雪。雪かきに終始する。  
11日 午前装備の整理。ベース開きのプジャ。  
12日 田辺、吉田、花谷でルート工作。  
13日 順応をかね全員でC1まで行く。  
14日 飛ばしすぎも良くないのでレスト。  
15日 雪が降り続き、結局沈殿。  
16日 余りにも暑いので、途中で荷物をデポ。  
17日 田辺、花谷、原田がラッセルでC1へ。  
18日 今日もラッセル。松下、花谷、原田で  
19日 レスト。田辺登攀隊長から、ルート工作隊は田辺、松下、原田で、他は荷上げ隊。

#### ・C2建設まで C2 : 5900m

- 20日 ルート工作隊はBCを出て、C1からプラトーを通り岩尾根取り付きまで行く。  
21日 一気に岩尾根のルート工作を行う。田辺のペースはさすがに早い。  
22日 工作隊はC2への荷上げ、テント整地。  
23日 工作隊はBCへ。荷上げ隊はC2へ。  
24日 荷上げ隊は昨日40cmの積雪の中、C2迄荷上げする。工作隊はレスト。  
25日 荷上げ隊は再びC2への荷上げ、内田と花谷が快調だ。工作隊にプラカス、ディビさんも加わりC1迄荷上げ。  
26日 BCでレスト。今後の隊をA隊(田辺、内田、花谷) B隊(吉田、松下、原田) に。  
27日 今日もレスト。

#### ・C3建設までとアタック C3 : 6700m

- 28日 A隊はBCからC1へ。B隊はレスト。  
29日 A隊はC1からC2へ移動し上部のルート工作。B隊はBCからC1へ。  
30日 A隊はクーロアールは終わり、IV峰南壁のプラトーに達し、B隊はC1からC2へ。  
5月1日 A隊は6ピッチ登った所で内田足の指が凍傷になりそうなので下山。2人で工作を続けたが雪で下降。B隊はC2へ。  
2日 A隊レスト、B隊がルート工作、降雪のため進まず。デポ地までトレース。  
3日 全員でC3を目指す。岩壁に80年のアイスフォール帶の中心を突破、C1の下5000m。

フィックスが残っていた。時間切れとなる。

- 4日 全員BCへ下る。  
5~7日 レスト。タクティスについて話し合う。状況は厳しいが登頂に向けていく。まだ、C3ができていない、この山は厳しい。  
8日 出発前に全員で写真を撮る。  
9日 内田、マハビールはC2迄荷上げし、BCへ下りる。他の隊員はC2に泊まる。  
10日 C3までのルート工作と、荷上げを兼ね5名でC2を出発。激しいスノーシャワーと闘いながらの田辺の気迫のルート工作で全員C3へ。暗くなりC2へ帰着。  
11日 5名はC2でレスト。  
12日 吉田、田辺、花谷でC3移動。  
13日 アタックルートのルート工作。7ピッチ目で吉田不調で下り、2人で6ピッチ延ばす。非常に困難で核心は越えられず。  
14日 全員BCまで下りる。  
15~16日 レスト。1日中雨の不快な日。  
17日 新たな編成で、A(田辺、花谷、原田) B(吉田、松下) C(内田) となる。C隊がC2へのサポート、B隊がC3へのサポート。  
18日 C2-C3間のクーロアール上部崩壊が翌日わかる。A隊はC1に着く。  
19日 クーロアールの雪崩がかなり凄く、フィックスが切れた個所があり、吉田がルートを補修。  
20日 田辺、花谷C3へ移動。吉田、原田はサポート。特に吉田は気合が入っていた。  
21日 C3よりアタックルートを田辺トップでルート工作開始。第2岩峰を巻くのが核心部。2ピッチ目微妙な登りで4時間もかかる。第3峰でタイムアップ。  
22日 C3レスト。引き際を間違えば死ぬ。  
23日 3時出発。花谷胃痛から胃液を吐き出す。引き際と判断し、登山の終了を決める。悔し涙の花谷を励まし、BC迄帰着。  
24~25日 全員レスト。  
26日 C1までの回収、途中雨。  
27日 珍しく晴れた一日。帰り支度をする。  
28日 BC最終日。最後の荷物整理をする。

## 77 2001 中国 チョー・オユー8201m遠征隊 (JAC東海支部)

○参加メンバー 隊長：田辺治 副隊長：滝根正幹

隊員：飛田和夫、三好学、大谷日佐夫、花谷泰広、鈴木幹夫

### ○登山概要

#### ・カトマンズでの準備

9月5日 ロイヤルネパール航空でカトマンズに着いた。定宿のトラチャンハウス(正式名はニューバネサワール・ロッヂ)

8日 優秀なコックプラカスにより梱包作業は終了した。あくまでも今回の目的は高所順応である。

#### ・チョー・オユーへの高所順応キャラバン

10日 カトマンズを出発しコダリへ。

11日 ネパール側の通関はスムーズに進み、歩いて友誼橋を渡り中国側に入った。

12日 トラックを連ねてニエラム(3750m)へ移動する。ホテルにて3日間滞在し、裏山で高所順応をする。

16日 でこぼこ道を歩いて中国側大本營(4750m)に入り、4泊する。

21日 アップダウンのある道を辿りBC(5650m)に入る。28隊もいて大変な混雑ぶりだ。

23日 プジャを行う。

24日 突如花谷が不調になる。大本營まで下ろす。田辺隊(三好、大谷)、滝根隊(飛田、鈴木、花谷)に分かれ、C2(7000m)までの順応を行う。BCからC1(6400m)まではハイキングシューズでもいける。

29日 飛田が「月が2つ見えて、心配だ。」衛星電話を借りて塩田医師に相談し、リタイアする。

10月6日 田辺隊はアタックに向けて行動を開始した。

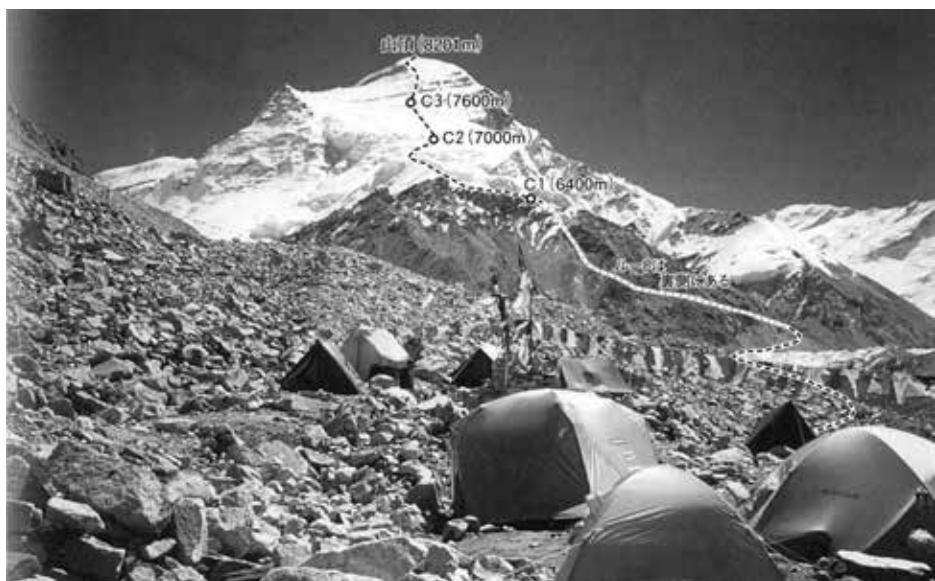
8日、C3を開けてビックリ、テントの中一面に嘔吐の跡、誰かが勝手に使用したのだ。無断で使用し、こんなものまでのこすとは言語道断だ。

9日 アタックする。垂直のロックバンドを乗り越し、雪壁を登って広大なプラトーを進み、9時に登頂した。滝根隊も11日登頂し順応登山を終了した。ずっとチョー・オユーには雲が居座り、悩まされた。我々はアタック時に酸素を利用したため楽であったが、無酸素の隊は強風のため苦労しました。

#### ・高所訓練登山を終了して

カトマンズに戻ると、悪い知らせが待っていた。ダウラギリ単独で登頂した名塚が左手3本と両足指全てに3度の凍傷を負ってしまった。幸い切断は免れたが、ローツェの参加は不可能になった。また、飛田は原因不明の脳血栓が疑われる状態、鈴木は肺の調子が悪く登高スピードを上げることができなくなっていた。ここにおいて冬季ローツェ南壁登山隊は重大な危機に直面した。

○ルート図 BC (5650m) より望むチョー・オユー北面



ミヤマクワガタ

## 78 2001 支部設立40周年記念 冬期ローツェ南壁8516m登山隊(JAC東海支部)

○参加メンバー 総隊長：尾上昇 登山隊長：田辺治 副隊長：滝根正幹  
登山隊員：飛田和夫、名塚秀二、三好学、大谷日佐夫、花谷泰広、鈴木幹夫

### ○登山概要

#### ・冬季ローツェ南壁の試み

11月4日 カトマンズでの準備を始める。飛田が日本での精密検査の結果、悪い所が見つからないということで、参加できることになった。隊荷は5tあったが、隊荷経費削減の為、その内3分の2を6日陸路でジリへ送った。残りは9日にチャーターへリコプターで隊員と共にシャンボチエへ運び、ヘリをジリに折り返し運ぶことにした。

#### ・キャラバンからベースキャンプへ

11日 5340kgの隊荷をヤク89頭にあづけ、キャラバンが出発した。アンドルジェが全て取り仕切り、サーダーのナワンヨンデンは博打に明け暮れていた。アンドルジェはナムチエの有力者のため、任せて安心である。彼はさらにBCに着いた後は、メールランナーとして働くのだ。隊員達は全員高所順応ができているので快調にとぼし、アマ・ダブラムやローツェ南壁の雄大な景色を楽しみながら、14日にBC(5200m)に入った。午後になるとローツェ南壁から頻繁に落石が発生していた。

#### ・登山活動

17日 風が吹き、砂嵐。何もかも砂だらけ。  
19日 田辺隊(花谷、三好、ダワチリ、ツエリンドルジェ、ナワンテンジン)が不安と緊張の中ルート工作に出発する。再度モレーンを越えて氷河に下り、ハーネスを着ける。ここが登攀具のデポ地となった。登るにつれ急斜面になっていくが、氷が階段状になっていて非常に歩きやすい。秋のシーズンは雪崩の危険地帯であるが、冬は予想通り安定している。ただしあたり一面に落石の弾痕があつて、気分の良いものではない。どちらにしても臆病者が来る所ではない。

### ○ローツェ キャラバン図



### ○冬季ローツェ南壁2001年ルート

- ①ローツェ山頂 (8516m) ②ローツェ西峰 (8475m)
- ③クーロアール ④チェセンが登ったとされる岩壁
- ⑤第3ワイアーラダー ⑥第2ワイアーラダー ⑦第1ワイアーラダー } いずれも1981年  
} ユーゴスラビア隊 の位置
- ⑧氷のクーロアール ⑨のど ⑩象の鼻
- ⑪第2ロックケープ ⑫第1ロックケープ
- ⑬黄色いインゼル



ルートは大きなシュルントを越えて黄色いインゼルに取り付く。氷塊を渡り固定ロープを張る。ここは後でラダーが必要だ。なるべく落石のないルートを選んで、階段状の氷を登る。第1ロックケープに到達した。4級プラス程度の岩場で、花谷が気合いを入れてリードしようとしたら、ダワチリがフリーソロでスルスルと登ってしまった。第1ロックケープを越えて12ピッチ目にロープが終了したので今日は終了した。

20日 滝根隊(飛田、鈴木、大谷、ミンマチリ、アンダワ、ニマギャルツェン)がルート工作に向かう。しかし、鈴木は体調不良となり引き返す。その後回復せず戦線を離脱した。3ピッチまで固定ロープを延ばし5900mの仮キャンプ予定地まで行つた。唯一落石から安全なキャンプサイトである。21日 田辺隊がルート工作に向かう。仮キャンプまで9名の荷上げシェルパも一緒だ。第2ロックケープは傾斜がきつく、煉瓦を積み重ねたような岩質、ここを最初リードしたユーゴスラビア人は岩登りの天才だ。花谷リードで進む、我々がロープを固定している間に、シェルパはフリーソロで3ピッチ目まで登りテラスで休む。ここから核心部の70mの垂壁である。気を取り直し花谷がリードし、5ピッチ目で雪稜に出て終了した。22、23日は「象の鼻」と名付けた雪稜にルート工作し、6400mのC1予定地に達した。ここはユーゴスラビア隊がC2を置いた場所。しかし、上部岩壁からのツララが垂れてきて危険だ。やむを得ず5900mの仮キャンプにC1を置くとする。

24、25日 レスト。隊員会議を行い検討をしたが、状況は大変厳しい。田辺と花谷は別の隊にし、ハイキャンプは3つにする。

12月1日 強風で砂嵐の中、大谷隊(花谷、ダワチリ、ツェリンドルジエ、ナワンテンジン) C1へ移動。2日 大谷隊は8ピッチルート工作をし、通称「のど」で落石がひどく、花谷が太股に受けるが幸い軽傷に済

んだ。田辺隊が(滝根、三好、ミンマチリ、ニマギャルツェン)がC1へ移動。

3日 田辺隊がルート工作に向かう。「のど」の部分はテレビ程の落石が唸りをあげ、飛来する。5ピッチルートを延ばし、氷のクーロアールに入り、8ピッチで終了する。滝根が左腕に落氷を受け、三好も下降中落石を受け、シェルパや田辺がサポートしてC1に下り、翌日BCへ。しかし、こうもたて続けに落石による負傷者がでると、登山の続行自体が厳しい。このままではいずれ重大事故が発生するだろう。悩んでいるとミンマチリが「日が当たる前に危険地帯を通過してしまえばいい。朝3時に出よう。」田辺隊はC1で1日休養し、5日この案を実行に移す。「のど」の危険地帯は安全に通過、3ピッチ登り7100mのC2予定地に到着した。

6日 大谷隊は大変な労力でヒマラヤ襞を削りC2設営。7日 大谷隊は12ピッチルートを延ばした。驚いたことにユーゴスラビア隊のワイヤーラダーが残置されていた。

8日 大谷隊は花谷リードで2ピッチでユーゴ隊C4を置いた雪のコル7400mに達した。頭上の垂壁にはまたもやワイヤーラダーが残置されていた。9日 田辺隊に入れ替わりC2に入る。10日 チェセンのルンゼにより、7450mで5級のクライム。シェルパのアイゼンが外れて落ち、本日は終了。11日 ミンマチリがガリーを突破、雪壁を右に回り込むと第3のワイヤーラダーが出てきた。

13日 花谷隊はC1へ移動。鈴木治療の為帰国との連絡を受ける。14日 花谷隊C2へ。

15日 悪天で花谷隊BCへ。

18日 田辺隊ルート工作7600mまで。

19日 ついに冬の嵐が始まった。

20日 田辺隊第2ワイヤーラダーまでですざましい突風で引き返す。今の我々の戦力では登頂するのは不可能だ。静かに撤退を決定した。

12月25日 帰りのキャラバンを開始した。

## 81 2003・9~10 中国 シシャパンマ中央峰8008m遠征隊 (JAC東海支部)

○参加メンバー 隊長:田辺治 隊員:鈴木正典、北村俊之、千田敦司、山本茂久

### ○登山概要

#### ・カトマンズでの準備

9月3日 登山隊はカトマンズに入りシシャパンマの準備を始めた。市内は銃を持った兵隊たちがいたる所にいて、嫌な雰囲気だ。

6日 ヒムジュン(7140m、後にヒムルン・ヒマールに変更)に向かうバーバリアンクラブ隊と昼食を共にする。隊長の野沢井歩とは、昨年カラコルムで遭難の事故処理をこなした後そのため、いつもより元気がないようだった。

#### ・BCへ

9日 コダリ経由でチベットに入る。ニエラム(3750m)に3泊、シシャパンマ大本營(5000m)に4泊してゆっくり体を慣らし、18日 シシャパンマBC(5500m)に入った。

21日 吹雪の中、プロセスを行なう。

#### ・登山活動

22日 エボガンジェロ氷河左岸を辿ってC1(6300m)へのルートは非常に遠く、良いトレーニングとなった。今回は高所疲労が残ってはいけないので全員酸素を吸う。

田辺隊(鈴木、山本)、北村隊(千田)に分かれてC2(6800m)までの順応を行なった。

他の隊がそれぞれ登頂し、我々もアタックを目指す。

10月9日 C2で大雪に遭遇し敗退。また、6日は悲しいニュースが飛び込んできた。野沢井が雪崩で亡くなったという。

12日 強風の中C1に入る。

13日 長大な第2プラトーを辿ってダイレクトにC3(7400m)へ移動する。

14日 隊員5人、シェルパ3人でアタックに出発する。酸素のおかげで順調に進む。ダワチリが「雪崩の危険があり進めない」と言う。彼は引き返した。しかし、前進し11時中央峰に登頂した。2年前のチョー・オユーに比べると格段に難しい山であった。野沢井に合掌しシシャパンマを後にした。



○シシャパンマ大本營 (5000m) より望むシシャパンマ北面



<シシャパンマ中央峰山頂直下を登る (7950m付近) >



## 82 2003 (社)日本山岳会創立100周年記念 冬期ローツェ南壁登山隊(JAC東海支部)

○参加メンバー 総隊長:尾形昇 登山隊長:田辺治

登山隊員:鈴木正典、北村俊之、山本茂久、千田敦司 BCマネージャー:竹中吾郎

### ○登山概要

#### ・キャラバンからBCへ

日本とカトマンズで休養の後、11月9日 チャーターへリコプター2往復で、登山隊はカトマンズからシャンボチエへ飛んだ。高所順応ができているため、順調にキャラバンを進め、14日 ローツェ南壁BCに入った。15~18日まで猛烈な砂嵐。

#### ・登山活動

19日 田辺隊(山本、ミンマチリ、ニマギャルツェン、トゥンルック、ニマテンジン)は、C1(5900m) 予定地までルートを延ばした。翌日鈴木隊(北村、千田、ナワンテンジン、アンギャル、ペンバチョルテ)が第2ロックケーブの垂壁を突破する。グレード5.9とのこと。2003年より登山規制が改正され、シーズン分けが無くなったのを受けて、11月22日にC1を建設した。第2ロックケーブから6400mまで特徴的な雪稜「象の鼻」をたどる。日中は壁中水が流れ、夜の冷え込みで氷が拡大成長する。前回と比べていぶん状況が違う。6400mから6600mの「のど」は前回危険地帯であったが、今回は比較的穏やかであった。前回と比べて上空から轟音と共にダイレクトに襲う落石が多い。早く登って、早く降りることが至上命令である。

28日 7100mのヒマラヤ襞を削ってC2を建設、そして12月3日 ヨゴスラビア隊がC4を置いた7350m地点に仮C3を建設した。ここから5級のクライミングを含む核心部が始まる。前回はここで時間がかかるつて敗退したため、今回は北村隊にシェルパのダワチリ、ミンマチリを付けて、ルート工作に当たる。

### ○登山概要

日本出発	2003年9月3日
シシャパンマ プレ登山	
BC (5500m)	9月18日建設
C1 (6300m)	9月25日建設
C2 (6800m)	10月2日建設
C3 (7400m)	10月13日建設
中央峰登頂 (8008m)	10月14日
冬季ローツェ南壁登山	
BC (5200m)	11月14日建設
C1 (5900m)	11月22日建設
C2 (7100m)	11月28日建設
仮C3 (7350m)	12月9日建設
C3 (7850m)	12月9日建設
最高到達点(8250m)到達	12月14日
登山断念決定	12月18日
日本帰国	2004年1月11日

### ○冬季ローツェ南壁2003年ルート



5日 前回の最高到達点を越え、6日 7850mに達した。ダワチリは指先が凍傷になりリタイア。検討した末C3を7850m地点とし、登山の最終段階に入る。8日 C2からC3へ荷上げに向かったキルペンバが顎に落石を受け深い裂傷を負った。レスキューヘリコpterでカトマンズへ運ぶ。落石が小さかつたのが命を救った。9日 田辺隊はシェルパのサポートを受けてC3を建設した。翌朝の気温は-35度であった。アンギャルのリードで雪と岩を4ピッチ登りリッジに出た。チェセンのルートを離れ、旧ソ連隊の登ったリッジ左手のクーロアールを目指す200m下り、トラバースをする。リッジから2ピッチ悪いトラバースをしてクーロアールの下り口に達した。視界が悪くなつたので終了した。11日 同じメンバーでルート工作。山本のリードで1ピッチ下る。クーロアールのトラバースが大変悪い。山本トラバースと命名。雪壁を登り、5ピッチ目、幅が狭まり5mの涸滝が現れた。何とか乗り越えたが5級の難しさだ。6ピッチ目も30mの涸滝があり、左から悪い高巻きをして越えた。16時にルート工作を終了し、ヘッドランプをつけてダブルユマーリングは苦しかった。C3に帰ると山本の指が凍傷にやられていた。12日 田辺隊として最後の攻撃にてた。田辺リードで40mの涸滝を右から巻く、支持力のない雪、ボロボロの岩で時間がかかつた。3ピッチでアンギャルと交代。しかし、5ピッチ目の40mの涸滝でまたしても時間がかかる。8200m地点で旧ソ連ルートのリッジからクーロアールへ下りる古い固定ロープがあった。85,87,89年と挑んだポーランド隊のものであろう。ここで15時30分、残念だが帰りのことを考え下山することにした。後、北村隊登頂をたくすことになった。

13日 北村隊がC3入りした。しかし、シェラフは3つしかなく、4人が入り北村は厳しい夜を過ごすことになった。

14日 北村は疲労し、シェルパだけでルート工作に向かった。千田を同行させるべきであった。シェルパ達はクーロアールから右手に延びる残置固定ロープの残骸に惑わされて旧ソ連隊のリッジに向かってしまった。困難なトラバースを3ピッチこなしでリッジに出て時間切れとなつた。しかしこのリッジはポーランド隊のククチカ隊長の命を奪い、強力な旧ソ連隊が凍傷患者の山を築いてやっと登つた難ルートである。また、下山中ミンマチリが落石を受けて負傷しリタイヤしてしまつた。

15日 シェルパ達は下降したため、北村と千田が攻撃に向かった。そして最高到達点に達し、登攀具が掲げてあるのを見て愕然とする。それをクーロアールに下ろし、時間切れとなつた。最高到達点は8250mであった。16日 吹雪の中、千田は北村をサポートしながらC3を後にした。途中岩雪崩で固定ロープが切断し困難な下降を強いられ、C2では一時遭難救助要請を出したほどであったが、翌日自力でBCへ下ってきた。この時、千田は「悪夢の壁からの脱出」とよんだ。

18日 最後の攻撃のため、田辺隊はサポートのシェルパと共にC1へ移動した。BCマネージャーの竹中は正確な天気予報入手するためチュクンへ下つて、スウェーデン発のエヴェレストの天気予報を伝えてくれた。アタック予定日の21日と22日に雪が降ることを告げ、24日から冬のジェットストリームが吹くという。この天気予報だと、逃げ場の無いクーロアールで雪崩に巻き込まれる危険性が高い。最高到達点から山頂までは指呼の間であったが、アタックの断念を決定する。20日 C1の最後のテントをたたみ、シェルパ達がザックを担いだ瞬間第2ロックケープが崩壊し、C1を襲つた。もし6時間早く崩壊していたら、大惨事であった。際どいところだった。

## 85 2005・5~7 パキスタン 群馬県ナンガ・パルバット8126m登山隊

○参加メンバー 総隊長：星野光 隊長：剣持典之 副隊長：吉田秀樹  
隊員：田辺治、中村和貞、飯塚敏宏、須永俊介

### ○遠征まで 隊長 剣持典之

委員長就任以来、登山隊を組織する事で頭を抱えていた。鉄の結束を誇った群馬の海外登山も今はドン底状態。今の中では海外はおろか日本の山を登るのも危うい。

そんな時期、頼れる仲間が岳連に入会してきた。「都の山を狙う?」。8000m峰は外せない、そして無酸素、シェルパレス、群馬で未挑戦、名塚さんの登っていない山。狙いはナンガに決まり、ルートは西面、1962年に登られたディアミールルートから頂上を目指す!

登山隊員は名塚、吉田、中村、飯塚、須永、そして自分。隊長を誰がやるか? 悩んだ挙句に八木原さんに相談した。「名塚の名前を使え。名塚を隊長にしてお前達が動けばいいんだ。名塚のネームバリューを利用しろ」そう言われた。

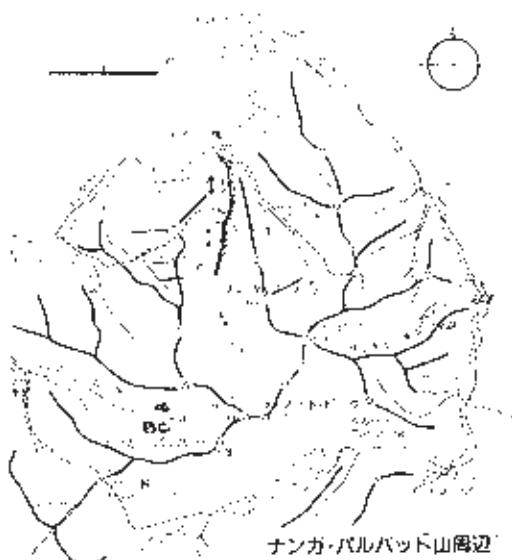
しかし、そのことを打ち明ける前に、名塚さんはアンナに逝ってしまい、自分が隊長を務める事になってしまった。名塚さんの突然の遭難に、岳連は暗く落ち込んでいた。隊員たちに参加の意思を確認すると「頑張りましょう」。嬉しい返事が返ってきた。そして、名古屋の田辺さんが参加してくれることになり、更に心強くなった。山へのトレーニングも毎週のようにアイスのグレンデやハケ岳に通った。

5月に入り盛大な壮行会を開催してもらい、27日 パキスタンの首都イスラマバードへ飛んだ。

### ○登山活動

5月27日 本隊(剣持、田辺、中村、飯塚)  
6月3日 後発隊出発(吉田、飯塚)  
5日 イスラマバード→チラース  
6日 高所順応トレーニングでナンガ北面

### ○ナンガ・パルバット概念図



### <ナンガ・パルバット>



### メルヘンヴィーゼへ移動

7日 メルヘンヴィーゼから3800m地点まで往復 8日 メルヘンヴィーゼ→チラース

9日 休養

10日 BCに向け出発 チラース→ハララ橋

11日 →セール ギュンターマウンテンス  
クール泊 12~14日 停滞

15日 セール→グリコット

16日 グリコット→BC(4200m) このBCでは、花畠がきれいでヒマラヤで一番美しい

と言われるが、今は雪の下に隠れている。

17日 BC開き

18日 夕方C1まで怪我人を下ろすため出動  
(剣持、吉田、田辺)

21~23日 登山活動を開始し、C1(4900m)への荷上げを始める。

24日 4900mの岩の基部にC1を建設した。雪崩、落石から身を守ってくれる唯一安全な場所である。C1泊。

25日 C1→C2(6100m) →BC。C1～C2間のクーロアール左上の懸垂氷河が崩壊し雪崩が発生する。C2に向かうときは必ず通過するので緊張する。C2にテントを2張り張って下山する。 26~27日 休養

28日 BC→C1(泊) へ。

29日 C1→C2(泊)。核心部の鶯巣岩壁で2ピッチ程下にいる中村が突然墜落してルンゼの中央へと消えていった。無線で皆に連絡すると、田辺さんから「俺のところで何とか止まった」と応答があり、ほっとする。止まったことも奇跡だが、50m滑落して無傷だったのには驚いた。事故原因は、すだれ状に掛っているフィックスロープを新しいものと勘違いし古いものに掛けてしまい、切断したようだ。

30日 C2→C3(6600m) →C2(泊)

7月1日 C2→C3(泊) 建設し、6800mまで順応トレーニングで登る。

2日 C3→C2→C1→BC

3~8日 休養。その後1週間の天気待ちの停滞となる。

9日 アタックに向けBCを出発。軽量化を考えて余計なものは置いていく。食料、燃料も最低限しか持たないが、かなりの重荷である。これがシェルパレスの辛い所だ。

10日 C1→C2(泊) 11日 C2→C3(泊)

12日 C3よりルート工作

13日 降雪のため停滞。午後になると雪崩の音が頻繁に聞こえてくる。テントの数

メートル前にデブリが止まる。テントを尾根の先端まで移動し、いつでも逃げだせるように完全装備でテントに入った。夕方天候も回復し、気温も下がり始めた。

14日 C4に向けて、田辺さんと先行してルート工作をする。雪崩の危険があるので気休め程度に岩から支点を取りながら進む。フィックスの要らない暖斜面に入り、交代でラッセルしC4(7200m)を建設した。

15日 午前2時少し前にテントを出て頂上を目指す。満天の星空の下、トップを交代しながら進んでいく。突然前方からヘッドランプの明かりが見えてくる。信じられないことに、南壁から35年振りに登頂した韓国隊隊員が、頂上を踏んで西面に下りてきたのだ。

彼らのトレースが頂上への良い道案内になったが、ラッセルは結構きつい。大きな表層雪崩の跡があり、韓国隊員が起こしたものだ。斜面左の岩と雪のラインにルートを取ろうとしたが雪が不安定で諦め、しうがなく雪崩れた跡を右上気味にトラバース。ノーザイルのためかなり緊張した瞬間だった。雪の状態が悪く時間がかかってしまった。ザックを岩角にデポし、空身で頂上を目指す。2~3のピークをやり過ごすし、それらしいピークが見えてきた。ついに登頂。頂上からの景色は雲海の下で何も見えない。不思議と嬉しさの実感はなく、下ることばかり考えていた。吉田さんは目がかすんでよく見えないらしい。ザックのデポ地からザイルを出し確保して下る。C4に着いたのは23時20分。長い1日が終了。16日 C4→BC。天気も良く、吉田さんの目も回復し、各テントの荷物を持って下山。

22日 BC→メスナーの小学校

23日→チラース

24日 イスマバード

28日 解散。

---

## 86 2005・6 中国 ミニヤコンガ周辺高山蝶と高山植物の調査

○参加メンバー 堀勝彦、小出雄一

○調査概要 堀 勝彦

6月7～17日 短期間で短距離です。

四川省の成都から金紗江に沿って、チベットに入ろうとした、かつての僧侶たちの仏教探求の旅路を辿りながら、調査をしようとして出かけた。

成都～雅定～丹芭～理具～都江堤市～成都

優秀な現地のガイドと警察官の運転手を雇うことが出来て、まず康定へ。ここは戦前中国の昆虫の産地として有名な所でしたので、ここを中心に山地に入り込んで、蝶の採集をした。中国では蝶の採集が禁止されているので、人の目に触れないように注意深く行動することにしました。気付かれないように、小さな渓谷などに入り込んで、こっそりと採集をした。また、折多山の高所草原から峠に出て、高山蝶の採集と色鮮やかな高山植物をかなり採集をした。蝶の他にもゴミ虫の採集も随分と試みた。渓谷であったり、畑地であったり、草原であったりして、魅力たっぷりがありました。このたび採集をした辺りは、翌年の四川大地震の中心地で、とてもない被害を受けたのでした。僅か10日ほどの旅なので、大きな収穫はなかったが、スケーニャン山の近くを通って、山間や高原から6000m級の山々が沢山見えたのが嬉しかった。また、パンダの保護施設も見学した。

私にとっては、大変短い期間の調査であったので特別記録に残す程ではなかった。

<四川省 パンダ保護区>





イワヒゲ

## 87 2005・4~5 アラスカ デナリ国立公園 ハンティントン南西壁・デナリ南西壁

○参加メンバー 横山勝丘、一村文隆

○登山概要 横山勝丘

一村とは初めての海外遠征だったが、普段は同じ職場で仕事をしている間柄。事前のトレーニングとして、谷川や穂高で冬の壁を登り込んだ。

4月中旬

日本を出発し、アンカレッジへ。アンカレッジからは事前に予約していたシャトルバスでタルキートナまで移動。3時間ほど。タルキートナはデナリ国立公園の玄関口。この国立公園レインジャーステーションにて入山のブリーフィングを行う。

4月下旬

セスナにてトコシトナ氷河に入る。眼の前に広がるハンティントン西壁の威容に見入る。さっそく偵察を行い、南西壁に見つけた氷の弱点を縫って山頂を目指すことにした。

### ・ハンティントン南西壁「志士」初登

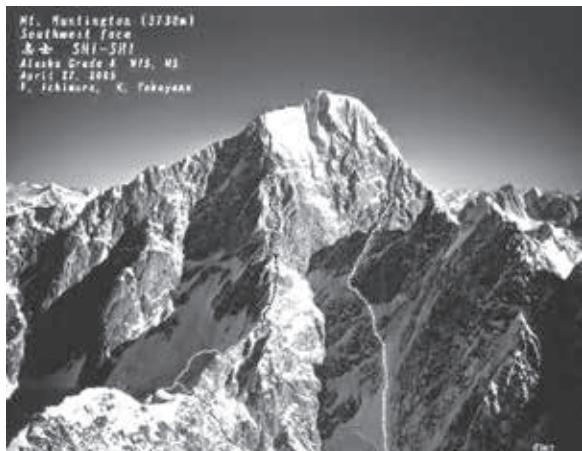
4月27日

夜明け前にベースキャンプを出発。西稜のコルを1時間ばかり氷河歩きで越え、南西面に入る。最初に雪の詰まったガリーをダウンクライム。1時間ほどで南西壁の基部に到着。ここでクライミングギアを身に付け、登攀開始。

気の遠くなるような冰雪壁の後、凹角に食い込む薄氷に突っ込む。もちろん人工物は一切見当たらない。何もない壁に足を踏み入れる快感がそこにあった。

数ピッチ登ると、南稜に飛び出した。思ったよりも核心部は短かったが、それで

<ハンティントン南西壁「志士」>



も我々のクライミング欲を十分に満たしてくれた。ここから山頂までは一投足と思われたが、実はここからが長かった。

稜線は青氷で覆われ、想像以上に傾斜は強い。まともに休む場所も皆無で、ただひたすら登り続けるしかなかった。

夕暮れまでに山頂にたどり着き、記念撮影を済ませてから足早に下降に取りかかる。

下降路は、これまた見事に続く青氷。それを、何を間違えたかダウンクライムで済まそうとしてしまう。途中から傾斜は強まり、さすがに恐ろしくなって懸垂下降を申し出た。とは言え、それでも下降は苦労した。

正しい道筋を探し出し、安全かつ確実に下降を続けるのは体力を吸い取られる。途中、危うくロープの末端を下降器がすり抜けてしまうところだった。足元には2000mの虚空の空間……。恐ろしや。

いつしか日は暮れ、夜の帳(とばり)が降りていた。それでも無理やり下降を続け

る。延々と20回以上先の見えない下降を続け、氷河上にたどり着いたのが夜中の3時半。疲れ切って氷河上にぶつ倒れた。

このクライミングは、私にとって最初の海外での成果となった。いきなり訪れたアラスカという地で、運良く初登という結果を残すことができたのは、その後の私にとって大きな原動力となったのは言うまでもない。

このルートを「志士」と命名した。

#### ・ハンティントン南西壁「志士」初登

Alaska Grade4 1800m A15/M5

2005年4月27・28日

#### ・デナリ南西壁「デナリダイヤモンド」

5月5日

私たちは次の目的に向けてセスナに乗った。カルヒトナ氷河だ。ここでは、デナリのどこかしらの壁を登ろうと考えていた。

まずはウェストバットレスにて高所順応をする。5日間かけて5500m地点まで到達し、順応を終える。

5月16日

C1から東に延びる北東カルヒトナ氷河に入った。C1からは良く確認できなかつたのだが、どうやら顕著な弱点が南西壁に見て取れた。それが何というラインなのかもわからないまま、私たちはこの氷河に入つたのだった。

氷河は想像以上に荒れていて、クレバスを迂回して時間を食うし、左右にロックオンされたセラックの脅威もあった。一日かけてようやく南西壁の基部に到着し、壁を確認後にC1まで戻る。

登るラインは決まった。目星を付けていたラインには、見栄えがする氷がところどころに垂れ下がり、まさに私たちが求め

ていたクライミングを実践できそうに思えた。

5月18日

再び氷河を詰め、壁の基部でテントを張る。

5月19～23日

翌日から登攀開始。想像通り、非常にクオリティの高いクライミングを楽しめた。氷、ミックス、そしてカチカチの花崗岩。しかし、高所に慣れない私たちは背中の荷物がどうも重い。リードはまだしも、フォーローは全装備を背負ってのユマーリングで、拷問とはまさにのこと。

夜21時まで登攀を続け、見つけたテラスにテントを張って夜を過ごす。

翌日もまた翌日も、同じ動作を繰り返し。上部では非常にクオリティの高いアイスクライミングが数ピッチ続き、「アラスカに来て良かった」と思わずにはいられなかつた。

3日間の登攀で傾斜の強い下部岩壁を越え、上部の雪壁と長いウェストバットレスの下降に2日間を費やして、無事に私たちはベースキャンプに戻つた。

体はヘトヘトだったが、心は溢れんばかりの充実感で満たされた。後に、私たちが登ったラインはデナリダイヤモンドというルートだったことを知つた。第3登だったようだ。

情報に捉われることなく、自分たちの目で見て自分たちの感性で登るラインを決める。そんなクライミングの魅力に気づいた遠征だった。

#### ・デナリ南西壁「デナリダイヤモンド」

第3登

Alaska Grade6 5.7/AI5/M7

## 88 2005・7 南米ボリビア レアル山群・イリヤンプ北壁

○参加メンバー 横山勝丘、佐藤祐樹

○登山概要

### 横山勝丘

この前年、ペルー・アンデスを訪れていた私は、たまたま目にしたボリビア・アンデスのガイドブックに、非常に印象的なラインの写った写真を見つけた。それからというものの、そのラインを登ることばかりを考えるようになつた。翌年、

2年後輩の佐藤とともに、40日間のボリビアトリップのチャンスを得た。

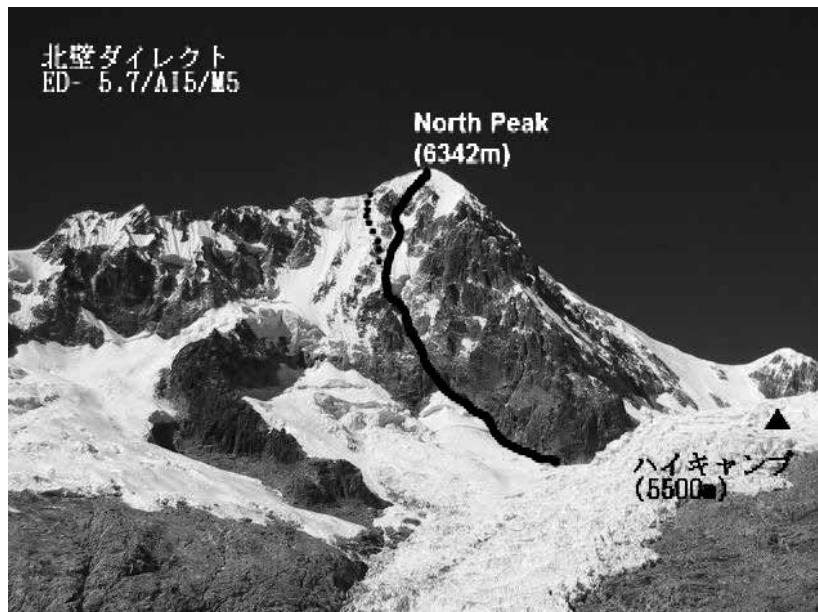
6月下旬

アメリカ経由でボリビアの首都ラパスに入る。既に標高は4000mを越えている。数日間滞在して準備の後、順応のためにリアル山群最高峰のイリマニ(6439m)を目指す。バスでコニの村まで行き、ここでパーティーを探す。

翌日からキャラバン開始。丸一日のトレッキングでプエント・ロトのベースキャンプまで(標高4500m)。さらに翌日、標高5500mのハイキャンプに移動する。順応のために、標高5800mまで登り、それからキャンプに戻る。なかなか寒い夜だった。

その翌日、それほど苦労することなくイリマニ山頂を踏む。数か所でクレバスの通過があつただけで、後はほとんど歩きだつ

○イリヤンプ北壁ダイレクト(6342m)



た。天気も良く、非常に快適な一日。この日は再びハイキャンプに泊まる。

翌日下山し、そのままバスに乗り込んでラパスに戻る。ラパスでは、到着時に泊まった安宿の近くに更に安い宿を見つけて、そこに移動することにした。

数日間レストした後、いよいよ本気のクライミング始動。とは言え、前年より温めていた元来のプロジェクトは、正直言って技術的にも厳しいのではないかという思いがあった。そこで、とりあえずもうひとつの大目標であったイリヤンプ(6368m)を目指すことに決め、バスで北上した。

ソラタの街は、リアル山群北西部に位置する小さなリゾート地で、ここで安宿を取り、翌日の峠越えをしてくれるトラックを見つけた。

翌日、トラックに乗って峠を越え、アン

コマの村まで。ここで親子のポーターを見つける。さらに翌日、良く整備された谷沿いの道を行く。イリヤンプのベースキャンプまでは丸一日の行程だったが、苦労する場所はなかった。

翌日は、まず5500mのハイキャンプを目指す。平坦な氷河上にテントを設置して余分な荷物を残置した後、壁の偵察に出かける。目星を付けていた西壁は想像以上に傾斜が強く、また、あるはずの氷もほとんど消えてしまっていて、非常な困難が容易に想像できた。

そこで、左に回り込んだ北壁を偵察すると、顕著な弱点が山頂に向かってダイレクトに延びていたので、これを登ることに決める。テントに戻り、クライミングの装備をすべて持参して壁の基部まで行く。フラットな場所を見つけ、そこでビバークする。

7月12日

出だしのシュルント越えに少し手間取るも、明るくなる頃には下部のガリーに入り込むことができた。下部ガリーは基本的に同時登攀でぐんぐん進む。500mの薄氷の混じるガリーを詰めると、70mの高さのセラックにぶつかる。

これは左端からアイスとミックスのコンビネーションで2ピッチ(AI5/M5)。非常に露出感があるが、氷も岩もしっかりしていて、クライミングそのものをたのしむことができた。

これを越えると、上部雪壁に入る。弱点はそのまま左上して稜線に出るのだが、我々はそのまま山頂に向かってダイレクトに延びる氷雪壁にラインを取る。

山頂直下で150mのミックスに突入。ここはところどころ傾斜が強く、岩も氷もグズグズな場所があり、少し緊張した。

登攀開始から12時間後、壁から北峰山

頂(6342m)にダイレクトに飛び出した。なかなかエキサイティングなフィナーレだった。山頂で雪を削ってビバークする。寒いが、登攀成功の喜びで気持ちは軽い。

翌朝、南峰(6368m)を越えてノーマルルートの南西稜を下降した。南西稜は一カ所だけクレバス越えがあったが、あとは比較的容易な下降だった。5500mのハイキャンプまで3時間。

翌日、すべての荷物をまとめ、下山開始。往路とは別のトレッキング道をたどり、ダイレクトにソラタの街に戻る。その晩はソラタの街で祝杯を挙げ、7月15日にラパスに戻った。

数日間レストし、再びエネルギーが戻ってきた。残りの滞在日数は少ないが、最後のチャンス、最大の目的に向けて出発する。

登山口までは順応と同じ。コニの村で再びポーターを雇い、翌日、別アプローチから目的の壁を目指す。

を目指す壁はスリマニの南面。グルッと山を回り込み、かつては鉱山かなんかの跡だったであろう良く整備された道を登ると、南壁が良く見渡せる場所に出た。

壁を見上げた瞬間、あまりにも細い氷が申し訳程度に垂れている姿を見て、私たちは諦めた。これは無理。また来年! そう誓って私たちは下山した。

初めてのボリビアだったが、非常に充実した時間を過ごすことができた。山自体も比較的ボリュームがあり、ラインは非常に攻撃的。ペルー・アンデスのような氷雪壁とは違い、岩と氷のミックスとなる場所が多く、私好みのクライミングが可能である。ボリビアという国自体も非常に魅力的。40日間滞在して、航空券も含めて一人当たり15万円で事足りた。

## 89 2006・9～10 中国 シシャパンマ主峰8027m遠征隊 (JAC東海支部)

○参加メンバー 隊長：田辺治 副隊長：千田敦司

隊員：藤川勝人、剣持典之、山口貴弘、山本季生 BCマネージャー：竹中吾郎

### ○登山概要

#### ・カトマンズでの準備

9月4日から7日までカトマンズで準備する。副隊長の千田が梱包の指揮をとり、てきぱきと仕事を進めていった。

8日 カトマンズ出発。途中マオイスト（反政府武装組織）に通行料の手数料を要求される。しかし、値切った。それほど今回は経費がひつ迫していた。

#### ・BCへ

9日 コリダ経由でチベットに入る。国境の町ザンムーは何でもあり、安い。ニエラム（3750m）に3泊、シルン（4700m）に1泊、シシャパンマ大本営（5000m）に4泊してゆっくり体を慣らす。ここまで車で入ってしまうため特に念入りな高所順応が必要だ。

20日 BC（5500m）に入る。またアドベンチャーガイドで旧知の近藤謙司隊も前後してBCに入った。

#### ・登山活動

23日から25日の間大雪。27日から本格的な登山活動に入る。エボガンジェロ氷河を左岸を辿ってC1(6300m)へ1往復した後、30日から10月3日にかけてC1とC2(6800m)の宿泊訓練1度に行った。一方近藤隊は3日アタックをかけたが深いラッセルのため7700mで断念した。田辺隊は6日C1、7日C2と進み、8日C3へ。

9日 隊員6名と、カミシング、パサンカミの8名でアタックを開始する。パサンカミは咳がひどく下山する。12時30分登頂する。その夜、ペルー隊の3人が我々のテントに強引に入る。翌日さっさと下り、何の挨拶もない。この手のレベルの低い欧米人の話は良く聞くが、ついに我々のもとに訪れた。BCにのんびりとバックキャラバン用の再梱包をしている時、ナワンヨンデンから「最近カトマンズでは、再充填品の酸素ボンベが出回って、高所でトラブルが起きている。」

再充填品でなく、純正品を用意するように指示し、その代金を支払った。しかし、全てが再充填品であった。

10月14日 シシャパンマ大本営からの帰り道、ラブ・チェカン（7367m）の雄姿が望まれた。田辺が1987年日中友好合同登山隊で初登頂した山であった。

15日 カトマンズに帰着し、プレ登山を終了した。

<大雪が降った後のシシャパンマBC>



<シシャパンマ主峰(8027m)にて>



ミヤマクロユリ

## 90 2006 ネパール 冬期ローツェ南壁登山隊 (JAC東海支部)

○参加メンバー 総隊長:尾形昇 登山隊長:田辺治 副隊長:千田敦司  
隊員:藤川勝人、剣持典之、山口貴弘、山本茂久 BCマネージャー:竹中吾郎

### ○登山概要

#### ・カトマンズでの準備からBCへ

11月4日 カトマンズの準備を開始した。ナワニヨンデンから18名のシェルパの紹介を受けたが半数は初顔合わせである。

9日 巨大なロシア製ヘリコプター2往復で、隊荷6トンとメンバーはシャンボチエへ飛んだ。ナムチエに下ってサクラロッジに投宿する。

10日 SPCCへ行き登山物資の申告をする。

11日 6300kgの隊荷を105頭のヤクにあづけ、キャラバンが出発した。デボチエのロッジに泊まる。

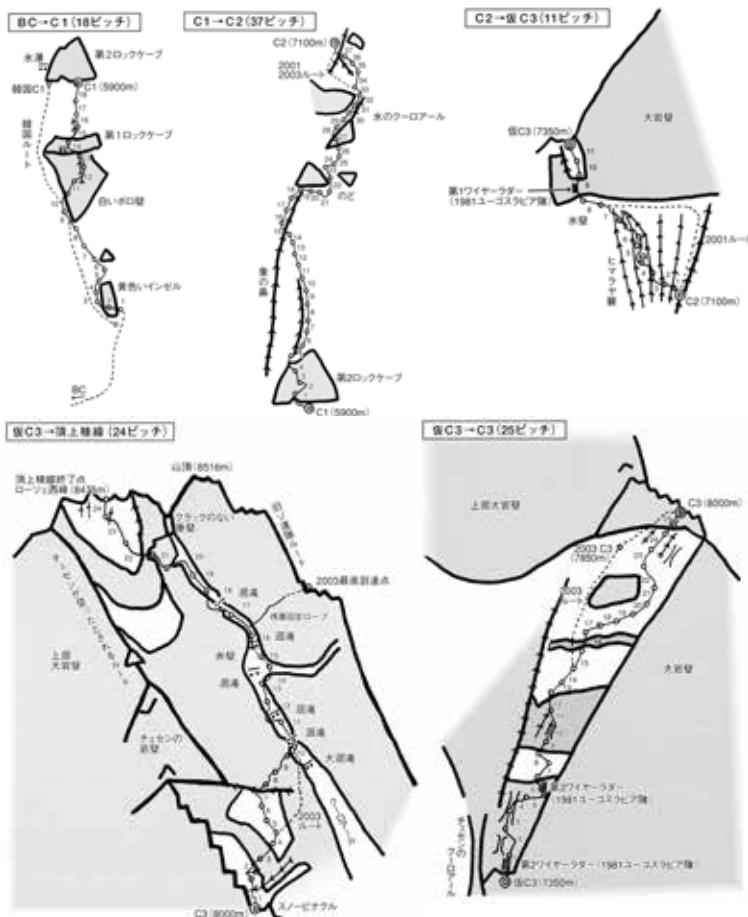
12日 ディンボチエの予定が、チュクンまで進む。キャラバン中ローツェ南壁が急峻な姿で迫っている。

13日 何事もなく5200m地点のアブレションバレーにBCを建設した。

17日 ナワンヨンデンがお経を読んでブジヤをあげてくれた。今回韓国隊もこの南壁に遠征にきている。

#### ・登山活動

11月18日 田辺隊(剣持、山口、ナワンテンジン、キロペンバ)と千田隊(藤川、山本、ペマツェリン、ベンバチャルテ)に分かれて登山活動を開始した。他のシェルパは総出で荷上げにあたる。18日 田辺隊はC1まで



ルート工作。19日 千田隊は藤川リードで第2ロックケープの垂壁を突破した。

21日 前回と同じ地点(5200m)にC1を建設した。ここまで韓国隊とは別々のルートを作ったが、C1から上は共同でルート工作を行うことになった。具体的な話し合いも行った。秋の大雪のためたっぷり雪をまとっているため、落石が抑えられるし、悪場も埋まつていて通過しやすくなっていた。今回は風だ。頻繁に吹き荒れていた。22日 田辺隊と韓国隊は「象の鼻」にルートを延ばす。強風が「のど」にチリ雪崩を起こし、落石が韓国隊員に当たる。直ちに彼

を降ろす。この強風は28日 千田と山本がC2にルート工作に行き、6400m付近で10mほど吹き飛ばされたほどだ。また、この日隊のエース格の藤川が右手に凍傷を負い、隊長判断でBCに下りる。

12月1日 やっとのこと田辺隊がC2(7100m)を建設した。

2日 仮C3へのルート工作にあたった。この日、日本山岳会の年次晩餐会があり、ローチェBCと衛星回線で結んで中継をした。山本が担当するもオーバーワークがたり5日 咳のため助骨にひびが入りリタイアとなり、また貴重な戦力が失われた。6日 千田隊が仮C3(7350m)を設営した。この困難な岩壁ルートは、日本隊のみで行うことについていたが、藤川、山本がリタイアしたため、韓国隊のアン・チヨンと突破した。

本格的な冬の強風の前、クリスマスをタイムリミットとした。シェルパが荷上げするたびに落石で負傷者が増え、結局役に立ったのはナワンヨンデンの配下の約10名であった。13日 5日間の風の収まるのを待つて登山を再開した。14日 田辺隊(山口、ナワンテンジン)がC2に上がると、2張りが強風のためポールがボキボキに折れていた。こんなことは初めてであった。

16日 田辺隊は猛烈な落石の洗礼をうけた。田辺のザックにも命中し、酸素ボンベに大きな傷が入った。引き返す。翌日ルート工作を行うが、ナワンテンジンが不調となりBCに下る。しかし、田辺と山口は予定していた8000mのC3地点に着いた。

21日 強風の中C3が建設され、千田隊(剣持、ペマツェリン)とアン・チヨンがアタックのためC3に入った。22日 千田隊は2003年とは別のラインで、山頂の左肩に突き上げるクーロアールを目指した。

23日 クーロアールに入り高度をかせいといった。強風のため落石の嵐の中剣持はリードした。しかし、この日ペマツェリンが落石をくらってリタイア。3日目、最後の

力を振り絞って千田、剣持、アン・チヨンがルート工作中に当たったが、8150m地点しか届かなかった。そして韓国隊は残念ながらここで断念となった。こうなるとその先は田辺隊が引き継ぐしかない。

22日 C1、先行するシェルパが大量の落石を落とし、下にいた田辺はオーバーハングの下に飛び込み間一髪難を逃れた。

23日 C2と移動した。

24日 C2にて田辺隊の一員になるようにペンバチョルテを拝み倒す。ナワンヨンデンの説得により了承し、メンバーとなる。

25日 千田隊と入れ違いに田辺隊がC3に入る。酸素ボンベの荷上げ関係から、2日間トライすることになった。また、天気予報では「大きな気圧の谷が来るものの、あまり悪天にならず、かえって風が止んで絶好の登山日和になるでしょう。」

26日 千田隊の終了点に着く。40mの涸滝の下クーロアール上部から岩雪崩、ここを登るのかと思うと身の毛がよだつ。気合を入れて登る。涸滝を越えると右リッジへの分岐点。その先は前人未到の場所と思ったら朽ち果てたピッケルがあり、氷の下にはフィックスロープも。クーロアールの最後は、20m程の垂壁でその先はコルになっていた。先人の跡もここで途絶えていた。

27日 ボロボロの岩壁を山口が果敢にトラバースし、3ピッチ目ヒマラヤ襞の雪壁に挑む、雪はサラサラと崩れステップにならない。雪をたたき落としジリジリ登っていった。15時35分、山口は稜線に這い上がった。雪煙をまつたエヴェレストがあった。ついに、我々は冬季ローツェ南壁を完登した。田辺が着いたのは16時、標高8475m。山頂へは直線距離で200mだが、その余力がない。潔く山頂をあきらめた。C3に着いたのは21時。

28日 C1まで下る。元気なペンバチョルテが25m転落しレスキューヘリでカトマンに搬送し、終了した。

## 83. 91 2004・2006 インドヒマラヤ メルー峰「シャークスフィン」6450m

○参加メンバー 馬目弘仁、黒田誠、岡田康、佐藤映志(2004年のみ)、花谷泰広

### ○登山概要(2004年)

8月23日にデリーに到着。準備ののち、陸路3日間で登山口のガンゴトリへ。4日間のキャラバンで8月31日にBCに到着。ここからメルーを目指す馬目・黒田・花谷トリオと岡田・佐藤ペアは別行動となる。

9月2日より登山活動を開始。シャークスフィンの頂上に突き上げる岩壁を、カプセルスタイルによるクライミングで目指すことになった。なお、同ピークは2001年にロシアのババノフによって初登されている。

※以下日程は記録なし。

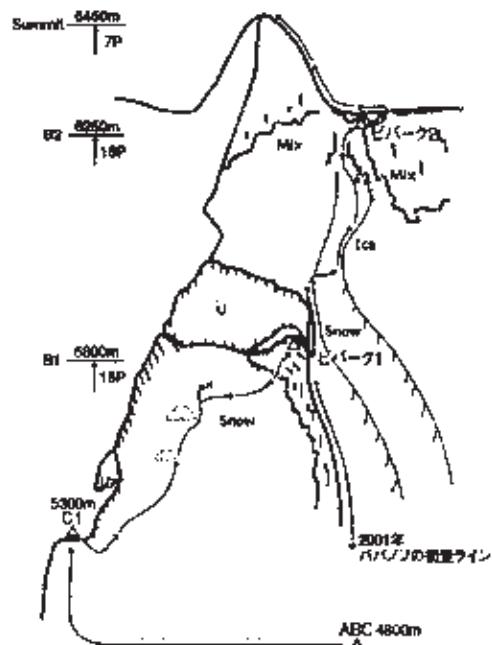
9月下旬に6150m付近の岩壁を花谷がクライミング中に墜落。足首を負傷し行動不能に陥る。馬目・黒田・BCより岡田・現地で雇用したネパール人による救助の末、BCに帰還。その後シブリンから転戦した2名を加えた4名で別ルートからのクライミングを開始したが、落氷事故のため下山。遠征は終了となった。

### ○登山概要(2006年)

8月23日 出国。今回のメンバーは馬目を隊長に、黒田・岡田・花谷の4名でのトライとなった。デリーでの準備のあと、陸路3日とキャラバン4日で、8月31日に懐かしのBCへ。9月4日に4800m付近にABCを設営し、本格的な登山活動に入る。前回の挑戦では、ポータレッジを用いたビックウォールスタイルでのクライミングとなつたが、今回はハンモックを用いたアルパインスタイルで挑戦することになった。実際はカプセルスタイルに近いものがあるが、できるだけシンプルなクライミングを我々は望んでいた。9月8日にC1(5300m)を設営。体調不

### ○インドヒマラヤメルー中央峰北東壁

#### 「シャークスフィン」6450m



良者続出のトラブル続きの高所順応ではあったが、9月18日より頂上へのクライミングを開始した。

19日は早朝より雪。行動を遅らせ、午後にC1入り。20日は雪により一日停滞。21日は待望の晴れ間となり、手持ちのロープを岩壁基部に向けて7ピッチ分フックス。しかし夕方頃から再び降雪となり、今度は大雪の様相となった。雪は翌日にかけて降り続き、早くも食料の切り詰めが始まった。もともとC1からは1週間の行程を考えて食料や燃料しか用意していなかつたため、やむを得ない。話し合いの末、一旦下降して再びトライすることに決めてあとはひたすら時間が過ぎるのを待った。

23日、風は強いが雪はやんだ。しかし2日間に渡る大量降雪のため、すぐには行

動ができない。ここで再び話し合い。昨日は一旦下降を決めたが、ここで下りてしまうとこの好天の周期は終わってしまうかもしれない。現実的にできることを考え、当初のラインを変更して、初登のババノフのラインからのクライミングすることに決めた。さっそくフィックスを回収し、翌日からのクライミングに備えた。停滞の消耗などまるでなく、クライミングができる喜びにあふれていた。

9月24日、朝4時頃にC1を出る。ババノフのラインは、C1から頂上を見て右手の雪壁をまず登ることになる。大量降雪のおかげで硬い氷が隠れていたが、アンカーを作るには少し苦労させられた。15ピッチほどのクライミングをトップを交代しながら進む。フォローはユマーリングで続く。雪壁は次第に悪い雪質となり、岩壁にラインを求める。幸いなことに登れそうなラインがあり、黒田と馬目が渾身のクライミングでここを切り抜けた。すでにあたりは真っ暗になり、現在地もよく分からなかつたが、標高5800mぐらいだろうか。小さなテラスで立ったまま行動食を頬張り夕食とする。落ち着いたところでハンモックを吊るし、日付が変わった頃に就寝。丸一日行動した疲れも手伝い、熟睡できた。

9月25日、快晴となった。岡田が右に回り込みながら懸垂下降してラインを偵察。すぐにガツツポーズが見えた。ここからは快適な雪壁が続いているように見えた。しかしトップの馬目のクライミングは慎重にならざるを得なかつた。雪壁には十分な雪が載っておらず、デリケートなクライミングを強いられることになった。80mをノープロテクションで突破し、その後も不安定な雪質が続いたが、やがて安定した雪壁となり行動スピードも上がつた。壁の中にいる

と、距離感が狂う。近くに見えていた稜線がなかなか近づかない。楽勝モードが吹き飛び、日暮れも重なつてだんだん目つきも変わってきた。おかげに夕方頃から天候が崩れ始め、再び雪となつた。ルート上にはもはや雪崩と言っても過言ではないほどのスノーシャワーが降り注ぐ。そのなかをジリジリとルートを伸ばし、稜線直下の雪庇下に到達。標高は6250mだった。ちょうどいいビバークスペースを発見し、着の身着のままのお座りビバークとなつた。やはり日付が変わる頃に落ち着いたが、私は一睡もできなかつた。

9月26日、快晴となつた。窮屈な姿勢と寒さは耐え難く、3時に起床。食欲はなく、お茶を飲んで頂上に向かつた。雪庇は難なく乗り越えることができた。圧倒的な光景が広がつていたが、頂上しか目にはいらない。もう目と鼻の先だった。頂上直下で馬目とトップを交代。馬目にとつては4回目の挑戦。しかも前回は私の事故のせいで敗退となつた。どうしても先に頂上を踏んでもらいたい。本人は固辞したが、先に登つもらつた。馬目の目からは涙が溢れ、再起をかけていた私もまた涙だつた。ヘッドウォールを登らずしてシャークスフィンの完登はない。今でもそう思うが、この時はそれ以上にこの頂が大事だったのかもしれない。

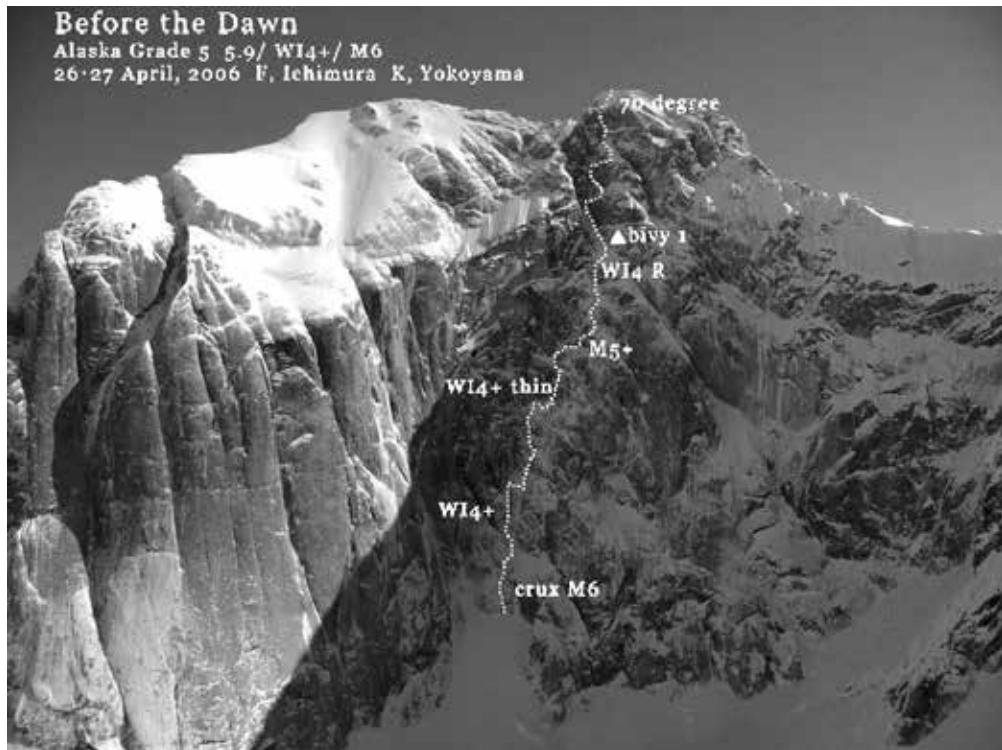
4人揃つて記念撮影をし、下降にとりかかる。登るときに残しておいたアバラコフの懸垂支点のおかげでスムーズな下降となり、21時頃にはC1に戻ることができた。この日の夜は遅くまで熱く語り合つてしまつた。

翌日はゆっくりと行動を開始してBCに下山。ほろ苦くも充実した時間を噛みしめることができた。

## 92 2006・4～5 アラスカ・デナリ国立公園 ブローケントゥース北壁・ハンター ノースバットレス

○参加メンバー 横山勝丘、佐藤祐樹、山田達郎、一村文隆

○ブローケントゥース北壁 (2715m)



### ○登山概要 横山勝丘

前年に引き続き、再びアラスカを目指す。今回は、後輩の佐藤、前回のパートナー一村に加え、佐藤のパートナーとして、普段から一緒に登ることの多い山田達郎を加え、総勢4人での遠征となった。

更に、アラスカでのクライミングの後はそのままボリビアに向かい、前年やり残した大物を落としに行くという壮大な計画とした。

3月末に出国した我々だったが、タルキートナでまさかの停滞。毎日雪が降り積もり、セスナが飛べない。1週間待たされ、ようやく最初の目的地に向かった。

バックスキン氷河は以前より興味のある場所だった。ビックウォールのような急

峻な壁に、氷が無数に張り付いている。まさに、我々が最も欲する壁だった。

目星をベアートゥース東壁に定めて、これをトライしたが、あまりに傾斜の強さ、技術的な困難さに、経験したことのないほどの恐怖を感じ、たった2日で、標高差にして400mで敗退となった。

次はもう少しマイルドなものに!ということで、氷河の最奥に位置するブローケントゥースを目指し、首尾よく新ルートを登ることができた。

佐藤と山田も、ムースズトゥース東壁の攻撃的なラインをトライした。結果は敗退だったが、実に果敢に攻めたと思うし、そのライン取りは、男らしかったと思う。

Broken Tooth(2715m) North Face  
First Ascent“Before the Dawn”  
アラスカグレード5(ED2) 5.9/WI4+/M6  
1000m

#### 4月26・27日 一村文隆、横山勝丘

ブローケントゥース北壁の初登ルート。壁の真ん中を貫く氷と雪のラインで、見た目にも内容も最高。バックスキン氷河のみならず、アラスカのクラシックとなるべき内容はもっていると思う。

我々は初日17ピッチ登り、雪を削ってビバーク、翌日6ピッチ登って山頂に立ち、同ルートを下降、19回の懸垂下降で氷河に降り立った。38時間ラウンドトリップ。

核心は1ピッチ目で、垂直のシンクラックを辿る(M6)。中間部は、ガリーとランネルに食い込む薄氷を繋げる。11ピッチ目のミックス、13ピッチ目の薄氷、19ピッチ目のチムニーが悪い。上部に行くに従い岩も氷も脆弱になり、デリケートなクライミングを強いられた。

全体的にそれほどの高度な技術は必要としなかったが、ルートファインディングと支点作り、スノーシャワーには悩まされた。僕達はF2を左のランネルから巻いたが、それを直登すれば、より難しく危険なクライミングになるだろう。

バックスキン氷河でのクライミングを終えた後、我々はセスナを呼んで一路カルヒトナ氷河に向かった。ここには、ハンター北壁という珠玉のミックス壁がある。標高差1200mの、極めて傾斜の強い壁だ。そこに、無数の氷が垂れている。更に、それがセスナを降りて1時間ちょっとで壁の取り付きというのだから、行かない理由はどこにもないというものだ。

Mt.Hunter (4441m) North Buttress  
Deprivation”

アラスカグレード6(ED3) AI6 / M7

1800m(1200mの壁と600mの雪稜)

#### 5月10~12日 一村文隆、横山勝丘

1994年にマーク・トワイトとスコット・バックスによって登られた、北バットレスの右端に位置するルート。一目瞭然のグロットと雪壁を繋ぐラインで、北バットレスの各ルートの中ではクラシックの部類に入ると思う。

核心は下部の岩壁帯で、頼りない氷を騙しながらクラックシステムを繋げる(M7)。

ここ数年、北バットレスの完登はままならず、壁の状態も悪いと周囲のクライマーには言われたが、彼らが言うほど状態が悪いとは思えなかった。確かに初登時の写真と比較すると、氷の量は一目瞭然の差があるが、その分テクニカルなクライミングが楽しめるのではないかと思う。

下降は北バットレスを辿るのが一般的であり、西稜は基本的には勧められない。

西稜は技術的には問題は少ないが、あまりにも危険だ。僕たちは山頂からカルヒトナ氷河まで15時間費やした。ハンターは標高4400mとあまり高くないが、西稜の標高差は2500m。下手なヒマラヤよりも難しいと思う。

## 93 2006・6~7 アンデス・ボリビア ライカ・コーリュ南壁・イリマニ南壁

○参加メンバー 横山勝丘、佐藤祐樹、山田達郎、一村文隆

### ○登山概要 横山勝丘

アラスカでのクライミングを終えた4人は、一路ボリビアを目指した。準備が整い、イリマニのノーマルルートで順応。数日かけて順応を終え、再びラパスに戻って3週間分の食料を調達。それから、いざイリマニ南面へと向かう。今回は、ポーターも10人強。ボルダリングマットまであげる。

ベースではボルダリングをして過ごし、山を見上げて目標を決める。なんて贅沢！ともかくにも、前年に敗退したあのラインを片付けなければ。見る限り、状態も前年よりは良さそうだ。

Nevado Illimani Pico Layca

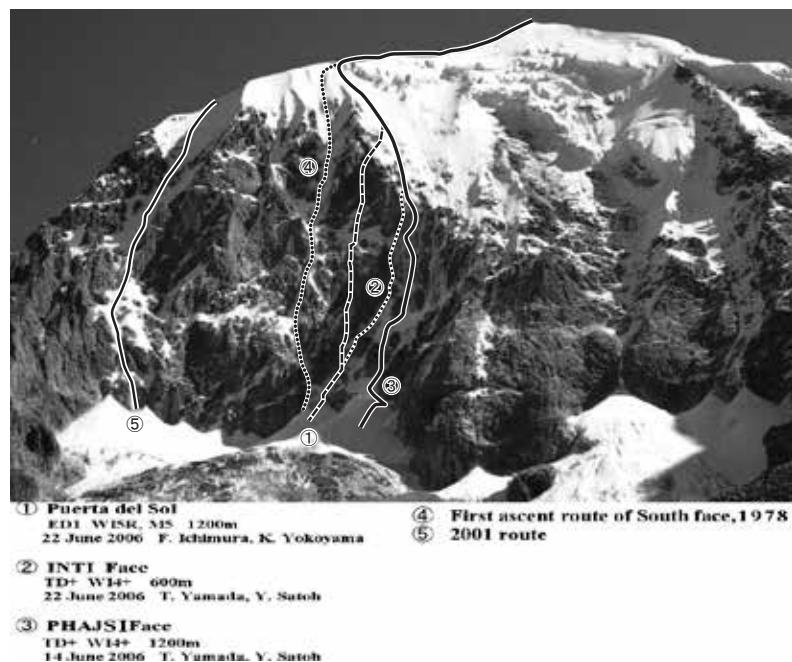
Khollu (6159m) South Face "acalanto"  
ED1 WI5R 950m

2006年6月14日 一村文隆、横山勝丘

イリマニ山群の南端に位置する小ピーグだが、南壁は垂直の岩壁が1000m近くにわたって落ち込んでいる。そのど真ん中を一直線に山頂に向かって延びる氷がある。下部壁は予想以上に容易で、2ピッチ目の薄氷と6ピッチ目のミックス以外は、ほとんど支点も取らずにすんなりと越えられた。上部壁の5ピッチが核心部で、非常に脆い岩壁に、それ以上に脆い薄氷が張り付いているといった感じ。12・

13ピッチ目は傾斜も非常に強く、氷は殆どない。この標高ではかなり難しい内容を持つと思われる。最後は雪壁をコンテで登り、稜線に出た。山頂からは東側の氷河を下ってビバークし、翌日ベースキャンプの側壁を懸垂下降して下山した。とにかく見た目が最高のライン。内容はともかく(内容も悪くないが)、こんなカッコいいラインはあまりない。登れてしまえば、ああこんなもんか。という感じも無きにしもあらずではあるが。そう言えば、このラインを見つけてから丸2年間以上の間、このラインを追い続け、そのためいろいろな経験を積み、努力したおかげで今の自分があるのだというのもまた事実。そういう意味では、自分自身の成長を感じることができた時間だったし、こうして一本のラインに自分自身の時間やエネルギーを消化させることができたことを率直に喜びたい。

### ○イリマニ南壁



Nevado Illimani Pico Sur (6439m)

South Face "PHAJSI Face"

TD+ WI4+1200m

2006年6月14日 佐藤祐樹、山田達郎

イリマニ南壁に垂れ下がる3本の氷のど真ん中を登る。非常に明確なラインで、これまでトライされていなかったのが不思議なくらい。上部は600m雪壁を辿る。一日で山頂を越え、西面のノーマルルートを下降。翌日、村から登り返してベースに戻ってきた。山をグルッと一周するのは、実に冒険的だ。登り返してベースに戻ってきた彼らの顔は、充実感で満たされていた。

### <ライカ・コーリュ南壁>



数日後、我々は再び2チームに分かれて登攀を行った。

Nevado Illimani Pico Sur (6439m)

South Face Puerta del Sol"

ED1 WI5R / M5 1200m

2006年6月22日 一村文隆、横山勝丘

イリマニ南壁初登ルートのすぐ右にある非常に細い氷のライン。コンテを交えな

がら下部をこなし、上部壁の出だしが核心である。支点が非常にプアであり、かなり痺れる。その上は快適な氷のランネルとなり、雪壁に出る直前のピッチは完全な岩をドライツーリングで登る。見た目的に最高のピッチをこなすと雪壁に出、あとはひたすら雪壁をノーロープで駆け上がり稜線に出た。荷物を置いて山頂を往復する。下降は同ルートにとったが、雪壁のクライムダウンには神経をすり減らされた。岩壁部分の懸垂下降中、残り2ピッチ程の場所で、落石を食らう。上から落ちてきた石はザック大で、とっさに頭を隠したが、私の左腿にぶち当たり、そこからは滝のように血が流れた。なんとかして取り付きまで懸垂下降を続け、そこから目と鼻の先のABCに駆け込む。

Nevado Illimani Pico Sur (6439m)

South Face "Inti Face"

TD+WI5 600m

(下部岩壁のみ)

2006年6月22日 佐藤祐樹、山田達郎

3本の氷のうち、一番左のライン。上部は数日前に辿っていたので今回は割愛した。快適な薄氷が延々と続く。1日で登つて、同ルートを下降。

翌日、ABCに横山を残し、一村がベースキャンプにいる佐藤と山田に救助要請し下山。直ぐに3人でABCに戻り、横山と合流。横山は3人のサポートを受けながら、何とか日暮れ前までにベースに戻った。

その翌日、すべての荷物をまとめ、1日がかりで下山（普通なら2時間）。折良く通りがかった車を止め、ラパスまで乗せてもらう。その後、帰国を延ばして佐藤と横山はパラグアイに住む西阪さんを訪ねてバスで南下。充実した時間を過ごし、再びラパスに戻り、抜糸を済ませてから帰国した。いろいろあったが、今思えば非常に波乱万丈の面白い旅だったと思う。

## 94 2006・10~12 信州大学 ネパールヒマラヤ カンテガ峰6779m北壁ダイレクト登山隊

○参加メンバー 隊長：横山勝丘 隊員：佐藤祐樹

### ○はじめに 横山勝丘

「カンテガ」とは、馬の鞍を意味し、エヴェレスト街道を奥まで進んでいくと、右前方にその名の通りの山容を現す。他の山からは距離を置き、特異な山容と相まってひときわ印象的な山であるが、それが登攀対象として捉えられるかというと、また別の話だ。エヴェレスト街道側からは、登路となるラインはほんの僅かで、それも非常に急峻な氷壁だ。ノーマルルートはほとんど無いと言って良いが、初登のルートはそもそも谷が違う。この山は、目指すクライマー自体が少ないとともに、簡単なルートは一切ない。この山には北壁が二つある。一つは、エヴェレスト街道に面した壁で、かつてジェフ・ロウ等アメリカ隊がアルパインスタイルで登攀しているが、カンテガ本峰ではなくⅡ峰に突き上げている。もう一つの北壁は、トレッキングピークとして名高いメラ・ピークと同じ谷を辿り、そのどん詰まりに位置する。この壁は、2000年にロシアのバレリー・ババノフによって単独で登攀されている。しかし、この登攀に関してはフィックスを大量に用い、かつ山頂まで抜けていない。壁は非常に急峻のまま1300m伸び上がり、質の良い氷が一面に広がっている。ババノフはこの壁の右端を登っているが、このど真ん中はまだ未踏のままだ。初めてのヒマラヤ遠征に出かけた。狙うはこの壁のダイレクトライン。初めてこの壁を目の当たりにした時の興奮と恐れの入り混じった不思議な気持ちは今でも忘れられない。結果

### <カンテガ全景>



### <カンテガ基部より北壁を見上げる>



は惨憺たるものだった。それまで、アラスカや南米で積み上げてきた経験が全く役に立たなかった。6300mまで登り見上げた500mは、果てしなく遠いように感じた。

## ○登攀概要

### ・ベースキャンプ(BC)、順応からABCへ

BCへのアプローチの2日目に佐藤が風邪を引いた。それがそのまま僕に引き継がれた。4600mの峠越えを含む5日間をかけて10月23日辿り着いた。BCからは、カンテガは全く見えなかった。風邪なのか高山病なのかわからない状態での荷上げは、大学に入っての最初の合宿を思い起こさせてくれた。順応は名もない小ピーク6200mで2泊し、比較的順調に終わった。しかし咳は相変わらずのままgo upの日を迎えた。35kgの荷物が肩に食い込み、想像していた以上にABC(前進ベースキャンプ)までの道程は遠かった。2日かけてたどり着いたABCから初めてカンテガ北壁を見ることが出来た。唖然として息が詰まった。ここはまさに建物の壁を想像すればよい。1200m垂直のまま、何一つ遮るものがない。壁に太陽の光が当たる事は1秒たりともない。氷は1200m、真っ直ぐに延びていた。

### ・登攀活動

12月5日 懸案のベルグシュルンド越えは、苦労しながらも何とか越えた。決して順調にとはいかなかったが、それでも着実に進んだし、薄氷を積極的に使ったミックスクライミングを楽しむ余裕さえあった。夕暮れがやってきて、僕たちは垂直の氷壁の中でロープを渡し、それにぶら下がってハンギングビバークをした。ロープは尻に食い込み、ものの30分で苦痛に変わったし、ストレスも溜まった。それでも、気持ちだけは非常にポジティブだった。行ける、という自信は変わらなかった。

6日 1ピッチ目は、のつけから神経を使うピッチとなった。傾斜の強い壁に張り付いた氷は、それまでとは違って使えないものだったが、右に左に動いていくと、上部氷壁への抜け口が見えた。このピッチはリードに1時間以上を費やしたが、それは単に難しさの為だけではなかったようだ。

寒いのだ。リード中、不安定な危うい場所で、僕は何度も手袋の中で手を丸めていなければならなかった。それでも下部のミックス帯を抜けることが出来た。「よし、この調子ならいいける」。寒さは相変わらずだったので、この先ダウンジャケットを着ることにした。次のピッチは問題なく登れた。しかし、登っても登っても一向に体が暖まらない。次のピッチから徐々に難しくなり始めた。フォローは、重荷を背負っての辛いユマーリングだ。標高と寒さでの拷問である。

いよいよ、壁は垂直になった。完全な青氷。「これはまずい」、ダウンジャケットを着ていることで体が自由に動かない。すぐに腕と足がパンプする。相変わらず体は冷え切ったままだ。手の指は痺れて、感覚がなくなる。頭上に続く青氷は、果てしなく続いているように見えた。既に4時を回っている。その時、ルートの左の方に氷柱の下がった洞穴が見えた。直ぐに佐藤に提案し、移動した。日が沈んだ。一気に周囲は暗くなり、気温はぐんぐん下がる。洞穴手前で佐藤がヘッドランプを落とす。ほうほうの態で氷柱の下にたどり着く。決して快適とは言えないが、どうにか夜を過ごせそうな場所だった。僕は、ほんのちょっとの気の緩みでシュラフを落してしまった。クライマー失格である。本当に情けない。翌日の行動について話をした。垂直の青氷を500m 続けて登りきる自信は、残念ながら持ち合わせていかなかった。

7日 冷たい強風に耐え切れず洞穴を出た。向かう方向は下だ。あっけない、4時間かからずに氷河に降り立った。ABCまで戻りテントを張る。午後になって風はさらに強まった。

8日 強風の中8時間もかかりBCに着く。

カンテガ北壁。世界最高クラスの壁とは言えないかもしれないが、少なくとも僕が目についた壁の中では、スケールも内容も、群を抜いて素晴らしいものだった。

## 95 2007・11 ネパール ゴーキョ・ピークトレッキング

○参加メンバー リーダー：佐々木慶正

メンバー：加藤昇一、まさ子、日浅護、隆子、田中功一、前田 功、岡本江美子、青島ほしの、大島いよ子、前津壽嗣、石山駿、**松尾武久**

### ○トレッキング概要 **松尾武久**

11月9日 成田～バンコック

成田からは5名、TG機に搭乗、7時間でBKKへ。

10日 バンコック～カトマンズ

予定通りKTMへ。30年ぶりの風景である。37年前を思い出す。

11日 カトマンズ～ルクラ～パクディン

5時15分ホテル発。30分の飛行で着。エヴェレスト街道はよく整備され、クスマ・カングル(6367m)、ヌプタ(5885m)昼到着。

12日 パクディン～ナムチエ・バザール  
タムセルクが素晴らしい姿で見えた。ナムチエの途中でエヴェレストが見え、ロールワリンのテンギラタウ、南面はコンデ・リ。

13日 ナムチエ・バザール滞在

見晴らし台からの展望。エヴェレスト、ヌプチエ、ローツエ、アマ・ダブラム。

14日 ナムチエ～クムジュン～サーナサ  
サーナサに行く予定を変更してクムジュンで一泊となった。シャンボチエの丘の道を行く。エヴェレストビューホテルに寄りコーヒーを楽しむ。昼からイエティの頭皮があるラマ寺に行くが、ゴリラの頭の感じであった。4100m迄登り、今日はテント泊。

15日 クムジュン～ポルツェタンガ  
アマ・ダブラムを真正面に見てモーン峠迄。

右手にドート・コシを見ながら岩道を

登る。

峠からはアマ・ダブラム、タムセルク、カンテガが真近かに見える。500mを下降。

16日 ポルツェタンガ～ドーレ

夜、朝とトイレに行く。朝食をセーブする。2時間で着く。4285m迄登る。

17日 ドーレ～マチャルマ

胃腸も回復。満天の星、牡牛座のアルデバランの赤いのを大発見した。塩昆布茶が美味。ドート・コシの高い道を行く。

18日 マチャルマ～ゴーキョ

相変わらず天気も良い。ドート・コシの右岸を高巻く、緩やかな登り。第2のポカリを過ぎ、ドート・ポカリの脇がゴーキョ。逆さのチョー・オユーとロッジ。

19日 ゴーキョ・リ登頂

7時45分出発。頭痛も無く快調。ローツエ、マカレー、エヴェレストが大きく見えてくる。9時45分、5360m到着。ギャジカン、ゴジュンバカン、チョー・オユーと世界一の眺望だ。膳所高校の校歌を歌ったが一番だけで精一杯であった。

20日 ゴーキョ～ドーレ

21日 ドーレ～キャンジュマ

22日 キャンジュマ～モンジョ

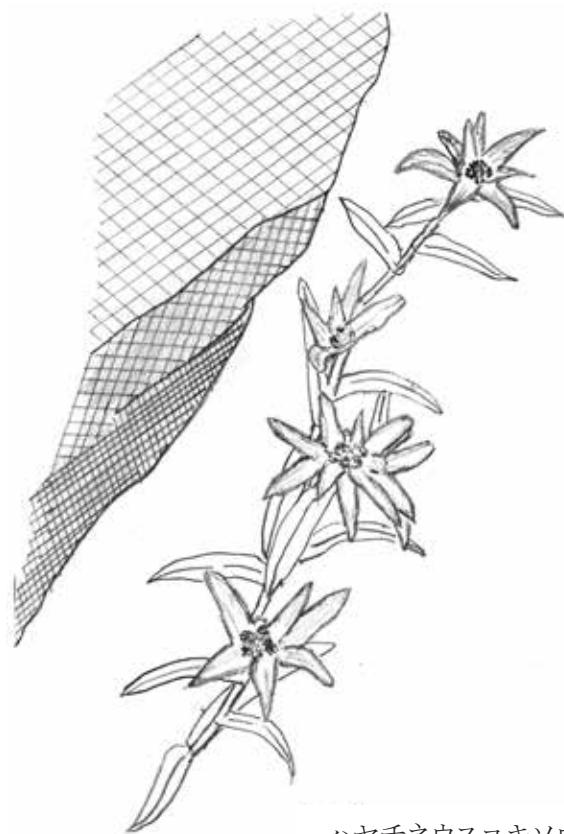
23日 モンジョ～ルクラ

24日 ルクラ～カトマンズ

27日 成田着

---

<ゴーキョ・リの頂上に立つ>



ハヤチネウスユキソウ

---

## 96 2008・4~5 アラスカ デナリ国立公園 ベアートゥース北東壁・ハンタームーンフラワー・バットレス・デナリ継続登攀

○参加メンバー 横山勝丘、一村文隆、佐藤祐介、山田達郎、井上祐人

### ○登山概要 横山勝丘

3度目となる今回のアラスカ遠征は、5人の大所帯となった。この地もすっかり慣れてきたこと也有って、ならば仲の良い友達と楽しく過ごし、手当たり次第に登りたいラインを登ろう、というコンセプトで計画を進めた。私の狙いは二つあって、ひとつはバックスキン氷河に聳え立つベアートゥース東壁。2年前に敗退したラインだが、その傾斜はこれまでに見たどの壁よりも強い。そしてもうひとつが、デナリにおける継続登山だった。アラスカグレード6(当地における最難グレード)の2本のルートを継続して登ろうというので、果たしてそれが可能なものなのかもわからなかつたが、アラスカ3度目ともなると、そうやって自分なりに新しいアイディアをどんどんつぎ込んで面白い登攀を考えいかなければならない。まあその時点で、このアラスカという地が「遠征」→「クライミングツアー」に変化しつつあるというのも事実で、それを認識したからこそそのアイディアでもあった。とにもかくにも、これが実現できれば、きっと凄いことになるだろうとの予感はもちろんあった。そして、上記の2つのプロジェクトが完成すれば、私自身にとってのアラスカにも一区切りを付けようという意気込みで、現地に向かうこととした。

ベアートゥース (3069m) 北東壁初登攀  
“Climbing Is Believing” 1250m  
AK6 5.10a AI5 M7R A1+  
一村文隆、佐藤祐介、横山勝丘

### 4月18~20日

4月7日、バックスキン氷河へフライイン、11日まで偵察と天気待ち。当初の予定だった東壁は、壁の条件はあまりに悪く、黒々としていた。

13日、下部を登り始めるが、天候が急変のため3ピッチ目から退却。17日まで天候待ちのあと18日に取り付き、壁の中間部の雪壁まで登り、ビバーク。翌19日、上部の頗著な弱点を突いて山頂にダイレクトに抜ける。登攀時間30時間。山頂でビバーク後、20日にイーストガリーを8時間で下降。ラインは、頗著な弱点に取つた。とは言え非常に傾斜が強く、人工登攀やシビアなミックスクライミングを強いられた。技術的にも、内容も、そしてライン取りも、代替案とは思えないほどのクオリティの高さであった。満足している。その後、セスナ機に乗つてカルヒトナ氷河を目指した。まずはデナリのウェストバットレスで順応した後、ハンター北壁の条件が思いのほか良く、急遽この有名ルート、ムーンフラワー・バットレスを目指すことにした。

### ハンター北壁ムーンフラワー・バットレス

AK6、5.8 AI6 M7  
最終ロックバンドを越えたところまで往復  
38時間

### 4月23~24日

噂のとおり、ルートのクオリティは最高クラス。氷もミックスも、そして岩質も、素晴らしい。惜しむらくは、出発時点ですぐに悪天の到来を知らされていたために、壁の核心部を越えたところで退却と

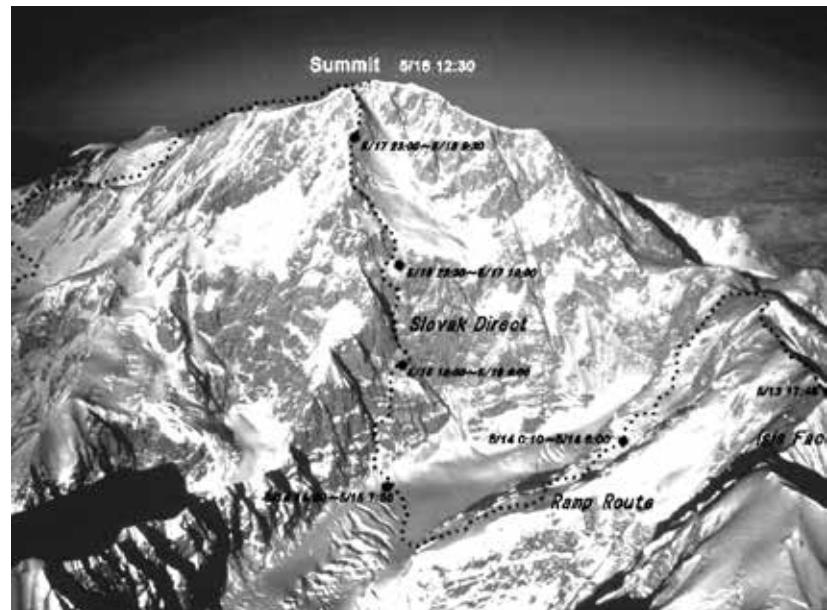
なったことである。やはりこの手の壁は、山頂こそが終了点である。とは言え荷物は3人で6kgと軽量化し、限られた好天をついて充実した登攀を実践できて満足している。

## デナリ(マッキンリー6194m) 継続登攀 サウスバットレス東壁アイシスフェース～同西面ランペルート下降～南壁スロヴァクダ イレクト登攀“Pachinko on Denali”

5月11～18日

11日、ルース氷河のウエストフォークへ再びセスナに乗ってフライイン。同日、アイシスフェースを同時登攀で8時間登攀。翌日は悪天候のため停滞し、13日にアイシスフェースを完登(18時間)。14日、ランペルートを下降(4時間半)。15日にスロヴァクダイレクトに取り付き、17日カシンリッジに合流(ここまで40時間半)。18日に3時間で山頂に達し、ランディングポイントまで11時間で下降した。アラスカグレード6、5.9 AI5+ M6+。間に1200mの下降を挟み、登攀標高差4900m。8日間かけて、この継続登攀を完成させることができた。途中、私が雪盲になったりと、様々な困難もあったが、8日目にデナリの山頂に立った時は、泣けるほど嬉しかった。「いやあ、やれちやうもんだなあ」と言うのが正直

<デナリ 6194m>



な感想か。

個々の技術的な難しさよりも、この手の継続登攀では、いかに精神的な意識の高さを保つかがカギとなる。もちろんそのためには、部分部分で消耗しないだけの体力・技術が必要だし、そしてまた、長期間の好天をゲットする運の強さも。そういう意味では、登山におけるすべてのスキルが要求される。非常に充実度の高い登攀となる。今後、この手の登攀がアラスカのみならず、世界各国で実践されることを願う。

同時期、山田達郎と井上祐人の2人は、デナリのカシンリッジから南に延びる稜線からカシンを継続し、山頂を目指す途中で消息を絶った。私にとって、大切な仲間がすぐそばで亡くなる最初の経験となつた。非常に悲しい経験であったが、彼らが辿ったラインは非常に美しく、それがそのまま彼らの生き様となって現れてくるような気がして、彼らには尊敬の念を覚えた。彼らの冥福を祈るばかりだ。

## 97 2008・10~11 信州大学 ネパールヒマラヤ カンテガ峰6779m北壁ダイレクト登山隊

○参加メンバー 隊長:横山勝丘 隊員:佐藤祐樹

### ○登山概要

10月14~17日 キャラバン～BC

登山の前からいろいろなことがあったが、横山の荷物が無事届き、やっとキャラバンを開始することが出来た。キャラバンコースは、4600mの峠を越えていくので順応にも丁度良い。全て人の手で荷物を運ぶためどうしてもポーター代が高くなってしまう。少しでも安く、軽くするため食事はすべてロッジで取ることにした。結果、ポーターは、前回より6人少ない、7人で行くことができ、費用を抑えることができた。

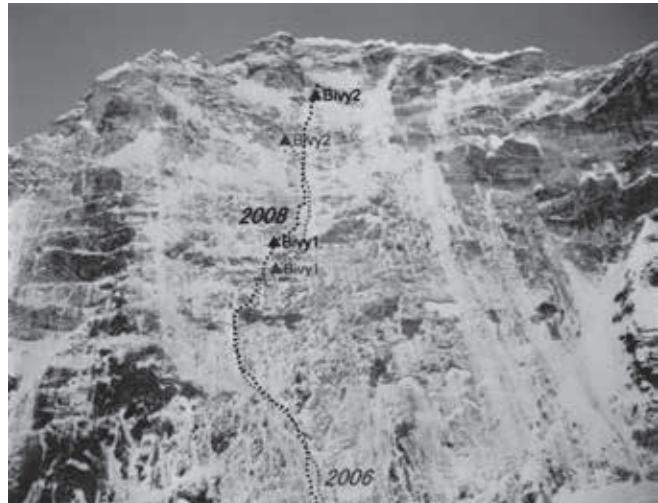
10月18~20日 高度順応

BCからメラ・ピークへ順応に向かう。ノーマルルートはロープが必要な場所はほとんどなく、非常に簡単だ。この時期は人も非常に多くHC(高所キャンプ)はテント場に困るほどの混みようだ。予想以上に早く着き、その日のうちにHC(5820m)まで進んだ。翌日には山頂を踏み、その翌日ももう一度山頂まで登り、BCまで戻ってきた。

10月23~24日～C1(5200m)～HC(5500m)

カンテガ北壁へはここからが非常に長く、つらい思いをする。まずは永遠を思わせるモレーンを突破し広大なガレをひたすら登ると、大きなロックバンドの上に出る。ここには凍りついた氷河湖があり、日射も良好。ここをC1とした。ここで屈強なアメリカ隊の3人と出会う。彼らも北壁だが左方のカンテから登頂を目指すという。C1からモレーンを歩くとHCに通じる氷河に出

### ○カンテガ北壁登攀ライン



<14ピッチ目、広大な氷を登る横山>



会う。ここから先、降りてくるまで太陽を一切拝むことはできない。この氷河の末端は状態が悪く、迷路のようになっている。今回はアメリカ隊が先行していたので難なく通過できた。2年ぶりにHCに戻った。

10月25~27日 カンテガ北壁アタック

25日 2時起床、3時半HC出発。4時半登攀開始、19時ビバーク地。

まだ暗いうちにシュルントに到着する。HCから見た限りでは全く問題ないように見えたが、実際来てみると容易に登れそ

うな場所はなかった。何処も下はぽつかりと穴があり、かつ上の雪壁はオーバーハングという状態だった。1ピッチ目担当の横山がオーバーハングの雪壁を掘りながら進むことになった。ピッケル2本を埋め込み、強固なアンカーを作る。ハング内の雪は脆弱そのもので、スノーパーを埋めても抜け出てくる始末。ジワジワと進むしかない。1時間半ほどを要した。非常に緊張を要する作業だった。シュルントを越え、3ピッチ交替で高度を稼いでいく。下部壁は4~5級のパックスノー&薄氷で、支点を作るのが大変で、わざわざ掘り返してから岩から支点を取らなくてならない。ビレイ点を構築するのに苦労を強いられた。当然傾斜は強く、リードもフォローも苦労は変わらない。9ピッチ目、横山が核心であるミックス帯を越える。10ピッチ目、佐藤が行くが、時間をかなり食ってしまう。もう辺りは真っ暗。上部に氷のハング帶の下でハンモックを吊るすこととなつた。ホットミルクを飲み干すとすぐに寝てしまつたが、1時間ごとに起きていた。予想に反してハンモックが使いづらい。それでもロープより良い。

26日 4時起床、6時出発、18時ビバーク。最初のロックバンドを越えてしまえばあとは単調な氷の壁だ。実際難しい、やるべき事はひたすら腕のパンプに耐えてアックスを振り続け、ふくらはぎのパンプとそれに伴う便意にただ耐え忍ぶ事、これに尽きる。徐々に傾斜は強くなり、この日も夕暮れ迫る19ピッチ目、いよいよ身体が悲鳴を上げ始めた。そして、見上げる氷は明らかに前傾している!「氷は垂直以上には発達しない」とのたまたまつた人間を懲らしめてやりたい。垂直以上に発達している。第二ロックバンドの直下。これさえ超えれば

先は見えてくる。横山が登り始める。腕のパンプは最高調。それでも頑張って大きな岩角まで登るが、スクリューが足りなくなってきた。スクリューで完璧に作ったビレイ点で一夜を明かす事にした。一つのハンモックに2人で座り食事の用意をするが、火がつかない。一晩中ライターをいじるが、食事も作れず、水も一切飲めなかつた。仕方がないので行動食で我慢していたが、咽喉はカラカラだ。さらに、ハンモックの居心地もすこぶる悪い。ほとんど一睡もできず朝を迎えた。

27日 4時起床、6時出発、7時半敗退決定。8時下降開始、17時半HC着。

最高調の疲労と脱水を身体全体に感じたまま朝を迎えた。前回も3日目の朝そのまま下降を開始した。今回は少しでも悪あがきをしたい。行動食だけを無理矢理押し込め、横山が登り始める。だが、登ってみて疲労が限界ぎりぎりのラインまで達していたのがわかった。昨日登ったラインをトップロープ状態でたどるだけなのに、設置した全てのスクリューで休まなければならない始末。2人はもはや登れる状態ではなかつた。その時、空から雪が舞ってきた。「敗退」という文字を迷わず口にした。佐藤も今まで経験したことのない疲労を感じていた。横山が降りてくる間に、眠り込んでいた。ただ、生きて下まで降りようという気持ちであった。HCに下りてきて、2日ぶりに水を飲み、食事をとることが出来た。

#### 10月28~29日 HC ~ C1 ~ BC

数日ぶりに陽の光を浴びた。BCに帰るとコックが美味しいものを作ってくれた。

#### 10月31日~11月2日 下山 カトマンズ

今考えられるのは、ただ「疲れた」。生きていればまた良いことがある。

## 98 2009・9~11 信州大学 ネパールヒマラヤ ヒムルン・ヒマール登山隊

○参加メンバー 隊長：田辺治 副隊長：滝沢辰洋 隊員：藤松太一、角谷道弘、花谷泰広、花谷裕子、大木信介、江川信

### ○出発、キャラバンからBCへ 9月6~19日

韓国にて、成田組と名古屋組が合流。

7日 騒音と排気ガスの都市カトマンズへ。

8~10日 軽自動車タクシーにギュウギュウ乗り込んで、コスモトレックで準備。食料、装備の買い出し、デポ品の点検修理等に分かれ作業開始。全ての隊荷を梱包。

11日 キャラバン出発地ブルブルまで移動。

12日→ジャガット(1300m) ロバにてキャラバンを開始する。ヒマール・チュリ、ピーク29、マナスルが見えてきた。

13日→ダラパニ(1860m) 今日も雨季とは思えない素晴らしい天気。マナスル一周コースとの分岐点である。

14日→コト(2600m) 今日は日本の山道を思わせる森の中、高山植物も出てきてた。

15日→メタ(3570m) アンナプルナⅡ峰が素晴らしい。深いナル・コーラの谷を遡り、最後に一気に急登する。高所訓練もする。

16日→キャン(3800m) ピサン・ピークが目の前に美しいピラミッドで聳えている。

17日→プーガオン(4080m) モンスーンにこれだけ好天が続くと後半の天候が気になる。最後のマニ石を過ぎると到着だ。

18日→BC(4800m) 高所順応 田辺、花谷、大木はBCに泊まり、他はプーガオンで一泊する。田辺、花谷は高度の影響なし。

19日→BC入り。昨日下った4人も登ってきた。5000m付近まで高度順化し、午後3時全員が各自のテントに入った。

20~22日 プジャ、偵察、装備等の分類

プーガオンからラマが馬で上がってきて、我々の安全登山を祈願してくれた。後、モレーンの偵察、装備・食料の分類作業、順応とレストで数日を費やした。

### <ヒムルン・ヒマール登頂 (7126m) >



### <ネムジュン>



### <ネムジュン (7139m) 登頂>



23日 田辺と花谷はC1偵察、他は5100m地点まで登り、BCへ下りる順化を行う。

24日 BC～C1(5560m) 往復。田辺、花谷、大木はC1までの荷上げ、他は5300m迄。

- 
- 25日 今日はレスト。
- 26日 C2へのルート工作と高所順応。花谷は荷上げし、他はC1を目指す。田辺、大木ルート工作、クレバスにルート阻まれる。
- 27日 C1～上部ルート偵察。田辺、花谷、大木でルート工作、他はC1迄の高所順応。
- 28日 BCにて休養日。
- 29日 高所順応最終日。田辺、大木、江川、プラカスがC1に入り泊まる。
- 30日 田辺と大木でC2までの偵察、ルート工作、合計7本350mのフィックスを張る。花谷夫婦、滝沢、藤松もC1に入る。
- 10月1日 花谷夫婦、滝沢、藤松は順応に登り、全員BCへ戻った。2、3日BCにてレスト。
- 4日 沈殿。猪熊予報士の天気予報で8日から荒れるとの予報で行動が出来なくなる。
- 5日 今日も天候待ち。
- 6～8日 3日3晩の大雪。6日の夜中から30cm、更に50cmと、夜中何度もテントの雪をかきに外に出る。全員で雪かき。8日やつと嵐が去った。
- 9日 登山活動開始、C1発掘。丸7日の沈殿を経て再開。田辺、花谷、大木、江川で完全に埋まったC1を掘り出す。
- 10日 本日はレスト。
- 11日 いよいよアタック開始。第1次隊の田辺、大木、江川、プラカスがC1に登る。
- 12日 C1～ラッセル、フィックス掘り出し～C1。フィックスの掘り出いでバテバテになる。
- 13日 C1～C2。昨日のルート工作で2時間で終了点に到着。長いトラバースを経てC2(6400m)に到着。第2隊C1へ入る。
- 14日 C2～山頂～C1～。標高差900m風が強く寒い、10時10分登頂。第2隊C2。
- 15日 C1～BC。第2隊、角谷、花谷夫婦は正午登頂。特に角谷は下から一気に山頂まで登ったため完全にバテたが登頂した。
- ・ネムジュン偵察と長き沈殿の日々
- 10月17～18日 BC休養日。
- 19日 ネムジュン偵察。田辺、角谷、花谷、大木で偵察に出かける。14時半ネムジュン南壁が望める地点に到着する。山頂に抜けた雪壁が切れ、落石の巣となっていた。全員一致で諦める。
- 20日 休養日。
- 21～26日まで好天を待つために沈殿。
- 27～28日 BC～C2。1週間の天候待ちを経てようやく出発。ネムジュン西壁まではパリン氷河の長いアプローチで始まる。取り付きまで12km、標高差1200mある。そして、装備を含め各自25kg以上となった。2日目に西壁の基部6000mに到着。
- 29日 ネムジュン西壁登攀～頂上稜線。前日のフィックスをたどり、終始花谷トップで登っていく。田辺と大木がセカンドとサードでユマーリング。角谷が一番重い荷を背負い登るというシステム。16ピッチ目で暗くなり、18ピッチ目でようやく稜線に出た。日没とともに強烈な寒気と強風。稜線を削り何とかテントを張る。
- 30日 ネムジュン登頂。5時に起きるが風が強いため待機。太陽がで、花谷と田辺、角谷と大木で組んで出発。巨大雪庇、ヒマラヤ襞、トラバースして進むしかない。確実な支点がほとんど取れない。緊張のクライミングが続いた。スタカットに切り替えて5ピッチ、見た目で一番高い場所を頂上とした。信大旗を手に記念写真を撮る。緊張の下山が始まった。花谷が一番大変なラストを受け持つ。疲労が激しくもう一泊稜線で泊まることとした。
- 31日 下降～BC。下降開始、気温-20℃以下。ひたすら懸垂下降繰り返す。下降に5時間を要した。BCまでの長い道のり、BCから温かいお茶を持ち迎えに出る。途中合流し、暗闇のなかBCに着いた。
- 11月1日 休養日。
- 2日 バックキャラバン昼過ぎから開始。

## 99 2009・9~10 信州大学 ネパールヒマラヤ マナン・ヒマール登山隊

○参加メンバー 隊長：小林元紀 隊員：駒井 浩、神野国昭、佐藤邦彦、山内哲文

○行動総括 小林元紀

当初2座目指しましたが天候の悪化で1座(ピサン・ピーク)になりましたが長年の夢がかない大変満足しています。ただ、がん治療中の駒井隊員には、世の同じような人たちの励みになるべく是非ピークにと皆で話し合っていましたが、アタック途中で断念せざるを得なかったことが大変心残りがありました。60歳を優に超えたものたちは口は達者ですが体の動きが伴わなかつたのですが、若い山内隊員の活躍で大いに助かりました。ピサン・ピークは、キャンプを2つ設けたことが成功の要因でした。4000m以上ともなると、1日に1000mを超える登降は我々には無理がありました。チュルは高度順応なしに体調に支障なくBC、C1に入りましたが、天候の悪化で撤退せざるを得ませんでした。今後、この会の中から引き続き熟年登山隊が出てくることを願っています。

○登山概要

・カトマンズ～キャラバン～BCへ

9月13日 日本出発 関西空港を飛び立ち、台北経由21時半カトマンズ着。

14日 コスモトレックにて梱包作業。

15日 カトマンズ出発。ブルブル着(840m)  
途中何度も意味不明の停車。途中子どもと思しき10数名が乗り込んでくる。彼らがポーターと聞き驚く。ベシサハールから先の道はかなり崩れて、大変な悪路。

16日 ブルブル→シャンゲ(1100m)

キャラバン開始。登頂まで酒を断つと誓ったが初日で禁を破りビールを注文。

17日 シャンゲ→タール(1700m)

今までマルシャンディ川をはるか下に見てきたが、今日はその川の洲にある場所。

○マナン・ヒマール概念図



<ピサン・ピーク 登頂 13:28>



18日 タール→ダナキュウ(2300m)

暑い一日であった。スラーヤによる通信は快調である。テント泊。

19日 ダナキュウ→コト(2600m)

サンチョクは河岸段丘の平地に麦と蕎麦が豊かに色づいていた。今日は半日行程。

20日 コト→ピサン(3200m)

昨日、山内隊員が財布を紛失。チャーメのインターネットがうまくつながらないため、スラーヤで直接日本の銀行に電話を入れ手続きを進める。

#### 21日 高度順応

今日は高度順応のため空身でピサンBC近くまでを往復。高度差1000mの上り下りは大変つらいが、高山植物が目立つ。ラマ教寺院のゴンパで安全登山祈願を行う。

#### 22日 休養日

一日中ゆっくりする。パソコン設定を山内君がやってくれ、大いに助かる。

#### 23日 BC入り

今日はいよいよBC入り。昨日の最高地点から100m程登った所。合わせて7張のテント。この高度になると血中濃度が20位下がる。アンナII峰が正面に見える。

#### 24日 高度順応

草付を登りつめて大きなガレ場を左にトラバースすると平地に出る。標高4800mここにテントを張り個人装備をデポする。

#### 25日 BCで休養

今日は休養日。このところ天気は毎日「晴れのち曇り一時晴」だが、傾向としては悪化している。我々の体力を考えもう一つキャンプを設営するように交渉。

#### 26日 C1(4800m) へ

今朝BCで初めて霜が降りた。この高度になると足が重くてなかなか高度が稼げない。草付きの斜面が長く続く。C1で休憩後明日のガイドのテント場HC付近まで往復。ガイド4人はBCに戻る。

#### 27日 C2へ

夜半、わずか雪と霜が降り、テントがバリバリになる。HCで登攀装備を付ける。ガイド3人はC2建設とフィックスに向かう。C2は我々の2張りが限度といった余裕のないテント場である。全員高度障害は無かつたがとにかく食欲がない。

#### 28日 ピサン・ピーク アタック

食欲がなくスープ1杯を飲むのがやっとである。4時10分出発。ヘッドランプの明かりを頼りに雪に覆われた岩稜帯を登る。2時間程登ったところで駒井隊員足があがらないといってリタイア、残念。フィックスを頼りに一步一歩登る。トップとラストの間がどんどん開いていく。12時半から14時の間に順次登頂。ガスっていて展望がきかない。長居は無用。C2に戻ったが、C1へ下る体力も気力もない。

#### 29日 C1通過し、BCからピサン着

C2、C1を撤収しBCを目指す。途中、下から「アラヨー！」の声。何と第3チームの2人が迎えに来てくれ、BCでは松尾隊長以下第3チームの沢山の人が登頂を祝ってくれ、実感がわいてきた。

#### 30日 アンナプルナII峰BCにて慰靈祭

第3チームと合同で慰靈祭。夜は、我々の登頂を祝い盛大な食事会。

#### 10月1日 ピサン→フムデ(3280m) 移動

#### 2日 フムデ→ヤク・カルカ(3700m)

#### 3日 ヤク・カルカ→BC(4700m)

いくつもテントを張れそうな広いテント場。

#### 4日 C1(5350m) へ

一面ガス、昼過ぎ氷河湖畔にC1を設営。

#### 5日 沈殿

ファーアイーストに絞ることを決定。ガイドと内山隊員が頂上直下200mまでフィックス。

#### 6日 C1撤退

20cm以上の積雪、雪崩の危険があるとのことで、チュルーをあきらめ下山。

#### 7日 BC撤収→フムデ

夜中、何度かテントの雪を叩き落とす。50cmの積雪。雪崩の恐れが出たため雪の中を急遽BC撤収。久しぶりにバッティ泊。

#### 8日 フムデ→コト

登山活動は終了した。休養日の後、角谷隊員も加わりナル・コーラ、プー・コーラを経て第1チームのBCを目指した。

## 100 2009・9~10 ネパール アンナプルナ山群一周トレッキング隊

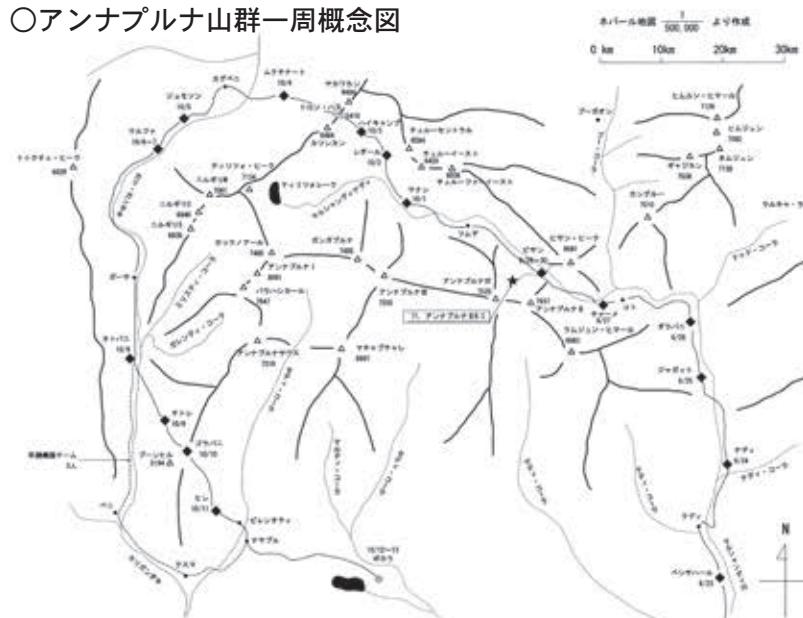
○参加メンバー 隊長：松尾武久 副隊長：寺田雅治、宇都宮昭義 隊員：小原武、葛西正美、川崎誠、奥嶋啓志、柴田武明、板谷真人、河原洋、杉本敏宏、池内寛幸、大安徽雄、坂本貴男、大沼淳一、大沼章子、滝沢正子、石山駿、大島いよ子

### ○行動総括

松尾武久

総勢19名、71歳を頭に58歳まで、平均年齢は65歳4ヶ月、信州大学山岳会メンバーが13名、その関係者が6名という構成であった。高年齢者、大集団、長期間のトレッキングということで、果たして最後まで行けるかどうか大いに悩んだ。少々の頭痛はあったが10月4日全員が雪のトロン・パス(5416m)にたどり着き、幻想的な峠を越えられたのは隊員の努力と自制心の賜物であった。この他に忘れられないのは、高所訓練を行うためピサンBC(4200m)まで登った時、丁度ピサン・ピークの登頂に成功した第二チームが下山してくるのと遭遇し、彼らの健闘称えることが出来た。1971年アンナプルナII峰で遭難した佐藤正敏君の追悼を、サラタン・コーラのBCで挙行できたこと。また、その遠征の隊員片岡格さんが富士山で遭難した。その追悼も同時にえた。そして、トレッキングが終了し小川勝さんの追悼集・散骨式に参列したこと。無事すべての行程を終了し、日本に帰国して家族の待つ自宅に帰る途中、JRの中で急死された寺田雅治さんことを思うと胸が張り裂ける思いである。寺田雅治先輩！これからも信大山岳部のことをよろしくお願ひいたします。

### ○アンナプルナ山群一周概念図



<10月4日 トロン・パス (5416m) >



### ○行動記録

9月22日 成田、中部、関空から香港を経由し、21時45分に真っ暗なカトマンズ空港に着きコスモの大津さんの迎えを受けた。  
23日 カトマンズ→カランキマレクー→デュムレ→ベシサハール(760m)  
バイキングの朝食を食べ、荷物の整理をし出発だ。ひたすらバスは進む。デュムレでボカラの道と分かれ、ベシサハールに向かい8時間で、暑く湿度の高い地に到着した。

24日 →クディ(790m) →ナディ(930m)

5時起床、6時朝食、7時出発の一日が始まる。全員を松尾(ハート)、寺田(ダイヤ)、宇都宮(クローバー)の3チームに分ける。ナディ・コーラの吊り橋を渡った場所にテント場所に到着した。ビールを売っている店がないので高級ブランディーを開けた。

25日→ラン・カルカ→バガルチャップ→バウンダンダ(1310m) →ジヤガット(1300m)

マルシャンディ川左岸の水田沿いに歩く、棚田が山の上まで続き美しい。パパイヤ・マンゴー・バナナと熱帯の様子。ガオンでガイドの角谷隊員と会う。お祭りとのことで夜は音楽が鳴り響いていた。

26日→チャムジエ(1375m) →タール(1700m) →カルテ→ダラパニ(1860m)

朝5時モーニングティで起床。高巻き、川辺に下りたりのアップダウンでチャムジエに着く。今日はダサイン祭3日目。急登を登り切ると広々とした河原に出た。部落の入り口にはマニ車かマニ石がある。途中の岩場に蘭の実があった。テント場に着く。

27日→ダナキュウ(2300m) →ティマン→タンチョーク→コト→チャーメ(2760m)

アンナプルナⅡ峰の北東稜、マナスルの白き峰々が見えてきた。日が高くなるにつれてどんどん暑くなる。さすがに亜熱帯地域だ。長いマニ車、銀行もインターネットや国際電話もできる大きな町だ。町中を抜けたところがテント場である。

28日→タレクウ→バラタン(2850m) →デュクレポカリ(3060m) →ピサン下村TS

昨夜から配給のダイヤモックスを一粒飲んだばかりに夜5回もトイレに起き、きょう以降決して飲むまいと決めた。街道で出会ったドイツ人、イスラエル人、スウェーデン人、アメリカ人、韓国人等挨拶を交わし時には話し、ピサン下村に着く。29日→主尾根のコル(3640m) →ピサンBC(4180m) →ピサン下村(3200m)

#### ・ピサンを登頂した仲間を迎えるに

6時36分出発、3740mのコル、ピサンBC、10時半4500m地点でピサンチームと会う。ピサンBCで「血は燃え盛る」を合唱し、感動的な1日であった。

30日 ピサン下村TS→アンナプルナⅡ峰BC(3500m) →ピサン下村TS

休養日を兼ねてアンナⅡBCで慰霊祭を行った。38年ぶりにサラタン・コーラに入り全員で大きなケルンを積んだ。佐藤さん、片岡さんの追悼を行った。

10月1日→フムデ(3280m) →ムンギ(3330m) →マナン(3450m)

梅干しが美味しい。アンナプルナ、ガンガブルナの雄姿を楽しみながら進む。バガラ村にて小休止。ヨーロッパアルプス風。チベット族の村、首都のマナンに着く。

2日→グンサン(3900m) →ギャンチャン→ヤク・カルカ→レダールTS(4200m)

富士山以上の経験は無く、4000mを越える。小休止を取りながらレダールに到着。

3日→デオラリートロンフェディ(4470m) →ハイキャンプ(4800m) 高所順化(4900m)

ピサン・ピークの時よりはずいぶん楽になっている。11時ついにハイキャンプ到着。4日→カルカの場所→トロン・パス(5250m) →ヘディ→ムクチナート(3700m)

早朝2時お茶とお粥を食べ、3時出発。横一列になり手をつないで峠に着いた。3時間25分かかった。全員が峠に着いた。長い急なくだりを休みながら下る。13時20分ムクチナートに着き、テントに入る。

5日→ジャルコット→キンガム→カグベニ→エクリバッティ→ジョモソン(2720m)

6日→シャン→マルファ(2670m)

7日 マルファ滞在 10/8→タトパニ(車)

9日→ガーラ→シーカ→ファラテ(2270m)

10日→チトレ→ゴラパニ上村(2874m)

11日→バンタンティ→ヒーレ(1430m)

12日→ビレタンティ→ポカラ(900m)。

## 101 2009・4~5 アラスカ デナリ国立公園 ハンター北壁クライミング

○参加メンバー 横山勝丘、鳴海玄希

### ○登山概要

#### 横山勝丘

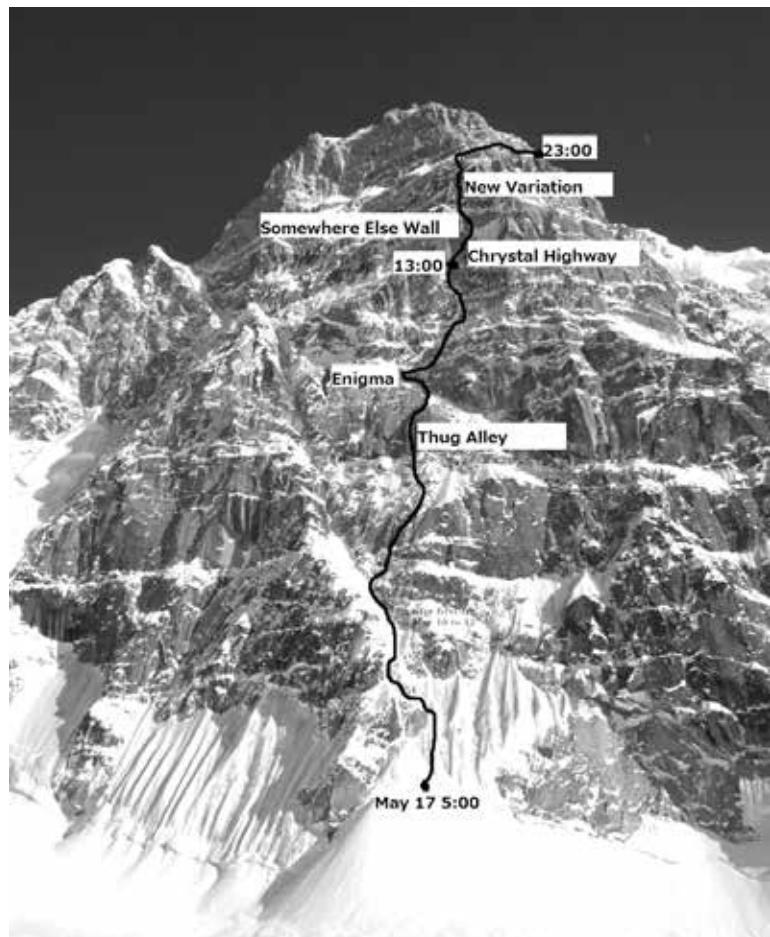
懲りもせずに、再びアラスカに戻った。狙いは、2度敗退しているベアートウース東壁。だが、氷河に降り立つて見上げた壁は、状態の悪い前年に更に輪をかけて、「最悪」の条件だった。それでもここまで来て何もやらずに帰るわけにはいかない。そういう強迫観念に駆られ、狙う壁をトライした。

だが、結局は2ピッチだけ登って敗退という結果になった。あまりに傾斜が強く、あまりに危険な登攀となつたためだ。

天気も悪く、この氷河にこれ以上長くいても、飯を食らつて酒をあおるだけ。成人病まつぐらである。

というわけで、再びカルヒトナ氷河に飛びすることにする。このパターン、これで4回目だ。まずはデナリのウェストバットレスで順応。これもまた、いつものパターン。しかし今回は、メディカルキャンプからめつたに行くことのない北峰を単独で往復し、非常に充実した順応となつた。

### ○ハンター北壁ルート図



ハンター北壁 Wall of Shadows 第4登  
AK6/5.10b WI5+ M6R

5月17日

ハンター北バットレス、ムーンフラワーの左側に位置するほとんど陽の当たらないその壁に拓かれたルートは、そのままウォール・オブ・シャドウズと命名されている。

デナリで順応を終えた私たちは、この壁に狙いを定めた。あまりの強風で、壁の途中から一度敗退した後、最低限の荷物だけを持って再びトライする。

---

途中何ヵ所かは非常にデリケートなクライミングを要求されるが、すでに一度登っている私たちはすんなりそれらを越えることができた。昼前にはクリススタイル・ハイウェーに到着した。取り付きから8時間、前回はここまで1日かかりである。ここまで所要時間に差が出るものかと、正直驚いた。下からの偵察で最も不安だった核心、サムウェアエルス・ウォールは、もの凄い傾斜だ。そして、半端ないほど岩が脆い。ここは力勝負で乗り越える。

その先、フルで2ピッチ伸ばした先は、傾斜の緩くなった第3バンドだった。ここからは体力勝負。そもそも天候悪化の予報との兼ね合いで、一日半分の装備しか持ち合わせていない。永遠とも思える第3バンドをムーンフラワーへと同時登攀する。ふくらはぎが火を噴きそうだ。こうなつたらワンドイでバットレスの頭まで行けないだろうか?そんな欲も生まれるが、体は正直なもので、スピードは一向に上がらない。日付が変わろうとする頃、ようやくビブラーカムアゲイン・イクジットにたどり着く。これ以上は動きたくない。小さなレッジの氷を削り、うとうとする。気が付くとここで数時間も過ごしてしまった。急いで最後の拷問パートを登り始める。同時登攀で登り続ける。取り付きから29時間後、バットレスのてっぺんまでたどり着いた。デナリから押し寄せる雲に数日前の悪夢を想像し、僕たちはそそくさと下降を始めたが、ムーンフラワーの下降にてこずつてしまい、壁の基部に戻ってきたのは既に夕方を遅く過ぎてしまっていた。バットレスの頭から山頂は遥か先にあった。天気予報が悪いというのは、結局弱いものの言い訳なのだろうけど、まあ今回はあまり深刻に考えずに、壁を登って無事に降りてこられたことを率直

に喜ぶことにした。

その後、いくつかの狙いはあったものの、結局は登攀をせずに山を降りた。4度目のアラスカで、最も成果のない遠征となってしまったが、その先に、もうひとつの目的があった。

山を降り、アンカレッジで車を購入し、彼女(現在の妻)と一緒に一路南を目指す。1年間にわたるクライミングトリップが始まった。

まずはカナダを横断し、キャンモアの街で数日間過ごしてクライミングした後、アメリカ本土に入る。

アイダホ、ワイオミング、コロラド、ユタ、再びワイオミング、そして再びカナダに戻り、カナディアン・ロッキーの山麓で2週間過ごし、それからバンクーバー近くのスコーミッシュという岩場で1ヶ月半。

秋になり、再びアメリカに再入国。ワシントンを通過し(数日間クライミング)、ユタで2ヶ月間。それからオレゴンで3週間。カリフォルニア3週間の後、カナダに戻る。

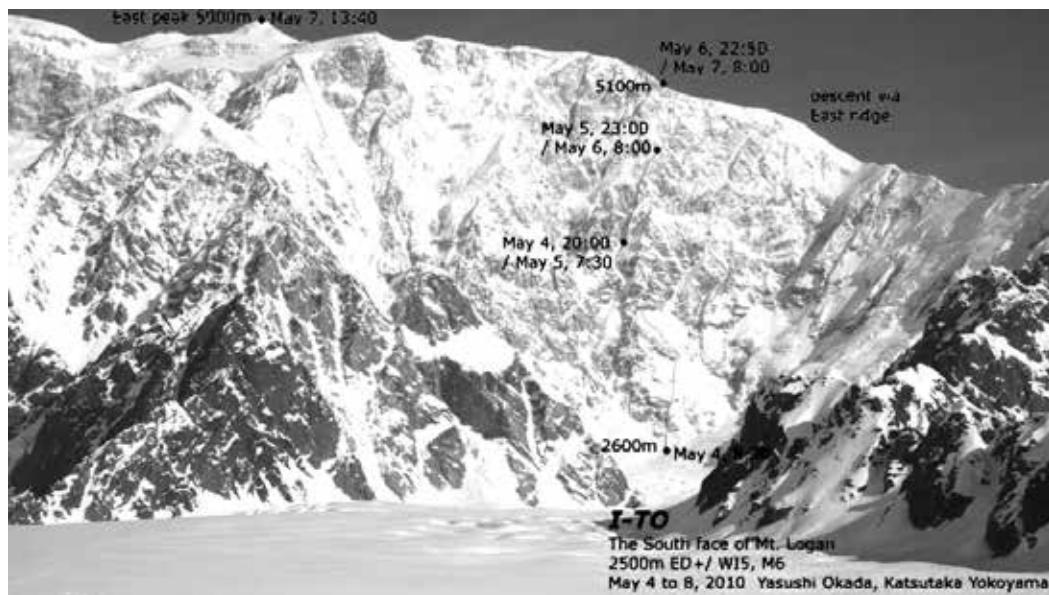
すっかり季節は冬。キャンモアという街に部屋を借り、それからの4ヶ月間はひたすら山を駆け回った。三ツ星ルートをはじめ、未登のライン。そして幾度となく偵察も繰り返した。とにかく、寝ても覚めても山のことだけを考えて過ごした充実の時間だった。途中、2週間のカリフォルニアクライミングと数日間のバンクーバーオリンピック観戦もあって、時間はあつという間に過ぎていった。

そしてこの1年以上にわたる旅の締めくくりとして、パートナーに鳴海玄希と岡田康を迎えて、私はカナダ最高峰のローガンに向かったのだった。

## 102 2010・4～5 カナダ クルアニ国立公園 ローガン南東壁初登攀

○参加メンバー 横山勝丘、岡田 康、鳴海玄希

<ローガン南東壁〔フランスのピオレドール賞受賞（優秀な登山家に贈られる国際的な賞）〕>



### ○登山概要 横山勝丘

Mt.Logan 南東壁初登

I-TO系

ED+,AI5+, M6, 2500m

2012年5月4～8日

横山勝丘、岡田 康

### ○行動概要

4月13日

Haines JunctionのKluane国立公園

オフィスにてブリーフィング。

21日 順応開始、コルを越えてHubbard  
氷河入り、28日まで順応(東稜を4570m  
まで)。

5月1日 南壁登攀(横山、岡田)

7日 東峰山頂まで行ったあと東稜を下降、  
3170mまで。

8日 下山。Hubbard氷河からSeward氷  
河まで。

9日 フライトアウト。

11日 ホワイトホースにて解散。

### ○登攀概要

5月4日

2:00 起床 3:00 出発

8:30 取り付き

22:00 チムニ一下BP(ビバーク)

0:30 就寝。

5日 4:30 起床 7:30 出発

23:00 チムニ一上BP(ビバーク)

1:30 就寝。

6日 5:00 起床 8:00 出発

22:50 稜線 BP(ビバーク)

1:00 就寝。

7日 5:00 起床 8:00 出発

14:00 東峰山頂

23:00 東稜 3170mBP(ビバーク)

0:30 就寝。

8日 5:30 起床 8:00 出発

9:30 東稜取り付き

17:00 Sward氷河へ

23:45 BC(ベースキャンプ) 帰着。

### <使用ギア>

8.1mmダブルロープ×2(ベアール、マムート)  
アイスクリュー×8(ブラックダイヤモンド)  
キャメロット#0.3～#3×1セット  
ストッパー×1  
ナイフブレード×5(ブラックダイヤモンド)  
60cmスリング×8(ベアール、マムート)  
120cmスリング×2(ベアール、マムート)  
ユマール×1セット(BD N フォース)  
スノーバー×2 デットマン×1  
スコップ×1(ブラックダイヤモンド)  
テント×1(BD ファーストライト)  
火器×1(MSR リアクター)  
ガスカートリッジ×小4

### <食料>

朝 晚 一人300～500Kcal

行動食 一人800～1000Kcal

※軽量化はこの壁のクライミングにはあまりふさわしくないと判断し、一般的なアルパインクライミングの例として、かなり多く持参した。悪天に備えるという理由と、「食べて動く」と言うモットーのため。

上記の分量を6日分用意した。悪天時は、これを食い延ばすことにした。

### ○報告

2010年5月4日から8日にかけて、私は岡田康とともにカナダ最高峰のローガン峰にある未踏の南東壁を初登攀した。

この壁は、これまで数多くのクライマーの挑戦を退けてきた北米最大、世界でも最大級の未登の壁。技術的な難しさはそれほど大きくなきものの、周囲の天候の悪さ、外界との隔絶、外的危機等による難しさがあった。

そもそも、氷河に降り立った瞬間に目にした山の威圧感には圧倒されたし、順応できず、それは「サバイバル」と言っても差し支えがないほど苦労した。

主たる悩みは、悪天と隔絶感だろうか。

いざ私たちが何かが起つた時に、対処する術が何一つない、ということ。自分自身でどうにかやりくりするしかなかった。それに対するプレッシャーの大きさは、これまでの経験では持ち合わせていないものだった。

登攀を直前にしてパートナーの一人 鳴海玄希は同行を止めた。それだけ、プレッシャーの大きな山だったと思う。

私と岡田は計25kgの装備を持ってクライミングを開始したが、その重量は一般的なアルパインスタイルによる登攀と比較すると、はるかに重い。それは、最悪の状況(例えば嵐)を想定したことだった。

技術的な困難さはさほどではないとは言え、核心部の標高差にして300mにわたるチムニーは、非常に急峻でデリケートな登攀を強いられた。

壁を3日間かけて登攀し、3日間は稜線直下のクレバスの中でビバークした。翌朝は氷点下30度くらいまで気温が下がり、ペラペラの寝袋しか持たない私たちには非常に厳しかった。

翌日、4日目に東峰の山頂に立ち、そのまま東稜を下降。5日目に、北のHubbard氷河から南のSeward氷河まで30kmに及ぶ氷原を歩き、5日目の夜12時前にBCまで戻った。

単純な壁の難易度だけでは計りきれない難しさを要求されたこの登攀は、横山にとっても、岡田にとっても、これまで最も難しく、かつ満足のいく遠征だった。また、私自身はこれにて1年以上にわたる北米のクライミングツアーを締めくくった。

有終の美を飾れたことは大変嬉しいし、この1年間で多くの経験を得ることができ、また、素晴らしい交友関係を築くこともできた。

またいざれ、同じようなクライミング、並びに旅を実践したいと願う今日この頃である。

## 103 2010・6 パキスタン カラコルム山脈・ラトック北壁遠征隊

○参加メンバー 横山勝丘、一村文隆、佐藤祐介

○ラトック北壁のルート図



### ○登山概要

5月28日	日本出発
29~31日	イスラマバード準備
31~6月2日	スカルドへ移動
3日	アスコーレ ジープで移動
4~7日	トレッキング
20~21日	ラトックI峰北壁トライ 標高5900mで敗退。
23~7月8日	休養と天候待ち
9~10日	ラトックI峰北稜トライ 標高5900mで敗退。
14~16日	バックキャラバン
7月23日	日本帰国

初めてのパキスタン遠征だったが、パキスタンに向けて出発したのは、1年間の北米クライミングツアーを終えて帰国した1週間後。それも、ツアーの最後はローガン南東壁という大物だったため、もち

ろん疲労がないわけではない。ただ勢いだけで突っ込んでしまったようなものだ。

イスラマバードからの出発時点で、いきなり風邪と吐き気、下痢。踏んだり蹴つたりだったが、徐々に体調は回復した。

4日間のトレッキングでベースキャンプへ。見上げるラトック北壁は、凄まじいほどに巨大で傾斜が強い。とても、人間が登れるものとは思えない。だけど今思えば、それはローガンで心身ともに疲れ切っていたことによる部分も少なくはないだろう。

近くの5900m峰で順応し、ベースキャンプ近くではボルダリングをして過ごし、順応完了。いざ本番に出かける。

6月20日 AM1:00-22:00

ラトック北壁へのトライ 5900mまで

今年は積雪が多く、北壁の氷の発達はあまりパツとしないという印象だった。過去、数パーティが北壁のトライに取ったテ

インは、非常に薄いベルグラと逆層フェースとのミックスで、とてもじゃないけれど登れるような代物とは思えなかつた。そこで、左から迂回しながら北壁を登るラインを選ぶことにした。

危険なセラックを持つ谷を詰め、シュルントを越えてクライミング開始。取り付きからは60°程度のアイスクライミング。上部のセラックが非常に恐ろしげで、いち早くここを抜けてしまいたいと思うが、スピードはなかなか上がらない。壁に陽が当たりだすと、上部からのスノーシャワーが半端ない。中間部の傾斜の強い部分は90°のアイスクライミングと一部ミックスクライミングが2ピッチ続いた。そこから上は、何本か走る氷のフルートを上部壁の基部まで辿る。陽が陰りだしてからは落氷は比較的マシになつた。21時間行動の末、18ピッチを伸ばし標高5800mの岩壁基部でビバーク。

17ピッチでロープを1本落としてしまつた為、敗退を決定。翌朝より下降。下降時は落氷ばかりでなく、非常に危険な落石もすぐそばをかすめていった。

## 6月23日～7月8日 休養と天候待ち

天候はいつまでも安定しない。毎日の様に雪が降り、たまに晴れたと思って壁を見上げると、巨大な雪崩が壁を覆い尽くす。そのパターンが続いた。待機中は、BC近くのボルダーで憂さ晴らしをするか、ひたすらトランプに明け暮れるかのどちらかで、精神的にも不健康だった。(16日間)

## 7月9日 ラトックⅠ峰 北稜トライ (北壁から北稜に抜けるライン)

5900mまで

最初のトライから16日間が経つた。ようやく高気圧が訪れた。いざ、2度目のトライ。落氷と落石の危険を鑑み、前回と同じ北壁のラインをトライする気はなかつた。

今回は壁の右側の顕著な弱点となる雪壁から右上して北稜に抜けるラインを選ぶことにした。

小セラックの下から、ロープを付けて同時登攀で冰雪壁を登っていく。前回のトライしたラインより傾斜は緩く、スピーディーなクライミングだったが、7時頃壁に陽が当たり始めると、またもや激しいスノーシャワーと落氷を浴びながらのクライミング。非常に危険な思いも何度か経験した。

中間部でWI4程度のアイスが1ピッチ出た以外は技術的には容易な冰雪壁だった。12時を過ぎた頃、太陽光が北壁を離れるとようやく、壁は落ち着きを取り戻した。夕方までには、目指していた北稜上の小さな鞍部はすぐそば。あと1ピッチで稜線だったが、ここからが厳しかつた。

まったく安定しない雪をかき落とし、申し訳程度のアイスクリューで自分を慰める。1時間以上の厳しいスノークライミングをこなすと、ようやくリッジ上に到達した。しかし、ここから見える100mは、非常に細い稜線上に危うげなキノコ雪を備え、手を付けようがなさそうに見えた。稜線側壁は垂直に近い不安定な雪で、トラバースは無理。ビレイ点も確実なものは、もう作れないだろう。今度の今度こそ、完全なる敗退だった。翌日、反対側を懸垂下降し、夕方までにBCに戻った。

こうして、2度トライしたものの、壁の半分の地点で敗退した。この壁は世界中でも指折りのビックプロジェクトであったが、クライミングの内容そのものは三ツ星とは言えないものだつた。まあいずれにせよ、私自身はちょっと疲れすぎていた。というのが正直なところ。無事下山できてホッとしている。

## 104 2010・9~10 ネパール ダウラギリⅠ峰8167m遠征隊 田辺治雪崩にて遭難

○参加メンバー 隊長:田辺治 隊員:山本季生、本田大輔、島田和昭

### ○登山概要

#### ・9月5日 カトマンズ着、登山準備 6~9日

9月6~9日 登山準備。コスモで登山許可、食料・装備の購入、荷物の整理、ブリーフィング、ボダナートにおいて安全登山の誓約。隊員の体調は全員良好。

#### ・バス等で移動と高所順応 10~16日

10日 カトマンズからベニまでチャーターバスで移動。

11日 ベニからバスで30分先のギャレショールでは豪雨で道路が寸断。ジープやバスに乗り換えを繰り返しマルファに到着。

12日 マルファ～ムクチナートはジープで移動(3760m)。

13日 高所順応。→4700m。

14日→5180m→チャバブル泊(4300m)。

15日→5400m→ムクチナート→マルファ。

16日 レスト(休養日)。

#### ・キャラバン開始 17~20日・荷下げ 21~26日

17日 マルファ(2600m)からキャラバンが始まり、雨降る中、道に迷いながらもヤク・カルカ(4000m)着。テント泊。

18日 積雪10cm程のタダ・パス(5250m)を越えヒドンバレー(4700m)着。

19日 フレンチ・パス(5360m)に向けて出発するも予想以上の積雪にロバの足が止まる。ロバ23頭、1頭に着き60kgの荷物。田辺以下ホワイトアウトの中、フレンチ・パスまで行くが状態が悪いので引き返し、ロバの待機場所5000m地点でキャンプ。

20日 快晴、島田、本田フレンチ・パスまでトレース作成後ダウラギリBCへ。田辺、山本は歩荷してBCへ。

雪解けは期待できず、ロバ停止位置から荷物(1800kg)を数日かけて荷下げすることを決める。

21日 田辺、山本ワカン、本田、島田はス

キーにて荷下げ開始。

22日 雪のためレスト。

23日 ポーター5名にて荷下げ。

24~25日 田辺、山本、島田、本田、ポーター6名にて、ほぼ荷下げ終了。

26日 登山の安全祈願の誓約。装備点検。

#### ・登山活動の開始

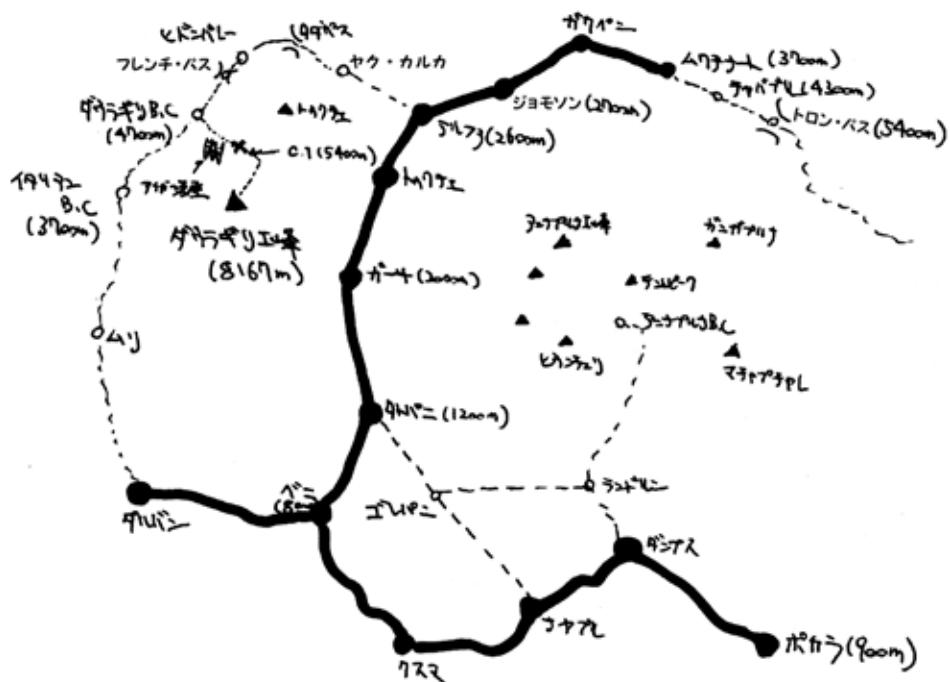
27日 6時出発。落石、雪崩の多いアイガ一岩壁を素早く通過し、5000mの雪原に9時到着。順調に進み、10時半頃C1(5400m)を設営。12時C1を出、14時半BC着。

28日 6時出発。山本を先頭に、田辺、登山靴から兼用靴に履き替えた本田は30分遅れて続き、お腹を痛めた島田が更に10分遅れて続く。9時45分フィックスロープの始まる急斜面と5000m雪原の間で本田休憩、遅れた島田も休憩。山本はほぼC1近くに見える。田辺はそれより手前のクレバス地帯にいる。9時50分過ぎ、本田休憩を終えフィックスを頼りに登行を開始、島田はトイレ、アイゼンの不具合を調整。55分山本無線「C1到着、C2荷上げ準備しておきます」田辺無線「了解、準備、待機願う」10時5300m付近の田辺無線「山本、上、雪崩」山本無線反応なし。5200m付近の本田無線「島田さん、雪崩です」5150m付近の島田見上げた1秒後突風。あつという間に吹き飛ばされ、数回転しデブリ末端部5100m付近で半埋没後、自力脱出。島田周辺捜査開始するが手がかりなし。BCへ。

#### ・捜索活動

30日 平岡隊から5名、島田隊からプラカスの2名、計7名で5000m～クレバス～C1付近の捜索、デブリの捜索を15時まで行ったが手がかりなしで、二次遭難の心配もあり、捜索を打ち切った。田辺、山本、本田の3名が遭難した。

## ○ダウラギリ概念図



### ＜ダウラギリの写真＞



## 105 2011・4~6 ア拉斯カ カルヒトナ氷河周辺の登攀、デナリ、カルヒトナ・ピーク縦走

○参加メンバー 花谷泰広、大木信介、谷口けい、宮西広太郎、土田孝浩、小平貴則

○カルヒトナ氷河周辺の登攀 4月25日～5月13日

参加メンバー 大木信介、谷口けい

・フランシス(3185m) 南西稜～東稜下降

4月25日 谷口、大木はアンカレッジで買い出し、27日にカルヒトナ氷河に入山した。5月14日に他の4人と合流するまでBC周辺の山々を登攀する予定。多くの登山隊のテントがあった。28日 半日をかけてBCを設営。29日 東稜下降後のアイスフォール帯を確認した。30日 夜中からの雪で目覚める。5月1日 フランシスの雪が落ち着くのを待つ。

・登山活動 大木信介

5月2日 8時出発。フランシス南西稜は4つの岩塔を越え、巨大セラックの偽ピークに達し、長い稜線を辿った奥にある。連日の降雪で乾いた雪が岩に載っているだけ非常に登りにくい。第1岩塔、登攀開始。左側のコーナーから取り付くが非常に登りにくい。右のフェースを抜けて快適なテラスに出る。第2岩塔、直登せず左から回り込み尾根に抜けるが雪が悪く戻って尾根左下をトラバースし、第3岩塔に取り付く。下部岩壁のハンドクラックを抜け、雪壁をトラバースし、クライムダウンして左に抜ける。コンテで左上気味に登る。2Pで第4岩塔基部に到着。ここが核心部、5.8のワイドクラックの登攀。上部もチョックストーンを越えると高度感のあるクライミング。この先はコンテで進む20時を回っている。必ず中間支点を取りながら進んだ。偽ピークの下部右側をトラバースで、ハンターの夕焼け。頂上と中間に2つのジャンダルムが残されている。雪質が悪く、ようやく抜けた。いよいよ冷え込んできた。1時半、待望の山頂に立った。太陽は沈んだのに天はうっすらと白みを帯びていた。下降は支点を作り60mずつスタカットで降りる。右往左往しながら東稜への入り口を見つけた。セラックだ、大きく捲いてクライムダウン。クレバスに注意、直ぐ後クレバス

に落ちたが5m程で氷柱があり止まる。アンザイレンしていなかつたら死んでいたかも、自力ではい上がる事が出来た。8時ようやく氷河に降り立ち、9時半BCに着いた。出発から25時間半過ぎていた。

・Mini-Moon登攀敗退記

5月5日 Mini-Moonに取り付いた。目的は苦手なアイスクライミングの練習。前日登ったスコットランド隊のトレースを使わせてもらう。1P目垂壁部分を越え、50m程できる。垂壁部分は短く乗り越えてしまえば、後は機械的に登るだけ。ふくらはぎが悲鳴をあげるクライミングが続く。長い氷のライン、問題なくそのまま登り続ける。6P目。氷はブルーアイスより登りやすいスナイスになり、ようやくアラスカらしいコンディションになった。7P目でガリーに入る。スノーシャワーが降り注ぐ、核心部の岩に着く。岩や雪の状況を判断しここで断念する。5Pの懸垂で戻り、20時BCに着く。

・カルヒトナクaine(3773m) 西壁登攀

5月9日 7時半BC出発。BCがある氷河の源頭。10時半シュルントに取り付く。コンテで登り始めるが、シュルントがいきなり崩れる。広いレンゼを詰め、岩峰に入る。狭いリッジに出るが、岩峰を越えられず、右に懸垂して南側の雪面に出る。岩稜南側をトラバースして雪壁を登る。右側の氷のガリーを目指す。15時50分核心部の上部ガリーの登攀開始、1Pレンゼ入口の岩を乗り越えて中に入る。3Pレンゼ狭くなる。4P最も狭くなり、傾斜の強いアイスクライミングとなる。抜けて、5,6P目は広くなり右の側壁を使って支点を取る。太陽が沈み始め急激に冷え込む。7P目レンゼから右の岩壁を越えて稜線セラックの下22時10分。全て着込み、ヘッドランプをつけ進む。トラバース、アイスバーンをコンテやスタカットでコルに達する。右のセラックが頂上と思われたが崩れそうなのでコルを山頂とし、2

時20分。セラック下のクレバスでビバーク。5時半クレバスから這い出る。下降開始、酷く寒い。ブリザートが吹き荒れる中4Pでセラック下に到着。30mの懸垂、ルンゼの入り口に戻る。20mの岩場を降り、取り付きに戻ったのが18時15分、山頂から12時間。満足感でBCに戻った。

11~12日 レスト。13日 最後の登攀に出かけた。カルヒトナクイーンから3660mのピーカーを南壁から登ろうとしたが、落石の連続で、この登攀は中止とした。

#### ○デナリ 大木、小平、土田 5月10日~6月2日

5月10日 成田~シアトル~アンカレッジ着  
11~12日 市内で買い出し。13日→タルキートナ。/14→セスナにてカルヒトナ氷河。

#### ・登山活動 大木信介

15日 いよいよ始まる。初の氷河歩行、初のソリ引き、平たんな道のりを進みC1迄。  
16日 今日の行程は長く、標高も3350mを越えて3200mC3着。白夜最高！

17日 高度の影響あり、順応で3600m登る。  
18日 荷上げと順応を兼ねMC(メディカルキャンプ)で4000mを体験する。

19日 大雪のため、沈殿。/20 再び沈殿。  
21日 いよいよMCまで上がる。4220m。

22日 順応で蒼氷のそり立つヘッドウォール上まで、フィックスで初めてユマール使用。  
23日 快晴無風の中最後のHC(ハイキャンプ)に上がる。ものすごい数の登山者、何箇所かのフィックスを通過し、5000mに着く。

24日 デナリ・パスまでは長いトラバース土田不調と風が強いためHCへ戻る。

25日 風が強く、アタック無理と判断し沈殿。

26日 事故が続発し、心配した花谷が登ってきた。今日のアタックは中止し、明について各自判断する。花谷、谷口、大木、小平の4人でMCから山頂を狙う。

27日 無風快晴。デナリ・パスから渋滞がすごい。3人はさすがに余裕がある。最後のナイフリッジを越えると山頂だった。ただただ感動した。素晴らしい景色に声も出なかった。15時間の末MCに着いた。

28日 ウィンディコーナー~ C3。

29日 C1~ BC。セスナタルキートナ着。

#### ○カルヒトナ・ピーク縦走 花谷、谷口

花谷泰広

6月9日 カルヒトナBC ~ C1。

10日 停滞から夜出発。取り付きのリッジ迄。11日 左側面の氷雪壁(70度位か)を快適なアイスクライミングで登り、稜線に出る。プラトーを進み50~70度位のMIX壁、300m程を登る。雪と氷のリッジを進み、再びプラトー。眠気、視界不良と空腹でペースダウン。ようやく西峰直下に着き、まつ平らの場所にテントを設営した。

12日 昨日の長時間行動で体が重い。トラバースから直上し、西峰の頂上プラトーに飛び出し、頂上に着く。上空は暗い雲。東峰までの稜線はリッジの右側をトラバース。およそ3時間で東峰山頂。ここからが核心だ。視界は開けそうにないため山頂にテントを張る。先を考えると食料制限だ。

13日 朝から視界が悪い。行くか戻るか大いに迷う。最初のトラバース、悪い。足元の悪いトラバースの連続、結局半分も進めなかつた。テント場は平らな場所を確保。  
14日 始め良かった天気が崩れ、激しい雪。クライムダウンとトラバース、大きなギャップに突き当たる。リッジの上の岩をめざし、その下にテントを張れる僅かなスペースを見つけ、整地した。2人共疲労激しい。

15日 夜中雪崩の音。停滞。

16日 雪の安定するのを待ち、夜行動する。「死の谷」を横断する。セラックの崩落音を聞きながら運に任せた。すっかり落ち着いた氷雪壁を懸垂下降で下る。

17日 7Pで最初のプラトーに到着。日付が変わった。大変危険なセラックを背負った壁の真下横切る。3Pの懸垂下降、この「死の谷」を順調に下ることが出来た。突然目の前が真っ赤に、朝だ。デポ地について食事をし、ベースに向かい、カルヒトナ・ピークを何とか縦走して終了した。

## 106 2012・1~3 パタゴニア フィッツロイ山群 フィッツロイ北西リッジ、フィッツロイ北ピラー登攀

○参加メンバー 花谷泰広、横山勝丘

○フィッツロイ北ピラー ルート図



### ○行動概要 横山勝丘

2012年1月17日～3月18日

1月17日 出国

21日 エル・チャルテン到着

23～25日 偵察

26日～2月15日 エル・チャルテン

滞在(ボルダリング、トレッキング、スポーツクライミング等)

2月16～18日 フィッツロイ北西リッジ

(アフアナシェフ・ルート) 標高差600mを  
登り敗退。

21日 アプローチ

22～23日 フィッツロイ北ピラー

Mate, Porro y Todo lo Demas

(1200m、6c) 登攀

24日 南東壁を懸垂下降し、エル・チャル  
テンまで戻る。

3月1日 エル・チャルテンを離れてバリ  
ローチェへ

5～17日 バリローチェ近郊フレイにてク  
ライミング

18日 アメリカへ移動

私たちにとって初めてのパタゴニア。風  
の大地、大陸の果て、といったイメージだ  
けが先行していたが、いざ現地に行ってみ  
ると、シャモニを田舎にしたような快適な  
街をベースに、山の天気が悪い時には街  
の裏山でボルダリング、天気が回復したら  
最低限の荷物だけを持って山に行く。そ  
んな感じだった。それまでやってきたどん  
な遠征とも違う、ちょっと変わった雰囲気  
だったが、それはそれで、非常に面白い旅  
であった。むしろ問題は我々自身であった  
というのが現実。正直言って、パタゴニア

でまともに登れるような実力は持ち合わせず、何となくそれまでの経験の積み重ねで何とかなるだろう、的なノリで現地に来てしまっていた。まあそれでも、最低限のノルマと言うべきか、フィツツロイの山頂を踏めたことによってとりあえず達成感を得ることはできた。

しかし私にとっては、この遠征から多くの教訓を得ることができた。そしてそれこそが、この遠征の一番の成果だったと言つても過言ではない。それは、「私はアルパインクライマーとしては、まだ初心者なのだ」という事実をあからさまに突き付けられたこと。もう少し具体的に言えば、岩登りの能力があまりにも低すぎるということに、登山を始めてから20年以上経ったこの時に初めて、理解することができた。

あれから3年近い年月が経った。もちろん、アルパインに必要十分な岩登りのスキルを習得したとは今でも言い難い。しかしこの遠征を境に、アルパインの新しい喜びを知ることができたのは事実だし、さらに言えばクライミングのアイディアと、それまでに培ってきた能力や経験を融合させることによって、より大きなクライミングが可能になるのではないかという期待を持つことができるようになった。そういう意味では、この初めてのパタゴニア遠征は価値があったというべきだろう。

## ○登攀ルート

### ◎フィツツロイ北西リッジ

アファナシェフ・ルート 1500m 6c

1979年12月27日にフランス隊が初登攀した、フィツツロイの最長ルート。

3週間近くの間、悪天候によって街での待機を余儀なくされた後、まず「手始め」としてこのルートを選んだ。

2月16日にアプローチし、ピエドラ・ネグラにてビバーク。翌朝、夜明け前からアプローチし、ルートに取り付く。

下部は傾斜が緩く、どこでも登つていけるような錯覚を覚える。何度かライン取りを間違え、時間を食う。また、気温も低く、指がかじかむ中の登攀には苦労した。

陽も昇り、暖かくなり始めた頃にルートの1/3程度の場所にある大テラスに到着。

見上げるルート上には氷が垂れ下がり、流氷の跡がちらほら見られる。この光景を見た瞬間、それまでネガティブ登攀内容と相まって、それ以上登り続けようという気が起きなくなってしまった。

敗退を決定し、同ルートを下降した。

## ◎フィツツロイ北ピラー

Mate, Porro Todo lo Demas

1200m 6c

数日後、私たちは再び同じ氷河に戻った。前回の敗北があまりにも不甲斐ないものだったこともあり、最後のチャンスと思いしき今回は、確実に頂上に立とうという気持ちで山に向かった。

ルートは、北ピラー西側の顕著なコーナーを辿る非常に快適なルートで、技術的な困難はあまりない。ライン取りは明瞭で、プロテクションの心配もナシ。岩も硬く、ロッククライミングそのものを楽しむことができる。そういう意味では、やっと私たちがやりたかったことができるという喜びがあった。

登攀2日目で山頂を踏み、その日は山頂でビバーク。翌日、南東稜を数十回の懸垂下降で氷河に降り立つ。そのまま夜通し歩き続け、エル・チャルテンの街に戻ったのが、日付が変わる直前だった。

## 107 2012・10~11 ネパール キャシャール峰南ピラー6767m初登頂

○参加メンバー 花谷泰広、馬目弘仁、青木達哉

○登山概要 花谷泰広

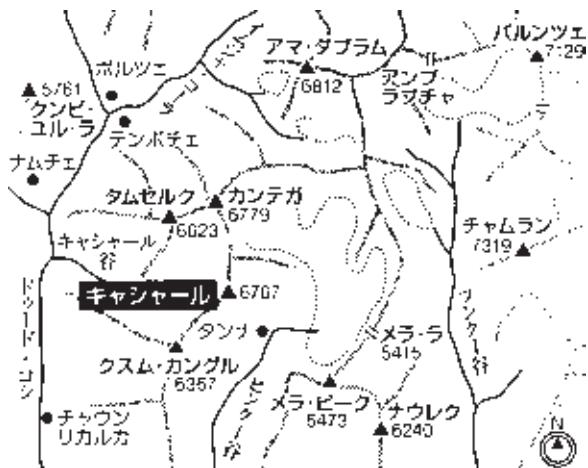
ネパール・ヒマラヤ方面での登山は、僕にとって今回が8回目となるが、これまでになくコンパクトな規模になった。ルクラで雇用したポーターは5名。ベースは食事、宿泊共にロッジを利用することにより、同行するネパール人スタッフは1名のみとなつた。これほど身軽にヒマラヤに行けるとは、考えもしなかつた。

4日間のキャラバンは順調そのものだった。3日目にキャシャールをこの目で初めて見ることができた。惚ぼれするピラミッド。こんなに目立つてカッコいい山のど真ん中のラインが、まだ登られずに残っていたとは。南ピラーは過去数回トライされていたが、いずれも6000m付近で断念していて未登だった。

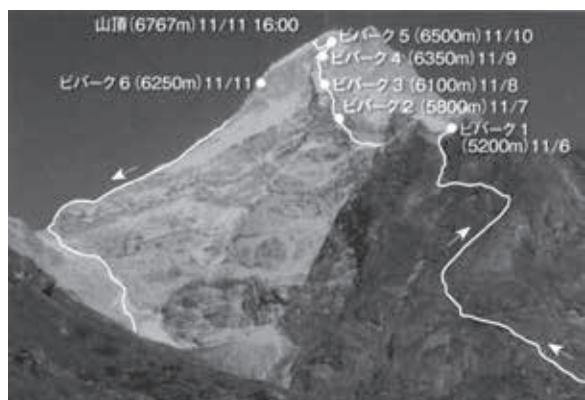
### ・順応と偵察

ベースを置くタンナ(4300m)で、滞在期間中、食事は全てロッジで注文することを前提に一泊600ルピーで大部屋を貸切りにできた。宿の主人夫婦はとっても親切で、毎日毎食心のこもった美味しい食事を提供してくれた。10月24日から近くのメラ・ピーク(6473m)に出かけた。青木がハイキャンプで不調を訴えたのでいったんタンナに下山。麓からの偵察には高倍率のスコープを用い、かなり細かい部分まで観察することができた。その結果、南西壁側(南ピラーの左側)は落石が頻発していて、とても登れそうにないことが分かった。2010年に英國隊が登ったラインを試登した結果、4900m付近まであつという間に登ることができた。2回目の順応では無事メラ・

○ピオレドール賞受賞 ネパール・キャシャール峰概念図



○キャシャール峰南ピラールート図



ピークの頂上を踏むことができた。

下部岩壁はベースから900m程。途中水を得る場所がないため1日で抜ける必要がある。しかし、プラトーを挟んだ上部岩壁は様相が一変し、ボロボロな岩場がおよそ300m。この岩場を抜けると約6000m。ここから上部はミックス壁がでてくるが、弱点をつなげ、雪稜へ。続いて頂上直下の岩壁。必要日数は1週間、ある程度荷物が重くなるのは受け入れなければならない。

## ・キャシャール登攀

11月6日(1日目)

初日は朝3時に起床。4時半ごろ出発。2時間ほどかけて岩場の取り付きまで歩く。下部岩壁の標高差700m、終日花谷トップで登る。1週間分の食料・燃料を詰め込んだザックを背負ってユマーリングする2人。中間部のバンドまで暖傾斜のクライミング、上部はやや傾斜が増し、日暮れ前に予定のビバークポイントに到着。水も確保でき、夕日に照らされたメラ・ピークが美しい。

7日(2日目)

2日目も若干脆い岩場を3ピッチ登ると中間部のプラトーにつながる懸垂氷河に出た。長い雪稜をダラダラと歩き、上部岩壁を5ピッチ登ってビバーク。ベースから1400m登った計算になるが、明らかにここからが勝負となる上部の様相だ。

8日(3日目)

赤色の岩壁帯。脆くて急峻で、この部分の突破はこの登山を成功させる重要なパートであった。この日のトップは馬目に託す。雪がほとんどない岩場が続くため、トップはクライミングシューズで登る。核心部のかぶり気味のクラックだけが硬い岩。この傾斜でユマーリングは地獄そのものだった。そこからまた積み木に戻る。岩場が尽きる頃、気温の上昇のせいか、自然落石が青木を直撃。頬のあたりにヒットしたが、幸いなことに登山は続行できた。その後も落石は続いたが、何とか上部岩壁の中間部、我々が「すべり台」と名付けた雪壁に突入。負傷した青木がロープを延ばし、最後は馬目が6100mにビバークポイントを見つけた。

9日(4日目)

昨日とはまるで違って硬い岩となった。快適なミックス壁にルートを延ばす。無風快晴。こんな快適なクライミングがこの標高でできるなんて夢のようだ。6200m付近に目視できた最後の残置支点があつ

た。しかし最後の最後で状況がガラリと変わった。ある程度ロープが伸びた地点から動きがない。フォローして行ってみると愕然とするような光景が広がっていた。恐竜の背中のようなシュガースノーのリッジ。これが頂上岩壁まで続いている。危ういスノーリッジを削り、何とかテントを設営できるスペースを確保した。

10日(5日目)

明るくなつて改めて見てみると、この先いったいどうやってここから進むべきか…。トラバース気味にシュガースノーのヒマラヤ襞に突入。襞を越えるとき、雪に切れ目を入れてロープを引っ掛けた。このランナーが落下に耐えられるはずがないが、自分自身のこころのプロテクションだ。覚悟を決めたこの先3ピッチは、生涯忘れることができないクライミングになった。部分的ではあるが傾斜70度から80度位の雪の壁。もはやアックスのピックは役に立たない。シャフトを根元まで突き刺し、足はできるだけ深く蹴り込んだ。同じ動作を確実に繰り返し登っていくしかない。行き詰れば襞のトラバースやクライムダウンを繰り返し、悪夢のリッジを突破した。危ういキノコ雪の上で一夜を過ごす。6500m。

11日(6日目)

鉛のような体の重さを感じた。一番の弱点と判断した左上のラインにルートをとる。馬目がトップで2ピッチを確実に登る。最後の最後に硬い雪が出てきた。力尽きた馬目に、若き青木が交代し、粘り強いクライミングで突破する。登頂を喜ぶというより、もう登らなくていい安堵感が大きかった。下降は夜中まで続き、5000m程下ったシュルントで一夜を過ごした。

12日(7日目)

顔はむくみ、体は思うように動かない。フランス隊のトレースに合流した。この日の深夜にはタンナに戻ることができた。

## 108 2012・2~3 アメリカ ビショップボルダリング

○参加メンバー 中嶋涉、笠原大輔、福田宗次郎

○遠征概要 中嶋 涉

2012年2月9日から3月10日にかけて、アメリカ合衆国カリフォルニア州にあるビショップ地区において1ヶ月のボルダリング（おもに5m程度の岩を、ロープを使わずに登るクライミングの一種）ツアーを行った。このビショップ地区はシエラネバダ山脈の麓に位置し、荒野に巨大な奇岩（主に花崗岩）が点在する世界でも有数のボルダリングエリアとして知られ、特に高さ10m以上の危険を伴うボルダリング（一般的にハイボールと呼ばれるスタイル）が盛んであることで有名。

### ・出国から現地入り

2月9日未明に笠原とともに松本を出発。成田空港で名古屋からくる福田と合流後、出国。翌10日の朝にロサンゼルス着。レンタカーで5時間かけて北上し、ビショップ入り。ビショップは荒野の只中にある小さな町で、その郊外にあるキャンプ場に泊まる。11日からボルダリングを開始。

### ・登攀活動

11日、遠征前から目標に定めていた「Ambrosia V11」（Vはボルダリングのグレードを表す）に対面。このルートは120度に前傾した高さ15mの岩にあり、ハイボールで有名なここビショップで

<上：白いラインがAmbrosia 下：This Side of Paradise>



も群を抜いて高い。が、その美しさと圧倒的な存在感にトライすることを決める。町に戻り、ロープを購入。墜落が許されないため、岩の上の支点からロープを垂らし、動きを練習してからロープ無しで登るという方法でやることにする。12日以降は広大なエリアの中に散らばる無数の岩に引かれたルートを登る傍ら、折りを見てAmbrosiaの練習を繰り返す。指先の皮が酷くすり減るため、

---

2日登って1日休むというサイクルになつた。

16日、笠原が目標としていた「The Mandala V12」にトライしてみる。このグレードは当時の自己最高難度よりも一つ上だった。しかし思いの他感触が良く手ごたえがあったので、一時 Ambrosia のトライを中断してこちらに集中する。3日後の19日、快晴で冷たい風が吹く絶好のコンディションの中、この日5回目のトライで完登。思いがけず、たった2日で自己最高難度を更新することが出来た。

22日、再び Ambrosia に戻る。体の調子が上がってきたのか、それまで解決できなかつた核心のパートに手ごたえを感じた。レストを挟んだ25日、日が傾き Ambrosia の岩が日陰になるのを待つてロープ無しでトライ。5回目で核心のパートを初めて成功させ、そのまま 15m を一気に登りきつた。完登を確信し叫んだ瞬間、岩に前歯をぶつけて1本欠けてしまった。その後会つた現地のクライマーには「small priceだ」と笑われる。心身ともに消耗しきつており、祝杯のビールも一本飲むだけで精いっぱいだった。

その後は比較的やさしいルートを登り、3月5日、次なる目標に定めた「This Side of Paradise V10」にトライする。このルートも高さは 12m あり、最大傾斜は Ambrosia よりもきつく 130 度ほど。しかしグレードはひとつ下なので、よりよい形でのクライミングを目指し、グラウンドアップ（ロープを使った練習をしないスタイル。墜落すればまた地面から登り直す）でトライすることにする。核心が地上 8m 程のところにあり、そこで力

尽きて何度か飛び降りたものの、10回以内のトライで核心を突破し、完登した。同じ日の夕方、再び The Mandala に向かい、より難しいバリエーションの「The Mandala SD V14」（SD：地面に座ってスタートすること）にトライしてみる。これも手ごたえが良かったので、残り少ない日程をこのルートに当てることに決める。

一旦崩れた天気が回復するのを待ち、登攀最終日の3月8日、The Mandala SD にトライする。コンディションは良かつたが、あと少しで登れそうというところで着地に失敗し、右足首を捻挫。それ以上のクライミングは出来ず、後味の悪い幕引きとなった。

3月9日の深夜にビショップを発ち、早朝のロサンゼルスへ。レンタカーを返し、出国。

翌10日の夕方、成田空港着。同日深夜に松本着。

## 109 2013・12~14・1 パタゴニア フィッツロイ山群

○参加メンバー 横山勝丘、増本亮

○登山概要 横山勝丘

2度目のパタゴニア、今回は縦走をメインに行った。ひとつは、ポローニ山群縦走。この山は標高も低いマイナーピークであるが、非常に印象的なピークが連なっている。これを、本番のウォーミングアップにしようと考えた。もうひとつは、フィッツロイ山群の縦走だ。あまりにも印象的なこの稜線を、北から南まで一筆書きで縦走する。これほど明確かつ魅力的なプロジェクトは他にはなかなか見当たらないように思えた。

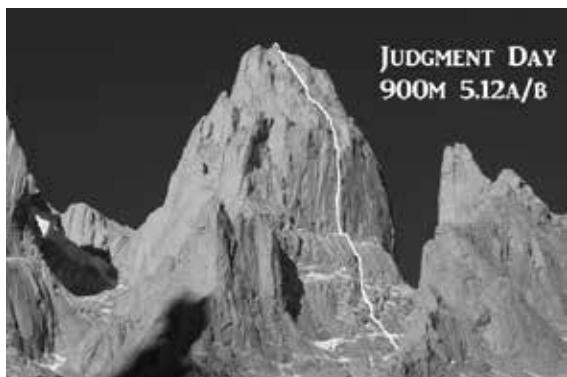
ポローニ縦走は、予想以上の岩質の高さ、印象的なピーク、途中寄り道したクオリティの高いバリエーションピッチ。そして、想像外の吹雪と不安定なビバーク。そういう、登山に求められる様々な要素が現れた。

結果は、最後のピークの直下で敗退となってしまったが、それを補っても余りある内容で、私たちは大きな満足を得ることができた。ケアベアトラバースは、本来の目的、フィッツロイ縦走の前半部分であるが、フィッツロイ山頂までの間で持参したロープが完全に終わってしまったのが敗退の一番の原因である。非常に残念な結果であったが、やればできるという実感が得られたのが一番の収穫か。内容も、難しいクライミングから氷雪壁、そして複雑なルートファインディングと、非常に変化に富んでいて、楽しみながら本気の登山を実践することができた。残された日数で、フィッツロイ縦走の核心部のひとつになると思わ

く>ケアベアトラバース 1950m 5.11c



く>ポインセノット南西壁 ジャッジメント・デイ 900m 5.12a/b



く>ポローニ山群縦走



れたポインセノット南壁の下降路の偵察を兼ね、ジャッジメント・デイというルートの第2登、並びにフリー初登に成功した。岩は硬く、フリーで登る喜び、そして山頂に立つことができ、充実した遠征の締めくくりとした。

## <行動概要>

12月13日 出国

14日 エル・チャルテン到着

17日 アグハ・デ・ラ・エス南面偵察

24~28日 ポローニ縦走

○アグハ・ポローニ東稜 Sit Start ~

セロ・ポローニ東峰東稜5.11c

セロ・ポローニ東峰100m下にて敗退、南面へ下降。

31日~1月2日 エル/ベニティエ(400m 5.12c) 登攀

1月11~15日 フィツツロイ山群 ケアベアトラバース(1950m 5.11c) 第5登

23~26日 ポインセノット南西壁

ジャッジメント・デイ (900m 5.12a/b)

第2登(フリー初登)

30日 エル・チャルテンを離れる。

2月1日 帰国

## <装備> (フィツツロイ縦走)

60mシングルロープ×2

カム#0.3~3×2セット#4×1セット

ナット1セット カラビナ×6

60cmスリング×6 120cmスリング×2

ナイフブレード×2 アイスバイル×1

アルミクランポン各自

アイススクリュー×1 ツェルト×1

二人用寝袋×1 ジェットボイル×1

ガス缶×3 食料7日分

※今回シングル2本、ダブル2本、合計4

本のロープを持参したが、滞在一ヶ月半で全てのロープがゴミと化した。タクティクスはともかく、ロープ選びという観点からいえば、とにかく外皮の強いロープを選ぶべきだろう。

※足元は軽登山靴とアルミクランポンで済ませた。とにかく軽量化、氷のルー

トにでも行かない限り、アイスギアは捨てよう。

※ガス缶は2日で1本の計算。気温は比較的高く、テラスにはザラメ雪も残っているので、そこまで燃料は必要ない。

※今回、ベースキャンプとしてエル・チャルテンの街にアパートを借りた。直前になつて借りることになったため割高な物件になつてしまつたが、おかげで快適なベース生活を送ることができた。

山中にキャンプ地を設けて山に向かう方法は、この地ではもはや時代遅れである。街で快適に過ごし、銳気を養い、確実な情報を得て山に向かう。山にどっぷりと浸かる、という意味ではもう遠征とは程遠い方法であるが、これこそがこの地での最良の方法であり、それはそれと割り切つて、本番に備えるのが良いと思う。探せば、一ヶ月300ドル程度の安いトレーラーハウスもあるようなので、それを数人でシェアすればかなり安く滞在できると思う。

## <会計> (一人当たり)

交通費

日本～アルゼンチン往復 ¥200,000

アルゼンチン国内線往復 ¥ 55,000

その他の移動費 ¥ 22,000

食 費 ¥ 30,000

現地宿泊費 ¥ 92,000

装備費 ¥ 2,000

その他の雑費 ¥ 12,000

合 計 ¥413,000

## 110 2013・2~3 フランス フォンテーヌブローポルダリングツアー

○参加メンバー 中嶋渉、中嶋徹(弟)、橋本今史、笠原大輔

### ○遠征概要 中嶋 渉

2013年2月10日から3月10日にかけて、フランスのパリ郊外にあるフォンテーヌブローという岩場にて1か月のボルダリングツアーを行った。起伏の少ない平らな森の中に無数の砂岩のボルダーが立ち並ぶ「ボルダリングの聖地」として広く知られている。

#### ・出国から現地入り

2月10日未明に長野を出発、成田からの直行便で出国。空港でボルダリングマットの分の超過料金を取られる。アメリカの時は取られなかつたが、航空会社によっては荷物が2つになった時点で超過料金が発生するらしい。13時間のフライトで、夕暮れのシャルルドゴール空港に降り立ち、雪が降る中ノーマルタイヤのレンタカーでフォンテーヌブローを目指した。しかし迷いに迷い、通常なら2時間弱のところを5時間以上かかった。遠征中滞在するジト(バカンス用の週貸しの一軒家)には全員疲れきって到着。

#### ・登攀活動

11日、雨のち曇り。食料の買い出しを済ませ、夕方近所に乾いているエリアを見つけ2時間ほど登った。12日、雨のち曇り。市街を観光し、夕方Roche Greauという南のエリアを見に行く。湿気ているがなんとか登れそうだったので、また2時間ほど登った。フォンテーヌブローでも5本の指に入ると言われるTigre et Dragon (8a) をやってみるも登れず。150度の美しいオーバーハング。13日、晴れ。一番大きいCuvierというエリアに行く。Carnage (7b) とTrisetesse(7c) を登る。この日は待望の晴れだったので、全員真っ暗になるまで楽しんだ。14日、雨のためレスト。15日、晴

<上:Fata Morgana

下:Tigre et Dragon>



れ。まだ岩が濡れているため午前中は各自の目標とするルートを見て回った。自分はCoquibusというエリアのFata Morgana (8a) が目標だったので、一先ず偵察して難しそうだということだけ確認。翌日乾くことを祈ってCuvierに移動。クレーターのような形状のホールドが続くNoir Desir (7c) を登った。風化した砂岩は変化に富み、他では見られないユニークなルートも多くある。16日、晴れ。前日観に行ったCoquibusに行く。Fata Morganaは140度の前傾壁にあり、磨かれたエッジを掴んでパワフルなクライミングを強いられる。指の皮の消耗も早い。初めの1手が核心で、それを解決するのに苦労したが、登りきつた。指からは血が出ていた。17日、晴れ。指に穴が開いているのでレスト。18日、快晴。指はまだ回復していなかったが、この日はButhierというエリアで登った。難

しいルートは登れなかつたが、高さのある岩を幾つか登つた。すぐ近くにアスレチックやテニスコートがある。クライミングがこんな形でこの土地の生活に融け込んでいることに驚いた。19日、晴れ。この日はDame Jouanneで登つた。美しいカントを登るL' angle Parfait(7b) にトライしたが、絶妙なバランス感覚を掴めず敗退。代わりに隣のエリアにあるOasis(7b+) をやってみると、L' angle…よりもグレードが上なのに一撃で登れた。20日、晴れ。レスト、近所にあるエリアを幾つか見て回つた。歩いて行ける範囲に100以上のルートがあることが凄い。流石に聖地だ。21日、曇りときどき雪。ツアー中で一番寒い日だった。指がやっと回復したので、再びCoquibusへ。Fata MorganaのバリエーションであるFata Morgana bas(8a+) をやる。このルートはFata Morganaのさらに下からスタートし、力のいる2手をこなしてリンクする。スタートのホールドの縁が鋭く、指に突き刺さる。下のパートの2手はそれほど難しくないが、繋げるとFata Morganaの核心が別物のように難しくなる。指がまたどんどん抉れてくる。無駄にトライせず、これで決めるときなんだとトライでFata Morganaの核心を抜けた。あとは気合で押し切り、岩の上に立つた。指は血が出る寸前だった。22日、曇り。Cuvierに行くもののテーピングを巻いた指では思うように登れず、写真を撮って過ごした。夕方Coquibusに移動し、弟の徹がフォンテーヌブロー最難のBig Island(8c) を登つた。夜は全員で祝杯をあげた。23日、雪。小雪が舞う中近所のRocher aux Sabotで少しだけ登る。Sale Gosse(7c) が登れたが、天気も崩れてきたので切り上げた。24日、雪。起きると外は真っ白。25日、雪。この日も買い出し以外では外出せず。26日、曇り。雪はま

だ解けない。いくつかまだ行っていないエリアを偵察と、買い出し。27日、曇り。乾きの早いl' Elefantで登る。数日休んだので体の動きが鈍い。成果はLa Barre Fixe (7b+) のみ。28日、曇り。ダメ元でCuvierに行ってみたがやはりダメ。湿気た優しいルートを登つて遊んだ。

3月1日、曇り。Petit Boisで登る。8mあるBig Jim(6c+) を登つた。易しいが、緊張感があつていよいよルートだった。午後はCoquibusに行きSatan I Helvet (8b) にトライするも、これは出来ず。2日、曇り。レスト。徹に付き合つてFranchard Cuisiniereに行き、ひたすら写真を撮る。3日、晴れ。3日目に行つたRoche GreauにTigre et Dragonをやりに行く。久しぶりにコンディションが良く、アップを済ませて1回目のトライで完登できた。時間はそれほどかからなかつたが、思い出深い1本になった。その後はButhierで少しだけ登り、終了。4日、CuvierのMerville(8a+) を単独で行つた。「傑作」という名のこのルートは是非登つてみたかったが、核心が越えられず結局時間切れ。指がズタズタ。フォンテーヌブローのクラシックは甘くない。5日、天気が崩れるとのことだったが、外れて晴れ。Franchard Cuisiniereに行つた。7aから7bまでの易しいルートを登つて丸一日楽しんだ。6日、曇り。近所のRoche aux Sabotで登る。連登で、易しいルートで遊ぶ。7日、雨かと思ったら曇り。しかし前夜の雨でどこも濡れている。l' Elefantでラストクライム。小さな岩しか乾いていなかつたので、それで遊んで終わった。8日、雨。おとなしく土産を買いに出かけ、最後の夜はパーティー。9日、晴れ。早朝にジトを引き払い、一路パリへ。空港でまたマットの超過料金を取られて意氣消沈。翌10日に成田着、同日夕方に長野着。

## 111 2013・10~11 ネパール アンナプルナ周回トレッキング

○参加メンバー 米倉幸夫 (現地ガイドポーター1名同行)

### ○トレッキング概要

10月9日 出国、昆明経由で翌日午後カトマンズ着。目論んだマナスル周回は単独旅行のためすぐには入域許可を取れず、すぐ許可のとれるアンナプルナ方面に転進した。

13日 小雨。早朝ガイド兼ポーター1名とローカルバスでベシサハール(750m)。乗合四駆でマルシャンディ渓谷沿いの道を遡るがカウレ付近で故障。茶店に臨泊。

14日 雨。夜間に修理した車でダナキュウ(2,300m)まで進む。

15日 雨。チャーメ(2,700m)まで黙々と歩く。

13日 曇り。渓は開け、アパーピサン(3,300m)泊。

17日 曇。マルシャンディ左岸のルートを行き、アンナプルナⅡ峰遥拝のため、ギャルー(3,670m)泊。

18日 晴/曇。連日の雨も止んで早朝ヒマールと対面。ブラカ(3,400m)泊。

19日 曇。高所順応のためキチョ・タール(氷湖の意・4,600m)往復7時間。降雪で眺望不得。

### <マチャプチャレ北西面>



20日 曇/晴。マナン、グサン、ヤク・カルカを経てレダー(4,200m)。

21日 晴。眺望を楽みながらトロンフェディを経てトロン・ハイキャンプ(4,800m)。

22日 晴。未明に出発、朝日に映える絶景を堪能しながら無風快晴のトロン峠(5,416m)に至り茶店で熱い至福の紅茶を飲んでムクチナート(3,700m)に下る。凍った日蔭に5センチ程の雪が

残っていたが、緩斜面でアイゼン不要。早く着いたので乗り合い四駆でジョモソン（2,700m）に下り、3日ぶりにビールを味わう。

23日 晴。バスでベニ（830m）タクシーでポカラ（800m）。

24日 晴。洗濯とアンナプルナBC往復の準備。

25日 曇/小雨。タクシーでシャウリ・バザール（1,200m）まで。徒歩でモディ・コーラ右岸の昇降のある道をシヌワ（2,200m）。

26日 曇。眺望の利かぬ峡谷の道をデオラリ（3,200m）まで昇る。

27日 晴/雪。未明発ちをしてマチャブチャレBCを通過し、アンナプルナBC（4,130m）に急ぎ、午前中にベッドを確保。夕方から降雪。

28日 晴・曇。アンナプルナI峰の大胸壁に圧倒される。東南壁からSOSを発した遭難者をヘリが救出。早朝から雪崩の音が轟く。最も挑戦者の死亡率が高い8000m峰なるも納得。朝日が昇って2時間後涌雲。堅雪の緩斜面を下山。前夜の雨が凍った道を慎重に下ってシヌワまで。

29日 ジヌーの温泉に浸かってシャウリ・バザールに到着。タクシーでポカラ。

30日 ポカラ滞在。アンナプルナII峰南面の探訪することにし、ガイドを現地生まれに交代。

31日 晴。タクシーでセティ・ナディ右岸のブルジュン・コーラ、チェックポ

ストまで。ガレ・カルカ（1800m）の民宿泊。

11月1日 晴。タラ・ヒルトップの展望台（2,800m）で、朝日に映えるマチャブチャレを間近に眺め、シャクナゲの密林をシクレス（2,000m）への長いトラバース。

2日 晴/小雨。早朝ライシ・ダンダ展望台（2,350m）往復後、羊飼いの案内人と、マディ・ナディ上流の小屋ホグ・ゴト（2,100m）に難路を遡る。

3日 晴/小雨。左岸の尾根を登ってナウラ・カルカからII・IV峰南面の氷河をながめ、シクレスに戻る。

4日 晴。サビまで降り、ローカルバスでポカラに帰着。ポカラで2泊後、ツーリストバスでカトマンズへ移動。

7日 KTM発、昆明経由便で11月8日帰国。

## ○あとがき

40年余り蓄えた脂肪を歩いて燃やして脱メタボを達成しようと出かけたが、図らずもアンナプルナ方面に転進したために、SAAC会員の足跡が色濃く残る山々を眺める旅になってしまった。帐篷、炊事具は持たず行動中の宿泊はすべてロッジか民家泊。身軽に低コスト（総費用、航空運賃込みで25万円）でヒマラヤを眺める旅ができたと思う。病みつきになりそうだ。

## 112 2015・1~3 アンデス アコンカグア6950m アレナレス

○参加メンバー 土田孝浩、河野卓朗

### ○登山概要

#### ・出国から登山準備 1月26~31日

1月26日 日本発 土田、河野成田空港にて集合。

27日 プエノスアイレス着(現地時間)

28日 メンドーサ着~31日 入山準備

#### ・アコンカグア登山 2月1~14日

2月1日 登山開始 コンフルエンシアまで。初日の荷物40kg前後。バス降車場所には注意が必要。“オルコネス”が入山口。コンフルエンシアでは他の登山者達の熱気や興奮を感じ、お祭りムードであった。

2日 コンフルエンシア⇒プラザ・フランシア手前 4010m 順化の為。夕方のメディカルチェックで土田のSpO<sub>2</sub>が低いと診断される。

3日 コンフルエンシア⇒プラザ・フランシア。4200m昨日引き返した場所は、4010m程度であったことが判明する。やはり未到達標高では頭痛がある。この日から下痢。

4日 コンフルエンシア→プラザ・デ・ムーラス(BC) 4300mおよそ8時間でBC着。

5日 BCにてレスト

6日 BC⇒キャンプ・カナダ(C1) 5090m  
荷上げC1へ荷上げ打ち合わせ、山頂アタックの条件について3点。まず、6300mまで段階を踏み順化、アタック・キャンプを6000m付近に設営、そして天候。隊は8日にC2入りを目指す。ここは水場が無いので、必要な水をデポ。

7日 BC→C1⇒ニド・デ・コンドレス(C2)  
5400m 荷上げ

8日 C1→C2予定どおりにC2。

9日 C2⇒5950m(順化)

ようやく登山靴の出番。2P目の途中で

ベルリンキャンプに着く。6000m弱の地点まで来て引き返す。朝、寒さで目が覚める。

10日 C2⇒大トラバース6400m(順化)

インディペンデンシア6300mを目指して順化。2P目途中でキャンプ・コレラに着く。2時間程行くと、インディペンデンシア、それから大トラバースの取り付けが見えてくる。ここで6400m。ダウンミトンが必要

11日 C2→キャンプ・コレラ

5970m高所での滞在時間を少しでも減らす為、昼から出発。問題もなくキャンプ・コレラに到着。「キャンプ・コレラ入り。順応は順調。明日のアタックに備えるのみ。風よ吹くな!下痢よ止まれ!とだけ念じて夜を過ごした。」河野報告

12日 キャンプ・コレラ→アコンカグア山頂  
6950m→ニド・デ・コンドレス(C2)

4:00 起床

5:30 出発

8:20 トラバース取り付け

12:30 山頂

13:00 下山開始

15:30 キャンプ・カナダ

17:30 C2

天候晴れ 微風 気温-15°C

登頂日。2P目の途中で夜が明けた。トラバースは日が当たらず非常に寒い。グラシカナレータは体力的にはきついが技術的には全く平凡。ひいひい言いながら、

12:30 アコンカグアの山頂に立つ。この日の内にテントを撤収し、C2までテントを下げる。

13日 C2→BC「登頂の翌日。本日は2時間弱で終了。振り返ればアコンカグア。」土田より

14日 BC→メンドーサへ下山

---

<南米の最高峰にコマクサが咲いた！>



・アレナレス登攀 2/16～23

15日 メンドーサでアレナレス準備  
バスが土日のみなので、急いで準備。

16日 メンドーサ→マンザノ昼過ぎに Tunuyan行のバスに乗車し、そこから乗換えて Manzano Histrico(マンザノ) へ。マンザノで Yagua(ジャグア) さんの家に泊めていただく。

17日 アレナレス入山 周辺偵察 Yagua の車で、アレナレスへ出発。ゲートは軍が管理。緊急連絡先は Yagua が引き受けてくれた。しかしその後しっかりお金を徴収された。この日はとりあえずテントを張る。

18日 登攀日① Grupo Muralla de la Mitria というエリアへ行く。入口ゲート付近まで歩いて戻り、そこから斜面を登ると計40分程で到着。Pared de la mitria という壁で簡単なルートから2本登り、その paradita roja という壁へ移動。スポーツルートが多く、数本登って力尽きる。

19日 登攀日② 昨日と同じエリアを中心 に登る。何本か登った後、el condor pasa (コンドルは飛んでいく) 5Pを登る。岩は堅く程良い手ごたえ。その後、スポーツルートを登る。傾斜がついた途端、登れない。

20日 登攀日③ 雨天のため、レスト

21日 登攀日④ 朝から再びの雨。昼から登り出すことが出来た。まずはparadita roja にてショートルートを登る。その後に、mesocanalesへ移動し、マルチピッチを攻める。全体的に丁度良い手ごたえで、特に amici miei は快適で楽しい。良ルート。4日目にして、ようやく調子が戻ってきた。

22日 登攀日⑤ 登攀最終日。ずっと最終日の目標についていた、samarkanda という壁の、filo del caballito というルートを登る。ほぼ全てナチュプロで、なお且つピッチごとにバリエーションに富んでいる。

23日 下山日

7:00 起床

9:00 出発

9:40 ゲート

12:20 マンザノ着

18:00 バス発

20:00 Tunuyanにて解散

マンザノに到着。Tunuyanに着くと、そこでアレナレスでのクライミングは終わりだ。それぞれ別のバスに乗り、この先河野は北のボリビアを、土田は南のパタゴニアを目指して、それぞれ別のバスに乗り南北へと旅立った。

## 『雲にうそぶく』—思誠寮寮歌—

大正十年度 福田 美亮 作詞

一 血は燃えさかる朝ぼらけ  
君よ聞かずや雪溶けを  
真白き肌に我が胸に  
歌いて行かむ野にみつる

二 雲にうそぶく槍穂高  
乗鞍白馬皆友ぞ  
さらばいざたて若き兎よ  
男の子の力ためし見む

三 夕べは悲し雲の色  
声なき声に物思ふ  
軽ては荒ぶアルペンの  
むせぶは何ぞ窓の外に

四 遠き静けき夜をこめて  
山よ眠るか地よ草よ  
目覚むるものは我一人  
真理の声を今ぞ聞く

五 あ、信州よ山の国  
峯に輝く雪を似て  
さらば歌わん諸共に  
あした夕べの友は山

女鳥羽の岸に佇みて  
春は輝くアルペンの  
いざ朗らかに高らかに  
大地の命踏みしめて

天馬の姿勇ましく  
燃ゆる瞳をいかにせむ  
両手を拝げよじ登り  
信濃はうれし夏の国

今憧れの目をふせて  
若き心を誰か知る  
氷の嵐雪の風  
あはれ深くも秋たけぬ

岸辺の緑夏木立  
夕暮れさそふ蝶の  
命の流れ影あせて  
黄昏そむる雲の色

さめては清し窓の月  
一息毎に巡り行く  
落葉の心人知るや

嵐は山に落ち果てぬ  
梢の火赫くさゆらげば  
冬を昨日の春の色  
あかぬまどひのもの語り

## 『春寂寥』—思誠寮寮歌—

大正九年度 吉田 実 作詞

春寂寥の洛陽に  
傷める心今日は我  
木の花蔭にさすらえれば  
一片毎に落る涙

昔を偲ぶ唐人の  
小さき胸に懐きつつ  
あはれ悲し逝く春の

桜葉蔭のまどろみに  
果敢なき運命呪ひては  
あはれ淋し水の面に

今宵は結ぶ露の夢  
光をこふる虫の声  
あはれ寒し村時雨

静けき夜半の雪崩れ  
身を打ち寄する白壁に  
あはれ床し友どちが

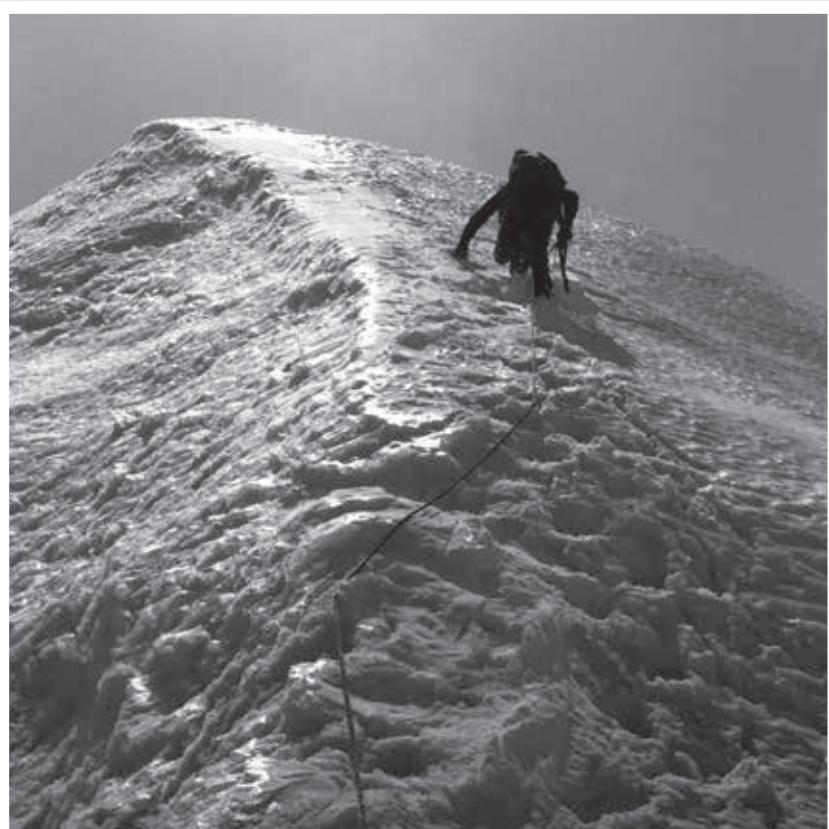
一 春寂寥の洛陽に  
傷める心今日は我  
木の花蔭にさすらえば  
一片毎に落る涙

二 岸辺の緑夏木立  
夕暮れさそふ蝶の  
命の流れ影あせて  
黄昏そむる雲の色

三 秋搖落の風立ちて  
さめては清し窓の月  
一息毎に巡り行く  
落葉の心人知るや

四 嵐は山に落ち果てぬ  
梢の火赫くさゆらげば  
冬を昨日の春の色  
あかぬまどひのもの語り

# 信州大学山岳会編



## 登山活動

No.	邦 曆	西 曆	チーフリーダー	P
<b>1</b>	昭和54(統合) 年度	1979年	田 中 誠 司	199
<b>2</b>	昭和55年度	1980年	加 藤 喜 章	205
<b>3</b>	昭和56年度	1981年	川 原 修	210
<b>4</b>	昭和57年度	1982年	藤 井 卓 也	215
<b>5</b>	昭和58年度	1983年	細 川 和 幸	217
<b>6</b>	昭和59年度	1984年	北村(藤田)正弘	222
<b>7</b>	昭和60年度	1985年	鷹 取 秀 雄	223
<b>8</b>	昭和61年度	1986年	角 谷 道 弘	225
<b>9</b>	昭和62年度	1987年	三 野 和 哉	229
<b>10</b>	昭和63年度	1988年	豊 田 浩 太 郎	233
<b>11</b>	平成元年度	1989年	下 平 啓 太	238
<b>12</b>	平成2年度	1990年	浦 山 大 介	242
<b>13</b>	平成3年度	1991年	河 西 貴 史	246
<b>14</b>	平成4年度	1992年	藤 江 泰 一	251
<b>15</b>	平成5年度	1993年	伴 野 達 也	254
<b>16</b>	平成6年度	1994年	長 谷 川 哲 也	259
<b>17</b>	平成7年度	1995年	松 本 穂 高	271
<b>18</b>	平成8年度	1996年	山 内 哲 文	277
<b>19</b>	平成9年度	1997年	花 谷 泰 広	279
<b>20</b>	平成10年度	1998年	原 田 亮 介	281
<b>21</b>	平成11年度	1999年	川 井 純	285
<b>22</b>	平成12年度	2000年	岸 本 俊 朗	290
<b>23</b>	平成13年度	2001年	横 山 勝 丘	293
<b>24</b>	平成14年度	2002年	佐 藤 祐 樹	297
<b>25</b>	平成15年度	2003年	佐 藤 祐 樹	300
<b>26</b>	平成16年度	2004年	片 寄 哲 生	303

# 1 昭和54年度（1979年度）

チーフリーダー 田中 誠司

## I. 年度総括

この報告は40年近く前の出来事をガリ刷りや青焼きの報告書などを頼りに記すことになるが、自分でも良く覚えているものだと感心している。それほど鮮烈な出来事であった。

今年度から伊那松本山岳部と上田長野山岳部が統合され信州大学山岳会(SAC)一本でやっていくということになっていたようだが、実際のところ、今年度は新人合宿から合宿は全てSAC合同で行うことになったというのが正確である。正式には80年度からSAC一本化がスタートしたようだ。79年4月時点(1年生は未加入)で伊那松本部員の13名に対し上田長野部員が5名と減少し、全学の4年部員も2名となつたこと、また、大学予算も教養と農学部にしか下りず共同装備が不十分であることなど、統合せざるを得ない状況でありリーダー会でも反対する者はなく、その方向で学士山岳会とも話を進めた。

新人合宿以降の合宿は全てオール信大で行ったが、個人山行も昨年以上に伊那松本と上田長野の隔てなく縦走、岩登り、沢登りなど一緒にパーティーを組むことがほとんどであった。特に岩登りは屏風から幕岩、奥鐘の難しいルートを実績のある山本、片山、中嶋ら5年以上の部員がリードし後輩がついていくというパターンでめきめき力をつけていった。このように今年度の山行は実質的にSACで動いた。ただ、学部間の距離は如何ともしがたく、伊那から長野まで3時間以上かかり、伊那の私は上田にある繊維学部には行かずじまいであった。また、松本を中心に部員が参集したが、その後散らばると部員間で連絡調整することは難しかった。

71年アンナプルナII、78年ジェティバフラニ、ニルギリ南峰の遠征に続く海外登山研究の動きはOBを中心として活発でガネッシュII峰へ11月に下田(5)が80年2月には二俣(6)山本(6)がネパールへ発った。また、アラスカのハンチントンやロッキーなどの登攀を目指し6月に中嶋(5)山田(3)が北アメリカへ発った。これらの動きに刺激を受け、先輩に続けと己を鼓舞した者が多くいたように思う。

目まぐるしく山行が繰り広げられた中で、残念なことに甲斐駒での遭難事故をはじめ山岳事故をいくつか起こした。夏の個人山行・戸台川本谷の落石事故では2年部員が腰を圧迫し重傷、夏合宿・長治郎雪渓で2年部員が足首を骨折、また、78年度にはなるが、春の個人山行・八ツ峰の雪洞で当時2年部員が足指を凍傷、その後切除したこと。何れも本人の慎重さが足りなかつたことを主原因としているが、リーダー会の責任も大いにあり事故防止対策と事故後の対応が不十分であったことを反省し、遭難対策やリーダー会チェック機能の強化などを課題として取り組み今後の活動に生かそうとした。幸い負傷者は度重なる手術で回復し山を続けることができるようになったことが救いであった。

## II. 合宿

○不帰定着合宿 伊那松本山岳部

4月29日～5月5日

CL：田中誠司(4農) 島谷寿(3農)  
山本雅大(3理) 石渡健司(2理)  
川原修(2農) 水谷光彦(2農)  
吉岡道泰(2工) 師田信人(6医)  
片山博彦(5農) 下田章(5農)

- ・松川南股入湯入沢出合BC、唐松沢で雪上訓練、Ⅱ峰東壁 阪大、甲南、Ⅲ峰A・B・C尾根登攀

#### ○新人合宿 5月27日～6月3日

CL : 田中誠司(4) SL : 竹之内秀実(4工)

島谷寿(3) 山本雅大(3) 石渡健司(2)  
川原修(2) 水谷光彦(2) 吉岡道泰(2)  
山本章(6教) 下田章(5) 西川義満(OB)  
岩村孝之(1農) 川渕浩二(1農)  
河本忠志(1織) 木下善夫(1農)  
佐々木正博(1農) 関圭三(1文)  
田辺治(1農) 田渕潔(1農) 藤井卓也(1理)  
保科実(1理) 間瀬岳美(1理)  
丸山岳人(1農) 茂呂晃(1経)

- ・穂高岳 島々～徳本峠～横尾BC、  
涸沢周辺で雪上訓練、槍ヶ岳往復、  
奥穂・北穂・前穂の他、IV峰正面松  
高、北条新村、屏風岩東壁小倉ル一  
ト登攀、上高地下山

#### ○夏山定着合宿 8月19～26日

(台風接近で早く下山)

CL : 竹之内秀実(4) 加藤喜章(3農)  
山本雅大(3) 川原修(2) 吉岡道泰(2)  
岩村孝之(1) 川渕浩二(1) 木下善夫(1)  
近藤幸夫(1農) 関圭三(1) 田辺治(1)  
田渕潔(1) 藤井卓也(1) 保科実(1)  
茂呂晃(1)

- ・剣岳 黒部ダム～梯子段乗越から真砂沢出合、長次郎谷熊の岩BC、剣岳東面の岩場登攀、合宿3日目に長次郎谷右俣での雪上訓練時、川原が足首を負傷し歩行困難となり、二俣ら3人が交代で背負い剣沢の金沢大診療所で受診、翌日、風雨の中室堂から下山、全治1か月の骨折源治郎Ⅱ峰平蔵谷側壁Bフェースカンテ、C、Dフェース、ハツ峰六峰Aフェース中大、CフェースRCC、剣稜会、Dフェース久留米大、富山大

#### ○プレ冬山合宿 12月7～9日

メンバー不明

遠見尾根～大遠見の先TS～五竜小屋～五竜岳～五竜小屋横TS～唐松岳～八方尾根

#### ○冬山合宿 12月19～26日

CL : 田中誠司(4) SL : 竹之内秀実(4)

加藤喜章(3) 山本雅大(3) 川原修(2)

吉岡道泰(2) 岩村孝之(1) 関圭三(1)

田辺治(1) 田渕潔(1) 藤井卓也(1)

保科実(1)

北アルプス北部・杓子岳～日本海・親不知

12月19日 快晴後曇 中山沢出合～猿倉

台地(デボ)～小日向のコル

20日 晴、風強し TS～カンバ平～ジャン  
クションP(デボ)～カンバ平

21日 快晴後雪 TS～杓子岳(デボ)～  
白馬村営宿舎前、これまで3日間は  
2隊に別れ後発隊がデボ回収

22日 風雪 TS～白馬山荘横にTS～白  
馬岳～頂上から100m下にデボ、その  
後帰天

23日 風雪 TS～白馬岳～デボ地～三国  
境～鉢ヶ岳東斜面中腹～雪倉避難  
小屋、この日先発隊がデボ回収

24日 快晴後晴 TS～雪倉岳～赤男山～  
朝日岳～長梅山～黒岩平

25日 曇後雪 TS～黒岩山～サワガニ山  
～犬ヶ岳～梅海山荘 コース上に雪  
庇なし

26日 晴 TS～菊石山～白鳥山～坂田峠  
(ワカン外す)～二本松峠～親不知  
国道～親不知駅

### III. 個人山行・夏

#### ○南ア南部沢登りと縦走

7月12～20日

CL: 竹之内秀実(4) 吉岡道泰(2)

岩村孝之(1) 川渕浩二(1)

本谷口～西沢渡～西沢溯行～聖岳～聖平～清見台～上河内岳～茶臼岳～仁田池小屋～易老岳～光岳～加加森山～池上岳～鶏冠山～和田 西沢溯行では二俣手前でシャワークライム、聖岳滝沢遡行は中止し縦走に変更。

#### ○越後の山縦走 7月14～21日

CL: 石渡健司(2) 川原修(2) 藤井卓也(1)  
保科実(1)

清水～巻機山～越後沢山～藤原山～割引沢溯行～丹後山～平ヶ岳～景鶴山～与作岳～県境尾根～尾瀬ヶ原～大清水踏跡僅か県境の稜線上を轟こぎで進む。

#### ○薬師岳縦走 7月15～21日

CL: 田渕潔(1) 木下善夫(1) 佐々木正博(1)  
関圭三(1) 田辺治(1) 茂呂晃(1)

扇沢～針ノ木峠・針ノ木岳～黒部湖・平の渡～五色ヶ原～薬師岳～北ノ俣岳～黒部五郎岳～三俣蓮華岳～弓折岳～笠ヶ岳～新穂高～サマテン 天候に恵まれ軽量化に努め楽だった。

#### ○後立縦走 7月26～29日

CL: 茂呂晃(1) 岩村孝之(1) 川渕浩二(1)  
木下善夫(1) 田辺治(1)

八方尾根～唐松岳～五竜岳～鹿島槍ヶ岳～爺ヶ岳～岩小屋沢岳～針ノ木岳～扇沢 赤沢岳の暴風雨後にメンバーやけど。

#### ○甲斐駒周辺の沢登り

7月27日～8月2日の予定で行動

L: 山本雅大(3) 石渡健司(2) 吉岡道泰(2)

近藤幸夫(1) 佐々木正博(1) 田渕潔(1)

7月28日 14:30行動終了間近の尾白川

本谷2400mで落石事故発生、石渡(2)が腰を挟まれ強打、尿道出血・激痛で歩行不能、山本(4)、近藤(1)が救助を要請しに丹渓山荘へ、現役留守本部、思誠寮、伊那署等各所に遭難連絡、残りは看護で負傷者の出血は止まるが排尿できず、下腹部から太ももにかけ激痛。

29日 3:30 吉田(8) 二俣(6) 片山(5) 下田(5) 丹渓山荘着、山本と吉田らは現場へ向かう。近藤は戸台丹渓荘へ向かい宮崎OBに連絡。10:30吉田ら救助活動開始。16:15六方石着、石渡を背負子で背負い下山。18:15北沢小屋着、山田和OBに救急処置を受ける。

20:20 大平小屋着、救急車 伊那中央病院へ

この遭難事故では山田和彦、宮崎敏孝、井関芳郎OBをはじめ、南ア北部遭対協には大変お世話になりました。

#### ○サマーテントからの登攀

7月22日 L: 山本雅大(3) 加藤喜章(3)

・前穂 屏風岩東壁雲稜 ボルトにリングのないもの多い

24日 L: 山本雅大(3) 藤井卓也(1)

・前穂 松高ルンゼ～北壁Aフェース

8月8日 L: 下田章(5) 加藤喜章(3)

川原修(2)

・前穂 屏風岩東稜 時間待ちで夜間下降

8日 L: 山本雅大(3) 田渕潔(1)

・前穂 中又白谷 F3、F8でザイル使用

9～11日 L: 加藤喜章(3) 吉岡道泰(2)

・北穂 9日涸沢、10日滝谷第4尾根、第1尾根下部右、上部ノーマル、11日滝谷P2フランケ早大

10日 L: 山本章(6) 山本雅大(3)

・前穂 屏風岩右岩壁ルンゼ状スラブ下部は快適、上部は岩がもろく草付

### きの処理も課題

- 13日 L: 山本雅大(3) 片山博彦(5)  
・前穂 屏風岩東壁鵬翔 東壁ルンゼ  
下部～T4～鵬翔 東壁ルンゼ下部  
は気持ちの良いスラブ、鵬翔はボルト等の効き悪い
- 14日 L: 加藤喜章(3) 川渕浩二(1)  
関圭三(1)  
・前穂 松高ルンゼ～北壁Aフェース
- 14日 L: 片山博彦(5) 吉岡道泰(2)  
三坂健次(OB)  
・前穂 中又白谷
- 15日 L: 下田章(5) 福島涉(OB)  
・明神 P2263 南壁ルンゼ
- 15～16日 L: 山本雅大(3) 藤井卓也(1)  
保科実(1)  
・北穂 滝谷第1尾根ノーマル、滝谷  
ドーム中央稜
- 16日 L: 下田章(5) 福島涉(OB)  
・前穂 屏風岩東稜 ガネッシュ遠征準備、運動靴は疲れる

### Ⅲ. 個人山行・秋

#### ○北鎌尾根縦走 9月22～24日

- L: 師田信人(6) 岩村孝之(1) 田渕潔(1)  
・葛温泉～湯俣～千天出合～北鎌沢  
～北鎌尾根・独標～槍ヶ岳～上高地  
独標先でメンバー転落したが自力で  
登山継続。

#### ○北岳バットレス 9月22～25日

- L: 加藤喜章(3) 田中誠司(4) 川渕浩二(1)  
木下善夫(1) 田辺治(1)  
・北岳 戸台～北沢峠～広河原～大樺  
沢二俣  
バットレスDガリ一大滝～下部・上部  
フランケ～第4尾根～中央稜ノーマル～北岳 登攀者、落石とも多い、  
帰路は広河原から甲府へ。

#### ○明星山周辺の登攀

##### 9月27日～10月1日

- L: 片山博彦(5) 山本雅大(3) 吉岡道泰(2)  
関圭三(1) 藤井卓也(1) 茂呂晃(1)  
・東壁ルンゼ～P5墓石稜左稜・右稜、  
P6南壁左フェース、東壁ルンゼ～P  
5ドームルンゼ状下部～右ルンゼ～  
P6東稜

山本は30日のみの登攀、台風通過で  
テントつぶされ30日夜中下山。

#### ○明星山岩登り 10月3～4日

- L: 加藤喜章(3) 藤井卓也(1)  
・P6南壁正面壁 1P目のフリーのトラ  
バースが怖い。  
・P6南壁吉田 高度感がすばらしく正面  
壁や左フェースよりおもしろい。

#### ○丸山東壁右岩稜 10月8～11日

メンバー等不明

#### ○奥鐘山西壁紫学会直上ルート登攀

##### 10月12～14日

- L: 山本章(6) 山本雅大(3)  
・櫻平13:30～西壁下岩小屋14:30(泊)  
～西壁取付6:40～20ピッチ～終了点  
15:10～横断バンド16:30(泊) 7:30～  
奥鐘山山頂8:50～南越10:20～櫻平  
11:00  
ルートは全体的に明るく気分良く登  
れた。一番戸惑ったのはハング下の  
振り子トラバース。なかなかの好ルー  
トである。

#### ○南ア北部縦走 10月15～18日

- CL: 竹之内秀実(4) 岩村孝之(1)  
田辺治(1) 丸山岳人(1)  
・塩川小屋～三伏峠～塩見岳～雪投沢～  
池ノ沢～広河内岳～農鳥岳～間ノ岳～  
北岳～広河原

### III. 個人山行・冬(春休みまで)

#### ○宝剣岳訓練 2月24~28日

L: 加藤喜章(3) 川原修(2) 丸山岳人(1)  
茂呂晃(1)  
・千畳敷～宝剣山荘 雪上訓練、天狗  
岩学芸大ルート登攀

#### ○唐沢岳幕岩雲表ルート登攀

3月2～3日

L: 中嶋岳志(5教) 山本雅大(3)

#### ○八ヶ岳縦走 3月2～6日

メンバー不明 西岳～赤岳～硫黄岳～  
夏沢峠

#### ○鳳凰三山縦走 3月2～6日

メンバー不明 北沢峠～甲斐駒ヶ岳～  
鳳凰三山～夜叉神峠

#### ○鹿島槍ヶ岳 3月9～13日

CL: 竹之内秀実(4) 吉田秀樹(8)  
川原修(2) 岩村孝之(1) 藤井卓也(1)  
・天狗原～天狗尾根～鹿島槍～爺ヶ岳  
～東尾根～大谷原

#### ○硫黄尾根～槍ヶ岳 3月20～26日

L: 加藤喜章(3) 竹之内秀実(4)  
川原修(2) 吉岡道泰(2)  
・七倉～湯俣～硫黄尾根～槍ヶ岳

#### ○剣岳継続登攀 3月24日～4月2日

L: 中嶋岳志(5教) 山本雅大(3)  
・剣沢～平蔵谷中央ルンゼ～源治郎尾  
根I峰平蔵谷側壁上部フェース成城  
大～剣岳～三ノ窓～チンネ左方カン  
テ～左稜線～小窓尾根、丸山東壁か  
らの継続をカット

#### ○尾瀬スキー 4月7～11日

L: 山本雅大(3) 吉岡道泰(2) 藤井卓也(1)  
保科実(1) 茂呂晃(1)  
戸倉～至仏山～大白沢山～平ヶ岳～尾  
瀬沼～三平峠

### IV その年度の特記すべき山行

#### ○冬山合宿

「今年度の冬山合宿は白馬(岳)より  
日本海を目指す。直線距離でも30kmと  
いう稜線を豪雪でかつ湿雪に見舞われ  
ながら、いざ日本海へと進むことにな  
る。剣・穂高を離れ4年振りの後立での  
合宿は我々の力量を試すに十分のもの  
である。合宿での課題は3000m(級)で  
の稜線で重荷をかついでラッセル、ア  
イゼンワーク等の雪上技術、悪天候の  
中の生活技術という登山技術の習得  
と…リーダーシップ、メンバーシップの  
養成である。…1年生8名に対する上級  
生は6名という厳しい条件にあるが、各  
自この合宿に賭ける意欲を示し、実りあ  
るものにするよう頑張ろう。」と計画書  
巻頭にリーダーの言葉がある。

SAC冬山合宿は4年目が2人で3年目の  
2人を入れても自ずと限られた山行計  
画になると予想していた。しかし、海外に  
出る5年目以上の先輩達の意気込みが、  
そのまま山岳会の雰囲気を盛り上げて  
いたようで、自分達も挑戦的な計画を作  
ろうとした。「目指せ日本海」というテー  
マを設けて下級生にやる気を持たせ、上  
級生が引っ張っていくというチームが一  
丸となってことを成し遂げようとした。そ  
の結果、比較的雪が少なかったようで大  
きな雪庇もなく、天候にも恵まれ、沈殿  
なしの連日行動で年内下山を果たした。

経験の少ない我々でも訓練を重ねれば  
できるんだという自信を1, 2年部員  
に植え付けることができたのが一番の  
収穫であり、今後のSAC活動の飛躍を  
期待できたのも大きな収穫であった。  
CL: 田中誠司(4) SL: 竹之内秀実(4)  
装備: 加藤喜章(3) 保科実(1)

食料：山本雅大(3) 岩村孝之(1) 関圭三(1)  
田辺治(1)

会計・涉外：加藤喜章(3) 田渕潔(1)

医療・気象：吉岡道泰(2)

記録：川原修(2) 藤井卓也(1)

#### ・行動概要

12月19日 快晴後曇

白馬＝中山沢出合～猿倉台地

先発隊(竹ノ内、山本、吉岡、岩村、  
関、藤井)

中山沢(雪はワカンをはいて膝まで)

～小日向のコル～猿倉台地(デボ)～

小日向のコルTS

後発隊(田中、加藤、川原、田辺、田  
渕、保科)～小日向のコル(1820m)

～猿倉台地(デボ)～TS

20日 朝雨後晴、風強し

先発隊(田中、加藤、山本、川原、保  
科、関) TS～カンバ平～2600m地点  
でフィックス工作30m+30m～ジャン  
クションP(デボ)～カンバ平TS 風  
も弱くスペース十分

後発隊(竹ノ内、吉岡、岩村、田辺、  
田渕、藤井)

カンバ平でテント設営後デボ回収

21日 快晴後雪

先発隊(竹ノ内、山本、川原、岩村、  
田辺、藤井)

杓子岳下の岩場でフィックスする。山  
頂にデボ、主稜線はアイゼンがよく効  
く。白馬村営宿舎にデボし杓子岳の  
デボ回収。

後発隊(田中、加藤、吉岡、関、田  
渕、保科)

杓子岳山頂にデボ、カンバ平のデボ  
回収。白馬村営宿舎TS

22日 風雪

TSから視界悪く白馬山荘まで移動し

山荘下にテント設営、デボ隊は強風  
の白馬岳を越え100m下にデボ、その  
後帰天。

23日 風雪後晴

先発隊と後発隊はデボ地で合流し以  
降一隊で行動。三国境手前で支尾根  
を下り戻り返す。道標に従い稜線を  
下る。台地状尾根で早大山岳部パー  
ティー(イブリ尾根～北方稜線～白  
馬～梅池)に会う。稜線沿いに鉢ヶ  
岳を越え雪倉避難小屋まで。

24日 快晴後晴

TS風弱い、雪倉岳の登りはアイゼン  
のみ。頂上の展望良い。

赤男山の上りでワカンを付けオオシ  
ラビソの中を進む。朝日岳頂上は広  
い。長梅山を越して複雑な地形の黒  
岩平まで。

25日 曇後雪

TSから黒岩山を越えて日本海が見えた。  
サワガニ山の下りはやせていた。  
雪庇が大きく発達するところと聞い  
ていたがほとんどない。犬ヶ岳の上り  
はブッシュが出ていた。少し早いが  
梅海山荘まで。

26日 晴

TSからワッパアイゼンで菊石山を過  
ごし1241m峰からワカンで歩行、湿  
雪に苦しむ。白鳥山を越えて益々雪  
が重くラッセルのワカンも団子にな  
る。坂田峠でワカンを外す。二本松  
峠からヘッドランプを着け荒れた道  
の沢を下る。ダムを過ぎ漸く親不知  
の国道に降りる。親不知駅に21時30  
分に着く。

## 2 昭和55年度（1980年度）

チーフリーダー 加藤 喜章

### I. 年度総括

9名の新人を迎えてスタート。年度末には4年2名、3年1名、2年8名、1年2名となった。

冬山合宿での途中敗退は残念であったが、下山後も悪天候が続いた。他大学山岳部の遭難があったことを考えると、結果的には全員無事で良かった。

通年を通して、岩登りを指向したクライミングが積極的に行われた。

### II. 合宿

#### ○連休合宿 4月27日～5月4日

CL : 加藤喜章(4) SL : 山本雅大(4)

川原修(3) 古岡道泰(3) 藤井卓也(2)

岩村孝之(2) 田渕潔(2) 田辺治(2)

関圭三(2) 茂呂晃(2) 丸山岳人(2)

保科実(2) 師田信人(7)

不帰岳、杓子岳東壁 定着合宿 南股  
入BC

・不帰岳I尾根上半(加藤、茂呂、田淵)

(吉岡、藤井、田辺)

・不帰岳III峰C尾根(加藤、藤井、丸山)

・杓子岳双子尾根(加藤喜章、藤井卓也、岩村孝之、田渕潔、田辺治、関圭三、茂呂晃、丸山岳人、保科実)

・杓子岳東壁C尾根(加藤、田辺)

他、種々ルートを登っているが、記録不明。

#### ○新人合宿 6月1～8日

CL : 加藤喜章(4) SL : 山本雅大(4)

川原修(3) 古岡道泰(3) 藤井卓也(2)

岩村孝之(2) 田渕潔(2) 田辺治(2)

関圭三(2) 茂呂晃(2) 丸山岳人(2)

保科実(2) 細川和幸(1) 澤田克彦(1)

中根穂高(1) 飯島(1) 有賀(1) 金(1)

高橋(1) 松本(1) 伴(1) 吉田秀樹(8)

穂高岳 島々～徳本峠～横尾BC、涸

沢周辺で雪上訓練、北穂高、奥穂高往復、槍沢経由槍ヶ岳往復、上高地下山  
<前穂高四峰正面壁>

- ・松高左ルート(吉岡、丸山)
- ・松高ルート(加藤、田辺)
- ・北条・新村(地獄の黙示録) (山本、保科)
- ・北条・新村(吉岡、岩村)
- ・滝谷ドーム西壁(吉岡、岩村) (加藤、田辺)
- ・滝谷クラック尾根(山本、藤井)
- ・滝谷第一尾根(吉岡、田淵)
- ・赤沢山雪嶺会ルート(吉田、茂呂)
- ・赤沢山大スラブルート～奥壁(山本、藤井)

#### ○夏山岩登り定着合宿 8月22～30日

CL : 山本雅大(4) SL : 加藤喜章(4)

川原修(3) 藤井卓也(2) 岩村孝之(2)

田辺治(2) 関圭三(2) 茂呂晃(2)

丸山岳人(2) 保科実(2) 細川和幸(1)

澤田克彦(1) 中根穂高(1) 飯島(1)

下田章(OB)

剣岳 黒部ダム～梯子段乗越から長次郎谷、熊ノ岩BC、岩場登攀  
<八ツ峰六峰>

・Aフェース魚津高ルート(藤井、丸山、飯島) (下田、田辺、細川) (山本、茂呂、澤田)

・Aフェース中大ルート(山本、細川、澤田) (川原、中根)

・Aフェース中大直上ルート(加藤、関)

・Bフェース京大ルート(田辺、茂呂、澤田) (加藤、保科、中根) (川原、丸山、飯島)

・Cフェース剣稜会ルート(関、田辺) (丸山、保科、細川) (茂呂、中根、澤田)

- (藤井、岩村、飯島)
- ・CフェースRCCルート(茂呂、保科、中根) (下田、岩村、飯島) (関、細川)
  - ・Dフェース富山大ルート(川原、岩村) (下田、田辺) (藤井、保科)
  - ・Dフェース久留米大ルート(川原、丸山)
  - ・Eフェース(山本、岩村)
  - ・ハツ峰マイナーピーク東面スラブ～六峰D フェース久留米大ルート(山本、藤井、関) <チンネ>
  - ・左稜線(川原、中根)
  - ・左方ルンゼ～左稜線上部(保科、丸山、細川)
  - ・中央チムニー～aバンド、bクラック (田辺、茂呂、澤田)
  - ・北条・新村ルートgチムニーc,dクラック (下田、岩村、飯島)
  - ・源次郎尾根一峰平蔵谷側壁下部中谷ルート (川原、岩村、保科) <源次郎尾根二峰平蔵谷側>
  - ・ABフェース(加藤、関、細川)
  - ・Bカンテルート(藤井、茂呂、中根)
  - ・Cフェース(下田、丸山、澤田)
  - ・Dフェース(山本、田辺、飯島)
  - ・剣尾根中央壁左ルート～チンネ北条・新村(加藤、藤井)
  - ・剣尾根主稜～チンネ魚津高～筑豊ルート(山本、茂呂)

- プレ冬山合宿 12月6～8日
- CL : 川原修(3) 山本雅大(4) 藤井卓也(2)  
 岩村孝之(2) 田渕潔(2) 田辺治(2)  
 関圭三(2) 茂呂晃(2) 丸山岳人(2)  
 保科実(2) 細川和幸(1) 澤田克彦(1)  
 爺ヶ岳冷尾根～爺ヶ岳北峰～赤岩尾根
- 冬山合宿 12月21～31日
- CL : 加藤喜章(4) SL : 山本雅大(4)  
 川原修(3) 藤井卓也(2) 岩村孝之(2)

田渕潔(2) 田辺治(2) 関圭三(2) 茂呂晃(2)  
 丸山岳人(2) 保科実(2) 細川和幸(1)  
 澤田克彦(1) 竹之内秀実(5)  
 毛勝山塊 宇奈月尾根～僧ヶ岳～駒ヶ岳～往路  
 毛勝山 西北尾根までトレース予定だったが、年末の寒波につかり往路下山。  
 12月21日 曇り一時雪 宇奈月スキーコース終点まで荷上げ。宇奈月駅からスキーコースへ向かう林道脇で泊。

22日 曇り TS～宇奈月尾根避難小屋～1P荷上げ～避難小屋泊。

23日 晴れ後雪 TS～ジャンクションを越えた1600m地点。

24日 吹雪 TS～前僧ヶ岳(1775m)～僧ヶ岳手前1800m台地。

25日 曇り TS～僧ヶ岳(1855m)～1900mピーク～駒ヶ岳(2003m)まで荷上げ～1900m TS。5日分程度の食料をTSに残して荷上げした。これが敗退の一因。

26日 吹雪・強風 沈殿。

27日 吹雪・強風 沈殿。食料管理開始。

28日 吹雪・強風 沈殿。

29日 吹雪・強風 沈殿。

30日 吹雪・強風 沈殿。午後、若干風が弱まったため、14:30より5名でデボ回収に向かうが、荷物は発見できなかった。帰天時は暗闇となってしまった。

31日 快晴 ほぼ個装のみの軽装にし、TSより一気に宇奈月まで下山。

### III. 個人山行

- 南アルプス縦走 7月16～29日
- L : 田辺治(2) 丸山岳人(2) 澤田克彦(1)  
 林(1)  
 駒ヶ岳神社～甲斐駒ヶ岳～北沢峠～仙丈ヶ岳～伊那荒倉～両俣～左俣沢～北

岳～間ノ岳～農鳥小屋～西農鳥岳往復  
～熊ノ平～雪投沢源頭～塩見岳～三伏峠～中岳～悪沢岳往復～大聖寺平～赤石岳～百間洞～兎岳～聖岳～上河内岳～茶臼岳～光岳～信濃俣岳～大根沢山～大無間山～小無間山～田代

○南アルプス縦走 7月12～22日

L: 田渕潔(2) 岩村孝之(2) 細川和幸(1)  
平岡～本谷口～面平～易老岳～上河内岳～聖岳～兎岳～百間洞～赤石岳～荒川岳～高山裏～小河内岳～三伏峠～塩見岳～雪投沢源頭～熊ノ平～間ノ岳～北岳～両俣～高望池～仙丈ヶ岳～北沢峠～甲斐駒ヶ岳～鋸山～戸台

○北アルプス縦走 7月13～20日

L: 藤井卓也(2) 保科実(2) 中根穂高(1)  
金(1) 飯島(1)  
電鉄立山～称名の滝～大日平～大日小屋～奥大日岳～雷鳥平～一ノ越～五色平～スゴ小屋～薬師岳～薬師峠～北ノ俣岳～五郎岳～五郎平～三俣蓮華岳～双六池～槍の肩～横尾～上高地

○飯豊 朝日 縦走 9月3～10日

L: 茂呂晃(2) 関圭三(2)  
五泉＝山都＝御沢小屋～地蔵山～三国岳～種蒔山～切合小屋～ゾーリ塚～飯豊山～御手洗池～カイラギ小屋～地神山～頼母木避難小屋～カモス～大石＝越後下関＝小国  
小国＝朝日平～北大玉山～大朝日岳～西朝日岳～寒江山～以東小屋～冷水沢吊橋～大鳥バス停～鶴岡

○大井川赤石沢 7月28日～8月2日

L: 川原修(3) 関圭三(2) 茂呂晃(2)  
田渕潔(2)  
7月28日 身延～二軒小屋  
29日 邑行開始～ニエ淵～岩小屋  
30日 岩小屋～門の滝手前

31日 ～大ガラン～クズレ沢手前  
8月1日 ～百間洞露营地～赤石岳～荒川小屋  
2日 ～広河原小屋～鹿塙

○黒部 上の廊下 8月8～12日

L: 竹ノ内秀美(5) 川崎誠(OB)  
丸山岳人(2) 田辺治(2)  
8月8日 黒部ダム～奥黒部ヒュッテ～下の黒ビンガ手前  
9日 ～金作谷出合を過ぎたところ  
10日 ～薬師沢出合を過ぎたところ  
11日 ～赤木沢出合～日本庭園～祖父岳～双六小屋手前  
12日 ～双六小屋～槍の肩～横尾～上高地

○唐沢岳幕岩大凹角ルート 7月21日

L: 加藤喜章(4) 川原修(3)

○屏風岩 東稜～雲稜ルート 7月25日

L: 吉田秀樹(8) 藤井卓也(2)  
サマ天～東稜～東稜下降～雲稜～屏風の頭～サマ天

○唐沢岳幕岩S字ルート 7月28日

L: 山本雅大(4) 師田信人(7) 岩村孝之(2)  
保科実(2)

○千丈沢～小槍～滝谷

7月29日～8月1日

L: 山本雅大(4) 岩村孝之(2) 保科実(2)  
中根穂高(1) 細川和幸(1) 飯島(1)  
7月29日 七倉～高瀬ダム下  
30日 ～湯俣～千天出合～三ノ沢出合下  
31日 ～槍の肩～小槍登攀  
8月1日 槍の肩～南岳～北穂～滝谷ドーム中央稜登攀～涸沢～上高地

○穂高岳継続登攀 8月4～6日

L: 山本雅大(4) 藤井卓也(2)  
8月4日 サマ天～屏風岩T4尾根～蒼稜ルート～大テラス～青白ハング緑ルート～涸沢岩小屋  
5日 ～北穂北峰～C沢左俣～ダイヤモンド

- フェース本庄ルート～北穂北峰～涸沢  
6日～前穂北尾根5,6のコル～3,4  
のコル～C沢～東壁Dフェース田山  
ルート～前穂～サマ天
- 明神五峰正面壁 8月4日  
L: 加藤喜章(4) 丸山岳人(2)
- 屏風岩一ルンゼ 8月5日  
L: 加藤喜章(4) 田辺治(2)
- 穂高岳継続登攀  
8月8～10日  
L: 川原修(3) 関圭三(2) 茂呂晃(2)  
8月8日 上高地サマ天～屏風岩東稜～  
涸沢岩小屋  
9日 潟沢岩小屋～前穂北尾根5,6のコ  
ル～4,5のコル～D沢下降～四峰正  
面壁松高ルート～前穂高～奥穂高  
～北穂高  
10日 北穂TS～滝谷クラック尾根～サ  
マ天
- 穂高岳継続登攀  
8月9～10日  
L: 加藤喜章(4) 田渕潔(2)  
8月9日 上高地サマ天～屏風岩東稜～  
涸沢  
10日 潟沢TS～前穂北尾根3,4のコル～  
前穂東壁右岩稜左カンテ～前穂高  
～奥穂高～北穂高南陵テラス
- 北穂高岳滝谷登攀  
8月11～12日  
L: 加藤喜章(4) 川原修(3) 田渕潔(2)  
澤田克彦(1) 細川和幸(1) 林(1)  
・第一尾根ノーマルルート(川原、澤田)  
・クラック尾根(田淵、細川)  
・ドーム西壁歯科大ルート(加藤、林)  
・第三尾根～ドーム中央稜(加藤、細川)  
(田淵、林)  
・第二尾根P2フランケ早大ルート(川  
原、澤田)
- 前穂高岳四峰正面壁  
8月11～12日  
L: 山本雅大(4) 岩村孝之(2) 中根穂高(1)  
今瀧(松本登高会)  
8月11日 上高地サマ天～中又白～奥又  
の池～四峰正面壁北条新村ルート～  
ハイマツテラス  
12日 TS～北条新村ルート登攀継続～  
四峰ピーク～下記登攀～前穂高岳～  
岳沢～サマ天  
・東壁右岩稜吉田ルート～Aフェース  
(今瀧、岩村)  
・四峰正面壁松高ルート(山本、中根)
- 下又白谷下部ルンゼ群R3登攀  
8月15日  
L: 山本雅大(4) 岩村孝之(2) 藤井卓也(2)
- 屏風岩東壁ルンゼ 8月18日  
L: 加藤喜章(4) 川原修(3)
- 北岳バットレス 9月27～30日  
L: 川原修(3) 茂呂晃(2) 丸山岳人(2)  
田辺治(2) 細川和幸(1) 中根穂高(1)  
・cガリ一大瀧(川原、細川)  
・bガリ一大瀧(丸山、田辺、茂呂、中根)  
・第二尾根クラシック(川原、細川、茂  
呂、中根)  
・第一尾根正面壁(丸山、田辺)  
・下部ピラミッド～第四尾根主稜(川  
原、細川)  
・下部フランケ～第四尾根主稜(丸山、  
田辺)  
・上部フランケ～第四尾根主稜上部(茂  
呂、中根)
- 明星山P6南壁ダイレクトルート  
10月3日  
L: 山本雅大(4) 岩村孝之(2)
- 甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁  
10月3～6日  
L: 川原修(3) 田渕潔(2)

- ・前衛壁ダイヤモンドフランケA赤蜘蛛ルート
- ・前衛壁ダイヤモンドフランケB赤蜘蛛ルート

### ○中央アルプス沢登り

10月 3～5日

L : 田辺治(2) 丸山岳人(2)

10月3日 中田切川遡行

4日～空木岳～池山尾根下降

5日 太田切川遡行～桧尾岳～桧尾尾根下降

### ○中央アルプス沢登り

10月 10～11日

L : 川原修(3) 関圭三(2) 茂呂晃(2)

澤田克彦(1) 細川和幸(1)

10月10日 中御所谷遡行～千畳敷～前岳沢下降

11日 滝ノ沢遡行～西駒山荘～内の萱

### ○奥鐘山西壁中央ルンゼ

10月 10～11日

L : 山本雅大(7) 藤井卓也(2)

### ○奥甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁左ルンゼ

10月 11日

L : 加藤喜章(4) 保科実(2)

### ○丸山東壁中央壁縁ルート

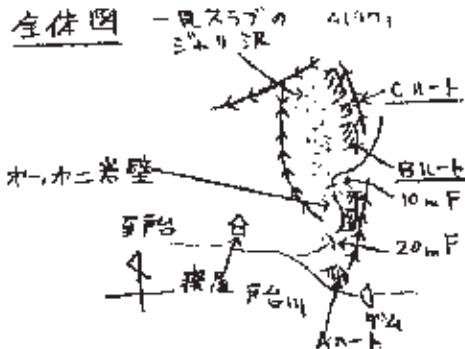
10月 24～26日

L : 師田信人(7) 岩村孝之(2) 保科実(2)

### ○戸台川幕岩試登 11月 1～2日

L : 川原修(3) 藤井卓也(2)

下図A, B, Cルートを登る。



### ○明星山南壁 11月 9～10日

L : 加藤喜章(4) 石渡健司(3) 藤井卓也(2)

細川和幸(1) 中根穂高(1) 澤田克彦(1)

・P6南壁右フェース(加藤、藤井)

・左岩稜(藤井、石渡、中根)

・左フェース(加藤、細川、澤田)

### ○八ヶ岳西面登攀 3月 8～11日

L : 加藤喜章(4) 茂呂晃(2) 関圭三(2)

田辺治(2) 田渕潔(2) 澤田克彦(1)

細川和幸(1)

行者小屋ベース

・阿弥陀岳北陵

・ジョウゴ沢本谷～横岳

・無名峰南稜(加藤、関、細川、澤田)

・石尊稜(茂呂、田辺、田淵)

### ○槍ヶ岳 北鎌尾根 3月 16～22日

L : 加藤喜章(4) 関圭三(2) 茂呂晃(2)

田辺治(1)

大町よりタクシーで入山～湯俣～北鎌尾根～槍ヶ岳～横尾尾根から上高地へ下山

### ○唐沢岳 東尾根～燕岳

3月 17～21日

L : 川原修(3) 藤井卓也(2) 岩村孝之(2)

澤田克彦(1)

葛温泉～東尾根～唐沢岳～合戦尾根

### ○八ヶ岳西面登攀

3月 28日～4月 1日

L : 川原修(3) 保科実(2)

石尊稜、赤岳主稜・南峰リッジ、阿弥陀岳北西稜・北稜、ショルダーリッジ左俣を登攀

### ○剣岳 源次郎尾根

3月 30日～4月 4日

L : 加藤喜章(4) 田渕潔(2) 藤井卓也(2)

黒部ダム～ハシゴ段乗越～源次郎尾根～剣岳～早月尾根から伊折へ下山

他にもユニークな個人山行が多くあったと記憶するが、手元に記録なし。(加藤)

以上

### 3 昭和56年度（1981年度）

チーフリーダー 川原 修

#### I. 年度総括

昭和56年度は、女子1名を含む16名の新人が入部し、総勢30名の大所帯となり、新人合宿、夏山合宿と概ね例年通りこなした結果、冬山合宿を終えた時点では6名に淘汰されていた。

合宿は、いずれも天候に恵まれ、十分な活動時間を確保できた。特に、冬山合宿は剣岳登頂の目標を完遂すべく実働10日、予備10日の日程で臨んだが、少ない積雪と好天に恵まれ、2年生以上全員が剣岳の頂を踏み、大町から富山まで10日間で一気に駆け抜けた。

個人山行では、岩登り、沢登り、長期縦走等幅広いジャンルにおいて、様々なバリエーションルートに挑戦し、山域も穂高・剣に留まらず、甲斐駒・北岳・明神岳・明星山から遙か日高山脈にまで及び、数多くの山行を経験した。

こうした意欲的なチャレンジの反面、ルートの難易度と部員の力量の判断が甘くなつたことなどから、小さな事故も発生した。幸い大事には至らなかつたが、事故防止に対するリーダー会の厳格な判断が課題となつた。

最後に、個人的な総括をさせてもらえば、リーダーとしての資質や登山の技量は先輩諸兄には遙かに及ばないものの、芸のレベルでは歴代の先輩方に負けない高度な水準に到達していたと確信している。純粋に登山という活動から得たもの以上に、ウケるネタの考案や芸の上達に精進した経験が、その後の人生に大いに役立つことは事実であり、これも山岳会の誇るべき伝統と言えるのではないだろうか。

#### II. 合宿

##### ○春山合宿【不帰・杓子岳】

4月29日～5月5日

CL : 川原修(4) SL : 岩村孝之(3)

石渡健司(4) 田辺治(3) 丸山岳人(3)

関圭三(3) 細川和幸(2) 澤田克彦(2)

OB : 師田信人 下田章 片山博彦

不帰Ⅲ峰A・B・C尾根、I峰、II峰正面壁中央リッジ、白馬鑓北・南稜、杓子岳B尾根等の雪稜登攀

別働隊 : L : 保科実(3) 藤井卓也(3)

鹿島槍北壁主稜～不帰BC合流

##### ○新人合宿【穂高岳】

6月1～8日

CL : 川原修(4) SL : 茂呂晃(3) 山本章(8)

石渡健司(4) 藤井卓也(3) 岩村孝之(3)

保科実(3) 田辺治(3) 丸山岳人(3)

田渕潔(3) 関圭三(3) 細川和幸(2)

澤田克彦(2) 古賀聰(1) 佐野克彦(1)

菅野謙二(1) 鷹取秀雄(1) 塚本博成(1)

永井隆文(1) 中島辰哉(1) 中村元太(1)

日高徹(1) 藤田正弘(1) 松本智子(1)

柳田雅之(1) 渡辺和文(1) 豊永真成(1)

水野秀彦(1)

島々～徳本峠～横尾BC～涸沢、奥又

白沢周辺で雪訓～北穂高岳登頂～槍ヶ

岳は天候不良で登頂断念～上高地下山

##### ○夏山岩登り定着合宿【剣岳】

8月21～30日

CL : 川原修(4) SL : 岩村孝之(3)

石渡健司(4) 藤井卓也(3) 田辺治(3)

丸山岳人(3) 関圭三(3) 茂呂晃(3)

澤田克彦(2) 古賀聰(1) 菅野謙二(1)

鷹取秀雄(1) 中村元太(1) 日高徹(1)

藤田正弘(1) 松本智子(1) 渡辺和文(1)

水野秀彦(1)

黒部ダム～梯子段乗越～熊ノ岩BC～剣岳東面登攀(八ツ峰下部縦走、六峰Aフェース魚津高ルート・中央大ルート、Bフェース京大ルート、Cフェース剣稜会ルート・RCCルート、Dフェース富山大ルート・ベルニナルート・久留米大ルート、チネ北条新村ルート・中央チムニールート・左岩稜ルート、剣尾根主稜、四峰長次郎谷側フェースルート、源次郎尾根II峰平蔵谷側A・B・Cフェースルート、I峰名古屋大ルート・成城大ルート)～剣岳本峰登頂～剣沢周辺ビバーク山行

#### ○プレ冬合宿【鹿島槍ヶ岳東尾根】

11月28～30日

CL : 川原修(4) 石渡健司(4) 岩村孝之(3)  
田辺治(3) 保科実(3) 丸山岳人(3)  
茂呂晃(3) 澤田克彦(2) 細川和幸(2)  
古賀聰(1) 鷹取秀雄(1) 中村元太(1)  
日高徹(1) 藤田正弘(1)  
大町～大谷原～二の沢の頭BC～東尾根  
(第二岩峰で撤退)

#### ○冬山合宿【雄山東尾根～剣岳】

12月20～29日

CL : 川原修(4) SL : 藤井卓也(3)  
石渡健司(4) 岩村孝之(3) 田辺治(3)  
丸山岳人(3) 茂呂晃(3) 澤田克彦(2)  
細川和幸(2) 古賀聰(1) 鷹取秀雄(1)  
中村元太(1) 日高徹(1) 藤田正弘(1)  
12月20日 雪松本駅～大町駅～黒部ダムTS  
21日 晴 TS～雄山東尾根P2068TS～  
P2405ルート工作

22日 晴 TS～フィックス40m+80m～  
雷電峰～雷電峰・雄山のコルTS～  
雄山デボ(晴天強風、軟雪なるもラッセル少)

23日 強風沈殿

24日 吹雪沈殿～上級生で雄山まで  
フィックス・デボ

25日 快晴強風 TS～雄山～富士ノ折立～フィックス70m+80m～別山乗越TS

26日 晴・弱風 上級生1次アタック隊 TS～(3hr)～剣岳山頂～フィックス80m～前剣～TS  
室堂下山路偵察隊

27日 濃霧のため沈殿

28日 晴 上級生2次アタック隊TS～(2.5hr)～剣岳山頂～フィックス回収～TS、室堂デボ隊

29日 曇 TS～室堂～弥陀ヶ原～(ラッセル膝下)～滝見台～美女平～立山駅～富山駅～松本

### III-①. 個人山行【夏山】

#### ○南アルプス縦走 7月16～22日

L : 岩村孝之(3) 藤井卓也(3) 菅野謙二(1)  
渡辺和文(1) 柳田雅之(1)  
三伏峠～塩見岳～小河内岳～荒川三山～赤石岳～百間洞～聖岳～上河内岳～茶臼岳～光岳～畠薙ダム～甲府

#### ○屏風岩東稜ルート 7月17日

L : 山本雅大(5) 細川和幸(2)

#### ○槍ヶ岳かけっこ山行 7月18日

澤田克彦(2)

ST～5hr～槍ヶ岳～4hr～ST

#### ○屏風岩雲稜ルート 7月20日

L : 保科実(3) 岩村孝之(3)

#### ○北アルプス縦走

7月25日～8月1日

L : 細川和幸(2) 田辺治(3) 古賀聰(1)  
中村元太(1) 日高徹(1) 松本智子(1)  
大谷原～赤岩尾根～鹿島槍ヶ岳～爺ヶ岳～針ノ木岳～鳥帽子岳～野口五郎岳～赤木沢遡行～三俣蓮華岳～水晶岳～赤牛岳～読壳新道～黒部ダム

## ○甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁登攀

7月26～29日

L：川原修(4) 藤井卓也(3)

7月26日 晴 仙水峠～赤石沢出合～大滝下

27日 晴 TS～大滝～ダイヤモンドフランケA赤蜘蛛ルート～Bバンド

28日 曇 TS～ダイヤモンドフランケB赤蜘蛛ルート～左ルンゼ～八丈岩小舎

29日 晴 TS～甲斐駒ヶ岳～北沢峠

## ○日高山脈南部縦走

7月28日～8月8日

L：丸山岳人(3) 茂呂晃(3) 澤田克彦(2)  
鷹取秀雄(1) 藤田正弘(1)

7月28日 曇 日高幌別～楽古山荘～メナシュンベツツ川遡行～楽古岳

29日 曇 TS～P1285と十勝岳のコル

30日 晴 TS～十勝岳～オムシャヌプリ～野塚岳直前コル

31日 晴 TS～野塚岳～トヨニ川ポン三の沢川野塚岳直登沢下降～ポン三の沢川右俣上二股

8月1日 晴 TS～ポン三の沢川右俣トヨニ岳直登沢遡行～トヨニ岳～トヨニ岳北峰直下コル

2日 霧 TS～ピリカヌプリ～P1529手前コル

3日 霧 TS～ソエマツ岳～中ノ川左俣ソエマツ岳直登沢下降～中ノ川右俣神威岳直登沢遡行～上二股

4日 雨 TS～神威岳直登沢遡行～ゴルジュ帯抜けた750m

5～6日 雨 沈殿

7日 曇 TS～神威岳～ニシュオマナイ川下降～二股手前

8日 晴 TS～ニシュオマナイ川下降～上野深

## ○屏風岩青白ハングルート 7月28日

L：保科実(3) 岩村孝之(3)

## ○屏風岩右岩壁JECCルート 8月3日

L：加藤喜章(5) 藤井卓也(3)

## ○奥又白月見ビバーク山行

8月4～6日

L：岩村孝之(3) 石渡健司(4) 細川和幸(2)

菅野謙二(1) 松本智子(1) 水野秀彦(1)

前穂北尾根四峰の登攀を目的として中又谷・奥又白を経由しC沢を横滑りで下降中、細川が転倒してガレ場に突っ込み、背中・腰等の打撲・擦過傷を負うも、前穂経由で自力下山

## ○明神岳2263峰南壁下部ルート

8月5日

L：加藤喜章(OB) 藤井卓也(3)

## ○屏風岩東壁ルンゼルート 8月6日

L：藤井卓也(3) 保科実(3)

## ○明神岳2263峰南壁下部ルート

8月6日

L：田辺治(3) 石渡健司(4)

## ○屏風岩東壁ルンゼルート 8月7日

L：加藤喜章(OB) 岩村孝之(3)

## ○屏風岩東壁大スラブルート

8月7～8日

L：田辺治(3) 石渡健司(4)

7日 ST～T4尾根～横断バンド～大スラブバンドでルートを誤り人工ルートを2P直上～小テラスでビバーク

8日 TS～懸垂下降で横断バンドまで下降～捜索部員と下山

## ○屏風岩東壁大スラブルート 8月10日

L：加藤喜章(5) 藤井卓也(3)

## ○屏風岩雲稜ルート 8月10日

L：田辺治(3) 関圭三(3)

## ○南中川谷 8月14～16日

L：関圭三(3) 田辺治(3) 菅野謙二(1)  
日高徹(1)

- 有明～中房温泉～南中川谷遡行～大天井岳～大天荘～中房温泉
- 明神岳2263峰東壁正面ルート  
8月14日  
L: 藤井卓也(3) 石渡健司(4)
- 前穂高岳北尾根正面壁四峰北条・新村ルート 8月14～15日  
L: 川原修(4) 山本章(8)  
同ルートの大・小ハングをフリー化
- 前穂高岳北尾根四峰松高ルート  
8月16～17日  
L: 丸山岳人(3) 澤田克彦(2) 中村元太(1)  
藤田正弘(1) 渡辺和文(1)  
ST～松高レンゼ～奥又白池～松高ルート～ST
- III-②. 個人山行【秋山】**
- 不動川下の廊下 9月6～7日  
L: 関圭三(3) 茂呂茂(3) 細川和幸(2)
- 中ア片桐松川・オンボロ沢遡行  
9月26～30日  
L: 丸山岳人(3) 澤田克彦(2) 藤田正弘(1)  
片桐～片桐松川遡行～念丈岳～与田切川左俣下降～オンボロ沢遡行～摺鉢窪小屋～空木岳～宝剣岳～駒ヶ根
- 中ア西横川・東横川 9月27日  
L: 田辺治(3) 加藤喜章(OB) 鷹取秀雄(1)  
中村元太(1)
- 不動川下の廊下  
9月28日～10月1日  
L: 関圭三(3) 田辺治(3) 細川和幸(2)  
9月29日 晴 糸魚川～粟倉～第二支流手前の台地  
30日 曇 TS～500m遡行40mトロ先からエスケープ  
10月1日 晴 TS(稜線コル)～粟倉
- 丸山南東壁塚田・小暮ルート  
10月3～5日  
L: 藤井卓也(3) 澤田克彦(2)
- 八ヶ岳縦走 10月4～6日  
L: 石渡健司(4) 松本智子(1)
- 屏風岩東壁大スラブルート  
10月7～8日  
L: 茂呂茂(3) 細川和幸(2)
- 北岳バットレス登攀 10月8～11日  
L: 田辺治(3) 澤田克彦(2) 細川和幸(2)  
中村元太(1) 鷹取秀雄(1) 藤田正弘(1)  
下部フランケ～四尾根主稜～Dガリー奥壁上部
- 明星山PVI南壁ダイレクトルート  
10月9～11日  
L: 岩村孝之(3) 保科実(3)
- 甲斐駒ヶ岳尾白川本谷・黄連谷右俣  
10月16～18日  
L: 丸山岳人(3) 山本雅大(5) 日高徹(1)  
10月16日 晴 長坂～竹宇駒ヶ岳神社～鞍掛沢出合  
17日 晴 TS～噴水の滝～尾白川本谷瀑  
流帶入口岩小舎～黄連谷出合～白稜の岩小舎  
18日 晴 TS～黄連谷右俣～甲斐駒ヶ岳～北沢峠
- 屏風岩右岩壁ダイレクトルート  
10月20～22日  
L: 藤井卓也(3) 岩村孝之(3)
- 中ア小黒川遡行 10月21日  
L: 関圭三(3) 日高徹(1)
- 鳳凰三山 10月24～25日  
L: 中村元太(1) 鷹取秀雄(1)
- 明星山岩登り大会パートI  
10月24～26日  
L: 岩村孝之(3) 保科実(3) 日高徹(1)  
古賀聰(1) 松本智子(1)  
左フェースルート、左岩稜ルートを交互

## 登攀

### ○明星山岩登り大会パートⅡ

10月31日～11月3日

L : 藤井卓也(3) 加藤喜章(OB)  
丸山岳人(3) 茂呂晃(3) 細川和幸(2)  
藤田正弘(1) 古賀聰(1)  
南壁直上ルート、南壁左岩稜ルート、  
ドームルンゼ状壁ルート、フリースピ  
リッジ下部～紫田ルート

### III-③. 個人山行【春山】

※報告書なく計画書から

### ○中ア奥三ノ沢 2月19～21日

L : 田辺治(3) 加藤喜章(OB) 細川和幸(2)  
関圭三(3)

### ○梅池スキー合宿 2月23～25日

L : 関圭三(3) 茂呂晃(3) 細川和幸(2)  
古賀聰(1) 鷹取秀雄(1) 中村元太(1)  
日高徹(1) 藤田正弘(1) 松本智子(1)  
井上久雄(1) 山本雅大(5) 石渡健司(4)

### ○日高山脈中部縦走 3月1～13日

L : 丸山岳人(3) 茂呂晃(3) 澤田克彦(2)  
鷹取秀雄(1)  
札内～コイカクシュサツナイ～ヤオロ  
マップ～ルベツネ～ペテガリ～静内

### ○後立山縦走 3月2～10日

L : 岩村孝之(3) 田渕潔(3)  
鎌尾根～鹿島槍ヶ岳～五竜岳～不帰岳  
～三国境～白馬岳～梅池

### ○八ヶ岳定着山行 3月5～10日

L : 田辺治(3) 関圭三(3) 細川和幸(2)  
中村元太(1) 古賀聰(1) 日高徹(1)  
藤田正弘(1) 小根田一郎  
加藤喜章(OB)  
阿弥陀岳北西稜、赤岳主稜、三叉峰ル  
ンゼ、ジョウゴ沢、南峰リッジ、石尊稜  
など

### ○前穂高岳東壁CBA～明神岳東稜

3月12～19日

L : 藤井卓也(3) 山本雅大(5)

### ○中央アルプス定着山行

3月14～17日

L : 保科実(3) 細川和幸(2)

千畳敷～宝剣岳～左フランケ・天狗尾根  
～黒川スキー滑降～宮田高原

### ○甲斐駒ヶ岳～鳳凰三山

3月22～27日

L : 澤田克彦(2) 石渡健司(4) 松本智子(1)

### ○剣岳八ツ峰～早月尾根

3月22日～4月2日

L : 藤井卓也(3) 田辺治(3) 細川和幸(2)

### ○妙高山・火打山・雨飾山スキー山行

3月29日～4月2日

L : 保科実(3) 茂呂茂(3) 石渡健司(4)  
松本智子(1) 藤田正弘(1)

### ○鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁北稜

4月5～10日

L : 藤井卓也(3) 澤田克彦(2) 細川和幸(2)  
加藤喜章(OB)

### ○戸隠山P1尾根 4月5～10日

L : 田辺治(3) 田渕潔(3)

### ○黒部スキー山行 4月5～15日

L : 保科実(3) 岩村孝之(3) 日高徹(1)  
中村元太(1)

以上

## 4 昭和57年度（1982年度）

チーフリーダー 藤井 卓也

### I. 年度総括 略

### II. 合宿・山行

4月5～7日 妙高山 山スキー

CL: 保科、岩村、藤田、日高、中村

#### ○GW合宿

4月27日～5月1日

猿倉～白馬尻～猿倉

CL: 茂呂、丸山、田渕、石渡、中村

#### ○新人合宿 北ア 横尾B C

5月30日～6月6日

涸沢周辺で雪訓、滝谷前穂高

CL: 藤井、鷹取、宮本、茂呂、

細川、中村、小久保、渡辺、丸山、

日高、斎藤、渡辺、長谷川、古賀、

東、須崎、井上、峯村、関、小幡

#### ○夏山縦走

7月10～30日 南ア

易老岳～光岳～赤石岳～塩見岳～

間の岳～北岳～甲斐駒ヶ岳～戸台口

CL: 鷹取、中村、宮本、長谷川、

斎藤、井上

7月15日 中ア 小黒川本谷

CL: 日高、井上、斎藤、小幡、中村

7月19～26日 北ア

白馬～鎧温泉～白馬岳～清水岳～

櫻平～仙人小屋～真砂後～大汝山

～五色ヶ原～平ノ渡～黒部ダム

CL: 古賀、日高、小久保、中村、

須崎

7月27～31日 北ア 幕岩

CL: 藤井、岩村

畠山、山嶺ルート

8月3～5日 北ア 北鎌尾根

CL: 岩村、小久保、須崎

8月3～7日 北ア 北俣谷

CL: 丸山、藤井、日高、堂本

8月7～10日 北ア 繼続登攀

屏風岩1レンゼ～滝谷P2フランケ～

ドーム北壁～医科歯科大

CL: 細川、古賀

8月7～8日 中ア 中御所新谷

CL: 関、藤田、井上、須崎

8月8日 北ア 屏風岩 東稜

CL: 田辺、中村

8月11～13日 北ア 繼続登攀

豊岩～ジャンダルム～滝谷

CL: 茂呂、田渕、中村、井上

8月18～19日 北ア 前穂高

松高レンゼ、北条新村ルート

CL: 藤井、井上

9月26日 中ア 小黒川

CL: 山本、岩村、山崎

9月27～28日 明星山 正面壁

CL: 岩村、古賀

9月30日～10月2日 北ア 幕岩

S字、大凹角ルート

CL: 藤井、鷹取

10月6～9日 八ヶ岳

横岳～硫黄岳～天狗岳

CL: 日高

10月7～10日 北ア 奥鐘山西壁

紫岳会・広島ルート

CL: 藤井、岩村

10月10～11日 南ア 釜無川

CL: 丸山、茂呂、井上

10月21～23日 南ア 大武川～摩利支天

CL: 茂呂、丸山、澤田、宮本

10月22～25日 小川山

CL: 岩村、吉岡、古賀、長谷川、

石渡、藤井、井上、須崎

---

フェニックス、スラブ状岩壁、ガマクラック、大ジェードルルート

10月23～25日 北ア 潟沢岩峰群III峰

クロアールルート

CL : 藤井、長谷川、吉岡、井上

10月31日 明星山 P6南壁ダイレクト

CL : 藤井、古賀

10月23～25日 南ア 摩利支天

右フェース～名古屋山の会ルート

CL : 田渕、中村

10月31日～11月3日 明星山

P6左岸稜ルート

CL : 古賀、須崎、長谷川、宮本、

藤田

## 5 昭和58年度（1983年度）

チーフリーダー 細川 和幸

### I. 年度総括

'83年のSAC現役部員の構成は、4年2名、3年4名、2年1名、1年 新人合宿時13名 ⇒ 冬山合宿時7名という体制でした。

4年と2年は少人数でしたが、1年は冬山合宿に7名も挑戦したことに加え、翌年の「現役だけでヒマラヤへ！」を合言葉に「フルーティッド・ピーク」へ挑戦する準備の年になり、後のSACを支えることになる人材育成の年になったと振り返る。

個人山行の岩登り等は、後の世代のレベルからするとクラシックなルートを中心だったと思いますが、より困難で未知の世界へ挑戦したいという探求心だけは旺盛で、'83年の山行の中で今でも皆の心の中に残っているのは、冬山合宿だったと確信しています。

冬山合宿はいつの年でも印象に残る山行になるものではありますが、その中でも'83年の「折立～薬師岳～三俣蓮華岳～槍ヶ岳～沢渡」は冬山の全ての面を見せてくれ、体験させてもらえた山行となりました。

全行程13日間の内、最初の6日間は林道も含め、連日、胸までの新雪ラッセルを強いられ、計画の倍以上の日数・食料と体力を使い果たしたアプローチとなり、9日目まではリーダーとしていつ撤退を決断しなければならないか頭から離れない日が続いていたことを今も鮮明に憶えています。

最終的に標高を上げた太郎小屋以降はアイゼンの世界となったためスピードアップでき、当初計画通り、全ルートを完全踏破することが出来ました。

'80年の毛勝～剣岳の時にも日本海側

の冬山の強烈な天候の厳しさを体験させてもらいましたが、その年は残念ながら撤退を余儀なくされました。

しかし、'83年の薬師～槍ヶ岳は日本海側の冬山の厳しさ+莊厳さに加え、困難な状況の中で冬の北アルプス最深部ルートを完全踏破出来た達成感を皆で分かち合えた素晴らしい山行となりました。

上級生の我々にとっても非常に感慨深い冬山だったことから、その時の1年生7名にとっては本当に辛く、厳しく、不安で強烈な冬山体験だったことだと思っています。

皆さん、本当にお疲れ様でした。

### II. 合宿

#### ○「新人合宿（穂高・槍）」

5月29日～6月4日

CL：細川和幸(4・'82年ガネッシュⅢ遠征・'84年フルーティッド・ピークCL)

SL：澤田克彦(4) 中村元太(3)

鷹取秀雄(3) 藤田正弘(3・'84年フルーティッド・ピークSL) 古賀聰(3) 井上久雄(2) 森光(1・'84年フルーティッド・ピーク)

角谷道弘(1・'84年フルーティッド・ピーク)

水谷寿宏(1) 岡本浩(1) 加藤清里(1)

下田哲也(1) 大前英(1) 竹本真(1)

磯田明彦(1) 杉浦広幸(1) 宮原誠(1)

森内賀久(1) 登野慎一郎(1)

関圭三(5・'82年ガネッシュⅢ遠征)

岩村孝之(5) 丸山岳人(5) 田淵潔(5)

#### 【主要行程】

島々～徳本峠～横尾BC～涸沢(Ⅲ・Ⅳのコル)

雪上訓練・北穂・奥穂・奥又白池・槍ヶ岳、他

### 【登攀ルート】

- \*前穂四峰正面壁・北条新村ルート・  
松高ルート
- \*滝谷一尾根ノーマルルート、滝谷三  
尾根

### ○「夏山合宿(剣岳)」 8月20~28日

CL：細川和幸(4・'82年ガネッシュⅢ・'84年フルーティッド・ピークCL)  
SL：澤田克彦(4) 鷹取秀雄(3) 藤田正弘(3・'84年フルーティッド・ピークSL)  
古賀聰(3) 森光(1・'84年フルーティッド・ピーク) 角谷道弘(1・'84年フルーティッド・ピーク)  
水谷寿宏(1) 岡本浩(1) 加藤清里(1)  
大前英(1) 竹本真(1)

### 【主要行程】

黒部ダム～内蔵助平～熊の岩BC～剣岳八ツ峰・チンネ周辺岩登り、他

### 【登攀ルート】

- \*マイナーピーク東面スラブ
- \*八ツ峰六峰Aフェース魚津高ルート・  
中大ルート
- \*八ツ峰六峰Bフェース京大ルート
- \*八ツ峰六峰CフェースRCC・剣稜会  
ルート
- \*八ツ峰六峰Dフェース富山大・久留米  
大ルート
- \*チンネ中央チムニーgチムニーc d ク  
ラック
- \*チンネ魚津高ルート・ジャンダルム3本  
クラック
- \*チンネ左下カンテ・左方カンテ・左稜  
線

### ○「プレ冬合宿(遠見)」 12月3~4日

CL：鷹取秀雄(3) SL：中村元太(3)  
藤田正弘(3・'84年フルーティッド・ピー  
ク) 古賀聰(3) 井上久雄(2) 森光(1・'84  
年フルーティッド・ピーク) 角谷道弘

(1・'84年フルーティッド・ピーク) 水谷寿  
宏(1) 岡本浩(1) 加藤清里(1)  
大前英(1) 下田哲也(1)

### 【行程】

遠見尾根～五竜山荘～遠見尾根

### ○「冬山合宿(大多和峠～折立～薬師岳 ～黒部五郎岳～三俣蓮華岳～槍ヶ岳 ～沢渡)」 12月18～31日

CL：細川和幸(4・'82年ガネッシュⅢ遠  
征・'84年フルーティッド・ピークCL)  
SL：澤田克彦(4) 中村元太(3) 鷹取秀  
雄(3) 藤田正弘(3・'84年フルーティッド・  
ピークSL) 古賀聰(3) 井上久雄(2) 森光  
(1・'84年フルーティッド・ピーク) 角谷  
道弘(1・'84年フルーティッド・ピーク)  
水谷寿宏(1) 岡本浩(1) 加藤清里(1)  
大前英(1) 下田哲也(1)

### 【行程】

- 12月18日 松本～富山駅(駿泊)
- 19日 雪 富山駅～西漆山駅～大多和～  
TS(林道ラッセル)
- 20日 雪 TS～大多和峠(新雪深く、トッ  
プ3人は空身で林道をラッセル)
- 21日 晴 大多和峠～瀬戸谷～宝来島～  
TS(新雪深く、林道を2組に分かれダ  
ブルボッカ)
- 22日 曇 TS～有峰ダム～青年の家～  
1,200m地点TS(新雪深く、林道を2  
組に分かれダブルボッカ)
- 23日 雪・吹雪 TS～折立隧道～ヒュッ  
テ折立～1,920m地点TS(新雪深く、2  
組に分かれダブルボッカ。途中で林  
道終了し、登山道へ入るとややペース  
アップ)
- 24日 晴・曇・雪 TS～太郎小屋  
(2組に分かれダブルボッカ。標高が  
高くなるにつれペースアップ)

25日 吹雪 沈殿(視界も5～10mと悪く、

気温も-15度以下)

26日 曇・晴 太郎小屋～薬師岳～太郎小屋(気温が低く強風だったが、ラッセルから解放)

27日 晴 太郎小屋～中俣乗越～黒部五郎岳～黒部五郎小屋(稜線上は雪が飛ばされ、途中よりアイゼンに。この日、仮に中俣乗越まで行けなかつた場合は、引き返す事を想定していたが、順調にルートを伸ばせた)

28日 雪 黒部五郎小屋～三俣蓮華岳～双六南峰～双六小屋(強風でガスも濃かつたが、ルートを伸ばす)

29日 曙 双六小屋～樅沢岳～千丈沢乗越～槍の肩小屋(西鎌尾根もフィックスすることなく進み、順調にルートを伸ばす)

30日 晴・曇 槍の肩小屋～槍ヶ岳山頂～横尾尾根～P8手前TS(フィックス40m×3本で槍の穂先へ。横尾尾根の下りでも40m×3本のフィックス使用)

31日 晴 TS～横尾～上高地～釜トンネル～沢渡～松本(下りで4か所、合計6本のフィックスを張り、横尾に。最後は大晦日の晩を松本で過ごすことだけを考え、夜21時まで歩き、全員無事、沢渡に到着)

### III. 個人山行

#### 《春》

##### ○鹿島槍北壁主稜 4月8～10日

CL: 細川和幸(4) SL: 鷹取秀雄(3)

4月8日 晴 大町～大谷原～鹿島槍北壁主稜末端～雪洞(泊)

9日 晴 雪洞～北壁主稜～鹿島槍ヶ岳～冷池冬期小屋

10日 曙 冷池冬期小屋～爺ヶ岳～爺ヶ

岳東尾根～大町

##### ○不帰GW合宿 4月29日～5月5日

CL: 細川和幸(4) SL: 澤田克彦(4)  
中村元太(3) 鷹取秀雄(3) 藤田正弘(3)  
田辺治(5) 藤井卓也(5) 保科実(5)

#### 【主要行程】

白馬～二俣～湯の入沢出合(TS)～不帰各ルート

#### 【雪稜ルート】

\*不帰Ⅲ峰A尾根・B尾根・C尾根、  
\*不帰Ⅱ峰センターリッジ  
\*杓子B尾根・C尾根、  
\*白馬槍ヶ岳北陵

##### ○屏風岩、東壁縁ルート 6月18～19日

CL: 細川和幸(4) 鷹取秀雄(3)  
上高地～横尾～東壁縁ルート～徳澤～上高地

#### 《夏》

##### ○北ア・北部縦走 7月17～23日

CL: 古賀聰(3) 森光(1) 水谷寿宏(1)  
加藤清里(1) 杉浦広幸(1)  
七倉～船窪小屋～針ノ木岳～赤沢岳～爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳～唐松山荘～八方尾根

##### ○ダイヤモンドコース縦走

7月17～25日

CL: 藤田正弘(3) 角谷道弘(1) 下田哲也(1) 竹本真(1)

扇沢～大沢小屋～平の渡～刈安峠～五色ヶ原～越中沢岳～薬師岳～雲の平山荘～三俣山荘～槍の肩～横尾～上高地

##### ○明神五峰中央リンネ 7月27日 雨

CL: 細川和幸(4) 田淵潔(5)  
上高地～中央ルンゼ～中央リンネ登攀(岩脆い)～明神V峰山頂～上高地

##### ○屏風岩、雲稜ルート

7月28～29日 晴

CL: 細川和幸(4) 藤田正弘(3)

上高地～横尾～屏風・雲稜ルート登攀

～奥又白池

### ○奥又ミニ合宿 7月29日～8月1日

CL : 細川和幸(4) 藤田正弘(3)

古賀聰(3) 森光(1) 水谷寿宏(1)

加藤清里(1) 大前英(1) 竹本真(1)

保科実(5) 田淵潔(5)

#### 【行程】

上高地～奥又白池(BC)～IV峰岩登り

～上高地

#### 【登攀ルート】

\*IV峰正面壁、北条・新村ルート

\*IV峰正面壁、甲南ルート

\*IV峰東南面、明大ルート

\*IV峰東南面、L字洞穴

### ○屏風岩、東壁ルンゼ 8月3日 晴

CL : 細川和幸(4) 鷹取秀雄(3)

上高地～横尾～屏風・東壁ルンゼ登攀

～上高地

### ○屏風岩、ルンゼ状スラブ (JECC)

#### 8月5日 晴

CL : 岩村孝明(5) 細川和幸(4)

上高地～横尾～屏風・ルンゼ状スラブ

登攀(JECC)～横尾～上高地

### ○甲斐駒ダイヤモンドフランケA・B～

#### 赤石沢奥壁 8月8～10日

CL : 細川和幸(4) 鷹取秀雄(3)

北沢峠～仙水峠～岩小屋～ダイヤモンドフランケ

A赤蜘蛛登攀～B赤蜘蛛登攀～赤石沢奥壁左ルンゼ第2・3バンド登攀～北沢峠

### ○霞沢岳、千丈沢 8月9日 晴

CL : 古賀聰(3) 森光(1)

上高地～中千丈沢～霞沢岳～上高地

### ○甲斐駒、赤石沢奥壁左ルンゼ

#### 8月11～13日 晴

CL : 澤田克彦(4) 藤田正弘(3)

北沢峠～仙水峠～甲斐駒～岩小屋～

赤石沢奥壁左ルンゼ登攀～中央稜～

北沢峠

### ○丸山東壁、塚田小暮ルート

#### 9月2～4日

CL : 細川和幸(4) 鷹取秀雄(3)

黒部ダム～丸山東壁・塚田小暮ルート  
登攀～黒部ダム

#### 《秋》

### ○屏風岩、1ルンゼ

#### 9月22～23日 曇/晴

CL : 鷹取秀雄(3) 角谷道弘(1)

上高地～横尾～屏風・1ルンゼ～徳澤  
～上高地

### ○唐沢岳、幕岩 畦山・山稜ルート

#### 9月29日～10月2日 晴

CL : 細川和幸(4) 鷹取秀雄(3)

七倉～幕岩 畦山・山稜ルート登攀～七倉

### ○奥鐘山、西壁・中央ルンゼ

#### 10月6～8日 晴/雨

CL : 細川和幸(4) 鷹取秀雄(3)

樺平～奥鐘山、西壁・中央ルンゼ登攀  
～樺平

### ○大荒井沢

#### 10月8～9日 曇/雨

CL : 田淵潔(5) 藤井卓也(5)

水谷寿宏(1)

伊那～煙の滝～小荒井沢～大荒井沢～  
曇の滝～空木避難小屋

### ○後立山縦走

#### 10月8～11日 晴/雨

CL : 保科実(5) 大前英(1) 岡本浩(1)

扇沢～種池～冷池～五竜岳～唐松～黒菱～八方

### ○丸山東壁、ニルンゼ、正面壁・緑ルート

#### 10月22～23日 晴/曇/雨

CL : 細川和幸(4) 井上久雄(2)

黒部ダム～丸山東壁、二ルンゼ、正面  
壁・縁ルート登攀～黒部ダム

### ○屏風岩、1ルンゼ

10月22～23日 晴/曇

CL: 保科実(5) 森光(1)

上高地～横尾～屏風・1ルンゼ登攀～  
徳澤～上高地

### ○明星山、登攀大会

10月30日～11月4日 晴/曇

CL: 細川和幸(4) 中村元太(3)

鷹取秀雄(3) 森光(1) 角谷道弘(1)

水谷寿宏(1) 加藤清里(1) 下田哲也(1)

大前英(1)

#### 【登攀ルート】

\*左フェースルート

\*左岸稜ルート

\*P5末端壁・愛のスカイライൻルート

\*P5ルンゼ状壁ルート

\*P6正面壁ルート

\*直上ルート

\*清水RCCルート

### 《冬》

### ○宝剣岳・中央稜ルート、天狗岩・学芸

大ルート 11月21～23日 晴/曇

CL: 細川和幸(4) 藤田正弘(3)

しらび平～宝剣岳・中央稜ルート登攀、  
天狗岩・学芸大ルート登攀～しらび平

### ○明星山、左岸稜ルート

12月6～7日 晴

CL: 細川和幸(4) 藤田正弘(3)

\*左岸稜ルート登攀

### ○屏風岩、東稜

12月9～11日 曇/雪

CL: 細川和幸(4) 藤田正弘(3)

沢渡～上高地～横尾～屏風岩、東稜(降  
雪断念)～横尾～沢渡

### ○甲斐駒氷爆継続

1月12～16日 晴/雪

CL: 細川和幸(4) 藤田正弘(3)

白須～黒戸尾根～七丈瀑～坊主の滝  
～チムニ一滝～F5～中央稜～駒ヶ岳  
神社～竹宇

以上

## 6 昭和59年度（1984年度）

チーフリーダー 北村（藤田）正弘

### I. 年度総括 略

#### II. 合宿・山行

##### ○プレ冬山合宿

###### 12月 8～10日 北ア

遠見尾根～白岳～五竜岳～八方尾根～うさぎ平～白馬

CL：藤田、鷹取、古賀、大前、角谷、森、水谷、岡、川端、三野

12月8日 テレキャビン～1750m地点～2000m地点～大遠見TS

9日 TS～白岳～五竜山頂～八方尾根TS

10日 TS～八方池～うさぎ平～白馬

##### ○冬合宿

###### 12月22日～1月3日 北ア

親不知～犬ヶ岳～三保尾根

CL：鷹取、SL：古賀、中村、藤田、大前、角谷、水谷、森、岡、川端、三野

12月23日 松本市16:42～糸魚川市  
19:50 ステーションビバーグ

風波6:40～入道山11:30～送電線  
500m付近TS14:40

24日 TS7:40～710m ジャンクション  
12:35～坂田峠TS15:20

25日 TS7:35～シキクリ10:10～1171m  
13:40～白鳥山手前1205m 地点  
TS14:25

26日 TS7:40～白鳥山9:30～1241m  
TS13:40地吹雪

27日 TS～菊石山9:45～1350m～1384  
m北側にTS

28日 TS～1450m 地点9:30～梅海山  
荘10:45 雪

29日 沈殿

30日 沈殿

31日 梅海山荘7:35～菊石山13:05～  
三俣尾根1014m下TS14:30

1月1日 TS～三保倉971.9m 11:30～852  
m 13:00～870m 地点 13:20～560m  
TS15:20

2日 TS7:30～河原9:15～広い河原  
11:40～金山谷との出合 13:30 TS

3日 TS7:25～清水倉8:00～大沢8:  
45～大沢バス停9:30～糸魚川9:40

##### ○信州大学山岳会 フルーティッド・ ピーク(6501m) 登山隊

###### 4月 7日～5月 15日

隊長 細川、藤田、森、角谷、渡辺  
カトマンズ準備 4月7～15日

キャラバン 4月17日～23日

4日16日 カトマンズ～ポカラ

17日 10名のポーターで出発。フィデ  
～ダンプス

18日 ダンプス～ランドルン

19日 ランドル～チャムロン

20日 細川、藤田が西アンナプルナ氷  
河偵察、他はヒマラヤンロッジまで

21日 細川、藤田ルート工作。本隊マ  
チャ BCまで

22日 アンナBC～荷上げ、再びマチャ  
BCにルート工作は南稜に変更

23日 BC入り

登山活動 4月24日～5月11日

4月23日 BC完成

26日 C1設営

30日 C2設営

5月1日 ロッシュピーク登頂(5750m)

5日 C3設営

8日 6250mまでルート工作

10日 登頂断念下山

11日 BC着

## 7 昭和60年度（1985年度）

チーフリーダー 鷹取 秀雄

### I. 年度総括 略

#### II. 合宿・山行

4月14～17日 尾瀬

山スキー 三野

4月27～29日 北ア 屏風岩 東稜

CL: 水谷、角谷

#### ○GW合宿 4月30日～5月5日

北ア 不帰BC

CL: 藤田、古賀、三野、川端、  
水谷、角谷、森

I～III峰、杓子A、B、D尾根

#### ○新人合宿 5月26日～6月2日

北ア 横尾BC 潤沢、槍ヶ岳

CL: 藤田、水谷、三野、中村タ、小野、  
松田、森、川端、飛田、江口、稻葉、  
角谷、古賀、藤田、瀬川、中村ユ、  
豊田

#### ○無積雪期

6月30～7月2日 北ア

扇沢～鳴沢岳～針ノ木～扇沢

CL: 川端、三野、飛田、安田、松田

#### ○縦走合宿

7月16～23日 北ア 黒部湖～上高地

CL: 三野、豊田、松田、中村タ、  
中村ユ

7月16～26日 北ア 五竜岳～上高地

CL: 川端、瀬川、飛田、安田

7月29～31日 北ア 屏風岩 大スラブ

CL: 古賀、下田

7月31日～8月1日 北ア 屏風岩雲稜、  
奥又～滝谷継続

SL: 角谷、三野

7月31日～8月2日 北ア 屏風岩(東  
稜)～奥又

CL: 森、下田

8月1～6日 北ア 縦走立山～上高地

CL: 花谷、川井

8月2～6日 北ア 奥又定着

CL: 川端、瀬川、豊田、小野、  
飛田、中村ユ、中村タ、松田

8月6～7日 北ア 滝谷

CL: 角谷、三野(悪天で下山)

8月7～8日 八ヶ岳

CL: 大前、江口、豊田

8月9日 北ア 屏風岩 雲稜

CL: 古賀、川端

8月11～13日 北ア 北鎌尾根

CL: 角谷、川端、江口、瀬川

8月14～16日 北ア 錫杖岳

CL: 藤井、岩村

鳥帽子前衛フェース他

8月19日 北ア 屏風岩

JECCレンゼ状スラブルート

CL: 岩村、角谷

8月21日 北ア 屏風岩1レンゼ

CL: 岩村、川端、塚本(部外者)

#### ○夏合宿

8月24日～9月1日 北ア 剣 熊の岩

源次郎尾根、八ツ峰、チンネ、ビバー  
ク山行他

CL: 角谷、森、藤田、下田、川端、  
三野、小野、瀬川、飛田、豊田、  
中村タ、松田、安田

(三野滑落事故)

9月6～7日 小川山

CL: 下田、大前

9月27日 中ア 中御所谷

CL: 古賀、飛田

9月22～24日 南ア 北岳バットレス

CL: 下田、中村ユ

9月22～25日 南ア 北岳バットレス～

甲斐駒  
CL:森、小野、安田  
9月28～29日 北ア 燕岳～常念岳～蝶ヶ岳縦走  
CL:豊田、松田  
9月29～30日 北ア 潤沢岳  
中村タ  
10月1日 戸隠山  
CL:水谷  
10月2～4日 秋山郷 布岩  
CL:中嶋、角谷  
10月3～14日 韓国 仁寿峰  
CL:下田、角谷、三野、川端、古賀  
10月10～11日 南ア 凰凰三山縦走  
CL:飛田、中村タ  
10月27日 みずなみ屏風山  
CL:中嶋、角谷、小林  
11月1～2日 八ヶ岳全山縦走  
CL:安田、飛田  
11月7～10日 明星山  
CL:下田、角谷、水谷、川端、三野、小野、瀬川、飛田、豊田、中村タ、安田

1月6～9日 伊豆 城ヶ崎海岸  
ベビー(5,6)、シスター(5,7)、マギー(5,10)、マイクラック(5,10)  
CL:下田、加藤、小野、飛田、安田  
1月8～9日 中ア 幸ノ川&悪沢  
アイスクライミング CL:角谷、森  
1月26日 中ア 木曽駒ヶ岳の滝  
アイスクライミング CL:角谷、森

### ○プレ冬山合宿 11月29日～12月2日

北ア 猿倉～小日向のコル～奥双子のコル～猿倉  
CL:角谷、古賀、森、下田、加藤、小谷、川端、三野、豊田、瀬川、安田、飛田、松田、小野、中村タ、中村ユ

### ○冬山合宿 12月21～29日

北ア 扇沢～雄山～室堂～美女平  
CL:角谷、安田、飛田、瀬川、中村タ、小野、豊田、中村ユ、川端、三野、加藤、水谷、森、古賀、下田

12月21日 先発隊 扇沢～1450mデボ

後発隊 同行動

22日 先発隊 2150mTS Wボッカ 後発隊 デボ回収し2150mにTS

## 8 昭和61年度（1986年度）

チーフリーダー 角谷 道弘

### I. 年度総括

信大山岳会 リーダーのことば

1986年GW合宿計画書より

拝啓 いよいよ春である。山岳会も心機一転、新しいメンバーでこの1年間できるだけ活発な活動を行いたいと思う。4月の総会でも言ったように、今年のキャッチフレーズは「やるときはやる山岳会」である。とにかく実行あるのみ。それと昨年度は、事故を2回も起こしてしまい、運が悪かつたら死亡事故になっていたかもしれない。この事をメンバー全員、肝に銘じておく事。

さて1年間の合宿の中で一番楽しいGW合宿を、今年も不帰周辺で行う事にした。新2年生は、基本的なテクニックの復習と山での判断を習得してもらいたい。1年生気分を一新して各自の体力、知力、テクニックを全て出し切ってほしい。

上級生は、各自がリーダーになったつもりで自主的にメンバーを引っ張っていって欲しい。今年の山岳会を盛り上げるため、充実した合宿にしようじゃないか。

### 1986年冬山合宿計画書より

今年もいよいよ、皆楽しみ?にしている冬山合宿がやってきた。杓子、白馬より日本海までという、3000mのアイゼンの世界から日本海側の重いベタ雪のラッセルまで変化に富んだ楽しくかつシビアなロングルートに行くことになった。一昨年、去年と2年続けて計画通りに実行できず、エスケープしているので今年こそは是非とも全員で日本海までたどり着こうじゃないか。

冬山は気象条件も厳しく何をするにも他人任せになりがちである。各自、自分を甘やかすことなく行動し、また他のメンバーを気遣う助け合いの気持ちを忘れな

いでほしい。それではチームワークで合宿を成功させ、糸魚川で祝杯を上げる日を楽しみにして行くぞ!

アゲイン あん肝

1986年のメンバーは4年生5人、3年生1人、2年生7人、1年生はそれなりに入部したが、冬合宿まで残ったのは2人であった。3年が1人というのがネックであったが、他はそれなりのメンバーが揃っており、2年生が多く残ってくれ山岳会の活動は順調であった。人数がいたため大学山岳部らしい合宿が1年間を通してできたい1年間であった。

印象に残っているのはGWと冬合宿である。GW不帰合宿では、不帰Ⅲ峰A～C尾根、不帰Ⅱ峰等を登り唐松沢などシリセードで一気に下ったりした。今なら怖くてできないであろう。雪崩の知識などほとんど無く無謀だった。大きな事故が無かつたのは今考えれば運が良かった。

冬合宿は猿倉から入山し、杓子、白馬、雪倉、朝日を越え悪天で長梅山で4日間沈殿し、アヤメ平、黒岩平を越えることができず、4日間かかるて梅池に引き返した。15日間の努力が報われず、パーティの力量を考えさせられた合宿で残念ではあったが、大学山岳部としては胸を張れる山行であった。

### II. 合宿

#### ○GW合宿 5月1～5日

CL：角谷(4) 森(4) 下田(4) 加藤清(4)  
水谷(4) 三野(3) 瀬川(2) 小野(2) 飛田(2)  
中村幸(2) 豊田(2) 安田(2) 中村貴(2)  
内田(1) 加藤靖(1) 作道(1) 下平(1)  
二股～小倉池BC

\*登攀記録：不帰Ⅲ峰A～C尾根、不  
帰Ⅱ峰北方ルンゼ・甲南ルンゼ、杓子東  
壁A～D尾根

#### ○新人合宿 5月25日～6月1日

CL：角谷(4) 森(4) 下田(4) 加藤清(4)  
水谷(4) 三野(3) 瀬川(2) 小野(2) 飛田(2)  
中村幸(2) 豊田(2) 安田(2) 中村貴(2)  
内田(1) 加藤靖(1) 作道(1) 吉岡(1) 下平(1)  
島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺で  
雪上訓練の後前穂ⅢIVのコル・VII VIIIの  
コル・奥穂高岳・北尾根～前穂、槍沢  
経由槍ヶ岳往復、上高地下山

\*登攀記録：前穂IV峰の壁(北条新  
村・松高)、屏風(東稜・雲稜)、槍南西  
フェース左

#### ○夏合宿 8月22日～9月1日

CL：角谷(4) 森(4) 下田(4) 加藤清(4)  
三野(3) 瀬川(2) 小野(2) 飛田(2) 中村幸(2)  
豊田(2) 安田(2) 中村貴(2) 内田(1)  
加藤靖(1) 作道(1) 吉岡(1) 下平(1)  
黒部ダム～内蔵之助平～熊の岩BC、  
VI峰登攀、チンネ登攀、源治郎尾根、  
中谷ルート登攀

\*登攀記録：VI峰 Aフェース中大  
ルート・魚津高ルート Bフェース京大  
Cルート CフェースRCCルート・剣  
稜会ルート Dフェース久留米大ルー  
ト・富山大ルート、  
チンネ 北条新村ルート・左稜線ルー  
ト・魚津高ルート・中央チムニールート  
源治郎尾根I峰 平蔵谷側下部中谷  
ルート

源治郎尾根II峰 平蔵谷側ABフェー  
ス・Bフェースカンテルート Cフェース  
本峰南壁A II稜

#### ○プレ冬合宿 11月29日～12月1日

八方尾根～白馬岳

CL：角谷(4) 森(4) 下田(4) 加藤清(4)

水谷(4) 三野(3) 瀬川(2) 小野(2) 飛田(2)  
中村幸(2) 豊田(2) 安田(2) 中村貴(2)  
内田(1) 加藤靖(1) 作道(1) 下平(1)  
11月29日 雪 ゴンドラ乗り場～天狗原TS  
29日 晴 TS～小蓮華岳～白馬岳～TS  
12月1日 晴 TS～下山

#### ○冬山合宿 12月21日～1月5日

白馬北方稜線  
CL：角谷(4) 森(4) 下田(4) 加藤清(4)  
水谷(4) 三野(3) 瀬川(2) 小野(2) 飛田(2)  
中村幸(2) 豊田(2) 安田(2) 中村貴(2)  
内田(1) 加藤靖(1) 作道(1) 下平(1)  
12月21日 晴 猿倉～小日向のコルTS  
22日 雪 TS～樺平TS  
23日 晴 TS～奥双子のコルTS  
24日 雪 TS～ジャンピングピーク(デボ  
進める)～TS

25日 雪 TS～杓子岳～白馬岳～白馬岳  
山荘  
26日 雪 沈殿  
27日 曇 白馬岳山荘～三国境～雪倉岳  
～ツバメ平TS  
28日 雪 TS～朝日岳～吹上のコルTS  
29日 雪 沈殿(吹雪)  
30日 雪 沈殿(吹雪)  
31日 雪 沈殿(吹雪)  
1月1日 雪 沈殿(吹雪)  
2日 曙 TS～朝日岳～燕平TS  
3日 曙 TS～雪倉避難小屋(吹雪)  
4日 曙 雪倉避難小屋～戻る(吹雪)  
5日 曙 雪倉避難小屋～三国境～白馬  
乗鞍～下山

#### ○八ヶ岳合宿 2月23～28日

CL：角谷(4) 森(4) 下田(4) 加藤清(4)  
水谷(4) 三野(3) 瀬川(2) 小野(2) 飛田(2)  
中村幸(2) 豊田(2) 安田(2) 中村貴(2)  
内田(1) 加藤靖(1) 作道(1) 下平(1)  
美濃戸口～行者小屋BC

\* 登攀記録：赤岳南峰リッジ中央稜、阿弥陀北稜、ジョウゴ沢本谷

### III. 個人山行

#### ○小川山

7月21～24日 8月4～12日

角谷(4) 森(4) 下田(4) 加藤清(4) 三野(3)  
小野(2) 飛田(2) 安田(2)  
小川山レイバック、クレイジージャム、  
ジャーマンスープレックス、カサブラン  
カ、ジャックと豆の木、J E C C、ノー<sup>マ</sup>ルバリエーション・・・各ルート

#### ○北海道大雪山系クワウンナイ川

7月29～31日

CL : 濱川(2) 豊田(2) 中村幸(2) 作道(1)  
内田(1)

#### ○前穂高岳IV峰 8月3～7日

CL : 水谷(4) 三野(3) 中村貴(2) 豊田(2)  
小野(2) 下平(1) 内田(1)  
登攀：北条新村ルート、甲南ルート、松  
高ルート、L字洞穴ルート、中大ルー  
ト、明大ルート

#### ○笛吹川東沢ヌク沢左股右沢

8月6～7日

CL : 飛田(2) 安田(2)

#### ○錫杖岳 8月9～12日

CL : 角谷(4) 三野(3) 中村貴(2) 中村幸(2)  
豊田(2)  
登攀：3レンゼ、烏帽子岩前衛フェース  
チムニールート、烏帽子岩西肩ルート、  
烏帽子岩東肩ルート

#### ○屏風岩 8月13～14日

CL : 角谷(4) 三野(3) 小野(2) 中村幸(2)  
登攀：J E C C レンゼ状スラブルート、  
東稜ルート

#### ○小槍 8月13～15日

CL : 濱川(2) 中村貴(2) 下平(1) 作道(1)  
登攀：南面フェース中央ルート、左ルート

#### ○東壁ルンゼ 8月15～16日

CL : 下田(4) 森(4)

#### ○唐沢岳幕岩大凹角ルート

8月18～20日

CL : 角谷(4) 森(4)

#### ○日高縦走 7月17～25日

CL : 中村幸(2) 濱川(2) 豊田(2) 作道(1)

内田(1)

ペテガリ山荘～ペラガリ岳～ヤオロ  
マップ岳～カムイエクウチカウシ山

#### ○越後三山～尾瀬縦走

7月18～24日

CL : 安田(2) 中村貴(2) 小野(2) 加藤靖(1)  
下平(1) 一之瀬(1)

#### ○小川山 9月13～15日

水谷(4) 豊田(2) 濱川(2) 作道(1)

9月18～21日 三野(3) 中村幸(2) 豊田(2)

9月21日～10月5日 森(4) 下田(4) 小野(2)  
飛田(2) 濱川(2) 下平(1) 豊田(2) 中村貴(2)

#### ○白馬岳 9月25～26日

CL : 作道(1) 下平(1) 一之瀬(1)

#### ○小豆島 9月26～28日

CL : 三野(3) 中村幸(2)

#### ○中ア西横川 9月29日

CL : 加藤清(4) 飛田(2)

#### ○前穂IV峰正面松高ルート

10月1～3日

CL : 豊田(2) 作道(1)

#### ○穂高～槍継続 10月2～6日

CL : 水谷(4) 濱川(2)

登攀：屏風東壁大スラブ～前穂IV峰L  
字洞穴～滝谷クラック尾根～槍ヶ岳西稜

#### ○甲斐駒Aフランケ赤蜘蛛ルート

10月9～11日

CL : 角谷(4) 森(4)

#### ○北岳バットレス 10月9～12日

CL : 三野(3) 豊田(2) 小野(2) 中村幸(2)  
下平(1) 作道(1)

- 
- 登攀：十字クラック～第4尾根主稜～中央稜ノーマルルート～Cガリー奥壁、Cガリ大滝～第4尾根～中央稜
- 屏風1ルンゼ～滝谷（クラック尾根・ドーム中央稜） 10月3～6日  
CL：中村幸(2) 豊田(2)
- 屏風東壁ルンゼ 10月17日  
CL：角谷(4) 三野(3)
- 乾徳山～黒金山 10月25～26日  
CL：内田(1) 作道(1) 下平(1)
- 明星山 10月25～26日  
11月1～3日 11月7～9日  
CL：角谷(4) 下田(4) 水谷(4) 豊田(2)  
安田(2) 中村幸(2) 中村貴(2) 内田(1)  
下平(1)  
登攀：マニフェストもどき、左稜線、正面壁
- 八ヶ岳大同心大滝 1月24～25日  
CL：角谷(4) 加藤(4) 安田(2) 下平(1)
- 奥志賀～竜王山スキーツアー  
日にち不明  
CL：中村貴(2) 豊田(2) 下平(1)
- 中央アルプス縦走 3月3～6日  
CL：瀬川(2) 中村幸(2) 中村貴(2) 作道(1)  
桂小場～大タル小屋～木曽駒ヶ岳～ロープウェイ下山
- 関東ゲレンデ巡り 3月4～7日  
CL：下田(4)（鍋田吉郎）  
エリア：広沢寺（神奈川）、日和田（埼玉）、四方津（山梨）の各ルート
- 南アルプス縦走 3月6～12日  
CL：豊田(2) 水谷(4) 飛田(2) 内田(1)  
鹿塩～塩見岳～野呂川乗越～仙丈岳～北沢峠～戸台
- 剣 早月尾根 3月19～23日  
CL：水谷(4) 中村幸(2)  
伊折～馬場島～早月尾根～剣岳（往路）

○鹿島槍ヶ岳 天狗尾根

3月18～21日

CL：飛田(2) 下田(4) 中村幸(2) 豊田(2)  
鹿島部落～天狗尾根～鹿島槍ヶ岳～赤岩尾根

○梅池温泉スキーツアー

4月4～5日

CL：中村貴(2) 中村幸(2)  
梅池高原～天狗原～蓮華温泉

## 9 昭和62年度（1987年度）

チーフリーダー 三野 和哉

### I. 年度総括

新入部員が24名と多い年であり、総勢40名で新人合宿を行ったが、ホエーブスが足らず、プロパンガスボンベとコンロを担ぎ上げた事を覚えている。横尾、上高地間を隊列を組んで歩く姿は壯觀であった。また、3年生の人数も多く、年間を通じて活発な山行を実施することができた。そして、冬山合宿では天候に恵まれたこともあり、4年ぶりに計画通りに踏破することができ、感慨もひとしおであった。

### II. 合宿

#### ○新人合宿 5月31日～6月7日

CL : 三野和哉(4) SL : 小野恭嗣(3)  
SL : 濑川光久(3) 飛田泰彦(3)  
豊田浩太郎(3) 中村貴士(3) 中村幸典(3)  
安田至宏(3) 内田健一(2) 作道淳司(2)  
下平啓太(2) 朝見英吉(1) 安藤靖(1)  
飯島浩(1) 伊藤宏明(1) 浦山大介(1)  
岡部博幸(1) 桶結卓司(1) 小田原卓哉(1)  
加藤良成(1) 九後玲(1) 北沢秀朗(1)  
小久保陽介(1) 小林元(1) 桜井亘(1)  
杉山元康(1) 服部崇(1) 平井幸子(1)  
平林英典(1) 平間大作(1) 牧野賢一(1)  
松岡正晃(1) 松下修也(1) 三矢浩貴(1)  
古賀聰(7) 角谷道弘(5) 森光(5)  
加藤清里(5) 下田哲也(5)  
穂高岳 島々～徳本峠～横尾BC、  
涸沢周辺で雪上訓練、槍沢経由槍ヶ  
岳往復、上高地下山  
・小槍左ルート  
CL : 安田至宏(3) 下平啓太(2)  
・屏風岩東稜  
CL : 角谷道弘(5) 内田健一(2)

#### ○ゴールデンウィーク合宿

5月1～5日

CL : 三野和哉(4) 小野恭嗣(3)  
瀬川光久(3) 飛田泰彦(3) 豊田浩太郎(3)  
中村貴士(3) 中村幸典(3) 安田至宏(3)  
内田健一(2) 作道淳司(2) 下平啓太(2)  
下田哲也(5) 水谷寿宏(5) 澤田克彦(OB)  
杓子岳、不帰 白馬～二股～湯の入  
沢出会BC 甲南ルンゼ、杓子岳A、  
B、C、D、尾根、不帰II峰北峰ルン  
ゼ、X状ルンゼ、正面壁中央ルンゼ、  
III峰B、C尾根 白馬下山

#### ○夏山縦走合宿 7月18～27日

CL : 下平啓太(2) 北沢秀朗(1)  
桜井亘(1) 松下修也(1)  
五竜岳～上高地

#### ○夏山縦走合宿 7月18～27日

CL : 作道淳司(2) 杉山元康(1)  
服部崇(1) 平井幸子(1) 牧野賢一(1)  
塩見岳～光岳 伊那～三伏小屋～  
塩見岳～荒川小屋～百間洞～聖岳  
～茶臼小屋～光岳

#### ○夏山縦走合宿 7月23～29日

CL : 中村貴士(3) 安藤靖(1)  
伊藤宏明(1) 浦山大介(1) 松岡正晃(1)  
薬師岳～槍ヶ岳 黒部ダム～五色ヶ  
原～薬師岳～黒部五郎岳～三俣蓮  
華岳～槍ヶ岳～サマーテント

#### ○夏山縦走合宿 7月23～29日

CL : 内田健一(2) 小田原卓哉(1)  
九後玲(1) 小久保陽介(1) 小林元(1)  
茶臼岳～仙丈岳 畑薙ダム～茶臼岳  
～上河内岳～兔岳～赤石岳～三伏峠  
～塩見岳～仙丈岳～北沢峠

## ○夏山岩登り定着合宿

8月21～29日

CL : 三野和哉(4) 小野恭嗣(3)  
飛田泰彦(3) 豊田浩太郎(3) 中村貴士(3)  
中村幸典(3) 安田至宏(3) 内田健一(2)  
作道淳司(2) 下平啓太(2) 安藤靖(1)  
伊藤宏明(1) 浦山大介(1) 小田原卓哉(1)  
九後玲(1) 小久保陽介(1) 小林元(1)  
桜井亘(1) 牧野賢一(1) 松岡正晃(1)  
松下修也(1)  
剣岳 黒部ダム～梯子段乗越～熊  
の岩BC 八ツ峰、源次郎尾根縦走、  
Aフェース魚津高、中大、Bフェー  
ス京大、Cフェース剣稜会、RCC、  
Dフェース久留米大、チンネ中央チム  
ニー、gチムニーc dクラック、北条  
新村、魚津高、aバンドbクラック、左  
稜線、左方カンテ、I峰平蔵谷側名  
古屋大

## ○プレ冬合宿

記録なし

## ○冬山合宿 12月20～30日

CL : 三野和哉(4) SL : 安田至宏(3)  
瀬川光久(3) 飛田泰彦(3)  
豊田浩太郎(3) 中村貴士(3)  
中村幸典(3) 内田健一(2) 下平啓太(2)  
浦山大介(1) 小田原卓哉(1)  
小久保陽介(1) 小林元(1) 服部崇(1)  
牧野賢一(1) 松下修也(1)  
高瀬ダム～野口五郎岳～双六岳～  
槍ヶ岳～大天井岳～中房温泉  
20日 雪 七倉～高瀬ダムTS 1700m  
及び1900m地点にデボを進める  
21日 雪 TS～2,200地点TS デボ回  
収及び2080m地点にデボを進める  
22日 晴 TS～鳥帽子小屋にデボ～  
三ッ岳のコルTS デボ回収  
23日 晴 TS～黒部五郎小屋(泊)

デボ回収及び真砂岳の先のコル  
までデボを進める

24日 曇、風強し 黒部五郎小屋～  
フィックス(東沢乗越～水晶小屋)  
～黒部五郎小屋(泊)  
デボ回収及び東沢乗越までデボ  
を進める  
25日 晴 小屋～ワリモ岳手前TS  
ワリモ岳前後に先行フィックス、デ  
ボ回収  
26日 晴 TS～双六小屋(泊)  
27日 晴 小屋～槍ヶ岳山荘  
頂上まで先行フィックス  
28日 快晴 山荘～槍ヶ岳～山荘～  
西岳手前のコルTS フィックス隊  
先行  
西岳まで先行フィックス  
29日 晴 TS～大天井ヒュッテ(泊)  
赤岩岳まで先行フィックス  
30日 雪 ヒュッテ～大天井岳～中房  
温泉

## III. 個人山行

### ○滝谷～屏風岩 7月20～24日

CL : 安田至宏(3) 豊田浩太郎(3)  
ドーム西壁月稜会ルート、ドーム北  
壁右ルート、屏風岩は雨のため中止

### ○甲斐駒ヶ岳 赤石沢

7月27～30日

CL : 角谷道弘(5) 三野和哉(4)  
豊田浩太郎(3)  
奥壁中央稜、同志会左ルート、赤  
蜘蛛ルート

### ○サマーテント～前穂高岳 7月27日

CL : 安田至宏(3) 平野和(早大3年)

### ○サマーテント～槍ヶ岳

7月28～29日

CL : 安田至宏(3) 平野和(早大3年)

- 
- 小槍 8月14～15日  
CL：安田至宏(3) 下平啓太(2)  
牧野賢一(1) 松岡正晃(1)  
小久保陽介(1)  
左ルート、中央ルート
- 丹沢 8月11～15日  
CL：飛田泰彦(3) 作道淳司(2)  
内田健一(2)  
水無川本谷、セドノ川右俣、ザンザ  
洞本谷、小川谷廊下
- 穂高岳 屏風岩 8月3～4日  
CL：中村貴士(3) 飛田泰彦(3)  
雲稜ルート
- 前穂高岳 奥又白 8月5～10日  
CL：中村貴士(3) 小野恭嗣(3)  
九後玲(1) 小田原卓哉(1) 浦山大介(1)  
小久保陽介(1) 小林元(1) 松下修也(1)  
L字洞穴ルート、4峰東南面中大  
ルート、明大ルート、松高ルート、北  
条新村ルート
- 前穂高岳 奥又白 8月10～14日  
豊田浩太郎(3) 三野和哉(4) 安田至宏(3)  
伊藤宏明(1) 桜井亘(1) 松岡正晃(1)  
水谷寿宏(5)  
L字洞穴ルート、4峰東南面中大  
ルート、明大ルート、松高ルート、北  
条新村ルート
- 穂高岳 屏風岩 8月9～12日  
CL：小野恭嗣(3) 下平啓太(2)  
右岩壁ルンゼ状スラブルート、雲稜  
ルート
- 比良山 奥の深谷 8月17日  
CL：中村幸典(3) 松下修也(1) 九後玲(1)
- 久住連山 8月12～14日  
CL：小田原卓哉(1) 他2名(部外)
- 穂高岳 屏風岩 9月11～15日  
CL：瀬川光久(3) 中村幸典(3)  
Midnight Express、東壁ルンゼルート
- 甲斐駒ヶ岳 黄蓮谷右俣  
9月29～31日  
CL：飛田泰彦(3) 内田健一(2)  
桜井亘(1)
- 明星山 P6南壁  
9月26～28日  
CL：豊田浩太郎(3) 九後玲(1)  
松下修也(1)  
右岩稜ルート、左フェースルート
- 常念岳～燕岳 9月29日～10月1日  
CL：松岡正晃(1) 服部崇(1)  
伊藤宏明(1) 小久保陽介(1)
- 唐沢岳 幕岩 10月1～2日  
CL：豊田浩太郎(3) 下平啓太(2)  
大凹角ルート
- 明星山 P6南壁 10月9～11日  
CL：安田至宏(3) 豊田浩太郎(3)  
飛田泰彦(3) 小林元(1) 下平啓太(2)  
松岡正晃(1)  
フリースピリッツ、左岩稜ルート、左  
フェースルート
- 白馬岳～梅池 10月10～11日  
CL：九後玲(1) 松下修也(1)
- 甲斐駒ヶ岳 赤石沢  
11月1～3日  
CL：角谷道弘(5) 下田哲也(5)  
Aフランケ赤蜘蛛～クロスライン～  
スーパークラックルート
- 八ヶ岳合宿 2月25～29日  
CL：豊田浩太郎(3) SL：飛田泰彦(3)  
角谷道弘(5) 清沢(部外者) 三野和哉(4)  
瀬川光久(3) 中村貴士(3) 中村幸典(3)  
安田至宏(3) 内田健一(2) 浦山大介(1)  
小田原卓哉(1) 九後玲(1) 小久保陽介(1)  
小林元(1) 服部崇(1) 平林英典(1)  
牧野賢一(1) 松下修也(1)  
八ヶ岳 美濃戸～行者小屋BC、赤  
岳～硫黄縦走(雪上訓練) 地蔵尾根

～硫黄岳縦走(ビバーク訓練)  
赤岳主稜、赤岳ショルダー右リッジ、  
赤岳南峰リッジ  
阿弥陀岳左稜、阿弥陀岳北稜  
横岳西壁石尊稜  
南沢大滝、南沢中滝、ジョウゴ沢

26日 雪 沈殿  
27日 雪 TS～伝蔵小屋～馬場島

#### ○鳳凰三山～甲斐駒ヶ岳

3月2～5日

CL：飛田泰彦(3) 安田至宏(3)  
豊田浩太郎(3) 九後玲(1) 平林英典(1)  
松下修也(1) 小田原卓哉(1) 浦山大介(1)  
牧野賢一(1)  
夜叉神峠～鳳凰三山(薬師岳、観音  
岳、地蔵ヶ岳)～仙水峠～甲斐駒ヶ  
岳～仙水峠～北沢峠

#### ○北岳～仙丈岳 3月10～15日

豊田浩太郎(3) 三野和哉(4) 内田健一(2)  
小久保陽介(1)  
夜叉神峠～池山尾根～北岳～間ノ  
岳～三峰岳～仙丈岳～北沢峠

#### ○宝剣岳～檜尾岳 3月13～17日

CL：飛田泰彦(3) 中村貴士(3)  
松下修也(1) 服部崇(1) 牧野賢一(1)  
小田原卓哉(1) 浦山大介(1)  
桂小場～木曾駒ヶ岳～宝剣岳～檜  
尾岳～空木岳～檜尾根

### IV. 特記すべき山行

#### ○剣岳 小窓尾根 3月21～27日

CL：三野和哉(4) 豊田浩太郎(3)  
中村貴士(3) 安田至宏(3)  
21日 雨 伊折～発電所～馬場島TS  
22日 雨 沈殿  
23日 雪 TS～2,120mSH  
24日 晴 SH～ニードル～ドーム～  
2,620mTS  
25日 晴 TS～小窓王基部～三ノ窓  
～池ノ谷右俣乗越～剣岳TS

## 10 昭和63年度（1988年度）

チーフリーダー 豊田浩太郎

### I. 年度総括

方針は、

- ・コミュニケーションを取ることによりチームワーク、信頼関係を築く。
  - ・合宿は、基本的技術の習得、体力養成を目的とし、個人山行を重視する。
  - ・各自目標を持ち、山行計画を立てる。
- とし、部員が埋もれないよう合宿を始め各行事等に参加を促すように心がけました。

個人山行を重視し、サブ合宿の個人山行への移行等を考えていきましたが、技術向上の為にやはり合宿が不可欠であり、例年通りの山行形態となりました。

### II. 合宿

#### ○GW合宿 4月29日～5月4日

CL：豊田浩太郎(4) SL：飛田泰彦(4)  
下田哲也(6) 水谷寿宏(6) 瀬川光久(4)  
中村貴士(4) 中村幸典(4) 安田至宏(4)  
内田健一(3) 下平啓太(3) 浦山大介(2)  
小田原卓哉(2) 小久保陽介(2) 小林元(2)  
服部崇(2) 牧野賢一(2)  
不帰東面 二股～小倉池BC  
唐松沢～鎧温泉縦走、双子尾根～杓子岳  
鎧温泉～杓子岳・白馬岳縦走、不帰～杓子岳縦走  
不帰Ⅲ峰A尾根、B尾根、C尾根  
杓子岳A尾根、D尾根

#### ○新人合宿 5月29日～6月5日

CL：豊田浩太郎(4) SL：飛田泰彦(4)  
下田哲也(6) 中村貴士(4) 中村幸典(4)  
内田健一(3) 下平啓太(3) 浦山大介(2)  
小田原卓哉(2) 小久保陽介(2) 小林元(2)  
服部崇(2) 牧野賢一(2) 松下修也(2)  
植垣健太郎(1) 遠藤文恭(1) 小野孝博(1)

加藤正幸(1) 河西貴史(1) 兼岩勲(1)  
武裕郎(1) 長谷川聰貞(1) 原孝之(1)  
山田明義(1) 松本欣一郎(1)  
穂高岳 島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺で雪上訓練、前穂北尾根四峰、六峰、槍沢、上高地下山  
登攀：屏風岩東稜(2パーティ)

#### ○夏山合宿 8月21～30日

CL：豊田浩太郎(4) SL：中村貴士(4)  
内田健一(3) 下平啓太(3) 浦山大介(2)  
小田原卓哉(2) 服部崇(2) 牧野賢一(2)  
松下修也(2) 植垣健太郎(1) 小野孝博(1)  
加藤正幸(1) 河西貴史(1) 兼岩勲(1)  
長谷川聰貞(1) 山田明義(1)  
剣岳 黒部ダム～内蔵助平～ハシゴ谷  
乗越～真砂沢出合～長次郎谷～熊の岩BC  
本峰～剣沢小屋～長次郎出合  
真砂沢出合～近藤岩～仙人峠～池の平山～小窓～三ノ窓～八ツ峰  
八ツ峰六峰：Aフェース魚津高、中大Bフェース京大、Cフェース剣稜会、右方Dフェース富山大、久留米大  
チンネ：中央チムニー左フェース魚津高、左稜線、北条・新村、中央チムニー、左方カンテ、aバンドーbクラック、gチムニーc dクラック

#### ○プレ冬合宿 11月27～29日

CL：下平啓太(3) SL：豊田浩太郎(4)  
内田健一(3) 浦山大介(2) 小久保陽介(2)  
小林元(2) 服部崇(2) 牧野賢一(2)  
松下修也(2) 植垣健太郎(1) 小野孝博(1)  
加藤正幸(1) 河西貴史(1) 兼岩勲(1)  
長谷川聰貞(1)  
白馬杓子双子尾根  
猿倉～小日向のコル～権平～往路下山

### ○冬山合宿 12月24日～1月4日

CL : 豊田浩太郎(4) SL : 飛田泰彦(4)

中村貴士(4) 内田健一(3) 下平啓太(3)

浦山大介(2) 小久保陽介(2) 牧野賢一(2)

植垣健太郎(1) 小野孝博(1) 加藤正幸(1)

河西貴史(1) 兼岩勲(1) 長谷川聰貞(1)

山田明義(1)

笠ヶ岳～槍ヶ岳縦走

12月24日 曇 松本＝中尾高原口～槍見

TS

25日 曇時々雪 TS～1730mコルTS

26日 晴後雪 TS～2060mTS

27日 晴後雪 TS～クリヤの頭～クリヤ  
のコルTS

28日 雪 デボ及びフィックス工作

29日 晴 TS～雷鳥岩～笠ヶ岳山荘TS

30日 晴 TS～弓折岳～双六小屋TS

31日 晴後雪 TS～西鎌尾根～肩の小屋  
TS

1月1日 猛吹雪 沈殿

2日 晴 TS～槍ヶ岳～中岳～天狗のコ  
ル～横尾尾根P6付近TS

3日 晴後雪 TS～3ノガリ一下降～横  
尾～上高地TS

4日 雪後晴 TS～沢渡

### III. 個人山行

#### ○前穂高岳 北尾根 4月1～5日

CL : 豊田浩太郎(4) 三野和哉(5)

徳沢～慶応尾根～北尾根～前穂高岳  
～3・4コル～涸沢

#### ○南ア塩見岳 4月22～24日

CL : 飛田泰彦(4) 服部崇(2) 九後玲(2)

塩川～三伏峠(デボ回収)～塩見岳～  
三伏峠

#### ○海谷山群 昼闇山 4月23～24日

CL : 中村貴士(4) 中村幸典(4) 小久保  
陽介(2) 小田原卓哉(2)

焼山温泉～焼山台地～焼山温泉(ス  
キー山行)

#### ○五竜岳東面 GⅡ稜

5月3～4日

CL : 三野和哉(5) 中村貴士(4)

地蔵平～西遠見～地蔵平(積雪直後の  
為中止)

#### ○奥穂岳沢 コブ尾根

5月20～22日

CL : 内田健一(3) 松下修也(2)

上高地～岳沢～天狗沢(雪上訓練)～  
上高地

#### ○奥秩父縦走 5月19～21日

CL : 服部崇(2)

奥多摩駅～七ツ石山～鷹ノ巣山～雲取  
山～鷹ノ巣避難小屋～奥多摩駅

#### ○北ア有明山曲沢 7月17～18日

CL : 内田健一(3) 他

中房温泉～有明山曲沢

#### ○中ア 小黒川 6月19日

CL : 下平啓太(3) 浦山大介(2)

加藤正幸(1) 原孝之(1) 松本欣一郎(1)  
三野和哉(5)

桂小場～小黒川～将棊頭山～大樽小  
屋～桂小場

#### ○北穂高岳 滝谷 7月11～13日

CL : 豊田浩太郎(4) 小林元(2)

牧野賢一(2)

上高地～涸沢～南稜テラス

・第二尾根P2フランケ早大ルート  
・第一尾根ダイレクトルート

#### ○奥穂高岳 コブ尾根 7月19～21日

CL : 豊田浩太郎(4) 下平啓太(3)

植垣健太郎(1) 松本欣一郎(1) 原孝之(1)  
上高地(サマ天)～岳沢～天狗のコル～

奥穂高岳～前穂高岳～岳沢(登攀中止)

#### ○北日高縦走 7月13～20日

CL : 松下修也(2) 内田健一(3) 服部崇(2)

小田原卓哉(2) 兼岩勲(1) 山田明義(1)  
幌尻山荘～幌尻岳～神威岳～エサオ  
マントッタベツ岳～カムイエクウチカ  
ウシ山～コイカクシュツナイ岳～札内  
ヒュッテ

○南ア縦走 7月16～26日

CL : 牧野賢一(2) 小野孝博(1)  
河西貴史(1) 加藤正幸(1) 長谷川聰貞(1)  
畠薙第一ダム～茶臼岳～聖岳～赤石岳  
～塩見岳～間ノ岳～北岳～野呂川越～  
仙丈岳～北沢峠

○北ア縦走 7月27日～8月4日

CL : 小林元(2) SL : 小久保陽介(2)  
遠藤文恭(1) 原孝之(1) 植垣健太郎(1)  
黒部ダム～五色ヶ原～薬師岳～雲ノ平  
～三俣蓮華岳～槍ヶ岳～奥穂高岳～  
岳沢

○知床 知西別川他 7月25～28日

CL : 服部崇(2) SL : 松下修也(2)  
内田健一(3) 兼岩勲(1) 山田明義(1)  
知西別川遡行～羅臼湖、イダシュベツ  
橋～イダシュベツ川遡行～硫黄山～カ  
ムイワッカの滝

○奥又白池定着 前穂四峰正面壁他

8月7～10日  
CL : 内田健一(3) 豊田浩太郎(4)  
松下修也(2) 服部崇(2) 小田原卓哉(2)  
兼岩勲(1) 加藤正幸(1) 山田明義(1)  
小野孝之(1) 長谷川聰貞(1)  
上高地～徳沢～松高尾根～奥又白池  
BC

四峰東南面：L字洞穴、中大、明大  
四峰正面壁：松高、北条・新村、

○唐沢岳 幕岩 8月7～11日

CL : 中村貴士(4) 下平啓太(3)  
牧野賢一(2) 豊田浩太郎(4)  
七倉～高瀬ダム～大町の宿  
正面壁：大凹角、左岩壁S字状、

中央カンテ：畠山、正面壁：広島(大洞  
穴のみ)

○前穂高岳 屏風岩東壁

8月12～14日  
CL : 中村貴士(4) 小久保陽介(2)  
サマ天～横尾  
T4～東壁ルンゼ～涸沢～サマ天

○甲斐駒ヶ岳 赤石沢A・B フランケ・  
奥壁 8月13～17日

CL : 豊田浩太郎(4) 下平啓太(3)  
北沢峠～黒戸尾根八合目岩小屋  
A・Bフランケ：赤蜘蛛、奥壁：左ルン  
ゼ  
Aフランケ：同志会右フェース

○前穂高岳 屏風岩東壁

9月9～11日  
CL : 下平啓太(3) 小林元(2)  
横尾～T4～東壁蒼稜～T4

○奥秩父 西沢渓谷 9月17～18日

CL : 内田健一(3) 小久保陽介(2)  
小林元(2) 河西貴史(1)  
西沢渓谷より沢登り

○奥又白池定着 9月22～25日

CL : 服部崇(2) 小久保陽介(2) 小林元  
(2) 牧野賢一(2)  
上高地～奥又白池BC

○谷川連峰縦走 9月29日～10月2日

CL : 山田明義(1) 兼岩勲(1) 河西貴史  
(1) 加藤正幸(1)  
土合駅～天神平～熊穴沢～谷川岳～一  
ノ倉岳～清水峠～ジャンクションピーク  
～巻機山

○明星P6南壁 9月30日～10月3日

CL : 中村貴士(4) 豊田浩太郎(4)  
下平啓太(3) 小林元(2) 松下修也(2)  
小野孝博(1) 長谷川聰貞(1)  
左岩稜、左フェース、正面壁、直上、  
フリースピリッツ

## ○丹沢縦走 10月2日～

CL : 内田健一(3) 浦山大介(2) 服部崇(2)  
丹沢縦走

## ○明星P 6南壁 10月23日

CL : 下平啓太(3) 牧野賢一(2)  
植垣健太郎(1) 加藤正幸(1) 兼岩勲(1)  
左フェース他

## ○八ヶ岳赤岳 10月29～30日

CL : 松下修也(2) 小久保陽介(2)  
牧野賢一(2)  
美濃戸口～赤岳鉱泉～行者小屋～地  
蔵尾根～赤岳～文三郎～美濃戸口

## ○北八ヶ岳縦走 11月4～5日

CL : 長谷川聰貞(1) 植垣健太郎(1)  
渋の湯～黒百合平～天狗岳～麦草峠

## ○八ヶ岳 1月20～22日

CL : 豊田浩太郎(4) SL : 内田健一(3)  
牧野賢一(2) 長谷川聰貞(1) 河西貴史(1)  
1月20日 美濃戸～北沢300m程上った  
地点TS  
21日 TS～行者小屋BC～赤岳～BC  
22日 豊田、河西、長谷川  
阿弥陀岳北陵  
内田、牧野 横岳石尊陵

## ○爺ヶ岳東尾根 1月30日～2月2日

CL : 三野和哉(5) 野口耕一(部外)  
菊池正和(部外)  
鹿島部落～爺ヶ岳東尾根～鹿島槍ヶ  
岳～赤岩尾根～高千穂平～鹿島部落

## ○八ヶ岳 阿弥陀岳南稜

2月15～16日  
CL : 豊田浩太郎(4) 河西貴史(1)  
2月15日 学林バス停～広河原沢～立場  
岳～無名峰  
16日 悪天により下山

## ○八ヶ岳 ミニ合宿

2月24～28日  
CL : 下平啓太(3) 三野和哉(5)

飛田泰彦(4) 牧野賢一(2) 松下修也(2)

植垣健太郎(1) 長谷川聰貞(1)  
加藤正幸(1) 小野孝博(1) 兼岩勲(1)  
行者小屋BCから雪訓及び赤岳南峰  
リッジ中央稜、南峰リッジ左稜登攀

## ○南アルプス縦走 (塩見～北岳)

3月1～3日

CL : 安田至宏(4) SL : 小野恭(4)  
浦山大介(2) 山田 河西貴史(1)  
鹿塩～塩川小屋～三伏峠～本谷山～惡  
天で下山

## ○爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳

3月3～5日  
CL : 飛田泰彦(4) SL : 牧野賢一(2)  
加藤正幸(1)  
鹿島部落～爺ヶ岳～冷池山荘～鹿島  
槍南峰～冷池山荘～鹿島槍ガーデン

## ○蝶ヶ岳～常念岳～燕岳

3月4～8日  
CL : 下平啓太(3) SL : 服部崇(2)  
松下修也(2) 植垣健太郎(1)  
長谷川聰貞(1) 小野孝博(1)  
沢渡～徳沢園～蝶ヶ岳(冬季小屋)～  
常念岳(冬季小屋)～燕岳(冬季小屋)  
～中房温泉

## ○剣岳早月尾根 3月13～15日

CL : 安田至宏(4) SL : 飛田泰彦(4)  
服部崇(2) 松下修也(2)  
剣青少年研修センター～伝藏小屋～  
2700m付近～惡天で下山

## ○鹿島槍ヶ岳東尾根 3月13～15日

CL : 下平啓太(3) SL : 浦山大介(2)  
牧野賢一(2) 山田(1) 三野和哉(5)  
大谷原分岐～一の沢付近P2030mTS  
～第1岩峰直下～下山  
雪質悪く表層雪崩でザックを流された。

---

○火打山スキーツアー

3月29～30日

CL：中村幸典(4) SL：山田(1)

宇野(伊那ツ4)

妙高国際スキー場リフト終点～高谷池  
ヒュッテ(泊)～火打山～妙高国際ス  
キー場

○鹿島槍ヶ岳天狗尾根

3月30日～4月1日

CL：下平啓太(3) SL：服部崇(2)

小野孝博(1) 河西貴史(1)

大谷原分岐～天狗の鼻(雪洞)～鹿島  
槍北峰～冷池小屋～赤岩尾根～大谷  
原

○フリークライミング

小川山、城ヶ崎、瑞浪屏風山、松代町  
尼巖山、志賀高原サンバレー幕岩、他

## 11 平成元年度（1989年度）

チーフリーダー 下平 啓太

### I. 年度総括

平成元年度も9人の新人を迎えて、活発に活動した一年であった。合宿も含め以下に記す40回の山行を精力的に行つた。数年前からフリークライミングが流行し、度々小川山や城ヶ崎にも出かけており、活気のある年度であったと思う。

一方で、新人合宿の屏風岩登攀中に墜落事故を起こしてしまった。また、代替わりした平成2年3月に中央アルプスの桧尾尾根上部で発生した雪崩により2名の仲間を失うことになった取り返しようのない事故が発生した。亡くなった服部崇君、小滝顕也君の冥福をお祈り申し上げます。

### II. 合宿

#### ○GW合宿 4月30日～5月4日

CL : 下平啓太(4) SL : ○内田健一(4)  
豊田浩太郎(5) 中村貴士(5) 服部崇(3)  
浦山大介(3) 小久保陽介(3) 牧野賢一(3)  
松下修也(3) 植垣健太郎(2) 長谷川聰貞(2)  
加藤正幸(2) 河西貴史(2) 小野孝博(2)  
兼岩勲(2) 山田(2)  
八方尾根丸山ケルンBC設営  
雪訓、ビバーク訓練  
雪稜登攀ルート  
不帰I峰尾根、III峰A・B・C尾根

#### ○新人合宿 5月28日～6月4日

CL : 下平啓太(4) SL : ○内田健一(4)  
中村貴士(5) 服部崇(3) 浦山大介(3)  
小久保陽介(3) 牧野賢一(3) 松下修也(3)  
植垣健太郎(2) 長谷川聰貞(2) 加藤正幸(2)  
河西貴史(2) 小野孝博(2) 兼岩勲(2)  
橋口徹(1) 田尻英秋(1) 山内(1) 北住(1)  
永井薰子(1) 小滝顕也(1) 駒村宗利(1)  
吉井勇夫(1) 藤江泰一(1)

穂高岳 島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺で雪上訓練、松高尾根～奥穂、奥又白池、屏風岩東壁雲稜・東稜ルート  
・5月29日 屏風岩東壁雲稜ルート登攀  
中1ピッチ目でリードしていた浦山君  
がA0に使ったボルトが抜けて6m墜落。  
腰骨を圧迫骨折する事故を起こす。(詳細は平成元年6月21日発行「屏風岩雲稜ルート墜落事故報告書」参照。)

#### ○夏山岩登り定着合宿

8月22～30日

CL : 下平啓太(4) SL : ○内田健一(4)  
服部崇(3) 小久保陽介(3) 牧野賢一(3)  
松下修也(3) 植垣健太郎(2) 長谷川聰貞(2)  
加藤正幸(2) 河西貴史(2) 兼岩勲(2)  
橋口徹(1) 田尻英秋(1) 小滝顕也(1)  
駒村宗利(1) 藤江泰一(1)  
剣岳 黒部ダム～梯子段乗越から真砂沢出合BC、剣岳東面の岩場登攀ルート  
ハツ峰Aフェース中大・魚津高、Cフェース剣稜会、Dフェース左・久留米大・富山大チンネ左稜線・北条新村・中央チムニ・左下カシテgチムニ-c dクラック等

#### ○プレ冬合宿 11月23～25日

爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳

#### ○冬合宿 12月23日～1月4日

CL : 下平啓太(4) SL : ○内田健一(4)  
服部崇(3) 小久保陽介(3) 牧野賢一(3)  
松下修也(3) 植垣健太郎(2) 長谷川聰貞(2)  
加藤正幸(2) 河西貴史(2) 兼岩勲(2)  
橋口徹(1) 田尻英秋(1) 小滝顕也(1)  
藤江泰一(1)  
白馬梅池ゴンドラ駅～日本オートルートで日本海を目指す。

12月23日(晴れ) ゴンドラ梅の森駅～天狗原TS  
24日(雪→吹雪) TS→大池山荘TS  
TS到着後小蓮華手前2730m地点へデポを伸ばす。  
25日(快晴) TS→白馬岳→三国境付近の台地TS  
26日(吹雪) TS→雪倉避難小屋  
小屋到着後デポ隊を出しダン箱8他をデポ。  
27日(吹雪) デポ地点まで進むがブリザードで視界10mとなり、小屋に引き返す。  
28～31日(猛吹雪) 沈殿  
1月1日(猛吹雪) 5日間の沈殿で食料が少なくなってきたため、デポ回収隊を出すが回収できず。  
2日(猛吹雪) 再び回収隊を出し、デポ回収に成功。  
3日(吹雪) 小屋→小蓮華岳→大池山荘TS  
風は強くないが視界は50m程度。すごい積雪量で前進は不可と判断し下山を決定。帰路は強烈なラッセルを強いられる。途中で富山県警山岳救助隊に会うが、下降路を見失い立ち往生しているようで、だまって後をついてきた。  
4日(吹雪→晴れ) TS→天狗原→ゴンドラ梅の森駅  
ブリザードで視界のないまま出発したが、成城大小屋につく頃にはどつ晴れになっていた。

### III. 個人山行

#### ○後立山縦走 7月20～27日

CL : 植垣健太郎(2) SL : 小野孝博(2)  
吉井勇夫(1) 永井薰子(1)

七倉山荘～唐沢覗手前TS～船窪小屋TS～蓮華岳～針ノ木峠手前2754m地点TS～針ノ木岳～大スバリ～2491mTS～赤沢岳～種池小屋TS～鹿島槍ヶ岳～ハツ峰キレット手前TS～五竜岳～五竜山荘TS～唐松岳～天狗と鑓ヶ岳のコルTS～白馬岳～朝日岳頂上手前TS～朝日岳～長梅山荘TS～白鳥山～親不知

#### ○南アルプス縦走 7月22～30日

CL : 河西貴史(2) SL : 兼岩勲(2)  
駒村宗利(1) 藤江泰一(1) 橋口徹(1)  
新倉～転付峠TS～マンボ一沢の須TS～荒川小屋TS～百間洞TS～赤石小屋下TS～畠なぎダム

#### ○唐沢岳幕岩 7月25～27日

CL : 下平啓太(4) SL : 松下修也(3)  
牧野賢一(3) 小久保陽介(3)  
中央カンテ富山ルート 下平、牧野S字状ルート 小久保、松下  
大凹角ルート 小久保、松下

#### ○北アルプス縦走 7月28日～8月3日

CL : 長谷川聰貞(2) SL : 加藤正幸(2)  
小滝顕也(1) 田尻英秋(1)  
七倉～烏帽子小屋TS～野口五郎小屋TS～野口五郎岳～水晶岳～祖父ヶ岳～雲の平小屋TS～太郎平小屋TS～上ノ岳～黒部五郎岳～三俣山荘TS～双六岳～槍ヶ岳～南岳山荘TS～北穂高岳～奥穂高岳～白出沢のコル～サマテン

#### ○剣岳 7月31日～8月3日

CL : 松下修也(3) 清水(部外)  
扇沢～雷鳥沢TS～剣沢TS～剣岳～剣沢TS～室堂

#### ○八ヶ岳赤岳沢 8月3～4日

CL : 服部崇(3) 小久保陽介(3)  
林道終点～赤石沢廻行～赤岳～ツルの頭～林道終点

## ○北岳バットレス 8月5～8日

CL : 下平啓太(4) 小久保陽介(3)  
兼岩勲(2) 長谷川聰貞(2) 加藤正幸(2)  
橋口徹(1) 田尻英秋(1) 小滝顕也(1)  
駒村宗利(1)

二股下にBC

Dガリ一大滝～下部フランケ～上部フランケ、Cガリ一大滝～4尾根主稜

## ○前穂高岳四峰 8月7～9日

CL : 豊田浩太郎(5) SL : 河西貴史(2)  
藤江泰一(1)  
正面壁松高尾根～奥又白池、松高ルート、北条新村ルート

## ○朝日連峰縦走 8月10～13日

CL : 服部崇(3) SL : 牧野賢一(3)  
内田健一(4)  
朝日鉱泉～小朝日岳～銀玉水TS～岩魚上沢～銀玉水TS～以東岳～大鳥池TS～泡滝ダム

## ○甲斐駒ヶ岳赤石沢Aフランケ

8月15～16日  
CL : 小久保陽介(3) SL : 牧野賢一(3)  
同志会左フェースルート  
赤蜘蛛ルート

## ○丸山東壁 8月10～12日

CL : 下平啓太(4) SL : 小久保陽介(3)  
塚田小暮ルート  
大雨で4Pで下降

## ○空木岳東川本谷

8月16～17日  
CL : 兼岩勲(2) SL : 河西貴史(2)  
倉本駅～北沢の橋TS～東川本谷遡行～空木岳～駒峰ヒュッテ(泊)～空木岳～池山小屋～駒ヶ根駅

## ○甲斐駒ヶ岳黄連谷、鋸岳

9月12～15日  
CL : 兼岩勲(2) SL : 河西貴史(2)  
竹宇駒ヶ岳神社～白稜の岩小屋TS～

黄連谷撤退～岩小屋～甲斐駒ヶ岳～六合目石室TS～鋸岳～大岩の岩小屋TS～戸台河原

※二俣の手前の滝の高巻きが登れないと判断し撤退を決定。

## ○上高地、岳沢 9月18～19日

CL : 橋口徹(1)  
上高地から穂高縦走の予定だったが、台風接近で断念。

## ○北穂高台 クラック尾根

9月23～24日  
CL : 豊田浩太郎(5) 橋口徹(1)

## ○屏風岩 9月24日

大スラブルート  
雲陵ルート  
CL : 牧野賢一(3) 河西貴史(2)

## ○明星山P6南壁 9月30日

左岩稜  
CL : 植垣健太郎(2) 加藤正幸(2)  
兼岩勲(2)  
左フェース  
CL : 松下修也(3) 小滝顕也(1)

## ○前穂北尾根 10月7～8日

CL : 兼岩勲(2) 長谷川聰貞(2)  
SL : 加藤正幸(2)  
上高地～パノラマ新道～涸沢TS～広河原峠～観音岳～薬師岳TS～大ナジカ峠～千頭星山～甘利山～甘利山登山口

## ○甲斐駒、鳳凰、甘利山縦走

10月21～23日  
CL : 河西貴史(2) SL : 植垣健太郎(2)  
橋口徹(1)  
北沢峠～甲斐駒ヶ岳～栗沢の頭付近TS～五、六のコル～前穂高岳～上高地

## ○明星山P6南壁 11月3～6日

直上ルート、正面壁ルート  
CL : 長谷川聰貞(2) 兼岩勲(2)  
直上ルート

CL : 兼岩勲(2) 植垣健太郎(2)

左岩稜

CL : 河西貴史(2) 小滝顕也(1)

正面壁

CL : 植垣健太郎(2) 小滝顕也(1)

左フェース

CL : 豊田浩太郎(5) 藤江泰一(1)

永井薰子(1)

クイーンズウェイ

CL : 豊田浩太郎(5) 植垣健太郎(2)

#### ○塩見岳 11月17~19日

CL : 小久保陽介(3) SL : 松下修也(3)

兼岩勲(2) 小滝顕也(1) 藤江泰一(1)

塩川小屋~三伏峠小屋~塩見岳~三伏

峠小屋~塩川小屋

#### ○雨飾山 11月12日

CL : 豊田浩太郎(5) 浦山大介(3)

長谷川聰貞(2) 河西貴史(2)

登山口~荒倉沢塩見岳~雨飾山~戸山口

#### ○仙丈岳 1月20~22日

CL : 小久保陽介(3) SL : 浦山大介(3)

服部崇(3) 松下修也(3)

戸台~北沢峠~仙丈岳~北沢峠~戸台

## IV. 特筆すべき山行

12月27日~1月2日の間、猛烈なブリザードに襲われ、1週間雪倉避難小屋に閉じ込められた冬合宿は強烈な思い出です。避難小屋での停滞で助かりましたが、みんなよく耐えたと思います。(記録は前述) 以上

### 【中央アルプス檜尾尾根雪崩遭難事故】

#### ○山行計画

中央アルプス縦走

3月8日~13日実働4日予備2日

L : 長谷川聰貞(2) 植垣健太郎(2)

小滝顕也(1) 服部崇(3)

#### ○山行日程

1. 中御所~檜尾避難小屋TS
2. TS ~空木岳ピストン
3. TS ~中岳・駒ヶ岳間のコルTS
4. TS ~桂小場(下山)

3月8日 檜尾尾根2530m付近で表層雪崩発生。長谷川は2、3m流されてから逃げる。植垣は斜面を40m程流されて止まる。小滝、服部は2km位流され死亡した。

<詳細は「中央アルプス檜尾尾根雪崩遭難に関する報告書」>



## 12 平成2年度（1990年度）

### I. 年度総括

1990年3月中央アルプス桧尾尾根で雪崩遭難事故が発生。事故原因の究明と再発防止に向けて会活動全般の徹底的な見直しを行った。原点に立ち戻って基本的な山行を実施するとともに、リーダー会の山行承認機能を強化するなど、会の基礎力を再度構築し直して次の世代に引き継いだ。

### II. 合宿

#### ○GW合宿 5月2~4日

CL: 浦山大介(4) SL: 小久保陽介(4)  
松下修也(4) 牧野賢一(4) 植垣健太郎(3)  
河西貴史(3) 兼岩勲(3) 加藤正幸(3)  
長谷川聰貞(3) 橋口徹(2) 田尻英秋(2)  
藤江泰一(2)

穂高岳沢定着 上高地～岳沢BC、岳沢  
で雪上訓練、岳沢から天狗のコル往復

#### ○新人合宿 5月27日～6月3日

CL: 浦山大介(4) SL: 小久保陽介(4)  
牧野賢一(4) 松下修也(4) 植垣健太郎(3)  
加藤正幸(3) 河西貴史(3) 兼岩勲(3)  
長谷川聰貞(3) 田尻英秋(2) 橋口徹(2)  
藤江泰一(2) 緒方龍太郎(1) 笹森進也(1)  
伴野達也(1) 福手健仁(1) 福山亨(1)  
内田健一(5)

穂高岳 島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺で雪上訓練、涸沢で雪訓後、北尾根(3・4のコル)、涸沢岳、奥又白池、奥穂高岳、北穂高岳、槍沢経由槍ヶ岳往復(雨の為槍沢で中止)、上高地下山

#### ○夏山岩登り定着合宿 8月21～30日

CL: 浦山大介(4) SL: 小久保陽介(4)  
牧野賢一(4) 松下修也(4) 植垣健太郎(3)  
加藤正幸(3) 河西貴史(3) 兼岩勲(3)

### チーフリーダー 浦山 大介

長谷川聰貞(3) 田尻英秋(2) 橋口徹(2)  
藤江泰一(2) 笹森進也(1) 伴野達也(1)  
福手健仁(1) 福山亨(1)  
剣岳 黒部ダム～梯子谷乗越から真砂沢出合～熊の岩BC、八ツ峰(魚津高ルート、剣稜会ルート、久留米大ルート、富山大ルート、中大ルート、京大ルート、ベルニナルート) チンネ(北条新村ルート、Gチムニーカラックルート、左稜線ルート、魚津高ルート、中央チムニールート、左下カンテ～左方カンテ、名大ルート、Aバンドルート) 長次郎谷経由剣岳往復 源治郎尾根II峰平蔵谷側名古屋大ルート～剣岳本峰 下山は長次郎谷雪渓崩壊のため剣本峰経由で真砂沢・黒部ダム着

#### ○プレ冬合宿 11月23～25日

CL: 兼岩勲(3) SL: 浦山大介(4)  
小久保陽介(4) 牧野賢一(4) 松下修也(4)  
植垣健太郎(3) 加藤正幸(3) 河西貴史(3)  
長谷川聰貞(3) 田尻英秋(2) 橋口徹(2)  
藤江泰一(2) 笹森進也(1) 伴野達也(1)  
内田健一(5)  
五竜岳～唐松岳

#### ○冬山合宿 12月22日～1月4日

CL: 浦山大介(4) SL: 小久保陽介(4)  
牧野賢一(4) 松下修也(4) 植垣健太郎(3)  
加藤正幸(3) 河西貴史(3) 兼岩勲(3)  
長谷川聰貞(3) 田尻英秋(2) 橋口徹(2)  
藤江泰一(2) 笹森進也(1) 伴野達也(1)  
内田健一(5)

唐沢岳西尾根～常念岳

12月22日 晴れ 七倉～高瀬ダム上TS

23日 雪 唐沢岳西尾根2080m付近TS

24日 雪 唐沢岳西尾根2400m付近TS

25日 晴れ 唐沢岳直下TS  
26日 風雪のため沈殿  
27日 風雪のため沈殿  
28日 晴れ 餓鬼のコブ～餓鬼小屋TS  
29日 曇り 剣吊り突破、2430m付近TS  
30日 晴れ 東沢乗越～北燕岳下TS  
31日 晴れ 北燕岳先の岩峰群突破できず、日程オーバー、以後の天候悪化の予報から敗退決定、東沢乗越に戻り幕営  
1月1日 雪 東餓鬼岳～有明山直下TS  
1月2日 雪 宮城ゲートに下山

### III. 個人山行

#### ○前穂高岳屏風岩 6月22～23日

雲稜ルート CL: 兼岩勲(3) 橋口徹(2)  
東稜ルート  
CL: 加藤正幸(3) 長谷川聰貞(3)

#### ○北岳バットレス 6月23～24日

CL: 浦山大介(4) 河西貴史(3)  
広河原～白根御池BC～ピラミッド  
フェース～第4尾根～下山

#### ○八ヶ岳縦走 6月23～24日

CL: 藤江泰一(2) 伴野達也(1)  
笹森進也(1)  
美濃戸口～行者小屋BC～赤岳～硫黄  
岳～下山

#### ○前穂高岳屏風岩 7月14～15日

CL: 兼岩勲(3) 植垣健太郎(3)  
14日 上高地～東壁ルンゼルート～T4  
～T2  
15日 上高地～下山

#### ○中央アルプス西横川 7月14日

CL: 加藤正幸(3) 笹森進也(1)  
小久保陽介(4)  
しらび平BC～西横川30m大滝～BC

#### ○仙丈ケ岳三峰川 7月22～25日

CL: 植垣健太郎(3) 小久保陽介(4)  
牧野賢一(4)

22日 熊沢出合～大横川出合TS  
23日 岳沢出合TS  
24日 無名沢出合～仙丈ケ岳～避難小屋  
25日 北沢峠に下山

#### ○八ヶ岳赤岳沢 7月21～22日

CL: 長谷川聰貞(3) 加藤正幸(3)  
兼岩勲(3)  
赤岳沢出合小屋TS～赤岳沢～下山

#### ○南アルプス縦走 7月21～31日

CL: 藤江泰一(2) 田尻英秋(2)  
伴野達也(1) 福手健仁(1)  
西沢渡～聖岳～赤石岳～小河内岳～  
塩見岳～北荒川岳～農鳥岳～間ノ岳～  
北岳～仙丈ケ岳～甲斐駒ケ岳～横手～  
下山

#### ○北アルプス縦走 7月26日～8月2日

CL: 橋口徹(2) 福山亨(1) 笹森進也(1)  
雷鳥沢～奥大日～五色ヶ原～薬師岳～  
雲ノ平～三俣蓮華岳～双六岳～槍ヶ岳  
～氷河公園～上高地～下山

#### ○北鎌尾根～ジャンダルム

7月27日～8月1日  
CL: 牧野賢一(4) 小久保陽介(4)  
河西貴史(3)  
27日 七倉～高瀬ダムTS  
28日 湯俣～千天出合～北鎌沢出合TS  
29日 北鎌沢のコル～槍ヶ岳～殺生  
ヒュッテTS  
30日 小槍南面フェース左ルート～南岳  
～北穂南稜テラスTS  
31日 滝谷ドーム西壁雲稜ルート～白出  
のコルTS  
8月1日 奥穂高岳～ジャンダルムT1フ  
ランケ左ルート～白出のコルTS(以  
後は穂高山荘にてバイト)

#### ○甲斐駒ケ岳黄蓮谷

7月31日～8月2日  
CL: 松下修也(4) 加藤正幸(3)

- 31日 黒戸尾根～岩小屋TS  
8月1日 黄蓮谷右俣～奥の二俣手前TS  
2日 甲斐駒ヶ岳～駒ヶ岳神社へ下山
- 滝谷 8月4～7日  
CL: 兼岩勲(3) 長谷川聰貞(3)  
4日 上高地～北穂南稜テラスTS  
5日 クラック尾根～ドーム北壁右ルート  
6日 ドーム西壁雲稜～北壁左ルート  
7日 下山
- 奥又白定着 8月5～8日  
CL: 松下修也(4) 加藤正幸(3)  
田尻英秋(2) 伴野達也(1)  
奥又白池BCから松高ルート、北条新村  
ルート
- 前穂4峰正面～滝谷継続  
8月6～10日  
CL: 植垣健太郎(3) 橋口徹(2)  
6日 上高地～奥又白池TS  
7日 北条新村ルート  
8日 松高ルート～涸沢～北穂南稜テラ  
スTS  
9日 滝谷クラック尾根～ドーム西壁雲  
表ルート  
10日 上高地～下山
- 前穂高岳屏風岩 8月7～9日  
CL: 河西貴史(3) 藤江泰一(2)  
東稜ルート
- 奥又白池定着 8月14～17日  
CL: 兼岩勲(3) 河西貴史(3) 牧野賢一(4)  
藤江泰一(2) 田尻英秋(2) 笹森進也(1)  
福山亭(1)  
奥又白池BCから北条新村ルート、松高  
ルート
- 前穂高岳屏風岩 8月17～18日  
CL: 加藤正幸(3) 橋口徹(2)  
雲稜ルート
- 前穂高岳屏風岩 9月7～8日  
CL: 兼岩勲(3) 植垣健太郎(3)
- 右岸壁ルンゼ状スラブルート  
○南アルプス縦走 9月21～23日  
CL: 河西貴史(3) 藤江泰一(2)  
易老渡～聖・奥聖岳～小河内岳～光岳  
～易老渡
- 冬合宿ルート視察 10月19～20日  
CL: 浦山大介(4) 小久保陽介(4)  
松下修也(4)  
信濃常盤～餓鬼岳～ケンズリ～往路下山
- 南アルプス縦走 10月19～20日  
CL: 藤江泰一(2)  
北沢峠～甲斐駒ヶ岳～鳳凰三山～夜  
叉神峠
- 唐沢岳幕岩 10月20日  
CL: 河西貴史(3) 加藤正幸(3)  
大凹角ルート
- 明星山P 6南壁 10月22日  
CL: 牧野賢一(4) 植垣健太郎(3)  
浦山大介(4) 笹森進也(1) 兼岩勲(3)  
伴野達也(1)  
フリースピリッツルート L: 牧野、植垣  
左フェースルート L: 浦山、笹森  
左岩稜ルート L: 兼岩、伴野
- 富士山 11月10～11日  
CL: 長谷川聰貞(3) 加藤正幸(3)  
兼岩勲(3)  
中ノ茶屋～5合目TS～頂上～お鉢一周  
～中ノ茶屋
- 甲斐駒ヶ岳～鳳凰三山  
2月23日～3月5日  
CL: 河西貴史(3) 田尻英秋(2)  
笹森進也(1) 伴野達也(1)  
黒戸尾根～甲斐駒ヶ岳～鳳凰三山～  
夜叉神峠
- 剣岳奥大日尾根 3月11～23日  
CL: 松下修也(4) 小久保陽介(4)  
河西貴史(3) 藤江泰一(2)  
馬場島～奥大日尾根～室堂乗越～剣

---

岳～早月尾根～馬場島

○戸隠連峰西岳P 5尾根

3月14～15日

CL : 浦山大介(4) 田尻英秋(2)

品沢高原～P 5稜～品沢高原

○鹿島槍ヶ岳東尾根

3月25～28日

CL : 浦山大介(4) 橋口徹(2)

大谷原～鹿島槍ヶ岳東尾根～赤岩尾

根～大谷原

#### IV. 特記すべき山行記録

○天山ハン・テングリ峰 (7010m)

7月13日～8月10日

CL : 渡部光則(S51年卒OB)

吉田秀樹(S56年卒OB) 浦山大介(4)

ソビエト連邦スポーツ委員会主催

ハン・テングリ国際キャンプ

中部天山テングリオーラ山塊ハン・テン

グリ峰(7010m) 登頂

7月31日 第1次アタック隊登頂(L : 吉  
田、浦山)

8月6日 第2次アタック隊6700m到達  
(L : 渡部、吉田)

## 13 平成3年度（1991年度）

### I. 年度総括

平成3年度は4年生こそ5名を数えたが、3年生3名、2年生2名と先細り感があつたため、入学式前に学内に立看板を多数設置して新人勧誘するところから始まった。その甲斐あってか9名の新人を迎えて行った新人合宿はそれなりに壯観だったように記憶している。

冬合宿は前々年・前年と途中でエスケープしたこともあり、計画どおりトレースして達成感を得ることに重きを置き、霞沢岳から常念岳・燕岳から中房温泉下山という北アルプスのなかで最も天候が安定しているルートを選定した。

今振りかえるに、会として大きな目標に向けて一丸となつて取り組むというよりか、合宿をこなしながら各々好きな山に行くというスタンスであった。もう少し中長期的な展望を持ち組織を強くする運営ができていればと思う次第である。

### II. 合宿

#### ○ゴールデンウィーク合宿

4月28日～5月4日

CL：河西貴史(4) SL：植垣健太郎(4)  
橋口徹(3) 藤江泰一(3) 田尻英秋(3)  
伴野達也(2) 笹森進也(2)

不帰東面 八方尾根より入山 丸山ケルンBC 不帰東面登攀予定も天候不順のため八方尾根上部での雪上訓練にとどまる。

#### ○新人合宿 5月26日～6月2日

CL：河西貴史(4) SL：植垣健太郎(4)  
藤江泰一(3) 田尻英秋(3) 伴野達也(2)  
笹森進也(2) 長谷川哲也(1) 松澤朋子(1)  
神山利木(1) 高橋敦(1) 三木隆一(1)

チーフリーダー 河西 貴史

佐藤崇(1) 籠谷統啓(1) 安保晃(1)  
田中宏治(1)  
島々～徳本峠～横尾BC、涸沢中心に雪上訓練～上高地下山  
5月29日 潤沢岳、  
30日 北尾根VI峰登頂、  
31日 奥又白池を目指すも天候悪化。  
松高尾根途中下山。

1日 本隊 槍沢経由で槍ヶ岳往復  
屏風岩東稜 植垣・伴野

#### ○縦走合宿（南アルプス隊）

7月15～25日

CL：笹森(2) 佐藤(1) 高橋(1) 長谷川(1)  
松澤(1)  
易老渡～光岳～聖岳～赤石岳～悪沢岳～塩見岳～農鳥岳～間ノ岳～北岳～広河原 2日目のTSとした易老岳は水場がないので15Lを担ぎ上げた。

#### ○縦走合宿（北アルプス隊）

7月25日～8月1日

CL：伴野(2) 安保(1) 神山(1) 田中(1)  
三木(1)  
雷鳥平～スゴ乗越～薬師岳～黒部五郎岳～三俣蓮華岳～槍ヶ岳～槍沢～上高地サマーテント 当初は穂高までの縦走を予定していたが、天候が悪いため槍沢より下山した。

#### ○夏山岩登り定着合宿

8月22～30日

CL：河西貴史(4) SL：植垣健太郎(4)  
加藤正幸(4) 藤江泰一(3) 田尻英秋(3)  
橋口徹(3) 伴野達也(2) 笹森進也(2)  
長谷川哲也(1) 松澤朋子(1) 神山利木(1)  
高橋敦(1) 三木隆一(1) 佐藤崇(1)  
籠谷統啓(1) 安保晃(1) 田中宏治(1)  
黒部ダム～内臓助平～ハシゴ谷乗越～

## 長次郎谷 熊の岩BC

剣岳東面の各ルート登攀、縦走  
登攀ルート VI峰(A中大・魚津高、B  
京大、C剣稜会 RCC、D富山大 久  
留米大) V峰(一の菱) チンネ(中央チ  
ムニー～左face魚津高、中央チムニー  
～左フェースベルニナ～gチムニー eク  
ラック、中央チムニー～左稜線上部、北  
条・新村～aバンドbクラック、北条・新  
村～gチムニー cdクラック、左下カンテ  
～左方カンテ、左稜線) 剣尾根R4～剣  
尾根主稜上部、源次郎尾根縦走、BC  
周辺で雪上訓練

台風接近のため予定より1日早く下山

※熊の岩BC付近の洞窟右のスラブに  
植垣・橋口でルート開拓。

- ・だまつてのぼれ 5.9+
- ・Birthday of サル番長 (ダイレクト  
5.10b ノーマル 5.10a)

※帰路はトロリーバスでなく業務用ト  
ラックに便乗させてもらい、バス代節  
約。1人15,000円の合宿費で賄えた。

## ○プレ冬合宿 11月22～24日

CL : 藤江泰一(3) SL : 植垣健太郎(4)  
長谷川聰貞(4) 兼岩 熱(4) 田尻(3)  
橋口徹(3) 伴野達也(2) 笹森(2)  
長谷川哲也(1) 松澤朋子(1) 神山利木(1)  
高橋敦(1) 三木(1) 安保晃(1) 田中宏治(1)  
小久保(5) 牧野(5) 豊田浩太郎(OB)  
鹿島槍ヶ岳赤岩尾根～爺ヶ岳東尾根  
(天候不良のため鹿島槍のみ)  
※鹿島槍登頂後視界不良。布引山から  
西に延びる尾根に迷い込む。

## ○冬合宿 12月25日～1月6日

CL : 河西貴史(4) SL : 植垣健太郎(4)  
加藤正幸(4) 兼岩熱(4) 藤江泰一(3)  
田尻(3) 橋口徹(3) 伴野達也(2) 笹森(2)  
長谷川哲也(1) 高橋敦(1) 三木隆一(1)

## 安保晃(1) 田中宏治(1)

12月25日 曇→ニワカ雪 霞沢発電所～  
送水管上部貯水池TS 2050mまでデ  
ボを延ばす。雪がなく晩秋の山のよう。  
長谷川聰貞(4)1日歩荷要員で参加。

26日 曇→ニワカ雪 送水管貯水池上部  
TS～2304m峰TS

27日 曇→風雪 2304mTS～七舟～  
2553m峰北側の2540m付近TS 2350  
m付近に悪場あり。一年生のキスリン  
グを上級生が背負い通過する。

28日 風雪 沈澱 二つ玉低気圧発生

29日 風雪 沈澱 二つ玉低気圧が千島沖  
で合体し964mbとなり、大陸の1048mb  
の高気圧とで強い冬型となる。

30日 風雪 沈澱 954mb

31日 快晴 TS～霞沢岳～山頂よりやや  
下った2600mTS

1月1日 風雪→雪→曇 TS～徳本峠～  
2180m付近TS

2日 晴 TS～槍見台～大滝山手前2350  
m台地TS

3日 ニワカ雪→曇→晴 TS～大滝山～  
蝶ヶ岳～横尾への分岐手前2600m  
付近TS

4日 晴 TS～常念岳～横通岳と東天井  
岳のコルTS

5日 晴 TS～大天井岳～燕山荘TS 燕  
岳ピストン

6日 曇→雪 TS～中房温泉～宮城の  
ゲート

## ○冬合宿別働隊

1年生女子部員のために会5年生により  
行われた。

燕岳・常念岳 12月28～31日

浦山 松下 松澤朋子(1) 神山利木(1)

宮城より入山。悪天候のため常念は断  
念し燕山荘より燕岳往復。宮城へ下山。

### III. 個人山行

#### ○屏風岩 雲稜ルート 6月14~16日

CL: 藤江 橋口

1日で東稜・雲稜の2ルート登攀を試みるも1ルートのみ。

#### ○富士山 7月5~6日

橋口 藤江 安保 松澤 神山 田中

御鉢周りをする。

#### ○黒部 丸山東壁 緑ルート

7月20~22日

小久保 植垣 登攀終了後岩小屋でビバーク。翌日緑ルート懸垂下降。

#### ○北穂高 滝谷 7月28日~8月1日

藤江 植垣 田尻 笹森 長谷川哲也

7月29日 クラック尾根 植垣 笹森 長谷川哲也

P2フランケ隊(藤江 田尻)は先行パーティあり、また天候悪化も予想されたため中止。30日、31日は雨のため沈殿

#### ○奥穂高岳 7月29~31日

松下(5) 苑田(一般) 上高地から涸沢経由で奥穂往復

#### ○北岳バットレス 8月4~6日

長谷川聰貞 藤江 田尻 長谷川哲也 神山

・Cガリ一大滝~第四尾根 聰貞 哲也  
神山

・ピラミッドフェース~第四尾根~中央稜 藤江 田尻

天候悪化のため両隊とも第四尾根より懸垂下降

#### ○中央アルプス 西横川 8月10日

CL: 加藤 田尻 笹森 田中 安保 佐藤  
しらび平から入山。長谷部新道下山。

#### ○前穂高岳北尾根 8月14~15日

CL: 橋口 植垣 藤江 安保 籠谷 神山  
三木 豊田

初日はサマ天から涸沢泊。V-VIのコルから取り付き、III-IVのコルで2時間待

ち。サマ天下山。

#### ○戸隠 捐花川 8月17~18日

加藤 松下 牧野 長谷川 笹森

アブキ橋~魚止の滝~九頭龍山へ一不動  
最後の詰めを誤り藪こぎを強いられた。

#### ○槍ヶ岳 小槍左ルート

8月17~18日

河西 高橋 松澤

河西、高橋で2Pのみ登攀し下山。

#### ○サマ天山行

- ・前穂 8月5日 佐藤 他1名
- ・六百山 8月10日 植垣 神山 籠谷 宮坂  
(三重大)
- ・ひょうたん池 8月12日 豊田 内田  
植垣 籠谷 神山 松澤 安保 他2名
- ・西穂高岳 8月13日 橋口 藤江 高橋  
安保 宿泊客2名
- ・霞沢岳 8月14日 河西
- ・穂高~槍 8月17日 植垣 豊田(OB)
- ・焼岳 8月17日 籠谷 田中

### 『秋山山行』

#### ○蝶ヶ岳から燕岳 9月20~23日

安保 松澤 籠谷

#### ○明星山 P6 南壁左岩稜

9月21~22日

田尻 吉井(信大スキー山岳部)  
徒渉はヘソくらいまで潜る。松の木テラスから懸垂下降。

#### ○甲斐駒ヶ岳 赤石沢奥壁左ルンゼ

9月22~23日

橋口 藤江

登攀は10p。途中水場があるのでポリタンクは不要だった。

#### ○乗鞍岳 9月22~23日

河西 田中 高橋 三木 牧野(5)

豊田浩太郎(OB) 下田哲也(OB)

高橋雄治(OB) 他3名

白骨温泉より入山。十石小屋泊。

○大滝山・蝶ヶ岳 9月28~29日

神山

○奥鐘山 西壁中央ルンゼ

10月10~12日 植垣 小久保(5)

初日に西壁基部の岩小屋に入山。翌日沈澱。当初は奥鐘山を経てババ谷温泉に下山予定だったが、尾根付きバンド手前より下降。

○桧尾岳 10月19~20日

植垣 河西 小久保(5) 浦山 牧野 籠谷  
松澤 神山 豊田浩太郎(OB)

千畳敷より入山。桧尾小屋泊。桧尾橋に下山。

○黒部川 下ノ廊下 10月26~27日

長谷川聰貞 笹森 伴野 安保 田中  
黒部ダムより十字峠を経て阿曾原温泉  
TS。櫻平に下山。

○丸山東壁 2ルンゼ 10月18~19日

橋口徹 藤江泰一

黒部ダムより入山。ルート図の4ピッチ目  
で橋口墜落 報告書あり

○明星山 P6南壁

11月1日 左フェース 橋口 田中 松澤

2日 Free Spirits 橋口 笹森

左フェース 植垣 神山

左岩稜① 河西 安保

左岩稜② 豊田浩太郎(OB) 田中 松澤

《積雪期個人山行》

○八ヶ岳 11月30日~12月1日

橋口 伴野 安保 田中 長谷川

美濃戸より入山 初日は赤岳鉱泉より硫黄  
岳・赤岳縦走。2日目はジョウゴ沢で沢登

○剣岳 12月28日

牧野 小久保

扇沢より入山 雪が多く中止

29日 下山

○八ヶ岳 1月8~10日

植垣 宮坂(三重大山岳部)

美濃戸口より入山、赤岳温泉BC。2日  
目に大同心南稜 中山尾根下部岩壁  
3日目に阿弥陀岳北西稜を登攀。

○八ヶ岳東面 1月15~19日

出合い小屋BC

1月16日 権現岳東稜 兼岩 河西 橋口  
18日 赤岳天狗尾根 兼岩 河西 植垣  
長谷川哲也

安保 松澤 主稜線に抜けビバークしたが  
横になれずシビアな態勢で朝を迎えた。

○八ヶ岳西面 2月8~11日

兼岩 橋口 田尻 藤江 伴野 内田健一(OB)  
赤岳鉱泉BC

2月9日 赤岳主稜 兼岩 田尻 伴野  
10日 小同心クラック 兼岩 橋口 内田  
※9日、10日は登攀後ジョウゴ沢でアイ  
スクライミング

11日 南沢でアイスクライミング

○唐沢岳幕岩 大凹角ルート

河西 中嶋岳志(OB)

2月9~10日 先行パーティーが4つもいた。  
洞穴テラスから25mほどトラバ  
スしひバーグ。

○上高地雪中キャンプ 2月15~16日

神山 松澤

坂巻温泉から明神池往復

○唐沢岳幕岩 2月23~27日

植垣 小久保 牧野 作道(クライミング・メ  
イト・クラブ)

24~25日 大凹角ルート 植垣 作道 中  
央バンドでビバーク。

27日 大凹角ルート 小久保 牧野(1Pのみ)  
植垣 作道の畠山ルートは中止。

○木曽駒ヶ岳~空木岳縦走

2月25日~3月2日

伴野 田尻 安保 長谷川哲也

池山尾根の途中のルンゼの雪の状態が  
悪いため通過不能。天候も雨のため3

月1日は迷尾根の頭付近で沈没。翌日迷尾根を下り、途中から池山尾根にトランバースする。

### ○甲斐駒ヶ岳～鳳凰三山

2月25日～3月3日

藤江 兼岩 長谷川聰貞 高橋敦  
天候に恵まれトレースもありやや物足りなかつた。

### ○八ヶ岳西面 3月5～6日

田尻 松澤

阿弥陀岳北稜・赤岳往復予定だったがいざれも途中下山

### ○剣岳早月尾根 3月9～13日

藤江 河西 笹森

鳥帽子岩手前で登頂断念

### ○八ヶ岳西面 3月12～14日

加藤 長谷川聰貞 安保 高橋 神山

13日 阿弥陀岳北稜

14日 小同心右稜登攀予定も諸事情により断念

### ○八ヶ岳西面 3月23～25日

藤江 神山 三木

行者小屋をTSとして登攀を予定していたが、湿雪降り続き中岳沢で雪崩が発生。中山乗越で雪訓を行った程度で下山。

### ○八ヶ岳 4月9～11日 河西

小淵沢駅から編笠山を経て北八まで縦走予定も天候悪化が予想されたため権現岳のみ登頂し下山。

### ○奥大日岳～剣岳 4月26～30日

河西 石坂(三重大山岳部) 宮坂(三重大山岳部)

小又川から入山。早乙女岳を経て奥大日岳へ。剣御前から剣岳登頂。早月尾根下山。

### ○白馬岳主稜 4月29日～5月1日

長谷川聰貞 兼岩 豊田浩太郎(OB)  
猿倉より入山。2, 3のコルでビバーク。

登頂後吹雪となり三国境からの下降路が発見できずビバーク。翌日わずかに視界が開けたときに下山。

## IV特筆すべき山行

### ○ソビエト国際キャンプ(7～8月)

東海山岳会隊に河西貴史(4)と橋口徹(3)が参加。隊長はOBの田辺治。

7月29日に河西・橋口がコミュニズム峰(7495m)に登頂。

8月5日に橋口がレーニン峰(7134m)に登頂。

8日帰国。その直後ソ連共産党守旧派がクーデターを起こすも失敗する。それが引き金となりその年のうちにソビエト社会主義共和国連邦があっけなく崩壊するとは驚いた。

### ○韓国 仁寿峰フリークライミング

3月23～27日

兼岩 笹森 安保

西面スラブ・ショートルート 南面スラブ東面スラブの各ルート(5.9～5.10b)

『海外でフリークライミングを丸ごと樂しみたい!』という思いから、情報が得やすくルートもしっかりしている仁寿峰を選んだ。滞在中日本人クライマーに会うことはなかった。

### ○番外編 中国黃山

1992年3月に中国黃山でのクライミングを目指し『登山攀岩in中国』を合い言葉に出発した隊があった。長雨と体調不良、及び中国の鉄道事情等により黃山を見ることもなく帰国したが、四半世紀前にこのような動きがあったことは特筆に値すると思われる所以記載する。

以上

## 14 平成4年度（1992年度）

チーフリーダー 藤江 泰一

### I. 年度総括 略

### II. 合宿・山行

4月9～11日 八ヶ岳縦走

河西(単独)

4月18日 八ヶ岳 大同心稜

CL : 中嶋(OB)、河西

4月26～30日 北ア 大日岳～剣岳

CL : 河西、高橋(他大学)、宮坂(同)

4月29日～5月1日 北ア 白馬岳主稜

CL : 長谷川(聰)、豊田、兼岩

### ○GW合宿 4月26～30日

北ア 双六尾根～白馬岳

CL : 藤江、笹森、高橋、松沢、三木、長谷川(哲)

4月29日～5月3日 北ア 鹿島槍東尾根

雪訓

CL : 田尻、伴野、高橋、神山、内田(OB)

### ○新人合宿I 5月31日～6月1日

北ア 徳本峠～横尾BC、涸沢

CL : 藤江、田尻、伴野、長谷川、松澤、三木、流、広谷、松本、橋口、笹森、高橋、安保、神山、田辺、石井

### ○新人合宿II 6月19～21日

北ア 徳本峠～横尾BC、涸沢周辺

CL : 伴野、安保、尾関、田尻

### ○個人山行

6月20日 丹沢 葛葉川本谷

CL : 高橋、長谷川、三木

6月26～28日 北ア 屏風岩

東稜 CL : 藤江、安保

6月27～29日 北ア 屏風岩雲稜

CL : 植垣、松澤

6月27～28日 瑞牆山

CL : 兼岩、伴野、長谷川(OB)

6月27～28日 南ア 仙丈岳

CL : 高橋、尾関、松本、田辺

7月12日 中ア 西横川

吉澤

7月16～18日 クワウンナイ川

CL : 高橋、三木

7月18～20日 妙高・火打山

CL : 松澤、神山、広谷

7月21～22日 富士山

CL : 兼岩、伴野、松本

7月21～30日 南ア北部縦走

CL : 安保、吉沢

7月27日～8月4日 北海道 十勝岳縦走

トムラウシ山～旭岳

CL : 三木、小林、広谷、尾関

7月28日～8月8日 北ア縦走

上高地～槍～親不知子不知～日本海

CL : 長谷川、博多、松本

7月29日～8月6日 北ア立山～槍縦走

CL : 松澤、流、田辺

7月30日～8月1日 南ア 甲斐駒ヶ岳 A

フランケ 赤グモ

CL : 藤江、長谷川(OB)

8月5～7日 北ア 滝谷

CL : 藤江、安保、吉沢

8月5～6日 北ア 屏風岩 雲稜

CL : 伴野、長谷川(OB)

8月11～17日 北ア 上ノ廊下

CL : 長谷川(OB)、伴野、安保

8月15日 北ア 前穂岳 四峰

CL : 藤江、植垣、松澤、広谷、松本

8月11～13日 北ア 滝谷

CL : 田尻、三木、流

8月14～15日 北ア 滝谷

CL : 橋口、笹森、高橋、尾関、小林

## ○夏合宿 8月21～30日

北ア 剣岳 熊ノ岩

CL : 藤江、田尻、伴野、三木、吉沢、  
尾関、松本、松澤、広谷、小林、  
長谷川(哲)

## ○個人山行

9月13～14日 北ア 丸山東

右岩稜都立大ルート

CL : 作道、植垣

9月19～22日 南ア 甲斐駒ヶ岳

Aフランケ 赤グモ

CL : 橋口、長谷川

9月17～20日 北ア 裏銀～表銀座偵察

縦走

CL : 藤江

9月28～29日 南八ヶ岳縦走

CL : 博多、尾関、小林、流、広谷、  
松本、吉沢

9月30日～10月2日 屏風岩 雲稜ルート

CL : 藤江、長谷川(哲)

10月5～6日 北ア 屏風岩東稜

CL : 政岡(CMC)、流

10月9～10日 北ア 丸山東壁 緑ルート

CL : 伴野、長谷川(OB)

天気悪く中止

10月10～11日 北ア 幕岩

CL : 藤江、高橋

10月13～18日 白神山地 追良瀬川

CL : 長谷川(OB)、兼岩、安保

10月10日 瑞牆山 山河ほほえみルート

CL : 政岡(CMC)、流

10月10～11日 裾花川

CL : 兼岩、三木

10月16～18日 北ア 幕岩

大凹角ルート

CL : 伴野、高橋

11月14～15日 富士山

CL : 植垣、河西、橋口、高橋、

吉澤、流

## ○プレ冬山合宿

11月21～24日 北ア

遠見尾根～五竜岳～唐松山荘～八  
方尾根

CL : 藤江、田尻、松澤、高橋、  
笹森、松本、吉澤、伴野、橋口広谷、  
小林、尾関、安保、長谷川、三木

## ○個人山行

12月5～6日 八ヶ岳 小同心クラック

CL : 笹森、長谷川(哲)

12月5日 八ヶ岳 阿弥陀北稜

CL : 伴野、博多

12月6日 八ヶ岳 ジョウゴ沢

CL : 伴野、松本

12月12日 戸隠 P3稜

CL : 植垣、伴野

## ○冬合宿

12月20～28日 北ア

葛温泉～七倉～烏帽子小屋～野口  
五郎小屋～水晶小屋～烏帽子小屋  
～七倉～葛温泉

CL : 藤江、橋口、田尻、伴野、高  
橋、三木、松本、尾関、小林、長  
谷川、流、吉澤

12月20日 七倉山荘 デボ

21日 デボ2420m

22日 2790m直下迄デボ

23日 悪天のため沈殿

24日 "

25日 "

26日 野口五郎小屋

27日 怪我人発生

28日 回復せず、下山

## ○個人山行

12月24～31日 北ア 抜戸岳南尾根

CL : 兼岩、長谷川(聰)

1月14～15日 八ヶ岳 ジョウゴ沢

---

CL : 伴野、高橋、三木  
1月30～31日 上高地 雪中キャンプ  
CL : 松澤、博多、楠田(部外者)  
1月15～17日 八ヶ岳 地獄谷  
JAC 東海 長谷川  
2月11～14日 八ヶ岳 ジョウゴ沢  
CL : 橋口、高橋、安保、吉澤、  
内田(OB)  
2月18～19日 戸隠 P1稜  
CL : 兼岩、三木  
2月22日～3月2日 北ア 北鎌尾根  
CL : 宮坂(三重大山岳部)、笹森、  
長谷川(哲) 途中下山  
3月8～9日 八ヶ岳 阿弥陀南稜  
CL : 豊田、松本

### ○春山縦走合宿

3月10～15日 常念岳～槍ヶ岳  
CL : 長谷川(哲)、田尻、三木、吉澤

### ○個人山行

3月23～24日 蓼科山  
CL : 松本、広谷、尾閥  
3月25～31日 南ア 凤凰三山～早川尾  
根～仙丈岳  
CL : 高橋、博多、緒方(部外者)  
3月27～28日 鹿島槍北峰  
CL : 長谷川(哲) 有富(JAC東海)

## 15 平成5年度（1993年度）

チーフリーダー 伴野 達也

### I. 年度総括

冬山合宿において遭難(滑落事故)が発生し、ヘリコプターにより救助された。

### II. 合宿

#### ○新人合宿 5月30日～6月6日

CL : 伴野達也(4) SL : 高橋敦(3)  
三木隆一(3) 博多誠(2) 松本穂高(2)  
吉沢杉洋(2) 広谷智子(2) 石井大介(1)  
伊藤勇太郎(1) 佐々木耕平(1) 藤野稔(1)  
伊藤利信(1) 上山祐貴子(1) 竹本直亮(1)  
原田裕介(1) 山内哲文(1) 吉田政孝(1)  
穂高岳 島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺で雪上訓練、槍沢経由槍ヶ岳往復、上高地下山

#### ○夏山岩登り定着合宿

##### 8月22～29日

CL : 伴野達也(4) SL : 高橋敦(3)  
田尻英秋(5) 三木隆一(3) 博多誠(2)  
松本穂高(2) 伊藤勇太郎(1) 佐々木耕平(1)  
藤野稔(1) 伊藤利信(1) 上山祐貴子(1)  
原田裕介(1) 山内哲文(1)

剣岳 黒部ダム～熊の岩BC、剣岳東面の岩場

##### <VI峰>

Aフェース 中大、魚津高ルート  
Bフェース 京大、京都府大ルート  
Cフェース 剣稜会、RCC、右方ルート  
Dフェース 久留米大、富山大ルート

##### <V峰>

一ノ菱

##### <チンネ>

中央チムニー左フェース魚津高ルート

gチムニー cdクラック

北条・新村ルート、筑豊ルート

左稜線

#### ○プレ冬山合宿 11月20～22日

CL : 長谷川哲也(3) SL : 伴野達也(4)  
高橋敦(3) 三木隆一(3) 松本穂高(2)  
伊藤利信(1) 伊藤勇太郎(1) 上山祐貴子(1)  
原田裕介(1) 山内哲文(1)

11月20日 猿倉～白馬尻

21日 雨のため沈殿

22日 1950m地点まで。悪天候のため下山

#### ○冬山合宿 12月23日～1月1日

CL : 伴野達也(4) SL : 高橋敦(3)  
長谷川哲也(3) 三木隆一(3) 松本穂高(2)  
伊藤利信(1) 伊藤勇太郎(1) 上山祐貴子(1)  
原田裕介(1) 山内哲文(1)

12月23日 晴れ 大平原～尾根上1600m付近TS 新雪50センチ程度

24日 快晴 2000m付近TS ワカンで腰までのラッセルが続く

25日 晴れ 前常念避難小屋

26日 快晴 常念岳～東天井岳～大天荘冬季小屋

27日 風雪 沈殿

28日 風雪 沈殿

29日 晴れ 大天荘冬季小屋～大天井ヒュッテ～赤岩岳(フィックス通過)～西岳～最初のコルTS

30日 晴れ 水俣乗越～ヒュッテ大槍～槍岳山荘冬季小屋

#### <滑落事故の発生>

槍ヶ岳頂上直下の南側斜面をトラバース中に伴野と伊藤(勇)の2名が槍沢方向へ約150m滑落した。伴野はヘリコプターで信大病院に収容され、伊藤(勇)は仲間とともに1月1日に下山した。

31日 風雪 沈殿

1月1日 槍岳山荘冬季小屋～槍平～新穂高温泉(下山)

### III. 個人山行

#### ○岳沢コブ尾根 5月22~23日

L: 伴野達也(4) 高橋敦(3) 三木隆一(3)  
豊田浩太郎(OB) 博多誠(2) 広谷智子(2)  
5月22日 上高地～岳沢B.C～コブ尾根  
の頭～天狗のコル～B.C  
23日 BC～上高地(下山)

#### ○飯縄山 6月9日 松本穂高(2)

#### ○蝶ヶ岳～常念岳 6月19～20日

L: 松本穂高(2) 広谷智子(2) 石井大介(1)  
伊藤利信(1) 藤野稔(1) 上山裕貴子(1)  
佐々木耕平(1) 山内哲文(1) 原田裕介(1)  
6月19日 三俣～蝶ヶ岳ヒュッテTS  
20日 蝶ヶ岳～常念岳～三俣

#### ○屏風岩東陵 6月26～27日

L: 高橋敦(3) 三木隆一(3)  
6月26日 上高地～横尾BC  
27日 東陵～懸垂下降～上高地

#### ○中央アルプス西横川 7月11日

L: 伴野達也(4) 博多誠(2) 広谷智子(2)  
伊藤勇太郎(1) 佐々木耕平(1) 原田裕介(1)  
7月11日 しらび平～西横川遡行～長谷  
部新道～しらび平

#### ○屏風岩 7月19～20日

L: 伴野達也(4) 博多誠(2)  
7月19日 上高地～横尾BC  
20日 横尾BC～T4取り付き(降雨のた  
め下山)

#### ○南アルプス池口沢 7月21～25日

L: 高橋敦(3) 三木隆一(3)  
7月21日 池口～大崩壊地付近TS  
22日 二股～主稜線上TS  
23日 加々森山～光岳～椹沢の頭TS  
24日 大根沢山～大無間山頂TS  
25日 小無間山～田代(下山)

#### ○錫杖岳 7月27～29日

L: 伴野達也(4) 松本穂高(2) 広谷智子(2)  
7月27日 槍見温泉～錫杖沢出合

28日 1ルンゼ

29日 左方カンデ

#### ○南アルプス南部縦走

7月31日～8月7日

L: 広谷智子(2) 伊藤利信(1)  
7月31日 小渋温泉跡付近TS  
8月1日 TS～釜澤～便ヶ島TS  
2日 西沢渡～2478m地点と小聖岳の間  
TS  
3日 上河内岳～茶臼岳～仁田池TS  
4日 仁田岳～易老岳～光岳～椹沢付  
近林道TS  
5日 釜の島小屋～大垂沢手前林道TS  
6日 大無間山登山口～大無間山頂TS  
7日 小無間山～田代(下山)

#### ○北アルプス 剣～槍縦走

7月31日～8月11日

L: 松本穂高(2) 上山裕貴子(1)  
竹本直亮(1) 吉田正隆(1)  
7月31日 けやき平～オリオ谷TS  
8月1日 阿曾原温泉～仙人湯TS  
2日 仙人池～真砂沢～剣沢TS  
3日 TS～室堂～TS  
4日 真砂岳～獅子岳～五色ヶ原TS  
5日 鳶山～中越沢乗越～スゴ乗越TS  
6日 間山～薬師岳～薬師沢TS  
7日 雲の平～水晶岳稜線2800m付近  
TS

8日 水晶岳～鷺羽岳～三俣蓮華山荘  
～双六小屋TS

9日 千丈沢乗越～槍ヶ岳肩TS

10日 槍ヶ岳～槍ヶ岳肩TS

11日 槍沢～上高地(下山)

#### ○南アルプス縦走 8月1～16日

光岳～北岳～甲斐駒ヶ岳～夜叉神峠

L: 博多誠(2) 伊藤勇太郎(1) 原田裕介(1)  
山内哲文(1)  
8月1日 松本～易老度

- 2日 面平～易老岳TS
- 3日 光岳～易老岳～希望峰～仁田岳  
～仁田池TS
- 4日 茶臼岳～上河内岳～聖平TS
- 5日 聖岳～兎岳～百間洞TS
- 6日 赤石岳～大聖寺平～荒川小屋TS
- 7日 前岳～中岳～悪沢岳～デボ<sup>9</sup>地～  
高山裏TS
- 8日 子河内岳～鳥帽子岳～三伏小屋  
TS
- 9日 塩見岳～熊の平TS
- 10日 農鳥小屋～西農鳥岳～農鳥小屋  
TS
- 11日 台風のため沈殿
- 12日 間ノ岳～北岳～左俣大滝～両俣小  
屋TS
- 13日 野呂川越～千丈岳～仙水小屋TS
- 14日 低気圧通過のため沈殿
- 15日 仙水峠～栗沢山～アサヨ峰～早川  
尾根小屋TS
- 16日 白鳳峠～薬師岳～夜叉神峠～夜  
叉神の森(下山)
- クラウン峰登山(日本山岳会東海支部  
遠征隊参加) 5月21日～8月30日
- 長谷川哲也(3)
- 5月21日 マザダーラ到着
- 22日 ラクダによるキャラバン
- 29日 BC到着(4000m) 上部偵察
- 30日 インスガイティー氷河沿いに  
荷上げ
- 6月10日 本隊と合流 パーティー換  
え。C1(5100m) までルート工作
- 12日 C1まで荷上げ(22日まで)
- 23日 C2(5800m) まで荷上げ(28日  
まで)
- 29日 C3(6350m) までルート工作
- 7月2日 C1からC2へ荷上げ(5日まで)  
7～8日 C3予定地の整地
- 14日 C3入り
- 15日 ルート工作
- 20日 C3入り
- 21日 東壁のルート工作に向かうが、  
高度障害のためC1へ下降
- 22日 C1でレスト 隊長以下2名が初  
登頂(7295m)
- 27日 C1からC2へ(4名登頂)
- 28日 C2からC3へ(4名登頂)
- 29日 頂上アタック(3名登頂)
- 8月1日 C1から荷下げ
- 28日 北京にて登頂証明書を受領
- 30日 帰国
- 前穂高岳往復(サマテン山行)
- 8月13日
- L: 松本穂高(2) 中村聰子(部外者)
- 8月13日 サマテン～岳沢ヒュッテ～前穂  
山頂～サマテン
- 北岳バットレス 9月15～16日
- L: 長谷川哲也(3) 伊藤勇太郎(1)  
山内哲文(1)
- 9月15日 広河原～白根御池BC
- 16日 ピラミッドフェース～第4尾根～  
終了点テラス(8P)～尾根上～フェー  
ス後のリッジ(計17P)～北岳山頂～  
肩の小屋～BC～広河原(下山)
- 錫杖岳 前衛フェース(左方カンテ)
- 9月27～28日
- L: 長谷川哲也(3) 伊藤勇太郎(1)
- 9月27日 槍見温泉～錫杖沢出合～錫  
杖岩舎BC
- 28日 左方カンテ(7ピッチ)～右上の小  
テラス～右俣沢下降～BC～槍見温  
泉(下山)
- 唐沢岳幕岩 大凹角ルート
- 9月18～19日
- L: 高橋敦(3) 伊藤勇太郎(1)
- 9月18日 七倉～高瀬ダム～大町の宿BC

- 
- 19日 中央バンド～右稜の頭～高瀬ダム
- 八ヶ岳 小淵沢～赤岳～白駒池  
9月21～23日  
L: 原田裕介(1) 佐々木耕平(1)  
9月21日 小淵沢駅～観音平～編笠山  
～権現岳～キレット小屋TS  
22日 赤岳～横岳～硫黄岳～根石岳～  
天狗岳～黒百合ヒュッテTS  
23日 ニュウ～白駒池入り口
- 妙高山、火打山 10月3～4日  
松本穂高(2)  
10月3日 笹ヶ峰～妙高山～高谷池TS  
4日 火打山～笹ヶ峰(下山)
- 武尊山、至仏山 10月16～17日  
松本穂高(2)  
10月16日 群馬県自然の森～武尊山～自  
然の森  
17日 鳩待峠～至仏山～鳩待峠
- 笠ヶ岳 10月22～23日  
L: 松本穂高(2) 博多誠(2) 伊藤勇太郎(1)  
山内哲文(1) 原田裕介(1)  
10月22日 新穂高温泉～笠ヶ岳～稜線  
分岐TS  
23日 弓折岳～鏡平～新穂高
- 北岳バットレス 10月10～12日  
L: 長谷川哲也(3) 高橋敦(3) 博多誠(2)  
伊藤利信(1) 伊藤勇太郎(1) 上山祐貴子(1)  
佐々木耕平(1) 原田裕介(1) 藤野稔(1)  
10月10日 広河原～白根御池BC  
下部岩壁 十字クラック、ピラミッド  
フェース  
11日 第四尾根  
ピラミッドフェース～第四尾根  
下部フランケ～上部フランケ  
12日 ピラミッドフェース～第四尾根～  
Dガリー奥壁  
BC～広河原(下山)
- 雨飾山 11月3日  
松本穂高(2)  
11月3日 小谷温泉～雨飾山山頂～小谷  
温泉(下山)
- 富士山 12月4～5日  
L: 豊田浩太郎(OB) 松本穂高(2)  
伊藤勇太郎(1) 山内哲文(1)  
12月4日 5合目～7合5勺BC  
5日 BC～山頂(御鉢廻り)～BC～5  
合目
- 谷川岳天神尾根 12月4～5日  
L: 伴野達也(4) 長谷川哲也(3)  
伊藤利信(1) 原田裕介(1) 吉田正隆(1)  
12月4日 天神平スキーランド～熊穴沢避難  
小屋TS  
5日 谷川岳山頂～天神平スキーランド(下山)
- 十石山 12月11日  
L: 松本穂高(2) 松澤朋子(3) 原田裕介(1)  
山内哲文(1)  
12月11日 白骨温泉～2320m付近(積雪  
が多く引き返す)～白骨温泉(下山)
- 鹿島槍ヶ岳赤岩尾根  
12月11～12日  
L: 高橋敦(3) 三木隆一(3) 上山祐貴子(1)  
12月11日 大谷原～高千穂平TS  
12日 TS～(ピストンを試みるも積雪が  
多く諦める)～大谷原(下山)
- 八ヶ岳アイスクライミング  
1月21～23日  
L: 松岡清司(碧穂山岳会) 長谷川哲也(3)  
1月21日 美濃戸山荘  
22日 赤岳鉱泉BC～ジョウゴ沢  
23日 三叉峰ルンゼ～美濃戸口
- 戸隠P1尾根 1月15～16日  
L: 三木隆一 松本穂高  
1月15日 6:50登山口～13:00BC  
熊の遊び場付近BC  
16日 7:20発 7:50ザイルを出す 体系

とおり3P～10:30仮のピーク  
11:30無念の峰 晴れ 先が長そう  
なので時間切れとし下降、BC撤収、  
16:30登山口

○北八ヶ岳 天狗岳 3月20日  
長谷川哲也  
渋の湯～黒百合平～天狗岳日帰り

### ○八ヶ岳 石尊稜 1月30日

L:高橋 松本 山内  
美濃戸山荘6:30～赤岳鉱泉 10:00～  
10:40発～11:25敗退(山内体調不良)  
BC付近で雪上訓練  
石尊稜途中まで～BC撤収～下山

### ○戸隠P 1尾根<パートⅡ>

2月11～13日  
L:三木 上山 長谷川トシさん  
2月11日 ベース(熊の遊び場付近)  
12日 仮ピークまで狭い尾根上に多数  
のパーティーがひしめく。下降決定。  
13日 ベースより下山。

### ○大同心大滝 2月20日

L:酒井秀紀(クラウン登山隊登攀隊長)  
松岡清司 長谷川哲也  
美濃戸山荘～赤岳鉱泉～大同心ルン  
ゼ 2ピッチ、ダブルアックス～美濃戸山  
荘17:30

### ○剣岳 早月尾根 3月7～11日

長谷川哲也(3) 三木隆一(3) 伊藤勇太郎(1)  
山内哲文(1)  
3月7日 松本部室(7:00晴れ) 伊折  
14:00～中山発電所15:50  
8日 4時起床 TS6時発、にわか雨 馬  
場島～松尾平から1560m付近コル雨  
TS  
9日 濃霧、気温が異常に高く沈殿  
10日 4時起床～6時30分出発 早月小  
屋10時30分、気温がグンと下がり降  
雪がある。  
11日 6時15発～鳥帽子岩7:50吹雪 シ  
シの頭への斜面で表層雪崩の可能  
性高く敗退 馬場島16時 ～帰路

## 16 平成6年度（1994年度）

チーフリーダー 長谷川哲也

### I. 年度総括

平成6年度のSAC部員構成は、4年生4名(期中に3名に減少)、3年生1名、2年生5名、1年生数名と少人数でスタートし、期中に何人かが去りました。前々年、前年と上昇志向の部員が次々に山岳会を去り、総会で承認されない闇山行が散見されるなど、組織力・結束力の低下が顕著な状況下で向かえた4年生でした。そんな空中分解しそうな組織の再生と、低迷する個人山行のレベルアップ、信州大学山岳会の再起のため、ベストを尽くしたつもりです。当時、大きく賛否が分かれた新人合宿上高地入山から始まり、冬合宿梅海新道、軽量で機動性のあるダンロップメントの導入など、殻を破り変わってゆきたいという気持ちで一杯でした。

そんななか、個人山行でも積極的に後輩を連れて登攀に出かけました。何度も行った北岳バットレス、屏風岩、錫杖岳、谷川岳一ノ倉沢、滝谷、冬の八ヶ岳、唐沢岳幕岩登攀など、昨日のことのように思い出します。

部室を新品のプレハブで立て替えることができたのもこの年でした。OBのカンパにより費用の70%を調達、そして当時大ブーケイングだった部員一人1万円負担、実作業では井関OB、高橋雄治OB、岩村孝之OBの尽力があり、会社の車輌を動員していただき、松本の部室を立て替えることができました。それまで屋根が落ちていた部室でしたが、新品のプレバブになり、畳を敷き、ここで部会が開け、泊まる事もできる自慢の部室になりました。

小生には、賛否、むしろ何故か批判のほうが多いと思います。当時を振り返ると、いつも心の中に残っているのは個人山行で

の登攀と、とにかく後輩を育てよう、レベルを上げよう、安全を伝えよう、そんなクラブに奔走した大学4年生でした。今こうして自分が管理職になり当時を振り返ると、反省すべきこと、進め方を誤ったと今おもうこともあります。しかし、何よりも信州大学山岳会の再起を願い、ピュアな想いで真っ直ぐに行動したこと、それはいまの自分ではできなくなっているとおもいます。

### II. 合宿

#### ○春の縦走合宿（早月尾根）

3月7～11日

L：長谷川哲也 三木隆一 伊藤勇太郎  
山内哲文

3月7日 松本7:00晴れ～伊折13:00

～14:00 曇り～中山発電所15:50  
伊折までの距離を甘く見すぎた。車では8時間。4時の天気図を取るため、馬場島から一時間手前のスノーケッドに幕営。

8日 起床4:00曇り～TS6:00発にわか雨～馬場島7:00 松尾平8:00～にわか雨から1560m付近コル11:00  
気温が高い。ずぶ濡れになる。ある程度高度を稼いだため、幕営。

9日 起床4:00 雨 沈殿決定

10日 起床4:00 雪 6:30出発～早月小屋10:30 曇り時々雪

9日夕方から冬型になり気温が下がる。1550mを過ぎたあたりから池の谷側に寄れない、顕著な雪庇あり。

11日 起床4:30 雪 6:15出発曇り～エボシ岩7:50

吹雪～獅子岩の登り斜面で表層雪崩の危険高く、天気も悪く下降決定

～8:20早月小屋 雪～下降～馬場島  
13:40～帰路

#### 【感想(長谷川)】

ほんの少し、冬の剣をかじった。経験  
をつみ、いつかは北方稜線へ。

### ○春の縦走合宿(中央アルプス)

2月24～26日

L:高橋敦 伊藤(利) 原田裕介  
2月24日 桂小場7:00曇～大樽非難小  
屋 大雪  
25日 駒ヶ岳アタック 7:15TS発～10:30  
2646m付近にて雪、霧が濃く視界不  
良 敗退決定～14:00TS

26日 7:30TS発～11:15桂小場

#### 【感想(原田)】

天候に恵まれず、不完全燃焼な登山  
だった。

### ○春の縦走合宿(南アルプス仙丈岳)

3月4～6日

3月4日 戸台7:30晴れ～北沢峠  
11:30晴れ  
5日 起床4:00～出発5:30～仙丈岳  
11:30快晴  
6日 戸台～下山

### ○GW合宿(不帰、杓子定着)

4月28日～5月2日

長谷川哲也(4) 高橋敦(4) 三木隆一(4)  
松本穂高(3) 伊藤勇太郎(2) 上山祐貴子(2)  
原田裕介(2) 山内哲史(2)

#### 【主要行程】

小倉池周辺にベースキャンプ  
杓子岳A尾根、不帰II峰甲南ルート、  
III峰B尾根  
4月29日 松本ボックス5:25発～二股  
7:10  
小倉池付近BC8:50着 快晴  
設営後、雪上訓練 13:00～雨、BC～  
30日 3パーティーに分かれ登攀

◆杓子岳A尾根 長谷川 松本 伊藤 山内  
BC4:10～取り付き7:15～開始

7:30晴れ  
終了14:25 にわか雪、霧 下降開  
始14:30  
双子尾根～奥双子コルから杓子沢  
(六左衛門滝懸垂)～BC着18:30

◆不帰II峰甲南ルート 高橋、原田  
4:30BC発～7:30取り付き～10pコン  
テ～II峰13:00曇り、道を間違える～  
18:00I、II峰のコル～ヘルンゼ～BC  
19:30

◆III峰B尾根ルート 三木、上山  
4:30BC～8:40取り付き～2ピッチ  
登攀～10:30懸垂下降開始～12:30  
取り付き～13:00BC ヤブだったの  
で途中で下降

5月1日 起床3:00 激しい雨 5:00  
沈殿決定  
2日 起床3:00 雨 7:00～雪上訓  
練 霧10:30まで BC撤収後下山、  
BC11:05発～二股12:00 松本～自  
家用車で、14:00～反省会

### ○新人合宿(穂高・槍)

5月19～22日

CL:長谷川哲也(4) 高橋敦(4) 三木隆一(4)  
松澤朋子(4) 松本穂高(3) 伊藤勇太郎(2)  
上山祐貴子(2) 原田裕介(2) 山内哲史(2)  
佐々木耕平(2) 斎藤裕基(1) 鶴久格(1)  
前原徹(1) 四宮佳代(1) 園田真吾(1)  
小島龍哉(1) 石田靖(1)

#### 【主要行程】

上高地入山～横尾BC～涸沢(III・IV  
のコル)  
雪上訓練・北穂・奥穂・奥又白池・  
槍ヶ岳、他

## ○夏山合宿(剣岳)

8月20～28日

CL: 長谷川哲也(4) 三木隆一(4)  
松澤朋子(4) 松本穂高(3) 伊藤勇太郎(2)  
上山祐貴子(2) 原田裕介(2) 山内哲史(2)  
佐々木耕平(2) 前原徹(1) 四宮佳代(1)  
園田真吾(1) 長澤哲哉(1) 石田靖(1)  
岸修造(1)

### 【主要行程】

黒部ダム～内蔵助平～熊の岩BC～  
剣岳八ツ峰・チンネ周辺岩登り、他

### 【登攀ルート】

\*八ツ峰六峰Aフェース魚津高ルート・  
中大ルート  
\*八ツ峰六峰Bフェース京大ルート  
\*八ツ峰六峰CフェースRCC・剣稜会  
ルート  
\*八ツ峰六峰Dフェース富山大・久留米  
大ルート  
\*チンネ中央チムニーgチムニーc dク  
ラック  
\*チンネ魚津高ルート・ジヤンダルム3本ク  
ラック  
\*チンネ左下カンテ・左方カンテ・左稜線  
\*源次郎尾根平蔵谷側成城大、名古屋  
大ルート

### ○8月24～31日

メンバー 長谷川哲也 三木 高橋 山  
内 佐々木 上山 石田 長澤 四宮 後藤  
8月24日 トロリーバス7:30発～7:46着  
13:55内蔵助平TS着

25日 4:40出発 ～ハシゴ谷乗越  
6:20～真砂沢ロッジ8:55～熊の岩  
BC13:40

26日

◆Bパーティー L: 高橋 後藤 四宮  
5:20BC発～CフェースRCCルート  
5:30開始から5ピッチ～Cフェース

頭9:00

11:00開始～Cフェース剣稜会ルート  
5ピッチ体系通り  
13:45 Cフェースの頭  
15:10 BC着  
◆Eパーティー L: 山内 佐々木  
6:12～Bフェース京大ルート  
3ピッチ体系通り～7:10Bフェース頭  
8:02～Aフェース魚津港ルート  
3ピッチ体系通り～9:35Aフェース頭  
10:40～ Aフェース中央大ルート  
3ピッチ体系通り～12:05Aフェース頭  
13:30 BC着

◆Dパーティー L: 原田 上山  
6:00～Cフェース剣稜会ルート  
体系とおり4ピッチ8:00終了  
9:30～Aフェース魚津高ルート  
3ピッチ体系通り、11:00終了  
12:20～Bフェース京大ルート  
3ピッチ体系通り13:45終了

【感想(上山)】今日は慣らしというも  
どてもドキドキだった。

◆Aパーティー L: 長谷川 岸 石田  
5:50～Aフェース魚津高ルート  
8:00Aフェースの頭  
10:20～Dフェース 富山大ルート  
7ピッチ体系通り～13:50 Dフェー  
スの頭  
15:35 熊の岩BC帰着

27日

◆Aパーティー L: 長谷川 岸 長澤  
5:40～Cフェース剣稜会～5ピッチ  
体系通り  
8:00終了  
9:10 ～Aフェース中大ルート  
3ピッチ体系通り 12:30終了

【感想(長澤)】

中大ルートで腕が固まり(パンプ)遅れ

てしまう。9月は岩トレに専念したい。

- ◆Dパーティ L: 佐々木 上山  
5:20BC発～ 6:20開始Bフェース  
京都大ルート  
2ピッチ体系通り、7:40終了  
9:30～Dフェース富山大ルート  
5ピッチ体系通り、12:20終了
  - ◆Bパーティ L: 高橋 四宮 前原  
BC発5:20～6:15開始～Dフェース  
富山大ルート～6ピッチ体系通り～  
10:05終了
  - ◆Cパーティ L: 三木 石田 後藤  
5:50～Bフェース京大ルート～3  
ピッチ～8:30Bフェースの頭終了  
9:55～Aフェース中大ルート 2ピッ  
チ～13:40Aフェース頭～14:40BC
  - ◆Eパーティ L: 山内 原田  
5:55～Dフェース久留米大～5ピッ  
チ～8:30終了 9:50～Bフェース京  
都府大ルート～3ピッチ体系通り～  
11:40終了
- 28日
- ◆Bパーティ L: 高橋、石田、長澤  
4:40BC発～7:45コルから中央チム  
ニ～8:50開始～中央チムニ～左稜  
線上部～14:40終了 14:50下山開始
  - ◆Eパーティ 山内 上山  
(本峰A1A2ルート)  
7:50本峰南壁A1開始から7ピッチ  
～10:50終了 A2開始11:50～4ピッ  
チ～14:10終了 15:30BC着
  - ◆Dパーティ L: 原田 佐々木  
(源次郎尾根、中央ルンゼルート)  
BC発4:30～剣沢5:35～取り付き  
6:20～1ピッチで引き返す  
終了8:00  
ここから平蔵谷を詰めてA2ルートへ  
取り付き10:35～6ピッチ+歩きで本

峰～12:55 心のそこからしんどく休  
憩、14:35発～BC着15:30

- ◆Aパーティ L: 長谷川 後藤 前原  
(チンネ、左下カンテ～左方カンテ)  
4:40BC発～7:20開始から6ピッチ  
11:55中央バンド着、順番待ち  
13:05開始～4ピッチ～14:45チ  
ンネ頂上 15:10下降開始
  - ◆Cパーティ L: 三木 岸 四宮  
(北条新村ルート～Gチムニ CDク  
ラック)  
9:05開始～4ピッチ～12:20中央バ  
ンド 13:05 CDクラック 2ピッチ～  
14:35チムニ 15:10 下山
- 29日
- ◆Cパーティ L: 三木 長澤 石田  
5:30～Bフェース京都府大ルート～  
敗退 6:30～Aフェース中大ルート  
～8:40終了 9:35～Aフェース魚津  
高～11:30終了
  - ◆Dパーティ L: 山内 佐々木  
(チンネ北条新村～左方カンテ)  
5:15岩小屋～7:00登攀開始～3  
ピッチ8:40終了 9:30～左方カンテ  
ルート～3ピッチ～11:07終了 13:10  
BC着
  - ◆Eパーティ L: 原田 上山  
(チンネ左稜線)  
8:20登攀開始～13:50終了～14:30  
下降開始～16:00BC着
  - ◆Aパーティ L: 長谷川 前原 岸  
Dフェース久留米大ルート  
Aフェース中大ルート
  - ◆Bパーティ L: 高橋 岸 後藤  
6:45 京都大ルート取り付き～敗退  
8:00 久留米大ルート～5ピッチ  
11:35終了～13:20BC着

30日

◆Aパーティー(本峰縦走)

L:高橋 三木 石田 長澤 岸 後藤 四宮

◆Bパーティー L:長谷川 前原

(源次郎尾根平蔵谷側成城大ルート)

BC発5:05～I峰頂上7:15 取り付き8:20、開始9:50～体系通り5ピッチ～終了12:45～BC14:25

【感想(長谷川)】

成城大ルートはルートファイディングが難しいが、わかつてしまえばフリクションが効いて、楽しい。夏合宿で一番充実した登攀だった。

◆Cパーティー L:佐々木 上山

(源次郎尾根平蔵谷側名古屋大ルート)

5:20BC発～8:20取り付き～開始9:10

4ピッチ～12:30終了～14:40BC

【感想(上山)】

今回の合宿で一番恐怖体験。3pの核心部で3歳は老けた。高度感を味わう余裕なし。

31日 (下山)

起床3:30、撤収4:40、BC発5:15

出合6:05、真砂沢6:45～7:10

ハシゴ谷8:25～内蔵助平9:45

黒部ダム14:00～松本16:10

《夏の縦走合宿》

○北アルプス縦走合宿 8月2～13日

中の湯～黒部～白馬～親不知

L:山内哲文 佐々木耕平 岸秀蔵 前原徹

8月2日 松本＝中の湯6:40晴れ～焼岳9:30～上高地 12:10～横尾 TS16:20晴れ

3日 横尾5:20晴れ～二股6:07～肩小屋12:00～槍ヶ岳P 14:00晴れ～肩 TS16:00

4日 TS4:30ガス～双六岳9:36ガス～

三俣蓮華岳 11:10晴れ～黒部小屋  
13:11晴れ

5日 TS4:42晴れ～黒部五郎岳6:36

晴れ～薬師峠TS 12:45(黒部五郎岳、快晴)

6日 TS4:42晴れ～薬師岳7:08～スゴ

乗越TS10:00(北薬師で雷鳥と接触)

7日 TS4:40～越中沢岳7:10～五色

が原TS10:55

8日 TS4:40～雄山～真砂岳10:00～

三田平12:20 晴れ

9日 TS4:35晴れ～剣岳6:35晴れ～

TS二股13:20

10日 TS4:57晴れ～仙人池ヒュッテ

6:36晴れ～阿曾原温泉10:05晴れ～樺平15:10～祖母谷温泉16:40(水平歩道は長い、ババ谷温泉は最高)

11日 TS4:40～不帰避難小屋9:40晴れ～白馬岳TS15:10晴れ(2,000mアグの日)

12日 TS4:52～白馬岳5:25晴れ～雪倉岳7:35晴れ 朝日岳10:40晴れ～黒岩平TS13:23(白馬岳ピークからの雲海がきれい)

13日 TS～犬が岳8:57～親不知15:00

(日本海の水は気持ちよい)

【感想と反省】

山内：調味料袋等忘れ物が多かった。

エッセンは美味しい日が多かったがたまに失敗した。縦走としてはとても天気がよく快適だった。

前原：楽しかったが、足痛かった。

岸：足を捻挫した。エッセンで失敗した。

佐々木：長くつらい旅だった。しかしオレはそこにひとつ答へを見つけた。そう、青春とは何かという答へを。これをばねにこれからも登って登って

歩いて歩くぞ。

## ○南アルプス縦走 8月8～19日

- 8月8日 塩川7:17快晴～三伏峠小屋11:20～三伏小屋 13:20雨 タクシーで塩川まで入ることが出来た。暑さのため少し疲れ気味だった。
- 9日 4:00TS快晴～本谷山6:25快晴～塩見岳8:55 北荒川岳11:00～熊ノ平TS14:15快晴 塩見岳からのくだけりはガレ場が続いたが危険は少ない。その後道も陥しくなく、昨日より快適。
- 10日 5:15TS発～農鳥小屋TS8:00～農鳥岳ピストン 8:40快晴～西農鳥岳頂上9:15晴れ～農鳥岳 9:50～11:05晴れ～TS12:00曇り 見渡せる登山道が続き、登りもわずかで楽すぎる行程だった。
- 11日 4:20TS曇り～間ノ岳5:50霧～北岳山荘7:20雨 吊尾根分岐点8:20晴れ～北岳頂上8:50晴れ 両俣小屋30分ほど手前TS12:45 晴れ 北岳からの下りが急で、足を痛めないか心配だった。大滝付近は道幅が狭く危険。TSは正規ではないが、水場も近く快適。
- 12日 3:45TS雨～4:30両俣小屋分岐点、雨～6:05横川岳頂上晴れ～7:00高望池晴れ 10:35大仙丈頂上晴れ～11:20仙丈岳、雨～14:50長衛小屋TS 雨 行程が長く小雨のヘッドライト河原歩き、しかもあいにくの天気、残念だった。長衛小屋はファミリーキャンパーも多く、すっかり下界。
- 13日 4:30TS発～6:45栗沢岳、晴れ～7:55アサヨ峰 晴れ、早川尾根小屋10:05曇り、10:50広河原峠 11:55

白鳳峠～以降雨～13:05高峰～14:25

地蔵岳 15:05鳳凰小屋

赤沢頭のあたりから景色が一変する。真っ白な花崗岩と砂地で異様な景色が広がるが、神秘的で小雨と霧で益々幻想的、個人的に鳳凰三山に魅了されてしまった。晴れているときも見てみたい。

14日 4:40TS発～快晴～6:10観音岳～6:50薬師岳～杖立峠10:50曇り～夜叉神峠11:40曇り～12:45登山口鳳凰小屋からの登りでみた朝焼けが強く印象に残る。薬師から見渡す今まで歩いてきた山々と富士山。

### 【感想(上山)】

一言で言うと意味の大きい縦走になった。1年の二人には十分安心を与える自分でなかったかもしれないが、私なりに精一杯やれました。少しでも笑える思い出が残る縦走になつていればと思います。

## ○北海道縦走 8月1～11日

- L：原田 小島 後藤 四宮 長澤
- 8月1日 松本～新津
- 2日 新津～函館～夜行列車～札幌
- 3日 札幌～上富良野～バス～十勝岳温泉  
駐車場近くの登山口から約5分歩いたところに看板、そこから下った砂防ダム付近にヤミ天。
- 4日 TS発5:40曇り～富良野岳8:40ガス～上ホロ小屋12:15 霧強し
- 5日 TS発5:50濃霧～上ホロ頂上6:05  
霧～十勝岳7:30晴れ～美瑛岳10:00  
霧～美瑛非難小屋11:40晴れ(途中雪渓あり)
- 6日 TS発4:50～石垣山5:30晴れ～ヤミ天がバレル オプタテシケ山7:30  
晴れ～二つ沼14:45晴れ

7日 TS発5:50霧風強し～7:35南沼  
激しい霧と風のため、南沼にてストップ  
8日 激しい霧と風のため、沈殿。  
9日 5:15TS発～濃霧だが出発～6:25  
トムラウシ岳～化雲岳9:35(ルート  
間違え北沼から登る)五色岳10:45  
晴れ～大沼14:10霧  
10日 TS発4:35～五色岳7:05～忠別  
岳8:50霧 白雲岳小屋TS13:00晴れ  
(小屋のババアに注意)  
11日 TS発4:20～白雲岳分岐4:50曇  
り～白雲岳5:15 北海岳6:35～旭  
岳8:05曇り～黒岳11:40曇り ロー  
プウェイ駅13:25曇り～1425登山口  
(層雲峠温泉は310円)

#### 【感想(原田)】

1年生の皆さん、よく頑張ってくれま  
した。オレのリーダーとしての資質は  
まだまだ、人を引っ張ることの難しさ  
を感じた。一緒に行つた仲間が楽し  
かったと思えば、この山行は成功。

#### ○「プレ冬合宿(白馬乗鞍岳)」

##### 12月 2～4日

長谷川哲也(4) 三木隆一(4) 松澤朋子(4)  
松本穂高(3) 伊藤勇太郎(2) 上山祐貴子(2)  
原田裕介(2) 山内哲文(2) 佐々木耕平(2)  
前原徹(1) 四宮佳代(1) 園田真吾(1)  
長澤哲哉(1) 石田靖(1) 岸修造(1)

#### 【主要行程】 天狗原～白馬乗鞍岳

12月 2日 松本発6:00 ゴンドラ終点  
発9:30～天狗原15:10  
3日 BC発～白馬乗鞍岳10:30 BC着  
12:00 天気が悪い。冬型が強まり  
つつある。  
4日 起床5:30～BC撤収7:30雪～ゴ  
ンドライブ11:30

#### ○「冬山合宿(梅海新道)」

##### 12月 23～30日

長谷川哲也(4) 三木隆一(4) 松澤朋子(4)  
松本穂高(3) 伊藤勇太郎(2) 上山祐貴子(2)  
山内哲文(2) 佐々木耕平(2)  
前原徹(1) 四宮佳代(1) 長澤哲哉(1)  
岸修造(1)

#### 【主要行程】

白鳥山を目指すも、坂田峠敗退  
12月24日 松本4:30～親不知8:25着  
9:30発晴れ ジョリーのような大き  
な犬に送られる 入道山11:00～尻  
高山13:10～坂田峠14:30晴 幕営  
25日 起床4:30  
6:50雪のため沈殿決定  
26日 起床4:30～出発6:40～12:15白  
鳥小屋 偵察隊13:00発～10.26のコ  
ル14:00～14:30白鳥小屋着  
27日 4:50起床、待機  
28日 起床5:00～ 天気予報では富山  
は昼過ぎから冬型 6:30偵察隊出発  
雪強し～ABC予定地9:30  
11:30BC帰着  
29日 起床4:30 吹雪 敗退決定 白  
鳥小屋7:00～親不知下山14:55 に  
わか雪 ～松本19:30

#### 【感想】

敗退するかどうか難しい判断だった  
が、残りの食料と燃料、メンバーを  
考慮すると安全が得策か。

### III. 個人山行

#### 《春》

#### ○鹿島槍ヶ岳北壁主稜 4月 2～4日

植垣健太郎(OB) 高橋敦(4)  
4月 2日 荒沢出合～第一クーロアール  
～天狗の鼻SH  
3日 8:00主稜取り付き～13ピッチ～南  
峰と北峰のコルSH 18:15  
4日 6:00SH～赤岩尾根8:00～尾根

- 
- の末端10:30～鹿島部落
- B合宿参加 5月3～5日  
伊藤勇太郎のみ  
不帰岳東面、杓子岳東面
- 《夏》
- 錫杖岳 左方カンテ 7月10日  
長谷川哲也(4) 上山祐貴子(2) 山内哲文(2)  
佐々木耕平(2)  
日帰り 松本2:30～槍見温泉4:40～  
取付6:50 登攀開始7時～ルート図通り  
8ピッチ終了 11:45 12:15懸垂開始、  
取付16:30 槍見温泉18:15下山 晴れ
- 甲武信岳 釜の沢 7月14日(木)  
長谷川哲也(4) 前原徹(1)  
松本3:30～ 7:00遡行開始～  
信州谷出合10:20～曲滝11:00  
往路下山 終了15:20
- 屏風岩 雲稜ルート  
長谷川哲也(4) 山内哲文(2)  
松本2:45～坂巻温泉4:00～マウンテンバイク～横尾5:45～T4尾根取付  
6:40 T4 7:40～8:00～6ピッチ体系通り 終了11:00～懸垂下降 T4 12:15  
T4尾根取付 13:00～横尾～マウンテンバイク～上高地～坂巻温泉15:20 松本部室16:50  
自家用車とマウンテンバイクフル活用で屏風岩日帰り。どんなに忙しくても充実感が疲れを吹き飛ばしてくれた。
- 錫杖岳 1ルンゼ本流ルート  
7月21日(木)  
長谷川哲也 原田裕介  
松本2:15～槍見温泉4:20 出合5:30  
取付6:20～6:35開始  
1P～4Pは体系通り、5Pわかりにくい  
6Pカンテ～チムニー、抜けて終了10:20  
同ルート下降取付き12:10から槍見温泉
- 13:35 終日快晴
- 鳥海山(山形県側から) 7月23～24日  
松澤朋子(4) 上山祐貴子(2) 伊藤利信(2)  
7月23日 酒田駅9:03～吹浦経由鉾立行き 庄内交通バス～鉾立(象潟口五合目) 10:40 13:35御由ヶ原(晴れ→雨) 14:00御苗代(雨)、雪渓を渡りTS14:30  
24日(日) TS5:35発～6:35 10合目御本社 7:00新山頂上2236メートル  
7:50発 10:20河原宿～11:50横堂～13:25家族旅行村  
台風の影響で天気はいまひとつだったが、お花畠は素晴らしかった。道はよく整備されており快適に歩くことが出来た。
- 西横川遡行  
原田裕介(2) 三木隆一(4) 佐々木耕平  
日付不明おそらく7月  
4:00松本～6:00駐車場 しらび平行  
きのバスに乗る 6:25しらび平～6:30  
取り付き開始 高巻きは殆どせず途中、  
ザイルを40m出す。晴天続きのため水  
が殆ど無く藪こぎで長谷部新道に突き  
当たる。11:30遡行終了 12:00千畳敷  
～12:50宝剣岳～14:00千畳敷 14:20  
ロープウェイ～しらび平から駐車場ま  
で歩く。駐車場15:20 雨
- 火打山・裏金山遡行 7月29～30日  
小林詢先生 松本穂高(3)  
杉の沢橋8:30晴れ～裏金山谷出合  
10:05 10:25発～1700m付近18:35晴  
れ TS5:45曇り 稜線10:20～金山  
10:35 杉の沢橋22:45 雲  
登攀困難な滝の連続、緊張の高巻きト  
ラバース抜けてからのひどい藪こぎな  
ど、いろんな面でかなりシビアな山行  
だった。でもだからすごく楽しかった。

遡行図を作ったので、欲しい方は連絡して欲しい。(松本)

### ○谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子沢奥壁中央カンテ 7月25~26日

長谷川哲也(4) 山内哲文(2)

7月25日(月) 初日 松本17:00~一ノ倉沢出合21:30泊

26日(火) 晴 出合5:00発 濃霧~テールリッジ末端5:15~取り付き6:15  
登攀開始6:30 1P~4Pは体系通り  
5P 中央カンテ中央部からチムニーIV 6P カンテ中央部からフェースを上るV+ 7P 左側から四畳半テラス~V 9P~10Pは体系とおり 終了  
9:15 快晴 台風の影響で大気の状態が不安定のため、烏帽子岩を南側から巻いて南稜を下降。下降開始10:00~南稜テラス12:00一の倉沢出合13:05 晴

#### 【感想】

谷川岳の岩場は登攀以外に、アプローチや抜けた後の草付など、気の抜けないところが多い。こういうやさしい所で安全への気を抜くと大怪我に繋がる。天候も変わりやすいし遭難者が多い理由が少しあつた気がする。上級生不足の打開策として、夏合宿で2年生に1年生を引っ張ってもらうため、この夏3回本チャンに行った。クラシックルートを単に登だけではノルマのようだが、積極的に参加した2年生を見ると、充実感が得られた。力がついてきた者もおるが過信しないで欲しい。結果的にこれはこれで2年生のためになつていると思うが上級生のツケを払わせているような気もして申し訳ない気もある。(長谷川)

### ○北穂高岳滝谷 8月4~7日

長谷川哲也 前野一真(医学部、部外者)

8月3日 移動日 松本13:30~サマ天16:00快晴

4日 サマ天6:00~横尾8:15~30快晴~涸沢10:30~11:15~南稜テラス13:30TS

5日 登攀(第一尾根ノーマルルート) 取付5:25から7ピッチほぼ体系通り 8:05終了、天気不安定、この日は待機

6日 登攀(P2フランケ早大ルート) B沢下降~開始6:00~1Pはランナウトが長くキャメロットで確保、朝一発目のV+はつらい。

2P 左上気味に登る、わかりにくい。  
3P~4P 体系通り 終了8:00

登攀(ドーム西壁雲稜ルート)

C沢左俣下降、すごく悪い 開始9:00 1P~4Pは体系通り

4P プロテクションが古く、核心部での墜落は致命傷になる可能性。終了10:45 登攀(ドーム中央稜)

開始11:45~6P体系通り~終了12:55

登攀(ドーム北壁、右ルート)

開始13:45小雨 体系通り~終了14:45 ガス 南稜テラスTS15:30

7日 南稜テラス6:00発~サマ天11:00

#### 【感想】

夏場の涼しい滝谷は快適。来年の3年生は是非この時期に滝谷に行ってエンジョイしつつ実力を上げて欲しい。

### ○北ア・北鎌尾根~奥穂・前穂縦走

8月9~13日

L: 松本穂高 博多誠(部外者)

8月9日 高瀬ダム6:45晴れ~湯俣9:20~千天出合12:48~北鎌沢出合15:00晴れ

10日 TS5 : 25快晴～北鎌沢右俣～北鎌のコル8 : 45晴れ(博多体調悪く、行動打ち切り)

11日 TS5 : 05晴れ～独標トラバース7:35～北鎌平10:25-10:40(途中TS多数あり)～槍ヶ岳11:34晴れ～肩11:55～設営後登攀

#### 【登攀記録】

(小槍南面フェース右ルート)

13:35 開始 14:10 終了、14:30～14:45 同ルート

懸垂下降、リード松本、3Ⅲ+ 20m  
技術的には難しくないが岩がもろく  
慎重に上りたい。取付は小槍と曾孫槍  
のコル、コルから一段登り、ホールド  
豊かなリッジを7m、リッジ無くなつた  
ところからフェースを3mトラバースチ  
ムニーに入る。チムニーはチョックス  
トンあり上りやすい。チムニーを7m  
登り、続く凹各気味フェースを浮石に  
注意しながら登ると終了点。

12日 TS5 : 14晴れ～南岳6:53～大キ  
レット～北穂高岳9:30晴れ～涸沢  
岳11:00～白出のコル11:55晴れ

13日 TS5 : 10快晴～奥穂高岳5:40～  
6:00～前穂高岳 7:15-7:34～岳沢  
～サマ天10:33快晴

#### 【感想(松本)】

北鎌尾根は思っていたより楽に歩けた。  
ザイルピッチは無く、問題は天候判断とRFだけなので誰でもいけるでしょう。  
小槍の登攀、ものすごく楽しい、  
でもあそこでアルペン踊りをするのは  
相当な勇気がいることがわかつた。

#### ○北アルプス 8月13～21日

(白旗史朗撮影助手 長谷川哲也)

8月13日 中房温泉11:50～合戦尾根～  
燕山荘16:00

14日 燕山荘付近にて終日撮影 終日

快晴

15日 燕山荘12:00～ヘリ～槍の肩小屋

12:15 終日快晴、午後撮影

16日、17日 終日快晴、槍ヶ岳で撮影

18日 3:30起床4:30出発～南岳小屋  
12:00 午後撮影

19日 南岳小屋8:00 曇 キレット

北穂小屋11:00 曇

20日 8:10北穂小屋～10:00涸沢  
ヒュッテ、午後撮影

21日 潤沢9:00～13:00サマ天

#### ○北岳バットレス 9月21～22日

(下部フランケ～Dガリー奥壁)

L：山内 四宮

9月21日 松本＝広河原12:50晴れ～  
分岐14:50晴れ～テン場15:15晴れ  
(テン場はヤミ天で分岐近くにある)

22日 TS4 : 05晴れ～Dガリー大滝取付  
7:25晴れ 下部フランケ3P～懸垂  
下降開始10:20雨～取付11:00雨～  
TS12:20雨～広河原14:00雨 朝、暗  
いうちから歩きだしたら道を間違え  
て時間を浪費した。3P目で雨が降り  
出したため懸垂下降して下山した。

#### ○燕岳～餓鬼岳縦走 10月8～10日

L：前原徹 四宮佳代

10月8日(土) 曇り、稜線上 晴れ

5:30合戦小屋登山口～5:53第一  
ベンチ～6:35第二ベンチ～7:07第  
三ベンチ～7:32 富士見ベンチ～  
8:04合戦小屋～9:30燕山荘TS

10:30より燕岳ピストンから10:45山頂

9日(日) TS発5:20～燕岳5:40～北  
燕岳5:50～東沢乗越～東沢岳

8:12～ケンズリ10:15～餓鬼岳TS

11:05 12:00より餓鬼岳ピストンか  
ら12:05山頂、15:30TSに戻る。

10日(月) 4:15起床～朝日を餓鬼山頂  
で待つ 6:00出発～7:20大嵐山～  
8:47魚留の滝 9:42日沢砂防堤～  
9:49三俣～11:42信濃常盤駅

#### 【感想(前原)】

水の心配をしていたが、17リットル荷揚げしていたので問題なかった。(秋のため) 紅葉が素晴らしい、日程にも余裕があり、何より景色が最高だった。個人山行はドンドンすべき。

#### ○明星山P6南壁 10月9～10日

長谷川哲也 CMCの方

10月9日 登攀ルート(フリースピリッツ)

パートナー 瀧山雅博

登攀開始6:05 曇り 終了10:50

晴れ TS11:40

ほぼ体系通り。ここは5.10aも無いとおもう。もう一度行きたいと思う楽しいソレート。

10日 登攀ルート(クワトロ)

パートナー 松原直明

登攀開始6:10 晴れ～ 終了13:20

再登者が他のルートに比べて少なく、残地がきわめて少ない。ルートファインディング難しい。エイリアンとキャメロット、多数必須。

#### ○明星山P6壁 10月10日

L: 松本穂高 佐々木耕平

取付5:30 体系通り10:30終了、晴れ  
12:00下山 晴れ

#### 【感想(松本)】

3P目のかぶっている人口登攀が怖かった。あとは簡単で面白い。

#### ○谷川岳一ノ倉沢烏帽子沢南稜登攀

L: 松本穂高 四宮佳代 長澤哲哉

一ノ倉沢出合5:35晴れ、南稜テラス  
7:37快晴 体系通り 11:25終了～同  
ルート懸垂 出合15:30(長澤体調不

良、南稜テラス待機)

#### 【感想(松本)】

天気が良くてよかったです。非常に混んでいて順番待ちとなった。ルート自体は非常に簡単で物足りない感じがした。

#### ○苗場山 10月16日

L: 四宮佳代 松本穂高

長野7:30～登山口10:30晴れ すぐ出  
発 10:50 四合目の水場

12:30 頂上着～13:00 14:55 登山  
口着 曇り 九合目から頂上までの景色  
が最高

#### ○明星山P6南壁 左岩稜ルート

##### 11月9日

長谷川哲也 上山裕貴子

松本=駐車場7:30～取付

7:45晴れ 開始8:00～体系通り

13:00終了 13:45駐車場 終日快晴

#### 《冬》

#### ○八ヶ岳阿弥陀岳 12月18日

L: 長谷川 三木 上山 長澤

日帰り 松本5:30～美濃戸山荘7:00  
～行者小屋 9:30晴時々雪～阿弥陀岳  
11:30晴時々雪 美濃戸山荘15:00

#### ○八ヶ岳 大同心南稜ルート

L: 長谷川 山内

松本4:30～美濃戸山荘6:00～6:30  
赤岳鉱泉7:35～45～取付8:55～開始  
9:50 4ピッチ体系通り、肩に出る さら  
に1ピッチ ドーム終了点13:40～  
14:00 赤岳鉱泉～美濃戸山荘17:30

#### ○唐沢岳幕岩 山嶺第二ルート

##### 2月18～19日

L: 松岡清司(クラウン登山隊)

長谷川哲也

2月18日 七倉7:25晴時々雪～金時滝  
8:55～9:05 開始12:10～4ピッチ

---

(人工含む) ハコハング下ビバーク

20:00

19日 6:00開始～2ピッチ～中央バ  
ンド9:45～体系通り～16:55終了  
大凹角を懸垂開始17:30終了～ 大町  
の宿17:45～七倉下山

【感想(長谷川)】

松岡君のおかげで登ることができ  
た。寒かった、怖かった。夏とは違つ  
て難しい。冬壁が4年間の学生生活  
での目標であり、この登攀が僕にとつ  
ての集大成となった。

※体系通り：ルート図通りのこと

以上、平成6年度の参考記録  
(文責 長谷川哲也)

## 17 平成7年度（1995年度）

チーフリーダー 松本 穂高

### I. 年度総括

- ・冬合宿の成功が特筆できる。10泊11日行程を乗り切れたのはタフな精神力をもつメンバーが多かった賜である。
- ・各メンバーの技量と趣向に合わせた個人山行を多く実施できた。
- ・前穂屏風岩での墜落事故、南ア鋸岳での雪崩滑落事故の2件の傷害事故があった。この際の留守本部を含め、OB諸氏には多大なお世話をいただいた。
- ・在長野部員を中心として、冬季の戸隠への執念が見られた。
- ・岩トレは松本在住の上級生が少なく、難儀した。
- ・豊田浩太郎OBに現役留守をお願いすることができたびがあり、大変助かった。
- ・キスリングからガッシャーブルムへの切り替えが進んだ。

### II. 合宿

#### ○新人合宿 5月21～28日

CL : 松本穂高(4) SL : 原田裕介(3)  
伊藤勇太郎(3) 上山祐貴子(3) 山内哲文(3)  
岸秀蔵(2) 佐々木耕平(2) 長澤徹哉(2)  
前原徹(2) 松澤朋子(5) 磯部和哉(1)  
小林茂幹(1) 堀崇行(1) 花谷泰広(1)  
原田亮介(1)  
本隊…島々～徳本峠～横尾BC、涸沢  
周辺で雪上訓練、北穂往復、松高  
尾根～奥又白池、槍沢経由槍ヶ岳往  
復、上高地下山  
登攀隊…前穂北尾根(松本・上山)、前穂  
北尾根(原田・前原)、屏風岩右岩壁  
ルンゼ状スラブルート(佐々木・山内)

#### ○夏山岩登り定着合宿

8月23日～9月1日

CL : 松本穂高(4) SL : 伊藤勇太郎(3)

原田裕介(3) 長澤徹哉(2) 前原徹(2)

岸秀蔵(2) 磯部和哉(1) 小林茂幹(1)

堺崇行(1) 花谷泰広(1) 原田亮介(1)

剣岳東面の岩場登攀 八ツ峰VI峰、チ  
ンネなど

8月23日 黒部ダム～内蔵助平TS

24日 TS～梯子段乗越～真砂沢出合～  
熊の岩BC

25日 八ツ峰VI峰Aフェース魚津高、C  
フェース剣稜会、CフェースRCC、A  
フェース魚津高

26日 八ツ峰VI峰Dフェース京大～久留  
米大、Cフェース剣稜会、Dフェース  
富山大、CフェースRCC～Aフェース  
中大、Dフェース富山大～Aフェース  
中大

27日 チンネ 左下カンテ～aバンドbク  
ラック、gチムニー cdクラック、北条  
・新村～aバンドbクラック、左稜線、  
八ツ峰VI峰Aフェース魚津高

29日 チンネ 中央チムニー～左方カン  
テ、左稜線、源治郎尾根、本峰南壁  
AII

30日 八ツ峰VI峰Dフェース富山大～北  
方稜線～本峰南壁AII、源治郎尾根  
I峰上部平蔵谷側成城大、前剣支  
稜、八ツ峰VI峰Dフェース久留米大～  
CフェースRCC～Cフェース剣稜会

31日 BC～内蔵助平～黒部ダムTS(雨  
運休)

#### ○プレ冬合宿 12月1～4日

CL : 山内哲文(3) SL : 松本穂高(4)

松澤朋子(5) 長澤徹哉(2) 岸秀蔵(2)

前原徹(2) 磯部和哉(1) 小林茂幹(1)

堺崇行(1) 花谷泰広(1) 原田亮介(1)

12月1日 雪 八方尾根～2460mTS  
2日 雪 TS～唐松岳～唐松山荘TS  
3日 吹雪のため沈殿  
4日 雪 五竜岳を断念 TS～八方尾根  
下山

#### ○冬合宿 12月24日～1月3日

CL: 松本穂高(4) SL: 伊藤勇太郎(3)  
山内哲文(3) 長澤徹哉(2) 前原徹(2)  
岸秀蔵(2) 磯部和哉(1) 小林茂幹(1)  
堺崇行(1) 花谷泰広(1) 原田亮介(1)  
ルート: 新穂高温泉～鏡平～双六小屋  
～西鎌尾根～槍ヶ岳～横尾尾根～  
上高地～坂巻温泉  
12月24日 松本＝中津川＝高山＝新穂高  
温泉  
25日 雪 新穂高～弓折尾根1500m地点  
TS  
26日 雪 TS～弓折尾根1874m地点TS  
27日 雪 TS～鏡平TS  
28日 晴 TS～弓折岳～双六小屋TS  
29日 雪 吹雪のため沈殿  
30日 雪 吹雪のため沈殿  
31日 晴 双六小屋TS～槍ヶ岳山荘  
1月1日 雪/晴 槍ヶ岳往復 午前は吹  
雪で沈殿  
2日 晴 槍ヶ岳山荘～横尾尾根～横尾  
3日 晴 横尾～河童橋～坂巻温泉

### III. 個人山行

#### ○八ヶ岳西面 4月21～23日

CL: 伊藤勇太郎(3) 前原徹(2)  
4月21日 美濃戸口～赤岳山荘TS  
22日 TS～赤岳鉱泉BC～石尊稜取付  
偵察  
23日 BC～赤岳主稜撤退～赤岳～地  
蔵尾根～下山

#### ○北ア中崎尾根 4月26～27日

CL: 松本穂高(4)

26日 新穂高温泉～槍平TS  
27日 TS～千丈沢乗越～中崎尾根～槍  
平～新穂高

#### ○北ア立山 雄山東尾根

##### 5月3～4日

CL: 松本穂高(4) 長澤徹哉(2) 前原徹(2)  
3日 黒部平～雷電峰～雄山TS  
4日 TS～大汝山～別山～剣御前～室堂

#### ○南ア 凤凰三山 4月29日～5月2日

CL: 上山祐貴子(3) 前原徹(2)  
4月29日 御座石温泉～燕頭山～鳳凰  
小屋BC  
30日 BC～地蔵～観音～薬師～BC～  
往路下山

#### ○北ア岳沢 コブ尾根 4月29～30日

CL: 山内哲文(3) 伊藤勇太郎(3)  
4月29日 上高地～岳沢BC  
30日 BC～コブの頭～天狗のコル～BC  
～上高地

#### ○北ア鹿島槍ヶ岳 天狗尾根～赤岩尾根

##### 5月3～4日

CL: 小久保陽介(OB) 伊藤勇太郎(3)  
5月3日 大谷原～天狗の鼻TS  
4日 TS～鹿島槍ヶ岳～冷池山荘～大  
谷原

#### ○中央アルプス細尾沢 6月10日

CL: 原田裕介(3) 山内哲文(3) 岸秀蔵(2)  
幸ノ川橋(前夜泊)～駒ヶ岳～幸ノ川橋

#### ○中央アルプス 小黒川本谷 6月18日

CL: 原田裕介(3) 山内哲文(3) 岸秀蔵(2)  
小林茂幹(1) 原田亮介(1)  
桂小場～将棋頭山～桂小場

#### ○穂高岳屏風岩 6月23～25日

CL: 山内哲文(3) 松本穂高(4)  
・東壁雲稜ルート 懸垂下降  
・東壁ルンゼ状スラブルート 6P目で  
滑落事故

## ○穂高岳屏風岩 6月23~25日

CL : 博多誠(4・元部員) 前原徹(2)

東壁雲稜ルート 登攀中に事故救援のため途中撤退

## ○白神山地 追良瀬川 7月18~20日

CL : 伊藤勇太郎(3) 谷保麻美子(会外)

弘西林道~五郎三郎沢出合~白神小屋

## ○錫杖岳 前衛フェース1ルンゼルート

7月23日

CL : 松本穂高(4) 博多誠(4・元部員)

槍見温泉~取付~横断バンド~東尾根  
経由下山

## ○屋久島 南北縦走 7月22~24日

CL : 前原徹(2) 上山祐貴子(3)

楠川~白谷山荘~新高塚小屋~宮之浦  
岳~湯泊歩道

## ○南八幡平 葛根田川 7月23~26日

CL : 伊藤勇太郎(3) 中島佳範・谷保麻  
美子・阿部進一(いずれも会外)  
滝ノ上キャンプ場~滝ノ又沢出合~八  
ツ瀬森山荘~田代沼山荘~滝ノ上キャ  
ンプ場

## ○北穂高谷 第四尾根~ツルム正面壁

8月7~9日

CL : 松本穂高(4) 博多誠(4・元部員)

8月7日 サマテン~涸沢~北穂南陵テ  
ラスBC

8日 BC~第四尾根取付~ツルムの頭  
~BC

9日 BC~涸沢~サマテン

## ○北ア縦走 常念~親不知

8月4~14日

CL : 長澤徹哉(2) 磯部和哉(1) 堀崇行(1)

4日 松本=三股~常念岳~常念小屋  
TS

5日 TS~大天井岳~殺生ヒュッテTS

6日 TS~槍ヶ岳~双六小屋TS

7日 TS~鷲羽岳~水晶岳~野口五郎

岳TS

8日 TS~烏帽子岳~船窪小屋TS

9日 TS~蓮華岳~針ノ木岳~種池山  
荘TS

10日 TS~爺ヶ岳~鹿島槍ヶ岳南北峰  
間TS

11日 沈殿

12日 TS~五竜岳~唐松岳~天狗平  
TS

13日 TS~白馬岳~黒岩平TS

14日 TS~白鳥小屋~親不知

## ○南ア縦走 光岳~北岳

8月4~10日

CL : 岸秀藏(2) 花谷泰広(1) 原田亮介(1)

8月4日 松本=易老渡~面平TS

5日 TS~光岳~茶臼小屋TS

6日 TS~上河内岳~聖平小屋TS

7日 TS~聖岳~大沢岳~赤石岳避難  
小屋TS

8日 TS~赤石岳~悪沢岳~高山裏避  
難小屋TS

9日 TS~烏帽子岳~塩見岳~雪投沢  
キャンプ場TS

10日 TS~間ノ岳~北岳~広河原TS  
翌日松本へ

## ○北ア縦走 白馬岳~徳本峠

8月2~20日

CL : 前原徹(2) 小林茂幹(1)

8月2日 松本=猿倉~白馬岳頂上宿舎  
TS

3日 TS~白馬岳~杓子岳~天狗平TS

4日 TS~唐松岳~五竜小屋TS

5日 TS~五竜岳~鹿島槍ヶ岳~棒小  
屋乗越TS

6日 TS~赤沢岳~針ノ木岳~針ノ木  
峠TS

7日 TS~蓮華岳~船窪岳~稜線上  
2400m地点TS

- 
- 8日 TS～烏帽子岳～鷲羽岳～雲ノ平  
TS
- 9日 TS～薬師岳～北ノ俣岳～赤水岳  
直下TS
- 10日 TS～黒部五郎岳～三俣蓮華岳～  
双六小屋TS
- 11日 TS～笠ヶ岳～新穂高温泉TS
- 12日 TS～白出のコル～奥穂～北穂南  
稜テラスTS
- 13日 TS～南岳～槍ヶ岳～西岳ヒュッ  
テTS
- 14日 TS～大天井岳～常念岳～大瀧山  
荘TS
- 15日 TS～大瀧山から徳本峠～島々
- 屋久島縦断 9月5～8日
- CL: 原田亮介(1) 花谷泰広(1) 堀崇行(1)
- 9月5日 楠川～白谷山荘TS
- 6日 TS～繩文杉～新高塚小屋TS
- 7日 TS～宮之浦岳～淀川小屋TS
- 8日 TS～尾之間
- 中津川 魚の川本流 9月8～10日
- CL: 伴野達也(OB) 岸秀蔵(2)  
広谷智子(4・元部員)
- 下島康裕 坂口俊也(いずれも会外)
- 9月8日 松本＝野反湖～イタドリ河原  
TS
- 9日 TS～黒沢出合～奥ゼン沢出合TS
- 10日 TS～大高山～三壁山～野反湖
- 谷川岳 湯桧曽川本谷 9月9日
- CL: 原田裕介(3) 山内哲文(3) 博多誠  
(4・元部員)
- 土合駅～武能沢出合～清水峠～登山  
道下山
- 北ア槍穂高縦走 9月14～16日
- 冬合宿ルート偵察
- CL: 松本穂高(4)
- 9月14日 新穂高温泉～鏡平～双六キャ  
ンプ場TS
- 15日 TS～槍の肩～北穂南陵テラスTS
- 16日 TS～白出のコル～新穂高温泉
- 魚野川渋沢 9月22～23日
- CL: 松本穂高(4) 磯部和哉(1)
- 22日 松本＝野反湖～広河原TS
- 23日 TS～白砂山～野反湖
- 笛吹川ヌク沢左俣右沢 9月28日
- CL: 原田裕介(3) 小林茂幹(1) 花谷泰広(1)  
西沢渓谷バス停～甲武信岳～カマの沢  
下降
- 剣岳 本峰南壁 9月30日～10月1日
- CL: 前原徹(2) 長澤徹哉(2)
- 9月30日 馬場島～早月尾根～2600m  
付近TS
- 10月1日 TS～本峰南壁A2ルート～剣  
岳～馬場島
- 槍ヶ岳北鎌尾根 10月7～10日
- CL: 山内哲文(3) 原田裕介(3)  
長澤徹哉(2) 岸秀蔵(2) 磯部和哉(1)
- 10月7日 七倉ダム～千天出合～北鎌沢  
出合TS
- 8日 TS～北鎌コル～槍ヶ岳～肩の小  
屋TS
- 9日 TS～北穂～奥穂～前穂～岳沢TS
- 10日 TS～上高地
- 中ア 小黒川将棋頭沢 10月4日
- CL: 原田裕介(3) 岸秀蔵(2)  
桂小場～将棋頭沢溯行～将棋頭山～  
桂小場
- 戸隠山 10月10日
- CL: 松澤朋子(5) 堀崇行(1) 原田亮介(1)  
戸隠奥社～戸隠山～九頭龍山～戸隠牧場
- 南ア縦走 10月7～11日
- CL: 前原徹(2)
- 10月7日 北沢峠～仙丈岳～北岳～間ノ  
岳～農鳥小屋TS
- 8日 雨のため沈殿
- 9日 TS～農鳥岳～塩見岳～高山裏小

- 
- 屋TS  
10日 TS～悪沢岳～赤石岳～聖岳～西沢渡TS  
11日 TS～便ヶ島登山小屋～本谷口バス停
- 前穂 屏風岩東壁ルンゼルート  
10月10日  
CL: 伊藤勇太郎(3) 中島佳範(会外)  
坂巻温泉～横尾～T4取付～4ピッチ目撤退～懸垂下降
- 火打山鍋倉谷溯行 10月14～15日  
CL: 松本穂高(4) 伴野達也(OB)  
磯部和哉(1) 小林茂幹(1)  
10月14日 笹ヶ峰～杉の沢橋～ヒコサの滝～河原TS  
15日 TS～天狗の庭～火打山～笹ヶ峰
- 谷川一ノ倉沢 衝立岩中央稜  
10月21日  
CL: 松本穂高(4) 小林茂幹(1)  
花谷泰広(1) CL: 山内哲文(3)  
磯部和哉(1) 原田亮介(1)  
一ノ倉出合～中央稜取付～衝立の頭～北稜懸垂下降
- 信州秋山郷 鳥甲山 10月22日  
CL: 松本穂高(4) 山内哲文(3)  
小林茂幹(1) 原田亮介(1) 花谷泰広(1)  
屋敷～赤倉～鳥甲山～和山
- 南ア 甲斐駒ヶ岳～鋸岳  
11月 3～4日  
CL: 前原徹(2) 長澤徹哉(2)  
11月3日 竹宇神社～甲斐駒ヶ岳～六合石室TS  
4日 TS～中ノ川乗越～角兵衛沢のコル～仙流莊
- 頸城山塊 明星P6南壁  
11月 4～5日  
CL: 伊藤勇太郎(3) 藤田和則(会外)  
11月4日 クイーンズウェイ登攀 4P目
- で雨で撤退  
5日 フリースピリッツ登攀 中央バンドより下降
- 富士山 11月18～19日  
CL: 松本穂高(4) 原田裕介(3)  
長澤徹哉(2) 岸秀蔵(2) 小林茂幹(1)  
磯部和哉(1) 堀崇行(1)  
11月18日 松本＝佐藤小屋～八合目BC  
19日 BC～山頂お鉢まわり～佐藤小屋＝小林実家
- 八ヶ岳西壁各ルート①  
12月16～17日  
CL: 伊藤勇太郎(3) 山内哲文(3)  
博多誠(会外) 前原徹(2) 花谷泰広(1)  
小林茂幹(1)  
12月16日 松本＝美濃戸口～赤岳鉱泉BC～各ルート  
阿弥陀岳北稜・大同心南稜・赤岳主稜・石尊稜  
17日 BC～各ルート～下山  
中山尾根・小同心クラック・大同心南稜
- 八ヶ岳西壁各ルート②  
1月12～13日  
CL: 伊藤勇太郎(3) 小林茂幹(1)  
1月12日 松本＝美濃戸口～赤岳鉱泉BC～中山尾根  
13日 BC～小同心クラック～大同心南稜～下山
- 北ア霞沢岳東尾根 1月13～14日  
偵察山行  
CL: 山内哲文(3) 花谷泰広(1) 原田亮介(1)  
1月13日 坂巻温泉～東尾根取付～1900mBC  
14日 BC～霞沢岳～BC～坂巻温泉
- 戸隠山八方睨 1月19～20日  
CL: 前原徹(2) 三木隆一(OB)  
1月19日 戸隠奥社～西窟～胸突き岩の手前TS

- 
- 20日 TS～蟻の塔渡り～八方睨～往路  
下山
- 八ヶ岳西壁 中山尾根 1月27日  
CL: 伊藤勇太郎(3) 金井賢介(会外)  
美濃戸～赤岳鉱泉～中山尾根～行者  
小屋～美濃戸
- 八ヶ岳西壁 小同心クラック 1月27日  
CL: 山内哲文(3) 前原徹(2)  
美濃戸～赤岳鉱泉～小同心クラック～  
地蔵尾根～下山
- 戸隠西岳P5～P1周辺 2月14日  
CL: 前原徹(2) 三木隆一(OB)  
品沢高原～P5稜上 雪崩多発で撤退  
往路下山
- 南ア鳳凰三山～北岳 2月19～24日  
CL: 長澤徹哉(2) 松本穂高(4)  
小林茂幹(1) 花谷泰広(1) 原田亮介(1)  
2月19日 御座石鉱泉～燕頭山～2216m  
TS  
20日 TS～鳳凰小屋～地蔵岳～高嶺～  
白鳳峠TS  
21日 TS～アサヨ峰～仙水峠TS  
22日 TS～甲斐駒ヶ岳～仙水峠～北沢  
峠TS  
23日 TS～仙丈岳往復～TS  
24日 TS～戸台
- 北ア前穂北尾根 2月20～24日  
CL: 山内哲文(3) 前原徹(2)  
2月20日 松本＝坂巻温泉～ボボ山～  
1900mTS  
21日 TS～北尾根ハツ峰～七峰TS  
22日 TS～四峰～3・4のコルTS  
23日 TS～前穂山頂 雪洞  
24日 TS～明神Ⅱ峰～岳沢～坂巻温泉
- 戸隠西岳P1尾根 3月2～4日  
CL: 前原徹(2) 山内哲文(3) 小林茂幹(1)  
原田亮介(1)  
3月2日 上楠川～天狗平～BC
- 3日 BC～無念の峰～蟻の塔渡り(撤  
退)～BC  
4日 BC～上楠川
- 北ア燕岳 3月4～6日  
CL: 長澤徹哉(2) 堀崇行(1)  
3月4日 宮城～有明荘TS  
5日 TS～中房温泉～合戦尾根～燕小  
屋BC  
6日 BC～燕岳～BC～中房温泉～宮城
- 八ヶ岳西壁 石尊稜 3月6～7日  
CL: 松本穂高(4) 小林茂幹(1)  
花谷泰広(1)  
3月6日 赤岳鉱泉～石尊稜  
7日 BC～ジョウゴ沢アイスクライミン  
グ～下山
- 南ア 甲斐駒ヶ岳～鋸岳  
3月6～9日  
CL: 前原徹(2) 原田亮介(1)  
3月6日 日目：竹宇神社～黒戸尾根～  
七丈小屋TS  
7日 TS～甲斐駒ヶ岳～六合石室BC  
8日 BC～熊ノ穴沢の頭～稜線上で事故  
前原、雪崩に巻き込まれる～ビバーク  
9日 原田は救助を求め下山。前原はへ  
リで収容
- 八ヶ岳西壁 雲稜 3月9～10日  
CL: 伊藤勇太郎(3) 山内哲文(3)  
3月9日 美濃戸口～赤岳鉱泉～雲稜  
ルート～ビバーグ  
10日 ビバーグ～ドームの肩 撤退、懸  
垂下降
- 南ア鋸岳熊穴沢～中ノ川乗越  
3月14～15日  
CL: 山内哲文(3) 長澤徹哉(2)  
小林茂幹(1) 花谷泰広(1) 原田亮介(1)  
3月14日 戸台～熊穴沢出合BC  
15日 BC～中ノ川乗越(残置ザック回  
收)～BC～戸台

## 18 平成8年度（1996年度）

チーフリーダー 山内 哲文

### I. 年度総括 略

#### II. 合宿

##### ○GW合宿 4月27日～5月1日

黒部平～雷電峰～雄山直下TS  
CL: 山内 SL: 伊藤、小林、原田、  
花谷、堺、長澤  
雪訓、スタカット、コンテ等

##### ○新人合宿 5月26日～6月2日

CL: 山内 SL: 伊藤、長沢、小林、  
原田、川井、田中、平松、麦谷、堺、  
花谷、中島、松藤、野田、川村  
穂高岳山域 島々～徳本峠～横尾BC、  
涸沢周辺で雪上訓練、槍沢経由槍ヶ岳  
往復、小槍、上高地下山

##### ○無積雪期

###### 5月18日 山梨

CL: 堀、山内、長沢、麦谷、西湖

###### 6月15～16日 北ア 屏風岩東稜

CL: 伊藤、原田

###### 6月22～24日 南ア 鋸岳

CL: 長沢、前原

###### 6月23日 小袖鍾乳洞

SL: 堀、山内、小林、川井、平松

###### 6月29日 北ア 錫杖左方カンテ

CL: 山内、原田、麦谷

###### 6月29～30日 北ア 白馬岳

CL: 花谷、堀、磯部、小林、松藤、  
平松

###### 7月12～14日 南ア 北岳バットレス

CL: 原田、部外者

###### 7月27日 北ア 唐沢岳 幕岩大凹角

CL: 山内、原田、小林、麦谷

###### 7月27日 八ヶ岳 赤岳沢

CL: 伊藤、川井、部外者

8月1～6日 北ア縦走 立山～上高地

CL: 花谷、川井

8月1～10日 北ア縦走 槍～日本海

CL: 原田、中島、田中

8月2～7日 南ア縦走 夜叉人峠～  
奈良田

CL: 小林、麦谷、川村、野田

8月6～14日 南ア縦走 易老渡～北沢峠

CL: 堀、平松、松藤

8月8～9日 北ア 屏風岩 雲稜ルート

CL: 伊藤、長沢

8月11～16日 北ア 上ノ廊下

CL: 伊藤、部外者

8月23～29日 夏合宿 剣

CL: 山内、伊藤、原田、中島、  
平松、松藤、長沢、堀、田中、川井

9月4～6日 南ア 北岳バットレス

CL: 山内、原田、麦谷、野田

9月10～13日 北ア 屏風岩 東壁

CL: 原田、長沢

9月13～17日 北海道 大雪山縦走

(黒岳～トムラウシ) 麦谷

9月13～19日 奥秩父主稜縦走 中島

9月23～26日 八ヶ岳縦走

CL: 中島、野田、麦谷

10月5～6日 中ア 千畳敷～木曾駒ヶ岳

CL: 堀、川村

10月5～7日 北ア 奥穂高岳 麦谷

10月10～11日 南ア 北岳バットレス

CL: 伊藤、原田、平林、田中、川井

##### ○積雪期

11月2～5日 谷川岳 一ノ倉沢

CL: 原田、山内、麦谷、中島、  
川井、平松

11月3～4日 谷川岳 一ノ倉沢

CL: 伊藤、野田、部外者

11月15日 北ア 鎧温泉

CL: 堀、他5名

12月14～15日 北ア 徳本峠より霞沢岳

CL: 伊藤、原田、野田、中島、田中

12月15～16日 八ヶ岳西面

CL: 山内、麦谷、川井

12月18日 八ヶ岳 赤岳

CL: 花谷、平松

### ○プレ冬山合宿

11月30日～12月5日 北ア

杓子尾根～杓子岳～白馬岳～小蓮  
華尾根

CL: 原田 SL: 山内、伊藤、花谷、  
麦谷、川井、野田、平松、中島、  
川村、田中

### ○冬合宿

12月23日～1月2日 北ア

霞沢岳西尾根～霞沢岳～大滝山～  
蝶ヶ岳～常念岳～大天井岳～燕岳  
～中房温泉

CL: 山内 SL: 伊藤、原田、花谷、  
川井、中島、平松、麦谷、野田、  
松本穂高(OB)

12月23日 霞沢岳西尾根より入山、雪後  
晴れ

4:30BOX起床 5:30発 6:30坂巻  
温泉 7:30発 8:40釜トンネルの出  
口一本 9:25西尾根の取り付き  
15:05テント場(1900m付近)

24日 霞沢岳頂上近くにTS

快晴 4:30起床 7:20発 14:40ナイフ  
リッジにフィックス 17:30TS(2550m)

25日 霞沢岳

強風・ガス 7:30起床 9:04フィック  
ス回収、本体待機 11:30山頂着

26日 テント移動せず。フィックスとデボ  
隊が出る。

27日 ジャンクションピークへ 快晴

5:00起床 8:10K1ピーク 8:25デボ  
地着 9:35本体発フィックス3ピッ  
チ通過 10:25回収中に山内落ち  
るが止まる 15:05ジャンクション  
ピークTS

28日 徳本峠を越える

雪 5:00起床 7:30発 10:30徳本峠  
～14:50TS(2250m付近)

29日 快晴 槍見台を経て大滝山手前

30日 快晴 大滝山～蝶ヶ岳～常念岳手  
前のコル

31日 快晴 常念岳～大天荘

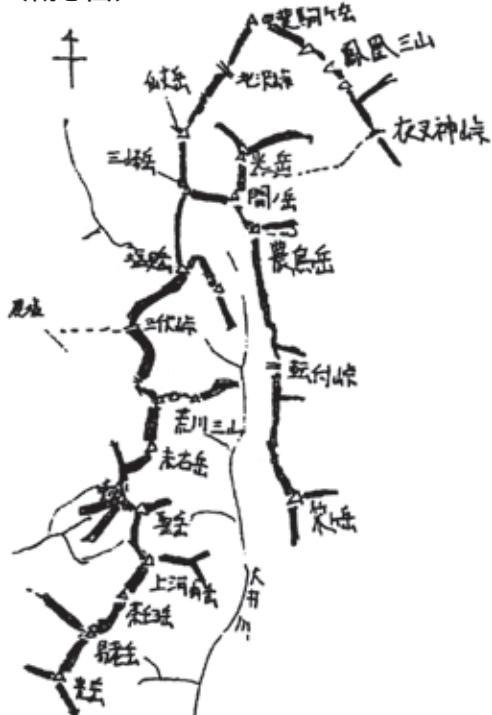
1月1日 晴れ 大天井岳～燕岳～中房  
温泉

2日 曇りのち雪 宮城へ

6:00起床 7:40発 10:50宮城ゲート

※冬山以降、個人山行の記録なし。

### <概念図>



## 19 平成9年度（1997年度）

チーフリーダー 花谷 泰広

### I. 年度総括 略

### II. 合宿・山行

4月19～21日 北ア 鹿島槍東尾根

CL：原田、山内、前原

### ○GW合宿

4月28～30日 北ア 岳沢BC 雪訓、  
スタカット等

CL：花谷 SL：原田、小林、平松、  
野田、麦谷、中島、田中、川井

5月4～6日 北ア 枝子岳東壁

CL：原田、山内、小林、麦谷、野田

### ○新人合宿

5月25日～6月1日 北ア 穂高岳山域  
島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺  
で雪上訓練、槍ヶ岳中止

CL：花谷 SL：原田、川井、堺、  
中島、田中、野田、小林、麦谷、  
川村、福士、深沢、日高、喜田、  
佐々木、岸本、岡本、高橋、大須賀、  
大木、島(山内)

6月14～15日 北ア 蝶ヶ岳～常念岳

CL：小林、岡本、岸本、深沢

6月14日 北ア 有明山

CL：麦谷、部外者

6月14～15日 北ア 錫杖岳

前衛フェース

CL：麦谷、花谷、田中、中島

6月20～21日 八ヶ岳縦走

CL：野口、川井、大木、岸本、  
佐々木、高橋、島

6月21～23日 北ア 唐沢岳幕岩

大凹角ルート

CL：麦谷、花谷、田中、中島

6月22日～7月2日 北ア 常念岳

CL：川村、平松

7月16～17日 笛吹川 釜ノ沢

CL：小林、原田、大須賀、福士

7月18～22日 南ア 北岳 バットレス

CL：原田、川井、小林、野田、中島

7月19～20日 北ア 白馬岳

CL：堺、大木、高橋、大須賀

7月19～22日 北ア 折立～雲ノ平～ブ  
ナ立て尾根

CL：田中、部外者

7月30日 中ア 中御所谷西横川

CL：山内、麦谷、島、深沢

8月1～8日 北ア 縦走 上高地～槍～  
雲ノ平～野口五郎～日本海

CL：川井、大木、岸本、高橋

8月2～15日 南ア 縦走 夜叉人峠～小  
無限山

CL：田中、岡本、深沢

8月3～4日 北ア 屏風岩東壁 雲稜  
ルート

CL：花谷、原田

8月4～10日 北海道 十勝・日高縦トム  
ラウシ山頂

CL：麦谷、福士、島

8月10～18日 北ア 縦走 立山～上高地

CL：中島、川村、佐々木

8月10～16日 南ア 縦走 光岳～仙丈岳

CL：野田、喜田、日高

8月13～15日 瑞牆山 十一面岩末端  
壁、正面壁

CL：花谷、中嶋(OB)

### ○夏合宿 8月23～30日

北ア 劍岳 熊ノ岩BC

CL：花谷 SL：原田、野田、川井、  
中島、田中、麦谷、堺、高橋、大木、  
大須賀、深沢、日高、島、岸本、川村、  
佐々木、岡本、(山内)

---

9月3～5日 南ア 北岳バットレス

CL：原田、田中、中島、麦谷、日高、  
高橋、大木、岸本、大須賀

9月10～16日 奥秩父奥多摩縦

CL：大木、岸本、日高

9月13～14日 明星山 P6南壁

CL：田中、山内

9月16～17日 北ア 丸山東壁

緑ルート

CL：麦谷、佐々木

9月20～22日 明星山 P6南壁

CL：田中、花谷、高橋

10月10～12日 北ア 上ノ廊

CL：麦谷、川井、中島

※冬山以降、個人山行の記録なし。

## 20 平成10年度（1998年度）

チーフリーダー 原田 亮介

### I. 年度総括

一学年空白ができたことにより3年生であった前年度よりリーダーとなった花谷、原田が引き続きCLとSLを交代して活動した。1年生は多いが上級部員が少ないといった苦しい時期(96~97年頃)を乗り切り、98年度は徐々にバランスのとれた会構成を回復してきた時期だといえる。

夏山をベースに冬山へ。岩トレをベースに本チャンへ。南アを足掛かりに北アへ。といった地道な取り組みは多くの成功と失敗を作り、その中で得たもの、学んだことは、基礎体力、雪山での生活技術、メンバーの思いを合わせることの大切さなどなど、当時の部員それぞれのその後の発展のベースになったのではないかと思う。

### II. 合宿

#### ○GW合宿 5月4~5日

CL : 原田亮介(4) SL : 花谷泰広(4)

川井潔(3) 中島辰哉(3) 野田聰(3)

麦谷水郷(2) 日高弘次(2) 岸本俊朗(2)

大木信介(2) 深沢遊(2) 岡本伸也(2)

乗鞍岳付近で雪上訓練(両日)。

#### ○新人合宿 5月24~31日

CL : 原田亮介(4) SL : 花谷泰広(4)

川井純(3) 中島辰哉(3) 野田聰(3)

日高弘次(2) 岸本俊朗(2) 大木信介(2)

深沢遊(2) 岡本伸也(2) 松寄林太郎(1)

若尾和也(1) 梶原恵(1) 横山輝生(1)

横山勝丘(1) 小尾友宏(1)

島々~徳本峠~横尾BC、涸沢周辺で

雪上訓練、前穂高岳六峰、蝶ヶ岳ピストン、上高地下山

#### ○縦走合宿

①北アルプス全山 8月1~14日

大木信介(2) 日高弘次(2) 梶原恵(1)

松寄林太郎(1)

上高地~徳本峠~大天井岳~槍ヶ岳~笠ヶ岳~黒部五郎岳~鷲羽岳~針ノ木岳~鹿島ヶ岳~白馬岳~親不知

②北アルプス縦走 8月4~17日

岡本伸也(2) 岸本俊朗(2) 横山勝丘(1)

横山輝生(1)

親不知~白馬岳~祖母谷温泉~阿曾原温泉~剣沢(横山輝生は室堂下山)~立山~薬師岳~双六岳~槍ヶ岳~上高地下山

③中央アルプス縦走 8月13~18日

深沢遊(2) 若尾和也(1)

仲仙寺~経ヶ岳~ヤブ経由大樽小屋~木曾駒ヶ岳~檜尾岳~空木岳~越百小屋

#### ○夏合宿 8月26~29日

CL : 原田亮介(4) SL : 麦谷水郷(2)

中島辰哉(3) 日高弘次(2) 岸本俊朗(2)

大木信介(2) 岡本伸也(2) 松寄林太郎(1)

横山勝丘(1)

黒部ダム~梯子谷乗越~真砂沢BC、源次郎尾根

(積雪が極端に少ないことが原因で長次郎谷の雪渓の状態が非常に悪く、登攀等の予定を断念。)

#### ○プレ冬合宿 11月27~29日

CL : 原田亮介(4) SL : 花谷泰広(4)

川井純(3) 中島辰哉(3) 野田聰(3)

麦谷水郷(2) 日高弘次(2) 岸本俊朗(2)

大木信介(2) 深沢遊(2) 岡本伸也(2)

松寄林太郎(1) 梶原恵(1) 横山輝生(1)

### 横山勝丘(1)

11月27日 曇(霧) 八方池～丸山ケルン  
付近TS  
28日 雪 沈殿(雪洞を掘る体験)  
29日 快晴 TSより唐沢岳ピストン～八  
方池下山

### ○冬合宿 12月24～31日

#### 北アルプス蓮華岳～爺ヶ岳

CL : 原田亮介(4) SL : 花谷泰広(4)  
川井純(3) 中島辰哉(3) 野田聰(3)  
麦谷水郷(2) 日高弘次(2) 岸本俊朗(2)  
大木信介(2) 深沢遊(2) 松寄林太郎(1)  
梶原恵(1) 横山輝生(1) 横山勝丘(1)  
12月24日 雪 扇沢～TS  
25日 快晴 TS～大沢小屋TS(デボ隊出  
す)  
26日 大沢小屋TS(体調不良のため2名  
下山。デボ・フィックス隊出す。)  
27日 晴れ TS～蓮華岳～針ノ木小屋  
TS  
28日 霧後晴れ TS～針ノ木岳～最低  
コルTS(フィックス隊先行、数か所  
フィックス)  
29日 晴後雪TS～赤沢岳～爺ヶ岳～冷  
池山荘TS  
30日 晴れ 冷池山荘TSより鹿島槍ヶ岳  
ピストン  
31日 TS～(フィックス隊先行)～赤岩  
尾根下山

### III. 個人山行

#### ○奥秩父 笛吹川東沢釜ノ沢

6月20～21日

L : 中島辰哉(3) 川井純(3) 深沢遊(2)  
日高弘次(2) 横山輝生(1)  
釜ノ沢沢登り(TSは魚止め滝付近)～  
甲武信岳～下山

### ○北アルプス 燕岳 6月21日

岡本伸也(2) 大木信介(2) 梶原恵(1)  
中房温泉より燕岳ピストン

### ○錫杖岳前衛フェース 7月12日

L : 中島辰哉(3) 川井純(3) 野田聰(3)  
岸本俊朗(2)  
槍見温泉より入山。左方カンテ登攀。

### ○中央アルプス縦走 7月18～19日

L : 大木信介(2) 原田亮介(4) 岡本伸也(2)  
梶原恵(1) 松寄林太郎(1) 横山勝丘(1)  
若尾和也(1)  
空木岳～槍尾岳～宝剣岳

### ○錫杖岳前衛フェース 7月25日

L : 原田亮介(4) 岡本伸也(2) 日高弘次(2)  
大木信介(2)  
槍見温泉より入山。左方カンテ登攀。

### ○錫杖岳前衛フェース 8月1日

L : 川井純(3) 深沢遊(2)  
槍見温泉より入山。左方カンテ登攀。

### ○北穂高岳 滝谷ドーム

8月4～6日

L : 野田聰(3) 中島辰哉(3)  
上高地入山。涸沢をBCに雲表ルート、  
北西カンテの両ルートを一日で登攀。

### ○北アルプス マラソン縦走

8月9～13日

川井純(3)  
上高地～槍ヶ岳～双六岳～野口五郎岳  
～針ノ木岳～鹿島槍ヶ岳～白馬岳～親  
不知

### ○南アルプス 北岳バットレス

9月9～10日

L : 野田聰(3) 麦谷水郷(3) 深沢遊(2)  
梶原恵(1)  
白根御池小屋BCより、2パーティにて  
Dガリ一大滝～下部フランケおよびDガ  
リ一大滝～ピラミッドフェース登攀。

## ○錫杖岳前衛フェース 9月9日

L: 原田亮介(4) 岸本俊朗(2) 横山勝丘(1)  
松寄林太郎(1)

槍見温泉より入山。左方カンテ登攀。

## ○北ア 明星山P6南壁 9月10日

L: 川井純(3) 山内哲文(OB)  
左岩稜ルート登攀。

## ○南ア 北岳バットレス

9月17~19日

L: 原田亮介(4) 岡本伸也(2) 横山勝丘(1)  
松寄林太郎(1)  
白根御池小屋BCより、2パーティにて下部フランケ～Dガリー奥壁、下部フランケ～上部フランケ登攀。

## ○北アルプス縦走 9月23~29日

岡本伸也(2)  
八方尾根～唐松岳～鹿島槍ヶ岳～針ノ木岳～鳥帽子岳～七倉温泉下山  
○新潟県 卷機山 10月4日  
L: 中島辰哉(3) 原田亮介(4) 野田聰(3)  
深沢遊(2)  
米子沢を沢登り。

## ○北ア明星山P6南壁 10月11日

L: 川井純(3) 岸本俊朗(2) 横山輝生(1)  
左岩稜ルート登攀。

## ○北ア明星山P6南壁 10月29日

L: 花谷泰広(4) 日高弘次(2) 大木信介(2)  
横山勝丘(1)  
左岩稜ルート登攀

## ○八海山縦走 11月5~6日

L: 花谷泰広(4) 岸本俊朗(2) 岡本伸也(2)  
屏風道～大日岳～五竜岳

## ○南アルプス北部縦走

11月14~15日

L: 花谷泰広(4) 中島辰哉(3) 大木信介(2)  
深沢遊(2) 横山勝丘(1) 横山輝生(1)  
松寄林太郎(1)  
駒ヶ岳神社～甲斐駒ヶ岳～鋸岳～戸台

冬の偵察として

## ○南アルプス北部縦走

11月21~22日

L: 原田亮介(4) 岡本伸也(2) 岸本俊朗(2)  
駒ヶ岳神社～甲斐駒ヶ岳～鋸岳～戸台  
冬の偵察として

## ○八ヶ岳縦走 11月21~23日

L: 大木信介(2) 野田聰(3) 梶原恵(1)  
横山勝丘(1) 横山輝生(1) 松寄林太郎(1)  
蓼科牧場～蓼科山～横岳～硫黄岳～  
赤岳鉱泉～美濃戸口  
金山縦走の予定が、悪天の為美濃戸下山となる。

## ○八ヶ岳西面 12月6~7日

L: 花谷泰広(4) 野田聰(3) 大木信介(2)  
岸本俊朗(2) 岡本伸也(2)  
赤岳鉱泉BC。  
12月6日 晴れ ジョウゴ沢でアイスクライミング(大木、岸本、岡本は当日中下山)  
7日 晴後雪 裏同心レンゼ登攀(花谷、野田)

## ○唐沢幕岩 大凹角ルート

12月12~13日

L: 中嶋岳志(OB) 松本佐和子(ホワイトバーチ) 花谷泰広(4)  
12月12日 七倉～取付～登攀(ビバーク)  
13日 登攀～右稜野の頭～高瀬ダム下～  
七倉

## ○中央アルプス北部 1月16~17日

L: 原田亮介(4) 岸本俊朗(2) 大木信介(2)  
岡本伸也(2) 深沢遊(2) 松寄林太郎(1)  
梶原恵(1) 横山輝生(1) 横山勝丘(1)  
1月16日 曇(霧) 桂小場～将棋ノ頭・西駒山荘(霧の為、木曾駒ヶ岳ピストンは中止)  
17日 西駒山荘～桂小場  
成人の部員を山で祝う

---

○南八ヶ岳西面 1月23～24日

L: 花谷泰広(4) 大木信介(2)

1月23日 晴れ 美濃戸山荘～赤岳鉱泉

BC～小同心クラック登攀

24日 BC～大同心雲稜ルート～BC～

美濃戸山荘

○北ア 白馬岳～親不知

3月1～6日

L: 大木信介(2) 原田亮介(4) 岡本伸也(2)

横山勝丘(1) 松寄林太郎(1)

3月1日 晴れ 梅池～白馬大池TS

2日 雪 沈殿

3日 晴れ(強風) TS～三国境・白馬岳

ピストン～雪倉岳避難小屋内TS

4日 晴れ TS～雪倉岳～朝日岳～黒岩

山～文子の池付近TS

5日 曇後吹雪 TS～梅海山荘内TS

6日 晴れ TS～白鳥山～親不知下山

○北ア 常念岳東尾根

3月16～17日

L: 大木信介(2) 山内哲文(6) 原田亮介(4)

岡本伸也(2)

3月16日 東尾根取りつき～森林限界手

前BC(フィックス隊 第二岩峰に30m  
フィックス)

17日 BCより常念岳ピストン～下山

○北ア南部縦走 3月28～30日

L: 大木信介(2) 川井純(3) 麦谷水郷(3)

中島辰哉(3) 梶原恵(1)

3月28日 新穂高温泉～槍平TS

29日 TS～マッチ箱～南岳～槍肩の小  
屋内TS

30日 TS～大喰岳西尾根～槍平～新穂  
高温泉下山

## 21 平成11年度（1999年度）

チーフリーダー 川井 純

### I. 年度総括

平成11年度のCLは川井であったが、合宿毎にCLを変えるスタイルとした。

新人合宿から各人が確実にステップアップし、最後は14名で冬合宿を成功させることができた。メンバーにも恵まれ、大学山岳部の醍醐味を体現できた年だったと思う。

### II. 合宿

#### ○新人合宿 5月23～30日

CL : 野田聰(4) SL : 川井純(4)  
中島辰哉(4) 麦谷水郷(4) 岡本伸也(3)  
岸本俊朗(3) 日高弘次(3) 梶原恵(2)  
松寄林太郎(2) 横山勝丘(2) 横山輝生(2)  
石岡春彦(1) 中川隆志(1) 中村圭一(1)  
野川謙介(1) 持地智亮(1)  
穂高岳 島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺で雪上訓練、槍沢経由槍ヶ岳往復、上高地下山(河童橋ダイブ)

合宿後しばらくして持地が「人生観変わりました」と言って辞めていったのが印象的。

#### ○夏山岩登り定着合宿 8月23～29日

CL : 麦谷水郷(4) SL : 中島辰哉(4)  
川井純(4) 岡本伸也(3) 岸本俊朗(3)  
日高弘次(3) 梶原恵(2) 松寄林太郎(2)  
横山勝丘(2) 横山輝生(2) 石岡春彦(1)  
中川隆志(1) 中村圭一(1) 野川謙介(1)  
剣岳 黒部ダム～内臓助平(TS)～梯子段乗越～真砂沢出合～熊の岩(BC)  
剣岳東面の岩場登攀および縦走  
登攀 京大、中大、剣陵会、RCC、富山大、魚津高  
縦走 BC～源次郎尾根～剣岳～BC  
天候の影響により、登攀を実施したのは1日のみ。

#### ○プレ冬合宿 11月26～28日

CL : 岸本俊朗(3) 川井純(4) 中島辰哉(4)  
野田聰(4) 麦谷水郷(4) 大木信介(3)  
日高弘次(3) 梶原恵(2) 松寄林太郎(2)  
横山勝丘(2) 横山輝生(2) 石岡春彦(1)  
中川隆志(1) 中村圭一(1) 野川謙介(1)  
五竜岳 遠見尾根ピストン(GOまで)

#### ○冬合宿 12月23日～1月4日

CL : 川井純(4) SL : 野田聰(4)  
中島辰哉(4) 麦谷水郷(4) 大木信介(3)  
岸本俊朗(3) 日高弘次(3) 梶原恵(2)  
松寄林太郎(2) 横山勝丘(2) 横山輝生(2)  
石岡春彦(1) 中川隆志(1) 野川謙介(1)  
北ア南部横断  
笠谷出合～笠谷林道跡～ヒノキ尾～笠ヶ岳南西尾根～笠ヶ岳～西鎌尾根～槍ヶ岳～東鎌尾根～常念岳～一ノ沢林道  
12月23日 曇り  
笠谷出合～笠谷TS

24日 晴れ

TS～大木場の辻北西尾根1595m  
手前～笠谷TS～ヒアケ谷TS  
・ルートミスにより引き返す

25日 晴れ

TS～ヒノキ尾根1621mコルTS

26日 晴れ

TS～ヒノキ尾根1982mTS

27日 晴れ

TS～ヒノキ尾根・南西尾根JP～竹造TS

28日 晴れ

TS～笠ヶ岳～秩父岩TS

29日 濃霧

濃霧により沈殿 秩父平への懸垂  
フィックス

30日 晴れ

TS～秩父平～大ノマ乗越～弓折岳  
～双六冬季小屋T.S  
31日 晴れ  
TS～樅沢岳～西鎌～槍の肩冬季小屋 TS 槍ヶ岳ピストン  
1月1日 晴れ  
TS～東鎌～西岳TS  
2日 晴れ  
TS～赤岩岳～喜作新道～大天井岳  
～常念冬季小屋TS  
3日 強風  
強風により沈殿(半数以上が風で倒され、常念登りで引き返す)  
4日 晴れ・風強し  
TS～常念岳～常念東尾根～常念いこいの広場  
天候にも恵まれ、無事に全行程終了。  
反省点も多い合宿であったが、14名でこのルートをトレースできたことは大きい。各自の財産になっているハズ。

### III. 個人山行

#### ○北アルプス縦走(横)走

7月31日～8月11日

CL: 横山勝丘(2) 中川隆志(1) 野川謙介(1)  
サマテン～新中尾峠～焼岳～新中尾峠～槍見～穴滝上部(TS)～雷鳥岩～笠ヶ岳(TS)～双六岳～三俣蓮華岳～三俣山荘(TS)～鷲羽岳～水晶岳～赤牛岳～奥黒部ヒュッテ(TS)～平ノ渡場～五色が原(TS)～雄山～大汝山～剣沢(TS)～剣岳～剣沢(TS)～真砂沢～仙人池～阿曾原温泉(TS)～櫻平～餓鬼山避難小屋(TS)～餓鬼山～唐松岳～天狗山荘(TS)～白馬鑓ヶ岳～白馬岳～白馬大池～風吹大池(TS)～北小谷駅

#### ○北アルプス縦走 8月6～16日

CL: 横山輝生(2) 梶原恵(2) 石岡春彦(1)  
親不知～二本松～シキ割～白鳥小屋(TS)～黄蓮の水場～梅海山荘(TS)～長梅山～朝日岳～朝日山荘(TS)～雪倉岳～三国境～白馬岳～頂上宿舎(TS)～白馬鑓ヶ岳～天狗山荘～唐松岳～頂上山荘(TS)～五竜岳～キレット小屋～鹿島槍北峰南峰～冷池山荘(TS)～爺ヶ岳～針ノ木岳～針ノ木小屋(TS)～蓮華岳～船窪小屋(TS)～不動岳～烏帽子岳～烏帽子小屋(TS)～野口五郎岳～水晶岳～鷲羽岳～三俣山荘(TS)～双六岳～千丈乗越～肩の小屋～槍ヶ岳～横尾

#### ○南アルプス縦走 8月3～15日

CL: 松寄林太郎(2) 中村圭一(1)  
夜叉人峠登山口～杖立峠～南御室小屋(TS)～観音岳～早川尾根小屋～アサヨ峰～栗沢山手前(TS)～仙水峠～甲斐駒ヶ岳～仙丈岳五合目～馬ノ背(TS)～仙丈岳～伊那荒倉岳～野呂川越～三峰岳～農鳥小屋(TS 沈殿1日)～農鳥岳～間岳～北岳～農鳥小屋(TS)～三国平～北荒川岳～塩見岳～三伏峠小屋(TS)～小河内岳～高山裏(TS)～前岳～悪沢岳～荒川小屋～赤石岳～百間平(TS)～大沢岳～聖岳～聖平(TS)～上河内岳～光小屋(TS)～信濃俣～大根沢山～アザミ沢のコル(TS)～大無間山～小無間山～田代～井川駅

#### ○北アルプス 穂高岳 屏風岩・前穂北尾根 12月26～31日

CL: 花谷泰広(5) 原田亮介(5)  
上高地～横尾(TS)～T4(TS 2日)～横尾～新村橋～慶応乗越～2640コル(TS)～5・6のコル～前穂高岳北尾根～前穂高岳～奥穂高岳～ロバの耳コル

- (TS) ~天狗のコル~西穂高岳~西穂山荘~上高地
- 穂高岳 屏風岩東壁・雲稜ルート  
5月17~18日  
CL: 麦谷水郷(4) 岸本俊朗(3)  
5月17日 坂巻~横尾(自転車)  
18日 登攀(5ピッチ目から懸垂下降)
- 錫杖岳 前衛フェース 1ルンゼルート  
6月12~13日  
CL: 岸本俊朗(3) 中島辰哉(4) 横山勝丘(2)  
松寄林太郎(2)  
6月12日 槍見温泉~クリヤ谷・錫杖沢  
出会い(TS)  
13日 TS~1ルンゼルート~クリヤ谷・錫杖沢出会い~槍見温泉
- 針の木雪渓(雪訓) 6月12~13日  
CL: 岡本伸也(3) 日高弘次(3)  
持地智亮(1)
- 北アルプス縦走 餓鬼岳~燕岳  
6月12~13日  
CL: 梶原恵(2) 横山輝生(2) 中川隆志(1)  
白沢口~餓鬼小屋~餓鬼岳~餓鬼小屋  
(TS) ~東沢岳~燕岳~中房温泉
- 甲斐駒ヶ岳 ダイヤモンドAフランケ  
赤蜘蛛ルート 6月12~14日  
CL: 麦谷水郷(4) 川井純(4)  
6月12日 竹宇駒ヶ岳神社~八号目岩小屋(TS)  
13日 TS~赤蜘蛛ルート~八号目岩小屋~七合目(TS)  
14日 TS~竹宇駒ヶ岳神社
- 錫杖岳 前衛フェース 1ルンゼルート、  
東肩ルート、2・3間リッジルート  
6月12~13日  
CL: 岸本俊朗(3) 横山勝丘(2)  
松寄林太郎(2) 横山輝生(2)  
6月12日 槍見温泉~クリヤ谷・錫杖沢  
出会い(BC)
- 13日 BC~1ルンゼルート~東肩ルート~BC  
14日 BC~2・3間リッジルート(5ピッチ目)~BC~槍見温泉
- 北アルプス縦走 餓鬼岳~燕岳~常念  
7月10~11日  
CL: 岡本伸也(3)  
白沢登山口~餓鬼岳小屋~東沢岳~燕岳~燕山荘(TS) ~大天井岳~常念小屋~常念岳~常念小屋~一の俣
- 北アルプス 奥穂高岳 西穂沢偵察  
7月17~18日  
CL: 野田聰(4) 岡本伸也(3) 横山勝丘(2)  
横山輝生(2)  
白出小屋~奥穂高山荘~奥穂高岳~奥穂高山荘(TS) ~白出小屋
- 赤木岳 赤木沢 7月31日~8月2日  
CL: 中島辰哉(4) 日高弘次(3)  
折立~五光岩ベンチ~薬師峠(TS) ~  
薬師沢小屋~赤木沢出合~赤木沢~  
中俣乗越~薬師峠(TS) ~折立
- 錫杖岳 前衛フェース 1ルンゼルート  
8月5日  
CL: 川井純(4) 野田聰(4)  
槍見温泉~クリヤ谷・錫杖沢出会い~  
1ルンゼルート(5P目で終了)~クリヤ谷・錫杖沢出会い~槍見温泉
- 奥秩父 釜ノ沢 9月2~3日  
CL: 日高弘次(3) 岡本伸也(3)  
松寄林太郎(2) 横山勝丘(2) 石岡春彦(1)  
野川謙介(1) 中川隆志(1)  
西沢渓谷入口~魚止めの滝(TS) ~甲武信小屋~西沢渓谷入口
- 北アルプス縦走 鹿島槍ヶ岳~五竜岳  
~唐松岳 9月10~13日  
CL: 岸本俊朗(3) 岡本伸也(3)  
大谷原~高千穂平~冷池(TS) ~鹿島槍ヶ岳~五竜岳~唐松山荘(TS) ~唐

- 
- 松岳～白馬鑓ヶ岳～白馬鑓温泉～猿倉
- 北アルプス縦走 西穂高岳～槍ヶ岳  
～燕岳 9月11～14日  
CL : 大木信介(3) 中島辰哉(4)  
上高地～西穂山荘(TS) ～西穂高岳～  
奥穂高岳～奥穂高岳山荘(TS) ～北穂  
高岳～槍ヶ岳～西岳ヒュッテ(TS) ～  
燕山荘～中房温泉
- 北岳バットレス 10月9～11日  
CL : 川井純(4) 日高弘次(3) 石岡春彦(1)  
中村圭一(1) 中川隆志(1)  
10月9日 広河原～白根御池小屋(BC)  
10日 川井・中川 dガリー～下部フラン  
ケ～上部フランケ  
日高・石岡 dガリー～下部フランケ  
～4尾根主稜(中村はベース待機)  
11日 BC～広河原
- 北アルプス縦走 霞沢岳～六百山  
10月23～25日  
CL : 横山勝丘(2) 岸本俊朗(3)  
松寄林太郎(2) 横山輝生(2)  
上高地～徳本峠～白沢源流(TS) ～霞  
沢岳～六百山～上高地
- 明星山P6南壁 10月21日  
CL : 岸本俊朗(3) 横山勝丘(2)  
直上ルート 2P目途中下山
- 北アルプス 潤沢岳北西尾根  
10月23日  
CL : 野田聰(4) 梶原恵(2) 石岡春彦(1)  
中川隆志(1)  
白出小屋～北西尾根～西尾根合流～白  
出大滝～白出沢登山道～白出小屋
- 錫杖岳 前衛フェース 左方カンテ  
10月23日  
CL : 川井純(4) 野川謙介(1)  
槍見温泉～クリヤ谷～左方カンテ～ク  
リヤ谷～槍見温泉
- 北アルプス縦走 東鎌尾根偵察  
11月2～4日  
CL : 川井純(4) 岸本俊朗(3) 日高弘次(3)  
梶原恵(2)  
白出小屋～槍平～肩の小屋(TS) ～東  
鎌尾根～大天荘(TS) ～常念岳～三股
- 北アルプス 笠ヶ岳南西尾根偵察  
11月6～7日  
CL : 川井純(4) 麦谷水郷(4)  
新穂高温泉～雷鳥岩～笠ヶ岳山頂  
(TS) ～笠谷新道～新穂高温泉
- 富士山 11月13～14日  
CL:川井純(4) 原田亮介(5) 横山勝丘(2)  
五合目(スバルライン) ～七合目(TS)  
～吉田口登山道山頂～お鉢周り～五合  
目(スバルライン)  
七合目より上で一部アイゼンが刺さらな  
い箇所あり。
- 南八ヶ岳縦走 11月13～14日  
CL : 梶原恵(2) 大木信介(3)  
松寄林太郎(2) 石岡春彦(1)  
美濃戸口～赤岳鉱泉～硫黄岳～横岳～  
赤岳～キレット小屋(TS) ～権現岳～  
編笠岳～観音平
- 戸隠山 11月20日  
CL : 梶原恵(2) 川井純(4) 麦谷水郷(4)  
日高弘次(3) 横山輝生(2)  
西岳登山口～天狗原～西岳登山口  
天狗原まで藪こぎ。時間切れ敗退。
- 八ヶ岳 冬季登攀 12月11～12日  
CL : 大木信介(3) 原田亮介(5) 川井純(4)  
中島辰哉(4) 麦谷水郷(4) 岸本俊朗(3)  
日高弘次(3) 梶原恵(2) 松寄林太郎(2)  
横山勝丘(2) 横山輝生(2) 石岡春彦(1)  
中川隆志(1) 野川謙介(1) 中村圭一(1)  
12月11日 美濃戸口～赤岳鉱泉(BC) ～  
ジョウゴ沢、裏同心ルンゼ アイスクラ  
イミング

---

12日 原田・大木・岸本 ジョウゴ沢右  
俣大滝  
麦谷・横山(勝)・横山(輝)・野川・石  
岡 石尊稜(取付きミスにより敗退)  
川井・中村・梶原・松壼 赤岳主稜  
中島・日高・中川 阿弥陀岳北稜  
BC～美濃戸口

○八ヶ岳 裏同心ルンゼ 12月16日

CL: 麦谷水郷(4) 岸本俊朗(3)  
美濃戸口～赤岳鉱泉～裏同心ルンゼ～  
大同心稜～赤岳鉱泉～美濃戸口

(GW合宿等は記録紛失のため未記載)

## 22 平成12年度（2000年度）

チーフリーダー 岸本 俊朗

### I. 年度総括

新人合宿は天候に恵まれほぼ予定の計画をこなした。夏の剣定着合宿も事故があったものの天候に恵まれ剣周辺の各ルートを登攀することができた。冬合宿は北アルプス南部を岐阜から長野へ横断する計画を試みるが強烈な荒天に阻まれ強風によるテントの崩壊のアクシデントに見舞われながら連続6日停滞等を乗り越えて予備日前に下山した。

会の運営では8名の新人会員を迎える度当初は賑やかに活動をしていたが、夏合宿を経て冬前には1名となった。在籍していた上級生のメンバーを見ればわかる通り、当時の大学山岳部としては登攀志向が強く、困難と独創性を目指す傾向が色濃くなつたことに一因があるのかもしれない。

### II. 合宿

#### ○新人合宿：槍穂高、涸沢周辺

5月21～28日

CL：岸本俊朗(4) SL：大木信介(4)  
日高弘次(4) 横山勝丘(3) 松寄林太郎(3)  
横山輝生(3) 梶原恵(3) 野川謙介(2)  
佐藤祐樹(1) 山田和輝(1) 島崎普亮(1)  
矢野航(1) 林勝也(1) 山内樹(1) 宮西堅司(1) 吉田隆則(1)  
島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺で  
雪上訓練、涸沢岳、蝶ヶ岳、槍ヶ岳、上  
高地下山

#### ○夏山岩登り合宿（剣岳八ツ峰定着）

8月23～31日

CL：岸本俊朗(4) SL：梶原恵(3) 大木  
信介(4) 日高弘次(4) 横山勝丘(3) 松寄林  
太郎(3) 横山輝生(3) 野川謙介(2) 中村圭  
一(2) 佐藤祐樹(1) 矢野航(1) 林勝也(1)

宮西堅司(1) 麦谷水郷(5)  
黒部ダム～内蔵助平～真砂沢～長次郎  
谷～熊ノ岩  
八ツ峰ABCDフェース、剣岳本峰南壁、  
熊ノ岩、チンネ各ルート登攀

#### ○プレ冬山合宿（双子尾根：途中敗退）

11月23～25日

CL：岸本俊朗(4) SL：松寄林太郎(3)  
日高弘次(4) 横山勝丘(3) 横山輝生(3)  
梶原恵(3) 野川謙介(2) 佐藤祐樹(1)  
矢野航(1) 林勝也(1) 宮西堅司(1)  
猿倉～小日向のコル～権平～双子尾根  
(途中敗退)

#### ○冬山合宿（神岡新道～黒部五郎～三 俣蓮華岳～野口五郎岳～ブナ立尾根 ～高瀬ダム） 12月23日～1月7日

CL：岸本俊朗(4) SL：日高弘次(4)  
松寄林太郎(3) 横山勝丘(3) 横山輝生(3)  
梶原恵(3) 野川謙介(2) 佐藤祐樹(1)  
花谷泰弘(6)

12月23日 晴 松本～打保～水の平TS  
24日 曇のち雪 TS～寺地山避難小屋  
25日 吹雪 沈殿  
26日 吹雪 沈殿  
27日 晴れ 避難小屋～北ノ俣岳～黒部  
五郎岳手前コルTS

28日 吹雪 沈殿  
29日 快晴 TS～黒部五郎岳～黒部五  
郎小屋

30日 晴のち曇 TS～三俣蓮華小屋TS  
31日 吹雪 沈殿  
1月1日 吹雪 沈殿  
2日 吹雪 沈殿  
3日 吹雪 沈殿  
4日 吹雪 沈殿  
5日 吹雪 沈殿

6日 吹雪のち晴 TS～鷲羽岳～水晶小屋～真砂岳～野口五郎小屋  
7日 晴のち雪 野口五郎小屋～烏帽子小屋～ブナ立尾根～葛温泉下山

### III. 個人山行

#### ○戸隠山縦走 6月10～11日

L: 梶原恵(3) 岸本俊朗(4) 宮西堅司(1)  
吉田隆則(1) 石岡晴彦(部外)  
奥社～八方睨～一不動避難小屋～高妻山～乙妻山～往路下山

#### ○唐沢岳幕岩 6月17～18日

L: 岸本俊朗(4) 大木信介(4) 横山勝丘(3)  
大凹角ルート

#### ○常念岳 6月25日

L: 大木信介(4) 林勝也(1) 宮西堅司(1)

#### ○蝶ヶ岳～常念岳 (ランニング登山)

7月2日

L: 大木信介(4) 矢野航(1)

#### ○戸隠連峰 7月12～13日

L: 梶原恵(3) 日高弘次(4)  
天狗平～西岳～本院岳～八方睨～奥社

#### ○錫杖岳前衛フェース 1ルンゼ

7月15～16日

L: 横山勝丘(3) 松寄林太郎(3)  
横山輝生(3) 梶原恵(3)  
1ルンゼルート

#### ○餓鬼岳・燕岳縦走 7月15～16日

L: 野川謙介(2) 中村圭一(2) 佐藤祐樹(1)  
山田和輝(1) 林勝也(1) 宮西堅司(1)  
中房温泉～餓鬼岳、中房温泉～燕岳

#### ○妙高山・黒姫山縦走 7月19～21日

L: 梶原恵(3)  
燕温泉～妙高山～笛ヶ峰～黒姫山～戸隠牧場

#### ○錫杖岳前衛フェース 7月19～20日

L: 横山勝丘(3) 中村圭一(2)  
アニバーサリールート

#### ○錫杖岳前衛フェース 7月22～23日

L: 大木信介(4) 日高弘次(4)  
1ルンゼ、左方カンテルート

#### ○瑞牆山十一面岩 7月22～23日

L: 横山勝丘(3) 中村圭一(2)  
ベルジュエール

#### ○北アルプス縦走 (サマ天発着剣岳～読売新道経由Uターン縦走)

8月6～20日

L: 梶原恵(3) 宮西堅司(1)  
上高地～槍ヶ岳～双六岳～三俣蓮華岳～黒部五郎岳～薬師岳～立山～剣岳～黒部ダム～赤牛岳～水晶岳～～三俣蓮華～槍ヶ岳～北穂高岳～奥穂高岳～前穂高岳～ジャンダルム～西穂高岳～上高地

#### ○北アルプス縦走 (白馬～上高地)

8月3～11日

L: 中村圭一(2) 佐藤祐樹(1) 矢野航(1)  
白馬大雪渓～白馬岳～唐松～五竜～鹿島槍～針ノ木～船窪～野口五郎～双六～槍ヶ岳～大天井～常念～大滝山～徳本峠～上高地

#### ○南アルプス縦走 (全山縦走)

8月2～15日

L: 野川謙介(2) 林勝也(1) 山田和輝(1)  
夜叉神峠～鳳凰三山～甲斐駒～仙丈～白根三山～塩見～荒川三山～聖～光～大無間～小無間～田代下山

#### ○槍穂高岳縦走 8月5～8日

L: 松寄林太郎(3)  
サマ天～焼岳～西穂高～奥穂～南岳～槍ヶ岳～サマ天

#### ○霞沢岳上千丈沢 8月12日

L: 横山勝丘(3) 松寄林太郎(3)  
サマ天～上千丈沢～霞沢岳～八右衛門沢～サマ天

○穂高屏風岩 雲稜 東壁ルンゼ

8月15日

L: 松寄林太郎(3) 岸本俊朗(4)

○穂高屏風岩 8月16~17日

L: 横山勝丘(3) 中村圭一(2) 雲稜

横山勝丘(3) 岸本俊朗(4)

東壁ルンゼ

○穂高 滝谷 9月5~8日

L: 松寄林太郎(3) 岸本俊朗(4)

宮西堅司(1)

ドーム中央稜 ドーム北壁

○穂高岳縦走 9月11~13日

L: 横山輝生(3) 林勝也(1)

上高地~涸沢~奥穂~西穂~上高地

○北岳バットレス 9月17~19日

L: 松寄林太郎(3) 横山輝生(3) 梶原恵(3)

野川謙介(2) 矢野航(1)

Dガリー奥壁、四尾根、ピラミッドフェース

○屏風岩 雲稜 9月21~22日

L: 岸本俊朗(4) 松寄林太郎(3)

雲稜(オールフリー)

○裾花川~九頭竜沢 9月24~25日

L: 岸本俊朗(4) 日高弘次(4)

松寄林太郎(3) 矢野航(1)

裾花川本流~九頭竜沢~一不動~戸

隠牧場

○冬山合宿偵察 10月7~9日

L: 岸本俊朗(4) 日高弘次(4)

松寄林太郎(3) 梶原恵(3) 横山輝生(3)

打保~神岡新道~北ノ俣~黒部五郎~

三俣蓮華~水晶~船窪~蓮華岳~扇沢

○錫杖岳 10月14~15日

L: 横山勝丘(3) 岸本俊朗(4)

前衛フェースジェードルルート~烏帽子

岩南壁右ルート~本峰

○南アルプス深南部 10月14~17日

L: 松寄林太郎(3) 横山輝生(3) 梶原恵(3)

矢野航(1)

鳥冠山~池口岳~加加森山~光岳~易老岳

○女鳥羽川 10月16日

L: 岸本俊朗(4) 日高弘次(4)

中ノ沢~地獄谷

○明星山P6南壁 10月21日

L: 松寄林太郎(3) 横山輝生(3)

野川謙介(2)

左岩稜

○中央アルプス 11月11日

L: 梶原恵(3) 岸本俊朗(4) 佐藤祐樹(1)

林勝也(1) 矢野航(1)

桂木場~将棋頭~木曽駒~宝剣~往路

○富士山 11月18~20日

L: 松寄林太郎(3) 岸本俊朗(4)

大木信介(4) 梶原恵(3) 野川謙介(2)

吉田口~山頂~吉田口

○八ヶ岳 12月2~3日

横山勝丘(3) 野川謙介(2)

赤岳鉱泉~小同心クラック~硫黄岳~

赤岳鉱泉

○八ヶ岳 12月9~10日

L: 松寄林太郎(3) 横山輝生(3) 梶原恵(3)

日高弘次(4) 佐藤祐樹(1)

ジョウゴ沢アイスクライミング 石尊稜

○唐沢岳幕岩 12月9~10日

L: 岸本俊朗(4) 横山勝丘(3) 花谷泰弘(6)

大凹角ルート

## 23 平成13年度（2001年度）

チーフリーダー 横山 勝丘

### I. 年度総括

前年度、12人の新入部員を迎えたものの、一年を終えてみれば残ったのは佐藤祐樹ひとり、という寂しい結果となってしまった。いろいろと考えた結果、厳しさよりも「楽しさ」を前面に出して会運営をしていくという方針に転換をして4月を迎えた。

新歓の結果、新入部員は6名。うち半数の3名が女子と、近年稀にみる会員構成となつた。

「楽しさ」とは難しい言葉である。伝統ある信州大学山岳会の看板を背負っている以上、タダの「enjoy」ではダメだ。理想とするところは、「山に対する情熱を追求した先に見えてくる楽しさ」であった。

かくして一年は始まったが、新人合宿を終えた直後には、4年生の梶原と松崎の二人がアラスカ・デナリに向かい、無事に登頂という結果を残して帰国した。それに触発されるように、合宿はもとより個人山行にしてみても、上級生の熱い想いの詰まった山行が多く繰り広げられた一年であった。

冬山合宿では、リーダー横山の独断によって下山すべき判断を先延ばしにしてしまい、結果として(数時間ではあったが)最終下山時刻を過ぎるという失態を犯してしまった。限界をプッシュするということと、1年生も含めた集団を率いることのバランスを取るのがいかに難しいか思い知らされた合宿でもあった。

さまざまな意味で、「個」と「集団」の共存について考えさせられた一年だった。

### II. 合宿

#### ○新人合宿 5月20～27日

CL：横山勝丘(4) SL：横山輝生(4)  
松崎林太郎(4) 梶原恵(4) 佐藤祐樹(2)  
井上あゆみ(1) 牛田光昭(1) 片寄哲生(1)  
高谷英太郎(1) 中福愛留(1) 柳澤直子(1)  
島々谷～徳本峠～明神～横尾BC(2日間)

涸沢周辺にて雪上訓練(3日間)  
蝶ヶ岳登山、槍ヶ岳登山、上高地下山

#### ○夏山合宿 8月24～31日

CL：横山勝丘(4) SL：横山輝生(4)  
松崎林太郎(4) 梶原恵(4) 佐藤祐樹(2)  
片寄哲生(1) 高谷英太郎(1)  
黒部ダム～内蔵助平～真砂沢～熊の岩BC

八ツ峰、源次郎尾根、チンネ周辺登攀  
内蔵助平経由で下山  
登攀ルート：八ツ峰VI峰フェース各ルート

熊の岩、源次郎尾根、チンネ左稜線等

#### ○プレ冬合宿 11月23～11月25日

CL：横山勝丘(4) SL：横山輝生(4)  
松崎林太郎(4) 梶原恵(4) 佐藤祐樹(2)  
井上あゆみ(1) 片寄哲生(1)  
高谷英太郎(1)

遠見尾根～五竜岳往復

#### ○冬合宿 12月24～1月7日

CL：横山勝丘(4) SL：横山輝生(4)  
松崎林太郎(4) 梶原恵(4) 佐藤祐樹(2)  
井上あゆみ(1) 片寄哲生(1)  
高谷英太郎(1)

黒部五郎岳南西尾根～三俣蓮華岳～抜戸岳～鏡平～新穂高温泉

※記録紛失により詳細不明。予定では笠ヶ岳～錫杖岳を経由して新穂高温

泉に下山の予定であったが、強い冬型によって猛吹雪となり、抜戸岳手前にて連続6沈。冬型が緩まったタイミングを見計らい、鏡平経由で新穂高温泉に無事下山した。最終下山時刻を数時間過ぎ、OB諸氏に迷惑をかける。

### III. 個人山行

#### ○雲取山 3月26~27日

L: 横山勝丘(4) 佐藤祐樹(2)

#### ○伊豆海金剛 4月2~4日

L: 横山勝丘(4) 岸本俊朗(5)

スーパーイン、城ヶ崎の各ルート

#### ○富士山 4月7~8日

L: 横山勝丘(4) 松寄林太郎(4)

梶原恵(4) 横山輝生(4) 野川謙介(3)

吉田口~山頂~吉田口

#### ○鹿島槍東尾根 4月14~16日

L: 松寄林太郎(4) 横山勝丘(4)

梶原恵(4) 大木信介(5)

#### ○北ノ俣~薬師岳

4月28日~5月2日

L: 野川謙介(3) 松寄林太郎(4)

川井純(院2)

周辺一帯でスキー山行

#### ○瑞牆山 4月28~29日

L: 横山勝丘(4) 花谷泰弘(OB)

岸本俊朗(5) 大木信介(5) 佐藤祐樹(2)

調和の幻想、ベルジュエール、南回帰線、スコール

#### ○戸隠P1尾根 5月3~5日

L: 梶原恵(4) 松寄林太郎(4)

横山輝生(4) 日高弘次(5) 大木信介(5)

#### ○奥秩父釜ノ沢東俣 6月16~17日

CL: 横山輝生(4) 岸本俊朗(5)

日高弘次(5) 横山勝丘(4) 井上あゆみ(1)

牛田光昭(1) 片寄哲生(1) 高谷英太郎(1)

中福愛留(1) 柳澤直子(1)

広瀬~釜ノ沢東俣(魚止の滝にてビバーク) ~甲武信ヶ岳~近丸新道経由で下山

#### ○蝶ヶ岳・常念岳縦走 6月23~24日

CL: 佐藤祐樹 横山勝丘(4)

井上あゆみ(1) 高谷英太郎(1)

中福愛留(1) 柳澤直子(1)

加藤昌和(部外者)

3俣~蝶ヶ岳往復 (悪天により敗退)

#### ○白馬三山 6月30日~7月1日

CL: 横山輝生(4) 井上あゆみ(1)

牛田光昭(1) 高谷英太郎(1) 中福愛留(1)

柳澤直子(1)

白馬大雪渓~白馬岳往復 (悪天により敗退)

#### ○中央アルプス南部縦走

7月14~15日

CL: 松寄林太郎(4) 梶原恵(4)

井上あゆみ(1) 中福愛留(1) 柳澤直子(1)

中小川~越百岳~仙涯嶺~念丈岳~下山

#### ○錫杖岳前衛フェース 7月14日

CL: 横山勝丘(4) 佐藤祐樹(2)

大木信介(5) 岸本俊朗(5)

注文の多い料理店、ジェードルルート登攀

#### ○錫杖岳前衛フェース 7月23日

CL: 横山勝丘(4) 松寄林太郎(4)

北沢側フランケ「しあわせ未満」登攀

#### ○北アルプス縦走 8月6~15日

CL: 佐藤祐樹(2) 高谷英太郎(1)

井上あゆみ(1)

黒部ダム~真砂沢~剣岳~立山~奥黒部ヒュッテ~読売新道~雲ノ平~槍ヶ岳~北穂高岳~上高地

#### ○北アルプス縦走 8月10~16日

CL: 横山輝生(4) 片寄哲生(1) 牛田光昭(1)

称名平～大日岳～室堂～五色ヶ原～  
奥黒部ヒュッテ～読売新道～双六岳～  
笠ヶ岳～新穂高温泉～焼岳～上高地

### ○錫杖岳前衛フェース

9月17～23日

CL : 横山勝丘(4) 佐藤祐樹(2)  
前衛フェース白壁に新ルート開拓  
「体臭のカーニバル」230m 5.7 A3

### ○北岳バットレス 9月22～25日

CL : 横山輝生(4) 梶原恵(4)  
松寄林太郎(4) 高谷英太郎(1)  
井上あゆみ(1)  
23日：第四尾根、下部～上部フランケ  
24日：北岳縦走、第四尾根

### ○表銀座縦走 10月6～8日

CL : 高谷英太郎(1) 井上あゆみ(1)  
片寄哲生(1)  
中房温泉～大天井岳～常念岳～蝶ヶ  
岳

### ○上信国境 魚野川遡行

10月6～8日

CL : 松寄林太郎(4) 横山輝生(4)  
岸本俊朗(5) 日高弘次(5)  
野反湖～魚野川本流遡行～大高山

### ○黒部川下の廊下・剣岳

10月8～10日

CL : 大木信介(5) 梶原恵(4)  
黒部ダム～阿曽原温泉～仙人池～池の  
平山～真砂沢～黒部ダム（敗退）

### ○冬合宿偵察 10月13～14日

CL : 横山勝丘(4) SL : 横山輝生(4)  
松寄林太郎(4) 梶原恵(4) 佐藤祐樹(2)  
井上あゆみ(1) 片寄哲生(1) 高谷英太郎(1)  
鏡平～笠ヶ岳～錫杖岳～新穂高温泉

### ○錫杖岳前衛フェース

12月8～9日

CL : 横山勝丘(4) 岸本俊朗(5)  
左方カンテ登攀

### ○八ヶ岳西面 2月5～8日

CL : 大木信介(5) 岸本俊朗(5)  
佐藤祐樹(2) 井上あゆみ(1) 片寄哲生(1)  
高谷英太郎(1)  
阿弥陀岳北稜、摩利支天大滝等  
※法政大学との合同合宿

### ○南アルプス南部縦走

2月19～24日

CL : 梶原恵(4) 川井純(6) 井上あゆみ(1)  
易老渡～聖岳～茶臼岳～光岳～易老渡

### ○唐沢岳幕岩 2月22～27日

CL : 横山勝丘(4) 本間達弘(部外者)  
大凹角ルート、畠山ルート登攀

### ○霞沢岳 3月10～11日

CL : 横山勝丘(4) 岸本俊朗(5)  
佐藤祐樹(2) 片寄哲生(1)  
上千丈沢左稜登攀

### ○甲斐駒ヶ岳 5月3～4日

CL : 高谷英太郎(1) 大木信介(5)  
片寄哲生(1)  
黒戸尾根往復

## IV. 特筆すべき山行記録

### ○デナリ登山 5月29日～6月30日

CL : 梶原恵(4) 松寄林太郎(4)  
ウェストバットレスからのデナリ登頂。6月1日に登山活動を開始し、15日に登頂する。18日に登山活動を終えた後は、各自アラスカを旅する。

現役のみによる海外への山行は、過去数年来の流行?であった。新人合宿を終えた一年生が活動を続けるか否かの大変な時期であったが、各々が各々の情熱にまっすぐ向き合うことこそ大事と思い、他の会員も梶原と松寄の遠征を後押しした。

途中悪天候もあり、4300mのメディカルキャンプで7泊を余儀なくされたが、

---

アタック活動に入ってからは順調に進む。初めての低酸素には苦労させられたようだ(極北のデナリは、標高は6000mを少し超える程度だが、気圧はヒマラヤの7000mに匹敵する)。

## ○錫杖岳前衛フェース

9月17~23日

CL : 横山勝丘(4) 佐藤祐樹(2)

前衛フェース白壁に新ルート開拓

「体臭のカーニバル」230m 5.7 A3

横山は前年にヨセミテに赴き、エルキャピタンを登攀した。ビッグウォールクライミング特有の重労働には嫌気が差したが、大きな壁に自分たち自身のラインを見出してそれを登るという行為は、当時の横山にとってはもっとも魅力的に思えた。

白壁は傾斜が強く、また摂理も少ないため、登攀には苦労させられた。結果として、登攀に4日を費やすこととなった。使い慣れないギアを総動員してジワジワと進む行為は、当時の横山と佐藤にとっては肉体的にも精神的にも厳しいものとなつたが、結果的に一本のルートとして残すことができたのはひとつの大きな成果であろう。

余談であるが、2014年、これとほぼ同じラインがフリー化され、「ラ・カンパネラ」というルート名で世に発表された。横山は2016年にこれを再登したが、いわゆるマルチピッチフリークライミングの分野では、国内でも類を見ないほどのクオリティの高いルートであると感じた。すぐ左側には、15年前に我々が回収し忘れたコパーへッドが一本ポツリと残されており、過ぎ去った歳月が思い出され、感慨深いものであった。

## 24 平成14年度（2002年度）

チーフリーダー 佐藤 祐樹

### I. 年度総括

全国的な山岳部の部員不足に関し信州大学山岳会も同様だった。2002年春、会員はリーダーとなるべき4年生が不在で、3年1名、2年2名、1年6名、5年3名の計12名でのスタートだった。それまで合宿は基本的に1年～4年で運営していたので、本来であれば3年・2年の3名と新人6名での新人合宿となるべきであったが、上級生不足を考え5年生2名とOB 1名の助けを借りての新人合宿となった。また、2002年3月に発生した剣岳山域で1年生が500m近く滑落する事故を受けて、事故に対する危機感の高まりからの5年・OBの参加であった。毎年の新人合宿をただトレースしたに過ぎない合宿であったが、全日程天候が安定し計画通り涸沢での雪上訓練を終え、蝶ヶ岳、奥又白池、槍ヶ岳に立っている。当時の報告書を読み返すと1年生の登山基本技術向上、2年生の事故に対する意識・危機感の向上、3年生の指揮系統、管理能力の向上に役立っていた。

夏合宿も同様に5年・OBの手助けを必要とした。このころから「少数先鋭を目指す」というような言葉が散見される。会の技術レベルの低下を危惧しての言葉であった。毎日夕立に降られ、チンネは断念したがハツ峰六峰フェース群・源次郎を登り、会の底上げとなつた。しかし、登攀技術レベルの個人差が大きかった。2000年頃からか、信大山岳会にもフリークライミングの流れが押し寄せてきていた。フリークライミング技術に長けた者は岩の山行が多くなり、フリークライミングをしない者は縦走や沢登りといった山行が多く組ま

れていた。その結果が登攀技術レベルの格差に繋がったように思われる。

この年ハツ峰I峰側壁が崩れ、長次郎谷の出合から崩落した土砂が大量に堆積していた。この年以降、I峰からの落石が多くなり浮き石が長次郎谷上に残るようになった。

夏合宿後部員はさらに減り、プレ冬合宿と冬合宿は6人(3年1人、2年2人、1年3人)で遂行した。5年・OBの助けを借りない合宿であったが、上級生不足に大分苦労していたことが報告書から伺える。プレ冬合宿の八方尾根～唐松岳ではさして問題はなかったが、冬合宿の唐沢岳～餓鬼岳～燕岳はフィックス箇所が多く、上級生不足に大泣かされた。

年度報告書には以下が書かれていた。「今年の自分は思い悩むことが多かった。分化する登山スタイルと減少する部員という状況の中で大学山岳部は何を選び、どう変化していくのか。」フリークライミングを実践する者としない者で登攀技術の個人レベル差が大きくなつたことや、各個人の意識の差で体力差が大きくなつたことを受けての言葉であった。

### II. 合宿

#### ○新人合宿 5月19～26日

CL : 佐藤祐樹(3) SL : 片寄哲生(2)

高谷英太郎(2) 牛塚朝子(1) 尾鼻陽介(1)

瀧澤輝佳(1) 三森武志(1) 大橋達也(1)

梶原恵(5) 横山勝丘(5) 岸本俊朗(OB)

穂高岳周辺 島々～徳本峠～横尾BC

涸沢周辺で雪上訓練、槍沢経由槍ヶ岳往復、蝶ヶ岳往復、松高尾根経由奥又白池往復、上高地下山

## ○夏合宿 8月24～31日

CL : 佐藤祐樹(3) SL : 片寄哲生(2)  
高谷英太郎(2) 井上あゆみ(2) 牛塚朝子(1)  
尾鼻陽介(1) 瀧澤輝佳(1) 三森武志(1)  
大橋達也(1) 水野智章(1) 岸本俊朗(OB)  
大木信介(OB)  
剣岳周辺 黒部ダム～熊の岩BC VI峰  
フェース群(中大、剣稜会、RCC、魚津  
高、京大、富山大、Dフェース左) V峰  
フェース、V峰クラック、熊の岩、源次  
郎尾根、黒部ダム下山

## ○プレ冬合宿 11月22～24日

CL : 佐藤祐樹(3) SL : 片寄哲生(2)  
高谷英太郎(2) 瀧澤輝佳(1) 三森武志(1)  
大橋達也(1)  
唐松岳  
11月22日 晴れ 白馬八方スキー場～八  
方池山荘～八方池～丸山上部TS～  
唐松岳山頂～TS  
23日 晴れ TS～ビーコン訓練～八方池  
山荘裏にて雪洞泊(ビバーク訓練)  
24日 風雪 八方池山荘～白馬八方ス  
キー場

## ○冬合宿 12月21～31日

CL : 佐藤祐樹(3) SL : 片寄哲生(2)  
高谷英太郎(2) 瀧澤輝佳(1) 三森武志(1)  
大橋達也(1)  
唐沢岳～燕岳  
12月21日 曇り 葛温泉～唐沢岳西尾根  
1850m付近TS 濃密なシャクナゲの  
ブッシュに苦戦する。  
22日 晴れ TS～2286m小ピーク～  
2150mコル～2200mTS  
シャクナゲのブッシュは1900m付近で  
薄くなり、今度は腰から胸のラッセルと  
なる。2286m小ピークからの下りが痩せ  
尾根の露岩帯となり南斜面の急な樹林  
帯をトラバースした。

23日 晴れ TS～唐沢岳山頂～2483m手  
前のコルTS 唐沢岳山頂からの下り  
にロープを数回使用している。

24日 曇り～吹雪 TS～餓鬼のコブ～餓  
鬼岳山頂～餓鬼岳小屋TS～フィックス  
隊往復 餓鬼岳小屋より先でフィッ  
クスを2ヶ所張る。

25日 吹雪 TS～フィックス隊往復 夏道  
でもはしごや鎖場が多く出るケンズ  
リ付近の偵察をする。

26日 吹雪 沈殿。

27日 吹雪 沈殿。

28日 晴れ TS～ケンズリ～2508m手前  
のコル～東沢岳～東沢乗越手前TS  
フィックス工作隊(3名)と回収隊(3  
名)に分かれて行動した。あえて本隊  
をなくし、効率化を図る。ケンズリ最  
後の絶壁では2時間の大巻きで時間  
がかかる。

29日 吹雪～晴れ 沈殿。北燕岳の通過  
には丸1日の晴れが必要と判断した。

30日 晴れ TS～東沢乗越～北燕岳～  
燕岳～燕山荘TS 本合宿の核心の北  
燕、予想通り岩稜帯を縫うように進  
む。ルートファインディングに時間が  
かかる。

31日 晴れ TS～合戦小屋～中房温泉～  
宮城のゲート 常念岳まで行く予定で  
あったが、食料の残りが少ないと  
天気が荒れることが予想されたた  
め、合戦尾根を下山する。

本合宿は3年1人、2年2人、1年3名  
で行われた。4年不在の中でフィックス・懸垂を多数使用し、ルートファイン  
ディングの難しさを考えると充実した合  
宿であった。登山歴3年程度でこれまで  
の山行ができるのは信州大学山岳会  
独自の新人教育システムが成立してい

---

るからであり、それが未だに伝統として受け継いでいることが実証できた合宿だったと思う。

### III. 個人山行

#### ○西穂高岳～槍ヶ岳縦走

3月2～6日

CL: 佐藤祐樹(3) SL: 片寄哲生(2)

3月2日 晴れ 新穂高ロープウェー～西穂山荘TS

3日 晴れ～吹雪 西穂山荘TS～西穂高岳～ジャンダルム～奥穂高岳～穂高岳山荘上部TS

ジャンダルム付近で吹雪が強くなる。数m先すら確認できないホワイトアウトの中、手探りでトレースを切り拓く。奥穂高岳の下りでルートを見失う。付近の吹きだまりをL字に掘ってテント場とする。除雪を余儀なくされる。

4日 吹雪 TS～穂高岳山荘冬季小屋

除雪時に雲の切れ間から下部に穂高岳山荘が見えた。直ぐに出発し、山荘に着いた。片寄の指先が1度の凍傷になっていた。

5日 晴れ 穂高岳山荘～北穂小屋～南岳小屋～大喰岳～槍ヶ岳山荘冬季小屋

雪の付き方が良かったようで、程よい緊張感の中快調に進む。A沢のコル手前の下りで一度懸垂したのみである。朝日に照らされる雪の涸沢はなんとも美しかった。

6日 晴れ 冬季小屋～大喰岳西尾根～白出沢～新穂高

片寄の凍傷が悪化したので、槍ヶ岳山頂は諦め、下山することになった。ワカンを持ってこなかったので、き

ついラッセルとなった。新穂高に下山した時には穂高の山並みが冬型の雲に覆われていた。

#### ○各地アイスクライミング

この年の冬は例年以上に冷え込み、各地の滝が氷結した。アイスクライミングの装備も格段に発達し、片手だけで打つことができるアイスクリューや先端が曲がり先の尖ったアイスバイル、前歯が縦爪になっているアイゼンなど、アイスクライミングに特化した装備が出回っていた。この年、アイスクライミングに興じ、20本近い氷爆を登っている。1998年頃から信州大学山岳会もアイスクライミング技術を取り入れ、一部の会員だけであるが年に20本近くまで登るまでになった。

## 25 平成15年度（2003年度）

チーフリーダー 佐藤 祐樹

### I. 年度総括

去年に引き続き部員不足に悩まされながらのスタートだった。4年1人、3年2人、2年1人、1年4人で会員計8名という中で、新人を如何に育て上げるべきか、熟考した。部のレベルを下げてでも、新人に優しくし会に残すか。それは昭和29年入部の故小林OBが部報No.1の中で述べている「新人部員温存主義」と合致するものだった。しかし、私の知っている信州大学山岳会の教育システムは「新人温存主義」とは反するものであった。SACの教育システムは戦国時代に千利休が提唱したプロフェッショナル育成論「守破離」そのものであると考えている。1・2年でSAC独自の登山技術の型を身体に憶えこませ、その重要性を理解できなくてもひたすら型を「守る」。型を習得した3年は、型を習得する際に生まれた葛藤を胸に他流儀も研究し、自らの型を「破る」。そして4年になり自ら新しい型を作り上げ、山岳会を「離れる」。全国的に大学山岳部の人数が減っていき各大学の伝統が潰えていく中で、信州大学山岳会は未だに「守破離」伝統的新人教育システムがなんとか成立していた。楽しく、楽に皆で和気あいあいと登山することも可能であったが、それでは信州大学山岳会ではない。慎重にかつ厳密に登山計画を練りあげ、規律を守れない者には叱咤し、危険個所では厳しく注意喚起をする。規律・統制を重んじてこそ信州大学山岳会であり、ただ楽しかっただけでは終わらない濃密な学生生活が送れるのである。それが会の規約第一章第2条(目的)にある「会員相互の親睦と人間形成に資する」に通じるのだと思う。ある先輩の

言葉「上級生よりアルプスの山々の方が非情で厳しい。山は人を殺すが、上級生は殺さない。」を思い出す。

しかし規律・統制一辺倒であれば、現代の新人は直ぐにやめてしまう。信州大学山岳会の長い歴史を見ても部員数は大きな波がある。一度事故が起こると規律統制を重要視し、会を引き締める。ただ、それでは会員が減っていく一方であるので、どこかの段階で新人部員温存主義が代頭し、また人数が増えていく。

私は「飴と鞭」のバランスが大切だと思っている。2003年度はそのバランスを重要視しながら運営した。

年度の総括と言える冬合宿は1年生が300m滑落するという大きな事故により途中敗退せざるをえなくなった。非常に残念であったが、滑落した1年生は無傷であったことは不幸中の幸いであった。

槍ヶ岳に登った翌日の1ピッチ目、気の緩みやすい状況であった。上級生は注意喚起を適度に行っていたと思うが、当人も上級生も気が緩んでいたのかもしれない。また冬合宿報告書にはこう記してある。「この合宿が始まる12月25日朝、佐藤が左足のプラブーツの靴紐をしめた瞬間、靴紐がぶちっと切れた。そしてこの日の朝(事故当日の朝)、今度は右足の靴紐が切れた。その時は何も気にもとめなかった。今思えば、あれは誰かの警告だったのかもしれない。この日の朝は凄まじい色で周りの山々が燃えていた。昨日通ってきた中岳、大喰岳、そして槍ヶ岳。これらの山々は特に我々の目の前で真紅に染まり、本当の雪の色をしばし忘れさせた。そして事故。すべての予兆が終わり、事故が起きた。

私は真紅に染まる山々を見て、「綺麗だな」とは感じていなかった。むしろ「気持ちの悪い紅さだ」と思っていたが、今後の事は注意を払っていなかった。そこに異様な雰囲気を感じ取り行動を起こしていたならば、事故は回避できたかもしれない。五感(第六感も)を総動員し、小さな自然の事象も見逃さない。それが山を畏怖するということである。自然界で生きる動物は皆そうしている。

この経験は私の登山活動に大きな影響を及ぼした。技術・体力・知識だけではどうにもならない「山への畏怖」を感じた冬合宿であった。

## II. 合宿

### ○新人合宿 5月18~25日

CL : 佐藤祐樹(4) SL : 片寄哲生(3)  
高谷英太郎(3) 三森武志(2) 小尾智明(1)  
高橋昭彦(1) 畠中洸(1) 加藤なゆ樹(1)  
穂高岳山域 島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺で雪上訓練、槍沢経由槍ヶ岳往復、涸沢岳、蝶ヶ岳、上高地下山

### ○夏合宿 8月24~31日

CL : 佐藤祐樹(4) SL:片寄哲生(3)  
高谷英太郎(3) 三森武志(2) 小尾智明(1)  
高橋昭彦(1) 畠中洸(1) 加藤なゆ樹(1)  
剣岳山域 黒部ダム～梯子谷乗越から熊の岩BC、八ツ峰六峰フェース群登攀(魚津高、RCC、剣稜会、富山大、熊の岩登攀、V峰フェース登攀、源次郎尾根、黒部ダム下山

### ○プレ冬合宿 11月29~30日

CL : 佐藤祐樹(4) SL : 片寄哲生(3)  
三森武志(2) 小尾智明(1) 高橋昭彦(1)  
畠中洸(1) 加藤なゆ樹(1)  
11月29日 小雨 とおみスキーサークル～アル

プス平～小遠見山～大遠見山～西遠見山TS

30日 雨 TS～五竜岳往復～アルプス平～とおみスキーサークル下山

### ○冬合宿 北アルプス横尾尾根～槍ヶ岳～中崎尾根 12月23～30日

CL : 佐藤祐樹(4) SL : 片寄哲生(3)  
三森武志(2) 小尾智明(1) 高橋昭彦(1)  
畠中洸(1)

12月23日 晴れ 中の湯～横尾避難小屋

24日 雪のち曇り 避難小屋～横尾尾根2のガリー～横尾尾根P3TS

25日 晴れ TS～3のガリーのコル～P4～2450m付近TS

26日 雪 TS～P5～横尾の歯～天狗のコル～デポ上げ往復 積雪まであと標高差150mという地点で頭以上のラッセルで苦しめられる。

27日 猛吹雪 沈殿。

28日 快晴 TS～中岳～大喰岳～槍ヶ岳山荘冬季小屋～槍ヶ岳往復 一昨日頭上まであった雪が消え失せ、カツカツのクラスト斜面になっていた。

29日 晴れのち吹雪 冬季小屋～東鎌2900m地点会員滑落～槍ヶ岳山荘～千丈沢乗越～中崎尾根2100mTS滑落した会員のザックの中身が食料であったこと、会員の心理的状況を考え中崎尾根下山を決定。

30日 TS～穂高平～新穂高

## III. 個人山行

### ○南アルプス赤石沢遡行サバイバル登山

9月23～25日

CL : 佐藤祐樹(4) SL : 三森武志(2)  
加藤なゆ樹(1)  
9月23日 畑薙第一ダム～赤石沢出合～北沢出合BP

24日 BP～北沢出合BP～百間洞出合

BP

25日 BP～百間洞山の家～赤石岳～椹  
島～畠薙第一ダム

持っていく食料は米と味噌だけ(お酒  
は持った)、残りは現地調達というサバイ  
バル登山を遂行した。初日は岩魚が殆ど  
釣れずに大変ひもじい思いしたが、2日目  
は魚影が濃くなり、岩魚で食いつないだ。  
一日一人米5合持っていたが、全く足り  
ない。3日間空腹を感じながらの登山で  
あった。3日目の源流部では岩魚が釣れ  
なくなるので、岩魚の薰製を作り行動食と  
した。しかし、赤石岳に着く頃には食べつ  
くし、かろうじて余っていた紙パックの日本  
酒を飲んだ。私の人生で最も美味しい日本  
酒であった。

#### ○自転車山行

この年部室から自転車で登山口まで行  
き、山を登り自転車で帰ってくる通称「チャ  
リ山行」が流行っていた。SL片寄を中心  
に常念岳～蝶ヶ岳日帰り、船窪岳～野口  
五郎岳1泊2日、扇沢～読売新道～裏銀座  
～蓮華岳～扇沢3泊4日、戸台口～仙丈ヶ  
岳・甲斐駒ヶ岳4泊5日(松本発!)の登山  
を遂行した。信州大学ならではの山行で、  
体力的に厳しい登山であった。「自力」が  
テーマの山行だった。

#### ○北アルプス唐沢岳幕岩大凹角ルート

12月17～18日

CL: 佐藤祐樹(4) 横山勝丘(6)

山田達郎(部外)

12月17日 葛温泉～大町の宿～大凹角  
ルート取付～大チムニ一下テラスBP

18日 BP～終了点～葛温泉

2月から予定していたヨーロッパ遠征  
に向けての冬壁登攀であった。スラ  
ブ帶には薄くベルグラが張り、草付

きはしっかり凍りついている。12月中  
旬にしてはコンディションの良い登  
攀だった。吹雪の中の登攀であった  
が、ヨーロッパへのステップには相応  
しいルートであった。



(上写真 荒船山アイスクライミング)

※冬山以降から3月までの記録なし。



## 26 平成16年度（2004年度）

### I. 年度総括

雨の多い年であった。報告書の随所に雨の記述が見られる。恒例のエリアにも関わらず、雨のせいで全く変わって見える場所も少なくなかった。

新人3名の入部を得て、冬合宿まで乗り越えてくれたのは内2名。会員数減少が著しく、数少ない上級生の半数は非在松本部員で、新人育成には質(精神)・量ともに至らない点があったことが思い出される。大きな事故をせずに済んだ一方で、合宿においては萎縮した判断で、機会を損ねてしまった感がある。

### II. 合宿

#### ○新人合宿 5月16～23日

CL : 片寄哲生(4) SL : 三森武志(3)  
高谷英太郎(3) 高橋昭彦(2) 小尾智明(2)  
片岡陽介(1) 山中豪(1)  
島々～徳本峠～横尾BC、涸沢周辺で  
雪上訓練、槍沢経由槍ヶ岳往復、上高  
地下山

#### ○もう一つの新人合宿 5月8～9日

CL : 片寄哲生(4) SL : 三森武志(3)  
高谷英太郎(3) 高橋昭彦(2) 小尾智明(2)  
佐山鉄平(1)  
白馬乗鞍岳下部斜面にて雪上訓練。実  
習のために本新人合宿に参加できない  
佐山のために企画した短期合宿である。

#### ○夏山岩登り定着合宿 8月26～31日

CL : 片寄哲生(4) SL : 高谷英太郎(3)  
三森武志(3) 高橋昭彦(2) 片岡陽介(1)  
佐山鉄平(1) 山中豪(1)

8月26日 黒部ダム～内蔵助平。内蔵助  
谷出合から先の登山道崩壊が酷く、  
巻き道やトラバースを繰り返す。

### チーフリーダー 片寄 哲生

27日 内蔵助平～熊の岩。多雨と台風の影響か、剣沢、長次郎谷どちらの雪渓も大変やせており、例年とはだいぶ異なるライン取りで熊の岩に到着する。

28日 登攀第一日目。登攀隊は3組。V峰、RCC、魚津高、剣稜会の各ルートを登攀。

29日 登攀第二日目。昨日の各隊のルートを入れ変えて登攀。9時頃から天候が怪しくなり、登攀を中止しB.Cへ。

30日 熊の岩～内蔵助谷出合。台風上陸の予報に基づき、撤退を決定する。

31日 内蔵助谷～黒部ダム＝松本

#### ○プレ冬山合宿 11月20～21日

CL : 片寄哲生(4) SL : 高谷英太郎(3)  
三森武志(3) 高橋昭彦(2) 片岡陽介(1)  
佐山鉄平(1)  
乗鞍岳山麓において雪上訓練。

#### ○冬山合宿 北アルプス 笠ヶ岳

12月26～1月3日

CL : 片寄哲生(4) SL : 高谷英太郎(3)  
三森武志(3) 高橋昭彦(2) 片岡陽介(1)  
佐山鉄平(1)

12月26日 松本＝笠谷～ヒノキ尾  
1,590mT.S. 小雪を不安がりながら  
入山するという異例の冬合宿の始まりだった。案の定、取付からワカンではなくアイゼン装着での登りとなる。雪さえあればいくらかマシであろうシャクナゲの藪こぎが続き、竹ポールをくくり付けたガッシャが引っかかるって仕方がない。急登であるだけでなくナイフリッジ状の樹林帯が続き、一ヶ所だけお助けを必要とし

た。想定外に険しい入山日になったと思つてはいるが、雪の陰からワイヤー や木の板が時折現れる。かつては登山道が走っていたのだろうか。

尾根が熊笹の生えた緩い大地状に変わったところで、アクシデントが発生した。先頭を務めていた高谷が、アイゼンの前爪を自身の左太股にかなり深く刺してしまった。もう1ピッチ進みたいと思っていたが、やむを得ず幕営とした。

27日 下山サポートおよびデポ上げ。負傷した高谷は下山させることに決め、サポート隊として2名を同伴させ送り出した。

尾根取付まで高谷を見送ったサポート隊がテント場に戻った時刻はまだ早かったことから、食料のデポをすることにした。三森・高橋の2名を軽めの装備で先行させ、残る3名で後を追う形式をとった。ルートは、熊笹の生い茂ったなだらかな地形から急登へと変化し、それがやがて疎林へと変わった辺りから積雪が深くなつた。

2,000m付近で岩峰にぶつかったところで時間切れ。ろくな偵察もできず、フィックスが必要となるポイントも通過できず、デポ作業として実り少ない結果に終わってしまった。

テントへの帰り道、晴れ間が覗いて明日の好天が期待された。笠ヶ岳は雲に包まれて見えないが、南面に目を映すとなだらかに続く広大な丘陵地が一望できた。

28日 ヒノキ尾1,590mTS～2,200mTS。昨夜の降雪がなかったおかげで、デポ時のトレースはばっちり残ってい

る。荷物が少なめであるおかげで、デポ地点までの到達が早い。三森・高橋をフィックス工作隊として先行させ、残る3名は歩荷担当で行進。

ここから南西尾根合流点までの岩峰帯通過が本合宿一つ目の核心である。残置フィックスが見え隠れする中、お助けを何度かセットして無事に通過。ルートファインディングには時間を要したもの、好天に恵まれたおかげもあってルート自体は入山前に想定していたほど困難なものには思われなかつた。とは言え、上級生不足のためにフィックス隊をフィックス作業に専念させられず、決して速いとは言えない足並みがもどかしい。

岩峰帯を抜けると、風通しが良い割には深雪のラッセルが続き、天気と眺めの良さとは裏腹のラッセルにうんざりする。

2,203mJP先のコルでワカンに履き替え、竹造ピークを目指す。ここでも樹林帯のズボるラッセルを強いられ、思ったように前進できない。結局、竹造ピークまで到達するのを断念し幕営せざるを得なかつた。

満天の星空に加え、下界の夜景が眩しい快適なテント場で、アクシデント続きでお預けとなつていた実働飯がやっと解禁となつた。

29日 TS～笠ヶ岳山荘冬期小屋。翌日からの天候悪化が予報されていた。昨夜は満天の星を仰いだ空も今朝は小雪をちらつかせる曇り空になつてゐた。今日は、笠ヶ岳山頂のピストンを済ませ、クリヤの頭方面へと抜けててしまいたい。

勇んで出発するも深い雪に阻ま

れ、ラッセルがつらい。2,400mを越した頃から、弱々しくはあるものの荒天の来訪を窺わせる嫌な風が吹き始めた。山頂を目指し、気持ちは急ぐ一方である。

2,600mでアイゼンに履き替えたのは11時。山頂ピストンとするリミットに想定していた時刻はどうに過ぎていた。冬期小屋に向かうのが精一杯かもしれないを感じつつあった。

風が強まりだしており、1年生に対して、凍傷とアイゼンワークに関する注意をそれぞれ促してから、山頂を目指した。吹雪の中の行動となり、1年生を激励する声かけが欠かせない。

風がさらに強くなった頃、クリヤ谷側からの登山道と合流した。尾根の状態を確認すると、東面への雪庇の張り出しじゃなく、風下で休むことができる。ここで一本立てて、最後の腹ごしらえをした。

いざ山頂を目指して出発。視界は悪く、頂きは全く見えない。さらに、ここ数日の降雪のせいか、稜線上であるにも関わらず吹き溜まりが深い。文句を垂れながら急登を越えたところで『笠ヶ岳山頂』のプレートが現れた。吹雪で景色は覆われており、寒気のせいで登頂の余韻を味わう気分にもならないが、このまま立ち去るのも風情がない。吹雪の笠ヶ岳で春寂寥を大合唱・・・は寒すぎてさすがに無理だったので、「フレーフレー山岳会!」と合唱して気合を入れ直し、山頂を後にした。

笠ヶ岳山荘へ向かったが、その発見には多少手間取った。しかも、入り口は無論のこと、隙間から入り込ん

だ雪のせいで小屋の中まで除雪が必要だった。

30日 沈殿。吹雪が続いている。積雪で閉じ込められないよう、小屋入り口の除雪を繰り返す。

31日 沈殿。強い冬型が続いている。小雪で始まった冬合宿はここへ来てやっと冬らしい寒気に包まれた。ラジオの紅白歌合戦を聞きながらシュラフにくるまる。マツケンサンバがハイライトだったはずだが、聴いた者はいなかった。

1月1日 笠ヶ岳山荘～南西尾根JP付近TS。天気図上の条件から、行動可能な気象条件は期待できないと思い込んでいた。ところが、9時の天気図後に外に出た奴らから『晴れてるぞー』の声が。確かに、風はあるものの晴れている。笠ヶ岳付近の天候は、“冬型だから”といって必ずしも荒れているとは限らないらしい。擬似好天の疑いはあったが、たった2、3ピッチだけ視界が利いてくれさえすれば、クリヤ谷側のエリアに逃げることは十分可能だ。慌てて支度を整えて行動を開始した。

出発する頃にはすでに晴れ間は失われていたものの、気象情報から想像するほどひどい吹雪でもなかつた。念のため竹ポールを指しながら歩を進めた。

南西尾根との合流点に到着した時はすでに一面のガスに覆われてしまっており、ルートの見極めがつかない。偵察隊2名を出し、本隊はその場で待機とした。偵察の結果、視界不良のため下降は危険であるという結論に達した。早々にそれ以上の行

動を断念し、幕営することにした。幸い、本隊が待機していた場所のクリヤ谷側直下が好適なテント場となった。

2日 TS～クリヤの頭～広サコ尾根～1,860mTS。朝食直後はまだ濃いガスに漂っており、即行動に移ることができない。チャンスが現れ次第下降にとりかかれるよう支度を整えて待機した。

ガスが切れる様子が見られだしたので行動を開始する。まずは急斜面の下り。新雪のため雪崩が恐いが、視界が利く分だけ昨日より自信をもつて動ける。2,480mのコルに到るまで常に間隔を開けて行動した。一本挟んでから、今度は三森・高橋らをルートファインディングのために先行させ、時間節約を図る。幸い、難所らしい難所もなくクリヤの頭まで着いた。

クリヤの頭から広サコ尾根取付への下降は、いかにも雪崩れそうな斜面であったが、歩いてみると安定していた。

この直後の下降で失敗した。赤テープを信じ込んで地形図の確認を怠ったばかりに、真の下降路探しで一時間以上を無駄にし、確信をもつて下降を再開した時はすでに14時を回っていた。さらに、広サコ尾根は記述とは裏腹に悪場続きで手間を要した。針葉樹林帯をズボりながらのラッセルが続く。クリヤ谷への下降ポイントを探ったものの、こちらも同じ針葉樹林で覆われていて、スピードアップは期待できない。そんな時、薄いトレースを発見。これを辿りながら、1,950m小ピークからクリヤ谷に

向けて下降を開始した。何とか平地まで、ないしはクリヤ谷の登山道まで、あわよくばヘッデン行動してでも槍見までとペースを上げたものの、時間切れ。この日は全員びしょ濡れであった。

3日 TS～槍見＝松本。移動性高気圧にすっぽり包まれた快晴。トレースが見つかったためもあり、1ピッチで錫杖沢の出会いに達した。錫杖岳の岩壁に見とれながら本冬合宿最後となるだろう1本をとる。ここから、徐々に入山者とすれ違い始める。次第に新穂高の温泉街が見え出し、槍見に到着。駐車場では高谷が車の除雪を済ませて待っていてくれた。

合宿成功の暁には柄尾で歌おうと覚えてきた『雲に嘯く』は、来年の冬合宿成功の暁にこそ歌いあげてもらうことにし、恒例通り春寂寥一曲の大合唱のみ。相変わらず節の外れた歌声ばかりだが、これもそう悪くはない。こうして冬合宿は幕を閉じた。

### III. 個人山行

#### ○八ヶ岳1day 6月12～13日

高橋昭彦(2)

松本＝甲斐小泉～赤岳～麦草峠～蓼科山＝松本

下山口に自転車をデポしに行き、アプローチ、縦走、帰路まですべて人力でカバーし尽くすというコンセプトの山行。

#### ○餓鬼・燕自転車山行 7月17～18日

CL：高橋昭彦(2) 片寄哲生(4)

片岡陽介(1) 佐山鉄平(1)

松本＝中房～餓鬼岳～燕岳～中房＝松本

自転車アプローチスタイル山行の第2

弾。雨。

○宝川 ナルミズ沢 7月10日

CL : 三森武志(3) 高谷英太郎(3)  
片岡陽介(1) 山中豪(1)

○北岳バットレス 7月17~19日

CL : 高谷英太郎(3) 三森武志(3)  
7月17日 広河原~御池小屋BC  
18日 雨。沈殿  
19日 雨。Dガリ一大滝~第四尾根上部  
フランケ

○屏風岳東壁 8月11~13日

CL : 高谷英太郎(3) 三森武志(3)  
8月11日 サマ天~横尾BC  
12日 BC ~ T4尾根~東稜ルート~ BC  
13日 BC ~ T4尾根~雲稜ルート~ BC  
~サマ天

○日本アルプス縦断縦走

9月7日~10月4日

高橋昭彦(2)  
9月7日 伊那=親不知  
8日 親不知~梅海山荘  
9日 梅海山荘~朝日平  
10日 朝日平~唐松山荘  
11日 唐松山荘~冷池山荘  
12日 冷池山荘~針ノ木峠  
13日 針ノ木峠~烏帽子小屋  
14日 烏帽子小屋~双六小屋  
15日 双六小屋~南岳小屋  
16日 南岳小屋~西穂山荘  
17日 西穂山荘~白骨温泉  
18日 白骨温泉~畳平  
19日 畠平~日和田口  
20日 日和田口~西野  
21日 西野~新和スキ一場  
22日 新和スキ一場~檜尾非難小屋  
23日 檜尾避難小屋~天竜大橋  
24日 天竜大橋~市ノ瀬  
25日 市ノ瀬~松峰小屋

26日 松峰小屋~両俣小屋

27日 両俣小屋~熊ノ平小屋  
28日 熊ノ平小屋~小河内岳非難小屋

29日 小河内岳非難小屋~荒川小屋  
30日 荒川小屋~聖平小屋  
10月1日 聖平小屋~光小屋  
2日 光小屋~アザミ沢のコル  
3日 アザミ沢のコル~寸又峡温泉

4日 寸又峡温泉~川根温泉  
5日 川根温泉~大井川河口~豊橋駅  
6日 豊橋駅=伊那  
高橋単独行による日本アルプス一括縦走。高橋は同年夏の1, 2年生縦走においても三俣蓮華岳~親不知を走破している。

○神通川水系高原川 赤谷 9月15日

CL : 三森武志(3) 横山勝丘(OB)

○槍ヶ岳北鎌尾根 9月18~21日

大木信介(OB) 片寄哲生(4)  
岩田不二江(部外者)  
9月18日 松本=中房温泉~燕山荘~大天荘TS  
19日 TS ~貧乏沢取付~天井沢~右俣  
のコルTS  
20日 TS ~槍ヶ岳~殺生ヒュッテ  
21日 殺生ヒュッテ~上高地=松本  
ガイド登山サポート・ポーター役として  
北鎌入門。天気は決してよくなかったが、山の幸を随所で味わった美味しい  
山行でもあった。

○美ヶ原 1月22~23日

CL : 三森武志(3) 佐山鉄平(1)  
1月22日 松本=一ノ瀬~烏帽子岩~  
王ヶ頭手前TS  
23日 TS ~王ヶ鼻~茶臼山・陣ヶ坂分岐  
~三城牧場=松本

○八ヶ岳西面 2月2~5日

CL : 三森武志(3) 高橋昭彦(2)

佐山鉄平(1)

2月2日 松本=美濃戸山荘～行者小屋

BC

3日 BC～硫黄岳～赤岳～BC

4日 BC～小同心クラック～横岳～BC

5日 BC～赤岳主稜～BC～八ヶ岳山  
莊=松本

○常念岳・蝶ヶ岳 2月12～13日

CL: 三森武志(3) 佐山鉄平(1)

2月12日 松本=須砂渡ダム～森林限界  
手前TS

13日 TS～常念岳～蝶ヶ岳～徳沢～上  
高地TS

14日 TS～中の湯=松本

○上高地 S字状ルンゼ(明神南面の氷柱)

2月18～19日

大木信介(OB) 片寄哲生(4)

2月18日 松本=中の湯～岳沢出合BC  
～S字氷柱～BC

19日 BC～明神南面の氷柱～BC

20日 BC～中の湯=松本

○仙丈ヶ岳地蔵尾根 2月22～24日

CL: 高橋昭彦(2) 三森武志(3)

片岡陽介(1) 佐山鉄平(1)

2月22日 伊那=柏木～松峰～地蔵岳  
TS

23日 TS～仙丈ヶ岳～小仙丈ヶ岳～  
2,600mTS

24日 TS～北沢峠～丹渓山荘～戸台口  
=伊那

春夏の仙丈ヶ岳地蔵尾根に続き、折角  
なので冬も登ってしまおうという計画。

○戸隠西岳P1尾根 2月28日～3月1日

CL: 片寄哲生(4) 三森武志(3)

2月28日 松本=上楠川公民館～P1台  
地～無念峰BP

3月1日 BP～P1山頂～BP～公民館  
=松本

イグルービバーク型登攀に初挑戦。戸  
隠特有のキノコ雪の処理と、自然物を巧  
みに利用する必要があるルートが魅力  
的で、中身の濃い山行だった。

○後立山連峰縦走 3月6～10日

CL: 三森武志(3) 高橋昭彦(2)

3月6日 松本=二股～猿倉～小日向コ  
ル～樺平TS

7日 TS～杓子岳～白馬鑓ヶ岳～天狗  
大下りTS

8日 TS～最低コル～唐松岳～唐松山  
莊TS

9日 TS～五竜岳～キレット小屋TS

10日 TS～鹿島槍北峰～冷池山荘～鹿  
島山荘=松本

○南アルプス深南部 3月15～21日

CL: 片寄哲生(4) 片岡陽介(1)

3月15日 松本～寸又峡温泉

16日 温泉～朝日岳～三方窪TS

17日 TS～大根沢山TS

18日 TS～サワラ沢山TS

19日 TS～光岳～光小屋

20日 光小屋～易老岳～易老渡=千頭  
駅

21日 千頭駅=寸又峡温泉=松本

# 追悼



---

信州大学が創立70年になろうとしています。この間山岳会の活動を経て社会人となり、既に退職しているかたがたも大勢います。山岳会の名簿を見ますと山で遭難した人たちを含め2016年現在で70人余りの人たちが他界しています。今回会報の作成に当たり、全体からすれば、一部の人たちではありますが、山岳部時代を日本アルプスを友として攀じ登った亡き諸先輩を偲び追悼文を掲載いたしました。

・樋口 清明先輩追憶－先輩後輩をつなぐ絆－	平成19年4月5日没	小原 武	追悼
・忠地 文昭くんを偲ぶ	平成19年6月6日没	野村 昌男	追悼
・小谷 雅宣君の流儀－その登山スタイル－	平成20年1月2日没	西郡 光昭	追悼
・浦 正直君のこと	平成21年9月23日没	板谷 真人	追悼
・浦 正直さんの思い出		駒井 浩	追悼
・菅家 延征君の思い出	平成24年7月21日没	向後 利彦	追悼
・河原 洋君のこと	平成24年2月8日没	杉本 敏宏	追悼
・矢野 惣之輔さん	平成26年5月没	金松 直也	追悼
・奥秋 仁さん追悼	平成26年8月2日没	金松 直也	追悼
・山田 和彦さん追悼	平成27年3月5日没	師田 信人	追悼
・松尾 武久君のこと	平成27年3月28日没	西郡 光昭	追悼
・岡田 守功君について	平成27年6月21日没	久田 千成	追悼
・新井 陽一郎さんありがとうございます	平成28年6月13日没	中田 茂	追悼
・あらよ！田中 正治君	平成28年3月11日没	平 邦彦	追悼
・田中 正治君のこと		板谷 真人	追悼
・中村 洋先輩への追悼	平成28年7月没	武藤 一郎	追悼
・おーい葛西	平成29年3月14日没	小林 實	追悼
・優しさと強さの人 葛西さん		川崎 誠	追悼
・塩谷 貞夫さんとの思い出	平成29年3月24日没	中村 和夫	追悼
・岡ちゃん、三和子さんへの詫び状	平成25年6月5日没 平成30年3月12日没	西郡 光昭	追悼

## 樋口 清明先輩追憶 一先輩後輩をつなぐ絆一

平成19年4月5日没

樋口さんことを想うことは、小生にとって、現役山岳部時代一卒業後の学士山岳会一現在に至る「信州大学山岳部の絆—エポックメーリング」の印象をおいてほかにない。

即ち、小生にとって現役山岳部一卒業後の学士山岳会員一50年有余の節目節目で、各会員との出会いを造って頂いたと云う存在であったと思う。

昭和31年は、5月前穂の遭難救助で、未だ小生未入部で木村（5年生一樋口さんと同期）、三島（3年生）、遭難死された年、樋口さんが3月に卒業、故郷名古屋に就職され、小生とは、すれ違いで、2年先輩の小林喜芳さん、久田千成さんが樋口先輩と小生を繋いでくれたエポックメーカーであった。その後、樋口さんが木曽駒で下山時バリエーションルートの沢下りで脚を骨折し名古屋の労災病院に入院された折、帰省時に名古屋の路面電車に乗って御見舞いに行ったのがきっかけになって、それから、毎月の様に夜行列車で名古屋から松本に日曜日早朝松本駅で落ちあたり、思誠寮に夜明けに現れ、美ヶ原、鉢伏等に日帰り山行をしたのを思い出す。

35年卒業、名古屋に勤務する様になり、学士山岳会東海支部と称して、樋口を中心には、永田さん、塩谷さん、久田さん、京都府立医大卒後名古屋大医局におられた岡田守功さんを含めて、伊吹、靈仙、御在所岳、藤原岳、御嶽、木曽駒、等などで遊んだり、一杯のんだりしものであった。これも、樋口さんが居て我々に繋がったものと思う。殊に小生は、縁あって9年後、樋口さんの勤務する会社に転職。東京営業所勤務の際、岡田要先輩（小生入学時4年生、リーダー）、川崎誠さん（小生とはすれ違い35年入学）と連れだって夜叉神峠から広河原一北岳の山行の折、「東京営業所で、信大山岳部で就職に困っている部員はいないか」と話したのがきっかけになって、中田茂さんを弊社に、入社することになり、樋口一小原一中田が同じ釜の飯を喰うきっかけを造ったのが川崎誠さんであり、これも樋口さんから引き継いだエポックメーカーであった。因みに、川崎誠さんを小生に繋いでくれたのが、小生と同期の今は亡き石ヤンこと石橋（福島）隆君であった。蛇足ながら、33年秋期合宿で石ヤンが合宿費が払えないというので、リーダーであった小生が、りんごを現物納入してはと、アドバイスしたのがきっかけになって、夜間、りんご園侵入、肥溜めに落ち、クロールで岸に這い上がったエピソードを残した御仁であった。



良き時代の物語、これにて。

昭和31年入学 小原 武

## 忠地 文昭くんを偲ぶ

平成19年6月6日没

君が亡くなつてから随分経ってしまった。10年以上になるかな。知り合つたのも60年ほど前になつた。

信州大学の工学部電気工学科に入学したのが昭和36年(1961年)、同じ教室で教わつたのに、40名の中の一人としか記憶にない。確か県ヶ丘高校出身でたいへん秀才な紳士然とした印象を受けた。親しく言葉をかけたこともなかつた。

仲良くなつたのは、松本市の一般教養課程を終え、長野市へ引っ越してからで、山岳部に入部して新人合宿を上高地岳沢でやつたときだね。剣岳で亡くなつた柳沢、20年前に逝つた秋元、そして僕が同じ時期に入部した。

遙か彼方の山の思い出はほとんど忘れてしまつた。でも君と一緒に川中島の下宿で生活したこと、一緒に赤痢になつて隔離されたことも覚えていゝよ。確か下宿は君に紹介してもらつたよう記憶している。卒研も同じだつたな。君と剣岳でザイルを結んでチンネを登つたことが追悼集でわかつたが、柳沢と山形の墜落事故で吹き飛んでしまつた。

昭和40年大学を卒業して石川島播磨重工業に入社し、大型船舶を造つてゐると思つてゐたが、物量倉庫の自動化をやつていたように思ふ。

今から20年ほど前、東京八重洲京橋の居酒屋で秋元と君と一緒に三人で飲んだことがあつたね、君がブラジルで倉庫の自動化をやつた話や、秋元がアラビアで石油の掘削をやつた話などで盛り上つた。君はまだ現役でバリバリ仕事をしており秋元は後輩の市野の会社でコンサルタントをやつてゐることを話した。

居酒屋を出て東京駅で別れたが、そのとき君が「秋元は大丈夫か?」と僕に言ったことを鮮明に覚えていゝ。秋元の体調がよくないのを見抜いていたようだ。その後すぐ秋元は逝つた。其れが君ら二人との永遠の別れになるとは思いもしなかつた。

君の死を知つたのは、秋元の奥さんの元子さん(信大長野山岳部OG)からのメールだった。自分が早めにリタイヤして土佐の田舎に引っ越してから数年たつてゐた。

上京した際、小平市の君の家に寄せてもらった。

君は額の中で微笑んでいた。いい顔だつた。毅然とした紳士の顔だ。まだまだ活躍できたのに残念だ。



昭和37年8月夏山合宿  
左より 金井光一、忠地文昭、柳沢、野村  
昌男 (提供: 野村昌男)



忠地文昭 後列右端 秋元一浩 後列左端  
柳沢進 前列右端 (提供: 野村昌男)

---

## 小谷 雅宣君の流儀 –その登山スタイル–

平成20年1月2日没

小谷雅宣君の訃報を聞いたのは‘08（平成20年）冬のことだった。しばらくご無沙汰していたし「体調が優れないらしい」とも聞いていたが、知らせを受けて愕然とした。

小谷君とは1960年（昭和35年）信大山岳部入部の同期である。同じ医学部だが彼は現役で私は2浪。私は1年留年したから年齢の上では兄弟のような山岳部同期となった。しかし山岳部には他にも元気で、熱心な同期の部員が大勢いたおかげで、我々はワイワイ、ガヤガヤ、楽しい山岳部生活を送ることができた。

そのような楽しい同期部員の中で、君は他の連中とは少し違う雰囲気を漂わせていた。発する言葉数も少なめで、シャイなところがあり、且つ、いつも生真面目そうで、緊張感を感じさせる部員だった。

小谷君は入学後しばしの間、無口で大人しそうにしていたが、やや時間が経ち、お互い気心が知れるようになると、山登りの思斎がハッキリ態度に表れるようになった。それは、私のように優柔不断でフニャフニヤな態度とまるで違う山登りの姿勢だった。「態度をはっきり表明する」とは、もちろん日和見などではない。口数少なく、かんがえふかげにしているが“やおら”口を開くとはっきりした物言いになる感じだった。しかし、話し合って決めた事柄には、それがうまく行かなかつたとしても‘あだ、こだ’は言わない。しっかりしていた。

我々が中堅部員になった頃は、岩登りに「ボルト」を使うことがしきりに議論されていた。我々も議論はしたが、はつきり云つて、ボルトを使う岩登りの必然性について大方熱心ではなかつた。

そんなある時、松本市郊外の岩登りのゲレンデ“烏帽子岩”的岩壁にボルトを打つてあるのを後輩の部員が見つけた、ということがあった。そう書けば、「犯人は’小谷君かと思う人が多いだろうが、私も小谷君ならやりそうな気がした。しかし、そうだとして彼は何のためにボルトを打ったのだろうかと自分なりに考えた。

彼は実はボルトを使うことに内心、関心や興味は持っていたのではないか。それは、当時伊那・松本山岳部が力を入れていた穂高岳東壁に信大独自のルートを開くのに、あるいはボルトが必要になるかもしれない。その時のためにトライしておく必

---

要があり、と考えはしなかったか？

彼の意志の強さだと十分にあり得る話だけれど、小谷君からはそれにつき何の発言もなかつたし、こちらからも問いかけることはしなかつた。そして、部内の議論も火が消えるようになくなつた。

また、こういうこと也有つた。お互いリーダー部員になって、登山計画を練る機会が多くなつくると、リーダーの考えに違いが出てくる。例えば、私のようなものは、合宿と言えばいつも大所帯でワイワイと賑やかな方を好みその線で計画を建てようとする。一方では、こじんまりでも良い、自分たちの身の丈にあった、小回りの利く合宿がベターだとしてそれに沿つて計画するグループ。小谷君は、どちらかといえば後者だ。もちろん面と向かつて対立することはなかつたが、考え方方ははつきりしていたように思う。

然るに彼は、1967年私が長野県山岳協会のペルー・アンデスの登山隊員として参加するに当たつてはその準備の段階から何くれとなく心を碎いてくれたのだった。

そう、彼は自分の考えをしつかり持ちながらも、所属する組織、仲間や自分の役割について常に静かに気を配る、そういう人物でもあつた。

以下のことも別の知人から聞いた話だが。彼が選んだ卒後の進路は、将来とも研究課題の多い新しい分野のようであつた。それを知り、何とも小谷君らしい選択だし納得し、頼もしくも感じていたが、内実はそうではなかつたようである。

選択は間違ひなかつたのだろうが、研究の場での人間関係に齟齬が生じたようで、小谷君自身がすっかりまいつてしまつたらしい。そして、頑健な彼の身体を次第に蝕むことになつたようだ。あの真面目な顔で、困つた事態をどう受け止め、どう乗り越えるべきか、呻吟していたのかと思うと胸が詰まりそうである。

思い出多き小谷君の流儀が生かされることなく、彼を失つたと思うと何とも慚愧に堪えない。

彼は、長野市内にクリニックを開業して地道に精を出していたようだが、現在はお嬢さんが後を継がれ頑張つておいでになると、智恵子夫人と山岳部のOBの福与邦夫さんから伺つてホッとしている。

謹んでご冥福をお祈り申し上げる

昭和35年入学 西郡 光昭

## 浦 正直君のこと

平成21年9月23日没

信州大学入学の最初の下宿（大学前）で部屋が向かい合わせとなった。既に同じ下宿にいた先輩たちに麻雀を教わろうとしたが、お互い相手にしてもらえなかつた。

山岳部に入部しようと思誠寮を訪ねたが、穂高で先輩二人の遭難事故が有り部員募集は中断していたので、実際入部出来たのは5月末頃となつた。

恒例の新人合宿で徳本峠を越えた時、二人して雪の穂高連峰に感激した事を覚えている。

高校時代福山の進学校で勉強した君は、工学部土木科に入学し専門の長野に移った時、山岳部も長野に移ってしまった。

長野の工学部に移った頃、未だ計算機は手回しか計算尺を使っていたが、P Cの勉強を始めベーシックだなんとかだと難しい専門書を薦められた事を覚えている。

社会人になって大手土木会社「大豊建設」に就職後独立、土木コンサルタント『コスマープランニング』を立ち上げたので出資させてもらった事を覚えている。

又生活の場が千葉県八千代市の国道16号線沿いで、すぐ側にホームセンター『ジョイフルホンダ』が有るので、ホームセンターへ買い物に行く時良く訪問した。

信大山岳部は大酒飲みが多く、其の中でも抜きん出ていたがとうとう其れが原因で体を壊しベッドに伏せてしまった。

我が自家農園で採れた収穫物を持って行くと、大変喜んで食べてくれた（サツマイモ／ハヤトウリが大好きだった）。

2009年信大60周年記念事業の山岳部ヒマラヤ登山隊アンナプルナトレッキング参加前、見舞いに行ったがトレッキング中の9月23日逝去された事を知った。

お墓は『ジョイフルホンダ』のすぐ側なので買い物に行った時靈園を訪問しています。

昭和36年入学 板谷 真人



1963年1月 スキー合宿  
下から 田中、浦正直、松尾、板谷 (提供:駒井 浩)

## 浦 正直さんの思い出

私が信州大学に入学して、山岳会に入部した時、2年生部員として浦さんがおられた。

当時の山岳会は、伊那松本（文理学部・医学部・農学部と教養課程の一部）と長野（工学部・教育学部・教養課程の一部）と上田（教養課程を含む繊維学部）の3山岳部に分かれて別個の活動となっており、それぞれ所属地域の山岳部に所属していた。

そのため、工学部の半数は、教養課程を松本で済ませ、専門課程を長野で納めたのである。

浦さんは私と同じ土木工学科だったので、私と一緒に長野へ移られた。

松本で1年、長野で1年以上、計2年以上、上級部員として指導をいただき、その間、合宿だけでも7回もご一緒させていただいた。

いま改めて合宿の個人記録を見直してみると、浦さんが優しかったことが随所からうかがえます。

物静かで、出しやばらず、マイペースの方だったことを思い出します。

昭和37年入学 駒井 浩



1963年10月 秋山合宿  
後列中央 浦 正直

(提供：駒井 浩)

## 菅家 延征君の思い出

平成24年7月21日没

1964年(昭和34年、東京オリンピックのあった年)の春、私は工学部土木工学科に入学して、教養科目を松本で受けることにしました。そして、入学と同時に思誠寮と山岳部に入る手続きをしました。そこで私は初めて菅家くんと出会いました。ともに1年浪人して入学。彼は理学部地質学科でした。

以来、松本での1年間、彼と山岳部や思誠寮での生活をともにすることになりました。会津(奥只見)出身の彼は私と同じ年でありながら、私よりずっと大人で、全てにおいて能力も優っていたように思いました。

涸沢で新人合宿を終えた6月のある日、山岳部の先輩の新谷さんに彼と私が呼ばれ、進学雑誌『蛍雪時代』の表紙の写真を飾ることになったことを覚えています。

夏の縦走合宿に入る前、彼は山岳部を退部したのですが、日常での生活や寮生活でより深い付き合いが続きました。

そして、秋の寮祭では、彼が寮劇の主役を務め、我ら悪ガキ数人も演出の千葉さん(寮の8年生)に駆り出され、『大根だ、ごんぼうだ』と言われながらも、寮劇での端役を務めました。

春3月、私は松本での留年を覚悟して合宿に入ったのですが、下山すると奇跡的に長野の工学部への進学が出来ていました。

そして、彼がすでに私の私物や寝具をまとめて、長野に送ってくれていました。

長野時代、信大の教養学部統合の問題でかなりの頻度で松本に通う機会があり、菅家くんと出会う機会も多くありました。

4年生の10月、涸沢での岩登り合宿中、前穂四峰で遭難事故を起こし、1年後輩の加藤くんを失いました。そして、翌年の春、豪雪の中戸隠連峰の縦走を終え、私は山岳部を退部しました。

その後、勉強もせずに留年を続け、6年目の夏に、親のすねをかじって東南アジアからオーストラリアに旅行にでかけました。帰国途中、シドニーからシンガポールの船旅で英国人のシェークスピア俳優という若者と友人になりました。そして、その友人が日本に来たおり、彼を東京や松本を案内しました。その時、探検部や思誠寮の仲間たちが乗鞍でお茶会を開いて、私たちを招待してくれました。

その時、菅家くんはすでに大学を卒業して、朝日新聞の記者になっていました。そして、彼はそのお茶会の様子を『青えんぴつ』というコラム欄に書いて載せてくれました。

以来、その集まりを山岳部顧問で地質の教授、山田哲雄先生の名をとて、『山哲会』と呼ぶようになり、毎年、春か秋に乗鞍に集まり、乗鞍ヒュッテの岡崎さんに世話になりました。お茶会や、キノコの会と、楽しんできました。



---

大学を卒業して、私は土木技師として海外での仕事をするようになりました。そして、帰国した時など山岳部OBの小川勝さんや探検部OBの関根くんと誘い合って、東京の本社に勤務していた菅家くんとはよく会ったりしていました。また、『山哲会』を通じて何回も乗鞍で会う機会がありました。

1992年7月、関根くんがネパールの航空事故でなくなり、数年後、小川勝さんが主催して現地で関根くんの慰靈祭を行いました。その時、菅家くんも多忙のおり、時間を作つて参加してくれました。

2001年3月、仙台の東日本放送に転勤した旨、彼から挨拶状をもらい、西郡さんとはよく飲んでいます。一度、時間を作つて遊びに来いとのことでした。

2002年(W杯が日本であった年) 6月、私がプロジェクトでモザンビークに出かける前、仙台に出かけ、西郡さん、宇都宮さん、それに、私の兄を含めて彼と会いました。その夜、彼のマンションに泊めてもらい、翌日、蔵王へドライブ。温泉と蕎麦をご馳走になりました。

その後、何年かしてアフリカから帰国すると、日さくに勤務していた信大OBの松浦くんから菅家くんが入院していると聞き、後日、松浦くんと新宿の病院に見舞いに行きました。

その時、彼はPETの検査で脳に腫瘍が見つかり、手術を受けるが、術後、何らかの後遺症が残るかもしれませんと、その覚悟を話していました。そして、術後、言語に障害が残ったようでした。

彼と最後に会ったのは2007年の秋、私が土木の友人たち(福田、中川夫妻)と東北に旅行に出た時でした。

秋保温泉に泊まった夜、宇都宮さん夫婦や、菅家くんも奥さんの真百合さんと来て、我らに元気な姿を見せてくれました。

中川くんも、福田くんも松本で教養を受けたので、菅家くんとは顔見知りでした。その晩、飲みながら懐かしい松本での生活や思誠寮での思い出を楽しく語り合いました。

彼の訃報に接したのは、西アフリカのモーリタニアで、砂漠の村々に水を供給するプロジェクトに従事していた時でした。

二十歳の頃から半世紀近く、私は常に彼の存在を感じながら生きてきました。そして、いつも彼の世話になっていた、という想いでいっぱいでした。

菅家くんの偲ぶ会では、彼の奥さん、真百合さんは、亡くなる前に娘さんの花嫁姿を見ることができて彼は満足そうだった。それでも、彼にはもっと長く生きていて欲しかった。としみじみと話されたことがすごく印象に残っています。

そして、最高の友を失い、彼がほろ酔い加減で、故郷の民謡、『さんさ時雨』を歌う姿や、その歌声は、今でも私の脳裏にはっきりと浮かんできます。

私の親しかった友人たちが次々と亡くなっていく昨今、もうすぐ私も、向こうの世界で皆さんに会えると楽しみにしています。

昭和39年入学 向後 利彦

## 河原 洋君のこと

平成24年2月8日没

1965年（昭和40年）の4月末に、私が上田山岳部に入った時すでに、河原、轟の二人がいた。その後、青柳、今関の二人が入ってきて、同期は5人になった。学部統合問題に揺れていた時代で、山岳部の統合も課題になっていた。そんな中、河原、轟とは、西上田の岩鼻などに通ったものだ。

河原とは、潤沢での夏合宿の後、上高地から槍に登り、雲ノ平、五色ヶ原を経て、剣の早月尾根を下ったことが、思い出に色濃く残っている。私が薬師の登りでバテ、五色ヶ原で彼が調子を狂わせ、早月小屋では「ボウフラがいるから大丈夫」とドラム缶に貯まった水を飲んだりと、珍道中だった。

しかし卒業してからは年賀状のやり取りをする程度で、しばらくはお互いの生活に没頭していた。

ある年、河原から、「一度みんなで山へ行こう」との誘いがあり、残雪の雨飾山に登った。小谷温泉に4人が集まり、久々の再会を楽しんだ。彼は一滴も飲まずに呑兵衛たちに付き合ってくれた。

60周年のアンナブルナ・トレッキングは、テントもホテルの部屋もずっと一緒だったので、学生時代に戻ったような感じにさせてくれた。これを機会に会うことも多くなった。そういう意味でも60周年記念事業は有意義なものだった。

河原が亡くなったとの連絡が届いた時、私は大雪と格闘していた。電車も不通で葬儀に行くことができなかつた。気持ちに整理をつけるために、その夏、弔問に行つた。

大学の4年間とは、物理的には70分の4でしかないのだが、人生の上では非常に大きなウェートを占めていると、つくづく思う。



昭和40年入学 杉本 敏宏

---

## 矢野 惣之輔さん

平成26年5月没

「金松君、北はどっちだった」と矢野リーダーが振り向いた。戸惑った私に、時間、太陽の位置、木の枝の伸び方、岩苔の付き方を説いてから「北はあっちだ」と言った。地図も磁石ない山中で自分の位置を判断する方法を私に教えようとしたのだった。矢野さんは隊列の順序を指定するとき「俺の後は金松」と言うのが常だったようだ。私にリーダーとしての識見を身につけさせようとされていると思えた。医学部山岳部時代の話である。矢野さんが卒業されてから以後、山でご一緒に記憶は殆どない。何せ、もう60年も昔の話である。私の山行記録簿を調べてみた。有った！昭和35年8月5日、信大伊那松本山岳部、奥又白合宿、前穂三峰フェイス矢野一金松、明大ルート、RCCルートに記されてある。急峻だが短いルートだから、ルートとトップを代え、2回登ったことを思い出した。矢野さんは京都で外科医師として働いておられ、私も精神科医になった年だった。

海外登山など思いもよらない当時であった。私は岳人として初登攀の夢はかなわなかったが、精神医学、医療の分野でそれをやることにした。木曽谷で地域精神医療48年、今、「けもの道」を歩いている。「けもの道」だと気付いたら、はつきりした正道まで戻るのが山では正しい。だが私は、「けもの道」こそ、その地で生きている生き物にとって本当の道なのだとと思っている。教科書的な思考ではなく、現場で判断し行動する。その基本を矢野さんから教わったのだ。「それでいいよ！」宇宙のどこかから矢野さんの声が聞こえてくる。

昭和30年入学 金松 直也

---

## 奥秋 仁さん

平成26年8月2日没

奥秋仁さんことオクさんとの山でのお付き合いはどうもはつきりしない。何しろもう60年も前のことでの健忘も手伝っている。

私の山の写真ブックにオクさんとサルさん（猿橋孝雄氏）が大鍋を炊いて寄添っている一枚がある。奥又白合宿の写真だ。合宿で一緒だったのは確からしい。私もオクさんも信大文理学部を経て医学部へ進んだ。旧制松本高等学校時代そのままの思誠寮が残っていて、私たちは寮生であった。一年先輩のオクさんは最も寮生らしい寮生で、私が一目も二目もおく存在だった。寮といえば夜間ストーム、ふとんむし、洗面器の飯焼きなど、勉強とは程遠い思い出しかない。青春を謳歌していた。落書きだらけの一部屋は十二畳で3人が一組だった。幸いにも？私はオクさんと同室ではなかった。ある朝のことだった。オクサンの部屋の入口に「松本警察署」と書かれた大きな立て看板が立てかけられてあった。オクさんが昨夜酔っぱらって持ち帰ったということが判った。当時はそれを返しに行くのは同室の新人の役目という次第だったらしい。二人の一年生はAINツバイ（じゃんけん）で負けたものが行くことになった。同室でなくてよかったと思ったものだ。

「落ちていたから拾った」と言ったそうだが、先方は十分ご承知で、散々絞られたそうだ。私は一年後北寮（南、中、北3棟）の寮長をして、これに類する事件で苦労したので、オクさんの看板事件が印象に残っているのらしい。こんなこともあって、オクさんと言えば思誠寮での生活が思い浮かんでくる。

オクさんは私にとってこよなき時代——思誠寮の中に居坐している。

昭和30年入学 金松 直也

## 山田 和彦さん追悼

平成27年3月5日没

山和さんに初めて会ったのがどこか、今では覚えていない。ただ、医学部の後輩として、何かと目をかけてもらったと思う。今でも覚えているのは、僕が2年目の秋に1年生が廐所立岩で転落し、頭部外傷で意識不明になり当時の信大第一外科に入院した時のことだ。山和さんが訪れ、たまたまその時にやはり山岳会OBの井上先生の指導下に若い外科医が気管切開を病室で行った。何も言わずに黙って見ていた山和さんが、終わったあと「おい、井上、今年で何年目だ?」「もうちょっと手際よくなんねえのか」。その後新設の脳神経外科に移り、僕の入局当時、鬼軍曹として鳴らした井上先生がかしこまって言い訳をしていた。



1978年のネパールヒマラヤ遠征は、ほとんど山和さんの意志と情熱で実行されたもの。71年のアンナプルナⅡ峰遠征に、仕事の関係で参加できなかつた無念が強かつたのかもしれない。時代を先読みするかのように、シェルパレス(要は僕らだけ)の少人数・低予算で、とジュティ・バフラニ(ナンパ南峰)に登頂した。キャラバン中、僕は何も知識がないのに医療担当で診療行為をさせられたが、一切助けてくれなかつた。いい意味での自由放任と思う。その分、判断などは臨機応変で原則に固執することはなかつた。山和さんは1回目のアタックに不十分な装備で向かい途中で退却を決めた。で、2回目のアタック時には体調を回復した三井さんに全てを任せB Cで朗報を待っていた。写真は1982年のアンナプルナⅡ峰南面からのキャラバン時のもの、この時も4200mのA B Cからの荷上げまで付き合ってくれました。若いですね。

山和さんからは1960年代あるいはそれ以前の山岳会の話をよく聞かされた。前穂東壁Dフェース信大ルートは山和さんがグランドデザインを引いた、らしい。そのコンセプトは、Dフェースから直接前穂頂上を目指す、ということだったという。確

---

かに既存のルートは皆北尾根1・2峰間リンネに抜けている。初登攀者の片岡一小谷コンビも鬼籍に入り、山和さんも亡くなってしまった。昨年、松尾さんの追悼山行で40年ぶりに前穂東壁北壁～Aフェースを登ったが、インゼルの頭から見仰ぐDフェースは圧倒的だった。いつかまた、若手にDフェース信大ルートをトレースしてもらえたなら、と思う。

もう一つ、山和さんに煽られたのが下又白谷と中又白谷の間をなし又白池につながる茶臼尾根の登攀だ。山和さんが現役の時に、厳冬期第2登を目指したけど悪天で木に掴まってのビバーク後、這々の体で敗退してきた、お前らどうだ、という調子だ。それに乗った訳ではないが、ヒマラヤから戻った翌年2月、ニルギリ南峰のメンバーだった加藤と。茶臼尾根自体は1日で抜けたものの、翌日の第1尾根登攀中に悪天に遭遇し、胸までの新雪をラッセルして踏み替え点に掘った雪洞に転がり込む羽目になった。翌日の事故と合わせて、僕にとっては山和さんに繋がる忘れられない思い出になっている。遠征からの帰国後も、OB会などで顔を合わせることはあっても当時のメンバー全員での飲み会は結局実現しないまま時間が経ってしまった。病気のことは全く知らなかった。外科医として、登山者として、そしてリーダーとしても独特的の才能を持っていた人だと思う。かつての個性的かつ敬愛すべき先輩の冥福を祈るばかりです。

昭和49年入学 師田 信人

## 松尾 武久君のこと

平成27年3月28日没

君が僕の前から消えて、桜満開の季節を3度経過した。

僕が君と初めて知り合った時、生家が琵琶湖から流れ出る瀬田川輪河口と聞き大変懐かしく感じた。と言うのは、そこは私の母校（京都府立桃山高等学校）で、ボート部の練習に毎日大津の艇庫から瀬田の唐橋迄訓練コースを漕いでいたり、又中学校時代兄につれられて、周辺の山（比良山・伊吹山・田上山）に親しみ、信大に入ったら山岳部に入部目的が有ったからです。

信大を卒業し、社会人になった後も、君は大阪や名古屋の会社から信大山岳部東京支部で企画した山行に連休や年末に参加してくれた。

全国的に大学山岳部が衰退し、我が信大山岳部が現役部員1名になった時、危機を真剣に受け止め、復活のため働いて、夏のサマーテントや信大60周年記念ヒマラヤ登山実行委員会を立ち上げ、自らも第三チーム（アンナプルナトレッキング）の隊長を努め、記念事業を完成させてくれた事本当に深謝此の上も有りません。

お互に古希も越し、住んでいる近くの山歩きを体力に合わせ企画して誘ってくれた時、突然の逝去。なんと言って良いか残念至極です。

昭和35年入学 西郡 光昭



## 岡田 守功君について

平成27年6月21日没

岡田守功君が、信大理工学部へ入学したのは、1954年（昭和29年）であった。思誠寮を中心とした交遊が爾来60年にわたって続いた訳である。

同年入学した山岳部員は小林喜芳、塩谷（井上）貞夫、見島勲、田辺嘉文、小路剣二郎の諸君がいた。私は山岳部には入らなかった。当時のリーダーは平沢行哉さん、上級には樋口清明さん、小林泰治さん、岡田要さん、永田武史さんなどであった。

2年目の昭和30年の夏、三俣蓮華小屋への荷上げのボッカのアルバイトがあり、岡田守功君を始め、十人前後で一緒に行った事もあった。キロ当り1日20円から30円程の日当だったと思う。40キロ前後を背負い2日分で1500円程の手取りだったと記憶している。

岡田守功君は、昭和31年より京都府立医大へ進学した。同大卒業後愛知県瀬戸市の陶生病院でのインターの後、フランスへ2年間留学、帰国後、中部労災病院で勤務、昭和45年に岡田整形外科を開設した。

当時名古屋では、樋口清明さんを中心として文理学部卒業生数人で山岳部OB会中京支部と云う様な形で山行をしていたが、岡田守功君にも参加を呼びかけ、会に加わってもらった。山岳会にも名を連ね、以後、会費を継続して納入して居たと聞き及び感心している。

大型二輪車ハーレーダビッドソンを乗り廻し、ヨットのオーナーとしてクルージングを楽しむなど、活発な行動を続けていた。

平成年代より、老人介護施設の運営に注力し、老健医療研究会の代表幹事に就任した。

2015年6月、何の前触れもなく急逝したと聞き驚いた次第である。後日8月、お別れの会があり、思誠寮で共に過ごした仲間の河野修君や鈴木実君などと一緒にお別れした。

昭和29年入学 久田 千成



平成22年頃 左より、岡田守功、久田千成、鈴木実、河野修  
(提供: 久田千成)

## 新井 陽一郎さんありがとうございます

平成28年6月13日没

2016年6月20日の武藤さんの「春寂寥」メールで新井さんが亡くなられたことを知りました。

2015年にお会いしたときはお元気に卓球をやっていて、卓球の試合のために、白内障の手術をされたといっていましたので、またまた新分野に没入していると、驚いていましたが、それが突然の訃報でショックを受けました。

すぐに新井さんのお宅に電話をしました。奥さんにお悔やみをお伝えし、6月29日にご靈前にお伺いすることをお話ししました。新井さんのご自宅は長野新幹線の安中榛名駅に新しくできた住宅地でしたが、車で行くと結構山の中に入していく印象でした。新幹線で安中榛名駅から歩いてたぶん5分はかかるないところです。

当日は家内と一緒に夫婦で伺いました。家内は一時期新井さんと同じ会社に勤務していました。

奥さまのお話では6月13日の午前中に安中の卓球クラブで練習を行い、午後から高崎に再び卓球の練習に出かけ、夕方戻られたときは普段と全く変わりがなかつたそうです。

夕方一休みをして、夕食後2階の部屋に行き、午後9時ころに気分が悪いと居間に降りて来たそうですが、あれあれと思う間に動けない、体が冷たいというようになり、救急車を呼んだそうです。そして病院に着くか着かないかの間になくなられたとの事でした。

まったく突然の出来事だったようです。75歳残念です。



昭和35年夏剣岳にて  
前列左から 星野安雄、柳沢、上杉信之、福与邦夫  
後列左から 新井陽一郎、峰村吉泰

(提供：福与邦夫)



昭和59年 メキシコ ポポカテペトル山頂（右端）

---

新井さんは山にも行っていましたが、安中に移った10年はもっぱら卓球に邁進し、群馬県とか地区の卓球大会に出場しシニアのベスト5に入るレベルだったそうです。試合に負けるとさらに練習をどんどんしていました。試合に勝つために白内障の手術をされたのかと思うと今になって、新井さんのすごさを知りました。

新井さんとよくお会いするようになったのは1980年のガネッシュⅡ峰に行く3年位前からでした。当時新井さんは日本山岳会の理事か何かをされていて、いろいろな山に行っていました。会社の休暇を取って東南アジアとか中国の山に行かれていたようです。

ガネッシュⅡ峰の隊長を新井さんがかつてでた経緯は私は分かりませんが、アンナⅡ峰のメンバーで東京にいらっしゃった片岡さん、松尾さん、名古屋の小川さん、大阪の扇野さんなどの方々と相談するうちに必然的に決まったのでしょう。

その辺は渡部さんがご存知かもしれません。当時渡部さんも日本山岳会のルームに顔を出していたようですから。

ガネッシュⅡ峰のために岩の合宿をしようと新井さんが小川山の計画を作ったり、三つ峠に岩トレに行ったりしました。小川山には片岡さんもご夫婦で参加されました（奥様はテントキーパーです）。

その年の11月の富士山の合宿で片岡さんが亡くなられたときは、いつもは年下の私にも丁寧な態度をしていた新井さんがまったく返事もしないほどダメージを受けていました。

山の中ではいつもにこにこして陽気になるタイプのようです。東京の街中でお会いするより饒舌で冗談が多かったと思います。そして何よりも蛭が苦手、嫌いでした。

ヤラ・コーラの暗い谷の中は新井さんにとって地獄だったようです。テントの周囲すべてに塩を壁のようにまいていても、不安だったようです。

蛭が這いずって、近づく音がするといっていました。

山には登頂できませんでしたが、その後もお世話になりました。

新井さん、ありがとうございます。そしてご冥福をお祈りいたします。

黙祷。

昭和45年入学 中田 茂

## あらよ！田中 正治君

平成28年3月11日没

田中・加藤・川治・柴田・真野・板谷・浦・松尾と私(平)の9人は山岳部の同期で、卒業後も事ある毎に会いました。

田中といえば直ぐに浮かんでくること。

◆別名：自称 田中コンツェルン。

◆「酒に酔うと人が変わる…変身する」。

その変わり方は半端でなく、相當変わる。

変わるというよりも、『狂う』という表現の方が的を射ている。

それは、今や伝説にまでなっている？

田中が酒に酔って狂いはじめ、包丁？を持って川治を追い回し、川治は鍋蓋で必死に防戦したという話し。

中原寮の放送で、酒に酔った田中が「たいら～ 出てこ～い」とスピーカーの音量を100%にして騒ぎだし、私よりも周りの寮生がビックリすると同時に心配して「平さん早く逃げないと…」という話し。

◆松尾のアイデアで、結婚したての田中夫妻を東京へ招待し、結婚祝いコンパをやつしたこと。

この時は酒の量をセーブしたらしく、狂わなかった。

これがきっかけになり、お互いの家族がそろってサマテンへ行くようになった。

◆広島の県歌の話し。

『広島県は宵のマチイ…』先輩の誰かが「広島県の県歌」だとカマシ、広めたはず。

酒が入って、田中がいると必ず歌った。

酒の席には田中は必ずいるので、いつも歌った。

◆山で彼がバテたのを見たことがない。

写真(田中・加藤・川治・柴田・真野・板谷・浦・松尾)

(9人の古い顔が、なんと今や5人になってしまった)



前列左端 田中正治

(提供：平 邦彦)

---

## 田中 正治君のこと

彼は私より2歳上の昭和15年生まれで、高校時代を三度経験していて、同窓生が多く、信大入学時彼の下宿には高校時代の友人が沢山よく来ていた。

又、広島出身の原爆被爆者で、被爆者手帳を持っていた。(爆心近くのうどんやだった。家族全員健在だったとの事)

一年生夏合宿で立山縦走の時、何処でだったか覚えていないが、手頃な板状の岩を自分のザックに入れて最後迄歩いてくれ、それが負担だったのか自分より早くばて、新人全員助かった事を覚えている。

驚いた事にはだいぶ前、広島の田中宅を訪問した時、其の石が床の間に置かれていた。

冬山合宿を一緒にした時の沈殿中、誰が言い出したか(たぶん松尾君)皆でふざけて戒名付けしたとき、彼は並外れて幼い言動が多かったので『コツソウイン ミセイ ジュク 居士』と付いた。

又、広島でおじさんの跡を継ぎ造園業を始める前、京都の造園屋に就職した頃、大阪70年万国博覧会の会場花壇管理を手伝ってもらったが、管理をやって貰っているアルバイトの女性に良くもてていてうらやましかった事を覚えている。

広島に引き上げ庭仕事に専念し、専ら客先の庭仕事をしながら客先と世間話で年寄りの相談相手になっている様だった。

そんなかれも2016・3・4 レビート保形認知症で半年後逝去してしまった。

昭和36年入学 板谷 真人

## 中村 洋先輩への追悼

平成28年7月没

中村さんは私が1年生の時の4年生である。その年、昭和41年度は教養部が松本に統合されたことに伴い、新人合宿はSAC全体で行われた。その思い出に加えて、冬山は分散方式で、中村パーティーは三伏峠から仙丈ヶ岳への南ア縦走で、私はこれに属していた。春山合宿は奥大日尾根から別山乗越にアタックキャンプを置き、上級生が剣岳、下級生が立山往復であり、中村さんがチーフリーダー、サブリーダーが同学年の福原正昭さんだった。伊那松本山岳部全体での取組みで、中村さんの卒業前における入魂の計画だった。中村さんは当時まだ高価で珍しかった「四川省の水鳥の胸毛を集めた羽毛寝袋」が自慢で、我々、新人はいかにそれが暖かく、軽量で嵩張らないかを聞かされていた。

私は冬が近づきとても自分の寝袋では冬山で対応できそうもないと思案していた矢先、同期の山下泰弘が郵便局のバイトを探してきた。松本中央郵便局と松本駅の間を深夜トラックで何往復かして、駅で停車中の貨車に短時間に大量の年末郵便物を必死で積み降ろして、また本局に戻り仮眠、時間が来るとまた駅に出かける、これを毎晩何回か繰り返すのである。数日すると寝不足でボーとなってくるが、バイト代は破格だった。これで山下と共に念願の「羽毛の寝袋」を買ったのである。

春合宿で想い出すことは、山そのものよりも別山でテントを張り終えたとき、中村さんがエッセン責任者の福原さんにカンカンになって怒っていたことである。半月に及ぶ合宿中の食料に食塩を入れ忘れたというのである。幸い、ラーメンのスープの素、醤油や味噌で塩分は補給できたのであるが、中村さんは合宿中に皆が塩分不足になって疲弊したらどうするのだと怒ったのである。仲良い中村さんと福原さんは、これをネタにあの世で思い出話をしているだろう。

そのあと中村さんは、伊那に残り事業立上げの準備をしていた。伊那ではよく深夜まで飲みに連れて行ってもらった。海外にいた私は何があったか知らないが、中村さんは長くOB名簿では所在不明となっていた。数年前に所在先を知り、現役時代お世話になったお礼に伺おうとしていたが都合が合わずに入らなかった。その後、ある人から中村さんの訃報を知った。とうとう再会してお礼を言いそびれてしまった。ここで心よりご冥福をお祈りしたい。

昭和41年入学 武藤 一郎

---

## おーい葛西

平成29年3月14日没

葛西君じゃない、ましてや葛西さんなんかじゃ決してない、やはり おーい葛西である。

お前さんは石川啄木の後輩として盛岡一高出身であるが、58年前に信大に入学したときは東京に実家が移ったらしい。お父上の転勤のせいかも知れないが、無口でボソッとした感じであったが、意外とハイカラな面をのぞかしていた。

当時松本あたりの田舎ではコンビーフなんて一般的には馴染みがない頃のことでしたから、その正体不明の物体がいかなるものか知る由も無い、ただエッセンだとは想像できたのはそれが特異の缶詰風であったからである。実家からの荷物にそれが入っていたのです。一緒に食べた、これが実に美味しいのだ。こんなわけで、お前さんはハイソサイティだったのだ。しかしそんな事は表には決して出さない朴訥な良い男だった。

ある年の奥又合宿のとき、お前さんは松高尾根のとっつきの手前で足の痙攣でひっくり返った。それもそのはずだお前さんの山靴の底にいやと言う程のクリンカー、トルコニーがこれでもかとばかり打ち込んでいたのです。重いなんてない片一方で一貫目もあろうかとの代物です。その後二度とお前さんがひっくり返るのを見た事ない。その筈だ早速に東京は四谷の高橋でピッカピッカのビブランを眺えてさっそうとデビュウしたからだ。当時松本の竹内、四谷の高橋の靴なんて高嶺の花でなかなかに手に入るもんじゃなかったのだ。どんな小さな物でも、山に関する道具が手に入れば早速に使って見たくなる子供じみた年頃だった。

煙が何故目にしみるか？ その理由は、目の分子は丸で煙の分子は三角錐でありそれが突き刺さる所以である。と言う怪しげな先輩の理論を信じたか否かは分からぬが、何時も仲間に話して同意を求めているようなナイーブなお前さんだった。無口で自己主張もせず雨にも負けず寒さにも負けず空腹に耐え友達の困難に会えばおろおろとする男だった。こう云う男は盛岡に多いのだろうか、小首をかしげ静かな微笑みの顔には確固とし信頼感と存在感が漂っているのはお前さんの持てる人徳と言うものに違いない。

農学部で農業だ林業だ家畜だとばっかりと思っていたが、高分子化学の分野に広がりを以って塗料だ接着剤だと全く化学屋になり切って社会人として大成したのは、驚きと尊敬の他ない。着実な性格に加えコツコツ精神の成せる賜物でしょう。

おーい葛西、お前さんが残してくれたものは實に多く大きいぞ、残された我々は何時までもお前さんと一緒に、寂しがるなよ・アッラヨ・ダンケ：合掌

昭和34年入学 小林 實

---

## 優しさと強さの人 葛西さん

葛西正美さん（農・林・59年入学）が去る3月14日亡くなりました。

日頃どこも悪くない、病院へ行ったことはないと言っていたのに、蔵王のスキーコースで体調を崩し、初めは軽い脳梗塞と思われていたのが実は肺臓がん、それも末期状態で発病1ヶ月で亡くなりました。

奥様に伺った話では「最近は食欲が減り脇腹をさする動作がしばしばあるので、聞いても何でもないと言って医者に見せなかつた」そうです。

もう少し気を付けていたら早期発見出来たのではないかと残念でなりません。

葛西さんは父上が岩手医大教授の関係で、盛岡一高卒業後浪人して医大にも合格したのを蹴って信州へ来たほど信大、自然、山岳部への思い入れが深かったのですね。

山岳部では私の1年先輩で本当にお世話になりました。情報の収集判断力、人を見て長所を引き出す指導力、組織運営力など素晴らしい、60年代前半のS I M A C統合では重要な役割を果たしました。

あの頃は夏の岩登りでとび職が履く七枚コハゼの地下足袋を履いて颯爽と登る姿が粋でかっこよかったです。一番印象に残っているのは、61年の冬山で唐沢岳、餓鬼岳から常念山脈、霞沢岳への縦走です。強風の稜線、森林帯の深雪などに苦しめられましたが無事下山した時の達成感は素晴らしいでした。

よく学校で習ったことはなにも役に立たないと言っていましたが、私はそうは思いません。

基本の基本をしっかりと勉強していたから、応用力や対処の仕方が身についていたのでしょう。

林産化学を専攻して合板の接着剤などから合成樹脂分野に入り定年後も技術顧問として度々外国へ行っていた。とくに韓国との結びつきが強く韓国料理の話など楽しみでした。

多方面にわたる知識は豊富で、話し方は穏やかで説得力がありました。半世紀を超えるお付き合いで、怒鳴ったり人と争ったり飲んでも酔っぱらった姿は一度も見たことがありません。

いろいろな作法に通じていたでしょうが、形式的なことを嫌い線香も読経もなしのお別れ会は、いかにも葛西さんらしい簡素にして爽やか見事な最後でした。

あの優しさは強さに裏付けられていたのでしょう。ご冥福をお祈り申し上げます。

昭和35年入学 川崎 誠

---

## 塩谷 貞夫さんとの思い出

平成29年3月24日没

氏と初めてお会いしたのは昭和32年初夏の早朝の松本駅でした。

二人の共通の山仲間5人が夜行で到着し、挨拶したのが最初でありそれが人生最後までのお付き合いとなりました。

その時は涸沢にテントを張り、北穂・奥穂と連れて頂き帰途常念経由で。前日に積もった雪にクマの足跡がありビビッタ事が思い出されます。

その後山岳部では御一緒する事はありませんでしたがお互い社会人になり、名古屋には樋口・久田・小原さんなど有力な先輩がおられるので山岳部・名古屋支部を結成し、現役部員を呼んで鈴鹿山脈に行きました。

西坂浮君が来た時には藤内壁にも。そんな際、塩谷さんが茶道具一式を持ち込み山頂で茶会を開いた事など懐かしい思い出です。

私が転職の際、縁あって(株)シオヤに採用頂きその後23年間社長として薰陶を頂きました。お互い退職したらヒマラヤに行きたいものと話しあっていましたが、夢に終わりました。

氏は2代目の経営者として企業を発展させ、従業員の幸せを常に考えておられました。

10年前御子息に経営を譲られ、南極旅行などの船旅を楽しまれ充実した人生を送られました。

昭和34年入学 中村 和夫

---

## 岡ちゃん、三和子さんへの詫び状

平成25年6月5日、30年3月12日没

編集担当からの依頼で追悼の文を書くと約束したその頃から体調を崩し、まるでセミの抜け殻のような毎日を送った。だからと言って約束を反故にするわけにはいかない。大事な岡ちゃんを失って、「ハイ、さようなら」では余りにも虫が良すぎるというか卑怯でさえある。

岡崎猛さんとのお付き合いは長かった。氏が信大乗鞍ヒュッテの管理人として赴任された当時からのお付き合いだ。しかし、その安易さが折にふれて自分の言動に表れて、それがいけなかった。何の根拠もないのに「言いたくないが、面倒見たよ！」という態度が折にふれて現れたのだろう。

なるほどソーカ。自分ではまったくそんなつもりはなくとも見る人によってはそう受け取られたかも知れない。長い間の気軽なお付き合いのつもりが、次第に尊大な態度をとるようになったのだろうなあー、と思うと恥じ入るばかりだ。

例えば、片や「我らが信大ヒュッテの岡ちゃん」、こなた「信大山岳部の古参部員」と親しげな関係を自分勝手に作り上げ、ヒュッテばかりか岡ちゃんと三和子夫人が苦労して作り上げたはずの自宅兼民宿「フレンズ岡崎」でもわがまま勝手に振る舞ってきたから、なんてひどい奴だと堪忍袋の緒が切れんばかりだったに違いない。

しかし、信大ヒュッテや「フレンズ岡崎」について自分はいささかの手伝いも援助もしたことはなかった。それを知っている人は、彼奴の態度はなんだ!?となったことだろう。また、山岳部の後輩から「西郡に苛められた」と岡ちゃん夫婦に愚痴られただがあつたらしい。お二人には、何だこの人でなし野郎、とあきれた気持ちにさせたことであったろう。その話は、高高度で体調が悪くなった時のホルモン剤の使い方についての議論が元だったと記憶する。前にもさる先輩から、苛めたなどという、そんな覚えはさらさらないないのだが…。そんなことがあっても心根の優しい岡ちゃんはイヤな顔ひとつせず付き合ってくれたのだった。それは、苦労をともにされた三和子夫人とて同じ気持ちでいるに違いない。我慢して私と付き合ってくれ

---

た岡ちゃん夫婦への感謝とお詫びの念一入である。

岡ちゃん本当に申し訳なかった。どうか許して頂戴！そして、改めてご冥福をお祈りします。

残された三和子さんに対してもその気持ちは同じだ。三和子さんは現在体調を崩されていると聞いて大いに気に懸るところだが、ひたすらご快癒を祈るばかりである。と、ここまで記したところで彼女の訃報が入った。退院の後はゆっくり過ごして貰いたい、と望んでいたのだが、その後の検査で原因はおそらく幾百万人に一人という難病だったという…。

何ということか、と天を呪わずにはいられず、出るのは嘆息ばかり。

かくして、若い頃から誰よりもお二人に迷惑をかけながら、ろくな恩返しもせずお別れするお赦しを請い願うばかりである。しかも、三和子さんのお別れの式には体調不良で欠礼してしまった。

謹んでご冥福をお祈り申し上げる。

昭和35年入学 西郡 光昭

## 編集後記

会報の編集を提案してから、完成するまでこんなにも長い期間がかかつってしまった。

編集者の非力を詫びるしかないが、こうして5年以上の歳月を費やしてようやく編集後記を記すことができることに感謝したい。

部報の歴史をたどると、信州大学山岳部が各地域に分かれて発足し、伊那松本（スタート当時は松本山岳部として）、長野、上田山岳部として登山活動が行われていた。まず、1949年～60年に松本山岳部の故小林喜芳さん、故山田和彦さん、中村和夫さんが編集者となり「部報1」が発行された。次に、1964年に創刊号として上田山岳部は故永野春治さんが編集者となり、1962年～63年の登山活動を中心とした「山岳部報」を発行した。その後、長野山岳部が1998年に百瀬斐敏さんを中心として、「信陵」として1953年～66年までをまとめている。また、伊那松本山岳部は2007年に故松尾武久さんが中心となり、1960年～78年までの「部報2」を発行した。各地域の山岳部の年代における山岳部活動が、完全には網羅されていないが点線を含めた線として、ほぼ1978年までは編集されてきた。1979年から各地域にあった山岳部は信州大学山岳会として松本に統一された。今回はこの年から2004年までをまとめることとした。

一方海外遠征では、1971年のアンナプルナⅡ峰遠征から、不定期ではあるが信州大学の創立周年に合わせネパールヒマラヤを中心に遠征隊を出してきた。その都度報告書も出している。しかし、学士山岳会会員は個人や他の山岳団体等、数多くの海外の山々にトレッキングや遠征で参加している。今回海外編としてこの部分を大いに充実したいと考えた。会員の海外登山は1965年を皮切りに、2015年までで112件があった。おそらくまだまだあるのではないかと思われるが、一つの区切りとした。全ての原稿をいただくことはできなかったが、全体の8割以上が集まり海外編として編集することができた。

今回この海外編を一読すると信大山岳会の海外登山の流れがよくわかる。また、今は亡き故二俣勇司さん、故田辺治さんを中心とした素晴らしい活躍も随所に出てきて編集している私も誇らしく思えた。登山の形態も時代を反映し、ノーマルルートからポーラメソッド（極地法）での登山から、バリーエーションルートをアルパインスタイルでと変化し、それを支える装備も著しく進化してきている。後半では、世界を代表する登山家も現れ、我々古き山岳会員の一人としては嬉しい限りであった。

思誠寮 眠歌で、我々山岳会の愛唱歌でもある『雲にうそぶく』の五番

あゝ信州よ山の国 誇りは高しアルペンの  
峯に輝く雪を以て 希望は高いや更に  
さらば歌わん諸共に 若き血潮のゆくまゝに  
あした夕べの友は山 山は我等の姿なる

正に「信州よ山の国」 そして 「山は我等の姿なる」 である。

最後になりましたが、今回の会報にご協力頂いた会員、他の山岳会の皆様に厚く御礼申し上げます。また、会報作成に長年にわたり甚大なご協力をいただいた伸和印刷の藤井寿恵さん、そしてスタッフの皆さんに厚く御礼申し上げます。

編集委員長 藤松 太一



2019年6月21日 山岳会館竣工贈呈式にて

---

## 会 報

発行日：2019年9月

発行者：信州大学学士山岳会会報編集委員会

委員長 藤 松 太 一

連絡先：事務局 牛 山 寿 宏

〒391-0011 長野県茅野市玉川8379

電話 0266-79-3894

印 刷：有限会社 伸和印刷

---



信州大学学士山岳会  
信州大学山岳会



信州大学学士山岳会  
信州大学山岳会